

秋田県文化財調査報告書第99集

東北縦貫自動車道発掘調査報告書VI

—猿ヶ平II遺跡・室田遺跡・一本杉遺跡・案内III遺跡—

秋田県文化財調査報告書
第99集

1983・3

秋田県教育委員会

東北縦貫自動車道発掘調査報告書VI

——猿ヶ平II遺跡・室田遺跡・一本杉遺跡・案内III遺跡——

1983・3

秋田県教育委員会

序

東北縦貫自動車道が鹿角市を通過することとなり、道路予定地上にある埋蔵文化財の発掘調査が昭和54年度から3か年行われました。これまで34か所の遺跡、発掘総面積154,435m²におよぶ調査を行いましたが、本報告書は昭和56年度に実施した猪ヶ平II・室田・一本杉・案内IIIの4遺跡の調査結果をまとめたものです。これまでの調査の成果は、鹿角地方の歴史解明の貴重な手がかりになるものと思われます。

最後にこの調査に御協力いただきました顧問、専門指導員、日本道路公団、鹿角市、同教育委員会はじめ関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和58年3月

秋田県教育委員会

教育長 島山芳郎

例　　言

1. 本報告書は、東北縦貫自動車道路線内に位置する昭和56年度発掘調査を行った10遺跡のうち、猿ヶ平II遺跡(遺跡番号No21)、室田遺跡(遺跡番号No29)、一本杉遺跡(遺跡番号No33)、案内III遺跡(遺跡番号No34)の発掘調査報告書である。
2. 遺跡については機会をみて発表してきたが、本報告書を正式のものとする。
3. 発掘調査遺跡の記載は遺跡番号順による。
4. 発掘調査に関して、下記の諸氏から御指導、御教示を賜わった。記して感謝の意を表する。
(敬称略、順不同)

青森県埋蔵文化財調査センター主査 遠藤 正夫
青森県埋蔵文化財調査センター主事 成田 淳彦
秋田県鹿角市教育委員会主事 秋元 信夫

5. 本報告書の執筆と編集は下記の調査員と補佐員が協議して作成した。

Iの1	小玉 準
Iの2、3	桜田 隆
IIの2	小林 克
猿ヶ平II遺跡	岩見誠夫、藤井安正、松岡忠仁、児玉悦郎、奈良義博、高橋 學
室田、案内III遺跡	小林 克、関 直、阿部義行、花田孝夫
一本杉遺跡	桜田 隆、児玉昭彦、池田洋一、神田公男、安保 廣
6. 本報告書のIIの1「地形と地質」は秋田県立能代北高等学校教諭藤本幸雄氏の執筆である。
7. 石器の石質鑑定は秋田県立博物館学芸主事嵯峨二郎氏にお願いした。
8. 炭化米及び炭化種子の分析は前岡山大学農学部教授笠原安夫氏に依頼した。
9. 一本杉遺跡から出土した墨書き土器の赤外線写真撮影及び解説は国立歴史民俗博物館助教授平川南氏にお願いした。
10. 報告書に使用した地図は、建設省国土地理院発行の5万分の1、2万5千分の1及び日本道路公団作成の千分の1の地形図である。
11. 遺跡の土層及び遺物の色調の記載は「新版 標準土色帖」(日本色彩研究所)を使用した。
12. 遺物の実測には、画像工学研究所のスケッチグラフ車上型を活用した。
13. 遺跡の写真撮影は主に次の者があつた。

猿ヶ平II遺跡 岩見誠夫、藤井安正
室田、案内III遺跡 小林 克、関 直

一本杉遺跡 桜田 隆

14. 遺物の写真撮影は主に次の者があたった。

桜田 隆、小林 克、藤井安正、鈴木 功、高橋 学、安保 哲。

15. 遺物の実測、採拓、トレース、整理等は上記調査員、補佐員の他に次の者があたった。

猿ヶ平II遺跡 津島満子、安保幸子、池田邦子、熊谷恵子、松本良子、吉川フサ子

室田、案内田遺跡 浅石悦子、田中春美、加藤正子、才田 環、小松瞳子

一本杉遺跡 阿部香子、大西英子、藤倉寿枝、長沢廣子、竹村純子、藤井富久子

16. 本報告書に記載した遺物の実測図、拓影図の縮尺は原則として $\frac{1}{30}$ 、 $\frac{1}{60}$ とした。その他のものは任意の縮尺である。

目

次

序 例 言

I	はじめ	1
1.	発掘調査に至るまで	1
2.	調査の組織と構成	2
3.	調査の方法	5
II	遺跡の立地と環境	5
1.	地形と地質	5
2.	環境と周辺の遺跡	11

猿ヶ平 II 遺跡

1.	遺跡の概観	23
2.	調査の方法	23
3.	調査経過	25
4.	遺跡の層位	32
5.	遺構と遺物	32
6.	まとめ	82

室田 遺跡

1.	遺跡の概観	115
2.	調査内容	115
3.	まとめ	116

一 本 杉 遺 跡

1. 遺跡の概観	121
2. 調査の方法	122
3. 調査経過	125
4. 遺跡の層位	126
5. 遺構と遺物	127
6. まとめ	195

案 内 III 遺 跡

1. 遺跡の概観	233
2. 調査の方法	233
3. 調査経過	235
4. 遺跡の層位	237
5. 遺構と遺物	237
6. まとめ	370

挿 図 目 次

第1図 段丘地形図.....	6
第2図 露頭柱状図.....	8
第3図 周辺遺跡分布図.....	12
第4図 秋田県鹿角市における東北縦貫自動車道路線上の遺跡分布図.....	17

猿ヶ平II遺跡

第1図 地形図およびグリッド配置図.....	24
第2図 B区Eライン土層断面図および浮石堆 積層.....	26
第3図 C区Bトレント土層断面図.....	27
第4図 遺構配置図.....	29
第5図 S I 001 竪穴住居跡実測図.....	32
第6図 S I 002 竪穴住居跡およびS K(F) 020 プラスコ状ビット実測図.....	34
第7図 S I 003 竪穴住居跡およびS K(F) 002 プラスコ状ビット実測図.....	37
第8図 S I 004 竪穴住居跡実測図.....	40
第9図 S I 005 竪穴住居跡およびS K(F) 005· 006·010 プラスコ状ビット実測図.....	41
第10図 S I 006 竪穴住居跡実測図.....	44
第11図 S I 007 竪穴住居跡およびS K(F) 012 プラスコ状ビット実測図.....	46
第12図 S I 008 竪穴住居跡およびS K(F) 013 プラスコ状ビット実測図.....	49
第13図 S K 003·004·007·008 土壌実測図.....	55
第14図 S K 009·011·012·013 土壌実測図.....	56
第15図 S K 014·015·016 土壌実測図.....	57
第16図 S K(F) 001·003·004 プラスコ状ビット 実測図.....	58

第17図 S K(F) 007·008·009·011 プラスコ状 ビット実測図.....	59
第18図 S K(F) 014·015·016·017·018 プラ スコ状ビットおよびS K 017 土壌実測図.....	60
第19図 S K(F) 019·021·022·023 プラスコ状 ビット実測図.....	61
第20図 S K(T) 001·002 Tビット・S X 001 性 格不釣れ構造実測図.....	62
第21図 遺構内出土土器(1).....	63
第22図 S I 001·003·004 住居跡出土土器(2).....	64
第23図 S K 009 土壌・S K(F) 014·021 プラスコ 状ビット出土土器実測図(3).....	65
第24図 遺構外出土土器(1).....	66
第25図 # (2).....	67
第26図 # (3).....	68
第27図 # (4).....	69
第28図 # ·土製品(5).....	70
第29図 出土石器(1).....	71
第30図 # (2).....	72
第31図 # (3).....	73
第32図 プラスコ状ビットの構造変遷図.....	76
第33図 プラスコ状ビットの機能と体積計算.....	77
第34図 遺構外出土土器分布図.....	78

室田遺跡

第1図 室田遺跡周辺地形図 113 | 第2図 室田遺跡調査区全図 114

一本杉遺跡

第1図 遺跡位置図	123
第2図 土層堆积図	126
第3図 S I 001・S I 002竪穴住居跡実測図	129
第4図 S I 001・S I 002竪穴住居跡出土土器拓影図	130
第5図 S I 003・S I 010竪穴住居跡実測図	131
第6図 S I 010竪穴住居跡出土土器拓影図	132
第7図 S I 004竪穴住居跡実測図	133
第8図 S I 004竪穴住居跡かまど実測図	134
第9図 S I 004竪穴住居跡出土土器実測図	136
第10図 S I 004竪穴住居跡出土土器拓影実測図(2)	137
第11図 S I 005竪穴住居跡実測図	137
第12図 S I 005竪穴住居跡かまど(1)実測図	139
第13図 S I 005竪穴住居跡かまど(2)実測図	139
第14図 S I 005竪穴住居跡出土土器実測図	140
第15図 S I 006竪穴住居跡実測図	142
第16図 S I 006竪穴住居跡かまど実測図	143
第17図 S I 006竪穴住居跡出土土器実測図(1)	144
第18図 S I 006竪穴住居跡出土土器実測図(2)	145
第19図 S I 006竪穴住居跡出土土器拓影実測図(3)	146
第20図 S I 007竪穴住居跡実測図	148
第21図 S I 009竪穴住居跡実測図	149
第22図 S I 011竪穴住居跡実測図	150
第23図 S I 011竪穴住居跡出土土器拓影実測図	151
第24図 S I 012竪穴住居跡実測図	153
第25図 S I 012竪穴住居跡出土土器拓影実測図	154
第26図 S I 013竪穴住居跡実測図	155
第27図 S I 013竪穴住居跡かまど実測図	156
第28図 S I 013竪穴住居跡出土土器実測図(1)	158
第29図 S I 013竪穴住居跡出土土器実測図(2)	159
第30図 S I 013竪穴住居跡出土土器実測図(3)	160
第31図 S I 014竪穴住居跡実測図	161
第32図 S I 014竪穴住居跡かまど実測図	162
第33図 S I 014竪穴住居跡出土土器実測図	163
第34図 S I 015竪穴住居跡実測図	164
第35図 S I 016・S I 017・S I 018・S I 020 S I 021竪穴住居跡実測図	165
第36図 S I 016竪穴住居跡実測図	166
第37図 S I 016竪穴住居跡出土土器拓影図	166
第38図 S I 017・S I 018竪穴住居跡実測図(2)	167
第39図 S I 017竪穴住居跡出土土器拓影図	168
第40図 S I 019竪穴住居跡実測図	170
第41図 S I 019竪穴住居跡出土土器拓影図	170
第42図 S I 020竪穴住居跡実測図	171
第43図 S I 021竪穴住居跡実測図	172
第44図 S I 030竪穴住居跡実測図	174
第45図 S I 030竪穴住居跡かまど実測図	174
第46図 S I 030竪穴住居跡出土土器拓影図	175
第47図 S I 031竪穴住居跡実測図	176
第48図 S I 031竪穴住居跡出土土器拓影実測図	178
第49図 S I 032竪穴住居跡実測図	179
第50図 S B 001掘立柱建物跡実測図	180
第51図 S B 002環立柱建物跡実測図	181
第52図 S B 003環立柱建物跡実測図	182
第53図 S K(T)01溝状土壙実測図	183

第54図	S D 001～S D 003溝状遺構実測図	184	第60図	出土鉄製品実測図	190
第55図	S D 001溝状遺構出土土器拓影図	184	第61図	出土白磁実測図	190
第56図	S D 004溝状遺構実測図	185	第62図	出土砥石実測図	191
第57図	グリッド出土土師器拓影・実測図(1)	187	第63図	出土縄文土器片拓影図	193
第58図	グリッド出土土師器拓影・実測図(2)	188	第64図	出土石器・剝片実測図(各遺構・グリッド出土)	194
第59図	出土氣泡器・陶器器拓影実測図	189			

案 内 Ⅲ 遺 跡

第1図	案内Ⅲ遺跡グリッド配置図	234		022、S K(F)、007土壤	265
第2図	案内Ⅲ遺跡基本層位	236	第24図	S K(F)027、S K(F)020、S K(F)	
第3図	S I 008住居跡	239		029、S K(F)026、S K(F)030土壤	267
第4図	S I 008住居跡出土遺物	240	第25図	S K(F)031、S K(F)023、S K(F)	
第5図	S I 008住居跡出土遺物(石器)	240		024 土壤出土遺物	268
第6図	S I 004住居跡・同炉跡、S K(F)025 土壤	242	第26図	S K(F)021、S K(F)032土壤出土遺 物	269
第7図	S I 004住居跡埋設土器	243	第27図	S K(F) 022七塙出土遺物	270
第8図	S I 004住居跡出土遺物	244	第28図	S K(F) 007土壤出土遺物(1)	271
第9図	S K(F) 025土壤出土遺物(1)	245	第29図	S K(F) 007土壤出土遺物(2)	272
第10図	S K(F) 025土壤出土遺物(2)	246	第30図	S K(F)021、S K(F)032、S K(F) 022 土壤出土遺物(石器)	273
第11図	S K(F) 025土壤出土遺物(3)	247	第31図	炉跡	274
第12図	S I 005住居跡	249	第32図	遺構外出土遺物(1)	278
第13図	S I 005住居跡出土遺物(1)	250	第33図	遺構外出土遺物(2)	279
第14図	S I 005住居跡出土遺物(2)	251	第34図	遺構外出土遺物(3)	280
第15図	S I 005住居跡出土遺物(石器)	252	第35図	遺構外出土遺物(4)	281
第16図	S I 005住居跡西側周辺ピット出土遺 物	253	第36図	遺構外出土遺物(5)	282
第17図	S I 003住居跡	255	第37図	遺構外出土遺物(6)	283
第18図	S I 034住居跡	257	第38図	遺構外出土遺物(7)	284
第19図	S I 003住居跡、S I 034住居跡出土 遺物	258	第39図	遺構外出土遺物(8)	285
第20図	S I 034住居跡出土遺物(石器)	259	第40図	遺構外出土遺物(9)	286
第21図	S I 036住居跡	261	第41図	遺構外出土遺物(10)	287
第22図	S K(F)031、S K(F)023、S K(F) 024、S K(F)034土壤	263	第42図	遺構外出土遺物(石器)(1)	290
第23図	S K(F)021、S K(F)032、S K(F)		第43図	遺構外出土遺物(石器)(2)	291
			第44図	遺構外出土遺物(石器)(3)	292
			第45図	遺構外出土遺物(石器)(4)	293

第46図	S I 001住居跡	296
第47図	S I 001住居跡カマド	297
第48図	S I 001住居跡出土遺物	298
第49図	S I 001住居跡出土遺物(1)	298
第50図	S I 001住居跡出土遺物(2)	299
第51図	S I 001住居跡出土遺物(3)	300
第52図	S I 001住居跡出土遺物(石器)	301
第53図	S I 002住居跡	303
第54図	S I 002住居跡カマド	304
第55図	S I 002住居跡出土遺物(1)	305
第56図	S I 002住居跡出土遺物(2)	306
第57図	S I 006住居跡	308
第58図	S I 006住居跡カマド	309
第59図	S I 006住居跡出土遺物(1)	310
第60図	S I 006住居跡出土遺物(2)	312
第61図	S I 009住居跡	313
第62図	S I 009住居跡カマド	314
第63図	S I 009住居跡出土遺物(1)	315
第64図	S I 009住居跡出土遺物(2)	316
第65図	S I 010住居跡、S I 011住居跡、S I 012住居跡	319
第66図	S I 010住居跡炭化物・炭化材出土状 態	323
第67図	S I 010住居跡、S I 012住居跡カマド	325
第68図	S I 011住居跡カマド	326
第69図	S I 010住居跡出土遺物	327
第70図	S I 010住居跡出土遺物(1)	327
第71図	S I 010住居跡出土遺物(2)	328
第72図	S I 010住居跡出土遺物(3)	329
第73図	S I 010住居跡出土遺物(4)	330
第74図	S I 010住居跡出土遺物(石器、鉄器)	331
第75図	S I 010住居跡出土遺物(炭化物)	332
第76図	S I 010住居跡出土遺物	333
第77図	S I 011住居跡出土遺物(1)	333
第78図	S I 011住居跡出土遺物(2)	334
第79図	S I 011住居跡出土遺物(3)	335
第80図	S K(F) 033土壤出土遺物	335
第81図	S I 014住居跡	337
第82図	S I 014住居跡カマド	341
第83図	S I 014住居跡出土遺物(1)	342
第84図	S I 014住居跡出土遺物(2)	343
第85図	S I 014住居跡出土遺物(3)	344
第86図	S I 014住居跡出土遺物(4)	345
第87図	S I 014住居跡出土遺物(5)	346
第88図	S I 014住居跡出土遺物(石器)	347
第89図	S I 014住居跡出土遺物(石器、鉄器)	348
第90図	S I 015住居跡	350
第91図	S I 015住居跡出土遺物	351
第92図	S I 016住居跡	353
第93図	S I 016住居跡カマド、完掘状態	354
第94図	S I 016住居跡出土遺物	356
第95図	S I 017住居跡	357
第96図	S I 017住居跡カマド	358
第97図	S I 017住居跡出土遺物	359
第98図	S I 018住居跡	361
第99図	S I 018住居跡カマド	362
第100図	S I 018住居跡出土遺物	363
第101図	S I 018住居跡出土遺物(石器)	364
第102図	S I 019住居跡	366
第103図	S I 019住居跡カマド	367
第104図	S I 019住居跡出土遺物	368
第105図	遺構外出土遺物	369

第1図	浮石の含有量分布	373
第2図	四土各層の1cm中浮石含有量(cm/g)	374

第3図	堆積順位 浮石含有量による堆積順位	374
第4図	浮石の粒径と含有量	376

表 目 次

猿ヶ平 II 遺跡

第1表	S I 001堅穴住居跡観察表	33	第11表	S K 土堆觀察表(3)	53
第2表	S I 002堅穴住居跡観察表	35	第12表	" (4)"	54
第3表	S I 003堅穴住居跡観察表	36	第13表	土器觀察表(1)	63
第4表	S I 004堅穴住居跡観察表	39	第14表	" (2)"	65
第5表	S I 005堅穴住居跡観察表	43	第15表	" (3)"	66
第6表	S I 006堅穴住居跡観察表	45	第16表	" (4)"	67
第7表	S I 007堅穴住居跡観察表	47	第17表	" (5)"	68
第8表	S I 008堅穴住居跡観察表	48	第18表	" (6)"	69
第9表	S K 土堆觀察表(1)	51	第19表	" (7)"	70
第10表	" (2)"	52	第20表	遺構内・出土石器觀察表	74

一本杉 遺跡

第1表	S I 001堅穴住居跡計測説明表	128	第17表	S I 012堅穴住居跡計測説明表	152
第2表	S I 002堅穴住居跡計測説明表	128	第18表	S I 012堅穴住居跡出土土器説明表	153
第3表	S I 001, S I 002堅穴住居跡出土土器 説明表	130	第19表	S I 013堅穴住居跡計測説明表	156
第4表	S I 003堅穴住居跡計測説明表	130	第20表	S I 013堅穴住居跡出土土器説明表	157
第5表	S I 010堅穴住居跡計測説明表	132	第21表	S I 014堅穴住居跡計測説明表	161
第6表	S I 010堅穴住居跡出土土器説明表	132	第22表	S I 014堅穴住居跡出土土器説明表	162
第7表	S I 004堅穴住居跡計測説明表	134	第23表	S I 015堅穴住居跡計測説明表	162
第8表	S I 004堅穴住居跡出土土器説明表	135	第24表	S I 016堅穴住居跡計測説明表	166
第9表	S I 005堅穴住居跡計測説明表	138	第25表	S I 016堅穴住居跡出土土器説明表	167
第10表	S I 005堅穴住居跡出土土器説明表	141	第26表	S I 017堅穴住居跡計測説明表	168
第11表	S I 006堅穴住居跡計測説明表	141	第27表	S I 017堅穴住居跡出土土器説明表	169
第12表	S I 006堅穴住居跡出土土器説明表	146	第28表	S I 018堅穴住居跡計測説明表	169
第13表	S I 007堅穴住居跡計測説明表	147	第29表	S I 019堅穴住居跡計測説明表	170
第14表	S I 009堅穴住居跡計測説明表	148	第30表	S I 019堅穴住居跡出土土器説明表	171
第15表	S I 011堅穴住居跡計測説明表	150	第31表	S I 020堅穴住居跡計測説明表	171
第16表	S I 011堅穴住居跡出土土器説明表	152	第32表	S I 021堅穴住居跡計測説明表	172
			第33表	S I 030堅穴住居跡計測説明表	172

第34表	S I 030堅穴住居跡出土土器說明表	173	第39表	夕里・下唐出土土器器說明表	165
第35表	S I 031堅穴住居跡計測說明表	177	第40表	出土須器、陶罐器說明表	183
第36表	S I 031堅穴住居跡出土土器說明表	177	第41表	出土砾石計測說明表	192
第37表	S I 032堅穴住居跡計測說明表	178	第42表	出土甕文土器片拓影說明表	192
第38表	桶立柱建物跡計測說明表	182	第43表	出土石器、利刃計測說明表	192

案 内 三 遺 跡

第1表	S I 008住居跡觀察表	238		察長	266
第2表	S I 008住居跡出土遺物	240	第25表	S K(F)031, S K(F)023, S K(F) 024上墻出土遺物	268
第3表	S I 008住居跡出土遺物(石器)	240	第26表	S K(F)021, S K(F)032土壤觀察表	269
第4表	S I 004住居跡觀察表	241	第27表	S K(F)022土壤出土遺物	270
第5表	S K(F)025土壤觀察表	241	第28表	S K(F)007土壤出土遺物1	271
第6表	S I 004住居跡出土遺物	244	第29表	S K(F)007土壤出土遺物2	272
第7表	S I 004住居跡出土遺物(石器)	244	第30表	S K(F)021, S K(F)032, S K(F) 022上墻出土遺物(石器)	273
第8表	S K(F)025土壤出土遺物1	245	第31表	造構外出土遺物1	278
第9表	S K(F)025土壤出土遺物2	246	第32表	造構外出土遺物2	279
第10表	S K(F)025土壤出土遺物3	247	第33表	造構外出土遺物3	280
第11表	S K(F)025土壤出土遺物(石器)	247	第34表	造構外出土遺物4	281
第12表	S I 005住居跡觀察表	248	第35表	造構外出土遺物5	282
第13表	S I 005住居跡出土遺物1	250	第36表	造構外出土遺物6	283
第14表	S I 005住居跡出土遺物2	251	第37表	造構外出土遺物7	284
第15表	S I 005住居跡出土遺物(石器)	252	第38表	造構外出土遺物8	285
第16表	S I 005住居跡西側牆邊ヒット出土遺 物	253	第39表	造構外出土遺物9	286
第17表	S I 003住居跡觀察表	254	第40表	造構外出土遺物10	287
第18表	S I 034住居跡觀察表	256	第41表	造構外出土遺物(石器)1	290
第19表	S I 003, S I 034住居跡出土遺物	258	第42表	造構外出土遺物(石器)2	291
第20表	S I 034住居跡出土遺物(石器)	259	第43表	造構外出土遺物(石器)3	292
第21表	S I 036住居跡觀察表	260	第44表	造構外出土遺物(石器)4	293
第22表	S K(F)031, S K(F)023, S K(F) 024, S K(F)035土壤觀察表	262	第45表	S I 001住居跡	295
第23表	S K(F)021, S K(F)032, S K(F) 022, S K(F)007土壤觀察表	264	第46表	S I 001住居跡出土遺物1	298
第24表	S K(F)027, S K(F)020, S K(F) 029, S K(F)026, S K(F)030土壤觀		第47表	S I 001住居跡出土遺物2	299
			第48表	S I 001住居跡出土遺物3	300
			第49表	S I 001住居跡出土遺物(石器)	301

第50表	S I 002住居跡観察表	302
第51表	S I 002住居跡出土遺物(1)	305
第52表	S I 002住居跡出土遺物(2)	305
第53表	S I 006住居跡観察表	307
第54表	S I 006住居跡出土遺物(1)	310
第55表	S I 006住居跡出土遺物(2)	312
第56表	S I 009住居跡観察表	311
第57表	S I 009住居跡出土遺物(1)	315
第58表	S I 009住居跡出土遺物(2)	316
第59表	S I 010住居跡観察表	317
第60表	S I 011住居跡観察表	318
第61表	S I 012住居跡観察表	324
第62表	S K(F) 033土壤觀察表	324
第63表	S I 010住居跡出土遺物(1)	327
第64表	S I 010住居跡出土遺物(2)	328
第65表	S I 010住居跡出土遺物(3)	329
第66表	S I 010住居跡出土遺物(4)	330
第67表	S I 010住居跡出土遺物(石器)(1)	330
第68表	S I 010住居跡出土遺物(石器)(2)	331
第69表	S I 010住居跡出土遺物(鉄器)	331
第70表	S I 011住居跡出土遺物(1)	333
第71表	S I 011住居跡出土遺物(2)	334
第72表	S I 011住居跡出土遺物(3)	335
第73表	S I 011住居跡出土遺物(鉄器)	335
第74表	S K(F) 033土壤出土遺物	335
第75表	S K(F) 033土壤出土遺物(石器)	335
第76表	S I 014住居跡観察表	336
第77表	S I 014住居跡出土遺物(1)	342
第78表	S I 014住居跡出土遺物(2)	343
第79表	S I 014住居跡出土遺物(3)	344
第80表	S I 014住居跡出土遺物(4)	345
第81表	S I 014住居跡出土遺物(5)	346
第82表	S I 014住居跡出土遺物(石器)(1)	347
第83表	S I 014住居跡出土遺物(石器)(2)	348
第84表	S I 014住居跡出土遺物(鉄器)	348
第85表	S I 015住居跡観察表	349
第86表	S I 015住居跡出土遺物	351
第87表	S I 016住居跡観察表	352
第88表	S I 016住居跡出土遺物	356
第89表	S I 017住居跡観察表	355
第90表	S I 017住居跡出土遺物	359
第91表	S I 018住居跡観察表	360
第92表	S I 018住居跡出土遺物	363
第93表	S I 018住居跡出土遺物(石器)	364
第94表	S I 019住居跡観察表	365
第95表	S I 019住居跡出土遺物(1)	368
第96表	S I 019住居跡出土遺物(2)	368
第97表	遺構外出土遺物	369

図版目次

猿ヶ平II遺跡

図版1 遺跡遠景(北▶南)	S K 009土壙(西▶東)	98
発掘調査区(背後の段丘上から)	S K 009上塙出土土器(南▶北)	
図版2 発掘調査前のようす(南▶北)	S K 014土壙(南▶北)	99
# (北▶南)		
図版3 C区発掘調査前のようす(南▶北)	図版14 S K(F) 004プラスコ状ビット(西▶東)	
B区発掘調査後のようす(北▶南)	S I 005堅穴住居跡を切って構築されているS K(F) 006プラスコ状ビット(東▶西)	100
図版4 B区北端部発掘調査後のようす(北東▶南西)	図版15 S I 005堅穴住居跡内に存在するS K(F) 010プラスコ状ビット(西▶東)	
C区発掘調査後のようす(南西▶北東)	底部に5基の土壙をもつS K(F) 014プラスコ状ビット(東▶西)	101
図版5 発掘調査風景、発掘調査風景	図版16 S K(F) 014プラスコ状ビット内に存在するS K(F) 015プラスコ状ビット	
図版6 泥に埋積した浮石(東▶西)	S K(F) 009プラスコ状ビット内に覆土堆積状況(西▶東)	102
S I 001堅穴住居跡(北東▶南西)	図版17 S K(T) 001溝状土壙(北西▶南西)	
図版7 S I 002堅穴住居跡とS K(F) 020フ	S K(T) 002溝状土壙(北東▶南西)	103
ラスコ状ビット(東▶西)	図版18 S K(T) 001溝状土壙(北西▶南西)	
S I 003堅穴住居跡とS K(F) 002フ	S K(T) 002溝状土壙(北東▶南西)	104
ラスコ状ビット(南▶北)	図版19 36-Fグリッド土器出土状況	
図版8 S I 004堅穴住居跡(北西▶南東)	S K 014土壙円盤状石製品出土状況	105
S I 005堅穴住居跡(北西▶南東)	図版20 道橋内出土土器	106
図版9 S I 006堅穴住居跡(北▶南)	図版21 31-Hグリッド出土土器(1)	107
S I 007堅穴住居跡とS K(F) 012	図版22 道橋外出土土器(2)	108
図版10 S I 005・008堅穴住居跡とプラスコ状	図版23 # (3)	109
ビット群(北西▶南東)	図版24 道橋内・外出土石器	110
S I 008・9堅穴住居跡とS K(F) 013		
プラスコ状ビット		
図版11 S I 003堅穴住居跡(東▶西)		
S I 005堅穴住居跡(北西▶南西)		
図版12 S I 008-A堅穴住居跡(南▶北)		

室田遺跡

図版1 道路遠景・遺跡全景(西▶東)	117		図版2 遺跡全景(北▶南)・擾乱坑(ゴミ捨て穴)	118
--------------------------	-----	--	--------------------------------	-----

一 本 杉 遺 跡

図版 1	遺跡全景航空写真	199
図版 2	遺跡全景	200
図版 3	S I 001、S I 002、S I 009	201
図版 4	S I 003、S I 010	202
図版 5	S I 004	203
図版 6	S I 005	204
図版 7	S I 006	205
図版 8	S I 007、S I 003、S I 009	206
図版 9	S I 011、S I 012	207
図版 10	S I 013	208
図版 11	S I 014、S I 015	209
図版 12	S I 017、S I 018、S I 019、S I 030、 S I 031	210
図版 13	S B 002、S B 001	211
図版 14	S D 002、S D 004	212
図版 15	S I 004出土遺物	213
図版 16	S I 004、S I 005出土遺物	214
図版 17	S I 006出土遺物(1)	215
図版 18	S I 006出土遺物(2)	216
図版 19	S I 011出土遺物	217
図版 20	S I 010、S I 012出土遺物	218
図版 21	S I 013出土遺物(1)	219
図版 22	S I 013出土遺物(2)	220
図版 23	S I 013出土遺物(3)	221
図版 24	S I 014出土遺物	222
図版 25	S I 016、S I 017、S I 019出土遺物	223
図版 26	S I 030、S I 031出土遺物	224
図版 27	グリッド出土土器	225
図版 28	遺構・グリッド出土埴輪器・陶磁器	226
図版 29	出土鉄製品・砾石	227
図版 30	グリッド出土繩文土器片	228
図版 31	遺構・グリッド出土石器・剣片	229
図版 32	壇古土器赤外線写真	230

案 内 III 遺 跡

図版 1	案内III遺跡航空写真	381
図版 2	遺跡遺跡、遺跡層位	382
図版 3	S I 008住居跡、S I 004住居跡 S K(F) 025土壤	383
図版 4	S I 004住居跡、S I 004住居跡埋設 土器	384
図版 5	S I 005住居跡、S I 005住居跡磨製石 等出土状態	385
図版 6	S I 003住居跡、S I 034住居跡	386
図版 7	S I 036住居跡、S K(F) 024土壤	387
図版 8	S K(F) 032土壤、S K(F) 022土壤	388
図版 9	S I 001住居跡、S I 001住居跡カマド	389
図版 10	S I 002住居跡、S I 002住居跡カマド	390
図版 11	S I 006住居跡、S I 006住居跡カマド	
支脚状態		391
図版 12	S I 006住居跡カマド、S I 006住居跡 覆土	392
図版 13	S I 009住居跡、S I 009住居跡蒙形土 器出土状態	393
図版 14	S I 009住居跡カマド、S I 009住居跡 覆土	394
図版 15	S I 010、S I 011、S I 012住居跡、 S I 010住居跡カマド	395
図版 16	S I 010住居跡(壇器等出土状態)、S I 010住居跡炭化物(植物、炭化豆類) 出土状態	396
図版 17	S I 010住居跡炭化物(壇状製品)出土 状態、S I 011住居跡カマド	397

図版18	S I 011住居跡(1)、S I 012住居跡	398	図版39	遺構外出土遺物(8)、(9)	419
図版19	S I 014住居跡、S I 014住居跡カマド	399	図版40	遺構外出土遺物(10)	420
図版20	S I 015住居跡、S I 016住居跡	400	図版41	遺構外出土遺物(石器)(1)、(2)	421
図版21	S I 017住居跡、S I 017住居跡カマド	401	図版42	遺構外出土遺物(石器)(3)、(4)	422
図版22	S I 018住居跡、S I 018住居跡カマド	402	図版43	S I 001住居跡出土遺物(1)	423
図版23	S I 018住居跡 sondage(sondage)、S I 019住居跡	403	図版44	S I 001住居跡出土遺物(2)、(3)	424
図版24	S I 019住居跡カマド、遺構外土器化 土状態	404	図版45	S I 001住居跡出土遺物(石器)	425
図版25	S I 008住居跡出土遺物	405	図版46	S I 002住居跡出土遺物(1)、(2)	426
図版26	S I 004住居跡出土遺物	406	図版47	S I 006住居跡出土遺物(1)、(2)	427
図版27	S K(F) 025土壤出土遺物(1)	407	図版48	S I 009住居跡出土遺物(1)、(2) S I 010住居跡出土遺物(1)	428
図版28	S K(F) 025土壤出土遺物(2)	408	図版49	S I 010住居跡出土遺物(1)、(2)	429
図版29	S K(F) 025土壤出土遺物(3)	409	図版50	S I 010住居跡出土遺物(4)	430
図版30	S I 005住居跡出土遺物(1)、(2)	410	図版51	S I 010住居跡出土遺物(鉄器)	431
図版31	S I 005住居跡出土遺物(2)、(3)	411	図版52	S I 010住居跡出土遺物(炭化物)	432
図版32	S I 005住居跡西側周辺ピット出土遺 物、S I 003住居跡、S I 034住居跡出 土遺物(1)	412	図版53	S I 011住居跡出土遺物(1)	433
図版33	S I 034住居跡出土遺物(2)	413	図版54	S I 011住居跡出土遺物(2)、(3) S K(F) 033土壤出土遺物	434
図版34	S K(F) 031～S K(F) 022土壤出土遺 物(1)、(2)、(3)	414	図版55	S I 014住居跡出土遺物(1)、(2)	435
図版35	S K(F) 007土壤出土遺物(1)、(2) S K(F) 021、S K(F) 032、S K(F) 022土壤出土遺物(石器)	415	図版56	S I 014住居跡出土遺物(3)、(4)、(5)	436
図版36	遺構外出土遺物(1)、遺構外土壤出土遺物(2)	416	図版57	S I 014住居跡出土遺物(石器、鐵器) (1)、(2)	437
図版37	遺構外出土遺物(3)、(4)	417	図版58	S I 015住居跡出土遺物	438
図版38	遺構外出土遺物(5)、(6)、(7)	418	図版59	S I 016住居跡出土遺物、S I 016住 居跡出土遺物	439
			図版60	S I 018住居跡出土遺物(1)、(2)	440
			図版61	S I 019住居跡出土遺物(1)	441
			図版62	S I 019住居跡出土遺物(2)	442

I はじめに

1. 発掘調査に至るまで

秋田県の北東部、鹿角市と鹿角郡小坂町を通過する東北縦貫自動車道の建設計画の魁は、昭和40年11月公表の鹿角市・青森市間、同42年11月公表の盛岡市・鹿角市間の基本計画である。次いで昭和43年4月の鹿角市・青森市間約81kmの第2次施行命令と同46年6月の岩手県二戸郡安代町・鹿角市間約37kmの第5次施行命令によって、その通過予定区域が知られ、これを受け同47年11月27日に、鹿角市十和田錦木・小坂町間の路線発表があって、ようやくその具体的な姿を県民に現わしたのである。

このため、秋田県教育委員会では、文化庁と日本道路公団が交わした覚書に基づき、昭和44年8月、鹿角市十和田地区から鹿角郡小坂町の青森県境まで、幅4km、延長25kmにわたって遺跡の分布調査を行い、67遺跡を確認し、その成果を公表した。昭和48年8月には、鹿角市八幡平、尾去沢、花輪地区で、幅4km、延長20kmの遺跡分布調査と試掘を実施して、46カ所の遺跡を確認した。

昭和51年2月12日になると、昭和48年8月実施の鹿角市内遺跡分布調査結果をふまえて、日本道路公団から鹿角市八幡平から同市十和田錦木に至る延長約21.1kmの路線の発表があり、測量が実施されるに及んだ。

秋田県教育委員会では、日本道路公団仙台建設局鹿角工事事務所の依頼により、昭和52年10月にこの路線上の遺跡分布調査を行い31遺跡の存在を確認した。昭和55年に新たに2遺跡が発見追加され、現在総計33遺跡となっている。

その後、遺跡の処遇や調査方針について日本道路公団仙台建設局と秋田県教育委員会の間に協議が持たれ、最終的に遺跡は記録保存が決定した。昭和54年2月に遺跡の発掘調査依頼があり、秋田県教育委員会では昭和54年度八幡平地区7遺跡の発掘調査を行った。昭和55年度は追加委託契約をも含めて八幡平、花輪地区19遺跡の調査を行い、昭和56年度に8遺跡の調査を行い、3か年に及ぶ鹿角市内の路線内遺跡調査を全て完了している。

- 註1 秋田県教育委員会 「東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書」 秋田県文化財調査報告書 第20集 1970年
註2 秋田県教育委員会 「東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書」 秋田県文化財調査報告書 第24集 1972年
註3 秋田県教育委員会 「東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書(八幡平~十和田錦木)」 秋田県文化財調査報告書 第56集 1978年

2. 調査の組織と構成

調査主体	秋田県教育委員会	
調査顧問	坪井 清足	奈良国立文化財研究所所長
	芹沢 長介	東北大学文学部教授
専門指導員	小林 達雄	国学院大学文学部助教授
	林 謙作	北海道大学文学部助教授
	須藤 隆	東北大学文学部助教授
	藤沼 邦彦	東北歴史資料館考古研究科長
	進藤 秋輝	宮城県多賀城跡調査研究所研究第一科長
調査担当者	岩見 誠夫	秋田県埋蔵文化財センター副所長 (猿ヶ平Ⅱ、柏木森遺跡担当)
	桜田 隆	秋田県埋蔵文化財センター文化財主事 (妻の神田、一本杉遺跡担当)
	小玉 準	秋田県埋蔵文化財センター文化財主事 (乳牛平、明堂長根遺跡担当)
	橋本 高史	秋田県埋蔵文化財センター文化財主事 (妻の神Ⅰ、中の崎遺跡担当)
	小林 克	秋田県埋蔵文化財センター文化財主事 (室田、案内Ⅲ、柏木森遺跡担当)
調査補佐班	藤井 安正、松岡 忠仁、児玉 悅郎、高橋 学、奈良 義博	(以上岩見班)
	神田 公男、児玉 昭彦、安保 廣、池田 洋一	(以上桜田班)
	畠山 圭、阿部 明人、米田 哲、高橋 修	(以上小玉班)
	安保 徹、福本 雅治、鈴木 功、鈴木 秋良	(以上橋本班)
	関 直、阿部 義行、花田 孝夫	(以上小林班)
事務補助員	佐藤 順子、金沢万理子	
調査協力機関	日本道路公団鹿角工事事務所、秋田県東北縦貫自動車道対策事務所、 鹿角市建設部建設課高速道路対策室、鹿角市教育委員会、	

3. 調査の方法

(1) 発掘区の設定

東北縦貫自動車道の調査では、調査対象区に $5\text{ m} \times 5\text{ m}$ のグリッドを設定して発掘を行う。グリッド設定基準線は、館跡遺跡は方位に合わせ、他は日本道路公団の設置した中心杭のうち任意の 2 本を結ぶ線を設定基準線とし、路線の進行方向に沿わせることを原則とする。

(2) 測量と実測

地形や遺構状況に応じて、遠方測量、平板測量、航空写真測量の方法をとる。遺構の実測の縮尺は $\frac{1}{20}$ 、遺構配置図は $\frac{1}{200}$ とし、プラン確認面の等高線(20cm間隔)を入れる。かまど、炉などの平面図、断面図、土層断面図は $\frac{1}{10}$ を原則とするが、必要に応じて任意の縮尺も活用する。

(3) 遺構発掘と遺物の取りあげ

遺構の発掘は 4 分割法を原則とし、平面、断面、層序、レベル、遺物の実測はマイラーべースに記入し、水糸高(海拔高度)を記入する。

遺物の取りあげは、1 点 1 袋、1 捩 1 袋とし、遺跡名、グリッド名、遺物の種類、遺物番号層位、出土年月日の記入された遺物カードを同封する。

遺構・遺物記号は、平城京発掘調査で実施しているものを参考に縦貫自動車道関係遺跡発掘担当者が協議して定めたものを使用する。

記号	遺構	記号	遺構	記号	遺構・遺物	記号	遺物
SA	壠列・柱列	SK	土壙	SX(F)	焼土遺構	RQ	石製品
SB	建物跡	SK(F)	フラスコ状ピット	SX(R)	捨場	RT	貝製品
SC	廊	SK(I)	竪穴状遺構	SX(S)	配石(壁石・踏石) ストンサークル	RU	人骨
SD	溝・堀・塗	SK(P)	ピット	SX(L)	土器埋設遺構	RV	紙・布製品
SE	井戸跡	SK(S)	轟	RC	炭化物	RW	木・竹製品
SF	築地・土壘	SK(T)	トラップピット	RM	金屬製品	RY	その他
SG	莞池	SL	河川	RN	自然遺物		
SH	広場	SM	道路・橋・階段	RO	骨角製品		
SI	住居跡	SX	その他	RP	土製品		

(4) 写真撮影

写真撮影は、平面実測図等の図面記録では表現しきれない状況等を的確に表現するため、ネガフィルム、リバーサルフィルムを使用して行う。

使用するカメラは、ハンディな35%判カメラと、 6×9 判カメラ又は 6×4.5 判カメラの2種類を使用する。特に必要ある場合は、インスタントカメラを使用する。

(5) 遺物整理と実測

- ① 出土遺物は遺物台帳に記入し、写真や実測図とのスムーズな活用をはかる。
- ② 土器の内面実測が必要と思われるものは、4分割方法をとり、左 $\frac{1}{2}$ に外面、右 $\frac{1}{2}$ に内面および断面を記載する。実測図には輪積巻上げ痕、文様、調整痕を主として記載する。
- ③ 大破片の実測は、土器の中心線を算出し 180 度回転して作図する。
- ④ 破片の拓本は、土器の外面を左に置き、中央に断面、右に内面図を表す方法を用いる。
- ⑤ 石器の実測には、スケッチグラフ、実体顕微鏡等も使用し、第三投影図法により作図する。

II 遺跡の立地と環境

1. 地形と地質

(1) 地形と地質の概要

本地域の地形は大きく見て東西の山地、盆地内の段丘地形、沖積低地の三つに区分される。これらについて秋田県(1973)、内藤(1966、1970)および日本道路公団の東北自動車道土性縦断図表(日本道路公団仙台建設局:1978)等を参考にしてまとめると次のようになる。山地:東側は花輪越以北で800~700mと北にゆくほど高度を下げるが、以南では1,000m以上の標高で満壯年期のけわしい地形を示し、特に皮投岳(1,122.4m)、五の宮巖(1,115.0m)など起伏量の大きい山塊が連なっている。

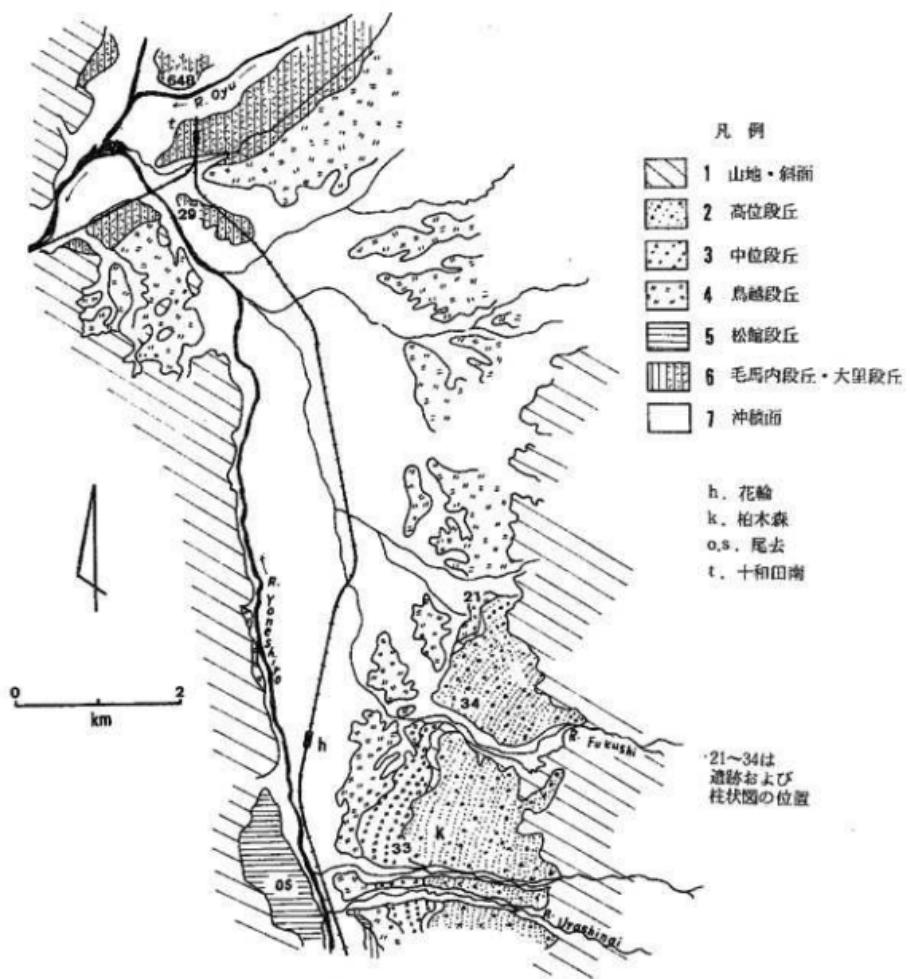
地質は主として新第三紀中新世の火山碎屑岩よりなるが、それらを貫ぬいて石英安山岩や安山岩も分布している。また、福士川上流には南部の谷内、湯瀬と同様に粘板岩を主とする古生層の露出も知られている。これらの東側山地の山列は南部では南北に連なっているが、花輪越以北では東北方向にのびている。これは新第三紀層の走向に大略一致するほか、貫入岩類や断層系の方向ともほぼ一致している。

一方、西側山地は南部で400~600m、北部で250~300mで山容も東側山地ほどのけわしさは見られない。地質は東側山地と同様に新第三紀中新世の火山碎屑岩を主とするが、大背層、大沈層などでは砂岩、泥岩などの碎屑岩が広く発達している。

段丘地形: 花輪盆地南部の段丘面は、花輪高位段丘、花輪中位段丘(内藤、1970)、鳥越段丘(秋田県、1973)、松館段丘、大黒段丘の5段に区別できる。このうち、鳥越段丘は秋田県(1973)では鳥越段丘、閑上段丘の二つに区別されたものであるが、後者は火碎流堆積物からなる前者の二次堆積物の上面であり、両者を区別する段丘崖の発達も局所的であって連続性に乏しいことから一括して使用する。また、松館、大黒の各段丘は内藤(1970)の花輪低位段丘群とされたものである。

一方、花輪盆地の中~北部の段丘面は、高位段丘、鳥越段丘、毛馬内段丘、中間段丘などが見られる。次にそれぞれについて簡単に記載する。

* 以下、高位段丘、中位段丘と略称する。



第1図 段丘地形図

高位段丘は、南部では東鶴山地の末端部からなだらかな斜面をもって扇状地状に広く分布する。かなり開析されているものの明らかに平坦面を残している。標高は1/2.5万地形図から、浦志内川左岸の扇頂部で350m、葛岡北東の末端部で240mであり、平均こう配は約7.2% (4.1°)となる。また、歌内川流域でも320mから250mまでの高度差をもつ。一方、福士川左岸では350m～250mであるが、右岸では花輪スキー場北東の300mから女森西方の200mまでと明らか

に低い。また、平均こう配も福士川以北では約4.4% (2.5°) と小さくなる。盆地の中～北部では南部ほど分布は広くなく、散在的で面の高度も230～240mと低い。構成層は径数cmから50cm前後までの亜角礫が雜然と混入した淘汰礫層であり、地表面に近い部分は数mにわたって風化が進み、礫はくさってマトリックスと大して変わらないかたさになることが多い。段丘面の分布範囲のはかに、葛岡西方では火碎流堆積物の下位に見られたりする。全体的に扇状地堆積物としての層相をよく残している。また、上部は数mが赤褐色の粘土質土になっており、中に未風化的亜角礫もしばしばみられる。最上部には粘土質になった火山灰層がみられることもある。

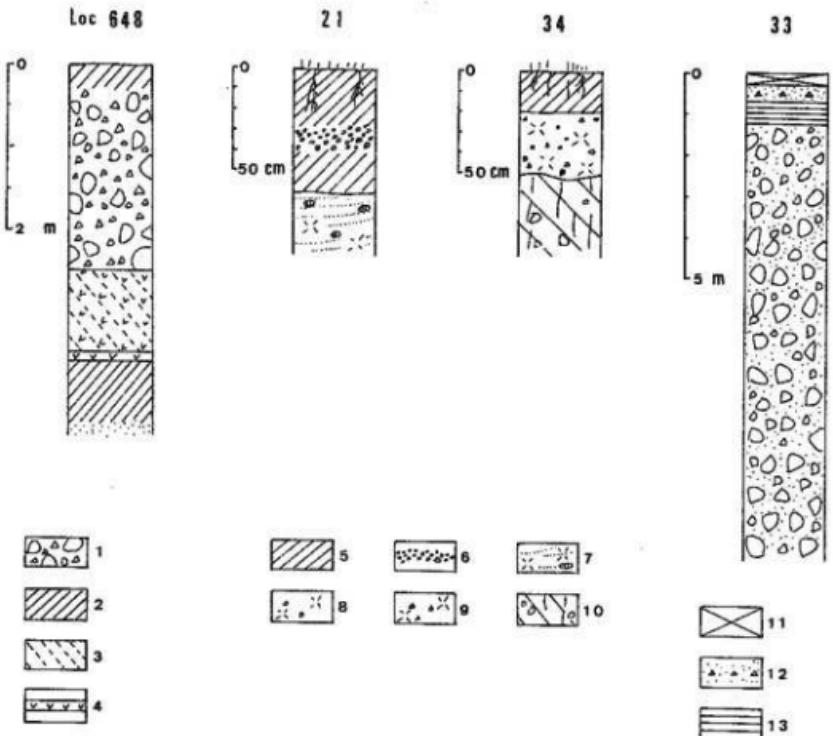
中位段丘は、上田(1965)および内藤(1970)の産土神断層以南にやや広く分布し、浦志内川下流で標高230～180m、歌内川下流で270～200mである。産土神断層以北ではまだ確認していない。末端部は鳥越軽石質火山灰層におおわれるが、明瞭に扇状地状の地形面を残しており、平均こう配は柏木森の西方で約6.0% (3.5°) である。構成層は黄褐色のシルトないし砂のマトリックス中に数cmから30cm以上の角礫ないし亜角礫が雜然と混入する礫層で、全体的に層理は不明瞭で塊状であるが、末端部では厚さ数cmの連續性のわるいシルトないし砂の薄層を含むこともある。葛岡南方ではN値が70以上の高位段丘礫層の上に、最大6mの厚さで泥炭質粘土層が発達する。この付近は浦志内川と歌内川の扇状地にはさまれた湖沼的な堆積環境にあったものであろう。なお、この粘土層の上位に5～6mの厚さで重なる中位段丘構成層はすでに記載したように不良淘汰の亜角礫からなる礫層であるが全体的にマトリックスは灰緑色を呈する。同様の色調の構成層は花輪東方の鳥越段丘の下部にもみられる。

鳥越段丘は鳥越軽石質火山灰層(内藤、1966)の堆積面であり、大湯環状列石など多くの遺跡をのせて盆地内に最も広く分布する。特に大湯川の両岸および小坂川の左岸、米代川右岸によく発達する。高度は、花輪東方で170～180m、柴内から根市戸付近で150m前後、腰廻から一本木にかけて180m前後と盆地の周辺部にむかって高度をあげるが、特に大湯川沿いでは風張付近を扇頂部とする扇状地様の形態を示す。全域にわたって灰白色～乳白色の火山灰中に白色の軽石が多量に含まれる層相を示すが、大湯川と小坂川の合流点に近いほど層理の明瞭な二次堆積物が発達する傾向がみられる。火碎流台地としての形態をよく示しており、段丘面は平坦で段丘崖は急崖をなすことが多い。なお、小枝指から申ヶ野にかけては部分的に古い高市軽石質火山灰層が見られることがあり、埋没段丘面の存在が指摘されている(内藤、1966)。

松館段丘は南部で米代川左岸に沿い尾去から松館、荒町にかけて広く分布している。標高は160～170mで、夜明島川、黒沢川等の扇状地の開析された段丘とみられる。構成層は未確認である。盆地中部の東側に、草木川、佐比内沢、間瀬川等による扇状地が発達するがこれらは松館段丘と同時期の可能性がある。

※このことから藤原(1960)は本段丘面を遺跡面と呼んだ。

第2図 露頭柱状図



凡例

1. 角砾層（含円礫）
 2. 黒土
 3. 軽石質火山灰層
 4. 軽石（大湯輕石質火山礫層）
 5. 黑色腐植土層
 6. 大湯輕石質火山礫層
 7. 島越輕石質火山礫層
（二次堆積物）
 8. 軽石質火山灰層
（降下堆積物）
 9. 軽石質火山礫層
（安山岩角砾を含む）
 10. 碎まじり赤褐色粘土
 11. 表土
 12. 火山灰
 13. 粘土層
- Loc 648は内藤（1966）
33は道路公団仙台建設局
（昭和53年）の試験資料
による。

大型段丘は南部で米代川右岸沿いに大里付近まで分布する。標高は150~155mと低く、構成層は上部はくずれやすい河床性の礫層を主とし、田泥質の砂礫層が重なっている。河床性の礫層の上には大湯軽石質火山疊層があり、さらに部分的に軽石質の二次堆積物がその上に見られたりすることから北部の毛馬内段丘に対比できるものと思われる。

毛馬内段丘は大湯川両岸と松の木以西の米代川沿いに発達する最低位の段丘で、東能代付近まで連続して分布する。標高は毛馬内付近で110~120m、松の木では112mである。構成層は大湯川沿いでは下部から大湯軽石質火山疊層、毛馬内軽石質火山灰層、不淘汰砂礫層の順に重なるが、米代川沿いでは毛馬内軽石質火山灰層が主となる。毛馬内軽石質火山灰層は米代川沿いでいくつかの遺跡を埋没させており、特に鷹巣盆地における胡桃館遺跡（平安時代中~末期）はよく知られている（秋田県教委、1968、1969、1970、平山、市川、1966）。

ところで、この地域の第四紀地質と地形を特徴づけるものに花輪断層と十和田火山起源の火山碎屑物層があげられる。

花輪断層はほぼ直線的に米代川沿いに北上しており、東西の山地の起伏量、山容のちがい、段丘の非対称的分布等は、断層の東側の山地が第四紀を通じて上界傾向がより強かったことを物語っており注目に値する。一方火山碎屑物層については内藤（1966、1970）、中川、ほか（1972）等によりくわしく知られており、古い方から小坂軽石質火山灰層、高市軽石質火山灰層(¹⁴C年代で25,850±1,360年前)、鳥越軽石質火山灰層(12,000±250年前)、申ヶ野軽石質火山灰層(8,600±250年前)、大湯軽石質火山疊層(3,680±130年前)、毛馬内軽石質火山灰層(1,280±90年前)に区分されている。このうち大湯軽石質火山疊層の¹⁴C年代値は同層の下位の炭質物についての値であり、同層の降下時期より古い年代値と考えられる。また、毛馬内軽石質火山灰層は前述のように埋没遺跡との関係から平安時代中~末期とみられており、大湯軽石質火山疊層の降下に引きつづいて流下した同一火山活動にともなう火碎流堆積物であるとその指摘もなされている（大池、1974、藤本、1980）。

(2) 地 質

No. 29 (室田遺跡)

米代川右岸で毛馬内段丘上にあり、高度は112mで平坦な地形面である。地質は、直接に遺跡地点では観察できなかったが、大湯川右岸のLoc. 648における状況（内藤、1966）から推定すると、最上部は黒色土でその下に約2.5mほどの厚さで安山岩質の円礫や角礫を含む不良淘汰の疊層が分布する構成になるものと思われる。このような構成は、大湯川沿いでは聚宮付近においても見られる。

No. 22 (猿ヶ平II遺跡)

高位段丘の段丘崖の基部に残された鳥越段丘面上に位置している。高度は169~172mで沖積面(157~158m)とは明瞭な段丘崖をもつ。構成層は黒色腐植土層が30cmないし1mほどの厚さで発達し、地表面から20ないし70cmの間に大湯軽石質火山灰層が数cmないし10数cmで膨縮しながらみられる。黒色腐植土層の厚さは軽石質火山灰層の表面に刻まれた起伏により変化し凹地では厚い。鳥越軽石質火山灰層は部分的に二次堆積物をともない、斜交葉理がみられることもある。

No. 33 (一本杉遺跡)

中位段丘上にあり、標高は210~213mである。上部から黒色腐植土層(20~30cm)、角礫まじり軽石質火山灰層(30cm)、粘土質土(約40~50cm)、不良淘汰礫層の順でみられるが、礫層の下限は不明である。黒色腐植土層中には他の段丘と同様に大湯軽石質火山灰層の薄層がうすくみとめられる。

No. 34 (案内田遺跡)

高位段丘のなだらかな段丘崖上にあり、黒色腐植土層は約20~30cmで所により大湯軽石質火山灰層を薄く含む。隣接するNo.19、18とはほぼ同様の地質構成であり、黒色腐植土層の下位には安山岩の角礫(径0.5~2.5cm)を含む軽石質火山灰層が約30cmほどでみられ、さらに下位は赤褐色の礫まじりの粘土質土になる。これは高位段丘の礫層が風化したものである。なお、No.18での軽石質火山灰層の重鉱物組成は鉄鉱物(49.5%)、角閃石(7.9%)、單斜輝石(15.2%)、斜方輝石(27.4%)であり、高位段丘面上のNo.19における火山灰層の組成に似ている。また産状、層相とも似ていることから降下火碎物と思われる。重鉱物組成の特徴からみると、角閃石が少なく、單斜輝石が多い点で申ヶ野軽石質火山灰層に似ている。

* 鉄鉱物(36.2%) 角閃石(8.3%)、單斜輝石(18.5%)、斜方輝石(37.0%)

参考文献

- 秋田県教委(1968, 1969, 1970) 「胡桃館埋没家屋発掘調査報告書(概報、第2次、第3次)」
秋田県文化財調査報告書、14、19、22
秋田県(1973) 「秋田県総合地質図」、「花輪」
藤本幸雄(1980) 「十和田火山起源の火山灰層の重鉱物組成(その1) 大館、花輪盆地における火山灰層」『大館工業高校研究紀要』
藤原健蔵(1960) 「米代川流域の河岸段丘と十和田火山噴出物との関係」『東北地理』12, 2, 34~41 P P
内藤博夫(1966) 「秋田県米代川流域の第四紀火山碎屑物と段丘地形」『地理学評論』第39卷
第7号 13~34 P P
内藤博夫(1970) 「秋田県花輪盆地および大館盆地の地形発達史」『地理学評論』第43卷第10
号 594~606 P P
中川久夫、ほか(1972) 「十和田火山発達史概要」『東北大地質古生物研報』第73号
7~18 P P
大池昭二(1972) 「十和田火山は生きている」『国土と教育』第26号 2~7 P P
上田良一(1965) 「秋田県北部の第三系の層位と造構造運動について」『秋田大地下資源開発
研究所報告』第32号 1~71 P P

2. 環境と周辺の遺跡

秋田県の北東隅に位置する鹿角は、東に八幡平を介して岩手県と境を接し、北には青森県八甲田山系を控え、年間平均気温花輪9.4℃、年間平均降水量月168mmを測り、積雪量概して少なく、年間を通して昼夜の温度隔差の大きい内陸型気候を示す地である。

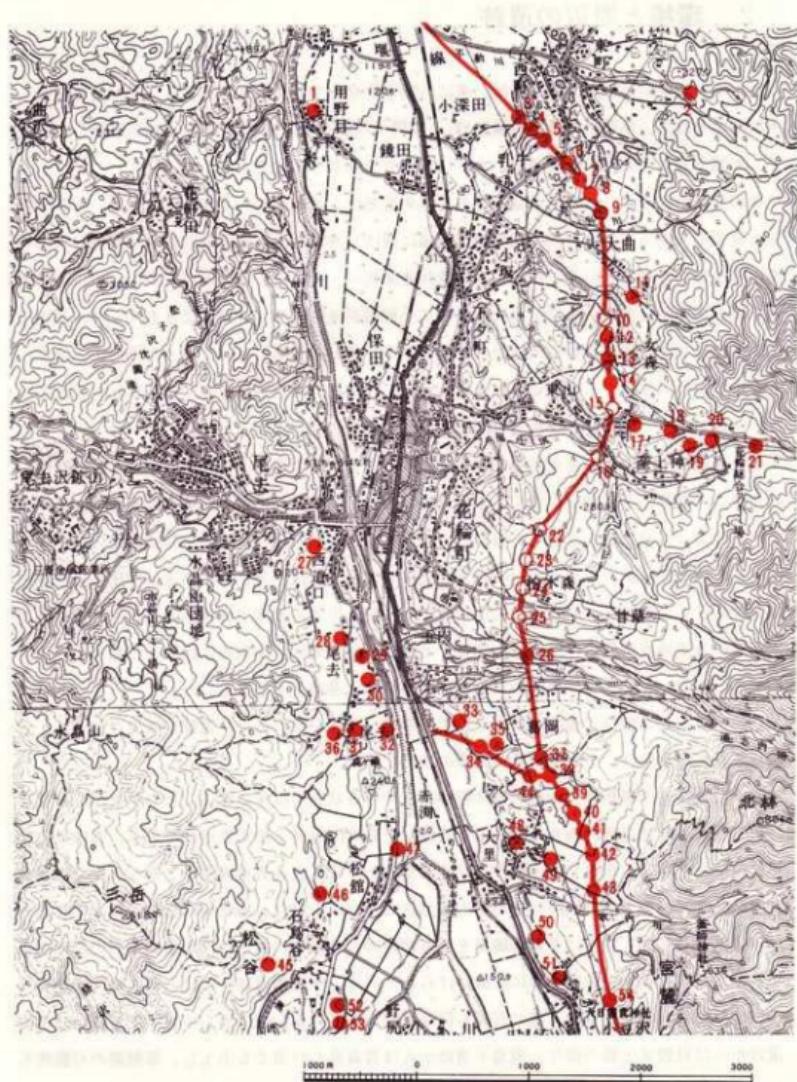
奥羽山脈中に形成された地溝盆地である鹿角盆地は、八幡平から北流する米代川、十和田から南流する大湯川、小坂川の三本の河川流域に開けた沖積地と、複合扇状地及び東部、西部の両山岳地帯からなっている。盆地中央を流れる米代川、大湯川、小坂川の三本の河川には、東西の両山岳地帯から多くの小侵蝕谷を伝わって小河川が流れ込み、沖積面よりも70~80m程高位にある標高200m前後の山岳地帯の段丘を開析している。そして、こうした小河川の間は、さらに細かな沢筋によって区切られる場合が多く、それらの沢筋によって分断された舌状の台地が、群となって開析谷と開析谷の間にいくつか連なって存在する。

鹿角盆地は多くの遺跡をその中に抱えているが、それらの遺跡は前述の標高200m前後の段丘地帯に立地し、その段丘が多くの小侵蝕谷によって開析されているため、分布状態は多くの小河川によって分断された個々の段丘毎に群在の様相を呈する。盆地内で特に遺跡の集中する箇所をあげれば、熊沢川と米代川の合流地点南東の長瀬地区、米代川に西流して注ぎ込む歌内川が開析する大里地区、同じく米代川支流である福士川周辺の産上神地区、米代川、大湯川、小坂川の合流地点南側の神田地区、同じく北側の瀬田石地区、小坂川に注ぎ込む荒川の周辺等がある。また、盆地中央部東側の風景台地も広範囲に遺跡が点在する。

鹿角では旧石器時代の遺跡は確認されておらず、調査が行われたり遺物が採集されたりして確認されているのは、全て縄文時代以降の遺跡である。

縄文時代早期の様相は、未だ明確に把握されている状態とは言い難い。三カ年にわたる東北縦貫自動車道関係遺跡の調査で、大地平遺跡、上葛岡IV遺跡、柏木森遺跡等から、青森県八戸市是川や岩手県二戸市等で出土例があり赤御堂式と呼称される表裏縄文の土器が破片で確認されている。同様の土器は大湯付近からも採集されている。また、上葛岡IV遺跡、猿ヶ平II遺跡、柏木森遺跡からは、胎土に多量の纖維を含み複数の羽状縄文の施された所謂抱彌形の深鉢が出土しており、早期末~前期初頭に位置づけられている。上記の遺跡からは、縄文時代早期東北地方北部に通有のトランシエ様の石器も併せて出土している。他に極く少量ではあるが一本杉遺跡からは貝殻文土器の破片、飛鳥平遺跡からは青森県八戸市でも出土し、草創期の可能性も指摘されている瓜形文類似の土器も破片で出土している。

縄文時代前期の遺跡としては、八幡平王内にある清水向遺跡があげられる。この遺跡は昭和



第3図 周辺遺跡分布図

○ 昭和56年度発掘調査遺跡

第1表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名(所在地)	時代・時期	遺跡・遺物
1	用野目(用野目)	平安	須恵器 土師器
2	鶴野IV(鶴野)	平安	土師器
3	西町II(西町)	縄文	縄文土器
4	西町I(西町)	縄文、弥生	縄文土器、弥生土器
5	下乳牛(下乳牛)	縄文、平安	平安整穴住居跡、フラスコ状ビット、縄文土器、土師器、須恵器
6	牛乳牛(牛乳牛)	縄文、平安、中世	縄文土器
7	妻の神III(妻の神)	縄文、平安、中世	平安整穴住居跡、土壙墓、掘立柱建物跡、フラスコ状ビット、縄文土器、土師器
8	妻の神II(妻の神)	縄文、平安	縄文整穴住居跡、土師器、縄文土器、フラスコ状ビット
9	妻の神I(妻の神)	縄文、平安	平安整穴住居跡、土師器、縄文土器、フラスコ状ビット
10	猿ヶ平II(猿ヶ平)	縄文(早期~晚期)	縄文土器(早期、円筒下層b、大木9、10式、十羅内、大洞B)、縄文整穴住居跡
11	大曲(大曲)	縄文、平安	縄文土器、土師器
12	猿ヶ平I(猿ヶ平)	縄文(中期~晚期)	縄文土器(大木8式、十羅内式、大洞B、BC、C式)
13	案内II(案内)	縄文	縄文土器(前期、後期)、整穴住居跡、土壙、配石塗構
14	案内III(案内)	縄文、平安	縄文土器(前期、後期)、土師器、須恵器、縄文整穴住居跡、平安整穴住居跡
15	案内I(案内)	縄文、平安	縄文土器(十羅内式)、土師器、縄文整穴住居跡、平安整穴住居跡
16	藤右門館(藤右門館)	縄文、平安	縄文土器、土師器、平安整穴住居跡、屋外炉
17	東山A(東山)	縄文、弥生	縄文土器(晚期)、弥生土器
18	東山B(東山)	弥生	弥生土器
19	赤坂B(赤坂)	縄文、統縄文	縄文土器、統縄文土器
20	赤坂A(赤坂)	縄文	縄文土器
21	日向屋敷II(日向屋敷)	縄文	縄文土器
22	中の崎(中の崎)	縄文、平安	縄文土器(後期、晚期)、平安整穴住居跡、土師器、須恵器、掘立柱建物跡
23	柏木森(柏木森)	縄文、平安	縄文土器(早期、後期、晚期)、土師器、土壙、フランコ状ビット
24	明童長根(明童長根)	縄文	縄文土器(後期、晚期)、土壙、フランコ状ビット、漏斗状遺構
25	一本杉(一本杉)	縄文、平安	縄文土器、土師器、須恵器、縄文整穴住居跡、平安整穴住居跡、掘立柱建物跡
26	上萬岡IV(上萬岡)		
27	下平(下平)	弥生	弥生土器
28	六角平(六角平)	縄文	縄文土器(大湯式)
29	三光塚2号(東在家)	平安	硝子玉
30	三光塚1号(東在家)	平安	玉類、勾土
31	東在家(東在家)	縄文(晚期)	縄文土器(大洞BC、C式)、土偶
32	尾去(尾去)	縄文	縄文土器
33	清水向(清水向)	縄文	縄文土器(円筒下層c、d式、大木b式、円筒上層a、d式)、整穴住居跡
34	駒林(駒林)	縄文	縄文土器、住居跡
35	下館(下館)	中世	
36	尾去A~D(尾去)	縄文、平安	縄文土器、土師器
37	上葛岡山(上葛岡)	縄文	縄文土器
38	上萬岡I(上萬岡)	縄文	縄文整穴住居跡、縄文土器
39	北の林I(北の林)	縄文、平安	縄文整穴住居跡、土壙、縄文土器(大木10式)、平安整穴住居跡、掘立柱建物跡
40	北の林II(北の林)	縄文、平安	縄文整穴住居跡、縄文土器(十羅内式)、平安整穴住居跡、土師器
41	飛島平(飛島平)	縄文、平安	縄文土器、縄文整穴住居跡
42	鳥居平(鳥居平)	縄文	縄文整穴住居跡、縄文土器(大木8式、後期)、平安整穴住居跡、土師器
43	歌内(歌内)	縄文、平安	
44	上萬岡II(上萬岡)		
45	石鳥谷(竹鼻)	縄文	縄文(円筒上層a、b層)
46	後口田Ⅲ(後口田)	縄文	縄文土器
47	岩瀬(岩瀬)	縄文	縄文土器
48	大里館(大里、堀合)	中世	
49	大里(大里)	縄文	縄文土器(大木9式)
50	下野の森(下野の森)	縄文	縄文(中期、後期)
51	小豆沢館(小豆沢)	縄文、中世	縄文土器
52	下モ和志賀(下モ和志賀)		土器
53	田中館	中世	土器
54	堂の上(堂の上)	縄文	縄文土器

29年武蔵鉄城氏等によって調査され、県内で初めて縄文時代竪穴住居跡2棟を確認した遺跡として注目された。出土した土器は、前期後葉円筒下層d式を中心として、円筒下層a式、円筒下層b式等であり、また円筒下層d式土器に伴って、山形県吹浦遺跡等に類例の求められる大木6式土器も出土している。また、東北縦貫自動車道関係の調査では、居熊井遺跡、上山田遺跡、堂の上遺跡、小豆沢館遺跡等から主に円筒下層d式を中心とした前期後葉の土器の出土をみている。

縄文時代中期の遺跡は東北縦貫自動車道関係遺跡の調査で数箇所調査されている。飛鳥平遺跡、北ノ林I遺跡、北ノ林II遺跡では石組の複式炉をもつ竪穴住居跡が検出され、大木9～10式土器を出土している。また歌内遺跡では、フラスコ状土壙の壙底から中ノ平式土器を出土している。

後期は、鹿角における縄文時代各期を通じて、調査、発見例の最も多い時期である。東北縦貫自動車道関係の遺跡では、後期中葉の捨場と竪穴住居跡を確認した居熊井遺跡、後期初頭の埋設土器を検出した飛鳥平遺跡、後期中葉の石組の炉をもつ竪穴住居跡を検出した案内I遺跡、案内III遺跡、猿ヶ平I遺跡、猿ヶ平II遺跡、後期後葉の竪穴住居跡を検出した案内II遺跡等がある。さらに昭和43年には奥山潤氏等によって、十和田大湯の黒森山麓竪穴群遺跡が調査され、後期前葉の土器を伴った石組をもつ竪穴住居跡の検出が報告されている。

また、昭和26年、27年の両年に調査が行われ史跡指定された大湯環状列石は、その後数回にわたって周辺の分布調査がなされ、現在の方座、野中堂の両列石の他にも付近数箇所に配石群の存在が確認されている。

晚期では、清水向遺跡と同じ台地に立地する玉内遺跡が知られ、晚期中葉の遺物とともに所謂日時計形の列石が確認されている。また、この玉内遺跡の立地する台地とちょうど米代川を挟んでの対岸には東在家遺跡があり、晚期中葉までの遺物を多く出土している。東北縦貫自動車道関係の調査では、柏木森遺跡、明堂長根遺跡から袋状土壙群が検出され、晚期初頭の遺物を多く出土している。

秋田県内における弥生時代の遺跡は今までのところ縄文時代のそれと較べると、知られている遺跡数、その内容とも少なく且つ不明確な点が多い。鹿角はその中にあっては比較的該期様相の理解がすすんでいる地域である。

鹿角盆地北端の小坂町周辺では、奥山潤、安保彰画氏の活動により、内ノ岱遺跡、嗜岱遺跡等から、天王山式類似の土器、後北C式土器が採集され報告されている。また鹿角市尾去沢からは田舎館式類似の土器が出土している。東北縦貫自動車道関係の調査では、大地平遺跡、駒林遺跡から繩軸の格縄体の回転施文された土器片、奥山潤氏等命名によるところの小坂X式土器が出土し、さらに猿ヶ平I遺跡からは天王山式類似の土器が出土している。しかし、これら

の弥生時代の土器は今のところ断片的な出土に限られており、伴出する他の遺物や遺構等、未だ不明な点が多く残されている。

奈良、平安期の古代の遺跡も近年調査例を増して来ている。古くは昭和初年に木村喜吉氏等によって調査され、その後、後藤守一氏等によって調査された菩提野堅穴群遺跡がある。この遺跡は計12カ所の堅穴群からなると想定されたが、その調査当初から覆土中に入る火山灰層が注目され、以来鹿角における該期の遺跡調査は、この火山灰層との関係解明を大きな視点の一つとして据えることになる。近年では大湯環状列石周辺の分布調査、鳥野遺跡、源田平遺跡、小平遺跡等の調査で、該期堅穴住居跡が検出され、また、東北縦貫自動車道関係の調査では、轟内遺跡、飛鳥平遺跡、北ノ林I遺跡、北ノ林II遺跡、上戸岡IV遺跡、剣林遺跡、一本杉遺跡、中ノ崎遺跡、案内I遺跡、案内III遺跡、妻ノ神I遺跡、妻ノ神II遺跡、下乳牛遺跡などで堅穴住居跡が検出されている。さらに御休堂遺跡、高市向館遺跡でも同様の住居跡が検出されている。菩提野堅穴群から含めた今まで確認されている該期住居跡の総数は、144棟という膨大な数にのぼる。

他に、奈良、平安期の遺跡としては、十和田錦木字曲谷地にある枯草坂古墳、尾去沢字東在家にある三光塚古墳群があげられる。いづれも終末期の小円墳であり、玉類、刀装具等を出土している。また十和田字室田にも古墳群があったと伝えられている。

中世鹿角は、鎌倉時代にこの地に移住したと伝えられる成田氏、安保氏、秋元氏、奈良氏の所謂鹿角四氏の支配する地域であった。これら四氏から出自する各々の庶流は、盆地内に所領を得て『鹿角由来集』『鹿角由来記』などに伝えられる鹿角四十二館にそれぞれ居を構えて割拠する。この状態は近世鹿角が南部領となるまで続く。

鹿角には、鹿角四十二館あるいは四十八館に該当するものを含めて計58カ所に及ぶ「館」跡が確認されている。これらの「館」跡は、舌状に張り出した台地を、1~数本の掘切を構築して造りあげている多郭連続式のものが多い。すなわち、一カ所の「館」跡は数個の郭が連っている。また、郭自体が元来舌状台地であったため、「館」として使用される以前にも人間の居住域として選定される事が多く、郭上面の調査では時として縄文時代、平安時代の堅穴住居跡等が中世の遺構、遺物等とともに検出される。

今までに発掘調査の行われているのは、小枝指七ツ館、長牛館、御休堂遺跡等があり、東北縦貫自動車道関係では、湯瀬館遺跡と乳牛館の一部と考えられている妻ノ神I、同II、同III、乳牛平遺跡が調査終了している。

猿ヶ平 II 遺跡

遺跡番号 No.21

所在地 鹿角市花輪字猿ヶ平144番地 他

調査期間 昭和56年4月20日～7月20日

発掘調査予定面積 7,460m²

発掘調査面積 5,800m²

1. 慶熊井
 2. 湯瀬館
 3. 上山田
 4. 大地平
 5. 堂の上
 6. 歌内
 7. 鳥居平
 8. 飛鳥平
 9. 北の林 I
 10. 北の林 II
 11. 上裏岡 I
 12. 上裏岡 III
 13. 上裏岡 IV
 14. 駒林
 15. 柏木森
 16. 中の崎
 17. 猿右工門館
 18. 室内 I
 19. 室内 II
 20. 猿ヶ平 I
 21. 猿ヶ平 II
 22. 要の神 I
 23. 妻の神 II
 24. 妻の神 III
 25. 乳牛平
 26. 乳牛
 27. 西町 I
 28. 西町 II
 29. 室田
 30. 明堂長模
 31. 上裏岡 II
 32. 一本杉
 34. 室内 III
 A Z 小豆沢館



1 : 50,000

1000m 0 1000 2000 3000

1. 遺跡の概観

猿ヶ平II遺跡は秋田県鹿角市花輪字猿ヶ平144他に所在する。国鉄花輪線陸中花輪駅より北東2.4km、北緯40度12分05秒、東経140度48分40秒の地点で、花輪古館団地（中世城館跡、県登録遺跡番号80、白山堂遺跡）と大曲集落を結ぶ市道陣場女森線のほぼ中間東側に位置する。

奥羽山脈の一部を形成する花輪盆地東部山地とその山麓は盆地床の米代川に注入する幾筋かの小河川と沢目によって区切られ、扇状もしくは舌状の台地が数多く発達している。遺跡地はこの東部山地の通称馬の背(標高895m)と呼ばれる一峰の西麓からゆるやかに北西に伸びる数段の段丘のうち「鳥越段丘」と呼ばれる面に立地している。標高は164mで下の水田面との比高は10m程の舌状の台地である。調査地はこの舌状台地を南北に縱断する高速道路予定地内で、発掘調査以前は樹齢100年に近い杉の植林地と果樹園であった。

隣接の遺跡としては、東方200mの花輪低位段丘上に立地する昭和55年度調査の縄文時代後期の竪穴住居跡とフラスコ状ピット群、晩期の土壙と弥生式土器の検出された猿ヶ平I遺跡があり、やや離れたものとしては、前述の猿ヶ平I遺跡南方400mの所に位置する昭和55年調査の縄文時代後期と平安時代の数多くの竪穴住居跡を検出した集落跡の案内I・III遺跡がある。

2. 調査の方法

遺跡は東北縦貫自動車道の本線にあたる。そこで発掘調査予定地内に存在する道路中心杭STA145とSTA145+20を結ぶ直線とその延長線を基線として、これに直交する線を設定し5m×5mのグリッドを発掘調査予定地内に組んだ。南から北へアラビア数字で3~47まで、同じく東から西へアルファベットでA~Jを付し、C区を調査する際に乙を付加し、両者を組み合せて3-Fグリッドのように呼び、グリッド南東隅の交点をグリッド名称とした。また遺跡が南北に細長く存在するため便宜上沢より南をA区、市道より北をC区、沢と市道にはさまれた地区をB区とした。

発掘調査は初め遺跡層位の把握と遺構の確認のため、南北に長い数本のレンチを設定した。その結果B区・C区において竪穴住居跡・土壙・フラスコ状ピット等が検出されたので、全面発掘に切り替えて調査を行った。確認された遺構については性格別に発見順に番号を付し、その実測については2本のグリッド杭を結んだ線およびその延長線を基線として、これに直交する1m×1mの小グリッドを遺構の大きさに即して設定する遺り方測量に依った。 $\frac{1}{50}$ の縮尺を原則とし、必要に応じて $\frac{1}{20}$ の縮尺を採用して実測図を作成した。



第1図 地形図およびグリッド配置図

3. 調査の経過

猿ヶ平II遺跡の発掘調査は、昭和56年4月20日から7月20日まで実施した。

4月20日調査員、補佐員、作業員が現地に集合して発掘調査についての打合せを行い、後プレハブに器材を搬入した。同日から23日まで土木業者による遺跡地の抜根、表土除去が行われ、21日測量業者によるグリッド杭打ちが開始され24日まで続く。これと並行して発掘予定地に南北長さ100m、幅1mの数本のトレントを設定し粗掘りを行う。その結果31-Hグリッド付近において縄文時代早期の表裏縄文土器十数片と、34ライン以北のB区北側斜面一帯に縄文時代前期、中期の土器片が分布することが確認された。このトレント掘りは5月14日まで続けられた。5月15日にはB区25ラインを全面発掘に切り替え、トレントの土層断面図の完了した箇所からグリッド粗掘りを開始する。粗掘の範囲が北方に拡がるとともに遺構の確認が相次ぎ、20日にはSI 010豊穴住居跡が全容を現わし、その後も土壙、フラスコ状ビットが検出され精査と実測が開始された。

6月2日B区北端においてこれまで確認のされた豊穴住居跡、フラスコ状ビットと覆土の異なる地山の混じった覆土のSI 003豊穴住居跡、SK(F)002フラスコ状ビットを確認した。さらに粗掘りが25ライン以北全域にわたった24日迄には豊穴住居跡5棟、土壙10基、フラスコ状ビット10基、Tビット2基が検出され精査と実測が続けられた。SI 005豊穴住居跡は3基のフラスコ状ビットと切りあうことが分かり、SK 009 土壙からは晩期の完形に近い土器1個が出士した。16日から当遺跡調査後に発掘調査の予定されている柏木森遺跡（道路番号No15）へ補佐員と作業員の一部が出向き、土層観察用のトレントを設定し予備調査に入る。

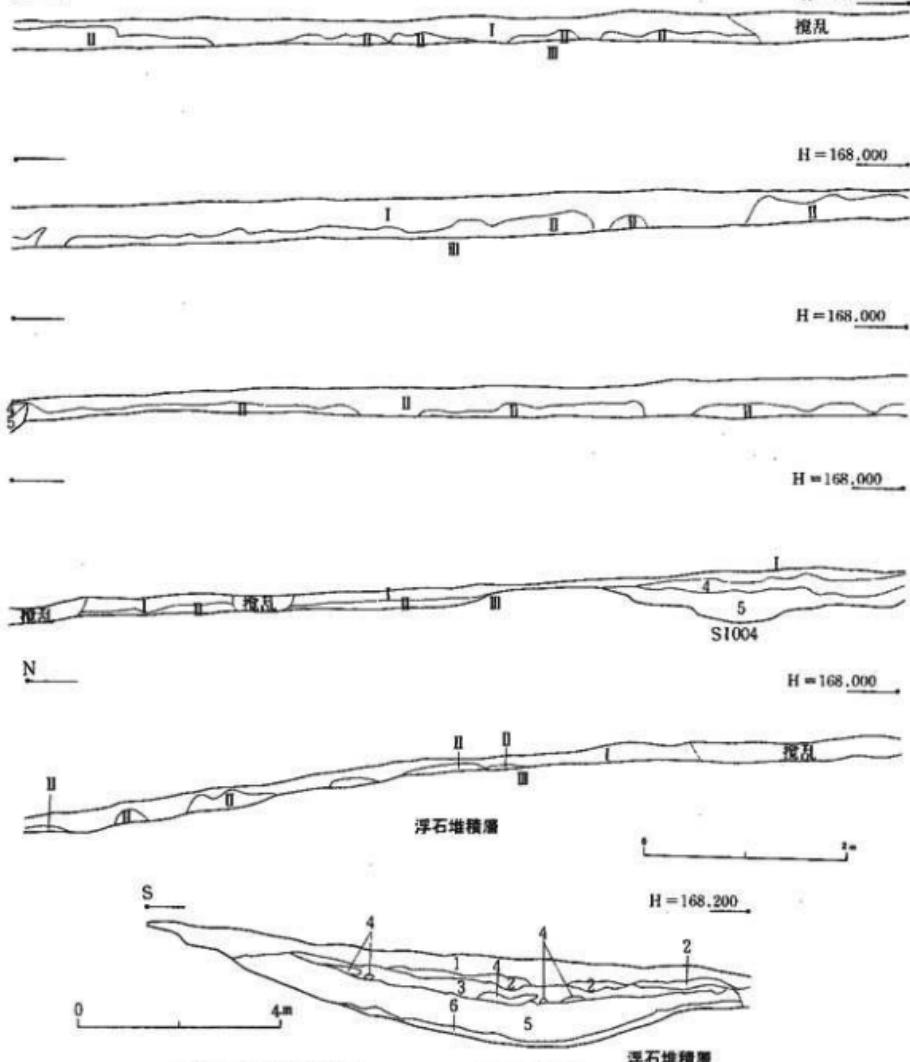
7月9日B区で検出された豊穴住居跡と土壙の調査が一段落したため、作業員をC区に移動させて表土除去と粗掘りを開始する。3基の土壙とフラスコ状ビットが検出され、そのうちの1基SK(F) 014のフラスコ状ビットは他にあまり類例の無い底部に4基の小型フラスコ状ビットと1基の土壙をもつものであった。17日には調査専門指導員北海道大学助教授林謙作先生が来跡し遺構の調査と出土遺物について指導助言くださった。18日遺跡北側足下に存在する水田にトレントを設定し発掘を行うが、遺構、遺物は確認できなかった。20日豊穴住居跡8棟、土壙12基、フラスコ状ビット23基、Tビット2基の実測及び写真撮影をすべて終え、発掘面積5,800m²、調査日数79日にわたる発掘調査を完了する。

4. 遺跡の層位

遺跡堆積土層の状態と遺構の分布状況を確認するために、A・B・Cの三区にトレントを設

B区Eライン土層断面図

H = 168.000 S

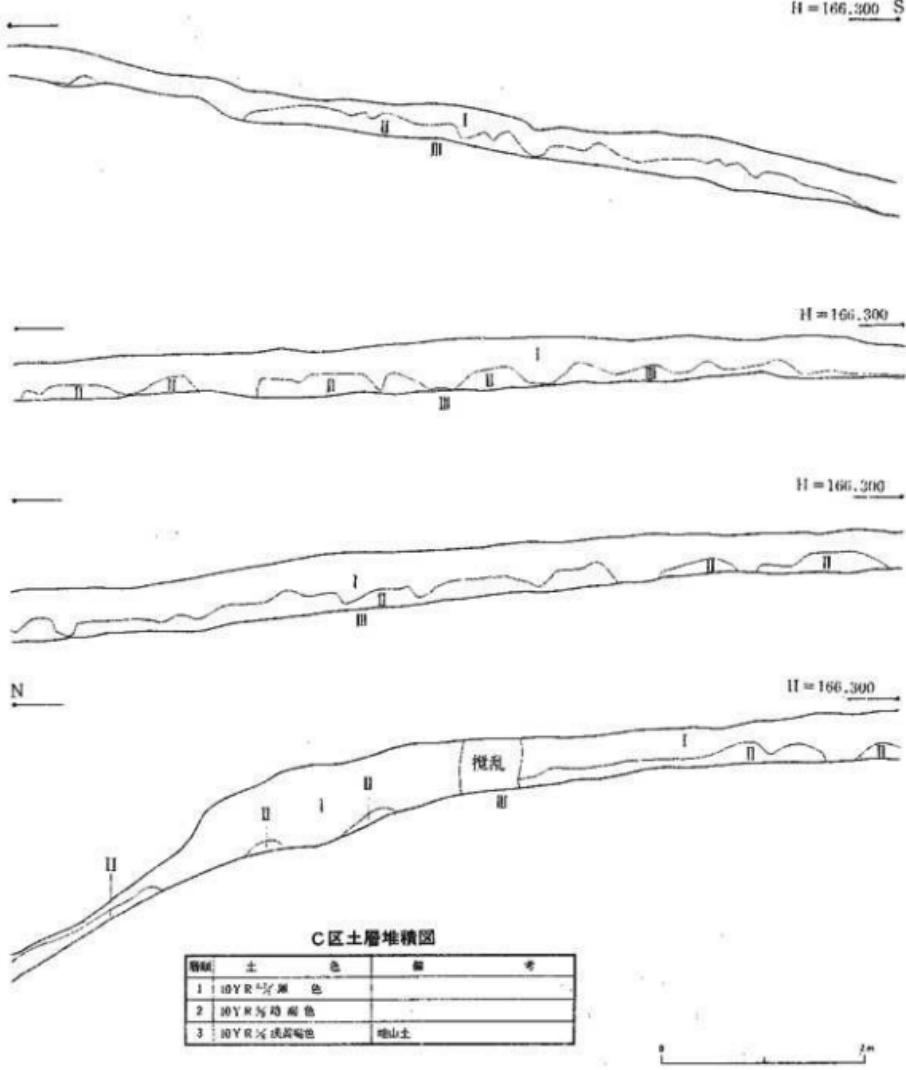


B区Eライン土層断面図

編號	土色	備考
1	10YR 1/2 黒色	
2	10YR 4/2 黒褐色	
3	10YR 4/2 黒褐色	堆山
4	10YR 4/2 黒色	S1004 墓土
5	10YR 4/2 黒褐色	S1004 墓土

編號	土色	備考
1	10YR 1/2 黒色	
2	10YR 4/2 黒褐色	浮石を少量含む
3	10YR 4/2 黒褐色	浮石を多量に含む
4	10YR 4/2 綠褐色	浮石層
5	10YR 1/2 黒色	
6	10YR 4/2 綠褐色	堆山堆積層

第2図 B区Eライン土層断面図および浮石堆積図



第3図 C区Bトレンチ土層断面図

定したが、基本土層としたものは、このうちB区の遺跡中央を南北に走る道路中心杭に沿ったトレンチと、C区のZグリッドラインに沿って設定したトレンチの土層である。

B区土層堆積（第2図）：表土から地山上面まで30~50cmの厚さを測り、2層に分層できる。
第1層 10YR 1.7/1 黒色 B区全域を覆い、厚さ30~40cmを測る。北側斜面と中央に存

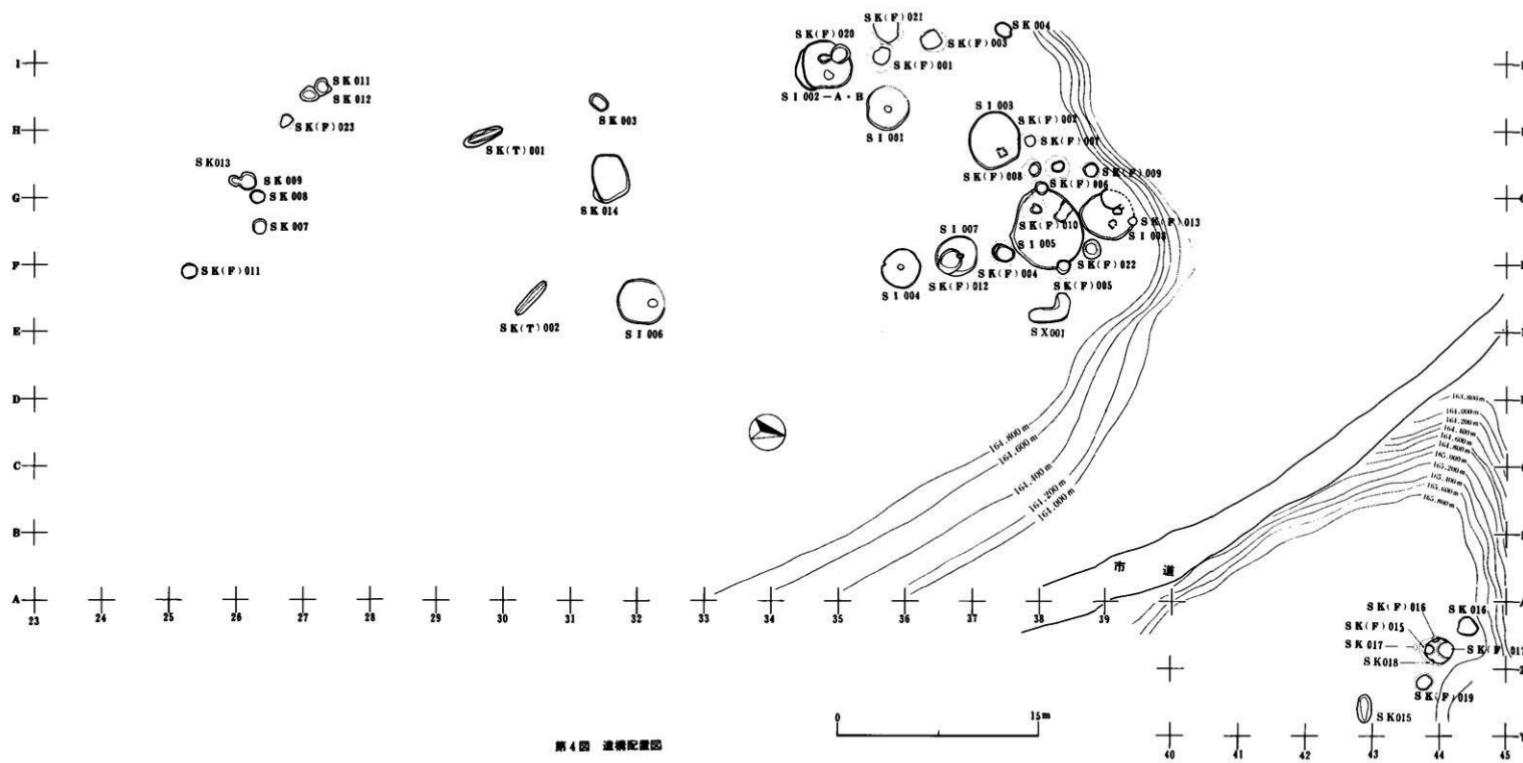
			在する沢に厚く堆積し、拔根の際の擾乱が見られる。
第II層	10Y R3/3	暗褐色	ほぼ全域にみられるが、拔根のため存在しない部分もある。 厚さ 5~10cm。
第III層	10Y R5/8	黄褐色	地山層である。23-Hグリッド深掘り地点においては 120cm 程の厚さがあるが、北側斜面では 30~40cm と浅い。遺構はすべてこの層を掘り込んで構築されており、遺構確認面である。
第IV層	10Y R7/3	にぶい 黄橙色	地山面を構成するものと思われる。厚さは 2m 以上。すべてのラスコ状ピットは第III層を完全に掘り抜き、さらにこの層を 1m 程掘り込んで構築している。また S I 005 槽穴住居跡、S K(F) 004 ラスコ状ピット等の覆土内にみられるにぶい黄橙色土はこの第IV層のものと判断される。

C 区上層堆積（第4図）：表土から地山層上面まで、30cm~80cm の厚さがあり、2 層に分層される。

第I層	10Y R1.7/1	黒 色	全域を覆っており、北側斜面は厚さ 80cm と深く、他は 10~35cm と浅い。木根が多く入っている。
第II層	10Y R4/3	明褐色	拔根により存在しない所もあるが、以前は全域を覆っていたものと思われる。厚さ 3~20cm。
第III層	10Y R6/6	明黄褐 色	地山層で遺構確認面でもある。コブシ大の礫を多量に含む。この層下にも B 区土層堆積第IV層と同じにぶい黄橙色土が堆積している。

浮石堆積層（第3図 図版6一上）：浮石の堆積は B 区 23-C、23-I グリッドを中心とした沢に存在した。23-I グリッド付近で確認された浮石の堆積は 3 層に細別され、表土から地山面まで 6 層に分層された。これらは平安時代のいわゆる大湯浮石（十和田 a）と考えられる。

第1層	10Y R1.7/1	黒 色	B 区 土層堆積の第I層で、10~30cm を測る。
第2層	10Y R1.7/1	黒 色	第1層と同色を示すが、少量の浮石粒子の混入がみられる。 厚さ 5~22cm。
第3層	10Y R3/2	黒褐色	多量の浮石粒子の混入がみられる。厚さ 5~38cm。
第4層	10Y R8/4	浅黄橙 色	まじりの無い浮石堆積層である。この層下部には粒径の大きい浮石粒子がみられる。厚さ 10~20cm。
第5層	10Y R1.7/1	黒 色	B 区 土層堆積第III層の粒子が混入する。厚さ 25~80cm。



第4回 造構配置図

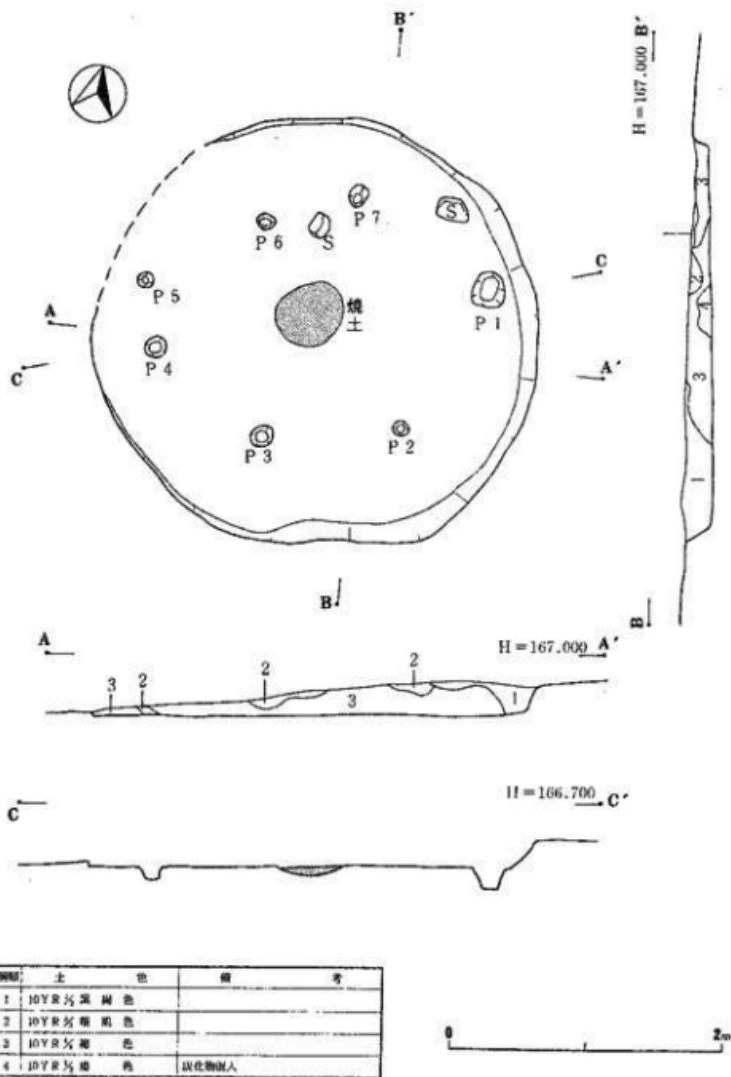
第6層 10Y R8/4 浅黄橙 地山漸移層である。

色

ここで観察された浮石堆積層は黒色土、黒褐色土に浮石粒子の入り込んだ浮石混入土と混入物のない浮石堆積層からなる3層で、断面形は凸レンズ状を示し、中央部で50cm程の厚さを測る。混入物のない浮石堆積層は上層部に粒径の小さな浮石粒子からなる層と、下層部に部分的にはあるが粒径の大きな浮石粒子からなる層に細別される。これは浮石が沢に流れ込んだ時に二次的な水流による洗い出しを受けていると思われる。

5. 遺構と遺物

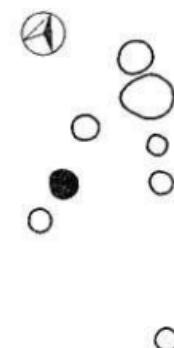
(1) 検出遺構

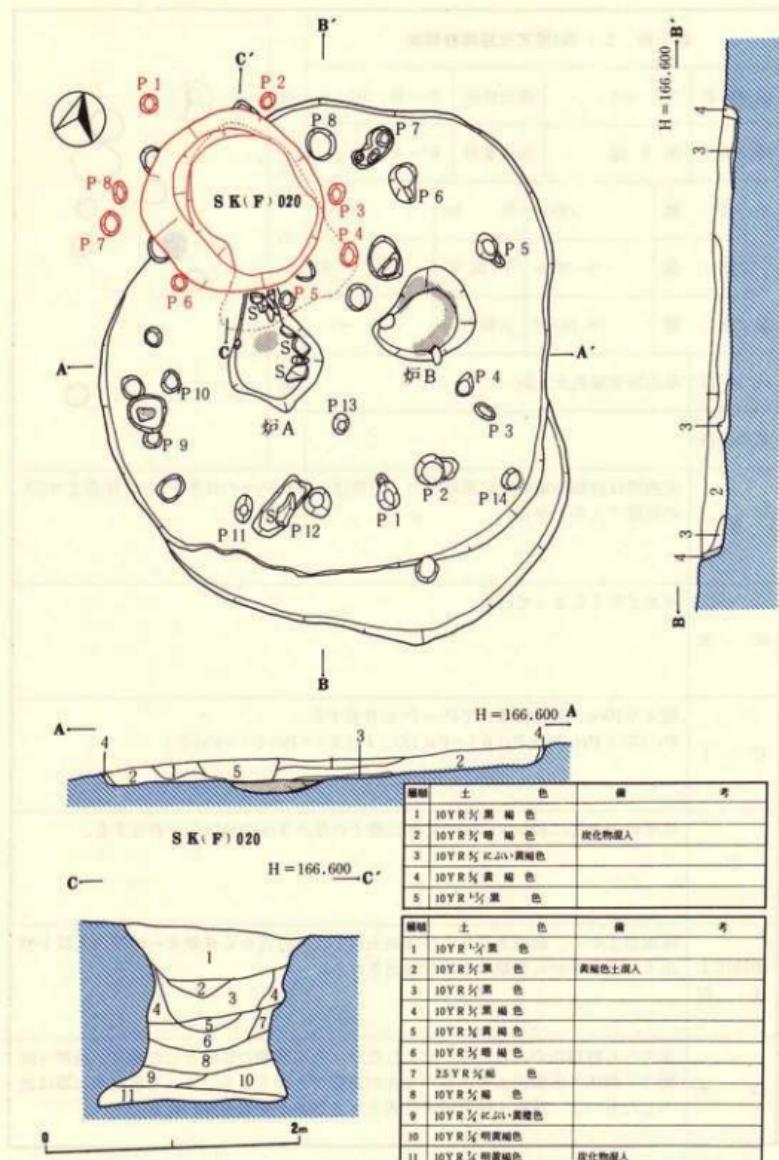


第5図 S1 001竪穴住居跡実測図

第1表 SI 001竪穴住居跡観察表

遺構名	SI 001	検出地区	35-H, 36-H	遺構の位置	
掲図番号	第5図	図版番号	6一下		
法 量	長軸 壁高 面積	330cm 0~20cm (8.19)m ²	短軸 平面形 主軸方向		
			円形 —		
確認面	第III層黄褐色土上面				
重複関係					
壁	北西壁は抜根作業の際に崩壊した。他壁は5cm~20cmの高さを測り、床面より50°の角度で立ち上がる。				
床面	平坦で堅くしまっていた。				
ピット	壁より10cm~60cm程離れてP ₁ ~P ₇ が存在する。 P ₁ (15)・P ₂ (7)・P ₃ (6)・P ₄ (13)・P ₅ (8)・P ₆ (8)・P ₇ (9)				
炉	住居跡中央部に40cm×50cmの範圍に焼土の厚さ8cmの地床が存在する。				
遺物出土状況	床面直上から、前期土器および後期土器と、P ₆ 付近から後期末~晩期の土器1個出土。埋土中から前期の土器が検出される。				
備考	床面から時期差のある土器が出土したが、仮に前期の住居とした場合、後期~晩期の1個体の床面出土の土器の存在が説明つかなくなる。よって前期の土器は流入したもので、後期~晩期頃の住居と考えるのが妥当と思われる。				

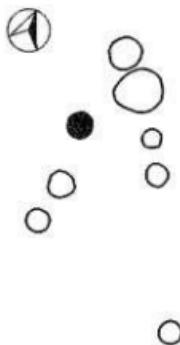


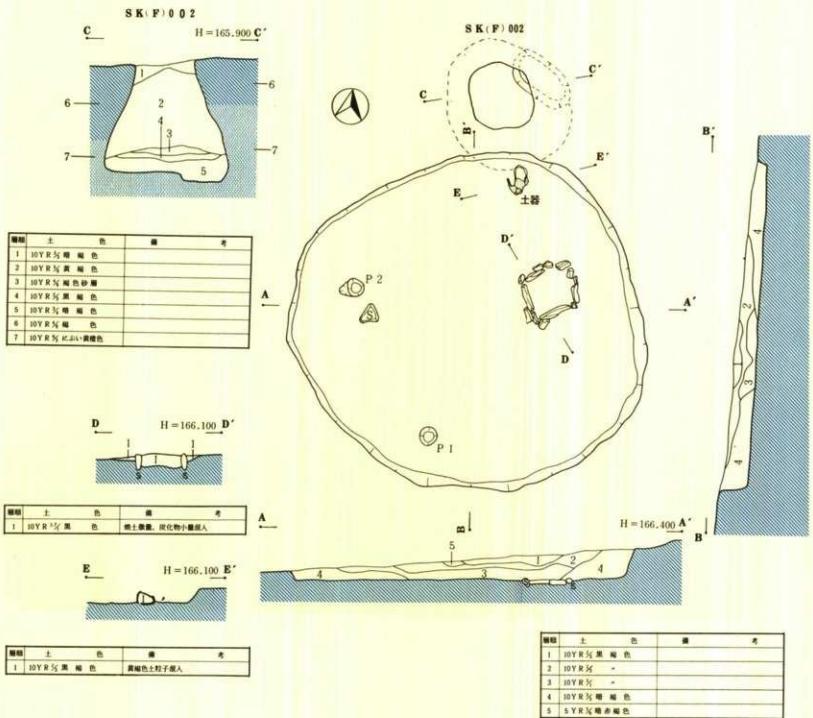


第6図 SI 002豊穴住居跡およびSK(F) 020 フラスコ状ピット実測図

第2表 S I 002竪穴住居跡観察表					遺構の位置			
遺構名	S I 002	検出地区	34-H, 35-H 34-I, 35-I					
地図番号	第6図	図版番号	7-上					
法長軸	380cm	短軸	348cm					
堅高	0~20cm	平面形	不整円形					
面積	10.62m ²	主軸方向	N-22°-W					
確認面	第III層黄褐色土上面							
重複関係	S K(F)020に炉Aが切られている。							
壁								
床面	東側に砂質の貼床が施されている。中央西寄りに炉Aが、東寄りに炉Bがある。							
ピット	住居内にP ₁ ~P ₁₃ が存在する。P ₁ (20)、P ₂ (49)、P ₃ (14)、P ₄ (18)、P ₅ (22)、P ₆ (48)、P ₇ (14)、P ₈ (9)、P ₉ (24)、P ₁₀ (7)、P ₁₁ (15)、P ₁₂ (15)、P ₁₃ (26)。							
炉	がA、炉Bがある。炉Aは方形の石組炉で、北端をS K(F) 020に破壊されている石組炉であるが、西側の石は抜き取られている。がBは振り込みを有する地床炉で、炉内と周辺部に焼土が見られる。							
遺物出土状況	P ₅ 埋土から石斧が、P ₉ 埋土から縄文土器片が出土。							
備考	住居南側を検査の際、本遺構と重複する形でプランの一部が確認できた。この遺構がS I 002に先行することは確かであるが、住居跡になるかははっきりしない。							

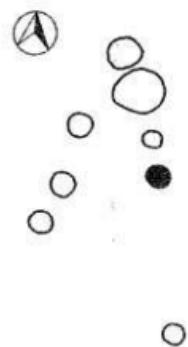
第3表 S I 003竪穴住居跡観察表					遺構の位置	
遺構名		S I 003	検出地区	36-G, 37-G 36-H, 37-H		
挿図番号		第7図	図版番号	7下 11上		
法 軸		4.28cm	短 軸	394cm		
壁 高		10~35cm	平面形	円 形		
面 積		13.00m ²	主軸方向	S-71°-W		
確認面		第III層黄褐色土上面				
重複関係						
堅	床面が北西にゆるやかに傾斜するため、北西壁は低い。他壁は床面よりほぼ45°の角度で立ち上がり、しっかりとした作りである。					
床 面	僅かであるが凹凸を示し、堅くしまっている。					
ピット	西壁より30cm~50cm程離れてP ₁ (53)、P ₂ (55)が存在する。					
炉	石組炉である。12cm~15cmのコブシ大の川原石を四隅に、27cm~41cmの横長の川原石を四辺に配し、計14個の川原石を用い方形に組んでいる。					
遺物出土状況	炉北側1mの床面に複元可能な土器1個体、また住居跡が内埋土中より数点の土器片が出土。					
備 考						

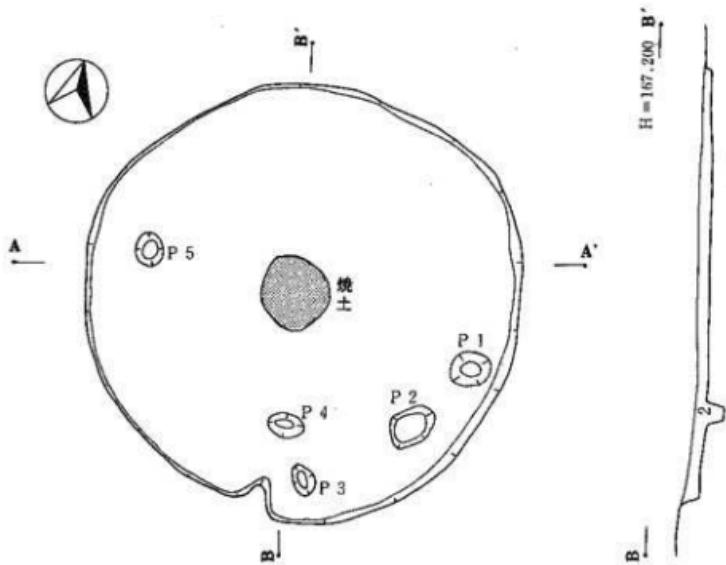




第7図 S I 003壁穴住居跡およびSK(F) 002 フラスク状ピット実測図

第4表 S I 004堅穴住居跡観察表					遺構の位置	
遺構名	S I 004	検出地区	35-E, 36-E 35-F, 36-F			
押図番号	第8図	図版番号	8-上			
法長軸	298cm	短軸	288cm			
壁高	8-10cm	平面形	円形			
面積	6.58m ²	主軸方向	- -			
確認面	第II層暗褐色土、第III層黄褐色土上面					
重複関係						
壁	全体的に8cm~10cmと低く、床面より垂直に立ち上がる。壁南側に20cmほどの突出部が存在する。					
床面	平坦で堅くしまっている。住居跡北西部は暗褐色土の貼り床である。					
ピット	南東部の壁にそってP ₁ ~P ₃ 、やや離れてP ₄ 、P ₅ が存在する。P ₁ (13cm)、P ₂ (13cm)、P ₃ (7cm)、P ₄ (115cm)、P ₅ (10cm)。					
炉	住居跡中央に42cm×50cm、焼土の厚さ4cmの地床が存在する。焼上は、明赤褐色、または暗褐色を呈する。					
遺物出土状況						
備考						

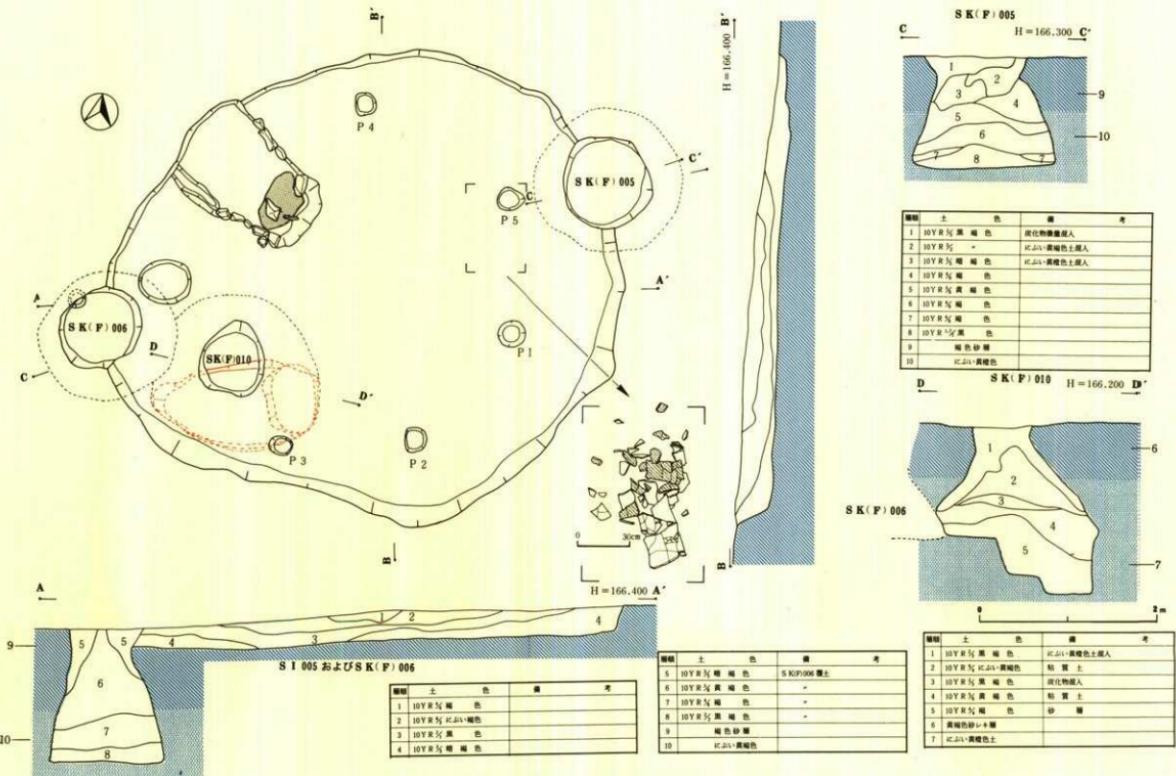




編號	土色	參考
1	10YR 4/2 黑褐色	
2	10YR 3/2 黑褐色	

0 1 2m

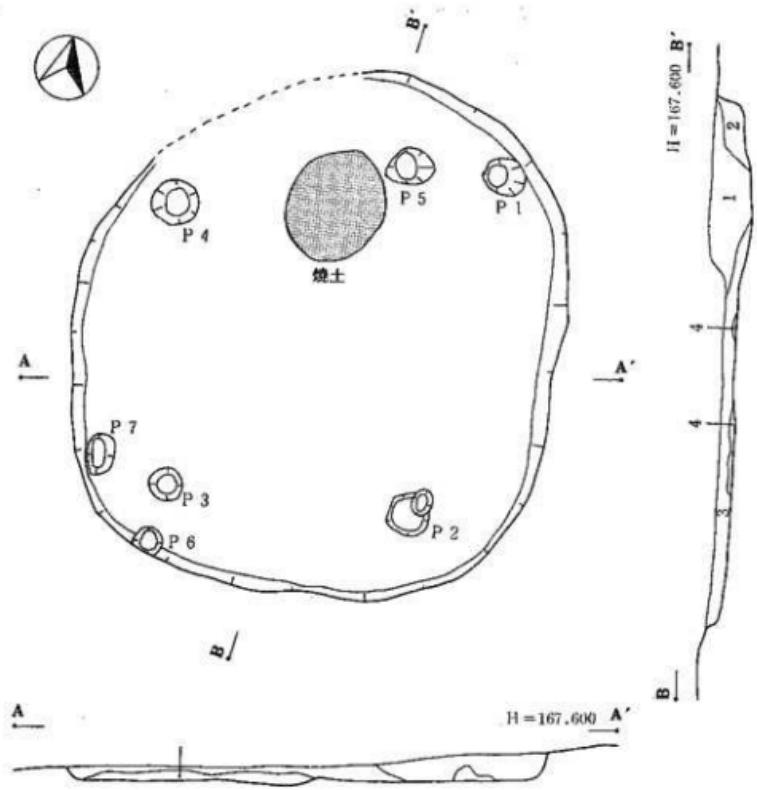
第8図 SI 004 竪穴住居跡実測図



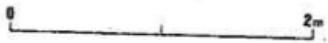
第9図 S I 005整穴住居跡およびSK (F) 005-006-010 フラスコ状ピット実測図

第5表 S I 005竪穴住居跡観察表

遺構名	S I 005	検出地区	37-E, 38-E 37-F, 38-F 37-G, 38-F	遺構の位置			
挿図番号	第9図	図版番号	8下 11下				
法	長 軸	592cm	短 軸				
量	壁 高	9~40cm	平面形				
	面 積	24.75m ²	主軸方向				
確 認 面	第III層黄褐色土上面						
重複関係	S K(F) 005・006・010の3個のフラスコ状ビットが重複する。						
壁	北側にゆるやかに傾斜する斜面に構築されている。そのため北側の壁は低い。壁は部分的に直角に近い角度で立ち上がりを示すが、他は70°に近い角度で床面より立ち上がる。しっかりとした作りである。						
床 面	石組炉を開むように暗褐色土の貼り床が施されていた。他はにぶい黄褐色土を使用し貼り床が施されていたが、面とらえることは出来なかった。床面全体は堅くしまっていた。						
ビット	壁より20~80cm離れてP ₁ ~P ₅ が存在する。P ₁ (36.5cm)、P ₂ (35.5cm)、P ₃ (35cm) P ₄ (35.4cm)、P ₅ (40cm)						
炉	住居跡西北部に存在する。形態は「U」字状を呈し、開口部は壁に接する。コブシ大から人頭大の川原石10個を使用し相対するように配列される。さらに南側石組部より壁に向けて、長さ64cm×幅15cm×深さ10cmの石の抜き取り痕と思われる溝が存在する。						
遺物出土状況	住居跡南西部埋土中に後期土器数点と床面数cm上でP ₅ を覆うように、中期末の深鉢土器1個体（ただし底部を欠く）が出土した。また床面および炉埋土中より搔器各1点づつ出土した。						
備 考	当住居跡には3個のフラスコ状ビットが重複する。新旧関係は(旧)S K(F) 010→S I 005→S K(F) 005、006(新)である。						

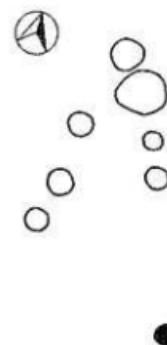


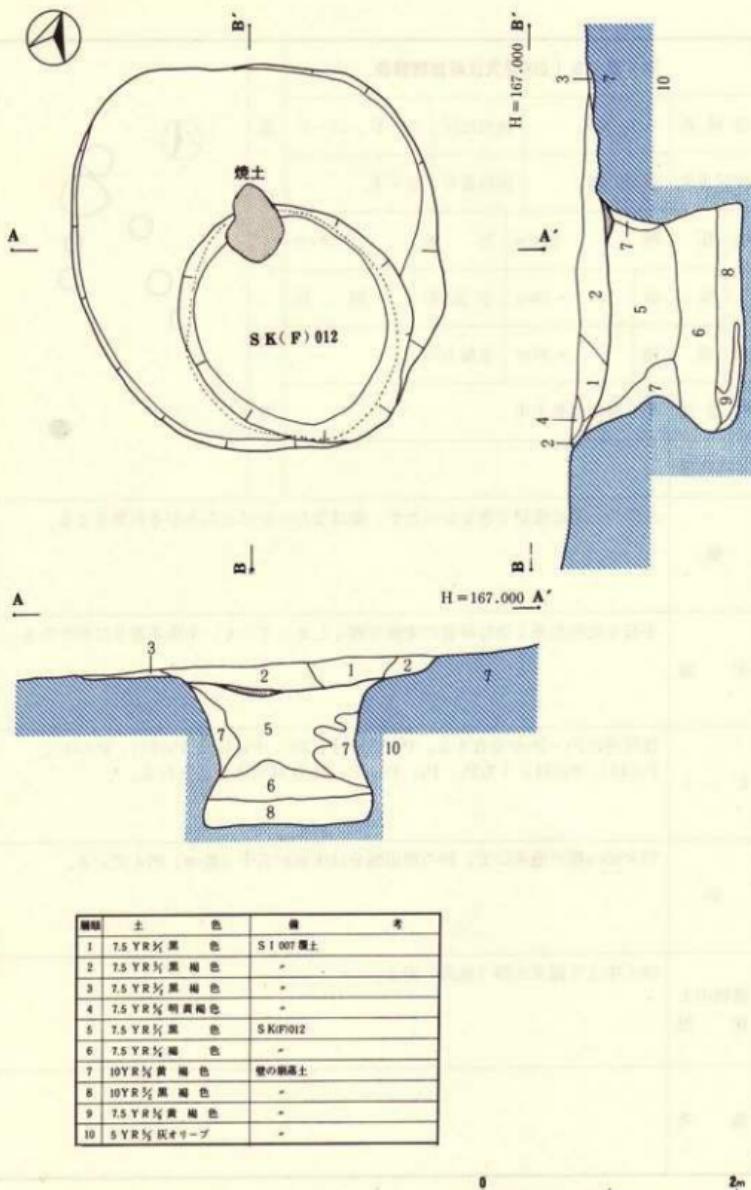
層級	土色	備考
1	10YR 4/2 黑褐色	
2	10YR 4/2 黄褐色	
3	10YR 4/2 黑褐色	
4	10YR 4/2 黄褐色	



第10図 SI 006 壁穴住居跡実測図

第6表 S I 006竪穴住居跡観察表					遺構の位置	
遺構名	S I 006	検出地区	32-E、33-E			
地図番号	第10図	図版番号	9・上			
法 量	長軸 壁 面	354cm 高 度 積	平面形 主軸方向	320cm 一 一		
確認面	第II層暗褐色土中					
重複関係						
壁	北壁の一部は確認できなかったが、他はなだらかに立ちあがる形態をとる。					
床面	小石を比較的多く含む砂質の床面で固くしまっている。中央北寄りに炉がある。					
ピット	住居内にP ₁ ～P ₇ が存在する。P ₁ (35)、P ₂ (20)、P ₃ (19)、P ₄ (52)、P ₅ (34)、P ₆ (13)、P ₇ (11)、うちP ₁ 、P ₂ 、P ₃ 、P ₄ が主柱穴と考えられる。					
炉	75×60cm程の地床がで、炉の周辺部分は床面が若干(数cm)凹んでいる。					
遺物出土 状況	埋土中より縄文土器(底部)出土。					
備考						



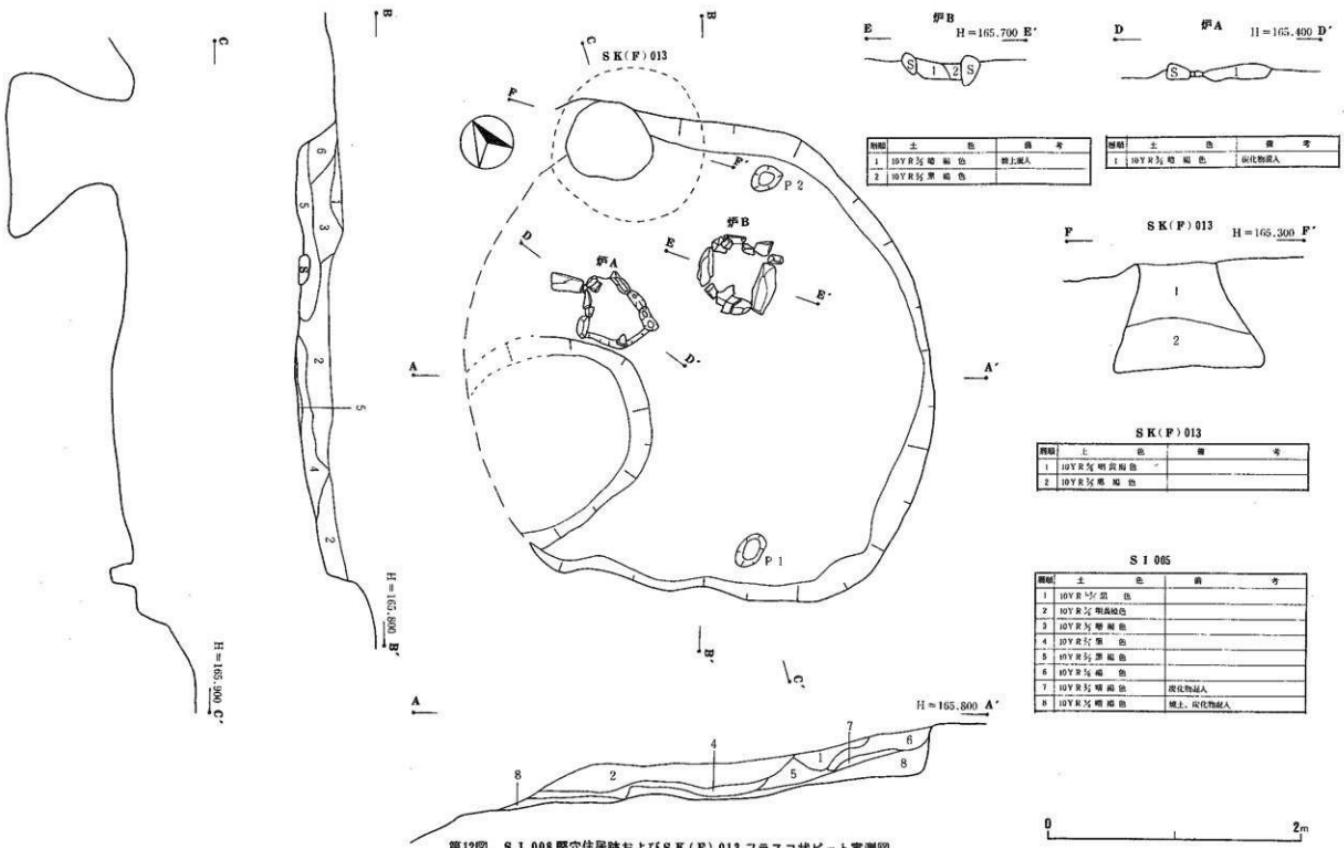


第11図 SI 007 穫穴住居跡およびSK(F) 012 フラスコ状ピット実測図

第7表 S 1 007竪穴住居跡観察表

遺構名	S 1 007	検出地区	36-E、37-E 36-F、37-F	遺構の位置
神園番号	第11図	図版番号	9・下	
法	長 軸	300cm	短 軸	
	壁 高	0~20cm	平面形	
量	面 横	7.29m ²	主軸方向	
確認面	第III層黄褐色上面			
重複関係	S K(F) 012廃棄後に構築されている。			
壁				
床 面	小石・礫を多く含む床面であり、そのため凹凸が見られる。貼床は認められない。			
ピット	確認できなかった。			
火	地床炉で床面のはば中央にある。			
遺物出土状況				
備 考				

第8表 S I 008竪穴住居跡観察表					遺構の位置	
遺構名		S I 008	検出地区	38-F、39-F 38-G、39-G		
挿図番号		第12図	図版番号	10・上、下 12・上		
法		長 軸	395cm	短 軸	(37.0)cm	
量		壁 高	30~40cm	平面形	円 形	
面 積		(11.62)m ²	主軸方向	—	—	
確認面		第III層黄褐色土上面				
重複関係		S K(F) 013によって切られている。				
壁		西壁は斜面削平のため存在しないが、他壁は30cm~40cmと良く残っており、床面より50°~垂直に近い角度で立ち上がる。				
床 面		床面直上4カ所で焼土を確認する。床はゆるやかな凹凸を示し、軟弱である。				
ピット		壁に沿ってP ₁ (19)、P ₂ (17)が存在する。				
炉		床面に2基の石組炉A・Bが存在する。 石組炉A——住居跡中央よりわずかに北西よりに存在する。炉西側に8個の川原石の配列が残る。他は抜きとられており、その抜き取り痕がみられる。 石組炉B——住居跡中央よりわずかに北東よりに位置する。11cm~41cm大の川原石10個を用い方形に組んでいる。				
遺物出土状況		埋土中より数点の土器出土。				
備 考						



第12図 S I 008 穫穴住居跡およびSK(F) 013 フラスコ状ピット実測図

第9表 SK土壤観察表(1)

	SK 003	SK 004	SK 007
挿 団	第 13 団	第 13 団	第 13 団
図 版			
検 出	31-H	37-I	26-F
確 認	第III層黄褐色土上面	第III層黄褐色土上面	第III層黄褐色土上面
平 面 形	楕円形	楕円形	円形
法			
長 軸	150cm	126cm	116cm
短 軸	116cm	101cm	110cm
深 さ	44cm	39cm	42cm
量 面 積	1.51m ²	0.96m ²	0.95m ²
遺 物			
備 考			
	SK 008	SK 009	SK 011
挿 団	第 13 団	第 14 団	第 14 団
図 版		12・下、13・上	
検 出	26-F、26-G	26-G	27-H
確 認	第III層黄褐色土上面	第III層黄褐色土上面	第III層黄褐色土上面
平 面 形	不整円形	円形	不整形
法			
長 軸	115cm	(135)cm	142cm
短 軸	109cm	130cm	116cm
深 さ	60cm	44cm	45cm
量 面 積	0.94m ²	1.44m ²	1.17m ²
遺 物			
備 考			
	SK 012	SK 013	SK 014
挿 団	第 14 団	第 14 団	第 15 団
図 版			13-下
検 出	26-H、27-H	25-G、26-G	31-F、31-G
確 認	第III層黄褐色土上面	第III層黄褐色土上面	第III層黄褐色土上面
平 面 形	不整形	円形	台形
法			
長 軸	140cm	80cm	354cm
短 軸	117cm	(80)cm	260cm
深 さ	62cm	33cm	30cm
量 面 積	1.06m ²	0.5m ²	7.69m ²
遺 物			
備 考			
	SK 015	SK 016	SK 017
挿 団	第 15 団	第 15 団	第 18 団
図 版			
検 出	42-Y	44-Z	43-Z
確 認	第III層明黄褐色土上面	第III層明黄褐色土上面	SK(F) 014號面
平 面 形	楕円形		
法			
長 軸	208cm	147cm	50cm
短 軸	108cm	140cm	37cm
深 さ	66cm	67cm	
量 面 積	1.86m ²	1.71m ²	0.17m ²
遺 物			
備 考			

第10表 SK土壠観察表(2)

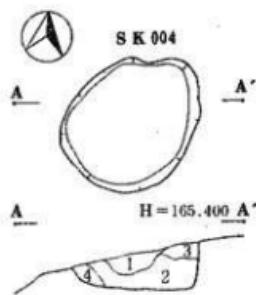
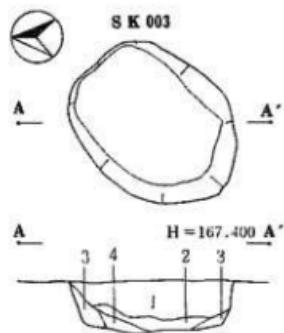
	SK(F) 001	SK(F) 002	SK(F) 003
種 国	第 16 図	第 7 図	第 16 図
検 出	35-H、35-I	37-G	36-I
確 認	第III層黄褐色土上面	第III層黄褐色土上面	第III層黄褐色土上面
平 面 形	不整円形	不整円形	不整円形
長 軸	147cm	86cm	163cm
短 軸	115cm	78cm	134cm
頭部径	97cm	81cm	140cm
深 さ	132cm	124cm	112cm
底面積	3.65m ²	1.75m ²	2.63m ²
体 積	1.13m ³	1.33m ³	1.86m ³
遺 物			
備 考			
	SK(F) 004	SK(F) 005	SK(F) 006
種 国	第 16 図	第 9 図	第 9 図
検 出	14-I		14-F
確 認	37-E、37-F	38-E、38-F	37-G、38-G
平 面 形	楕円形	円 形	不整円形
長 軸	137cm	104cm	100cm
短 軸	127cm	104cm	81cm
頭部径	114cm	94cm	81cm
深 さ	178cm	127cm	142cm
底面積	2.30m ²	2.19m ²	1.83m ²
体 積	2.28m ³	1.62m ³	1.29m ³
遺 物			
備 考	南側脚部に三ヶ月状の テラスをもつてゐる	S I 005側面壁を切って 構築されている	S I 006側面壁を切って 構築されている
	SK(F) 007	SK(F) 008	SK(F) 009
種 国	第 17 図	第 17 図	第 17 図
検 出	38-G	37-G	38-G
確 認	第III層黄褐色土上面	第III層黄褐色土上面	第III層黄褐色土上面
平 面 形	不整円形	不整円形	不整円形
長 軸	95cm	101cm	113cm
短 軸	81cm	83cm	98cm
頭部径	80cm	74cm	98cm
深 さ	140cm	141cm	125cm
底面積	2.38m ²	1.42m ²	1.65m ²
体 積	1.45m ³	1.22m ³	1.16m ³
遺 物	埋土第1層・2層中より 土器2点が出土した		
備 考			本遺跡で一番頻度のある 部分に構築されている

第11表 SK土壤観察表(3)

	SK(F) 010	SK(F) 011	SK(F) 012
挿 図	第 9 図	第 17 図	第 11 図
図 版	15—上		9—F
検 出	37—F、38—F	25—E	36—E、36—F
確 認	SI 005床面	第III層黄褐色土上面	SI 007床面
平 面 形	不整円形	円 形	円 形
法	長 軸	82cm	120cm
	短 軸	74cm	112cm
	頸部径	65cm	116cm
	深 さ	125cm	82cm
量	底面積	2.75m ²	1.01m ²
	体 積	1.57m ³	0.87m ³
遺 物	SI 005・SK(F) 006と重複する sondage標本はSK(F) 010 → SI 005・SK(F) 006である。 ピット底面面積に188× 160=320cm ² と0.32×300cmの二 枚ピットが存在する。		
備 考	SK(F) 013	SK(F) 014	SK(F) 015
挿 図	第 12 図	第 18 図	第 18 図
図 版	10—下	15—下	16—上
検 出	39—F	43—Z、44—Z	43—Z
確 認	SI 008床面	第III層明褐色土上面	SK(F) 014床面
平 面 形			
法	長 軸	70cm	210cm
	短 軸	64cm	180cm
	頸部径	64cm	187cm
	深 さ	83cm	90cm
量	底面積	1.19m ²	3.89m ²
	体 積	0.61m ³	3.50m ³
遺 物	腐土中より鐵文小物が出 た。		
備 考	SI 008と重複する 4個のプラスコ状ピットと1 個の上底が床面に存在する		
	SK(F) 016	SK(F) 017	SK(F) 018
挿 図	第 18 図	第 18 図	第 18 図
図 版			
検 出	43—Z	43—Z、44—Z	43—Z
確 認	SK(F) 014床面	SK(F) 014床面	SK(F) 014床面
平 面 形			
法	長 軸	60cm	100cm
	短 軸	54cm	
	頸部径	58cm	104cm
	深 さ	28cm	47cm
量	底面積	0.27m ²	1.45m ²
	体 積	0.07m ³	0.48m ³
遺 物			
備 考			

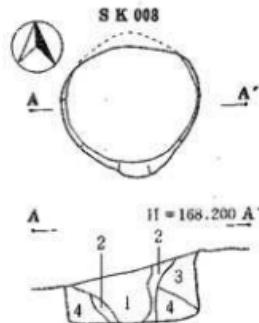
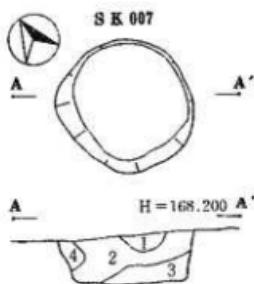
第12表 S.K.土壤頻度表(4)

	S K(F) 019	S K(F) 020	S K(F) 021
持 団	第 19 団	第 6 団	第 19 団
図 版			
検 出	43-Y	34-11, 34-1 35-11, 35-1	35-I
確 認	第III層明黄褐色土上面	S I 002-B 覆土上面	第III層黄褐色土上面
平 面 形		楕円形	
長 軸	105cm	142cm	190cm
短 軸	95cm	130cm	(150cm)
頸部径		103cm	
深 さ	36cm	140cm	110cm
量 底面積	1.38m ²	1.26m ²	
体 積	0.41m ³	0.94m ³	
遺 備 考			地主中より繩文土器片数 点出土
	S K(F) 022	S K(F) 023	
持 団	第 19 団	第 19 団	
図 版			
検 出	38-F	26-G, 26-H	
確 認	第III層黄褐色土上面	第III層黄褐色土上面	
平 面 形			
長 軸	146cm	100cm	
短 軸	136cm	82cm	
頸部径	94cm	87cm	
深 さ	118cm	62cm	
量 底面積	1.02m ²	0.92m ²	
体 積	0.70m ³	0.30m ³	
遺 備 考			
	S K(T) 001	S K(T) 002	S X 001
持 団	第 20 団	第 20 団	第 20 団
図 版	17-上	17-下	
検 出	30-E	29-G, 29-H	37-E, 38-E
確 認	第III層黄褐色土上面	第III層黄褐色土上面	第III層黄褐色土上面
平 面 形	溝状	溝状	「L」字状
長 軸	316cm	303cm	301cm
短 軸	70cm	90cm	197cm
頸部径			
深 さ	100cm	99cm	67cm
量 底面積			
体 積			
遺 備 考		地主上部より石器1点出 出土	地主中より繩文土器片数 点出土



編號	上色	名
1	10YR 4/2.5 黑褐色	
2	10YR 4/2 黑色	
3	10YR 4/2.5 墓褐色	
4	10YR 4/2.5 黄褐色	

編號	上色	名
1	10YR 4/2 黑褐色	
2	10YR 4/2.5 黑褐色	
3	2.5 YR 4/2.5 黑褐色	
4	10YR 4/2 黑色	

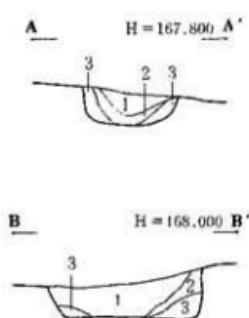
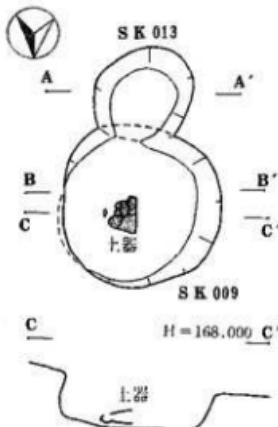


編號	上色	名
1	10YR 4/2 黑褐色	
2	10YR 4/2 黑色	
3	10YR 4/2.5 黑褐色	
4	3 黑	

編號	上色	名
1	10YR 4/2 黑色	
2	10YR 4/2.5 黑褐色	
3	10YR 4/2.5 黑褐色	
4	10YR 4/2 黑褐色	

0 2m

第13図 SK 003・004・007・008 土壌実測図



SK 009

編號		土 色	備 考
1	10YR 5/4 黑 色		
2	10YR 5/2 黑 暗 色		
3	10YR 4/2 暗 棕 色		

SK 011

編號		土 色	備 考
1	10YR 5/4 黑 棕 色		
2	10YR 5/2 黑 棕 色		
3	10YR 4/2 棕 色		

SK 012

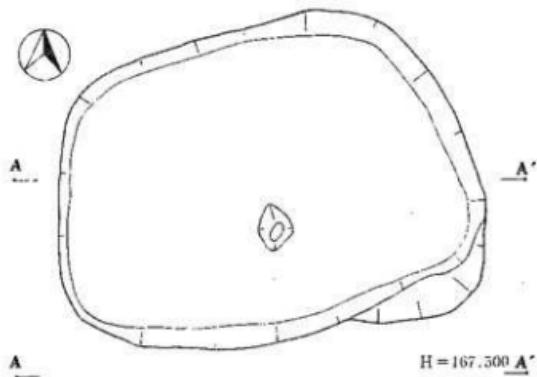
編號		上 色	備 考
1	10YR 5/4 黑 棕 色		
2	10YR 5/2 黑 棕 色		
3	10YR 4/2 棕 色		



0 1 2 m

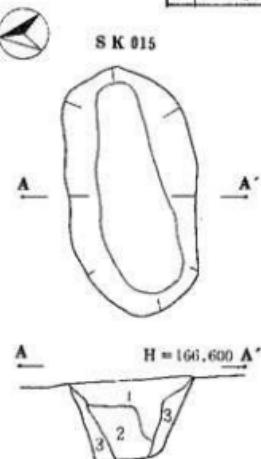
第14図 SK 009-011-012-013 土壤実測図

SK 014

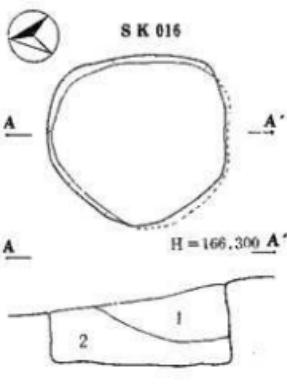


層號	土色	標	考
1	10YR 5/2 黑褐色		
2	10YR 5/4 暗褐色		
3	10YR 5/6 黑色		

SK 015



SK 016

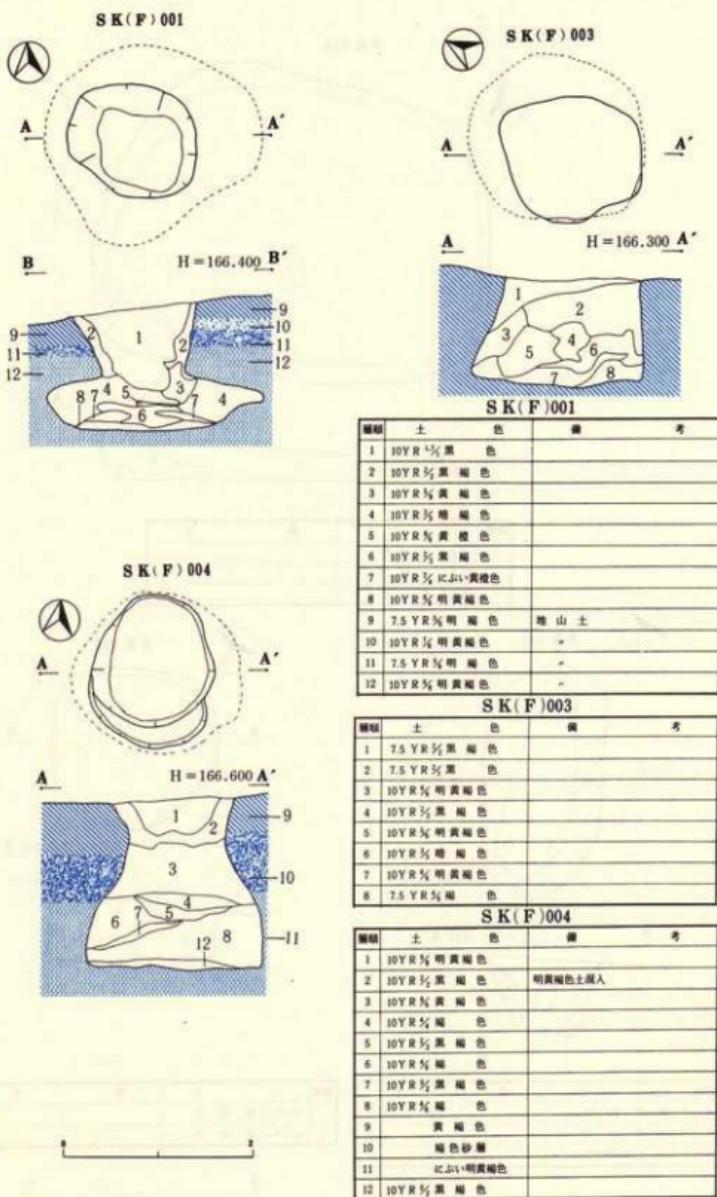


層號	上	色	面	考
1	10YR	黑褐色		
2	10YR	深褐色		
3	10YR	2.5Y5/6 黑褐色		

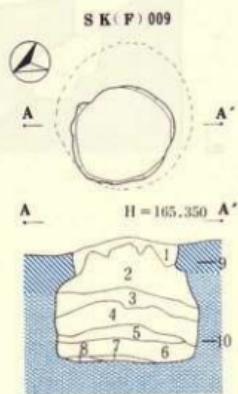
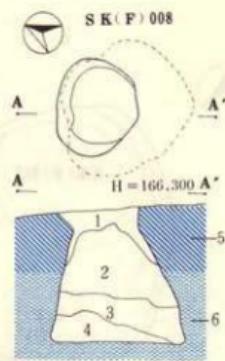
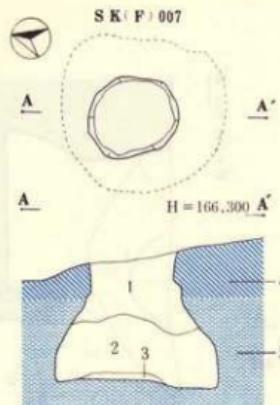
層號	上	色	面	考
1	10YR	黑褐色		
2	10YR	2.5Y5/6 黑褐色		



第15図 SK 014・015・016 土壤実測図



第16図 SK(F)001-003-004 フラスコ状ピット実測図



層組	土色	備考
1	10YR 5/4 黒褐色	
2	10YR 5/6 に近い黄褐色	
3	10YR 5/6 黄褐色	
4	褐色	
5	に近い黄褐色	

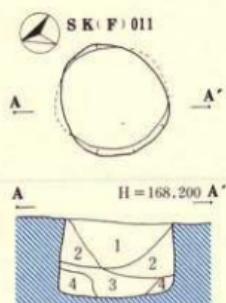
S K(F) 008

層組	土色	備考
1	10YR 5/4 黒褐色	
2	10YR 5/6 褐色	
3	10YR 5/6 黄褐色	
4	10YR 5/4 黑褐色	
5	褐色 砂質	
6	に近い黄褐色	

S K(F) 009

層組	土色	備考
1	10YR 5/4 黒褐色	に近い黄褐色混入
2	10YR 5/6 に近い黄褐色	
3	10YR 5/6 黄褐色	
4	10YR 5/6 褐色	
5	10YR 5/6 黑褐色	
6	10YR 5/4 黑褐色	炭化物混入
7	10YR 5/6 黄褐色	炭化物混入
8	10YR 5/4 黑褐色	炭化物混入
9	黄褐色	
10	に近い黄褐色	

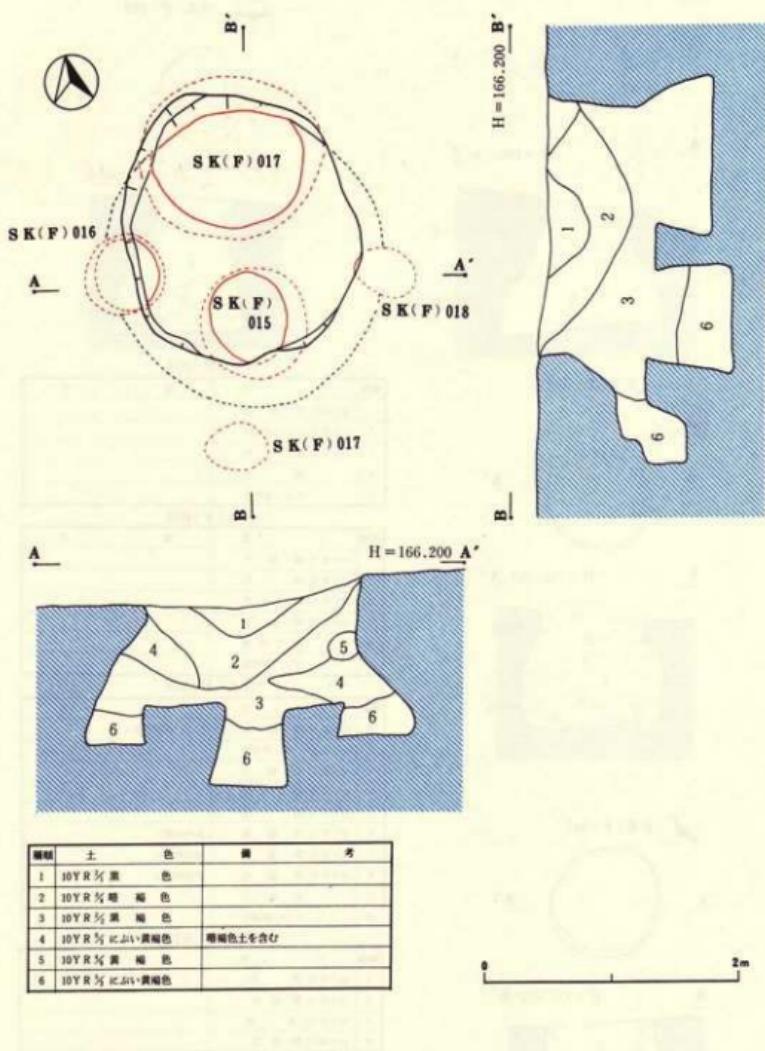
S K(F) 011



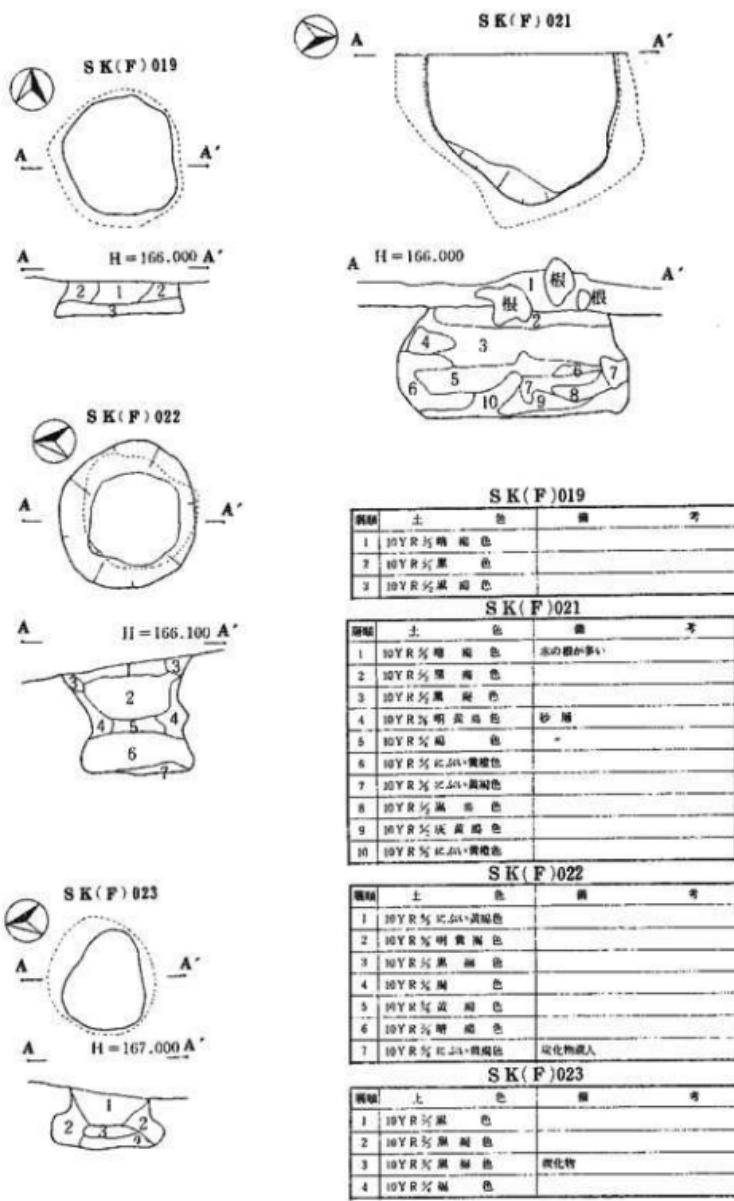
層組	土色	備考
1	10YR 5/4 黒褐色	
2	10YR 5/6 黑褐色	
3	10YR 5/6 黑褐色	
4	10YR 5/4 黑褐色	

0 2m

第17図 S K(F) 007-008-009-011 フラスコ状ピット実測図

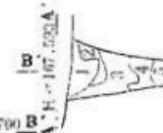
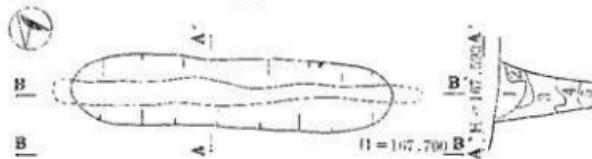


第18図 SK(F) 014-015-016-017-018 フラスコ状ピットおよびSK 017 土壌実測図

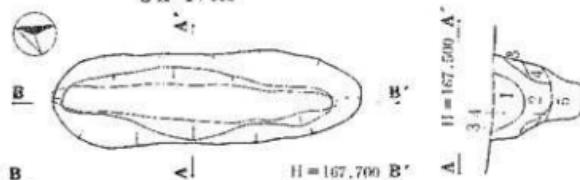


第19図 SK(F) 019-021-022-023 フラスコ状ピット実測図

S K (T) 001



S K (T) 002



S X 001

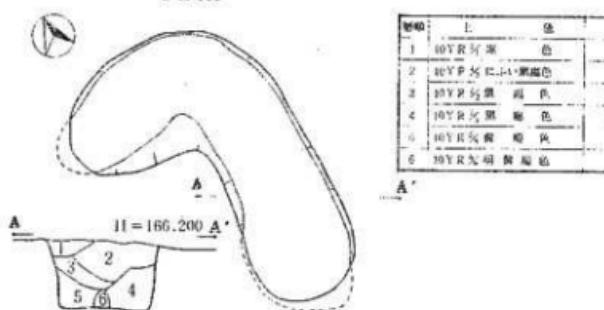
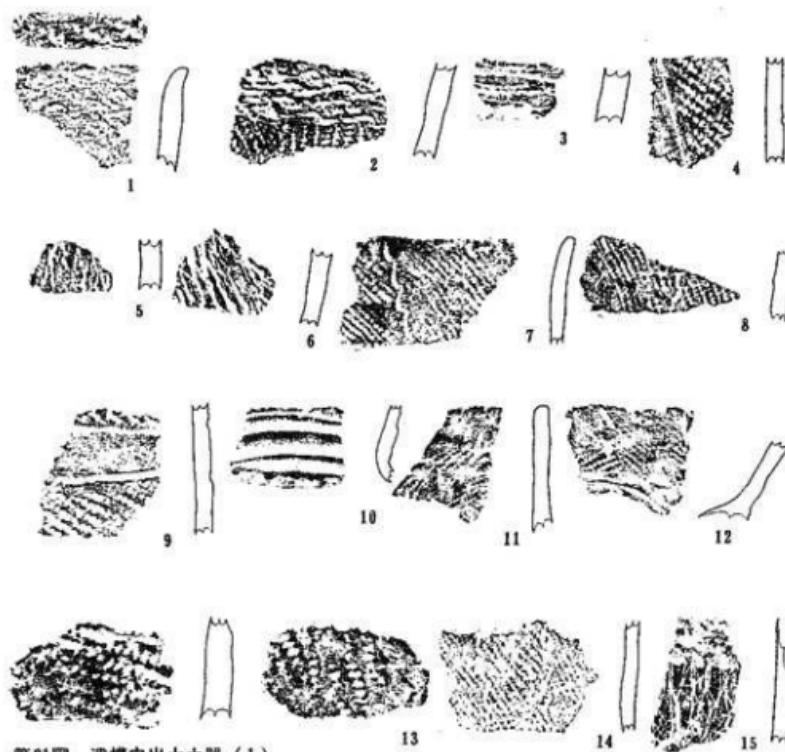


図20 S K (T) 001・002 Tビット・S X 001 性格不明透構測定図

(2) 検出遺物

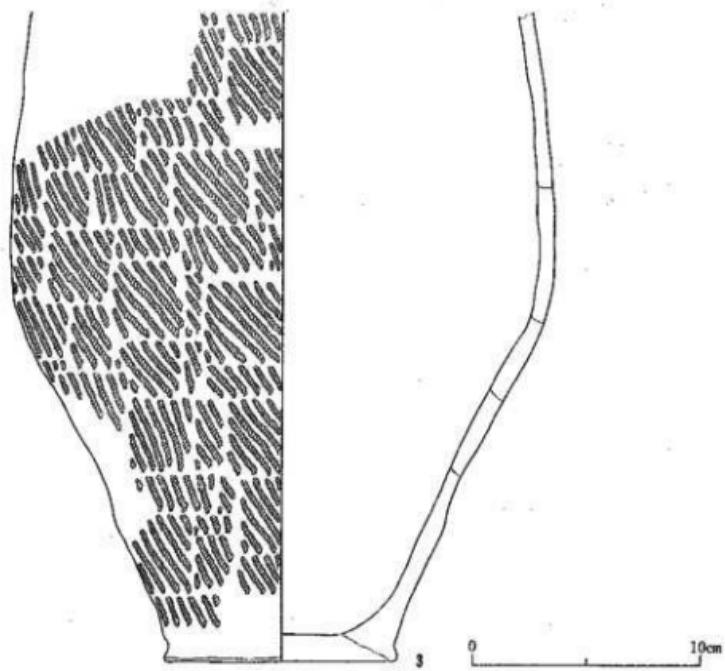
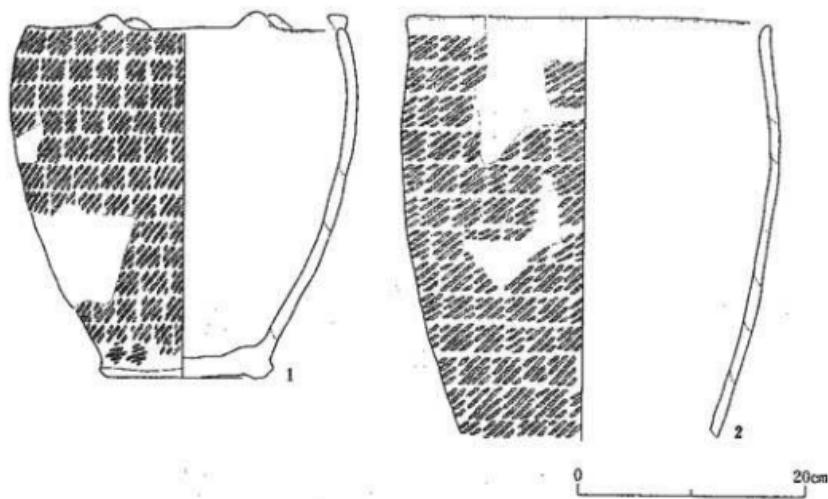


第21図 遺構内出土土器 (1)

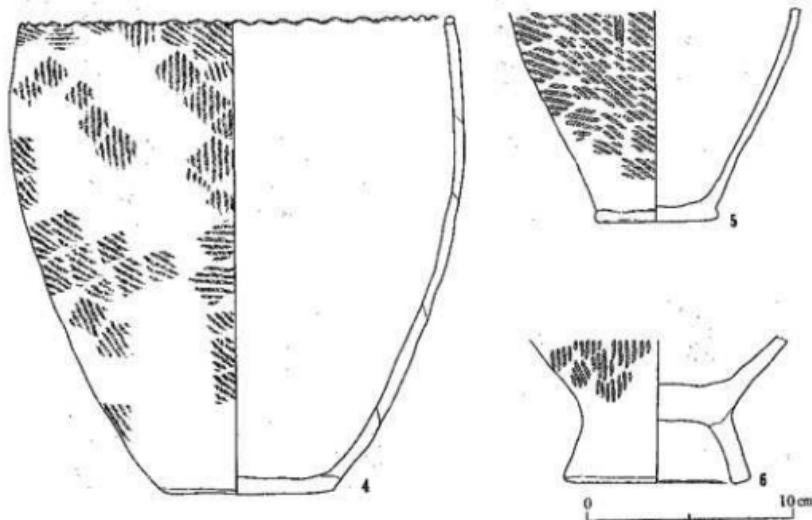
第13表 土器観察表(1)

0 10cm

番 号	出土地区	外 面		内 面		粘 土	備 考
		文 様	色 調	文 様	色 調		
21-1	S I 001	R L 繩文・縦条体回転文	灰青褐色	口唇部一横文压痕	浅黄橙色	鐵錫混入	
21-2	S I 001	R L 繩文・縦条体回転文	灰黃褐色		灰黃褐色	鐵錫混入	
21-3	S I 001	縦条体回転文(L 2本→縦)	にぶい赤褐色		にぶい褐色	鐵錫混入	
21-4	S I 001	L R 繩文→沈線→磨消	にぶい黄褐色		にぶい黄褐色		
21-5	S I 003	R 縦条文	にぶい黄褐色		灰黃褐色		
21-6	S I 003	R 縦条文	にぶい黄褐色		にぶい黄褐色		
21-7	S I 008	L R 繩文(結束)	灰白色		褐灰色		
21-8	S I 008	L R 繩文(結束)	淡黄色		にぶい黄褐色		
21-9	S I 008	L R 繩文→沈線→磨消	明赤褐色		にぶい褐色		
21-10	S K 009	沈 線	にぶい褐色		にぶい褐色		
21-11	S K P 003	L 繩 文	にぶい褐色		にぶい褐色		
21-12	S K P 003	L 繩文→沈線(底辺部)	にぶい褐色		にぶい褐色		
21-13	S K P 007	L R 繩文	にぶい黄褐色	L R 繩文	褐灰色		
21-14	S K P 013	L R 繩文(結束)	淡黄橙色		淡黄色		
21-15	S X 02	側面扶助水文(R)	灰褐色		にぶい褐色		



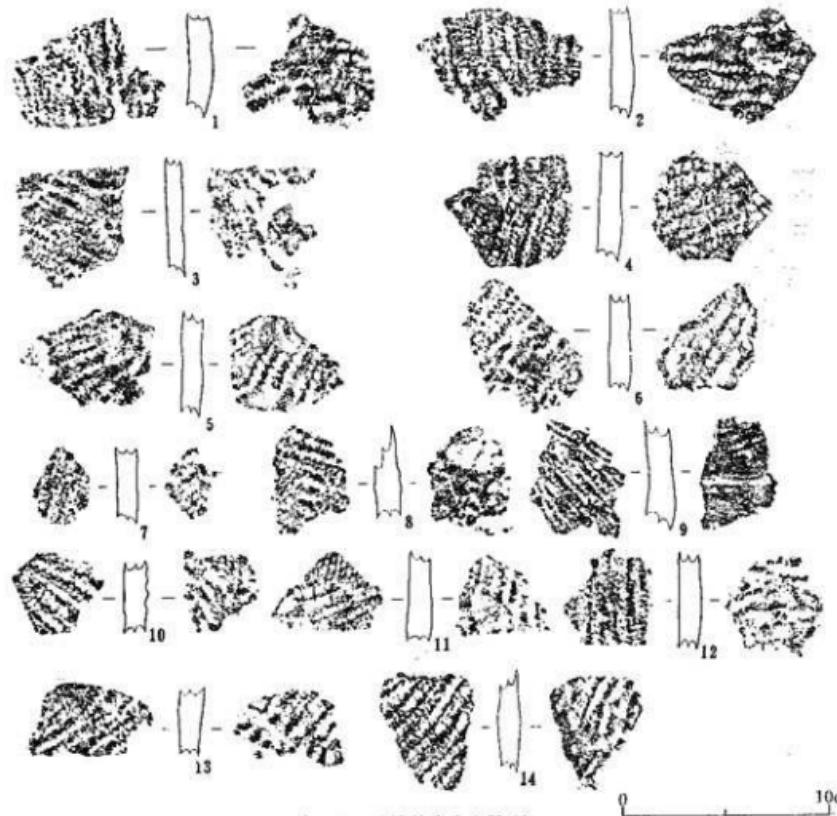
第22図 S I 001-003-004 住居跡出土土器 (2)



第23図 SK 009 土壌・SK(F) 014・021 フラスコ状ピット出土土器実測図(3)

第14表 土器観察表(2)

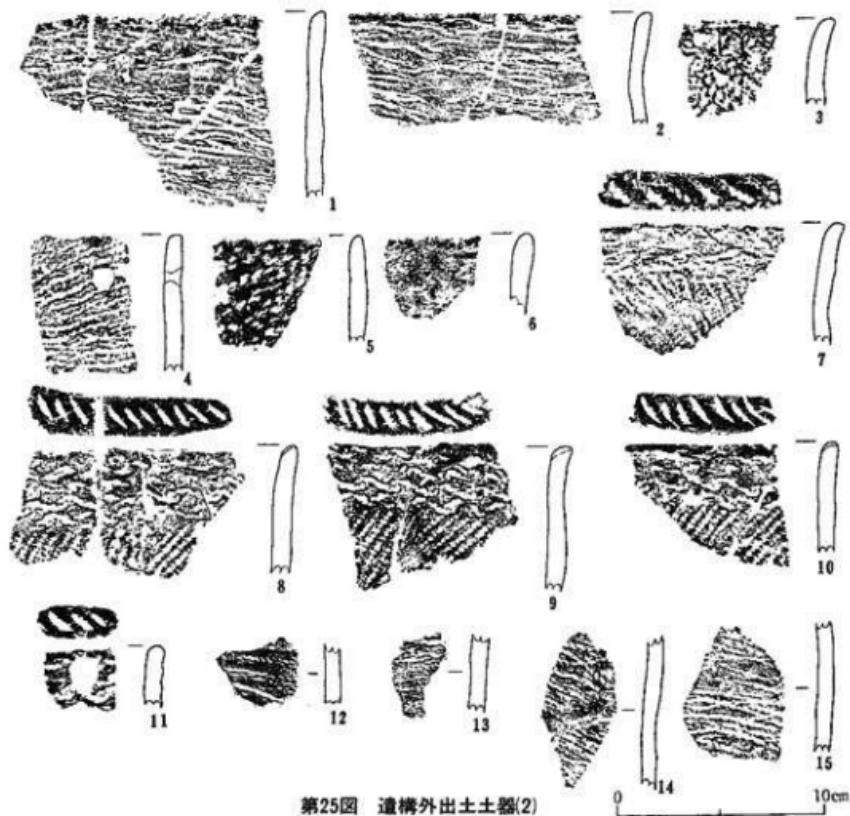
標 番 号	出土地区	外 面		内 面		胎 土	備 考
		文 様	色 調	文 様	色 調		
23-1	S I 001	L R 織文	にふい黄褐色				
23-2	S I 005	L R 織文	にふい黄褐色				
23-3	S I 003	R L 織文	にふい黄褐色				
23-4	S K 009	R L 織文	黒褐色				
23-5	S K 002	L R 織文	黒褐色				
23-6	S K(F) 014	R L 織文	浅黄褐色				



第24図 遺構外出土土器(1)

第15表 土器観察表(3)

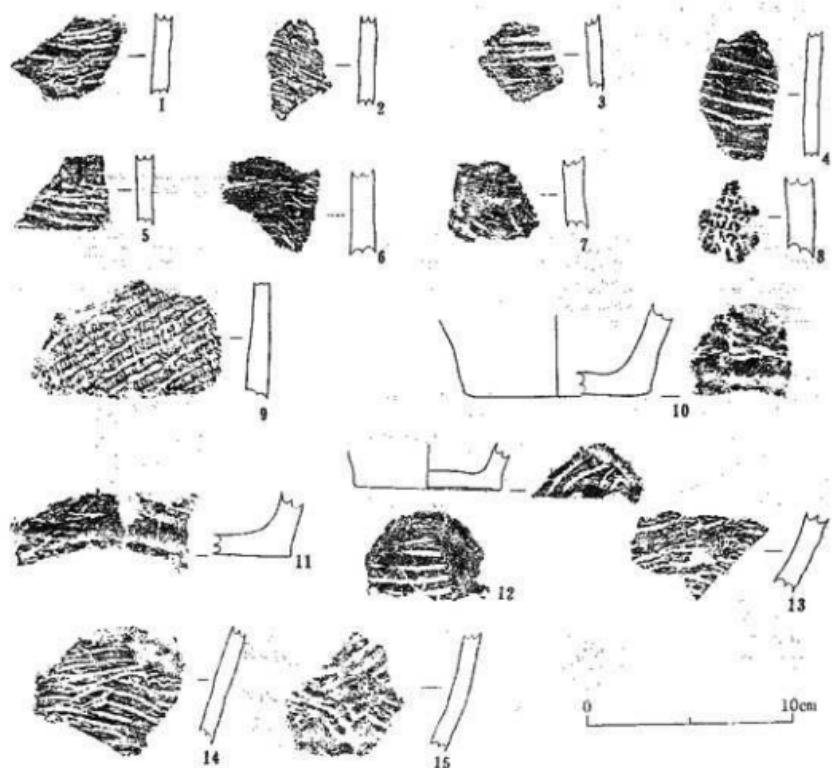
排 番	國 号	出土地区	外 面		内 面		胎 土	備 考
			文 様	色 調	文 様	色 調		
24-1	35-G	LR繩文	橙色	I.R繩文	灰褐色	砂雜混入		
24-2	31-H	LR繩文	黃褐色	LR繩文	灰黃褐色	砂雜混入		
24-3	35-G	LR繩文	灰黃褐色	LR繩文	暗灰色	砂雜混入		
24-4	35-G	LR繩文	にぼい黄褐色	LR繩文	灰黃褐色	砂雜混入		
24-5	31-H	LR繩文	橙色	LR繩文	灰黃褐色	砂雜混入		
24-6	31-H	LR繩文	にぼい黄褐色	LR繩文	灰黃褐色	砂雜混入		
24-7	31-H	LR繩文	にぼい黃粉色	LR繩文	暗灰色	砂雜混入		
24-8	31-H	LR繩文	橙色	LR繩文	灰黃褐色	砂雜混入		
24-9	32-I	LR繩文	にぼい橙色	LR繩文	灰褐色	砂雜混入		
24-10	31-H	LR繩文	にぼい褐色	LR繩文	灰褐色	砂雜混入		
24-11	31-H	LR繩文	にぼい褐色	LR繩文	にぼい黄褐色	砂雜混入		
24-12	31-H	LR繩文	にぼい橙色	LR繩文	褐色	砂雜混入		
24-13	31-H	LR繩文	にぼい橙色	LR繩文	褐色	砂雜混入		
24-14	31-H	LR繩文	にぼい橙色	I.R繩文	黑褐色	砂雜混入		



第25図 遺構外出土土器(2)

第16表 土器観察表(4)

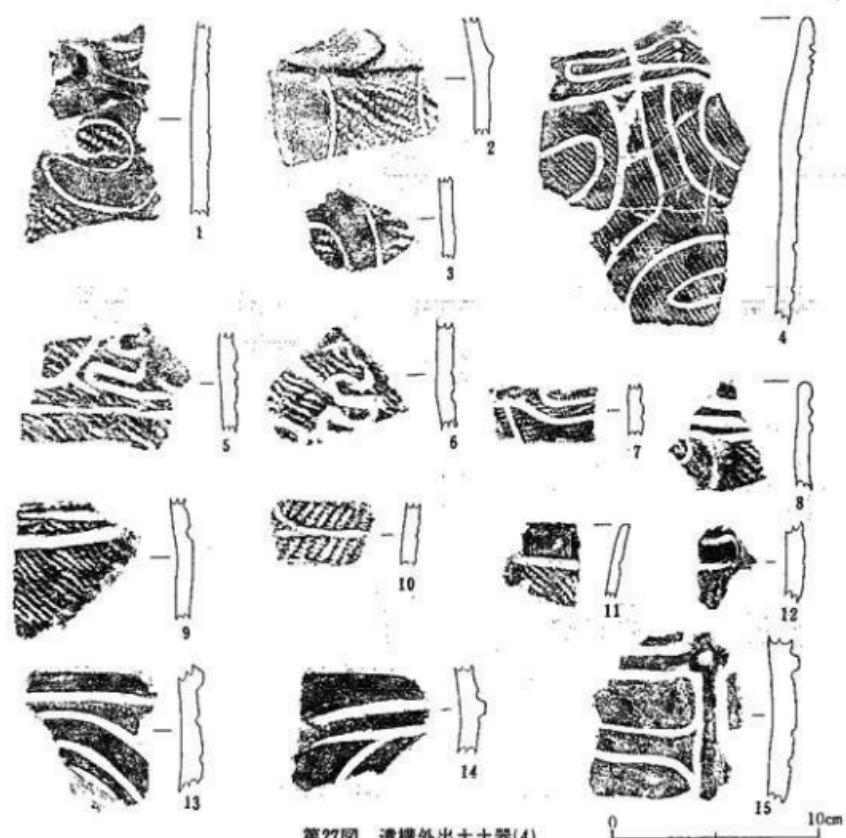
標 番 号	出土地区	外 面		内 面		粘 土	備 考
		文 様	色 調	文 様	色 調		
25-1	36-G	縦条体回転文II	灰黄褐色			にぶい黄褐色	
25-2	34-C	縦条体回転文I	灰褐色			にぶい黄褐色	
25-3	36-H	L.R.纏文	にぶい橙色			褐灰色	
25-4	-	北側斜面	にぶい褐色			褐灰色	
25-5	35-G	縦条体回転文III	にぶい赤褐色			黒褐色	
25-6	36-G	縦条体回転文IV	にぶい黄褐色			灰白色	
25-7	36-G	綾紹文、L.R.纏文	灰黄褐色	口唇部-織文圧痕		褐灰色	
25-8	35-G	綾紹文、R.L.纏文	にぶい褐色	口唇部-刻目		褐色	
25-9	35-G	綾紹文、R.L.纏文	にぶい褐色	口唇部-刻目		にぶい赤褐色	
25-10	35-G	綾紹文、R.L.纏文	にぶい褐色	口唇部-刻目		にぶい褐色	
25-11	35-G	不 明	にぶい赤褐色	口唇部-刻目		にぶい赤褐色	
25-12	36-G	縦条体回転文	にぶい褐色			灰褐色	
25-13	36-G	縦条体回転文	にぶい黄褐色			黒褐色	
25-14	36-G	縦条体回転文	灰褐色			灰白色	
25-15	36-G	縦条体回転文	にぶい橙色			灰黄褐色	



第26図 遺構外出土土器(3)

第17表 土器観察表(5)

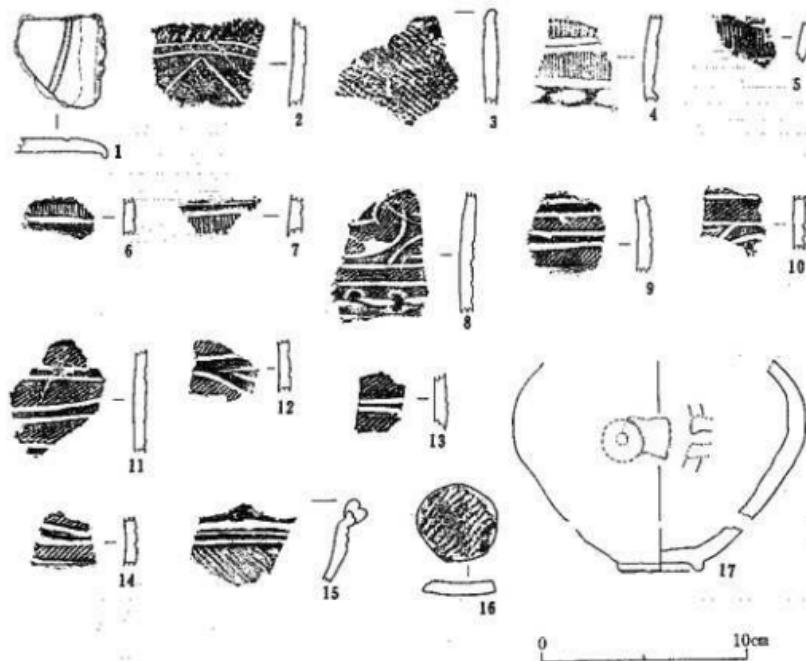
番号	出土地区	外面		内面		附 土 著 考
		文様	色調	文様	色調	
26-1	35-G	縞条体回転文	にぶい黄褐色			
26-2	36-G	縞条体回転文	灰褐色			
26-3	35-G	縞条体回転文	にぶい褐色			
26-4	36-G	縞条体回転文	にぶい黄褐色			
26-5	35-G	縞条体回転文	にぶい褐色			
26-6	34-F	不整撲紋				
26-7	36-G	不整撲紋	明赤褐色			
26-8	39-I	粗縞文	にぶい褐色			
26-9		直前後合撲文				
26-10	35-G	不整撲文	明赤褐色			
26-11	36-G	不整撲文	橙色			
26-12	35-G	縞条体回転文(底部も同じ)	にぶい褐色			
26-13	37-F	縞条体回転文(底部も同じ)				
26-14	35-G	縞条体回転文(底部も同じ)	灰黄褐色			
26-15	35-G	縞条体回転文(底部も同じ)	にぶい褐色			



第27図 造構外出土土器(4)

第18表 土器観察表(6)

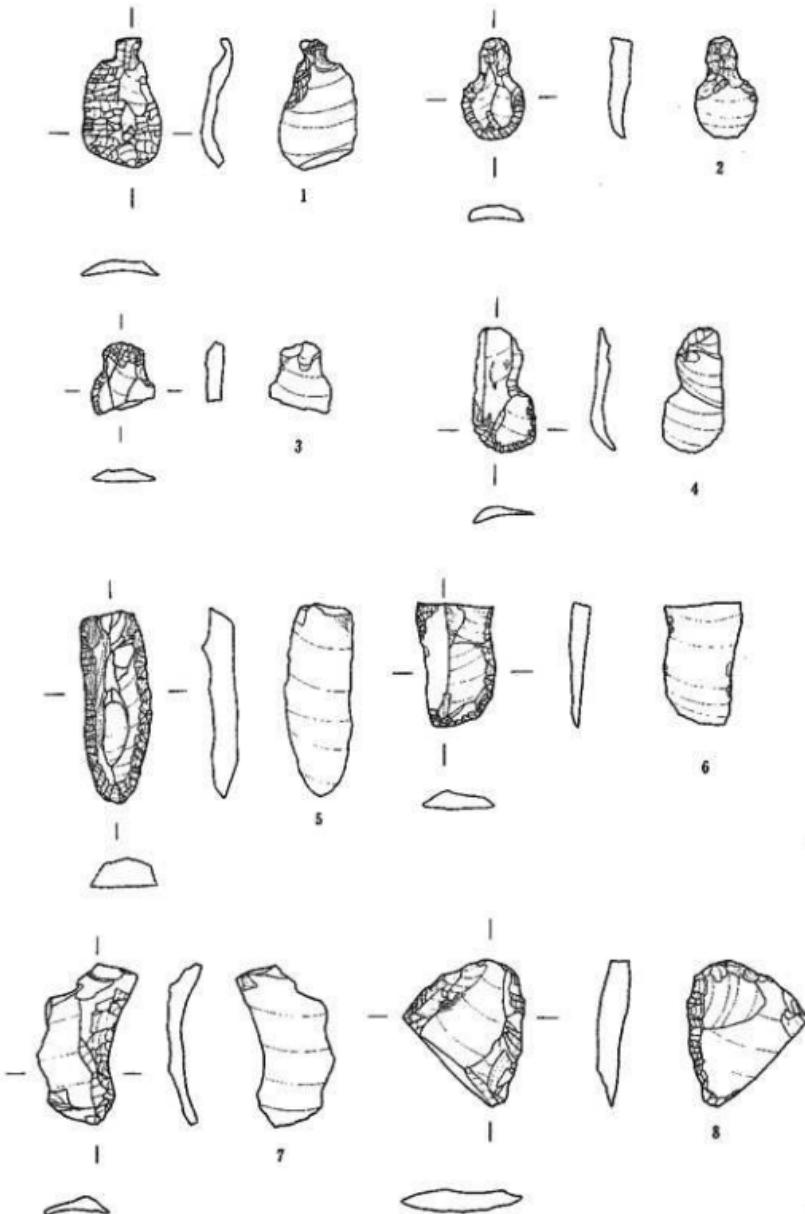
標 番 号	出 土 地 区	外 面		内 面		胎 土	備 考
		文 様	色 調	文 様	色 調		
27-1	36-G	隆線→L.R.縦文→沈線→磨消	明赤褐色	に赤い橙色			
27-2	39-F	隆線→L.R.縦文→沈線→磨消	明赤褐色	に赤い黄褐色			
27-3	38-E	L.R.縦文→沈線→磨消	明赤褐色	に赤い黄褐色			
27-4	S 1005	L.B.縦文→沈線・刺突	に赤い黄褐色	灰黄褐色			
27-5	27-F	L.縦文→沈線	に赤い黄褐色	浅黄褐色			
27-6	27-F	L.縦文→沈線	淡黄褐色	浅黄褐色			
27-7	30-G	R.L.縦文→沈線	に赤い赤褐色	に赤い赤褐色			
27-8	29-E	L.R.縦文→沈線	に赤い橙色	浅黄褐色			
27-9	27-F	L.縦文→沈線	に赤い黄褐色	浅黄褐色			
27-10	36-G	R.L.縦文→沈線	に赤い黄褐色	浅黄褐色			
27-11	37-F	R.L.縦文→沈線→磨消	に赤い褐色	灰白色			
27-12	37-F	L.R.縦文→沈線→磨消	に赤い褐色	浅黄褐色			
27-13	北側斜面	隆線→沈線→磨消	に赤い黄褐色	に赤い褐色			
27-14	35-G	隆線・刺突→沈線→磨消	に赤い黄褐色	に赤い褐色			
27-15	35-G	隆線・刺突→沈線→磨消	に赤い黄褐色	灰黄褐色			



第28図 造構外出土土器・土製品(5)

第19表 土器観察表(7)

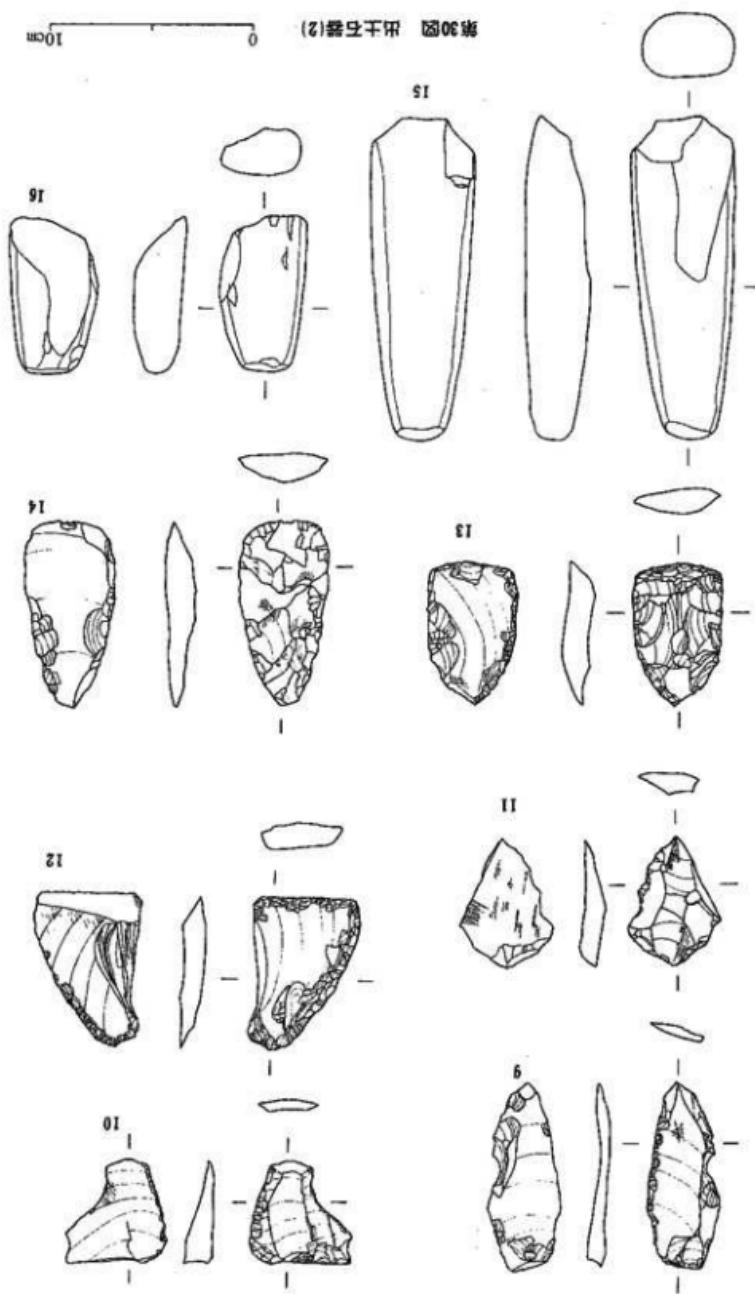
博 物 館 番 号	出 地 土 区	外 面		内 面		胎 土	備 考
		文 様	色 調	文 様	色 調		
28-1		沈線→磨消	にふい黄褐色				蓋形土器
28-2		L R 繩文→沈線→磨消	灰黃褐色				
28-3		R L 繩文(結束)	褐色				
28-4		鶴目→沈線→刺突	にふい褐色				
28-5	34-F	鶴目→沈線	にふい橙色				
28-6	35-G	刺目→沈線	褐色				
28-7	34-F	鶴目→沈線	灰黃褐色				
28-8	33-E	沈線→點燃→L R 繩文→磨消	にふい褐色				
28-9	33-E	L R 繩文→沈線→磨消	深赤褐色				
28-10	34-F	L R 繩文→沈線→磨消	にふい褐色				
28-11	34-F	L R 繩文→沈線→磨消	にふい褐色				
28-12	34-F	L R 繩文→沈線→磨消	にふい橙色				
28-13	35-C	L R 繩文→沈線→磨消	棕色				
28-14	34-F	L R 繩文→沈線→磨消	にふい橙色				
28-15		R L 繩文→沈線					
28-16	35-G	L R 繩文	にふい赤褐色				円盤状土製品 注口土器
28-17		無 文					

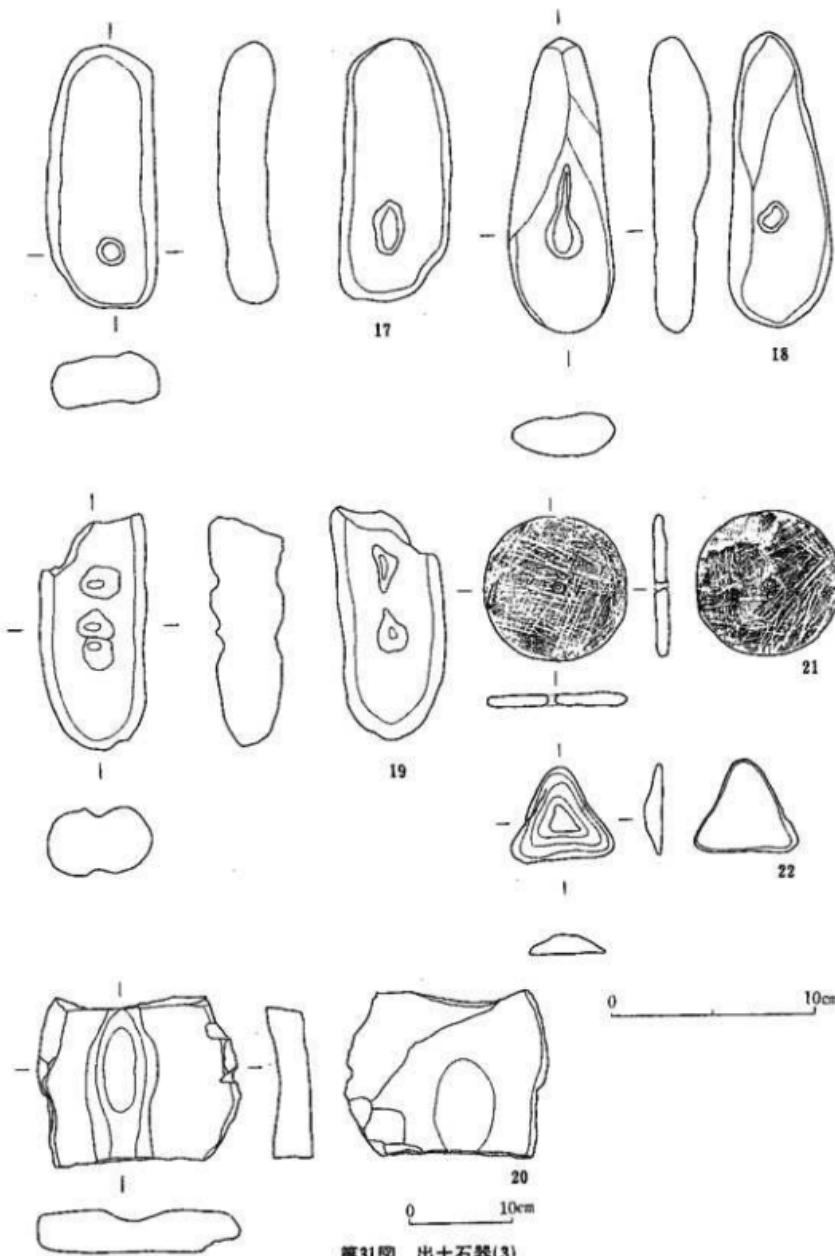


第29図 出土石器(1)

10cm

第30圖 出土石器(2) 0 10cm





第31図 出土石器(3)

第20表 遺構内・外出土石器観察表

擇番 図版 号	図版 番号	名 称	出土地域	法 量 (cm)			重量 (g)	石 質	備 考
				最大長	最大幅	最大厚			
29-1	24	石 ピ	O-G	4.7	2.8	0.7	10	頁 岩	
29-2	24	石 ピ	31-E	3.7	2.7	0.7	6	頁 岩	アスファルト付着
29-3	24	石 ピ	表 採	(2.4)	2.2	0.6	(5)	頁 岩	刃部欠損
29-4	24	搔 器	S I 005炉	4.5	2.2	0.5	6	頁 岩	アスファルト付着
29-5	24	搔 器	表 採	7.0	2.2	1.0	25	頁 岩	
29-6	24	搔 器	38-G	4.5	2.6	0.7	10	頁 岩	
29-7	24	搔 器	29-G	5.9	2.3	0.8	17	頁 岩	
29-8	24	搔 器	36-G	5.4	4.4	1.0	24	頁 岩	
30-9	24	搔 器	34-F	9.1	3.5	0.9	29	頁 岩	
30-10	24	搔 器	S I 005床	5.0	4.9	1.3	22	頁 岩	
30-11	24	搔 器	表 採	6.3	4.5	1.1	25	頁 岩	
30-12	24	石 瓶	S K(T) 002	7.6	5.2	1.1	25	頁 岩	
30-13	24	石 瓶	D 区	7.1	4.2	1.3	45	頁 岩	
30-14	24	石 瓶	D区、表採	9.0	4.3	1.4	61	頁 岩	
30-15	24	石 斧	S I 006	(15.8)	5.0	3.3	406	凝灰岩	刃部欠損
30-16	24	石 斧	S I 002P5	(7.7)	4.1	2.3	120	凝灰岩	刃部欠損
31-17	24	凹 石	34-G	24.5	5.1	3.0	223	凝灰岩	
31-18	24	凹 石	36-G	13.0	5.3	2.5	275	凝灰岩	
31-19	24	凹 石	表 採	11.2	5.1	3.2	284	凝灰岩	
31-20	24	石 盆	表 採	26.0	16.5	4.1		凝灰岩	
31-21	24	円盤状 石製品	S K 014	7.0	6.8	0.6	41	泥 岩	
31-22	24	三 角 石製品	S K 014	4.5	4.8	1.0	20	泥 岩	

遺構について

ア 積穴住居跡

積穴住居跡（以下、住居跡と記す）は、B区から8棟検出されている。これらの住居跡は、炉の形態から2つに分けられる。A群は石組炉をもつもので、S I 002・003・005・008がこれにあたる。炉は、床面中央より側壁に寄っており、S I 005では西壁に接している。形状は方形のもの（S I 002・003・008）と長方形のもの（S I 005）があるが、後者は形態焼土範囲から石組複式炉とも考えられる。B群は地床炉をもつもので、火床が凹んでいる。S I 001・004・006・007である。S I 006が床面中央北側に炉をもつ以外は、ほぼ中央部に炉が置かれている。

炉の形態差による分類は、他の要素でも両群の相違を導き出してくれる。一つは、住居面積においてA群は、10m²以上有するのに対し、B群は10m²未満と比較的小型の住居跡であること。さらに確認面において、にぶい黄橙色土の広がりの見られるA群（S I 002を除く）と黒色土の見られるB群である。A群のにぶい黄橙色土は、後述するフラスコ状ピットと関わりをもつてくる。それは、住居跡覆土上面に見られるこの土は、フラスコ状ピットを構築する際に基盤をなすにぶい黄橙色土層（住居跡や土壌はいずれもこの面までは掘り込んでいない）を掘り込んだために生じた土に、地面上の黄褐色土が混ったものである。このことは、A群住居跡のフラスコ状ピットとの関わりから相対的な年代を与えることができる。すなわち、A群の住居跡が廃棄され、ある程度まで埋没が進んだ段階で、フラスコ状ピットが構築され、その廃土が凹んでいた住居跡に棄てられたと考えられるのである。

つぎに出土遺物を加味して両群の年代を想定してみたい。この場合、A群においてS I 002が、B群ではS I 006がそれぞれ住居跡の位置、炉の形態・位置において分離細分が可能であり、細分が年代差に因るものとすれば、少なくとも4期は考えられる。A群は、炉の形態、出土土器から縄文中期～後期初頭と思われる。S I 002も同期かそれに近い時期と考えられる。B群は、S I 001床面から後期末～晩期前葉と考えられる土器が出土している。S I 004・007では出土遺物はないが、住居跡の位置、炉からS I 001と同期と思われる。S I 006については、形態から見るとS I 001に近い時期が想定できる。

イ フラスコ状ピット

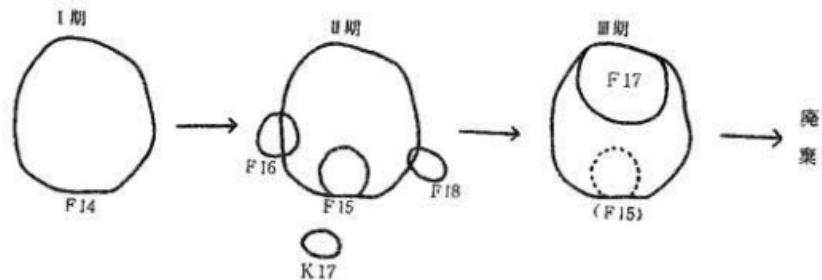
フラスコ状ピットは、B・C区で検出されたが、いずれも台地端部に集中する住居跡との関係で見ると、住居跡に切られているもの、切っているもの、住居跡の周間に構築されているものが観察できた。

（ア）B区 検出位置や埋土状態から2群に分類できる。1群は調査区西側の4基である。これらは埋土下層に黄褐色土系の土層があり、上面には黒色土が見られる。もう1群は台地先端部

の11基である。これらは、埋土下面（床面）に数cm～10数cm程の黒色土が入っている。その上には黄褐色土もしくは褐色土が比較的厚く堆積している。両群のこのような埋土の堆積状態と、壁の崩壊の少ないと考えあわせると、埋土の堆積には人為的な作用もあったことが考えられる。さらに、後者の確認面上において、にぶい黄褐色土の広がりが見られるもの（SK(F) 002・004・006・009・013・022）もある。このにぶい黄褐色土は住居跡の項でふれている土色と同じであり、両者の関係が窺えるのは前述の通りである。

一方、SK(F) 020は周縁部に8個のビットが見られ、切り合っているSI 002の柱穴埋土と異なることから、このフラスコ状ビットに付属するものと考えられた。同例は菅原沢貝塚古館堤頭・鹿野戸・館下I遺跡等にある。上層構造を持つ例である。

(イ)C区 ここで注目したいのは、SK(F) 014とこの床面から掘られているビット群（フラスコ状、円筒状）である。いわば“手持ちフラスコ”とも言えるこの種の遺構は、県内では館下I遺跡で「二重構造」を呈する1例・北の林II遺跡の1例を数えるのみであり、床面に5個ものビットを構築しているのは例を見ない。



第32図 フラスコ状ビットの構築変遷図

埋土層を観察することにより、このフラスコ状ビットの構築から使用、廃棄までの変遷をたどることができる。（上図参照）。I期：まずF14を構築する。（この段階で機能を果したのかかもしれない）。II期：F14床面南側にビット4個（F15・16・18・K17）を掘る。一定期間使用後これら4個のビットを黄褐色土で一気に埋める。III期：新たにF14床面北側にF17を掘る。（この時、F15は2／3程しか埋っていなかったため、山期でも使用された可能性あり）。その後、F17が廃棄された時はF14も同時に廃され、黒褐色土で埋められたものと考えられるのである。

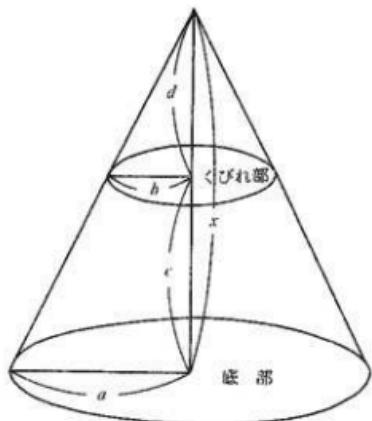
(ウ) フラスコ状ビットの機能と体積計算について

フラスコ状ビットは、形態、埋土状態、占地区域などから一般に、貯蔵穴・踏し穴・墓壙・

粘土探査あるいは住居等の性格が考えられている。特に、貯蔵穴・粘土探査・住居説などは、各遺跡単位で傍証を得ているようであり、フラスコ状を呈するこの種の遺構が全て同一の機能を有したものではないらしいことは、分かってきている。

さて本遺跡においては、住居跡との位置・新旧関係、さらに下堀・青刈沢貝塚・館下I遺跡での実験例から、外気温に關係なく遺構内の温度が一定しているという事例、また館下I・梨ノ木塚遺跡では、クルミ・クリなどの堅果類の出土も報告されている。これらのことから本遺跡のフラスコ状ピットを、ある時期においては住居跡に付属した形での貯蔵穴、またある時期では単独で貯蔵の機能を有したもの理解したい。

このように、フラスコ状ピットを貯蔵穴とした上で、くびれ部より上を「上蓋・足場などの機能性をもつもの」との認識に立てば、その主たる貯蔵空間はくびれ部以下のスペースとなる。貯蔵物の種類・貯蔵法等により床面の広さ（底面積）を問題にすべきなのか、略円錐台形の空間（体積）が問題なのか現段階では解答は得られない。しかし今後に向けての資料呈示ということで両者の数値を各表に載せてある。計算方法については以下述べる。



第33図 フラスコ状ピットの機能と体積計算 $V = V_1 - V_2 = \frac{\pi a^2 x}{3} - \frac{\pi b^2 d}{3}$ ①

一方、未知数 d は、 a 、 b 、 x との比例計算で定数に置き換えられる。

すなわち、 $a : b = x : d$ $x = d + c$ ②

$$d = \frac{bc}{a-b} \quad \text{..... ③} \quad \text{となる。}$$

②、③を①に代入していくれば V が求められる。

ウ 土 壤

調査区両側に集中して見られる上層群は、SK 009床面で検出された縄文晩期の土器から、同期の構造と思われる。

S K 014は、平面形が台形状を呈する竪穴状の遺構である。埋土中ではあるが、円盤状石製品、三角石製品、若干のチップの出土により石器、石製品の工房跡と考えることもできよう。

S X 001は、L字形を呈する土壙である。埋土中より縄文土器の出土、確認面上では、住居跡、フラスコ状ピットでみられたにふい黄橙色土が見られることから、前二者と同期に位置づけられる。

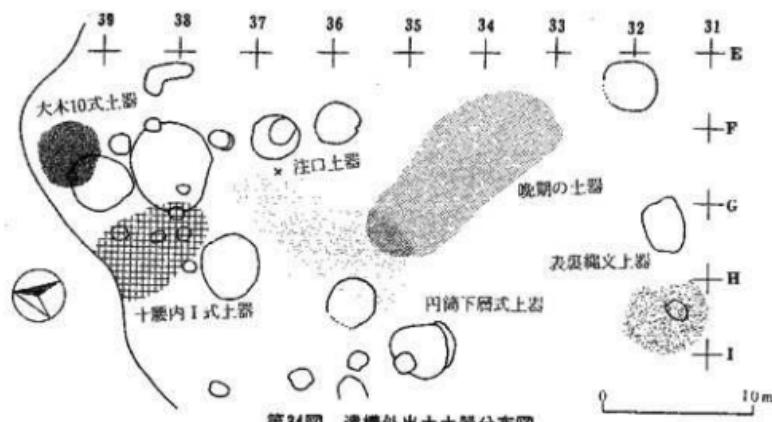
なお、A区では、円形・指円・柱穴状等々の土壙・ピットが検出できたが、多くは、リンゴの根の掘り方であるとか、後世の搅乱穴であることが多く、遺構として確認できたものはない出土遺物も、縄文土器1片・石匙1点のみであった。

遺物について

猿ヶ平II遺跡で出土した遺物は、縄文土器、土製品、石器、石製品である。遺構内出土の遺物は少なく、圧倒的に遺構外出土が多い。

ア 土器・土製品

遺構外出土土器を中心に、その分布状況と土器分類について見ていく。



第34図 遺構外出土土器分布図

遺跡は調査前、樹齢90年程の杉林であったため、調査はその抜根作業より開始した。一方、表土から地山面までは30~40cmと浅く、表土近くの遺構は抜根による搅乱のために確認できないままで破壊してしまったものもあると思われる。

遺物は、縄文早期～晩期に渡っているが、縄文のみの施文で時期が不明確なものも少なくない。遺物の集中地域は、31ライン以北で35、36～Gが最も多く、以南では縄文土器数点と石皿の出土にとどまっている。時期別に見ると、中期末～後期前葉の土器が35ライン以北で万遍なく見られる。なかでも39～Fでは、大木10式土器が、38～G北側斜面では十腰内1式土器がまとまって分布を見せていている。また31～Hでは早期の表裏縄文土器が狭い範囲に分布していた。S T 001覆土中にも見られた前期の円筒下層式土器は、35～G・Hを中心に出上し、35～G地山面で焼土が見られ同期の造構（住居跡）の存在が考えられた。同例は34～Fの焼土・炭化物と晩期の土器との関係からも窺えるが、いずれも抜根による擾乱箇所に近接しているため造構有無の確認はできなかった。

土器分類にあたっては、文様構成・技法・縄文原体・胎土に留意して行った。しかし2群の縄文原体については不明確な点もある。

1群（21図13、24図）

縄文早期後葉の表裏縄文、縄文一縄文と言われているものである。すべて体部資料であり、口縁部・底部の形態の知れるものはない。色調は、外面が橙～にぶい橙色、内面が褐灰・灰褐色を呈している。文様は内外とも節の大きいI.R縄文のみであり、沈線その他の施文は見られない。織維の混入も見られず、典型的な赤御堂式と言えるであろう。

2群（21図1～3、5、6、25図、26図）

縄文前期初頭～前葉にあたる土器群である。口縁部文様帶の有無で2つに分けられる。

A類 口縁部文様帶をもたないので、斜行縄文の施されたもの（25図3）、横位の絡条体回転によるものがある。後者には、単節の繩を規則正しく巻いたもの（25図4）、繩が一部で交叉しているもの（25図1、2）がある。25図5は複節である。

B類 口縁部文様帶をもつもので、綾格文により文様帶が構成され、その幅3～3.5cmを有する。体部には単節の斜縄文が付く。口唇部には、斜位の刻みの入るもの（25図8～11）と縄文压痕のもの（21図1、25図7）がある。

さらに体部資料で2つに分けられる。a—絡条体回転文でA類の体部にあたるものである。

(26図1～7) 条の間隔の広いもの、狭いもの、一部が交叉しているものもある。なお、26図6、7は不整然糸文と表記した方がいいのかもしれない。b—特殊な撚りのものである。26図8は粗糸を原体としているものである。26図9は、1段のRと2段のL Rを合わせてよる。R L Rで異段合撚とでも言えるものであろう。山内氏によれば円筒下層a式に見られるという。この土器には織維の混入は見られず、小石を多く含み焼成があまり良くないものである。

底部資料は3点である。底辺部まで絡条体回転文、不整然糸文が施されている。底面は、26図10、11が平底でナデ調整されている。26図12は、底面にも絡条体回転による施文が見られ、

周辺部はナテで磨消されている。

2群において器形の知れるものはないが、口縁部は平縁で直立もしくは若干外反する形状で、底部は平底で底辺部がやや外方に張り出す形をとるものである。一方、26図13～15などは、土器片の湾曲具合から尖底もしくはそれに近い形状をとる底部付近の破片と考えられるものである。若干例を除き繊維の混入は見られるが、いずれも器内面にその痕跡が観察されるのみであり、細砂粒の含有の多さが目につく。

3群(21図4、9、27図1～3)

繩文中期末大木10式に比定されるものである。隆線('ノ'字状貼付)を伴い、沈線と磨消繩文(L R)が見られる。色調は、外面が明赤褐色、内面がにぶい黄橙色を呈している。この群の土器は、S I 001・008覆土からも出土している。

4群

繩文後期初頭～前葉のものである。

A類(27図4～10)無節、単節の地文に直線を施すもので、磨消を伴わない。

4は、山形口縁に沿って横に展開する区画沈線の内外に2つずつの刺突が入る。5、6は縱位の蛇行文が見られる。

B類(27図11、12)A類に磨消手法が加わるものである。出土数は少ない。

C類(27図13～15、28図1)隆線と太い沈線によって構成されるもので、隆線には沈線による縁どりがなされている。磨消手法が発達し、研磨がいき届いている。15は十字状の隆線の交点に円形の刺突が入る。28図1は蓋形を呈すると思われ、沈線と磨消技法からこの類に入れた。

D類(21図7、8、28図3)縱位の結束繩文(R L)が施されているものである。S I 008覆土からも2点出土している。

これらは、十腰内I式もしくはその直前型式にあたるものと思われる。

なお28図2は、平行沈線間に鋸歯状の沈線が入るもので、4群より時期的には下るであろうが後期の所産と思われる。

5群(28図4～15、17)

繩文後期末葉以降のものをまとめた。

A類(28図4～7)連続する縱位の刻目をもつもので、2段以上の施文が考えられる。4は刻目の下に横位の刺突がならぶ。

B類(28図8)沈線と磨消繩文で入組文を作出しているものである。入組文下の平行沈線上に貼瘤をもつ。地文はL Rの細い繩文である。

C類(28図9～14)L R繩文の地文に2本一組を基本とする平行沈線を施し、その間を磨消するものである。

D類(28図15)内湾気味に立ちあがり口縁部で短く外方に折れるこの土器は、波状口縁頂部に突起状の貼付を行っている。この突起を二分するように口唇部に沈線に入る。さらに頸部に3本、内面口縁部に1本、それぞれ沈線を持つ。地文はR L斜繩文である。

A・B類は後期末葉～晚期初頭に、C、D類も晚期中葉大洞C₂式までには入るものと思われる。なお、28図17は注口土器である。肩の張らない胴長の器形と思われる。

土製品は、28図16の円盤状土製品のみである。繩文土器片の再利用である。

註1 八竜町教育委員会『藍刈沢貝塚』 1979年

註2 山内清男『日本先史土器の繩文』 1979年

イ 石 器

本遺跡より出土した石器は、石匕、搔器、石箋、磨製石斧、凹石、円盤状石製品、三角石製品、石皿の8種22点で、このうち遺構からの出土は6点である。この他フレークが25点出土している。

石 匕 (29図1、2、3)

3点出土した。いずれも刃部に対してつまみ部が平行に作られるもので縦型石匕である。刃部調整は主要剥離面からの細かい押圧剥離を施している。主要剥離面への調整はつまみ部に集中される。

搔 器 (29図4、5、6、7、8、30図9、10、11)

8点出土した。剥片を利用して剥離調整を加え、刃部を作り出しているものを搔器とした。大きさ、形の統一性はみられない。出土した搔器は刃部の存在する個所によって、次の4つに分類できる。(1)片側縁に作られるもの。(2)両側縁に作られるもの。(3)下側縁に作られるもの。(4)両側縁と下側縁に作られるものである。2例を除き主要剥離面からの調整が加えられている。

石 箋 (30図12、13、14)

3点出土した。刃部付近に最大幅をもち基部に移るにつれて細くなるので、ステップフレーリングにより成形される。第30図-12はS K(T) 002覆土上面から出土したもので、一次剥離でできた鋭い刃部に更に押圧剥離を加えている。

磨製石斧 (30図15、16)

S I 002堅穴住居跡P₅、S I 006堅穴住居跡覆土から出土した2点である。乳棒状のもので、欠損状態からみて石斧と平行に打力が加えられたものと考えられる。

凹 石 (31図17、18、19)

3点出土した。小型の川原石を使用したもので、両面に1個ずつ、または2～3個の凹みを

もつ。

石皿 (31図20)

1点出土した。扁平な川原石の両端を欠いたもので、両面が使用されている。上面は使用頻度が高く、中央部が凹レンズ状に凹んでいる。

円盤状石製品 (31図21)

S K 014土壙から出土した。最大幅1mm、長さ3.5mmほどの沈線が外周から内に向けて縱横にみられる。

三角石製品 (31図22)

S K 014土壙から出土した。1辺が5cmの正三角形を示すものである。

6.まとめ

猿ヶ平II遺跡から検出された遺構は縄文時代の竪穴住居跡8棟、フラスコ状ビット23基、土壙12基、Tビット2基である。

竪穴住居跡はすべて円形であり、出土土器から中期末～後期初頭のA群4棟と、後期末～晚期前葉のB群4棟に類別出来た。A群は住居内に石組炉を有し面積10～24m²のもので、確認面の覆土は地山深部の土を多量に含有するにぶい黄橙色のものであった。B群の炉は地床炉で、面積は6～9m²と小型の住居跡であった。これらの住居跡には貯蔵穴と考えられるフラスコ状ビットが付設されていた。A群の住居跡の覆土が地山の土を多量に含有するのは、廃棄されある程度まで埋没が進んだ段階で、B群の住居跡に伴うフラスコ状ビットが構築され、その堆土を凹んでいたA群の廃棄住居跡に棄てたためと考えられる。

フラスコ状ビットは住居外に構築されており、周囲の8個のビットから上屋構造の推定されるもの、能代市館下1遺跡で検出されている「手持ちフラスコ」とでも呼べる「二重構造」のものの検出もあった。

出土土器は遺構外からの出土が多く、早期の赤御堂式と呼ばれる表裏縄文土器、前期の円筒下唇式、中期の大木10式、後期十腰内式、晚期大洞C式土器があり、遺跡は縄文時代早期～晚期にわたって断続的ながらも人々の生活の場となっていたことが判明した。

主要参考文献

- 十腰内遺跡調査会団 「青森県弘前市十腰内縄文遺跡調査予報 十腰内」 1969年
村越 嶽 「円筒土器文化」 雄山閣 1974年
葛西 力 「十腰内I式土器の編年的細分」『北奥古代文化』 11号 1979年
青森県教育委員会 『泉山遺跡発掘調査報告書』 1975年
秋田市教育委員会 『小阿地』 1976年

工藤 竹久 『赤御堂遺跡発掘調査概要報告書』 八戸市教育委員会 1976年
山本町教育委員会 『古籠堀頭遺跡発掘調査報告書』 1977年
秋田県教育委員会 『館下I遠賀発掘調査報告書』 1979
秋田県教育委員会 『杉沢台遺跡・竹生遺跡発掘調査報告書』 1981年
柳沢 清一 『大木10式土器の細分』 『古代探叢』 1981年

発掘調査参加者

安保 富蔵	成田 悅太	松岡 武男	浅石 三郎	小田島政美	松岡 徳良
黒沢 猛	川又 靖治	金沢 武	田中慶太郎	菊地 信広	稲垣 弘定
浅石 松蔵	阿部 行夫	工藤 幸作	工藤 与八		
安保テイ子	津江 ミナ	成田 キヌ	井上 ミオ	畠山 スエ	畠山千代美
工藤 イネ	津江 良子	川村千鶴子	佐藤 シミ	阿部 チエ	佐藤アヤ子
阿部 テル	畠山 トヨ	似鳥 キサ	柳沢 テル	柳江 敏江	金田一實津子
石井ヨシエ	閑 キワ	川又 ヨリ	松岡 テイ	石川 リサ	金沢 ミキ
小田島カチ	倍賞 正子	川村 ツエ	川又 澄江	安保 幸子	津島 満子
池田 邦子					



遺跡遠景（北▶南）



図版 I

発掘調査区（背後の段丘上から）

猿ヶ平II遺跡



発掘調査前のようにす（南▶北）



図版 2

発掘調査前のようにす（北▶南）



C区発掘調査前のようにす（南▶北）



B区発掘調査後のようにす（北▶南）



B区北端部発掘調査後のようにす（北東▶南西）



図版 4

C区発掘調査後のようにす（南西▶北東）



発掘調査風景



発掘調査風景

狼ヶ平日遺跡



沢に堆積した浮石（東▶西）

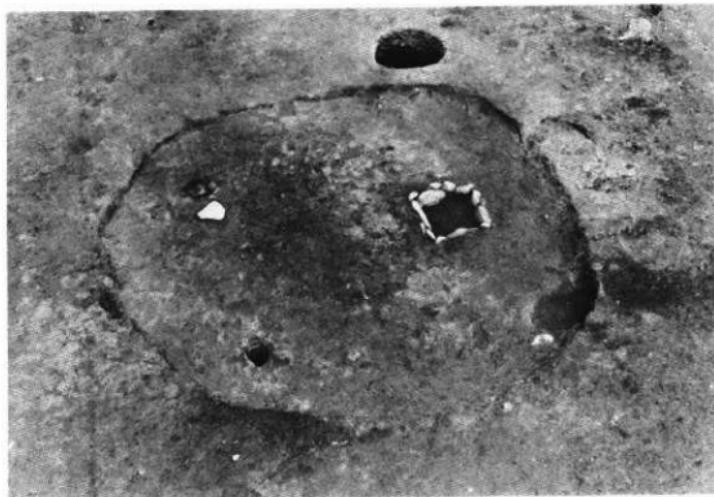


図版 6

S I 001 型穴住居跡（北東▶南西）



S I 002 壺穴住居跡と
SK(F) 020 フラスコ状ピット(東▶西)



図版7

S I 003 壺穴住居跡と
SK(F) 002 フラスコ状ピット(南▶北)



S I 004 堅穴住居跡（北西▶南東）



S I 005 堅穴住居跡（北西▶南東）



S I 006 穹穴住居跡（北▶南）



図版 9

S I 007 穹穴住居跡
SK(F) 012 フラスコ状ピット（東▶西）



S I 005-008 窪穴住居跡
とフラスコ状ビット群(北西▶南東)。

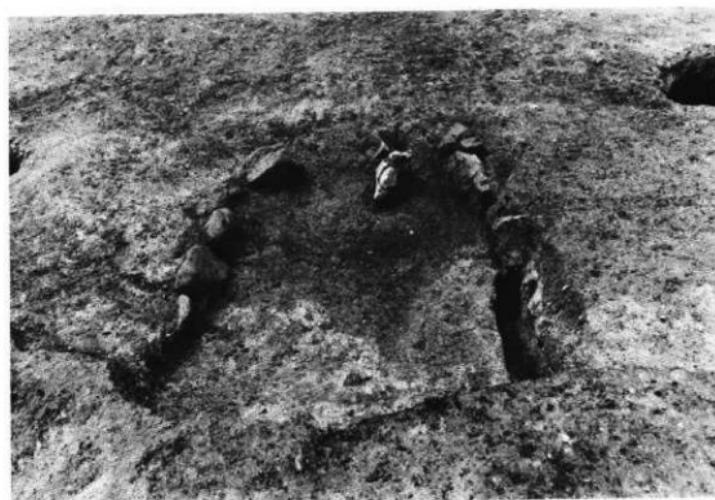


図版10

S I 008 - 009 窪穴住居跡と
S K (F) 013 フラスコ状ビット



S I 003 穹穴住居跡炉（東▶西）



S I 005 穹穴住居跡炉（北西▶南西）



堆ヶ平口遺跡

S 1008 — A 窓穴住居跡 (南►北)



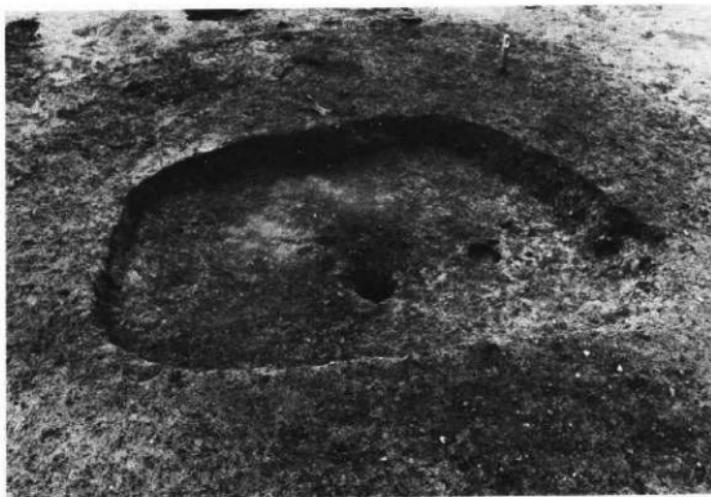
図版12

S K 009 土壙 (西►東)

城ヶ平日道跡



S K 009 土壌出土土器（南▶北）



S K 014 土壌（南▶北）

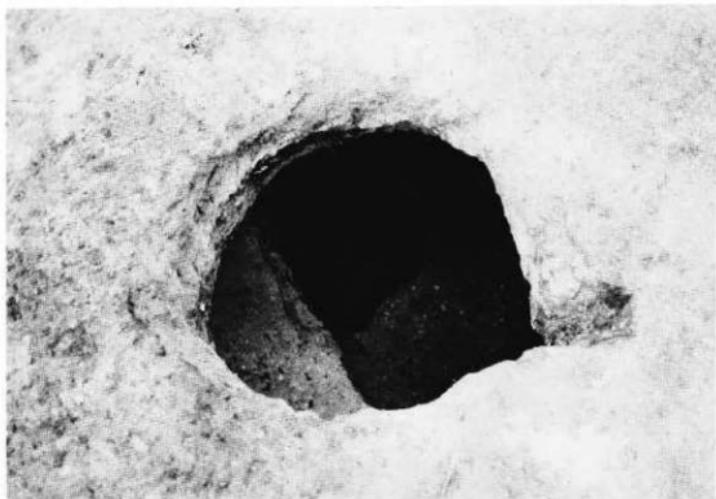
図版13



SK(F) 004 フラスコ状ピット(西▶東)



図版14 S I 005 壁穴住居跡を切って
構築されている SK(F) 006 フラスコ状ピット(東▶西)



SI 005 竪穴住居跡内に存在するSK(F)010 フラスコ状ピット（西▶東）



図版15 底部に5基の土壙をもつSK(P)014 フラスコ状ピット（東▶西）



SK(F) 014 フラスコ状ピット内に存在する SK(F) 015 フラスコ状ピット

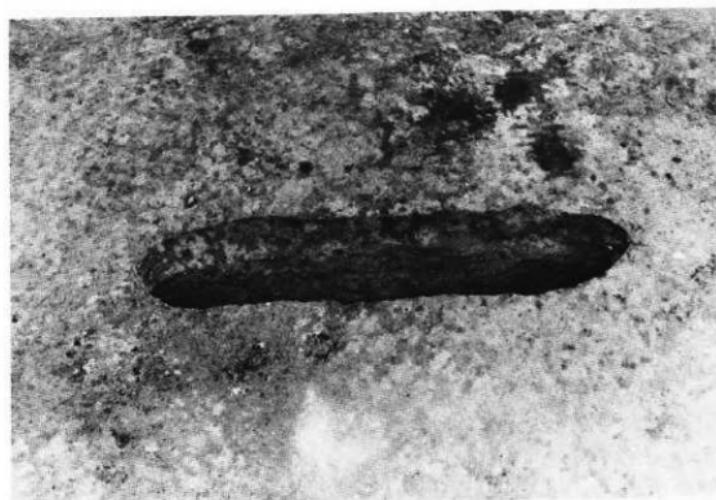


図版16

SK(F) 009 フラスコ状ピット覆土堆積状況（西▶東）



S K (T) 001 满状土壤(北西▶南西)



図版17

S K (T) 002 满状土壤(北東▶南西)

據ヶ平II遺跡

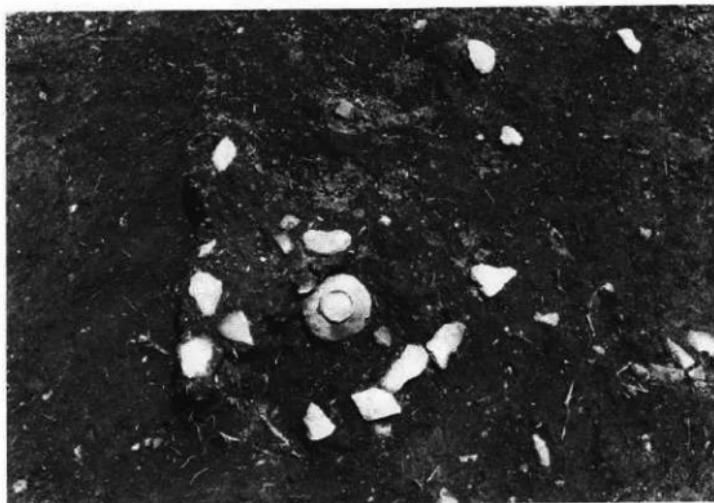


S1012 墓穴住居跡石斧出土状況



S1006 墓穴住居跡石斧出土状況

図版18

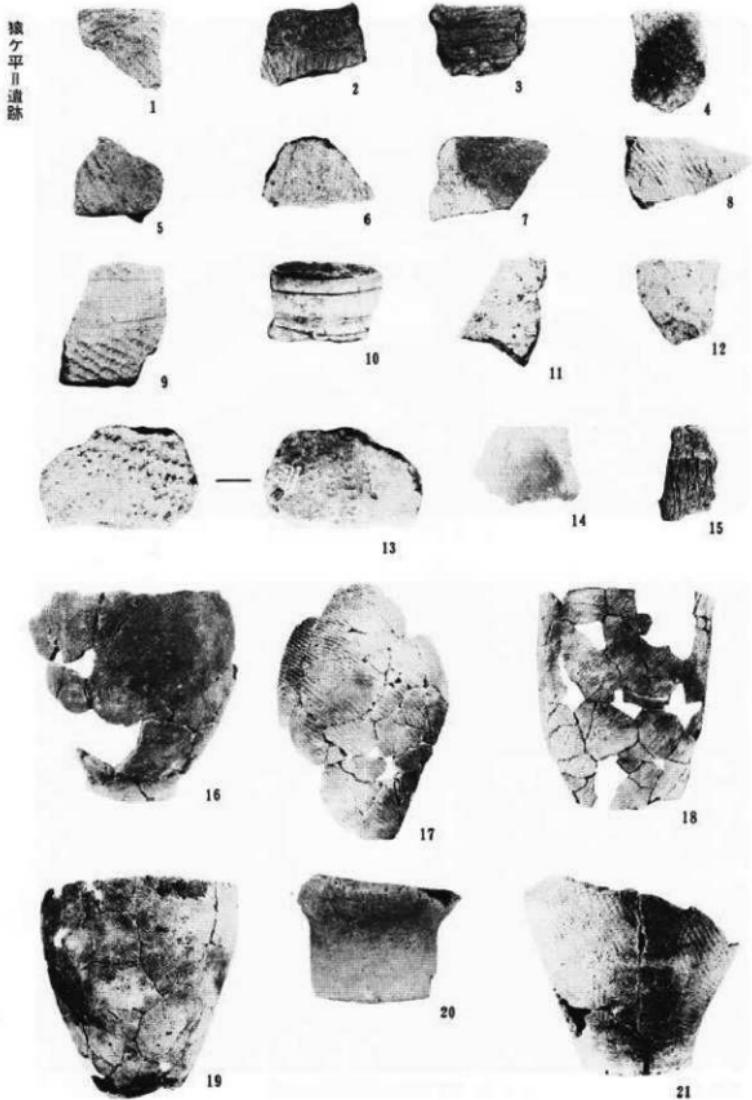


36-F グリッド土器出土状況



図版19

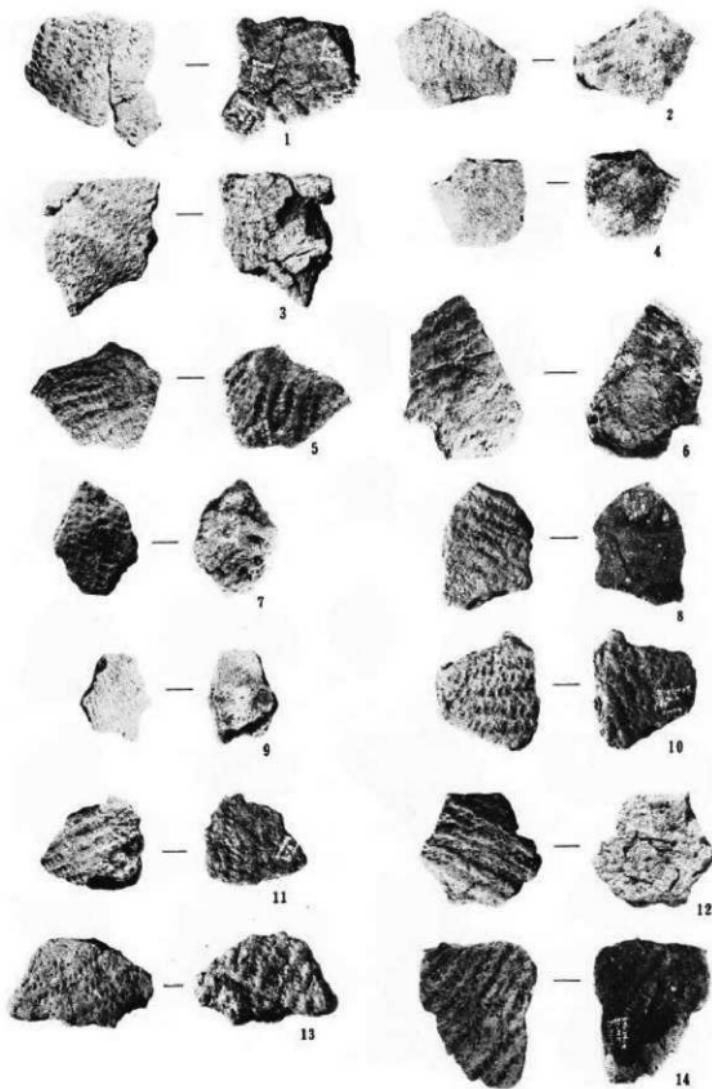
S K 014 土壇円盤状石製品出土状況



図版20

遺構内出土土器

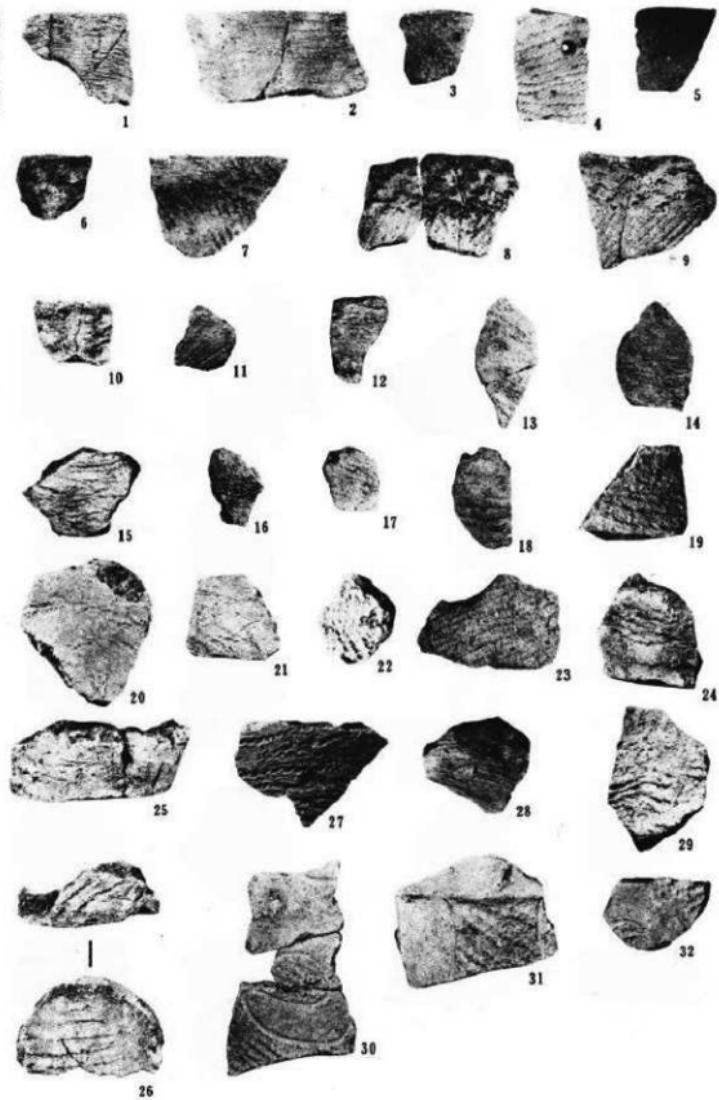
猿ヶ平II遺跡



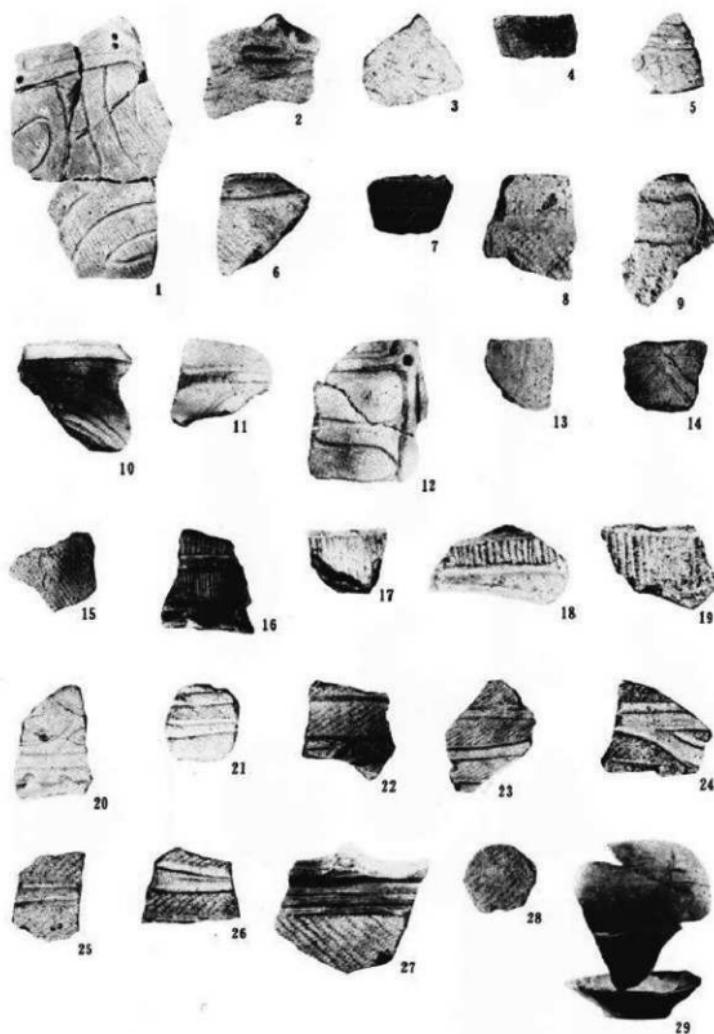
図版21

31-H グリド出土土器(1)

塙ヶ平貝遺跡



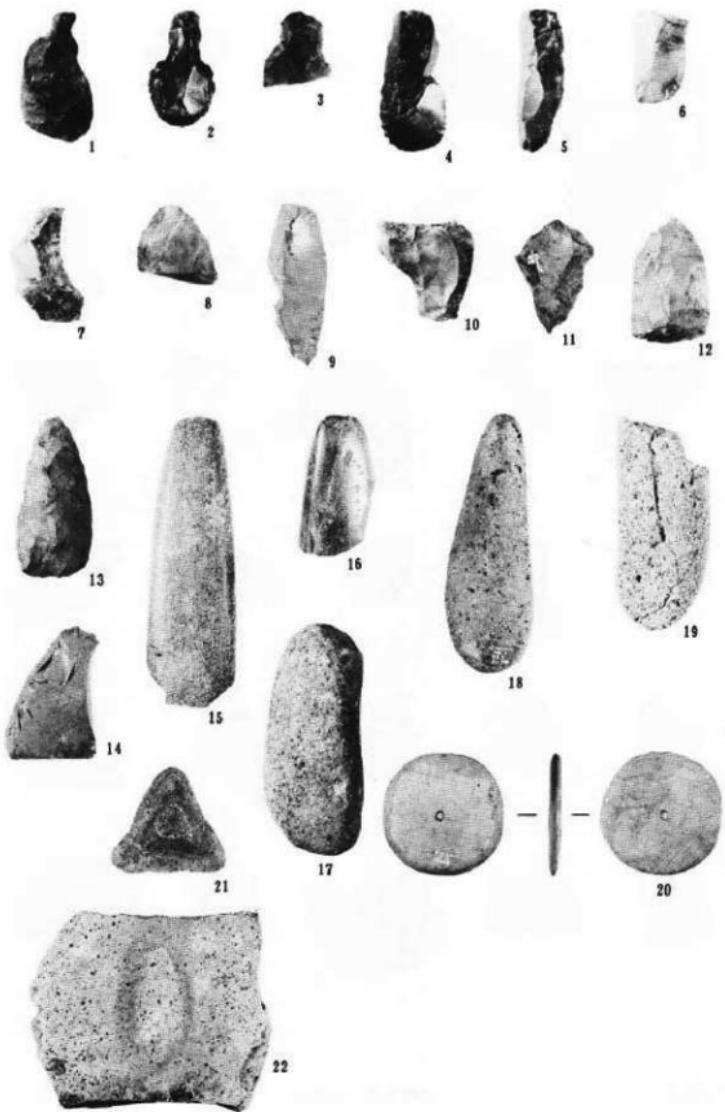
猿ヶ平II遺跡



図版23

造様外出土土器(3)

猪ヶ平II遺跡

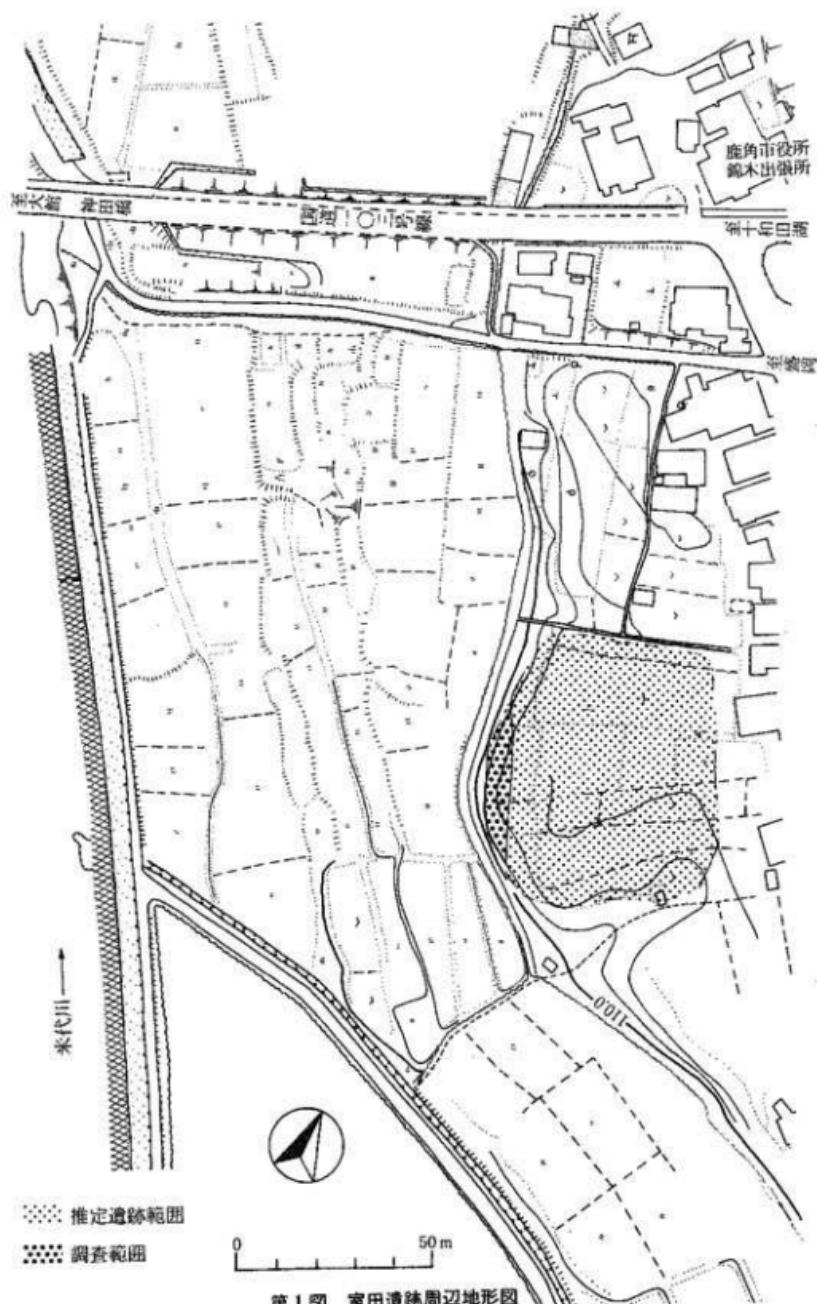


図版24

造構内外出土土器

室 田 遺 跡

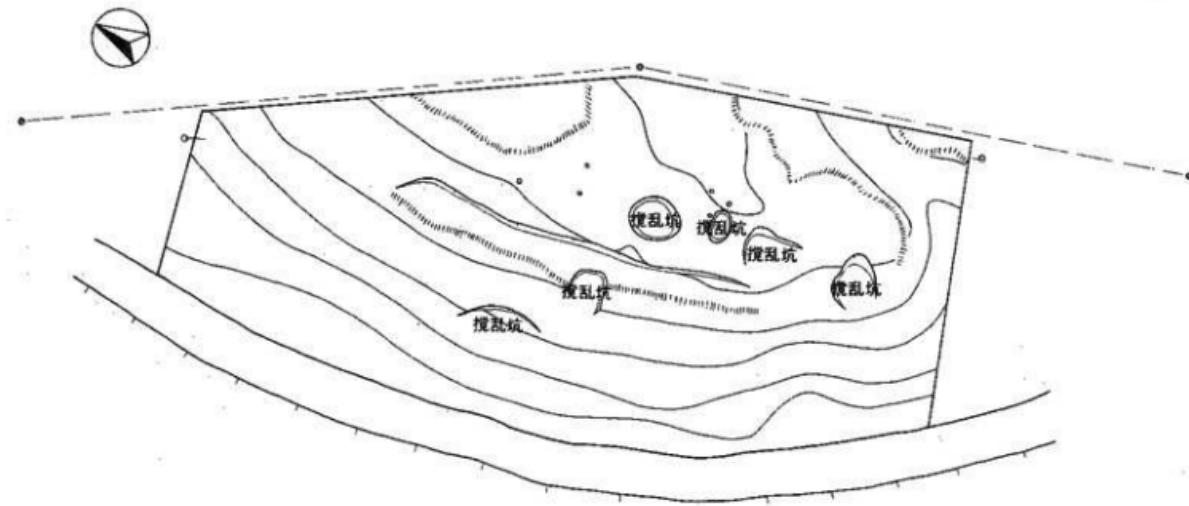
遺 跡 番 号 Na29
所 在 地 鹿角市十和田錦木字室田14番地 2号
調 査 期 間 昭和56年 4月13日～4月18日
発掘調査予定面積 88m²
発掘調査面積 270m²



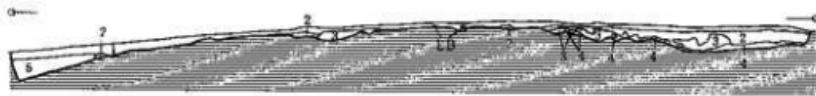
第1図 室田遺跡周辺地形図

第2图 宝田遗址调查区全图

— 114 —



1. 10YR 3/4 暗褐色土
2. 10YR 5/6 棕色土
3. 10YR 5/2 黑褐色土
4. 10YR 5/6 黄褐色土
5. 炭 垢介



1. 遺跡の概観

遺跡は国鉄花輪線柴平駅から北西 2.4 km、同線十和田南駅から南 1 km の標高約 113 m の段丘上に位置する。遺跡の南西 100 m には米代川が北流しており、またこの米代川は北へ 2.5 km 程進んだ地点で南流する大湯川と合流する。

遺跡の立地する段丘は、米代川の水面との比高 10 m 程の微高地であるが、この標高 110~120 m の段丘は鹿角盆地内で米代川に沿って主に東岸に良く発達している。盆地東側では、この段丘に多くの開析谷ではさまれた標高 150~200 m 前後の舌状台地が続く。遺跡は、盆地内でこの段丘の北西の縁に位置している。

米代川をはさんでの遺跡地の対岸は神田と呼ばれる地域で、現在は国道 103 号線の神田橋によって繋っているが、近世以前は専ら渡し舟に依る連絡であり今でも神田橋の袂には舟場跡を見る事ができる。この神田は近世秋田往還前の駅伝所の一つで、菅江真澄が天明五年八月二十六日から二十七日にかけて神田から舟渡しで松ノ木（遺跡地付近）へ入ったことが、その日記に記されている。また、遺跡の東 1.3 km 曲谷地と呼ばれる地には奈良時代の構築と思われる枯草坂古墳があり、現在位置は定かではないが遺跡のある室田にも古墳があったとされている。

2. 調査内容

調査は昭和 56 年 4 月 13 日から同年同月 18 日までの 6 日間を費して行った。東北自動車道本線予定地は、遺跡の西側に広がる水田である沖積地にその中心杭が設けられ、工事によって破壊される遺跡の調査範囲は、西へ張り出した極めて狭い区域に限られた。そのため調査区の測量・実測には、他の東北自動車道関連の遺跡調査で通常行っているグリッド杭を打設した造り方測量の方法は採らず、日本道路公团設置の路線幅杭を基準とした平板測量によった。

遺跡地は畠地として利用されていたため、部分的に黒褐色土、淡黄褐色の粘土層が僅かに残在する他は、遺構確認面として想定した黄褐色の地山面までの表土は殆んど耕作による搅乱を受けた暗褐色土 1 層によって構成されていた。また調査区北西の傾斜地は、ごく最近までゴミ捨場として利用されており、表土下には厚さ約 70 cm 程度炭、塵介の堆積層が認められた。

遺構としては、表土層から最近に掘り溜められたゴミ捨て用の搅乱坑と、耕作時に掘られたと思われる径 10 乃至 20 cm 程のピット以外には検出できなかった。また遺物も、表土中から大正時代の一銭銅貨 2 枚を出土した他はより古い時期にあたるものは皆無であった。

3. まとめ

今回、室田遺跡の調査では近代の搅乱の他は遺跡とし得る遺構・遺物を検出することはできなかった。

室田遺跡の調査にあたって、その遺跡としての性格に関連して予想された事が3点ある。その1つは菅江真澄の日記にも「毛布の渡」と記されているように、遺跡地付近が古代以来近世まで米代川渡河の舟渡し場であり、調査によって何れの時代かの渡し場に關係する遺構・遺物を検出できるのではないかということ。もう1つは、中世米代川対岸の神田に鹿角四氏のうち成田一族の神田十郎が挾った薪石館があり、この館関連の性格をもつ遺跡ではないかということ、さらに1つは、現在正確な地点が不明となってしまった室田古墳に關係する古代の遺跡としての可能性である。

今回の調査では、残念ながら以上に掲げたような点に関しては全く明らかにすることはできなかった。これには、調査の性格上、対象範囲の狹小な事、対象区域が限定されていることが原因しているが、この調査結果によって上記のような可能性をもつ室田遺跡そのものが否定されたわけではない。鹿角には伝説や古記録に登場する地が数多くあり、室田付近もその一つに数えられる。今後、室田遺跡はそのような背景をもつ遺跡であるとの視点から調査されなければならないものと考える。

調査参加者

梅戸正次郎	奥村一三	川又武司	川又秀也
相川金子	相川リヨ	石島谷妙子	奥村初恵
川又ヤエ	田中ヨシエ	中西リチ	三ヶ田孝子



遺跡遠景



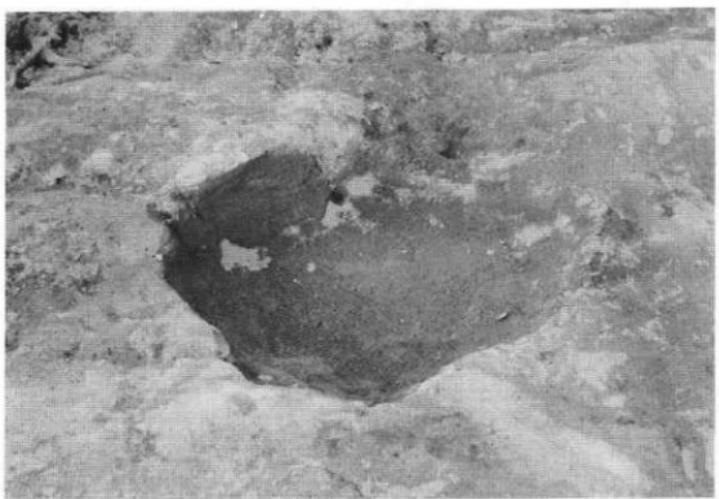
図版 I

遺跡全景（西▶東）

室田遺跡



遺跡全景（北▶南）



搅乱坑（ゴミ捨て穴）

図版 2

一本杉遺跡

遺跡番号 No.33
所在地 鹿角市花輪字一本杉3番地他
調査期間 昭和56年9月1日～10月31日
発掘調査予定面積 4,550m²
発掘調査面積 3,000m²

1. 遺跡の概観

秋田県の北東部に位置し南北に細長い鹿角盆地には、中央を南北に流れる米代川と、それに筋骨状に流入する諸河川の浸食作用を受けて形成された段丘と舌状台地が発達しており、これら段丘・舌状台上には、国特別史跡に指定されている大湯環状列石に代表される縄文時代の遺跡群の他、終末期古墳のように小規模なマウンドを築いた奈良・平安期の所産とされる墳丘墓群、中世武士の居館・撫点となつた館跡群等407カ所の考古遺跡が確認されている。

また、この鹿角盆地には数多くの民話・伝説が残されているが、その一つ「南相坊と八郎太郎」の伝説は、十和田火山噴火と、それに続くシラス洪水を歴化した伝説とされており、考古学的・地質学的な面からもこの伝説にメスが入れられている。

この「南相坊と八郎太郎」の伝説に關係すると思われる降下火山灰・火碎流としては、奈良・平安期の遺跡で遺構に關連して堆積が認められる「大湯浮石」があげられる。この「大湯浮石」は、黄褐色浮石質火山灰層として黒色土中に認められるもので、遺構との關連性から特に重視されている。

鹿角地方は、律令体制崩壊期になつてもなお化外の地であったろうと推測されているが、元慶2年(878年)の所謂元慶の乱で秋田城を攻め落した夷俘12カ村のうち、米代川流域にその撫点をもつ4カ村(能代、権潤、火内、上津野)の一つ上津野の地であり、後世には賀都庄として文書にも記載される地である。^(註1)

四囲を山々に閉まれて青垣山をめぐらす鹿角の地と言われる鹿角盆地内に所在する遺跡のドットマップを観ると、東側の段丘・台地上に立地する遺跡が多い。これは地形発達上の要因ばかりでなく、冬期の積雪量、日照時間、早春の融雪速度や東西両側を屏風のように山々が連なることに起因する内陸性の気候等、盆地内の気象要因も加味されていと推測されよう。

一本杉遺跡は、盆地のはば中央に位置する鹿角市の中心街花輪の南東側、米代川右岸の沖積低地からの比高約60mの高位段丘上、東側に連なる山脈の西麓縁辺部に位置する。

南側には、大きな沢目を利用した水田が東西に並んでいる。この沢目を挟み、南側に位置する台地の北側斜面には、大湯浮石の降下時期より新しい時期の竪穴住居跡等が検出された上葛岡IV遺跡(遺跡番号12)^(註2)が所在する。

北側には、同じ高位段丘上に明堂長根遺跡(遺跡番号31)、柏木森遺跡(遺跡番号15)、中の崎遺跡(遺跡番号16)^(註3)の各遺跡が接するように所在している。柏木森遺跡では、土器の表裏に繩文の施文された上器が出上している他、明堂長根遺跡とも強く関連すると思われる縄文時代晚期のフラスコ状ビット群が検出されている。また、中の崎遺跡では、平安時代後半と推定される合口張棺や多数の竪穴住居跡が検出されている。

- 註1 新野 厚吉 「秋田の歴史」 1982年
- 註2 遠藤 薫 「陸奥国賀都庄一『金沢文庫古文書』中の「東盛美所領注主案」追筆をめぐって」『秋大史学』第28集 昭和57年（1982年）
- 註3 秋田県教育委員会 「上葛岡IV遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書V』 秋田県 文化財調査報告書第91集 1982年
- 註4 昭和56年度県文化課調査。本報告書収載。
- 註5 註4と同じ。
- 註6 昭和55年度及び昭和56年度県文化課調査。

2. 調査の方法

(1) 発掘区の設定と調査の留意点

東北縦貫自動車道の発掘調査は、担当調査員の申し合せにより調査予定区域内に $5\text{m} \times 5\text{m}$ のグリッドを設定して行うこととしている。このグリッド設定は、館跡を除き日本道路公団の設置した路線中心杭を2本任意に選択し、この中心杭を結ぶ直線を設定基準線として跡線の方向に沿わせることとしている。

一本杉遺跡においては、STA 117+00とSTA 117+20の2本を選択し設定基準線（X軸）とした。STA 117+00を基準点として直交線（Y軸）を設定し、5m毎に杭を打設した。

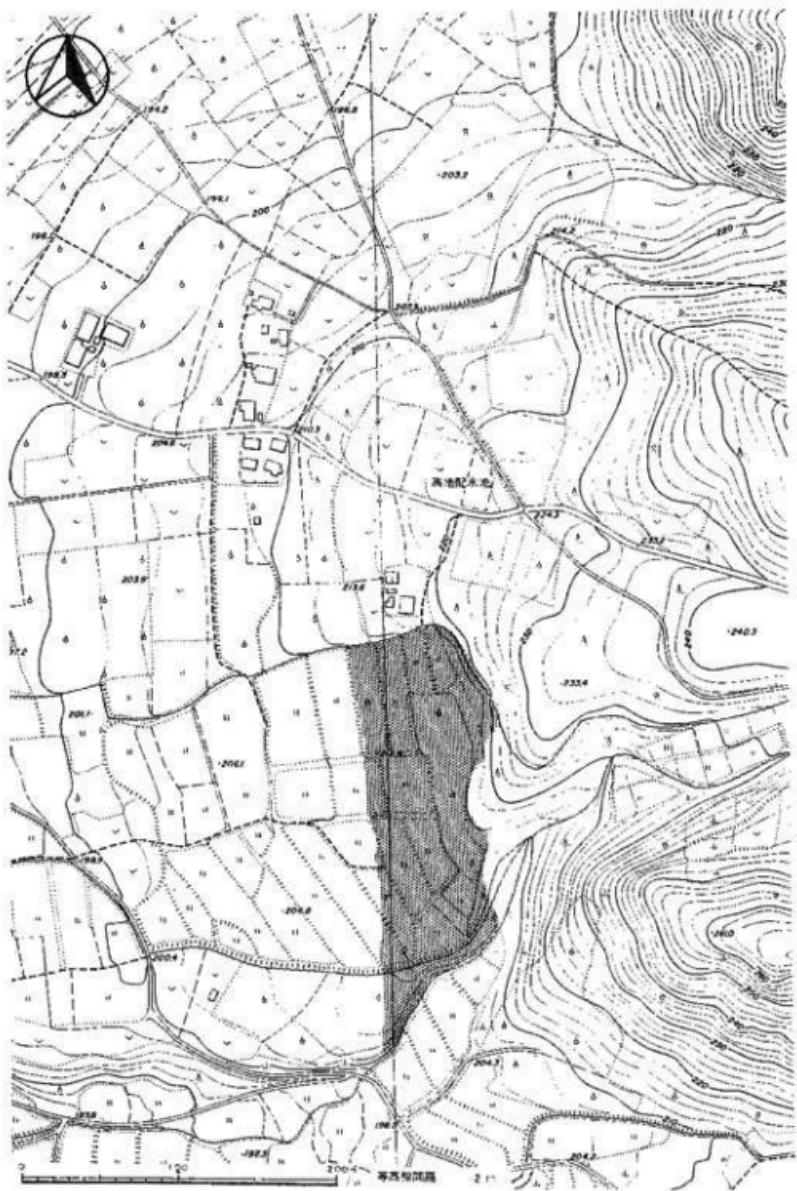
調査予定区域全域にグリッド杭を打設した後、グリッドの呼称を $(x-y)$ の方法で表示する関係からできるだけマイナス表示を少なくすることとして、 $(0, 0)$ の基準交点、X軸基準線、Y軸基準線をSTA 117+00から任意点（見かけの最北東部打設杭）に移転した。

X軸にアラビア数字、Y軸にアルファベットを付し、両者の組み合せてグリッド名としているが、各グリッドは、南西側の杭の交点から基準点を見る状態で表示している。

試掘調査の結果から、調査を実施するにあたり、次の諸点についてそれぞれ資料が得られるよう努めることとした。

①大湯浮石が竪穴住居跡内に純堆積層として米代川流域地区で初めて確認されたのは、昭和46年に調査された大館市池内遺跡であるが⁽⁴¹⁾、大湯浮石が竪穴住居跡内で確認される場合純堆積層として存在するのか、それとも二次堆積（沟別再堆積等）の様相を呈して堆積するのか、その場合の遺物はどのようなものか？

②昭和47年に奥山 潤氏により「大館地方に普遍的に存在する變形土師器」として報告された底面に砂粒を付着される變形土師器が、鹿角地方でも出土しているが、其伴關係が明確でないことから編年の位置づけが曖昧である。其伴遺物は何か？また、その編年の位置づけは？



③前年度調査した北の林II遺跡のような事例——ア、豎穴住居跡と浮石との関係では、床面に柱穴を穿たず、四隅の壁下方の中央部及びコーナー(の壁構造)に存在し、掘立柱建物跡と同様の柱穴配置をもつ豎穴住居跡は、大湯浮石の堆積後に構築されている。イ、かまどの構造の点では、所謂東北型のかまどのような掘り方を持ってても関東型かまどのような使い方をされているものが多いし、大湯浮石層より新しい豎穴住居跡のかまどは所謂関東型かまどを具有する。——が認められるか?

以上の点について観察することにしたが、これ以外にも調査中に諸々の問題提起があれば、それに対応できるように記録することにした。

(2) 遺構の実測方法と遺物のとりあげ方法

遺構の実測は、造り方測量による。通常、豎穴住居跡内における上層観察用ベルトの設定は、極めて画一的に遺構(豎穴住居跡)中央部に交点をもつよう相対する壁面の中央部を結び2本設定しているが、本遺跡の場合には次のように設定した。

①かまどを有する豎穴住居跡……かまど中軸線を通る一本と、住居跡中央部でそれに交差する一本のベルトの設定を試みた。

②出入口様張り出し部のある豎穴遺構……出入口様張り出し部中軸線を通る一本と、遺構中央部でそれに交差する一本のベルトの設定を試みた。

土壙及びT-pitの場合、設定しても狭小で土層の観察が難しく、特異な堆積状況がない限り、図化を省略した。

実測の縮尺は、遺構配置図1/200、豎穴住居跡、掘立柱建物跡、土壙、T-pit、溝、柱穴(それらの土層断面図も含む)1/20、かまど、炉1/10とした。

遺物のとりあげ方法は、その位置等を平面図にレベル、層位、種類を記録して収納することにした。

註1 秋田県立大館桂高等学校社会部『池内発掘』 1972年

註2 奥山 潤・宮澤泰時『比内町真館緊急発掘調査報告』 1972年

註3 秋田県教育委員会「北の林II遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書IV』 秋田県
文化財調査報告書 第90集 1982年

註4 註3の報告書「附註」参照

3. 調査経過

一本杉遺跡は、昭和44年、昭和48年、昭和52年の3次にわたる東北縦貫自動車道建設予定地

内遺跡分布調査でもその存在を確認できなかった遺跡である。

昭和55年秋に、県立花輪高等学校東方の東北縦貫自動車道建設予定地内において重機により黒土を採取しているのを当時北側に隣接する明堂長根遺跡を試掘調査中の橋本高史調査員が目撃、掘り上げた黒土中に土師器片が含まれていることを発見し、遺跡であると認め、建設工事に先立ち発掘調査する必要がある旨文化課に連絡した。県文化課は、次年度に発掘調査を実施する必要がある旨を日本道路公団仙台建設局に連絡した。

--本杉遺跡の発掘調査を昭和56年度に実施することが本決まりとなり、桜田 隆調査員が妻の神田遺跡（遺跡番号24）の調査終了後の9月から調査することになった。

妻の神田遺跡発掘調査中の6月から--本杉遺跡の発掘調査の諸準備が進められた。この準備段階で、調査対象区内の南側に変則的に入り込んでいる農業用水路が使用中で、他に引水できる水路がないことや、南東から北西へ調査区内を斜行して飲用導水管が埋設されていることが判明し、この水問題と排土地の選択確保が極めて重要な課題となった。

水利権者及び日本道路公団鹿角工事事務所の担当者と3者で話し合いの結果、農業用水路の切り替えは難しいとの判断から、既存水路をそのまま残す（調査対象から除外する）ことになった。飲用導水管は調査対象区域外に移設するが、自然流下しているのでその傾斜に十分留意して（傾斜の関係で一部調査区域内に入ることもあり得る）移動敷設することとした。

6月7日から桜田調査員が作業員10余名と共に、排土地に予定している西側の一段低い水田面とそれ以外の調査対象区に試掘調査を実施した。この結果、排土地予定地には堅穴住居跡らしいアランが確認されたため、排土地とするには不適と判断、別に探すことにした。調査区中央で南北方向に設定したトレンチでは、大湯浮石の純堆積層が確認され、土師器片、繩文土器片等が出土している。現地に詳しい梅戸正次郎氏から、以前耕地整理（圃場整備）した際、一段低い南西側水田面はブルドーザで削平したこと、また北西側の水田面も一度ブルドーザで削平したあとに盛土したこと等を直接教示を得た。試掘調査でもこの説明を裏づけることが多く判明した。（西側、特に北西側は1mから1.5mの盛土がなされ、その下部は削平が激しく遺構は全く確認されない。南西側も0.3~0.6mの削平を受けている。）

9月1日から一本杉遺跡の本格的な調査を開始した。試掘調査の結果西側下段の水田部分を除き黒色土中に大湯浮石の純堆積層が確認されていることから、この大湯浮石層の上面及びそれと同レベルで粗掘りを止め、遺構アランの確認に努めた。しかし、明確なアランを検出することができなかったため、浮石層の下面、次に下面から10cm低いレベルの面と掘り下げることにした。その結果、黒褐色土～暗褐色土を掘り込む遺構のアランが多数検出された。

遺構アラン確認面の埋土を観察すると、浮石を多量に含む遺構が多いことが判明した。

このことは、大湯浮石を含む状況を詳細に観察することにより、新旧関係等を知る手かかり

となることを示す。

西側下部水田面は、隣接する区域外水田への影響を最小に押えるため、約1mの幅を残して土留め工作をしたあと全面削土を行った。検出された遺構のうちには、区域外に広がるものもあるが、稲刈り前であることから追跡拡張することは断念せざるを得なかった。

予想を上回る数の遺構が検出されたことと、悪天候のため調査の遅れが日立つことから小玉準調査員のチームから、調査補佐員と作業員の応援を求めた。

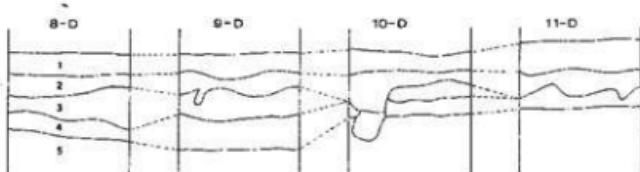
平安時代の竪穴住居跡9棟、掘立柱建物跡3棟、溝3条、方形竪穴造構1棟、張り出し部のある竪穴造構2棟、中世の竪穴住居跡7棟、T-pit 1基、フラスコ状土壙1基、土壙状造構12基、柱穴多数の他、貝殻文を施した土器片等繩文土器、墨書きのある环形土師器、長頸壺形埴輪器、陶磁器片等を出土し、10月31日に調査を終了し、その後残務整理を行い11月7日に現場を撤収した。

4. 遺跡の層位

試掘調査時に遺跡のほぼ中央で南北方向に設定したトレント（本調査でのDラインとは平行する）西壁の土層観察では、1層：表土（暗褐色土）、2層：黒褐色土、3層：黄褐色浮石質火山灰=大湯浮石（レンズ状に5~10ラインに3~5cmの層厚で堆積）、4層：黒褐色土～暗褐色土（5層への漸移層）、5層：砂質茶褐色土（地山面）と堆積している。

遺構の平面プランは、4層上面で確認されているが、グリッド杭をそのまま存置するために柱状に残した部分で断面も確認（8-A杭部分で壁の掘り込みが認められる）できたS I 013竪穴住居跡では、2層の黒褐色土から掘り込んでいるのが観察されているが、この区域には3層の堆積、広かりが認められない。

3層は、5~10ラインとC~Fラインの間の区域の鞍部に堆積している。



第2図 土層堆積図

5. 遺構と遺物

本遺跡の調査では、平安時代後半期の竪穴住居跡9棟、掘立柱建物跡3棟、溝3条、方形竪穴遺構1棟、中世の張り出し部をもつ竪穴遺構2棟、中世の竪穴住居跡7棟、その他T-pit 1基、フラスコ状土壙1基、土壙状遺構12基、柱穴多数が検出された。また、遺物は貝殻文を施した罐文土器他各期の土器片、墨書きのある环形土師器、底部に砂粒を付着させる菱形土師器、長頸亞形須恵器など平安時代後半期の土器、鉄製紡錘車、鍛先、砥石等の他、鋤鉢片、白磁碗片等の陶・磁器片が出土している。

遺構は、時期別に扱わず、遺構の種類毎に検出順に番号を付しているが、プラン確認時に遺構と思われ番号を付したもの、精査後遺構と判断しがたいものや、当初推定の遺構でなく別種類の遺構であったものなどがあり、欠番としたものがある。

遺構の計測方法等は発掘担当者の考え方により相違が見られることが多い。本遺跡でも竪穴住居跡の計測方法及び用語法は、発掘担当者である桜田の考え方に基づいている。

壁高：床面からプラン確認面における壁上端までを測る。

壁溝：壁面下方に壁体のおさまりのために作出された溝。周溝という名称は、排水等の水関連の施設を想起させるので用いない。

壁長：プラン確認面における各壁面の上端を計る。設計上の竪穴住居は、直線の壁面が直角に交わるが、繩張りして掘り下げる際に壁体の据え方（計画されている住居の壁面）よりも広い面積、長さを掘り下げているのであり、本来この壁面とは竪穴掘り方の壁面であることを再確認しておく必要がある。つまり、柱穴等における所謂掘り方と据え方の関係と同じである。掘立柱建物跡との関連で四隅の壁長により竪穴住居跡の規模を表現しようとするのが今日的な常識的であるが、住居跡を「すまい」として考えるならば、その大きさは壁体のおさまりである壁溝と主要な柱穴配置から規模を表現した方がより現実的であろうと考えている。しかし、各壁の計画壁長を推定しなければならないことからその推定規準の可否の問題もあるので上記の通りプラン確認面における上端の長さを計る。

面積：プラン確認面におけるかまど煙道部分も含む掘り下げる面積である。掘り方上端を（現実には実測図上における上端）もって計る。プラニメーターで3回計測しその平均値を採る。

主軸方位：かまどの焚口と煙出孔の中点を結ぶ線（火床の中心点と煙道部の長軸中線を結ぶ線）と磁北との偏角を計る。

第1表

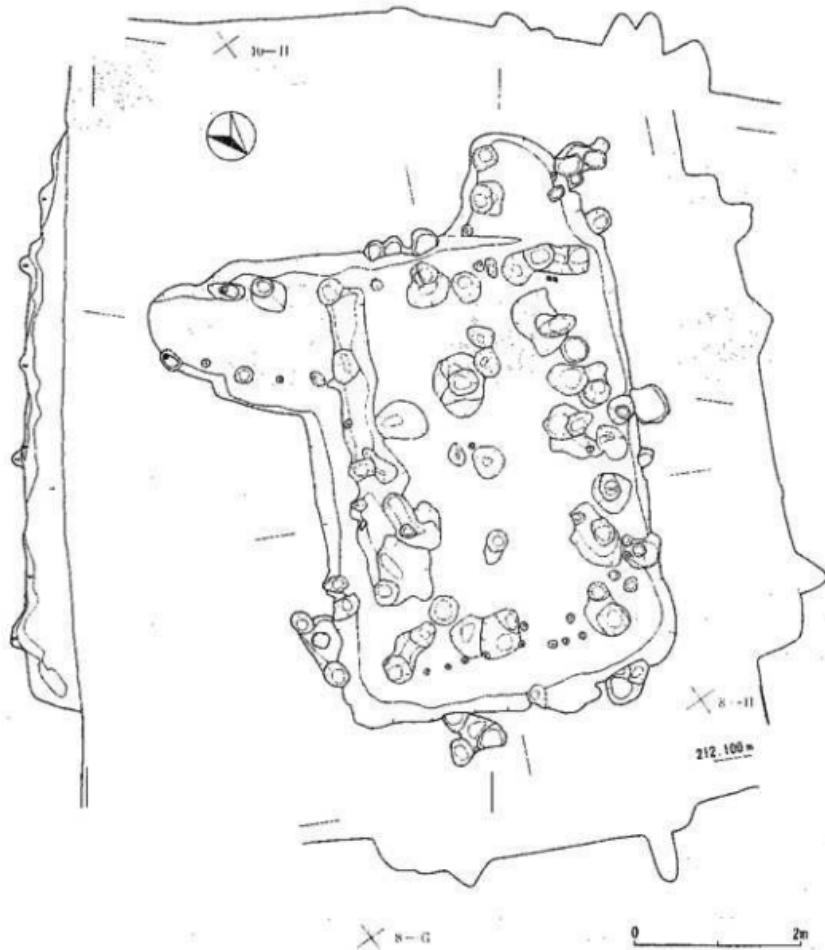
S I 001竪穴住居跡計測説明表

検出地区	9-H、10-H、9-I、10-I	実測図番号	3	図版番号	3				
	南側壁	西側壁	北側壁	東側壁					
法 量	壁長 壁高 壁溝幅 壁溝深	385.5cm 31.9~42.8cm なし なし	570.5cm 33.2~42.3cm なし なし	415.5cm 45.2~65.2cm なし なし	589.5cm 36.6~49.6cm なし なし				
	形態	方形	面積	25.98m ²	主軸方位 S-63°--E				
	プラン確認時 の状態	当初上捨て場に予定し、8~14のIIライン東側に幅1mの試掘トレンチを設定し、プラン確認した。8~14のF~Iラインの範囲は、耕地整理のため、約1m削・削土されていたが、明確なプランを検出できた。東側と南側に張り出し様のプランがあり、所謂「張り出し部のある竪穴住居」の重複かと推定された。							
	覆土と床面 の状態	上部を削・削土され、水田として昨年まで耕作されていたので壁面もほぼ削平されていると予想したが、深く掘りくぼめていたためか、削・削平にもかかわらず壁面はほぼ垂直に高く遺存していた。覆土は地山の黄褐色土のブロックが多量に混入していた。床面は非常にかたく踏みかためられていた。							
柱 穴	各壁面下の内側床面には等間に空たれ、出入口様の張り出し部にも検出されている。北側に小径柱を直接打設したと考えられる柱穴が並んでいる。S 1001、002が、方向を変えて「建替」されているので柱穴の関係把握が難しい。								
かまど	かまどは付設されていない。								
遺物 の出土状況	縄文土器片3点、環形土器器体部小片3点、斐形土器胴部片12点、斐形土器器口縁部破片1点が覆土中から出土したが、いずれも小片である。								

第2表

S I 002竪穴住居跡計測説明表

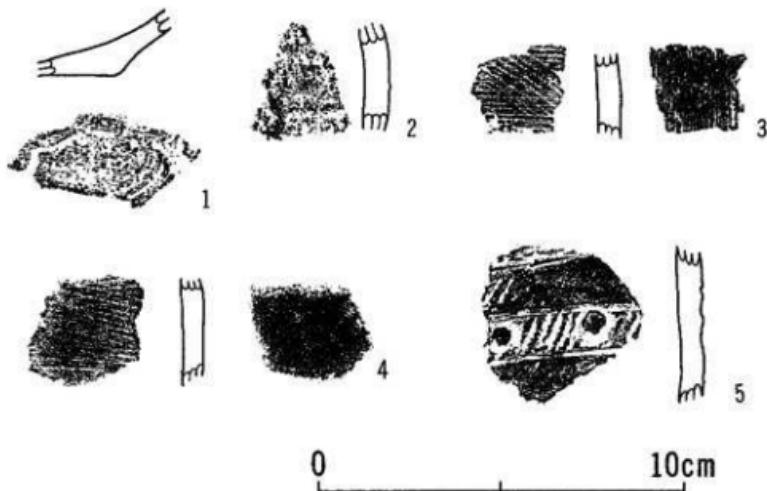
検出地区	9-H、10-H、9-I、10-I	実測図番号	3	図版番号	3				
	南側壁	西側壁	北側壁	東側壁					
法 量	壁長 壁高 壁溝幅 壁溝深	335.7cm なし なし なし	403.5cm なし なし なし	324.5cm なし なし なし	414.5cm なし (40~74)cm (5.2~9.1)cm				
	形態	方形	面積	17.09m ²	主軸方位 S-23°--W				
	プラン確認時 の状態	S I 001に同じ							
	覆土と床面 の状態	S I 001に同じ							
柱 穴	S I 001に同じ								
かまど	S I 001に同じ								
遺物 の出土状況	覆土中から縄文土器胴部破片1点、斐形土器の口縁部破片1点、胴部破片9点、底部破片1点が出土している。								



第3図 S 1001, S 1002 竪穴住居跡実測図

S 1001, S 1002 竪穴住居跡土層註記

- | | | |
|--------------------------------|--------------------------------|-----------------------------------|
| 1 10Y R 5% 黄褐色土混入 弱粘性 黑
褐色土 | 2 10Y R 5% 黄褐色土混入 弱粘性 黑
褐色土 | 3 10Y R 5% 黄褐色土混入 弱粘性 黑
色土 |
| 4 10Y R 5% 深色土アロック状 混入 | 5 10Y R 5% 弱粘性 明黄色土 | 6 10Y R 5% 黄褐色土及沙明黄色以入
弱粘性黑褐色土 |
| 7 10Y R 5% 弱粘性明黄色土 | | |



第4図 S I 001、S I 002縦穴住居跡出土土器拓影図

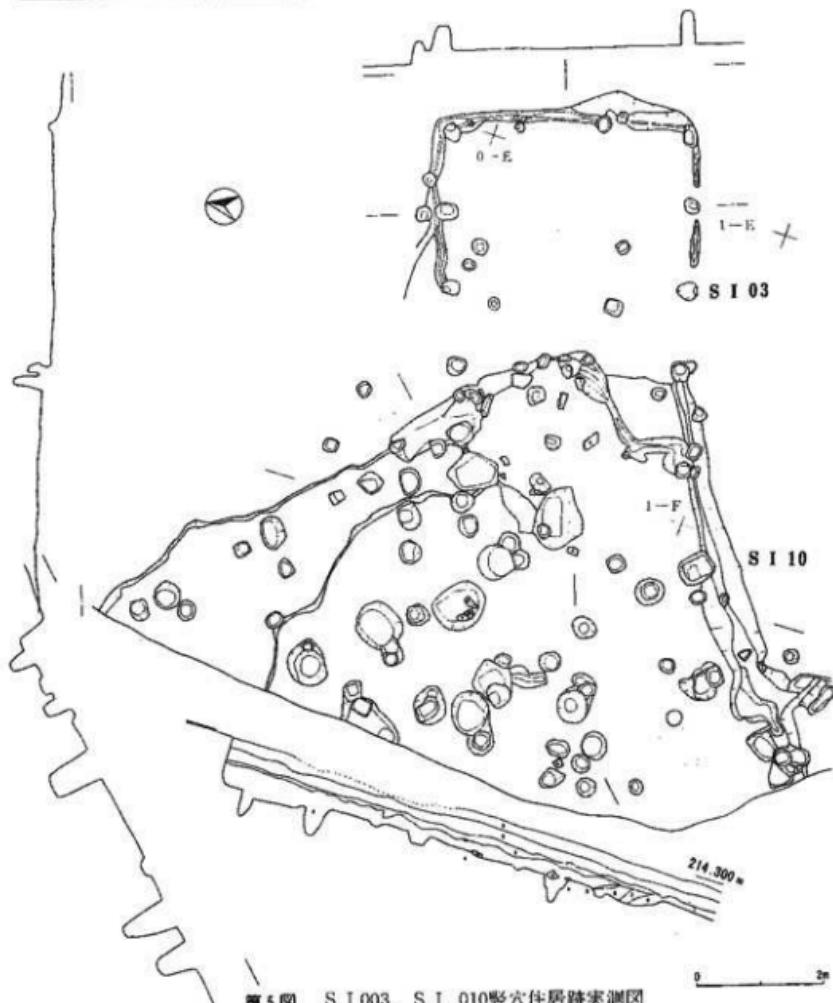
第3表 S I 001、002縦穴住居跡出土土器説明表

実測図番号	図版番号	記番号	形部	盤位	器面測定法			粘土含有物	色調	備考
					外 面	内 面	底 面			
4-1	R P-1括	フクド中	环、底部	ロクロ	ロクロ	回転系切		5 YR 5% に近い橙	土師器	
4-2	R P-1括	フクド中	窓、胴部	ヘラナテ	ヘラナテ		粗砂を含む	10 YR 5% に近い黄橙	土師器	
4-3	R P-1括	フクド中	窓、胴部	刷毛目	ヘラナテ			10 YR 5% に近い黄橙	土師器	
4-4	R P-1括	窓、胴部	刷毛目	ヘラナテ				10 YR 5% に近い黄橙	土師器	
4-5	7 A R P-1括	繩文 胴部	磨消 沈継区画 はりこぶ	ヘラナテ				7.5 YR 3% に近い橙		

第4表 S I 003 縦穴住居跡計測説明表

検出地区	0-E、0-F、1-E、1-F	実測図番号	5	図版番号	4		
			南側壁	西側壁	北側壁	東側壁	
法	壁長	(243.5)cm	なし		(272.5)cm		420.5cm
	壁高	なし	なし		1.2~19.7cm		6.8~20.3cm
	壁溝幅	7.5~13.5cm	なし		8.5~15.5cm		9.5~21.5cm
	壁溝深	2.0~7.8cm	なし		2.1~6.5cm		4.0~10.0cm
形態	方形	面積	16.56m ²	主軸方位	S-24°-E		
プラン確認時の状態	4層(黒褐色土~暗褐色土)中に白色浮石粒が多量に粗に混入する黒褐色土の方形プランが確認されたが、西側に傾斜する面での確認だったとのと、S I 010との重複のため、掘り下げるぎりぎりで止まっている。						
覆土と床面の状態	白色の浮石粒が多量に粗に混入する黒褐色土が主体をなす覆土。床面は、やや軟かく、凹凸が激しい。						

柱穴	竪穴の壁隅部下方に各1穴と各壁面下方に等間で各2穴穿たれている。
炉	床面中央部の床面に略円形のプランで断面鍋底状に熱変化した部分があり、地床がと思われる。
遺物の出土状況	覆土中から器外表面部に墨書きのある不形土師器1点、甕形土師器底部破片1点、炉部分から甕形土師器口縁部1点が出土している。



第5図 S I 003、S I 010竪穴住居跡実測図

S I 003、S I 010竪穴住居跡土層註記

1 7.5Y R 4 白色浮石微粒混入 弱粘性
黒褐色土 2 10Y R 4 白色浮石微粒混入 弱粘性
黑褐色土 3 7.5Y R 4 黑色土

4 10YR 5% 黄褐色土粒混入 中粘性 黑褐色土

5 10YR 5% やや強粘性 黑色土

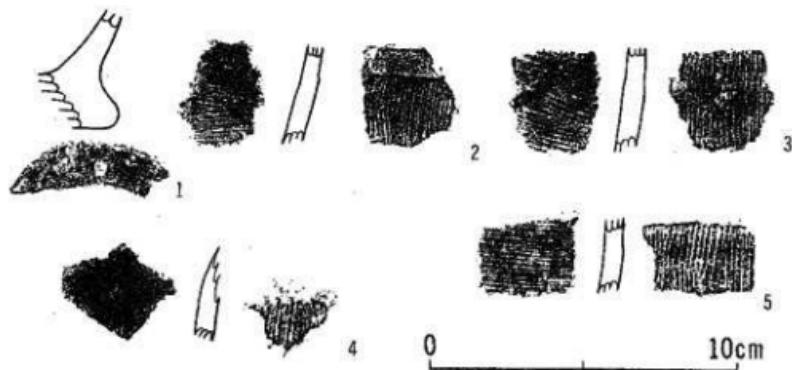
6 10YR 5% 黄褐色土粒入 强粘性 黑褐色土

7 7.5YR 5% 黄褐色土微量混入 黑色土

第5表

S I 010 構造跡計測説明表

検出地区	0—G, 1—F, 1—G, 2—F, 2—G	実測図番号	5	図版番号	4
	南側壁	西側壁	北側壁	東側壁	
壁長	(732)cm	なし	なし	(450)cm	
壁高	5~20cm	なし	なし	3~18cm	
壁溝幅	3~12cm	なし	なし	5~20cm	
壁溝深	4~10cm	なし	なし	2~8 cm	
形態	方彫	面積	不明	主軸方位	不明
プラン確認時の状態	S I 003の西側に重複して確認されたが、耕地整理時に削・削平後、盛土されているので正確なプラン及び、遺構数を確認することができなかった。				
覆土と床面の状態	黄褐色土のブロック、白色浮石粒が混入する黒褐色土の上に耕地整理による盛土がなされている。				
柱穴	柱穴が多数検出されているが、S I 003と同じく各壁下方に並ぶ柱穴配置と想定すると凡そ4種と考えられる。				
炉	床面の北東側に2ヶ所地床炉が検出された。				
遺物の出土状況	床面近くの覆土中から表形上部器の口縁部破片2点、胴部破片5点、底部破片1点が出土した。				

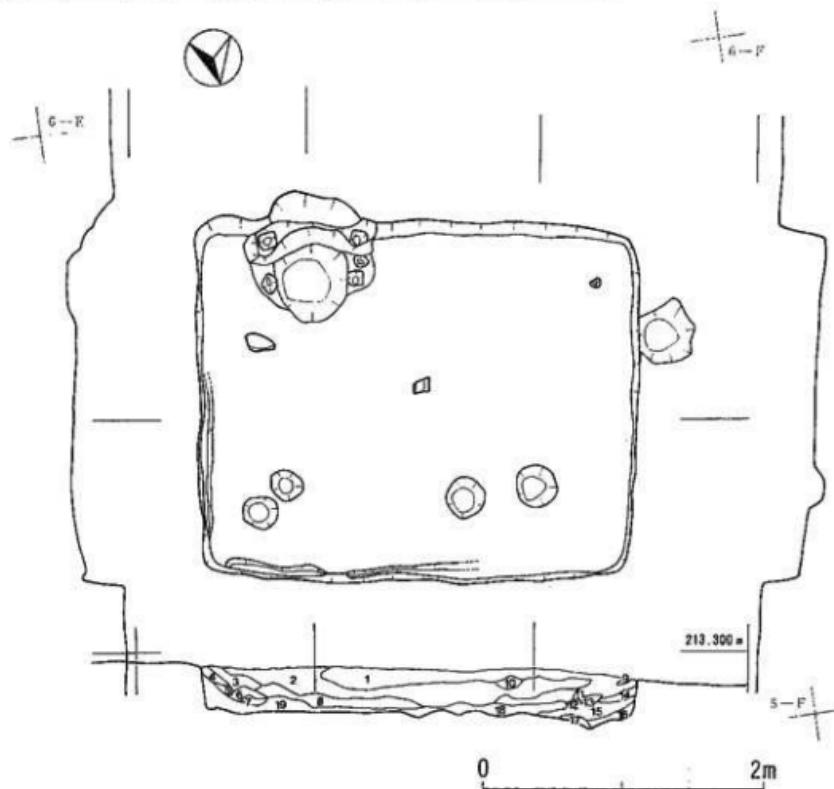


第6図 S I 010 構造跡出土土器拓影図

第6表

S I 010 構造跡出土土器説明表

実測図番号	図版番号	社記番号	形態	部位	器面調整法			粘土含有物	色調	備考
					外面	内面	底面			
6-1	20-1	R P フク土中2	甕・底部	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ		粘土を含む	5YR 5% に近い褐	土器
6-2	20-2	R P-括	甕・胴部	刷毛目	ヘラナデ				7.5YR 5% 褐	土器
6-3	20-3	R P-括	甕・胴部	刷毛目	ヘラナデ				7.5YR 5% に近い褐	土器
6-4	20-4	R P-括	甕・胴部	刷毛目	ヘラナデ				7.5YR 5% 褐	土器



第7図 S 1004堅穴住居跡土層計測図

S 1004堅穴住居跡土層計測図

- | | | |
|-------------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------------|
| 1 5 Y R 1・河 浮石及び明黄褐色土少量
混入 黑色土 | 2 7.5Y R 1・河 浮石多量混入 强粘性土 | 3 5 Y R 1-3% 浮石及び暗褐色土少量混
入 强粘性 黑色土 |
| 4 7.5Y R 5% 浮石多量混入 黑色土 | 5 7.5Y R 5% 浮石少量混入 强粘性 混
色土 | 6 5 Y R 1・河 浮石多量混入 黑色土 |
| 7 7.5Y R 1・河 浮石少量混入 强粘性
黑色土 | 8 10Y R 5% 黄褐色土粒混入 强粘性
黑褐色土 | 9 10Y R 5% 浮石多量混入 黑色土 |
| 10 2.5Y R 1・河 强粘性 赤黑色土 | 11 10Y R 5% 黄褐色土粒少量混入 黑褐色土 | 12 7.5Y R 5% 明黄褐色土粒炭化物混入
强粘性 黑色土 |
| 13 7.5Y R 5% 黑色土少量混入 炭化物混
入 黑色地土 | 14 10Y R 5% 浮石及び明黄褐色土少量混
入 强粘性 黑色土 | 15 10Y R 5% 明黄褐色土粒混入 灰褐色土 |
| 16 10Y R 5% 明黄褐色土粒混入 强粘性
褐色土 | 17 10Y R 5% 黄褐色土 (ローム) | 18 10Y R 5% 黄褐色土混入 强粘性 黑
褐色土 |
| 19 10Y R 5% 浮石及び黄褐色土少量混入
强粘性 黑色土 | | |

第7表

S I 004 竪穴住居跡計測説明表

検出地区	6・F	実測図番号	7・8	図版番号	5
	南側壁	西側壁	北側壁	東側壁	
法 量	壁長	318.5cm	245cm	315cm	249cm
	壁高	22.6~40.0cm	21.0~29.1cm	26.8~32.7cm	29.1~37.6cm
	壁溝幅	7~12cm	なし	なし	5~11cm
	壁溝深	1.1~1.8cm	なし	なし	0.4~1.0cm
形態	方形	面積	7.98cm	主軸方位	S・3°・W
イラン確認時の状態	4層(黒褐色土~暗褐色土)上面で、白色浮石質火山灰粒を多量に粗に含む黒色土の方形を呈する落ち込みとその南側壁にかまどらしき焼土混入粘土プランを確認した。白色浮石質火山灰は既よりやや離れて帶状に巡るようにプラン確認された。この火山灰の層と壁の間に炭化材の列が検出された。				
覆土と床面の状態	白色浮石質火山灰粒を多く含んでいるが、この火山灰粒はプライマリーな堆積ではなく再堆積したものである。床面近くには多量の炭化物、材が散乱しており、焼土が厚く堆積している。 床面は熱変化が激しく、原状は不明であるが、凹凸は少ない。				
柱穴	床面上に4カ所存在しているが上部構造を知る手がかりとはならない。 壁渠も東側と北側壁の一部に認められているが、炭化板状の存在から四壁下に存在していたと考えられるが、床面が荒れているので確認できなかったかも知れない。				
かまど	南側壁の中央部からやや東寄りに構築されている。通道は頗く煙出孔に向って急上昇する所謂関東型のかまど形態を呈する。				
遺物の出土状況	覆土中から繩文土器底部破片1点、陶磁器片1点、環形土師器1点、器外面体部に墨書きのある環形土師器2点、环形土師器破片8点、斐形土師器の口縁部破片11点、胴部破片64点、底部破片9点が出土している。 かまど中から斐形土師器2点、斐形土師器底部破片1点が出土している。				



第8図 S I 004 竪穴住居跡かまど実測図

S I 004 竪穴住居跡かまど土層記

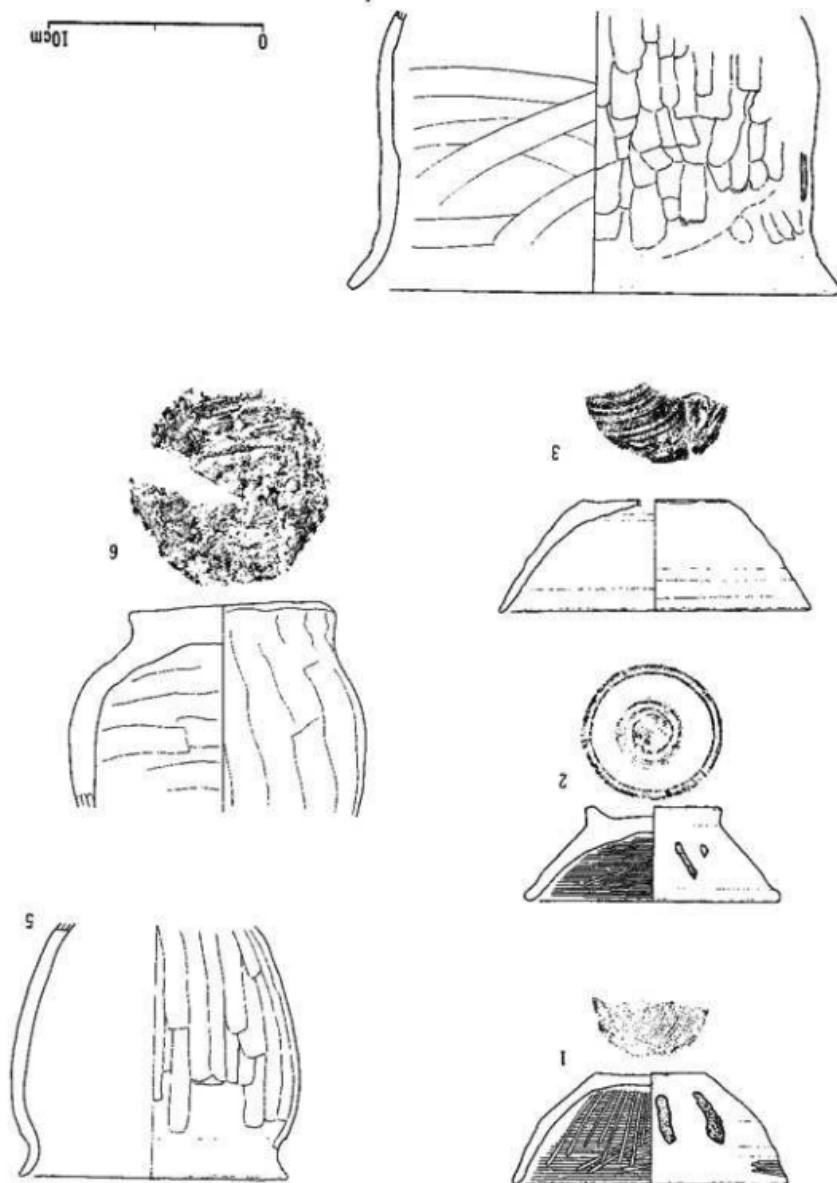
1 10YR 5/6 黒粘土・褐色土・灰混入 黄褐
 2 10YR 3/6 浮石・明黄褐色土・灰混入 黑
 3 7.5YR 3/6 浮石・明黄褐色土・灰混入
 色粘土 黒色土

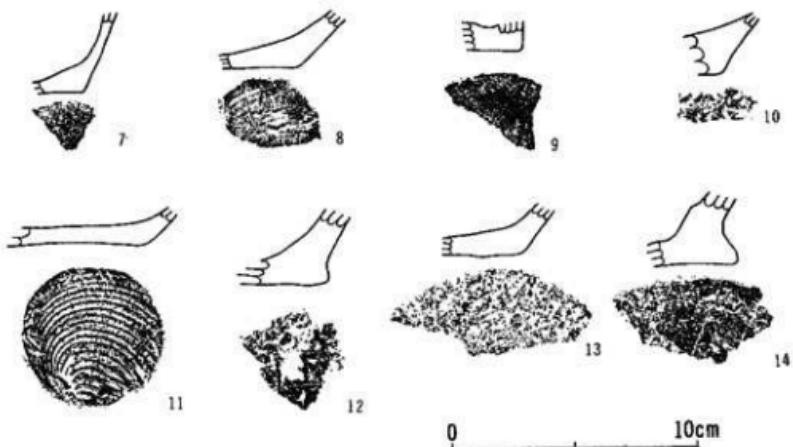
- 4 10 YR 4/2 黄褐色土粒混入 黄色
5 7.5 YR 5/6 深褐色土
6 5 YR 4/2 红褐色土
7 5 YR 5/6 红褐色土
8 5 YR 4/2 浅红褐色混入 黑褐色土
9 7.5 YR 4/6 深褐色土
10 7.5 YR 5/6 褐色土
11 7.5 YR 5/6 浅石多盐混入 黑色土
12 5 YR 4/2 黑色土
13 5 YR 5/6 赤褐色土
14 7.5 YR 5/6 深褐色地上

第8表 S I 1004 壁穴住居跡出土土器説明表

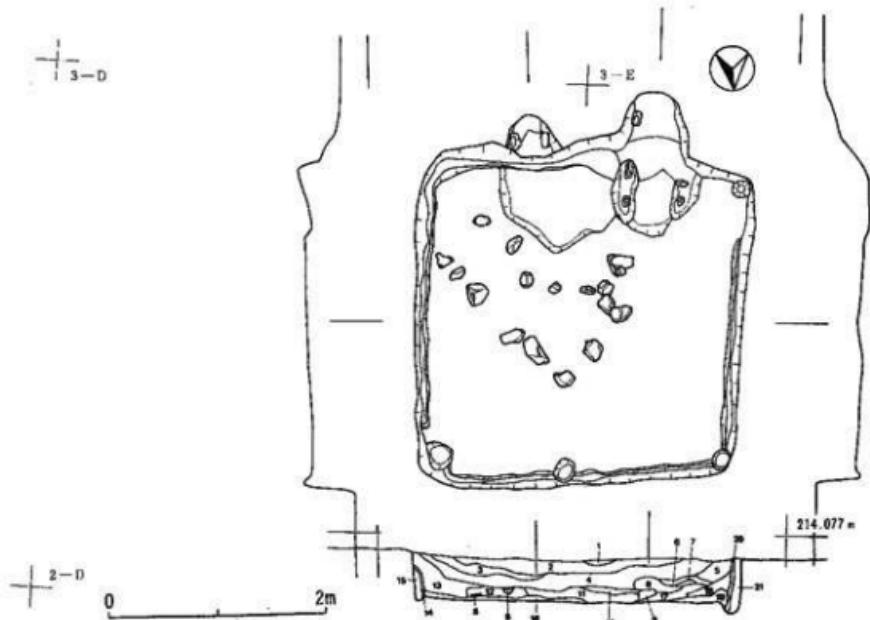
実測番号	固有番号	記載番号	形態・部位	算面			粘土含有物	色調	備考
				外面	内面	底面			
9-1	15-1	一括 フク土中	环	ロクロ	ロクロ	圓軸斜切		10 YR 4/2 にふい黄鐵	土師器
9-2	15-2	一括 フク土中	环	ロクロ	ロクロ	圓軸斜切		10 YR 4/2 にふい黄鐵	土師器
9-3	15-3	フク土中	环	ロクロ	ロクロ	圓軸斜切		7.5 YR 4/2 にふい橙	土師器
9-4	15-4	一括 フク土中	腰・口縁部	ヘラケズリ	ヘラナデ		粗砂を含む	10 YR 4/2 にふい黄鐵	土師器
9-5	15-5	一括 フク土中	腰・口縁部	ヘラナデ	ヘラナデ		粗砂を含む	10 YR 4/2 淡黄鐵	土師器
9-6	15-6	KBP 支撑部	腰・底部	ヘラケズリ	ヘラナデ	圓軸斜切	粗砂を含む	7.5 YR 4/2 橙	土師器
10-7	16-1	一括	腰・底部	ヘラケズリ	ヘラナデ	平滑	粗砂を含む	7.5 YR 4/2 にふい橙	土師器
10-8	16-2	一括	环・底部	ロクロ	ロクロ	圓軸斜切		5 YR 4/2 橙	土師器
10-9	16-3	一括 フク土中	腰・底部	ヘラナデ	ヘラナデ	平滑	細砂を含む	7.5 YR 4/2 にふい橙	土師器
10-10	16-4	一括 フク土中	腰・底部	ヘラナデ	ヘラナデ	凹凸あり	粗砂を含む	7.5 YR 4/2 にふい橙	土師器
10-11	16-5	一括	环・底部	ロクロ	ロクロ	圓軸斜切		7.5 YR 4/2 橙	土師器
10-12	16-6	一括 フク土中	腰・底部	ヘラケズリ	ヘラナデ	本紫紅	粗砂を含む	10 YR 4/2 にふい黄鐵	土師器
10-13	16-7	一括	腰・底部	ヘラケズリ	ヘラナデ	砂底	粗砂を含む	7.5 YR 4/2 にふい橙	土師器
10-14	16-8	一括 フク土中	腰・底部	ヘラナデ	ヘラナデ	本紫紅	粗砂を含む	10 YR 4/2 黒褐	土師器

第9圖 S 1004號火車器輪出土工具實測圖(1)





第10図 SI 004竪穴住居跡出土土器拓影・実測図(2)



第11図 SI 005竪穴住居跡実測図

S I 005 壁穴住居跡土層註記

1 10YR 1-2 黑 粘性 黑色土	2 10YR 5 黄褐色土粒混入 黑褐色土	3 10YR 5 黄褐色土粒混入 黑褐色土
4 10YR 5 黄褐色土粒混入 黑褐色土	5 10YR 5 黄褐色土粒混入 黑褐色土	6 10YR 5 黄褐色土
7 10YR 5 浮石及黄褐色土粒混入 黑褐色土	8 7.5YR 7 黄褐色土粒混入 黑褐色土	9 10YR 5 黄褐色土
10 10YR 5 浮石混入 黑褐色土	11 10YR 5 浮石、黄褐色土粒混入 黑褐色土	12 10YR 5 浮石、黄褐色土粒混入 黑褐色土
13 10YR 1-2 黑 粘性 黑色土	14 炭化物(壁板)	15 10YR 5 浮石混入 黑褐色土
16 5YR 5 明赤褐色土	17 10YR 5 浮石、黄褐色土粒混入 黑褐色土	18 10YR 1-2 黑 粘性 黑色土
19 5YR 5 明赤褐色土	20 炭化物(壁板)	21 10YR 5 浮石混入 黑褐色土

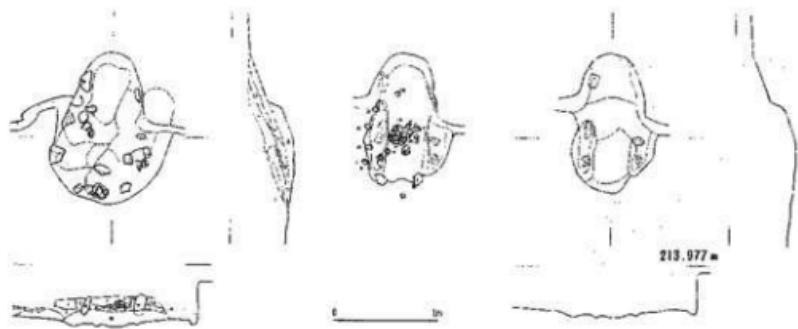
第9表

S I 005 壁穴住居跡計測説明表

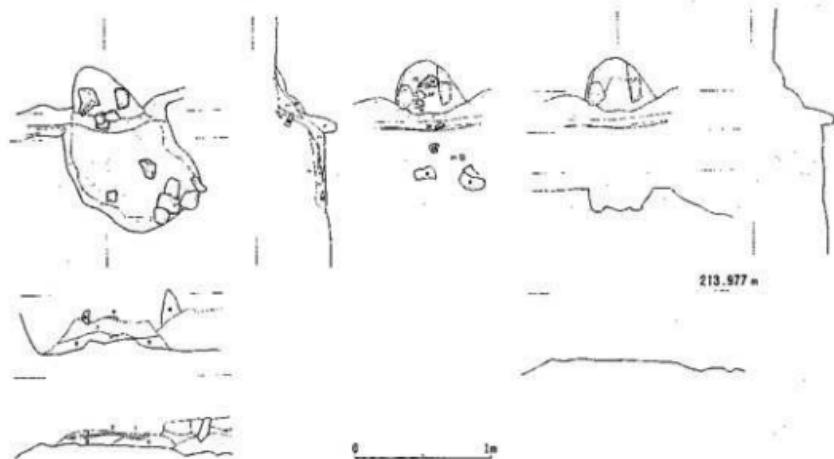
検出地区	3-E, 3-F		実測開番号	11, 12, 13	開版番号	6
	南側壁	西側壁				
法 量	壁長	318.5cm	288.0cm	295.8cm	329.5cm	
	壁高	37.1~38.8cm	37.4~44.8cm	35.0~40.2cm	37.2~46.5cm	
	壁溝幅	16~19cm	8.5~16cm	5.5~12cm	8~12.5cm	
	壁溝深	9.4~9.6cm	5.9~10.9cm	0.7~7.7cm	0.4~6.3cm	
形態	方形	面積	9.92m ²	主軸方位	S-3°30' E	
プラン確認時 の状態	4層(黒褐色土~粘土)上面に、白色浮石質火山灰粒を相に多量に含む黒色土の方形プランを確認した。 方形プランの内側に炭化物が帯状に一巡し、その内側に白色浮石質火山灰粒が帯状に認められる。					
覆土と床面 の状態	焼失した住居跡である。床面上には炭化物と焼上が厚く堆積し、赤変した自然石が散乱している。					
柱穴	北側壁の内側下方に3ヵ所、西南側隔1ヵ所の4ヵ所穿たれています。この配置状況から本末の柱穴配置は床面中央ではなく、各壁隅部と各壁中央部下方に存在する形態と考えられる。					
かまと	南側壁に2期(改築)の2基が構築されており、南東側が古く、南西側が新しい。 いずれも所謂関東型のかまと形態を呈する。					
遺物の出土状況	覆土中から环形土器の底部破片1点、体部破片2点、變形土器の口縁部破片4点、胴部破片46点、底部破片15点が出土している。床面からは环形土器1点、かまと中から环形土器の口縁部破片2点、体部破片2点、變形土器の口縁部破片11点、胴部破片36点、底部破片5点、變形土器1点出土している。					

S I 005 壁穴住居跡かまと(1)土層註記

1 7.5YR 5 炭化物少量混入 黑色土	2 10YR 5 黄褐色土粒混入 黑褐色土	3 10YR 5 炭化物混入 強粘性 黑色土
4 7.5YR 5 強粘性 黑褐色土	5 7.5YR 5 浮石混入 黑褐色土	6 10YR 5 炭化物混入 黑褐色土
7 7.5YR 5 強粘性 深褐色土(熱変化)	8 7.5YR 5 砂質 明赤褐色土	9 7.5YR 5 浮石混入 黑褐色土
10 10YR 5 黑褐色土粒混入 強粘性 黑褐色土	11 5YR 5 明赤褐色土	12 10YR 5 砂質粘土質混入 黑褐色土
13 炭化物		



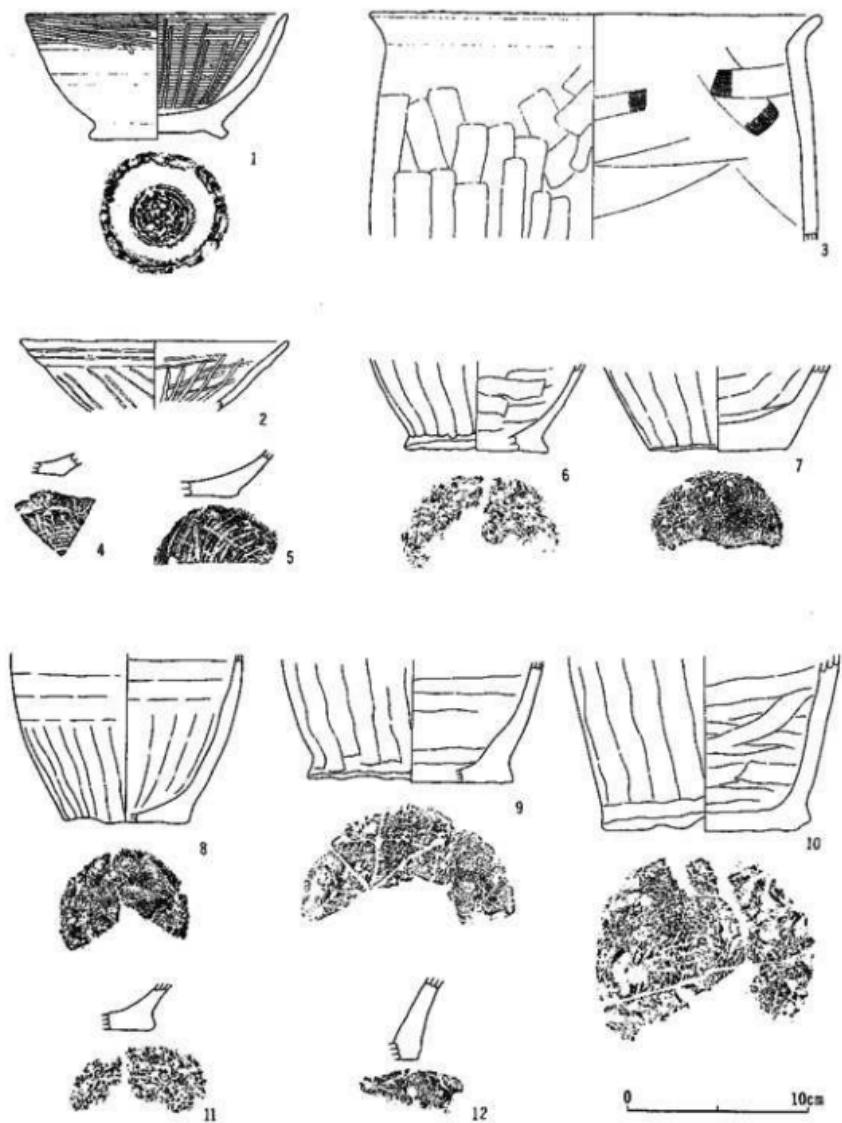
第12図 S I 005 壴穴住居跡かまと(1)実測図



第13図 S I 005 壴穴住居跡かまと(2)実測図

S I 005 壴穴住居跡かまと(2)土層記

- | | | |
|------------------------------------|--------------------------|------------------------------------|
| 1 7.5 YR 4/6 浮石黄褐色土紋・炭化物混入
風褐色土 | 2 炭化物 | 3 7.5 YR 4/6 黄褐色土紋・炭化物混入黑
褐色土 |
| 4 7.5 YR 4/6 司褐色土(純土) | 5 7.5 YR 4/6 黄褐色土粒混入 黑色土 | 6 7.5 YR 4/6 黄褐色土紋・純土粒浮石混
入 黑色土 |
| 7 7.5 YR 4/6 黄褐色土紋・炭化物混入純土 | 8 10 YR 4/6 黄褐色土粒混入純土 | 9 10 YR 4/6 黄褐色土紋純土 |



第14図 S I 005堅穴住居跡出土土器実測図

第10表

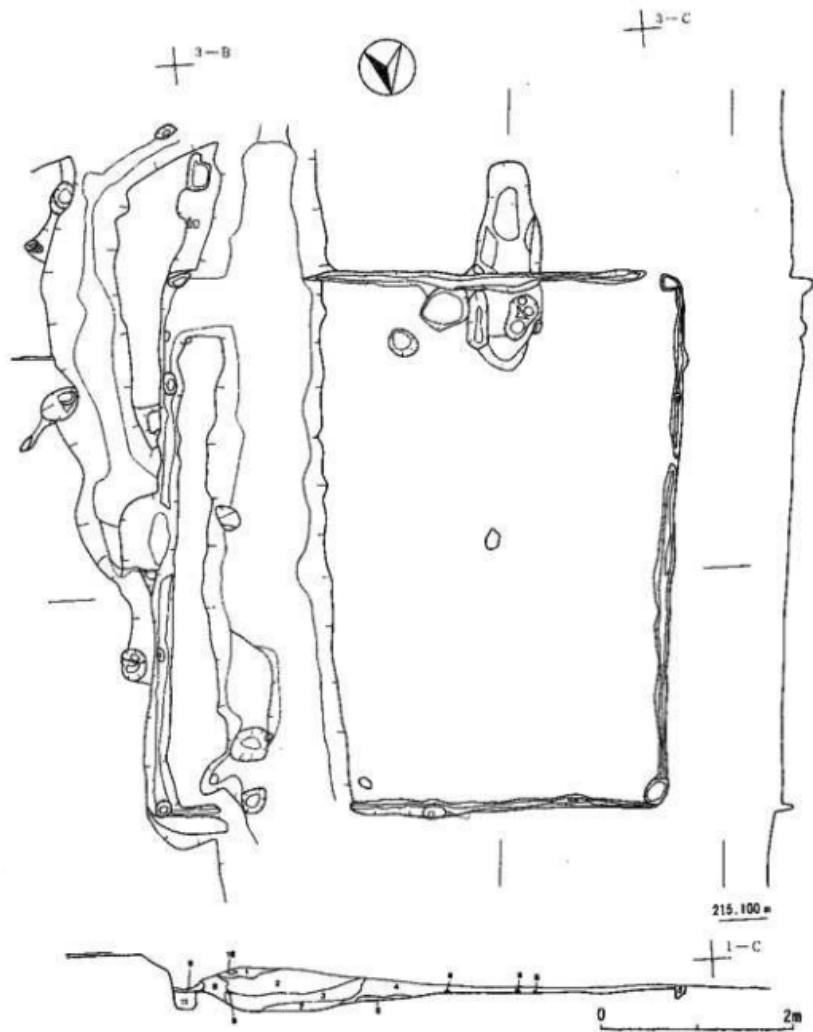
S I 005 壓穴住居跡出土土器説明表

実測番号	陶器番号	記載番号	形態・部位	器面調整法			胎土含有物	色調	備考
				外面	内面	底面			
14-1	16-9	床面	环	ロクロ	黑色處理	回転系切		10YR 8/4 に赤い黄緑	高石付 土師器
14-2	16-10	KRP-23	环	ロクロ	黑色處理	回転系切		10YR 8/4 に赤い黄緑	土師器
14-3	16-11	KRP-27	窓・口縁部	ユビナデ	ユビナデ		織紗を含む	7.5YR 8/4 黄白	上部器
14-4	16-12	R P-1 カマド付近	窓・底部	ヘラケズリ	ヘラナチ	回転系切		5YR 8/4 明赤褐	土師器
14-5	16-13	R P-1 カマド付近	窓・底部	ヘラケズリ	ヘラナチ	回転系切		10YR 8/4 に赤い黄緑	土師器
14-6	16-14	R P-1 カマド付近	窓・底部	ヘラケズリ	ヘラナチ	不明確	織紗を含む	5YR 8/4 に赤い赤褐	上部器
14-7	16-15	KRP-33	窓・底部	ヘラケズリ	ヘラナチ	不明確	織紗を含む	10YR 8/4 黒褐	上部器
14-8	16-16	R P-1 カマド付近	窓・底部	ヘラケズリ	ヘラナチ	砂粒付着	粗糲を含む	5YR 8/4 に赤い赤褐	土師器
14-9	16-17	KRP-34	窓・底部	ヘラケズリ	ヘラナチ	木葉痕	粗糲を含む	5YR 8/4 に赤い赤褐	土師器
14-10	16-18	R P-1 カマド付近	窓・底部	ヘラケズリ	ヘラナチ	木葉痕	粗糲を含む	7.5YR 8/4 に赤い褐	土師器
14-11	16-19	R P-1 カマド付近	窓・底部	ヘラケズリ	ヘラナチ	不明確	織紗を含む	5YR 8/4 に赤い褐	土師器
14-12	16-20	R P-1 カマド付近	窓・底部	ヘラケズリ	ヘラナチ	不明確	織紗を含む	7.5YR 8/4 に赤い褐	土師器

第11表

S I 006 壓穴住居跡計測説明表

検出地区	2-C、3-C		実測番号	15、16	図版番号	7
	南側	北側				
法 量	壁長	562.5cm	576.5cm	550.5cm	587.5cm	
	壁高	8.4~23.8cm	0.7~6.9cm	1.7~11.8cm	25.2~50.0cm	
	壁溝幅	5.5~13.0cm	5~18cm	7.5~12.5cm	14.5~19.5cm	
	壁溝深	10.3~16.3cm	3.9~19.2cm	12.3~17.1cm	8.3~11.0cm	
形 態	方 形	面 積	33.86m ²	主軸方位	S-1°-W	
プラン確認時 の状態	4層(黒褐色土~暗褐色土)上面で、かまど粘土、燒土範囲が当初確認され、その後、白色浮石質火山灰粒混りの黒色土の方形状プランが確認され、東側を溝(S D001)により破壊されている。					
覆土と床面 の状態	覆土の上半は、白色浮石質火山灰粒混りであるが、床面近くは焼土、灰、炭化物混りとなる。床面は、赤化している黄褐色火山灰層であるが炭化物、灰、焼土が付着している。					
柱 穴	北西及び南西隅部に各1穴、かまど左袖近くの床面と北東側床面に各1穴の4カ所に検出されている。 住居跡の規模は本遺跡中最大であるが、柱穴配置は、各壁隅部に主柱穴を配置する形態と考えられる。					
か ま ど	南側壁の中央部からやや西寄りに構築されている。南袖部に圓形土師器を芯材として利用している。かまどの形態は所謂東北型を呈する。					
遺 物 の 出 土 状 況	覆土中から環形土師器の口縁部破片3点、体部破片1点、圓形土師器の口縁部破片7点、胴部破片27点、底部破片3点、かまど付近床面から圓形埴器胴部破片1点、環形土師器2点、環形土師器の口縁部破片6点、体部破片6点、圓形土師器1点、圓形土師器の口縁部破片13点、胴部破片105点、底部破片8点、かまど中から、圓形土師器1点、圓形土師器の口縁部破片29点、胴部破片90点、底部破片19点出土している。					

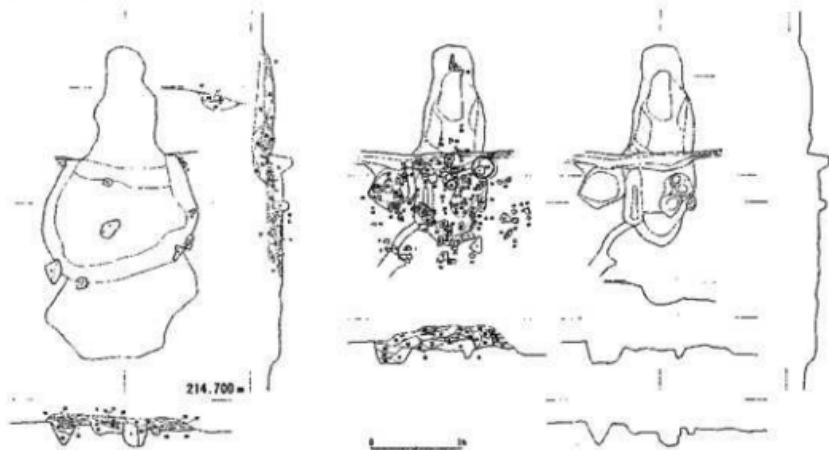


第15圖 S I 006竪穴住居跡実測図

S I 006竪穴住居跡土層註記

- | | | | | | |
|-------------|----------------------------------|-------------|--------------|-------------|------------------------|
| 1 10Y R 5% | 浮石混入 黑褐色土 | 2 7.5Y R 5% | 弱粘性 稀黄褐色土 | 3 7.5Y R 5% | 砂粒多量混入 弱粘性 仁
山い黄褐色土 |
| 4 7.5Y R 5% | 炭化物多量 黑褐色土粒・
深褐色土少量混入 弱粘性 黑色土 | 5 7.5Y R 5% | 浮石混入 弱粘性 黑色土 | 6 7.5Y R 5% | 炭化物少量混入 弱粘性
褐色土 |

- 7 10YR 5/6 浮石混入 弱粘性 黑褐色
土
- 8 7.5YR 4/6 水化物混入 黑色土
- 9 10YR 5/6 黄褐色土轻量混入 中粘性 黑褐色土
- 10 10YR 5/6 浮石层
- 11 10YR 5/6 シルト質弱粘性 黑褐色土

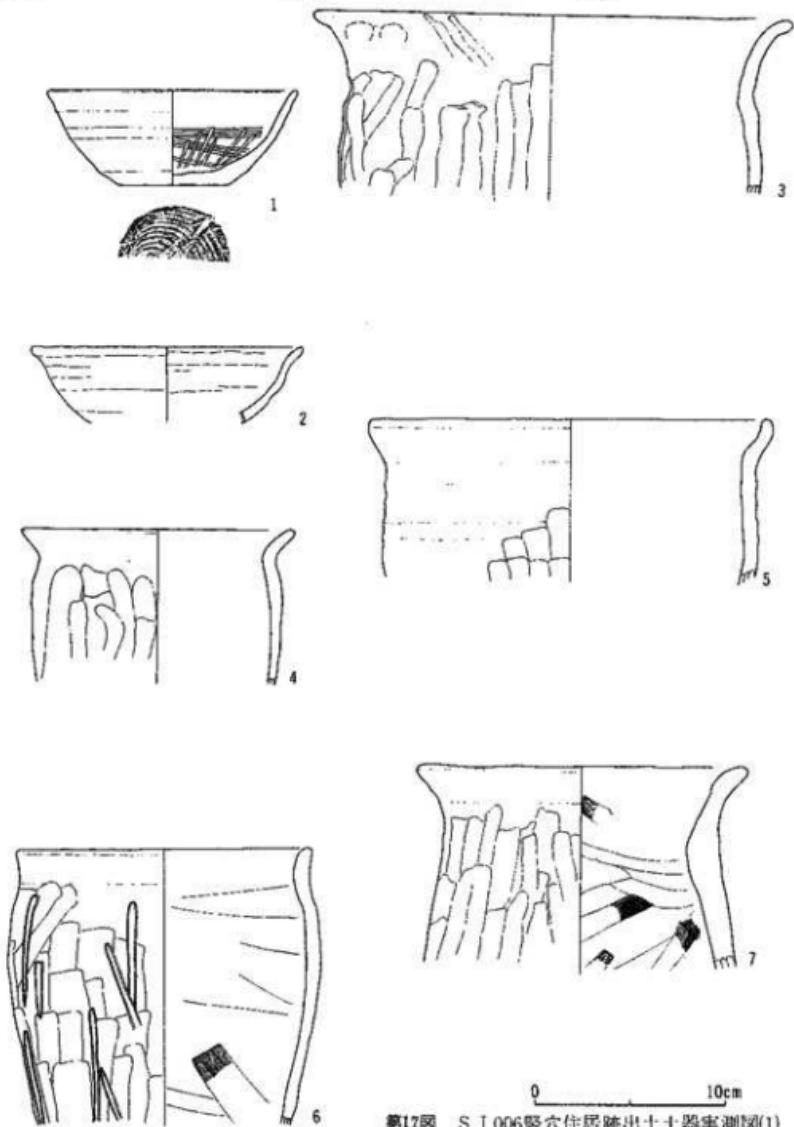


第16図 S I 006 竪穴住居跡かまど層測定図

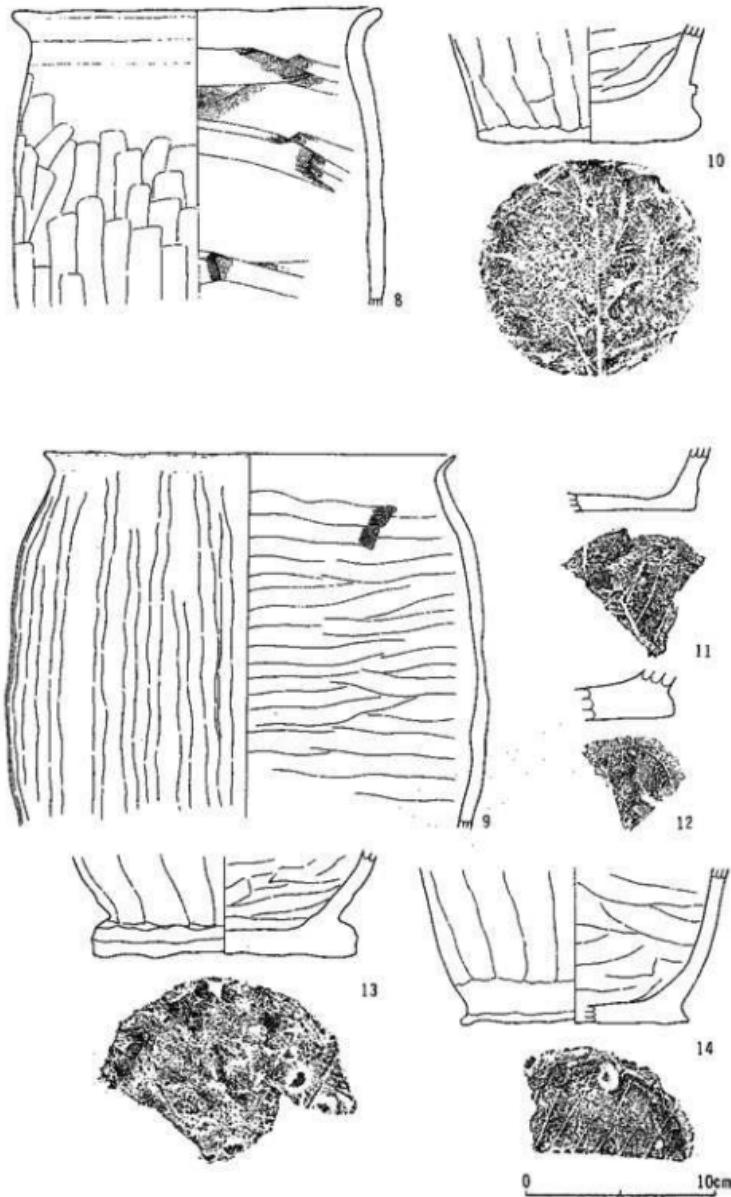
S I 006 竪穴住居跡かまど層記述

- | | | |
|------------------------------------|------------------------------------|-------------------------------------|
| 1 10YR 5/6 泥褐色土、浮石多量混入
砂質 黑褐色土 | 2 5YR 4/6 浮石微量混入 粘質 赤褐色土 | 3 10YR 5/6 浮石少量混入 砂質 黑色土 |
| 4 10YR 5/6 黑褐色土混入 砂質 明黄色
褐色土 | 5 7.5YR 4/6 黄褐色土混入 粘土 | 6 7.5YR 4/6 粘質 淩褐色土 |
| 7 7.5YR 4/6 粘土少量混入 黑褐色土 | 8 5YR 4/6 赤褐色粘土 | 9 5YR 4/6 粘質 喷赤褐色土 |
| 10 2.5YR 5/6 粘土少量混入 明赤褐色土 | 11 2.5YR 4/6 明赤褐色土 | 12 5YR 4/6 粘土粘少量混入 粘質 喷
赤褐色土 |
| 13 7.5YR 4/6 喷黄褐色土混入 砂質 黑
褐色土 | 14 5YR 4/6 弱粘性 黑色土 | 15 7.5YR 4/6 粘土混入 砂質 黑色土 |
| 16 2.5YR 4/6 粘質 黑褐色土 | 17 5YR 4/6 砂質 黑褐色土 | 18 浮石 |
| 19 7.5YR 4/6 砂質 黑褐色土 | 20 5YR 4/6 浮石少量混入 弱粘性 黑
褐色土 | 21 10YR 4/6 地上少量混入 砂質 黑
色土 |
| 22 7.5YR 4/6 粘土少量混入 黑色土 | 23 5YR 4/6 黑褐色土混入 砂質 本褐色
土 | 24 5YR 4/6 烧土混入 砂質 本褐色土 |
| 25 5YR 4/6 小量少量混入 粘質 本褐
色土 | 26 10YR 4/6 砂質 黑褐色土 | 27 10YR 4/6 喷土及U形槽色土少量混入
砂質 黑褐色土 |
| 28 2.5YR 4/6 黄褐色土少量混入 砂質
黑褐色土 | 29 10YR 4/6 砂質 黑褐色土 | 30 10YR 4/6 粘土少量混入 砂質 黑褐
色土 |
| 31 7.5YR 4/6 浮石混入 砂質 棕褐色土 | 32 10YR 4/6 粘土粘 浮石多量混入 砂
質 棕褐色土 | 33 5YR 4/6 粘質 水滌褐色土 |
| 34 10YR 4/6 粘土粒 浮石多量混入 砂
質 黑褐色土 | 35 10YR 4/6 砂質 黄褐色土 | 36 7.5YR 4/6 砂質 棕褐色土 |
| 37 10YR 4/6 砂質 黄褐色土 | 38 7.5YR 4/6 砂質 棕褐色土 | 39 7.5YR 4/6 粘性 棕褐色土 |
| 40 7.5YR 4/6 浮石少量混入 砂質 黑色
土 | 41 5YR 4/6 浮石混入 砂質 本褐色土 | 42 7.5YR 4/6 砂質 黑褐色土 |
| 43 10YR 4/6 黄褐色土粒少量混入 砂質
黑褐色土 | 44 10YR 4/6 砂質 黑色土 | 45 5YR 4/6 明褐色土粒混入 粘質 本
褐色土 |
| 46 5YR 4/6 明褐色土粒混入 砂質 赤
褐色土 | 47 7.5YR 4/6 明赤褐色土粒混入 砂質
赤褐色土 | 48 7.5YR 4/6 地上少量混入 砂質 黑褐
色土 |
| 49 5YR 4/6 喷褐色土粒少量混入 粘質
赤褐色土 | 50 5YR 4/6 黑褐色土粒混入 砂質 喷
赤褐色土 | 51 7.5YR 4/6 砂質 喷褐色土 |

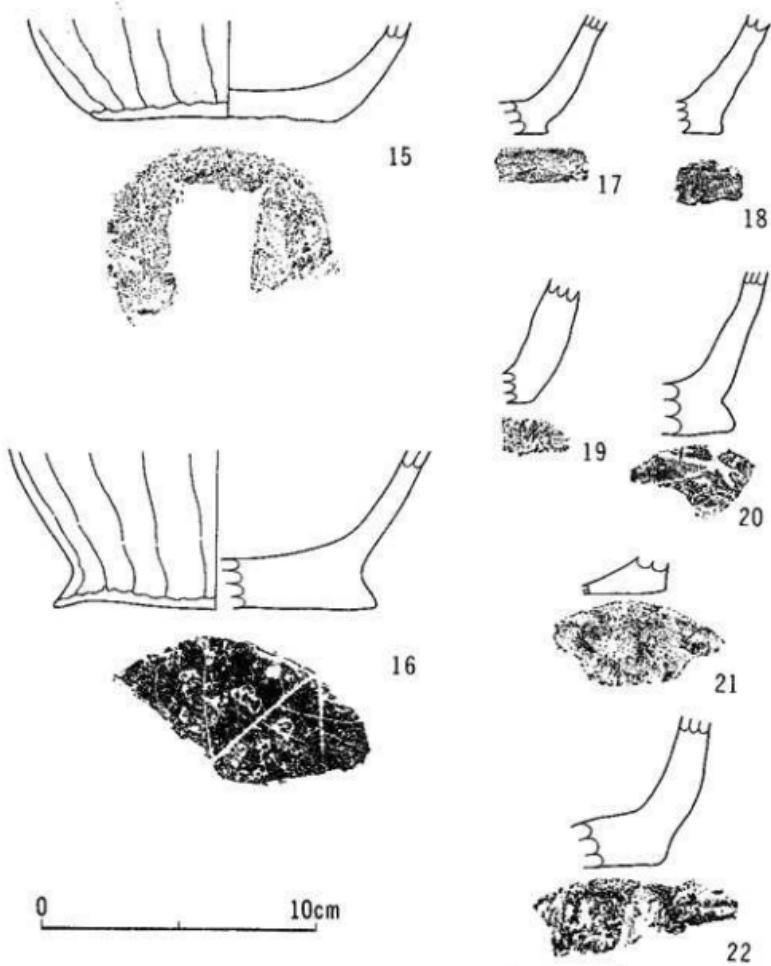
- | | | |
|-------------------------------|------------------------------|-------------------------------|
| 52 7.5 Y R 5% 砂質 黑褐色土 | 53 5 Y R 5% 黑褐色土較混入 砂質 赤褐色土 | 54 7.5 Y R 5% 地土少量混入 砂質 黑褐色土 |
| 55 10 Y R 5% 明褐色土少量混入 砂質 黑褐色土 | 56 10 Y R 5% 砂粒多量混入 砂質 黑褐色土 | 57 10 Y R 5% 赤褐色土少量混入 砂質 黑褐色土 |
| 58 10 Y R 5% 明褐色土較混入 砂質 黑褐色土 | 59 10 Y R 5% 明褐色土較混入 砂質 黑褐色土 | 60 7.5 Y R 5% 黑褐色土較混入 砂質 黑褐色土 |



第17図 S I 006竪穴住居跡出土土器実測図(1)



第18図 S.I.006竪穴住居跡出土土器実測図(2)



第19図 S.I. 006 垂穴住居跡出土土器拓影実測図(3)

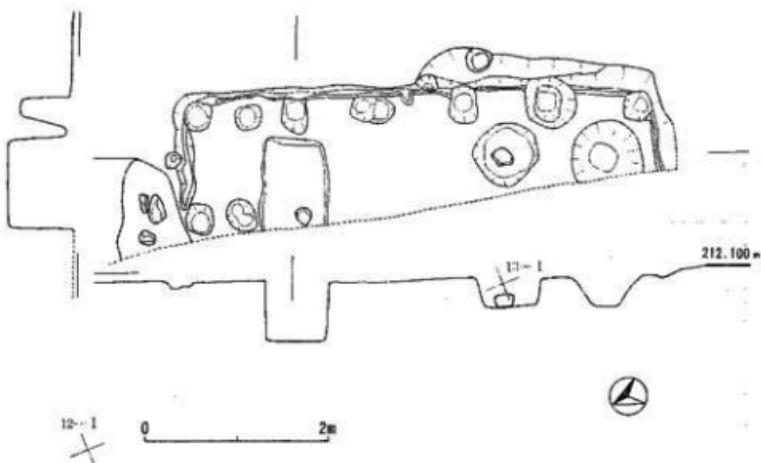
第12表 S.I. 006 垂穴住居跡出土土器説明表

実測図 番号	図 版 番 号	社 記 番 号	形 態 位	器 面 調 整 法			粘 土 含 有 物	色 調	備 考
				外 面	内 面	底 面			
17-1	17-1	カマド	环	ロクロ	黒色處理	圓板余切		7.5YR 3/4 に3/4V橙	土師器
17-2	17-2	カマド付近	环	ロクロ	ロクロ			7.5YR 3/4 に3/4V橙	土師器

17-3	17-3	R P-括 カマド付近	甕 口縁部	ヘラナテ	ヘラナテ		粗砂を含む	7.5Y R % 灰白	土師器
17-4	17-4	R P-括 フクド中	甕 口縁部	ヘラナテ	ヘラナテ		粗砂を含む	10Y R % (灰黄)	土師器
17-5	17-5	K R P 16	甕 口縁部	ヘラナテ	ヘラナテ		粗砂を含む	7.5Y R % 淡黄	土師器
17-6	17-6	K R P 1	甕 口縁部	ヘラナテ	ヘラナテ		粗砂を含む	10Y R % にふい黄	土師器
17-7	17-7	K R P 80	甕 口縁部	ヘラナテ	ヘラナテ		粗砂を含む	5 Y R % 棕	土師器
18-8	17-8	K R P 82	甕 口縁部	ヘラナテ	ヘラナテ		粗砂を含む	7.5Y R % 淡黄	土師器
18-9	17-9	K R P 82	甕 口縁部	ヘラナテ	ヘラナテ		粗砂を含む	7.5Y R % 棕	土師器
18-10	18-10	K R P 79	甕底 部	ヘラケズリ	ヘラナテ	砂+木葉	粗砂を含む	10Y R % にふい黄	土師器
18-11	18-11	K R P 45	甕底 部	ヘラケズリ	ヘラナテ	木葉底	粗砂を含む	10Y R % 浅黄	土師器
18-12	18-12	K R P 53	甕底 部	ヘラナテ	ヘラナテ	木葉底	粗砂を含む	7.5Y R % にふい黄	土師器
18-13	18-13	K R P 18	甕底 部	ヘラケズリ	ヘラナテ	砂 底	粗砂を含む	10Y R % にふい黄	土師器
18-14	18-14	K R P 88	甕底 部	ヘラケズリ	ヘラナテ	木葉底	粗砂を含む	7.5Y R % にふい黄	土師器
19-15	18-15	K R P 42, 41, 44	甕底 部	ヘラケズリ	ヘラナテ	砂 底	粗砂を含む	2.5Y R % 黄	土師器
19-16	18-16	カマド付近 K R P 22, 17, 一括	甕底 部	ヘラケズリ	ヘラナテ	砂+木葉	粗砂を含む	7.5Y R % 棕	土師器
19-17	18-17	K R P -括	甕底 部	ヘラケズリ	ヘラナテ	平 清	粗砂を含む	7.5Y R % にふい黄	土師器
19-18	18-18	K R P -括	甕底 部	ヘラケズリ	ヘラナテ	平 清	粗砂を含む	7.5Y R % 棕	土師器
19-19	18-19	K R P カマド付近一括	甕底 部	ヘラケズリ	ヘラナテ	平 清	粗砂を含む	10Y R % 灰黄	土師器
19-20	18-20	R P-括 フクド中	甕底 部	ヘラケズリ	ヘラナテ	平 清	粗砂を含む	5 Y R % にふい黄	土師器
19-21	18-21	K R P 52	甕底 部	ヘラナテ	ヘラナテ	制 離	粗砂を含む	10Y R % 明黄	土師器
19-22	18-22	K R P 86	甕底 部	ヘラナテ	ヘラナテ	ヘラケズリ	粗砂を含む	7.5Y R % にふい黄	土師器

第13表 S I 007 堪穴住居跡計測説明表

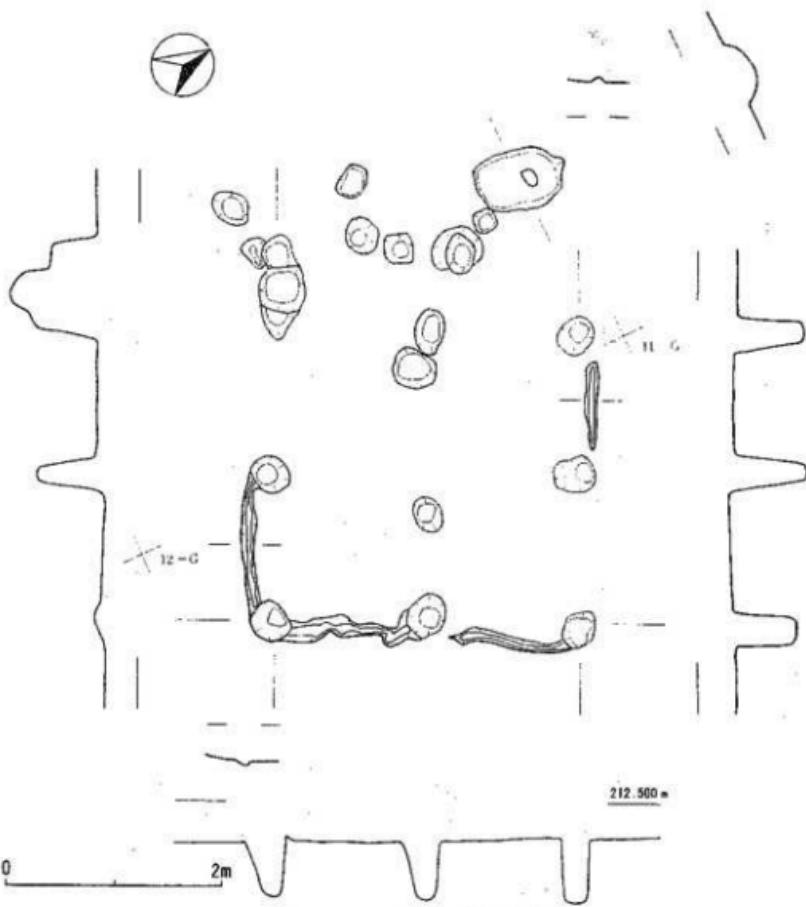
検出地区	13-1, 14-1		実測図番号	20	開版番号	8
	南側壁	西側壁				
法 量	壁長	122.5cm	なし	(169.5)cm		552.5cm
	壁高	(17.7)cm	なし	(0.1~3.2)cm	0.2~13.7cm	
	壁溝幅	(12.5~15)cm	なし	(12.5~15.5)cm	7.5~22.0cm	
	壁溝深	(2.5)cm	なし	(4.5)cm	7.3~8.5cm	
形 態	方 形	面 横	(8.16m ²)一部分	主軸方位	不 明	
プラン確認時 の状態	耕作地のため上部を剥・削土され、水田耕作されている。 隣地との境界線に一部確認されたのみである。					
覆土と床面 の状態	小砂利混りの暗茶褐色土が床面を覆っているが、プラン確認面では、水田耕作の影響か粘土質土が多い。床面は非常に踏み固められているが、ビットが多い。					
柱 穴	東側壁内側下方には等間に並び、北側にも壁内側下方に検出されている。					
かまど	検出されていない。					
遺物の 出土状況	遺物の出土なし。					



第20図 S I 007 竪穴住跡実測図

第14表 S I 009 竪穴住跡計測説明表

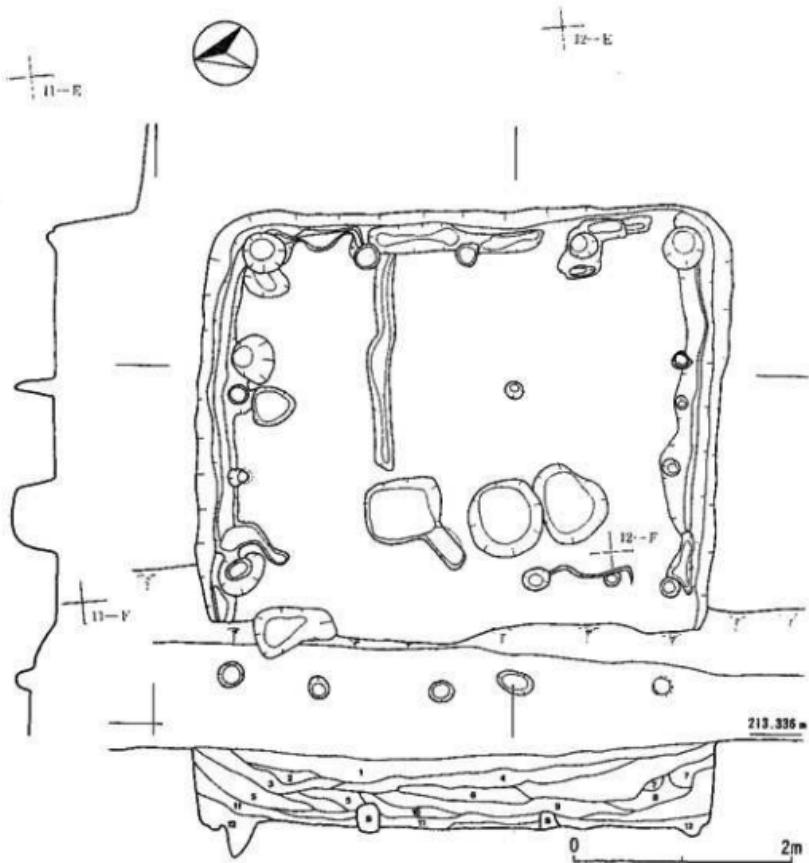
検出地区	12-G、12-H		実測図番号	21	図版番号	3、8
	南側壁	西側壁	北側壁		東側壁	
量	壁長 (320.5)cm	(324.5)cm	(318)cm		341.5cm	
	壁高 (0.9~1.3)cm	なし	(0.2~1.5)cm		(0.3~2.4)cm	
	壁溝幅 (6.5~13.5)cm	なし	(5.5~10.5)cm		7.5~18.5cm	
	壁溝深 (1.7~3.3)cm	なし	(1.5~3.4)cm		1.5~14.3cm	
形態	方形	面横	(11.65)m ²	主軸方位	不明	
プラン確認時の状態	耕地整理の際、剥・削土され、壁面は除去されわざかに柱穴と壁溝の配置から遺構の存在を確認した。					
覆土と床面の状態	ほぼ、床面上まで剥平されている。床面は平坦である。					
柱穴	遺構の周間（隅部と中央部）と床面の中央部に東西方向に穿たれている。					
かまど	検出されず。（本末かまどが構築されていれば、焚口部及び燃焼部の下面は熱変化しているはずで、たとえ床面が剥・削平された場合でもその痕跡を認めることができる。このことからかまどは構築されなかつたのかも知れない。）					
遺物の出土状況	菱形土器胴部破片1点が床面から出土。					



第21図 S 1009 橫穴住居跡発掘図

S 1011 橫穴住居跡発掘記

- | | | | | | |
|-------------|---------------------|--------------|----------------------|--------------|--------------------------|
| 1 10Y R 5号 | 漂石粒少量混入 黑褐色土 | 2 10Y R 5号 | 黄色ロームブロック混入
暗褐色土 | 3 10Y R 5号 | 泥化物・黄色ロームブロック
混入 暗褐色土 |
| 4 10Y R 5号 | 黄色ロームブロック混入
黑褐色土 | 5 2.5Y R 5号 | 黄色ロームブロック混入
明黄褐色土 | 6 10Y R 5号 | 漂石微量混入 黑褐色土 |
| 7 10Y R 5号 | 黄色ロームブロック混入
黑褐色土 | 8 10Y R 5号 | 黄色ロームブロック混入
灰黄褐色土 | 9 10Y R 5号 | 黄色ローム砂混入 黑色土 |
| 10 10Y R 5号 | 黄色ローム砂混入 黑褐色
土 | 11 2.5Y R 5号 | 黄色ロームブロック混入 黄
褐色土 | 12 2.5Y R 5号 | 黄色ローム砂混入 黄褐色土 |



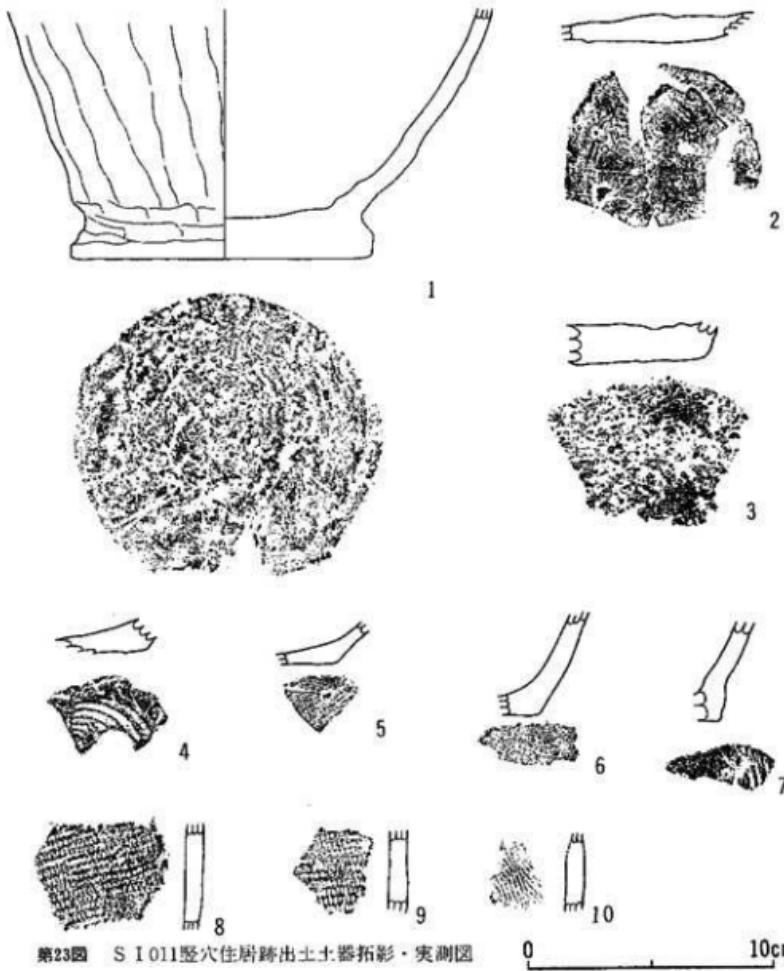
第22図 S I 011 竪穴住居跡実測図

第15表

S I 011 竪穴住居跡計測説明表

検出地区		12-F、12-G、13-F、13-G	実測図番号	22	図版番号	9
法 量	南側壁	西側壁	北側壁	東側壁		
	壁長 (407.5)cm	なし	(389.5)cm	479.5cm		
	壁高 (62.9~78.9)cm	なし	(51.4~65.3)cm	70.6~75.4cm		
	壁厚幅 (26.0~42.5)cm	なし	(17.5~22.5)cm	7.5~26.5cm		
	壁溝深 (3.8~7.0)cm	なし	3.4~7.2cm	4.4~8.7cm		
形 態	方 形	面 積	(19.65)m ²	主軸方位	S-1°-W	
プラン確認時 の状態	3層の黄褐色浮石質火山灰(大湯浮石)を剥ぐと浮石粒を混入する黒褐色土のプランが4層上面で確認できた。西側壁は耕地整理時に剥・削土され確認できなかった。S I 012竪穴住居跡を掘り込んでいる。					

覆土と床面の状態	覆土の上半に白色の浮石粒を多量に粗に混入するが、下半には黄褐色火山灰の团塊を混入する。床面は、若干軟かい。南東隅部を基点に拡張したらしく、墻溝底が床面に認められる。
柱穴	拡張前・後とも、壁内側下方の壁溝に隣接するようにはば等間に穿たれている。削・削平された西側壁方面でも柱穴が等間に並んでいる。
かまど	構築されていない。床面中央部から西南寄りの2つの円形ピットに焼土、灰、炭化物が充満していたことから、地床炉の可能性もある。
遺物の出土状況	遺物はいずれも覆土中からの出土である。縄文土器破片3点、壺形須恵器の口縁部破片2点、肩部破片1点、胸部破片1点、陶磁器破片1点、环形土師器底部破片2点、斐形土師器の口縁部破片2点、胸部破片19点、底部破片10点である。



第23図 S I 011縦穴住居跡出土土器撮影・実測図

— 151 —

第16表

S I 011 壓穴住居跡出土土器説明表

実測図番号	国番	記番号	形態・部位	器面調査法			胎土含有物	色調	備考
				外面	内面	底面			
23-1	19-1	R P-柄 カマド付近	甕・底部	ヘラケズリ	ヘラナテ	凹凸あり	粗糲を含む	5 YR 5/4 10 YR 5/4	褐色灰
23-2	19-2	R P-柄 フク土中	甕・底部	ヘラケズリ	ヘラナテ	不明確	粗糲を含む	5 YR 5/4 5 YR 6/4	褐色
23-3	19-3	R P-柄 フク土中	甕・底部	ヘラケズリ	ヘラナテ	凹凸あり	粗糲を含む	10 YR 5/4 灰褐色	土師器
23-4	19-4	R P-柄 フク土中	甕・底部	ロクロ	ロクロ	回転条切		7.5 YR 5/4 に近い	土師器
23-5	19-5	R P-柄 フク土中	甕・底部	ロクロ	ロクロ	回転条切		7.5 YR 5/4 に近い	土師器
23-6	19-6	R P-柄 フク土中	甕・底部	ヘラケズリ	ヘラナテ	不明確	粗糲を含む	7.5 YR 5/4 灰褐色	上師器
23-7	19-7	R P-柄 フク土中	甕・底部	ヘラケズリ	ヘラナテ	不明確	粗糲を含む	2.5 YR 5/4 明赤褐色	土師器
23-8	19-8	R P-柄 フク土中	縹文・胴部	L.R.	ヘラナテ			5 YR 5/4 明赤褐色	
23-9	19-9	R P-柄 フク土中	縹文・胴部	R.L.	ヘラナテ			7.5 YR 5/4 に近い	
23-10	19-10	R P-柄 フク土中	縹文・胴部	R.L.	ヘラナテ			10 YR 5/4 に近い	

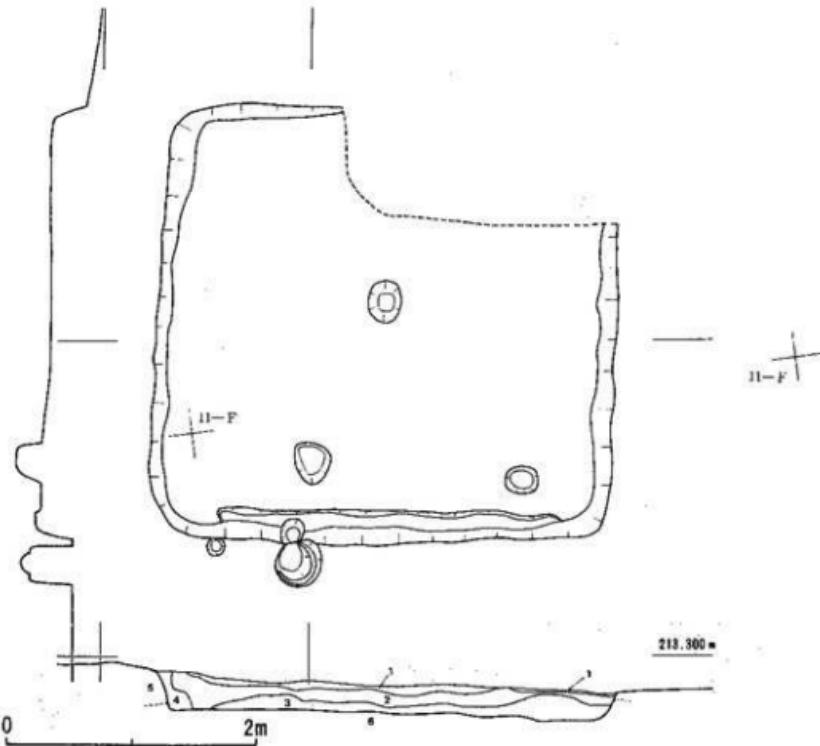
第17表

S I 012 壓穴住居跡計測説明表

検出地区	11-E、11-F、12-E、12-F		実測図番号	24		国番号	9
	南側壁	西側壁		北側壁	東側壁		
法	壁長	365.5cm		(370.5)cm		(347.5)cm	371.0cm
量	壁高	35.5~46.1cm		(25.5~42.0)cm		(23.4~27.6)cm	26.9~36.5cm
	壁溝幅	なし		なし		なし	13.5~21.5cm
	壁溝深	なし		なし		なし	0.7~6.4cm
形態	方形容	面積		(13.63)m ²	主軸方位	S~3°30'~W	
プラン確認時の状態	S I 011 の確認状況と同じ。3層の黄褐色浮石質火山灰は再堆積したものである。 S I 011 の北東隅部壁面にかまど粘土、燒土が若干付着していた。						
覆土と床面の状態	白色の浮石質火灰粒が粗に多量に混入する黒褐色土が床面を覆っていた。						
柱穴	床面に3カ所穿たれているが規則性がなく、上部構造をうかがうことができない。						
かまど	南側壁の中央部からやや西寄りに付設されていたがS I 011 構築の際破壊され、わずかにその痕跡を認めることができるだけである。						
遺物の出土状況	いずれも覆土中からの出土で、覆土を上部からI、II、IIIと分層すると且、Ⅲ層中からの出土が多い。縹文土器胴部破片3点、堀井のある環形土師器2点、环形土師器1点、環形土師器の口縁部破片1点、胴部破片14点、底部破片4点である。						

S I 012 壓穴住居跡土層記

- 1 10Y R 5/4 浮石・暗褐色土粒少混入
黑色土
- 2 10Y R 5/4 浮石部分の多量混入
黑色土少混入 黑色土
- 3 10Y R 5/4 浮石・暗褐色土粒少混入
黑褐色土
- 4 10Y R 5/4 暗褐色土粒・黃褐色少混入
混入黑色土
- 5 10Y R 5/4 強粘性暗褐色土
- 6 10Y R 5/4 黄褐色土

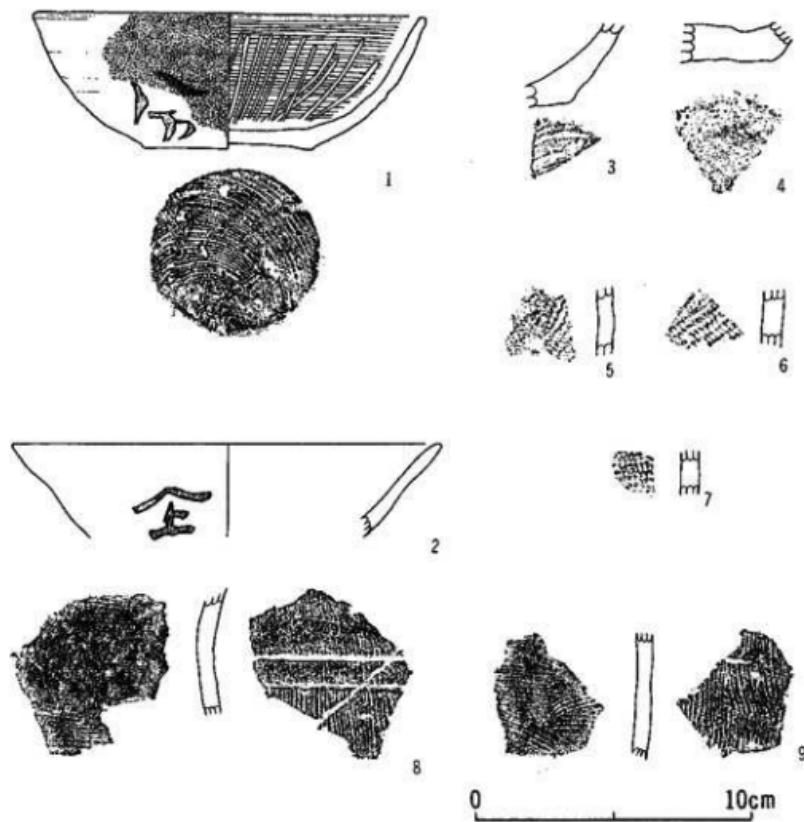


第24図 S 1012 穴住居跡実測図

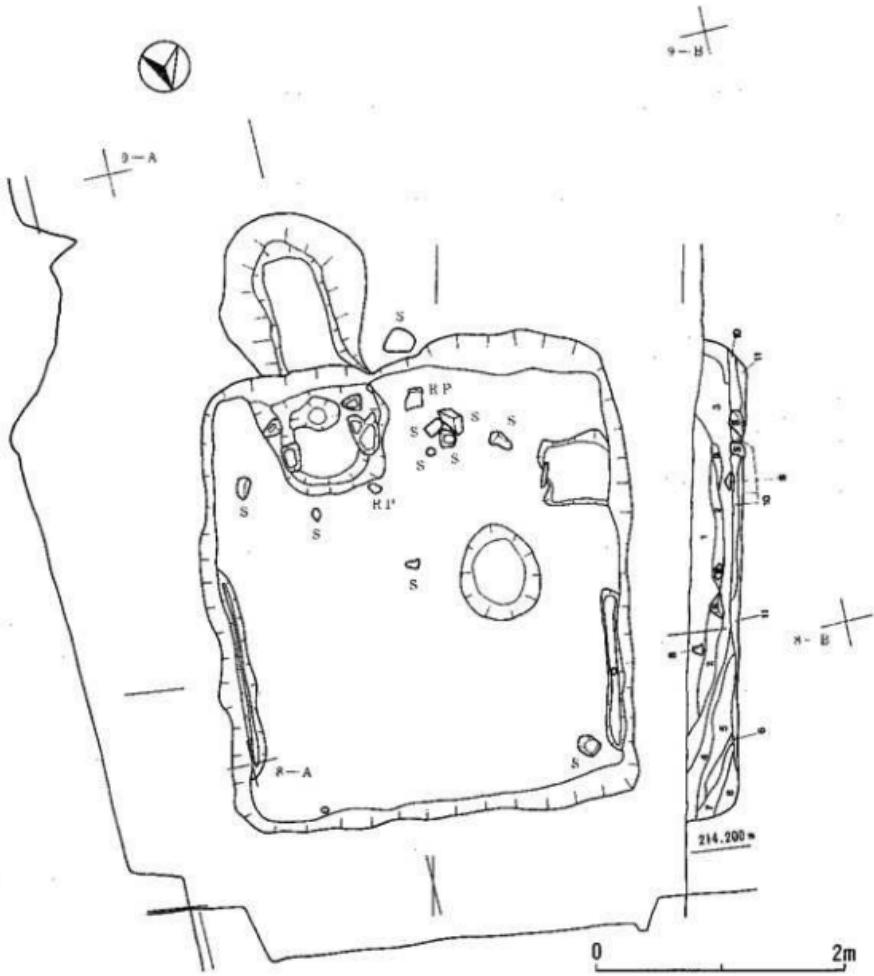
第18表 S 1012 穴住居跡出土土器説明表

実測図 番号	図 番 号	登記番号	形態・部位	器面調査法			胎土含有物	色 調	備考
				外 面	内 面	底 面			
25-1	20-6	I ~ II層	环	ロクロ	黒色処理	回転糸切		10YR 5/6 黑黄褐	3.5 壁 土師器
25-2	20-7	II ~ III層	环	ロクロ	ロクロ	回転糸切		10YR 5/6 に近い黄褐	壁 壁 土師器
25-3	20-8	II ~ III層	环、底部	ロクロ	ロクロ	回転糸切		5YR 4/6 橙	土師器
25-4	20-9	II層	環、底部	ヘラケズリ	ヘラナテ	砂粒付着	粗砂を含む	7.5YR 4/6 暗 7.5YR 4/6 黒	土師器
25-5	20-10	II ~ III層	圓文、胴部	L.R	ミガキ			10YR 5/6 に近い黄褐	

25-6	20-11	II-III層	縄文、網部	L.R.	ミガキ			7.5YR 5/6 検	
25-7	20-12	III層	縄文、網部	L.R.	ミガキ			5YR 5/6 明赤鉄	
25-8	20-13	II-III層	縄、網部	刷毛目	ヘラナチ			7.5YR 5/6 に浅い橙	土師器
25-9	20-14	II-III層	縄、網部	刷毛目	ヘラナチ			7.5YR 5/6 灰褐	土師器



第25図 S I 012堅穴住居跡出土土器拓影・実測図



第26圖 S I 013豎穴住居跡土層註記

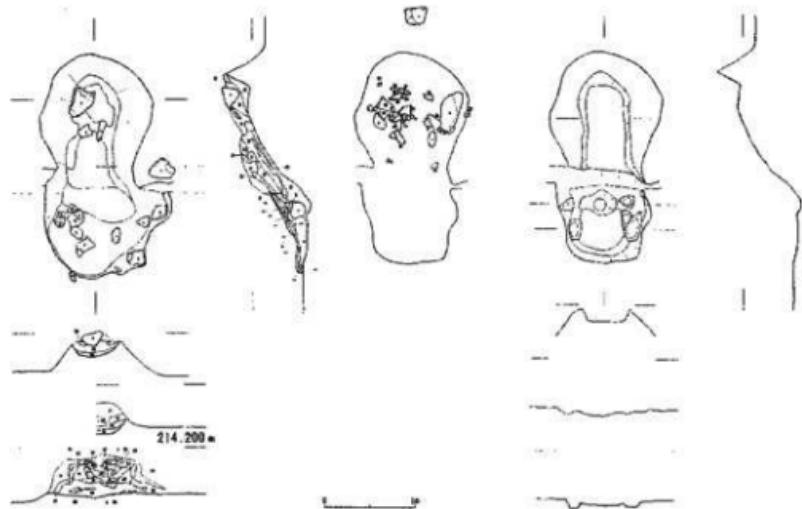
S I 013豎穴住居跡土層註記

- | | | |
|----------------------------|---------------------------------------|----------------------------|
| 1 10Y R 5% 浮石混入 弱粘性 黑褐色土 | 2 10Y R 5% 浮石混入 弱粘性 黑色土 | 3 7.5Y R 5% 浮石微量混入 黑色土 |
| 4 2.5Y R 5% 浮石微量混入 黑色土 | 5 7.5Y R 5% 浮石混入 黑色土 | 6 10Y R 5% 浮石微量混入 弱粘性 黑褐色土 |
| 7 10Y R 5% 强粘性 黑褐色土 | 8 10Y R 1-7% 浮石少混入 油粘性 黑色土 | 9 7.5Y R 5% 黑褐色土 |
| 10 5Y R 5% 黑褐色土混入 弱粘性 明褐色土 | 11 10Y R 5% 浮石·明黄褐色土料混入少
少强粘性 黑褐色土 | |

第19表

S I 013 穫穴住居跡計測説明表

検出地区		8-A、8-B、9-A、9-B	実測図番号	26、27	図版番号	10
法 量	南側壁	西側壁	北側壁	東側壁		
	壁長	354.5cm	378.5cm	327.5cm	374.5cm	
	吹高	37.6~54.5cm	21.9~45.3cm	41.6~52.9cm	42.2~53.4cm	
	壁溝幅	(12.5~16.5)cm	なし	なし	(8.5~13.5)cm	
形態	方 形	面積	14.02m ²	主軸方位	S-Z'30°W	
プラン確認時 の状態	日本道路公団による用地買収後、黒土採取が行われ、その際の採取穴が、かまどの煙道部分にあたっていたが、採取穴で焚火されていたため、その存在に気づかず、根掘りが深く行われてしまった。4層上面でようやくその存在に気づいたが、8-A杭用に柱状に残した部分での土層観察では、3層を欠落させており、2層で確認できるはずであった。					
覆土と床面 の状態	白色浮石質火山灰粒が粗に多量に混入する黒褐色土が主体をなすが、「焼失家屋」であり、床面は、灰、炭化物、燒土が多量に覆われていた。南北隅付近の床面は軟かいが、他の部分は凹凸も少なく堅緻である。					
柱穴	北西側床面に1穴検出されている。					
かまど	南側壁の中央部からやや東寄りに自然石、菱形土師器を芯材、架構材として使用したかまどが付設されている。住居自体が深く掘られたためか、平面形態が所謂東北型かまどの形態を呈するが、内部形状（断面形狀）は、関東型を呈する。					
遺物の出土状況	覆土中から繩文土器底部破片1点、環形須恵器胴部破片2点、墨書のある环形土師器2点、环形土師器1点、菱形土師器の口縁部破片14点、胴部破片75点、底部破片4点出土している。かまどからは、环形土師器1点、菱形土師器5点、鍋形土師器1点の他、菱形土師器の口縁部8点、胴部破片18点、底部破片2点出土している。					



第27図 S I 013 穫穴住居跡かまと実測図

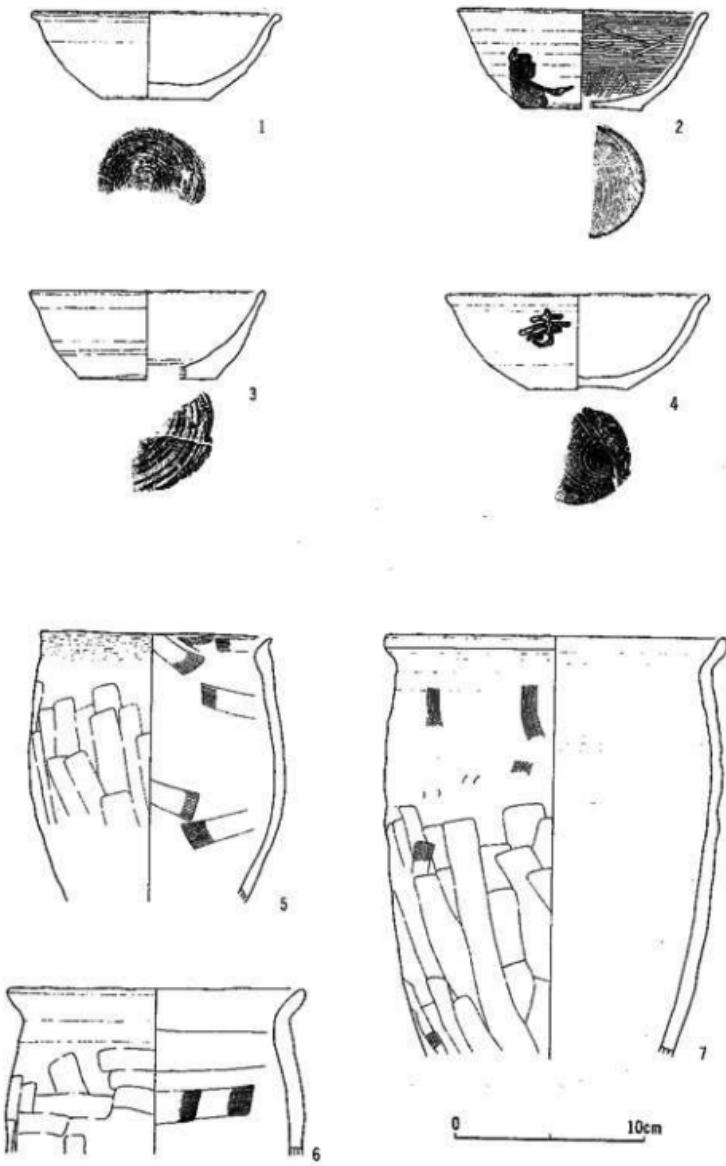
S I 013 穴住居跡かまど土層註記

1	7.5 Y R 3%	浮石混入 黑褐色土	2	炭化物	3	5 Y H 6%	明赤褐色土	
4	7.5 Y R 6%	赤褐色土混入 带褐色土	5	10 Y R 6%	黑褐色土少量混入 明黄褐色土	6	5 Y R 6%	明赤褐色土塊混入 赤褐色土
7	5 Y R 6%	黃褐色土粘土 明赤褐色土粒混入 強粘性 黑褐色土	8	5 Y R 3%	炭化物微量混入 黑褐色土	9	5 Y R 6%	施暗赤褐色土混入 強粘性 赤褐色土
10	7.5 Y R 3%	浮石混入 黑褐色土	11	7.5 Y R 6% 植物浮石 黑褐色土粘土量混入 砂質 黑褐色土	12	10 Y R 6%	暗褐色土混入 強粘性 に ふい黄褐色土	
13	5 Y R 6%	粗粒帶赤褐色土	14	5 Y R 6%	暗褐色土塊混入 带褐色土	15	5 Y R 6%	暗褐色土
16	10 Y H 6%	黃褐色土混入 砂質 黑褐色土	17	7.5 Y R 6%	植物浮石混入 透褐色土	18	5 Y R 6%	暗褐色土塊混入 黑褐色土
19	10 Y R 6%	黑褐色土塊混入 黃褐色土	20	7.5 Y R 6% 浮石 明黃褐色土塊混入 帶褐色土	21	5 Y R 6%	砂質 赤褐色土	
22	10 Y R 6%	黃褐色土混入 砂質 黑褐色土	23	5 Y R 6%	黃褐色土混入 砂質 赤褐色土	24	7.5 Y R 6%	黃褐色土混入 砂質 黑褐色土
25	7.5 Y R 6%	黃褐色土量混入 粘質 明褐色土	26	2.5 Y R 6% 明赤褐色土	27	10 Y R 6%	浮石混入 に ふい黄褐色土	
28	7.5 Y R 6%	黑褐色土混入 粘質 梅色土	29	10 Y R 6%	浮石混入 黄褐色土	30	7.5 Y R 6%	浮石混入 梅色土
31	10 Y R 6%	明褐色土粒混入 黑褐色土	32	10 Y R 6%	浮石混入 砂質 带褐色土	33	細粒浮石層	

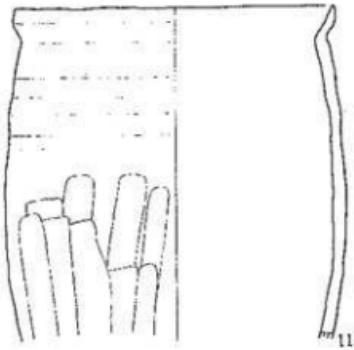
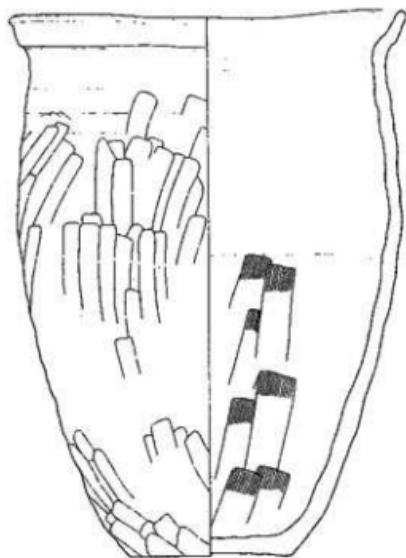
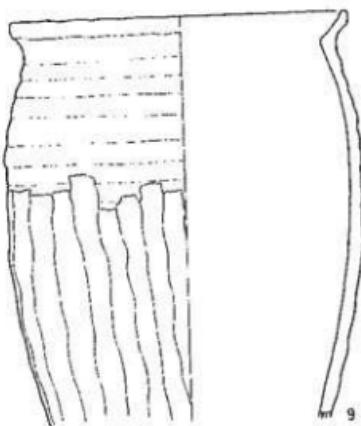
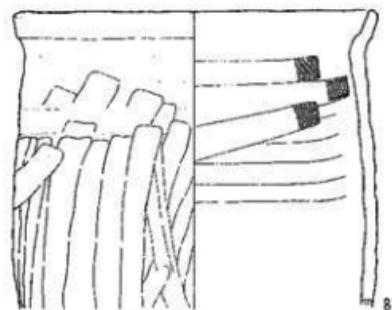
第20表

S I 013 穴住居跡出土器説明表

実測番号	図番	版号	註記番号	形態	盤位	器面調査法			胎土含有物	色	調	備考
						外 面	内 面	底 面				
28-1	21-1	R P 2 + カット		環	ロクロ	ロクロ	回転糸切		10 Y R 6% 灰黄褐色		土師器	
28-2	21-2	フク土中		環	ロクロ	黑色處理 ロクロ	回転糸切		10 Y R 6% に ふい質地		黒褐色土師器	
28-3	21-3	一括		環	ロクロ	ロクロ	回転糸切		7.5 Y R 6% 橙		須恵器	
28-4	21-4	K R P		環	ロクロ	ロクロ	回転糸切		7.5 Y R 6% 黑褐色		柔軟土師器	
28-5	21-5	K P P 22		裏	ヘラナデ	ヘラナデ		粗砂を含む	10 Y R 6% 灰黄褐色		土師器	
28-6	21-6	R P 2 フク土中		裏 口縫部	ヘラナデ	ヘラナデ		粗砂を含む	7.5 Y R 6% に ふい根		七輪器	
28-7	21-7	R P -括 フク土中		裏 口縫部	ヘラケズリ	ヘラナデ		粗砂を含む	5 Y R 6% 淡褐色		土師器	
29-8	22-8	R P 3 フク土中		裏	ヘラケズリ	ヘラナデ		粗砂を含む	10 Y R 6% に ふい質地		土師器	
29-9	22-9	R P -括 フク土中		裏 口縫部	ロクロ+ ヘラケズリ	ヘラナデ		粗砂を含む	7.5 Y R 6% 灰白		胴上半ロクロ整形 土師器	
29-10	22-10	R P 4		裏	ヘラケズリ	ヘラナデ		粗砂を含む	7.5 Y R 6% 明褐色		胴上半ロクロ整形 土師器	
29-11	22-11	K R P 12 フク土中		裏 口縫部	ヘラケズリ	ヘラナデ		粗砂を含む	10 Y R 6% 浅黃褐色		胴上半ロクロ整形 土師器	
30-12	23-12	K R P 23 フク土中		裏	ヘラケズリ	ヘラナデ	砂	粗砂を含む	10 Y R 6% 灰白	S 1016 R P -括	床面複合土師器	
30-13	23-13	K R P 14 フク土中		裏	ヘラナデ	ヘラナデ		粗砂を含む	10 Y R 6% に ふい質地	K R P 16-17-19-26	接合土師器	
30-14	23-14	R P -括 フク土中		裏 底板部	ヘラケズリ	ヘラナデ	平滑	粗砂を含む	10 Y R 6% 輪		土師器	
30-15	23-15	R P -括 フク土中		裏 底板	ヘラケズリ	ヘラナデ	平滑	粗砂を含む	7.5 Y R 6% に ふい根		土師器	
30-16	23-16	K R P 22 フク土中		裏 底板部	ヘラケズリ	ヘラナデ	平滑	粗砂を含む	7.5 Y R 6% 浅黃褐色		土師器	
30-17	23-17	R P -括 底板部		ヘラケズリ	ヘラナデ	砂	底	粗砂を含む	7.5 Y R 6% に ふい端		土師器	

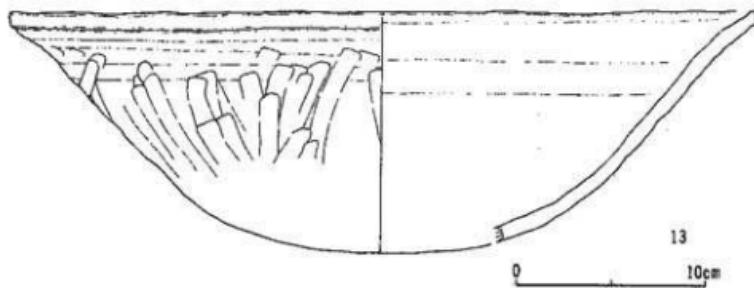
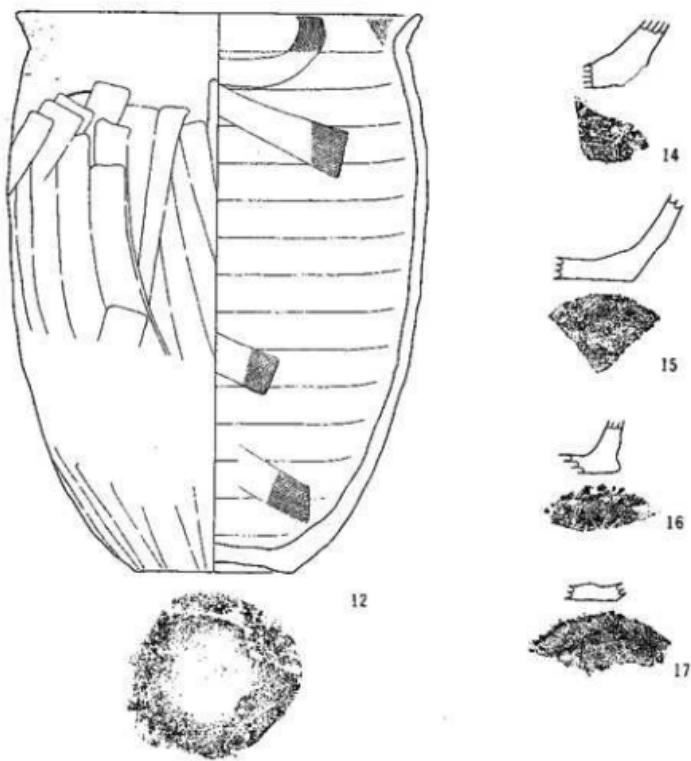


第28圖 S I 013號穴住居跡出土器物實測圖(1)

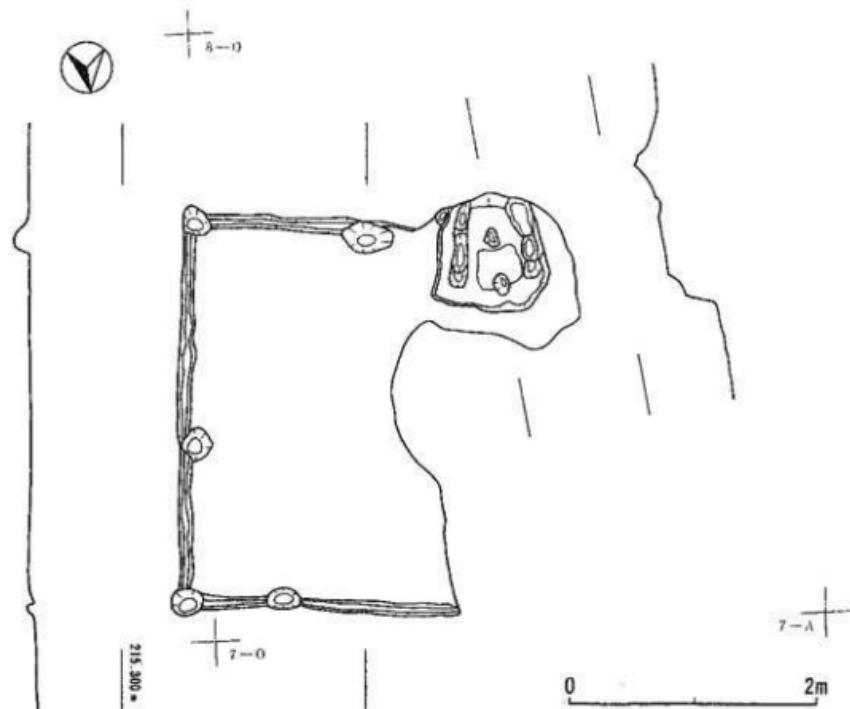


0 10cm

第29圖 S 1013號穴住居跡出土土器実測図(2)



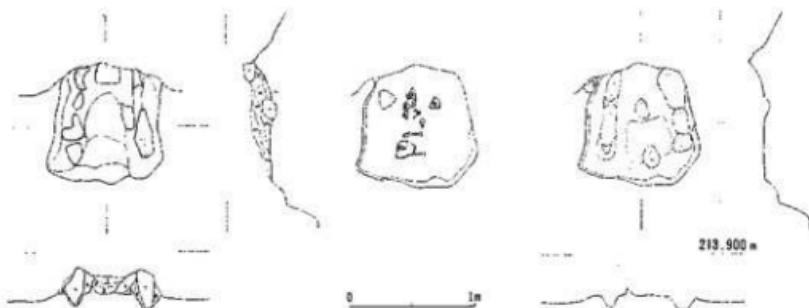
第30圖 S 1013整穴住居跡出土土器実測図(3)



第31図 S I 014 壁穴住居跡実測図

第21表 S I 014 壁穴住居跡計測説明表

検出地区	8-0、8-A		実測図番号	31、32	図版番号	11
	南側壁	西側壁	北側壁	東側壁		
法量	壁長	(307.5)cm	なし	(235.5)cm	なし	
	壁高	(1.1~4.3)cm	なし	(0.6~2.1)cm	1.8~2.8cm	
	壁溝幅	11.5~9.5cm	なし	7.5~12.5cm	8.5~14.5cm	
	壁溝深	3~4cm	なし	3.1~7.1cm	3.3~7.7cm	
形態	方形	面積	(7.92)m ²	主軸方位	S-Z-E	
プラン確認時 の状態	現地表面から約10~15cmと比較的浅く、草木類の根等のため、確認が遅れ、西側部分を掘りすぎてしまった。遺構壁面も全て削平してしまっている。					
覆土と床面 の状態	わずかに散見できる覆土は白色浮石質火山灰粒が粗に多量に含まれている黒褐色土で、床面は凹凸が激しいが堅緻である。					
柱穴	床面上には検出されず、壁溝内に確認されている。					
かまど	かまどは南側壁の中央部からやや西寄りに自然石を芯材として使用し、付設されている。					
遺物の 出土上状況	床面上から環形土器2点、環形土器口縁部1点、長頸壺形須恵器1点、斐形土器1点、斐形土器の口縁部破片3点、胴部破片5点、底部破片2点、かまど中から斐形土器の口縁部破片3点、胴部破片7点、底部破片2点出土している。					



第32図 S I 014 壁穴住居跡かまと実測図

S I 014 壁穴住居跡かまと土層註記

- | | | |
|-----------------------|------------------------|----------------------|
| 1 10Y R 5/4 粘土塊及び褐色土塊 | 2 7.5Y R 5/2 硅化物混入 黑色土 | 3 2.5Y R 5/6 明赤褐色燒上 |
| 4 7.5Y R 5/6 棕色粘土 | 5 10Y R 5/6 硅化物混入 黑褐色土 | 6 2.5Y R 5/6 明赤褐色燒土塊 |
| 7 10Y R 5/6 泥石混入 黑色土 | 8 10Y R 5/6 泥石混入 黑色土 | |

第22表

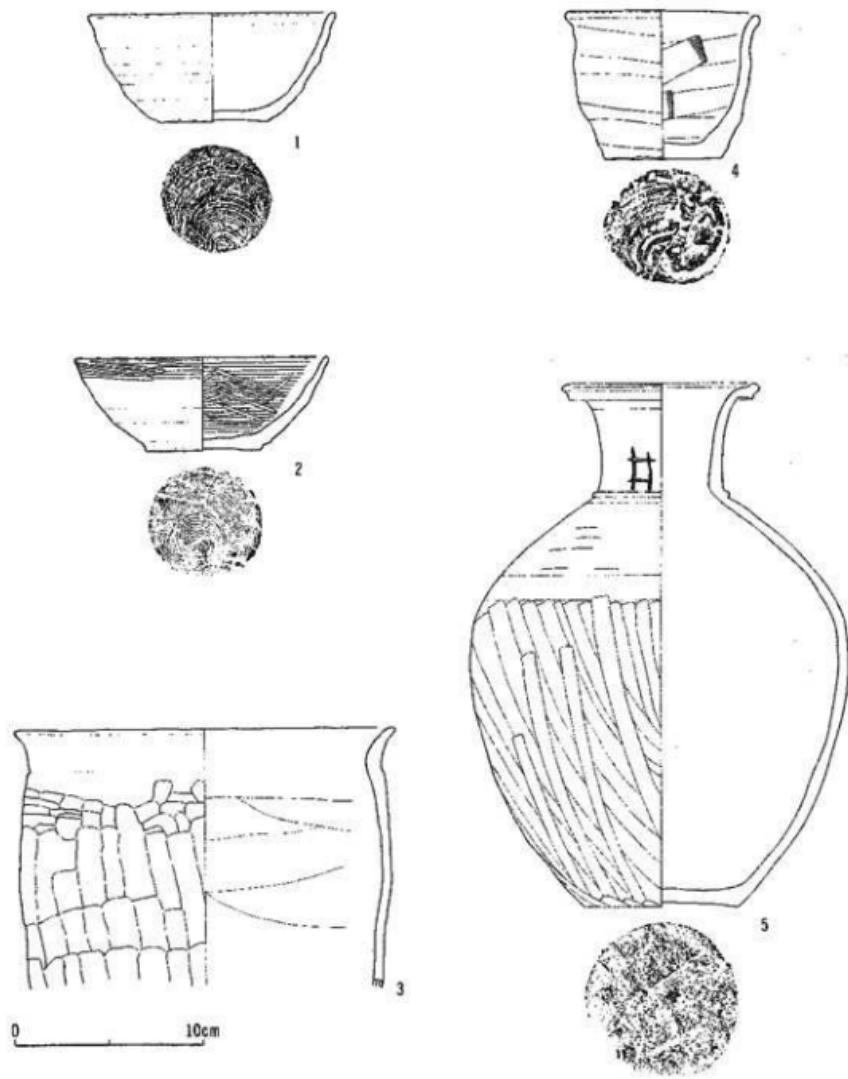
S I 014 壁穴住居跡出土土器説明表

実測図番号	圖版番号	註記番号	形態	器皿調査法			胎土含有物	色調	備考
				外 面	内 面	底 面			
15-1	24-1	床面	环	ロクロ	ロクロ	回転系切		7.5Y R 5/6 灰白	上師器
15-2	24-2	KRP 2.5. 7.8.9	环	ロクロ	黑色処理	回転系切		7.5Y R 5/6 灰白 42.01%、鐵R 42.01%、鐵R	上師器
15-3	24-3	KRP 1	口縁部	ヘラケズリ	ヘラナデ		粗砂を含む	10Y R 5/6 褐灰	上師器
15-4	24-4	床面	袋	ヘラケズリ	ヘラナデ	回転系切	粗砂を含む	10Y R 5/6 にぶい黄橙	上師器
15-5	24-5	かまと左床面	壺形 底部裏	ヘラケズリ	ユビナデ	砂粒付着	粗砂を含む	7.5Y R 5/6 褐	底點記号あり 粗砂器

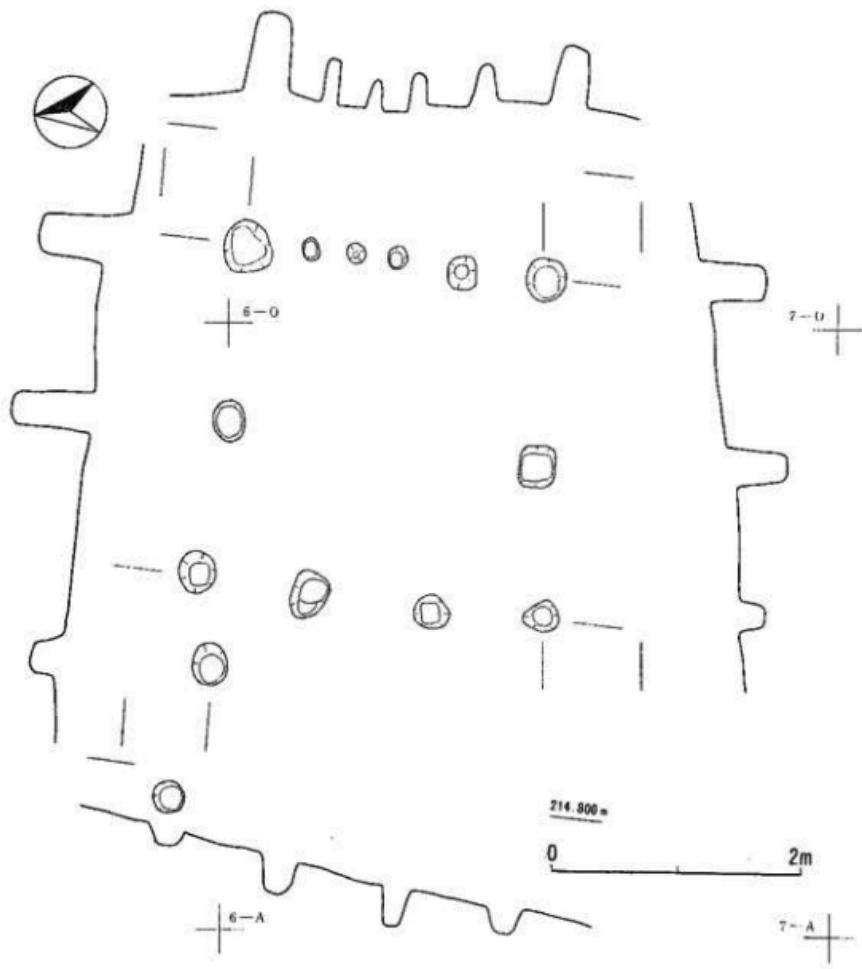
第23表

S I 015 壁穴住居跡計測説明表

検出地区		6-0、6-A、7-0、7-A 実測図番号		34	圖版番号	11
		南側壁	西側壁	北側壁	東側壁	
法	壁長	(315.5)cm	(254.5)cm	(306.5)cm	(254.5)cm	
量	壁高	なし	なし	なし	なし	
	壁溝幅	なし	なし	なし	なし	
	壁溝深	なし	なし	なし	なし	
形態	方 形	直 植	(9.08)m	主軸方位	S-2°-E	
プラン確認時の状態	土取りされていたため床面も確認できず。四回を一巡する柱穴列で判断できた。					
覆土と床面の状態	不明					
柱穴	方形に一巡する。					
かまと	不明					
遺物の出土状況	壺形土師器胴部破片7点出土。					



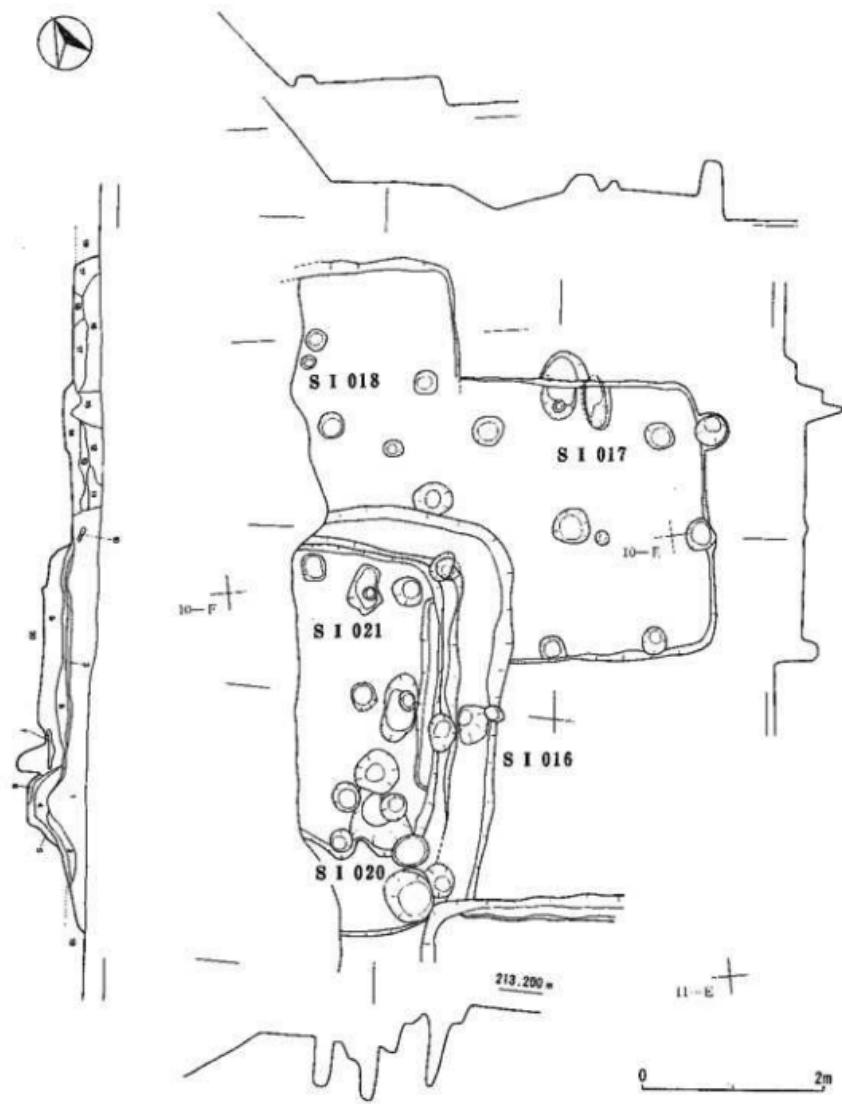
第33圖 S I 014整穴住居跡出土土器尖測圖



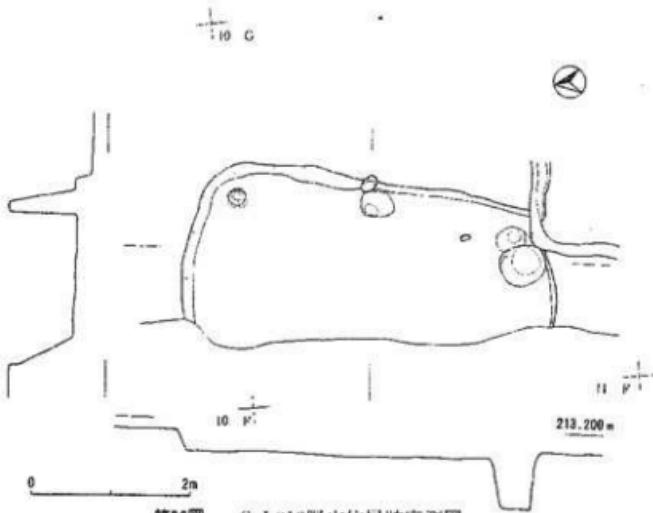
第34図 S I 015 壓穴住居跡実測図

S I 016、S I 020、S I 021、S I 017、S I 018 壓穴住居跡土層記述

- | | | |
|--------------------------------------|------------------------------------|------------------------------------|
| 1 10Y R 5% 混石微量・黃褐色土ブロック少量混入 強粘性 黑色土 | 2 10Y R 5% 黑色土粒混入 强粘性 黑褐色土 | 3 7.5Y R 5% 灰黃褐色土粒多量混入 黑褐色土 |
| 4 10Y R 5% 黑色土粒多量混入 柔軟土 | 5 10Y R 5% 黑色土粒少量混入 弱粘性 黄褐色土 | 6 10Y R 5% 黑色土粒少量混入 柔軟土 |
| 7 10Y R 5% 黑色土粒少量混入 强粘性 黑褐色土 | 8 10Y R 5% 浮石・褐色土ブロック少量混入 强粘性 黑褐色土 | 9 10Y R 5% 褐色土ブロック黑色土少量混入 强粘性 黑褐色土 |
| 10 10Y R 5% 强粘性 黄褐色土 | 11 10Y R 5% 黑色土少量混入 强粘性 黑褐色土 | 12 10Y R 5% 浮石混入 黑褐色土 |
| 13 10Y R 5% 浮石混入 强粘性 黑色土 | 14 7.5Y R 5% 浮石・褐色土粒少量混入 黑褐色土 | 15 10Y R 5% 浮石少量混入 黑色土 |
| 16 10Y R 5% 浮石混入 中粘性 黑色土 | 17 10Y R 5% 浮石多量混入 强粘性 黑褐色土 | 18 10Y R 5% 浮石少量混入 黑色土 |
| 19 10Y R 5% 强粘性 黑褐色土 | 20 10Y R 5% 强粘性 黄褐色土 | |



第35圖 S I 016、S I 017、S I 018、S I 020、S I 021豎穴住居跨測圖

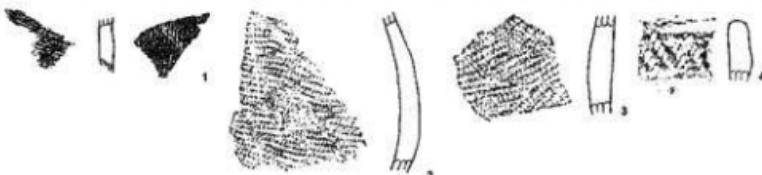


第36図 S I 016 売穴住居跡実測図

S I 016 売穴住居跡計測説明表

第24表

検出地区		10-F、11-F		実測図番号	35、36	国版番号	9
		南側壁	西側壁	北側壁	東側壁		
法 量	壁長	(153.5)cm	なし	(206.5)cm	453.5cm		
	壁高	(5.9~6.9)cm	なし	(23.7~25.4)cm	(12.4~26.3)cm		
	壁溝幅	なし	なし	なし	なし		
	壁溝深	なし	なし	なし	なし		
形 態	方 形	面 積	(9.34)m ²	主軸方位	不 明		
プラン確認時 の状態	S I 016、S I 020、S I 021、S I 017、S I 018、S I 012が重複し、かつ、西側部分が開けられ段差があるため、東側部分のみ遺存している。また、ブドウが栽培されていたため、根乱が激しい。						
覆土と床面 の状態	白色浮石質火山灰状が粗に多量に混入している。S I 020、S I 021が、内部に深く掘られているため、床面は周囲にわずかに残るのみ。						
柱 穴	残された床面に確認される。						
か ま ど	不明						
遺 物 の 出 土 状 況	覆土中から繩文土器破片3点、陶磁器1点、變形土師器の胴部破片12点、口縁部破片2点、环形土師器の体部破片1点、床面から繩文土器口縁部破片1点、环形土師器口縁部破片2点、變形土師器、變形土師器の口縁部破片2点、胴部破片7点出土している。						

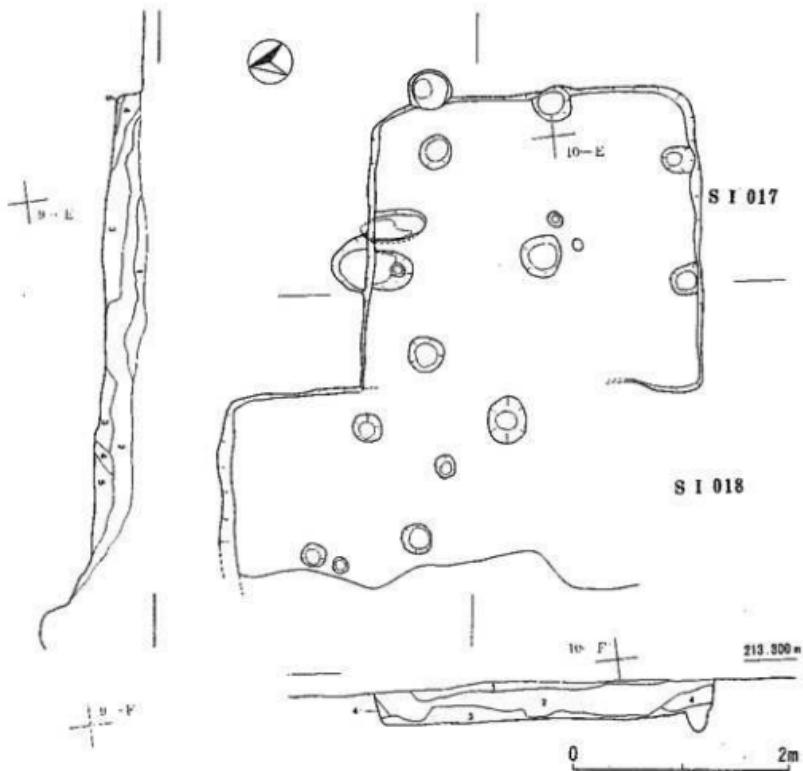


第37図 S I 016 売穴住居跡出土土器拓影図

第25表

S I 016 壓穴住居跡出土器説明表

実測図 番号	固 形 番 号	記 号	形態・部位	断面調査法			粘土含有物	色 調	備 考
				外 面	内 面	底 面			
37-1	25-1	1層	側部	刷毛目	ヘラナテ			7.5 YR 8% にふい様	土師器
37-2	25-2	R P-1層	縦文、側部	L,R	ミカキ			10 YR 8% 浅黄椎	
37-3	25-3	1層の下	縦文、側部	L,R	ミカキ			5 YR 8% 椎	
37-4	25-4	R P-1層	縦文、口縁部	R,L	ミカキ			5 YR 8% 椎	



第38図 S I 017, S I 018 壓穴住居跡実測図

S I 017, S I 018 壓穴住居跡土層記註

- | | | |
|---------------------------|------------------------------|--------------------------------|
| 1 10 Y R 8% 混石混入 強粘性 黒色土 | 2 10 Y R 8% 混石褐色土粒少度混入 黑褐色土 | 3 7.5 Y R 8% 混石褐色土粒混入 強粘性 黑褐色土 |
| 4 10 Y R 8% 混石部分の多量混入 黑色土 | 5 7.5 Y R 8% 褐色土粒混入 強粘性 黑褐色土 | 6 10 Y R 8% 黑色土粒混入 強粘性 黑褐色土 |
| 7 10 Y R 8% 強粘性 黑褐色土 | | |

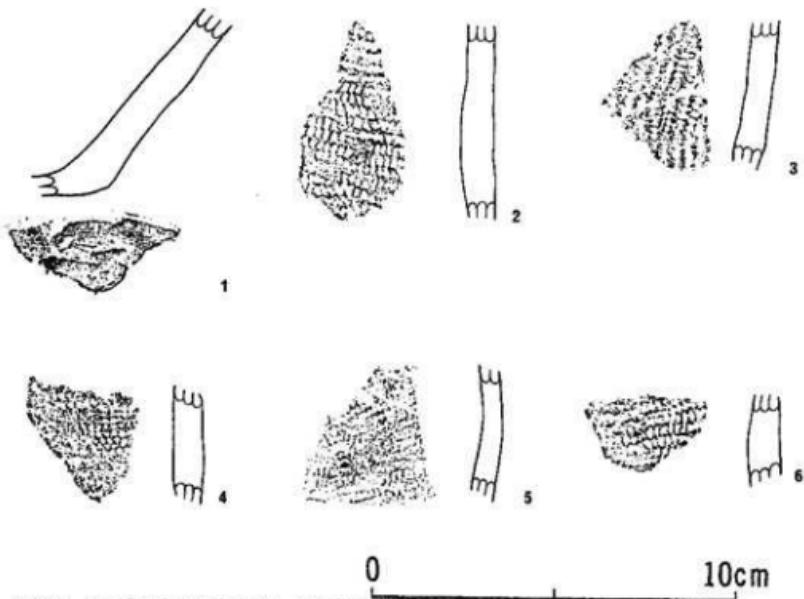
第26表

S I 017 竪穴住居跡計測説明表

検出地区	10-F, 11-F	実測図番号	35, 38	図版番号	9, 12
	南側壁	西側壁	北側壁	東側壁	
法	壁長 296cm	(323.5)cm	(275)cm	305.5cm	
並	壁高 9.0~35.0cm	(4.9~5.5)cm	(26.4~28.8)cm	21.1~26.9cm	
壁溝幅	なし	なし	なし	なし	
壁溝深	なし	なし	なし	なし	
形態	方形	面積 (8.70)m ²	主軸方位	不明	
プラン確認時の状態	S I 016と同じである。S I 018との新旧関係が把握できなかった。				
覆土と床面の状態	白色浮石質火山灰粒を混入する黒褐色土が覆土であるが、ブドウの根により擾乱されている。床面は凹凸が激しい。				
柱穴	床面上に9カ所検出されているが、柱穴の配置構造は把握が難しい。				
かまど	不明				
遺物の出土状況	すべて覆土中からの出土である。 縄文七器胴部破片6点、壺形須恵器胴部破片3点、环形土師器の口縁部破片2点、体部破片2点、葵形土師器の口縁部破片5点、胴部破片30点、底部破片1点。				

S I 019 竪穴住居跡土層記

- 1 10Y R 4 号 浮石・黄褐色土粒混入 黑色土
2 10Y R 5 号 浮石多量混入 黑褐色土
3 10Y R 1-4 号 浮石混入 黑色土
4 10Y R 5 号 鈎頭・炭化物少量混入 強粘性 黑褐色土
5 10Y R 1-4 号 層下部細砂少量混入 強粘性 黑褐色土
6 10Y R 6 号 層上部黑褐色土粒混入 強粘性 喀褐色土



第39図 S I 017 竪穴住居跡出土土器拓影図

第27表

S I 017 壁穴住居跡出土土器説明表

実測図番号	横番	縦番	計測番号	形態・部位	剖面調査法			粘土含有物	色調	備考
					外 面	内 面	底 面			
39-1	25-5	R P-1 横 II-III層	裏、底部	ヘラケズリ	ヘラナナ			粗砂を含む	10YR 5% に近い黄褐色	土師器
39-2	25-6	一括	縫文、胴部	L R	ミガキ				7.5YR 5% に近い褐	
39-3	25-7	I・II層 II-III層	縫文、胴部	L R	ミガキ				7.5YR 5% 褐	
39-4	25-8	R P-1 横 II-III層	縫文、胴部	R L	ミガキ				7.5YR 5% 褐	
39-5	25-9	R P-1 横 II-III層	縫文、胴部	L R	ミガキ				10YR 5% 淡黃色	
39-6	25-10	一括	縫文、胴部	L R	ミガキ				7.5YR 5% 褐	

第28表

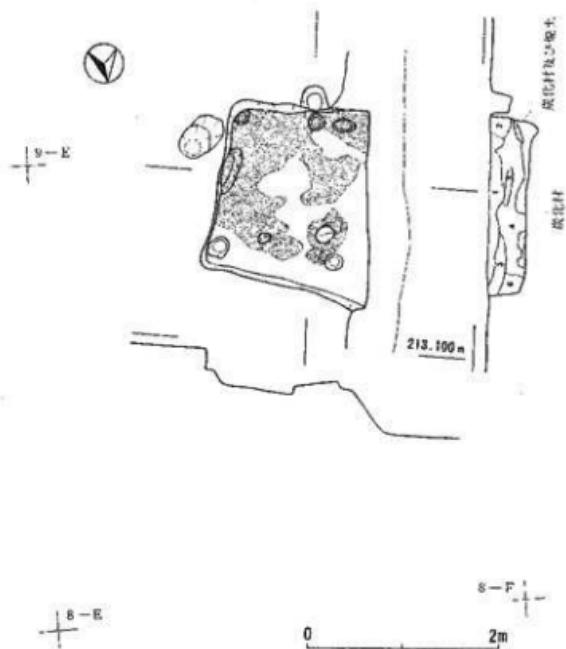
S I 018 壁穴住居跡計測説明表

検出地区	10-F		実測図番号	35、38	図版番号	9、12
	南側壁	西側壁				
法 量	壁長	なし	なし	(139)cm		(126)cm
	壁高	なし	なし	(22.6-25.7)cm		(28.6-30.7)cm
	壁溝幅	なし	なし		なし	なし
	壁溝深	なし	なし		なし	なし
形態	方形	面積	(8.64)m ²	主軸方位	不明	
プラン確認時の状態	S I 016 と同じ					
覆土と床面の状態	白色浮石質火山灰粒を粗に多量に含んでる。 床面はやや歓かいが平坦である。					
柱穴	床面上に5カ所検出されているが、柱穴の配置から上部構造を推察するのは難しい。					
かまど	不明					
遺物の出土状況	覆土中から環形土師器体部破片2点、変形土師器胴部破片4点出土している。					

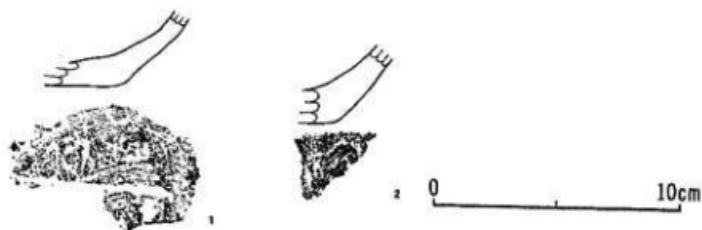
第29表

S I 019 壁穴住居跡計測説明表

検出地区	9-F、10-F		実測図番号	40	図版番号	12
	南側壁	西側壁				
法 量	壁長	(145)cm	なし	(168)cm		185.5cm
	壁高	39.7-42.7cm	なし	19.2-29.9cm		32.1-37.8cm
	壁溝幅	なし	なし	なし		なし
	壁溝深	なし	なし	なし		なし
形態	方形	面積	(3.16)m ²	主軸方位	不明	
プラン確認時の状態	3層が途切れ、2層から4層に移る面で白色浮石質火山灰粒及び黄褐色火山灰粒が粗に混入する黒色土の方形プランが確認された。					
覆土と床面の状態	床面上に厚く禾本科植物の炭化物や丸太状の炭化材、燒土、灰が堆積し、その上を白色浮石質火山灰粒、黄褐色火山灰粒が混入する黒色土が覆っている。					
柱穴	2カ所検出されている。					
かまど	不明					
遺物の出土状況	覆土中から、変形埴輪器胴部破片1点、変形土師器の胴部破片24点、底部破片3点が出土している。					



第40圖 S I 019竪穴住居跡実測図



第41圖 S I 019竪穴住居跡出土土器拓影図

第30表

S I 019 竪穴住居跡出土七器説明表

実測図 番号	図 版 番 号	註記番号	形態・部位	器面調整法			粘土含有物	色 調	備 考
				外 面	内 面	底 面			
18-1	25-11	11P一括 フクド中	底、底部	ヘラケズリ	ヘラナガ		粗砂を含む	7.5YR 5% 灰白	土師器
18-2	25-12	1層	底、底部	ヘラケズリ	ヘラナガ		粗砂を含む	7.5YR 5% にじい橙	土師器



第42図 S I 020 竪穴住居跡実測図

第31表

S I 020 竪穴住居跡計測説明表

検出地区		10-F, 11-F		実測図番号	35, 42	開版番号	9		
		南側壁	西側壁	北側壁	東側壁				
法 量	壁長	なし	なし	(156.5)cm	(415.5)cm				
	壁高	なし	なし	11.8~12.9cm	8.0~13.8cm				
	壁溝幅	なし	なし	なし	なし				
	壁溝深	なし	なし	なし	なし				
形態		方形	面積	(6.72)m ²	主軸方位	不明			
プラン確認 時の状態		S I 016 と同じ							
覆土と床面の 状態		S I 021と、S I 016に挟まれ、わずかに残る床面は平坦である。							
柱穴		明確に判別できる東側壁の下方床面に隅部とその中間の3カ所に確認できる。							
かまど		不明							
遺物の 出土状況		覆土中から环形土師器口縁部破片1点、菱形土師器の口縁部破片1点、胴部破片3点が出土している。							



第43図 SI 021 竪穴住居跡実測図

第32表

SI 021 竪穴住居跡計測説明表

検出地区	10-F、11-F	実測図番号	35、43	図版番号	9
	南側壁	西側壁	北側壁	東側壁	
法	壁長 (135)cm	なし	(154.5)cm	348.5cm	
	壁高 (11.9~23.1)cm	なし	(14.7~20.5)cm	16.0~26.5cm	
量	壁溝幅 なし	なし	なし	12.5~23.5cm	
	壁溝深 なし	なし	なし	1.9~7.3cm	
形態	方形	面積	(5.50)m ²	主軸方位	不明
プラン確認時の状態	S I 016 と同じ				
覆土と床面の状態	床面は凹凸があるがほぼ平坦である。				
柱穴	柱穴は壁内側下方の床面に等間で検出されている。				
かまど	不明				
遺物の出土状況	なし				

第33表

SI 030 竪穴住居跡計測説明表

検出地区	0-D、0-E、1-D、1-E	実測図番号	44、45	図版番号	12
	南側壁	西側壁	北側壁	東側壁	
法	壁長 275.5cm	280.0cm	279.5cm	306.5cm	
	壁高 11.6~16.7cm	11.0~38.3cm	25.3~32.1cm	14.9~29.8cm	
量	壁溝幅 なし	なし	なし	なし	
	壁溝深 なし	なし	なし	なし	

形態	方 形	面 積	8.76m ²	主軸方位	S-38°30'—E
アラン確認時 の状態	水道管移設のため、深く重機で掘ったところ、その断面にアランが発見され、抜取して平面プランを確認した。この区域は耕地整理前に畦畔があったため、砂、礫が多量に堆積しており、住居跡の上にも薄く堆積していた。				
覆土と床面の状態	黄褐色火山灰粒、白色浮石質火山灰が混入する黒色土が床面を覆っている。床面は凹凸が激しい。				
柱穴	6カ所床面上に穿たれているが住居の柱構造を推察できるような配置ではない。				
かまど	かまどは、東側壁に2カ所存在していたが、北側のかまどは水道管移設のための溝掘りで破壊してしまった。南側のかまどは煙道部が長く、煙道下底も水平な構造であり、所謂東北型のかまど構造を呈する。				
遺物の出土状況	アラン確認時に甕文土器腹部破片1点、彫形土器の口縁部破片3点、胴部破片31点、底部破片5点、覆土中から彫形土器の口縁部破片5点、胴部破片18点が出土している。				

S I 030 穴住居跡土層記述

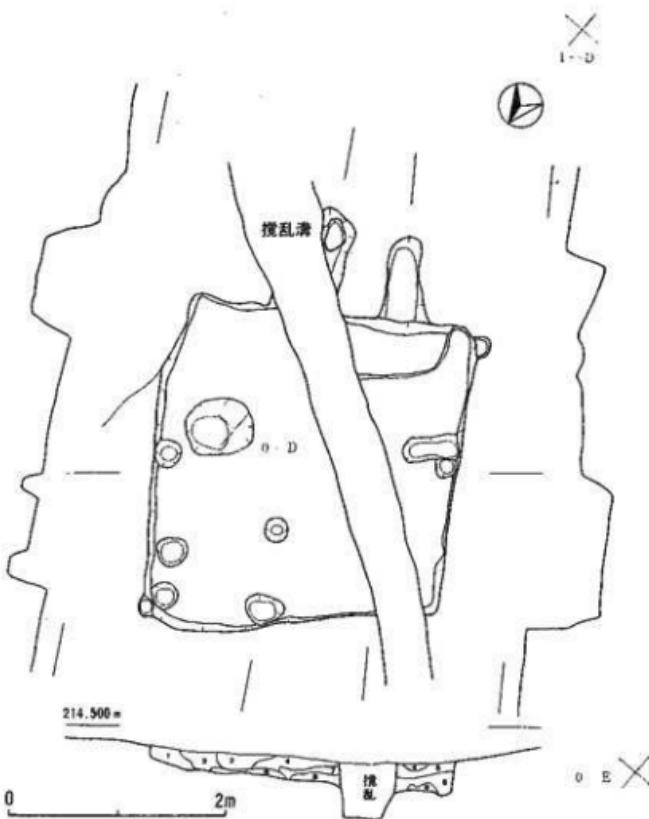
- | | | | |
|------------|-------------------------|---------------------------------------|--------------------------------|
| 1 10Y R 5% | 黄褐色土較少量混入 黑色土 | 2 10Y R 1-5% 黄褐色土較少量アロマック少量混入 強粘性 黑色土 | 3 10Y R 5% 黄褐色土較少量混入 黑色土 |
| 4 10Y R 5% | 浮石多量・焼土粒少量混入 強粘性 黑褐色土 | 5 10Y R 1-5% 浮石混入 黑色土 | 6 10Y R 5% 浮石・黄褐色土較混入 強粘性 黑褐色土 |
| 7 10Y R 5% | 黄褐色土アロマック浮石少量混入 強粘性 黑色土 | 8 10Y R 5% 黑色土較黄褐色土アロマック少量混入 強粘性 黑色土 | 9 10Y R 5% 明黄色土層 |

S I 030 穴住居跡かまど土層記述

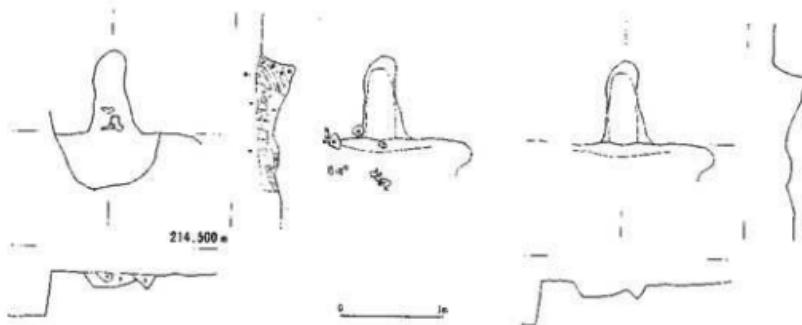
- | | | | |
|--------------|---------------------|------------------------------|-------------------------------|
| 1 10Y R 5% | 浮石・黄褐色土較混入 黑褐色土 | 2 5Y R 5% 浮石・黑色土少量混入 黑褐色土 | 3 10Y R 5% 黄褐色土較・焼土粒少量混入 黑褐色土 |
| 4 10Y R 5% | 浮石混入 黑褐色土 | 5 10Y R 5% 黄褐色土較混入 黑色土 | 6 10Y R 5% 浮石・燒土粒少量混入 黑褐色土 |
| 7 10Y R 5% | 浮石・燒土粒混入 黑褐色土 | 8 7.5Y R 5% 黑色土少量混入 強粘性 黑褐色土 | 9 10Y R 5% 浮石・黑色土多量混入 黑褐色土 |
| 10 7.5Y R 5% | 浮石混入 強粘性 黑色土 | 11 10Y R 5% 浮石黑色土多量混入 黑褐色土 | 12 10Y R 1-5% 強粘性 黑色土 |
| 13 10Y R 5% | 浮石・燒土粒少量混入 強粘性 黑褐色土 | | |

S I 030 穴住居跡出土土器説明表

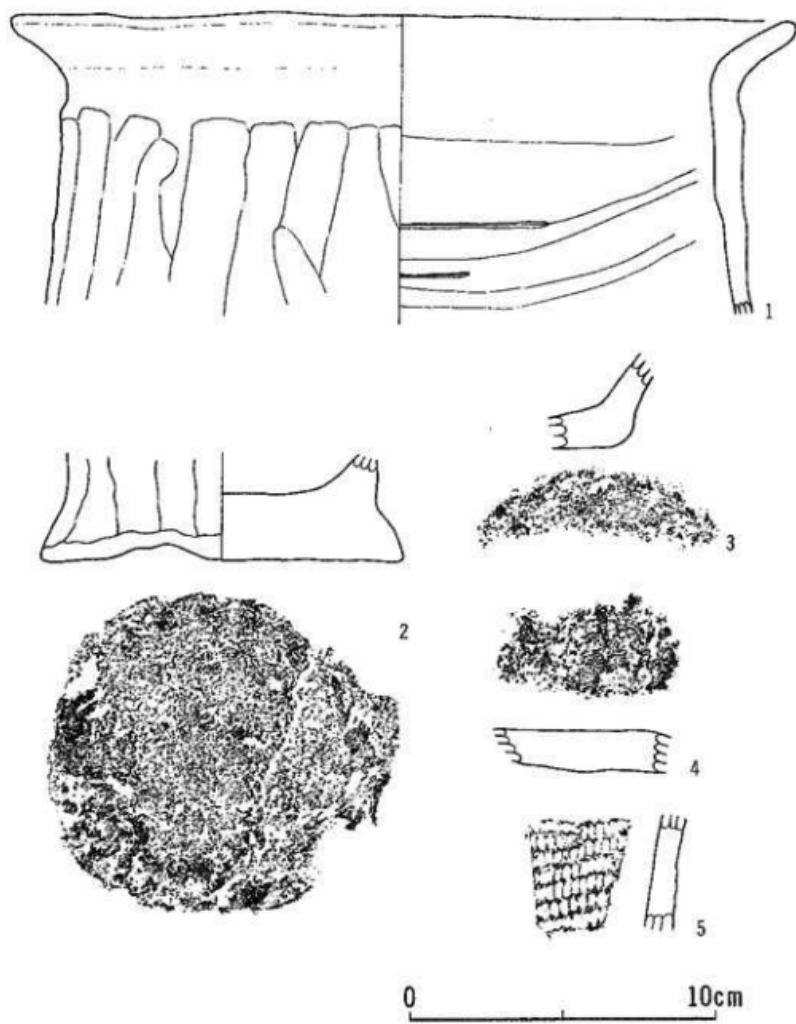
実測図 番号	区 番	版 番	註記番号	形態・部位	断面調査法			粘土含有物	色 調	備 考
					外 面	内 面	底 面			
46-1	26-1	R P-1活 ブックド	裏、口縁部	ユビナテ	ユビナテ			粗砂を含む	10Y R 5%に近い黄橙	土師器
46-2	26-2	-柄 カクニン面	裏、底部	ヘラケズリ	ヘラナテ	砂 底	粗砂を含む	10Y R 5%に近い黄橙	土師器	
46-3	26-3	カクニン面	裏、底部	ヘラケズリ	ヘラナテ	砂 底	粗砂を含む	10Y R 5%に近い黄橙	土師器	
46-4	26-4	-柄 カクニン面	裏、底部	ヘラケズリ	ヘラナテ	砂 底	粗砂を含む	7.5Y R 5%に近い橙	土師器	
46-5	26-5	カクニン面	裏文、胴部	R L	ミガキ				10Y H 5%灰質陶	



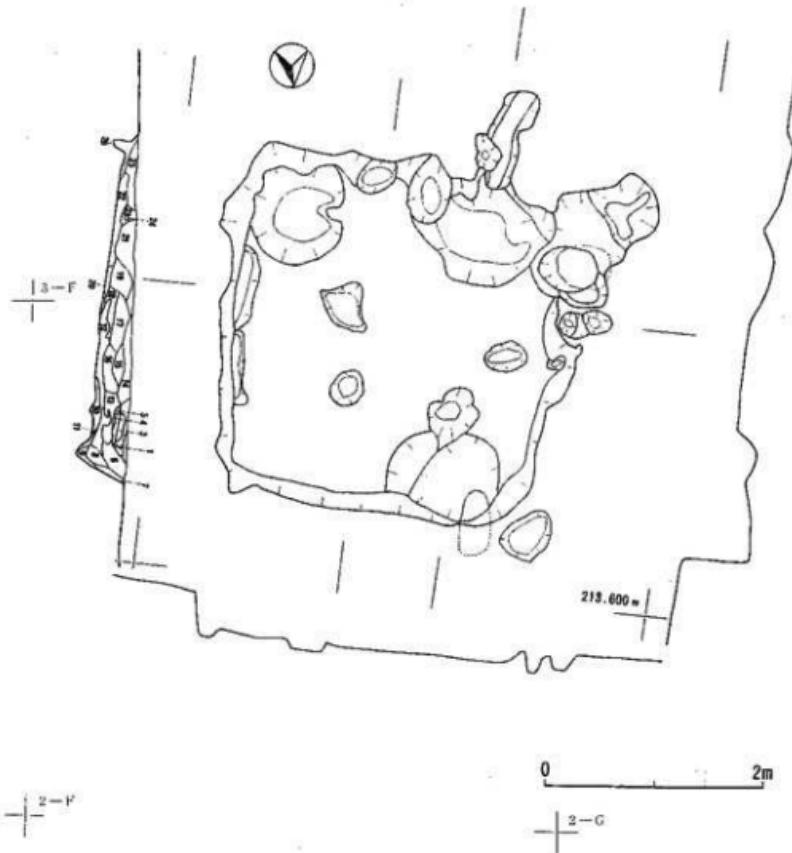
第44図 S I 030 竪穴住居跡実測図



第45図 S I 030 竪穴住居跡かまど実測図



第46圖 S I 030竪穴住居跡出土土器拓影・実測図



第47圖 S I 031豎穴住居跡土層註記

S I 031豎穴住居跡土層註記

- | | | |
|---|---|--|
| 1 10Y R ³ -3 浮石。黃褐色土粒少量混入
強粘性 黑色土 | 2 10Y R 5 浮石。黃褐色土粒少量混入
強粘性 黑色土 | 3 10Y R 5 浮石多量混入 黑色土 |
| 4 10Y R ³ -3 浮石。黃褐色土粒少量混入
強粘性 黑色土 | 5 10Y R 5 浮石。黃褐色土粒少量混入
強粘性 黑褐色土 | 6 10Y R 5 浮石。黃褐色土粒混入 黑褐色土 |
| 7 10Y R 5 浮石混入 強粘性 黑褐色
土 | 8 10Y R ³ -3 浮石。黃褐色土粒少量混入
強粘性 黑色土 | 9 10Y R 5 浮石。黃褐色土粒少量混入
強粘性 黑褐色土 |
| 10 10Y R 5 浮石。黃褐色土粒少量混入
粘土質 深褐色土 | 11 10Y R 5 浮石混入 強粘性灰褐色
土 | 12 10Y R ³ -3 浮石少量混入 強粘性
黑色土 |
| 13 10Y R ³ -3 浮石混入 強粘性 黑色
土 | 14 10Y R 5 浮石少量混入 強粘性 黑
色土 | 15 10Y R 5 浮石混入 強粘性 黑色土 |
| 16 10Y R ³ -3 浮石。黃褐色土粒少
量混入 強粘性 黑色土 | 17 10Y R 5 浮石。黃褐色土粒少量混入
強粘性 黑色土 | 18 10Y R ³ -3 浮石混入 強粘性 黑色
土 |
| 19 10Y R ³ -3 浮石。黃褐色土粒少量混入
強粘性 黑色土 | 20 10Y R 5 黑褐色土粒混入 強粘性 黑
色土 | 21 10Y R ³ -3 浮石。黃褐色土粒少量混入
強粘性 黑色土 |

- 22 10Y R 5% 浮石・褐色土粒少量混入強
粘性 黑褐色土
23 10Y R 5% 浮石・黄褐色土粒少量混入
強粘性 黑色土
24 10Y R 5% 浮石混入 强粘性 黄
色土
25 10Y R 5% 浮石・黄褐色土粒少量混入
强粘性 黑色土
26 10Y R 5% 浮石少量混入 强粘性 黑
色土

第35表

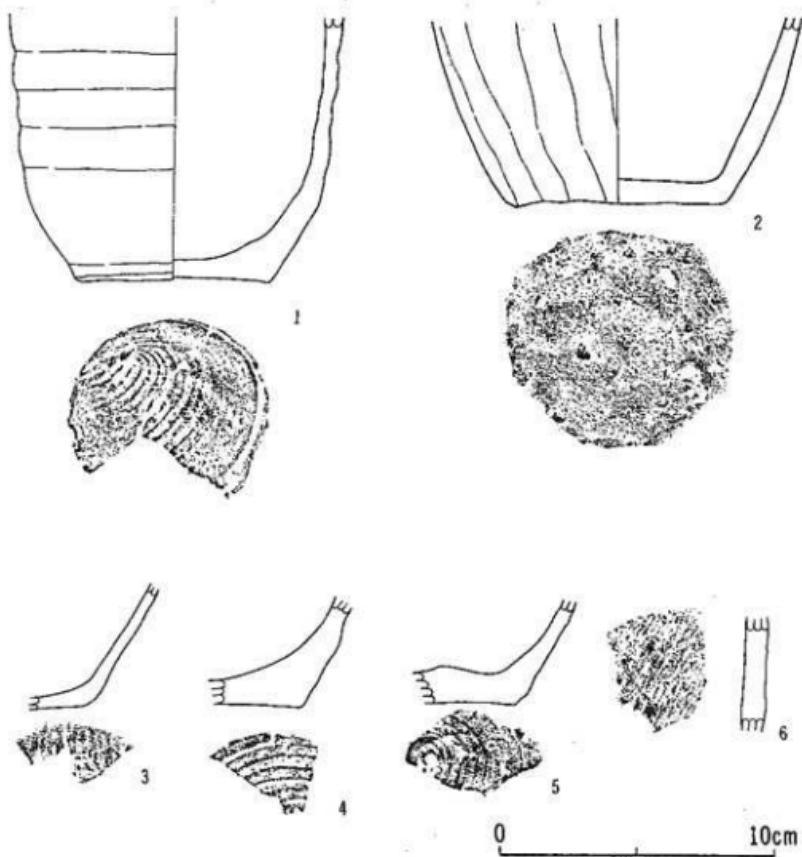
S I 031 穴住居跡計測説明表

検出地区	3-G、4-G	実測図番号	46	図版番号	12
	南側壁	西側壁	北側壁	東側壁	
法 量	壁長	334.5cm	322.0cm	321.5cm	345.5cm
	壁高	2.2-12.4cm	20.6-31.0cm	36.7-49.7cm	34.6-44.6cm
	壁溝幅	なし	なし	なし	15.5-24.5cm
	壁溝深	なし	なし	なし	3.3-8.9cm
形態	方形	面積	10.44m ²	主軸方位	S-3°-W
プラン確認時 の状態	SD 001の北側に、SD 001に南側壁、かまどの一部を破壊されており、白色浮石質火山灰粒と黄褐色火山灰粒を粗に多量に混入する黒色土の不整な広がりを検出し、精査の結果、穴住居跡と確認された。				
覆土と床面 の状態	全体的に白色浮石質火山灰粒と黄褐色火山灰粒を混入する。床面は凹凸が激しく、不整な掘り込みが見られる。				
柱穴	5カ所検出されたが、不規則な配列である。				
かまど	南側壁の中央部からやや西寄りに付設されているが、上部から押圧され、更にSD 001に破壊されている。				
遺物の 出土状況	すべて覆土中からの出土である。 縄文土器頸部破片1点、壺形須恵器の口縁部破片1点、胴部破片1点、壺形土師器の口縁部破片3点、体部破片2点、壺形土師器の口縁部破片9点、胴部破片59点、底部破片10点。				

第36表

S I 031 穴住居跡出土土器説明表

実測図 番号	図版 番号	註記番号	形態・部位	器面調整法			粘土含有物	色調	備考
				外 面	内 面	底 面			
48-1	26-6	一括	壺、底部	ロクロ	ロクロ	回転糸切	粗砂を含む	7.5Y R 5% 浅黄橙	土師器
48-2	26-7	一括	壺、底部	ヘラケズリ	ヘラナヂ	砂底	粗砂を含む	7.5Y R 5% 黑褐	土師器
48-3	26-8	一括	壺、底部	ロクロ	ロクロ	回転糸切		7.5Y R 5% 棕	土師器
48-4	26-9	R P-9 フクド中	壺、底部	ロクロ	ロクロ	回転糸切	粗砂を含む	5Y R 5% によい棕	土師器
48-5	26-10	一括	壺、底部	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細砂を含む	7.5Y R 5% によい棕	土師器
48-6	26-11	一括	縄文、胴部	L R	ミガキ				



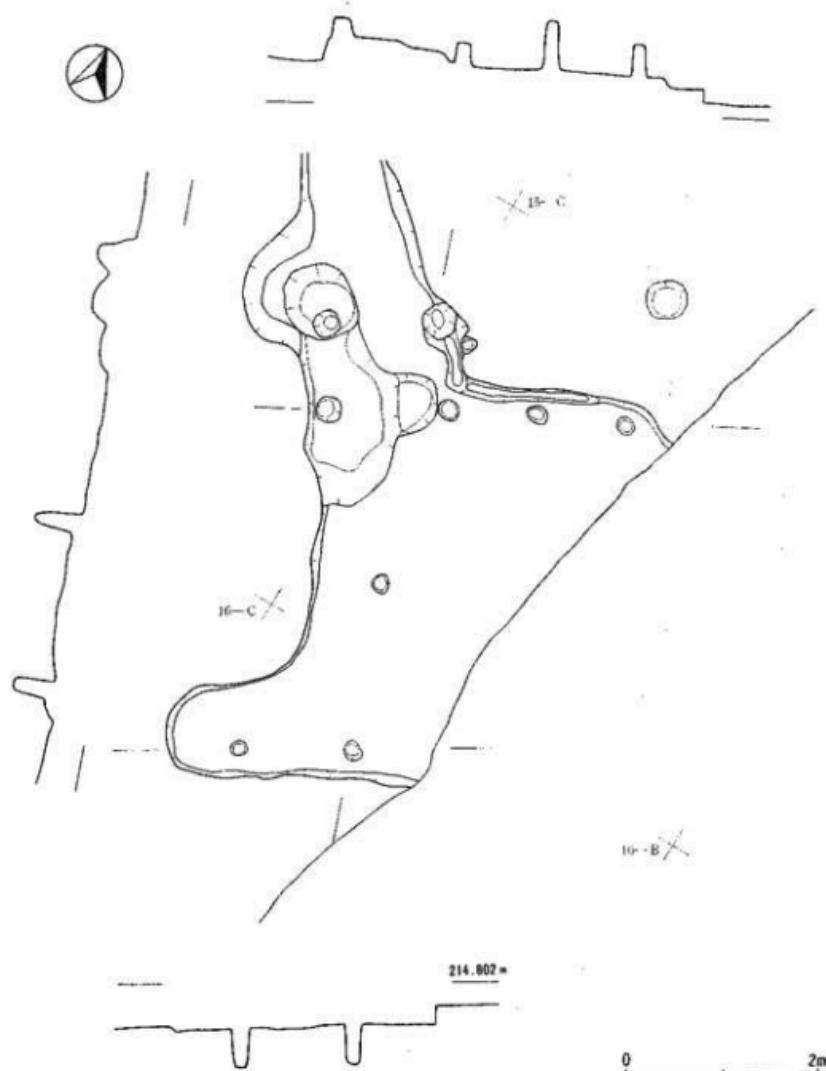
第48図 S I 031竪穴住居跡出土土器拓影・実測図

第37表

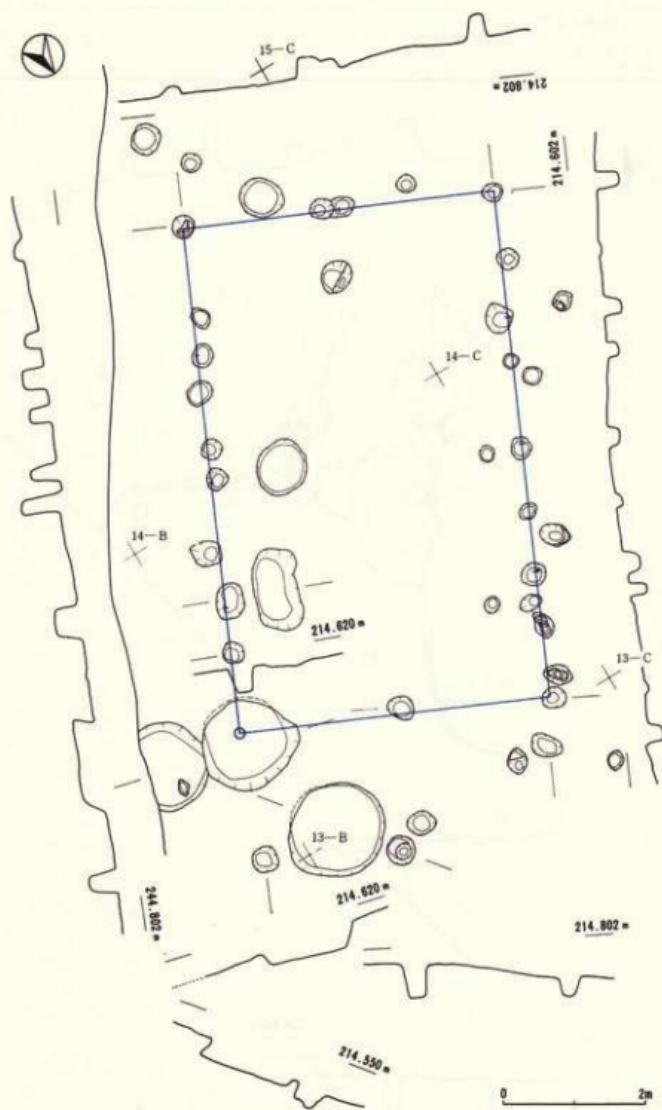
S I 032 竪穴住居跡計測説明表

検出地区	16--C、17-C		実測図番号	48	図版番号
	南側壁	西側壁			
法量	壁長 (144)cm		446.5cm	(397)cm	なし
	壁高 7.0~9.5cm		2.7~4.0cm	4.3~10.4cm	なし
	壁溝幅 なし		なし	11.5~17.5cm	なし
	壁溝深 なし		なし	5.7~8.3cm	なし
形態	方形	面積	(12.03)m ²	主軸方位	S-46°30'W
プラン確認時 の状態	耕作土が薄く、現地表下10~15cmで非常にかたく平坦な面が検出され、精査の結果、出入口様張り出し部のある竪穴住居跡とした。				
覆土と床面 の状態	覆土は耕作や草木の根等で搅乱されており、明確ではない。 床面は小礫混じりで非常にかたく平坦である。				

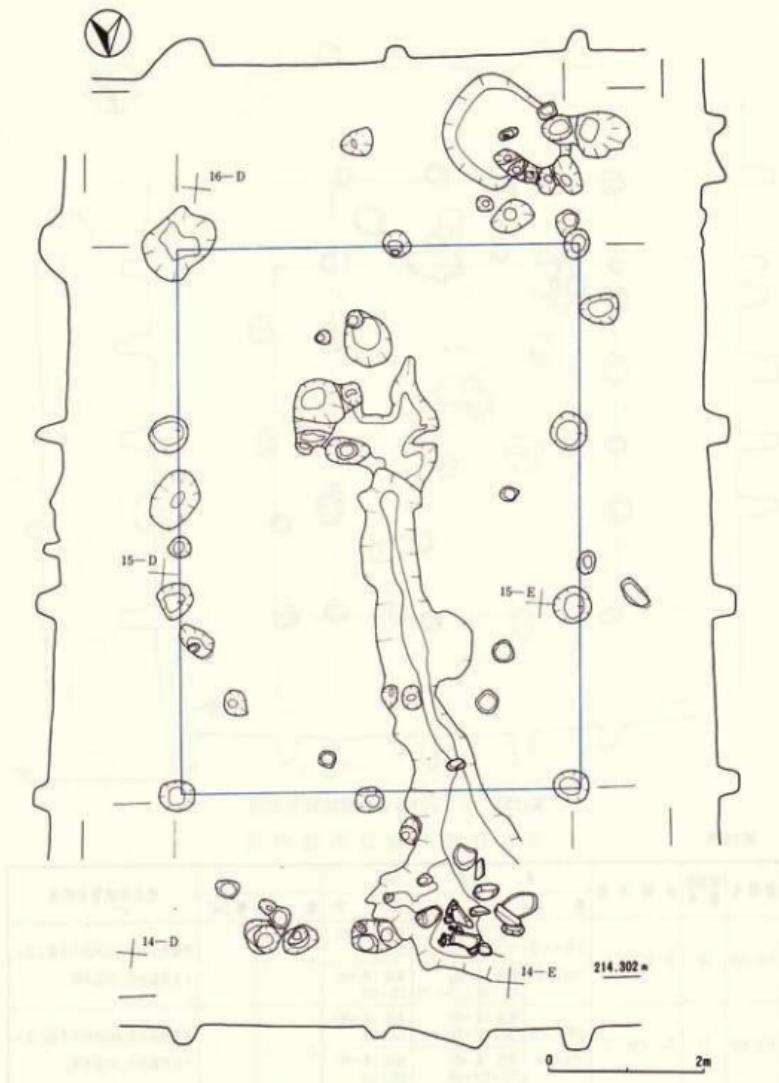
性 穴	壁内調床面に等間で穿たれている。
か ま ど	検出されていない。
遺 物 の 出 土 状 況	な し



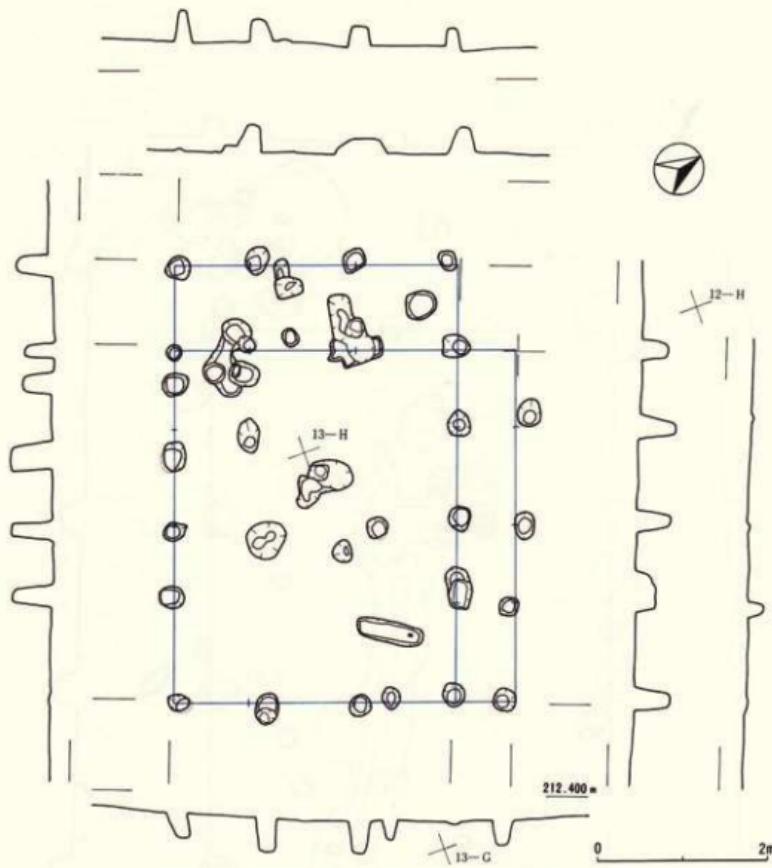
第49図 S.I.032竪穴住居跡実測図



第50図 S B 001掘立柱建物跡実測図



第51図 S B 002掘立柱建物跡実測図

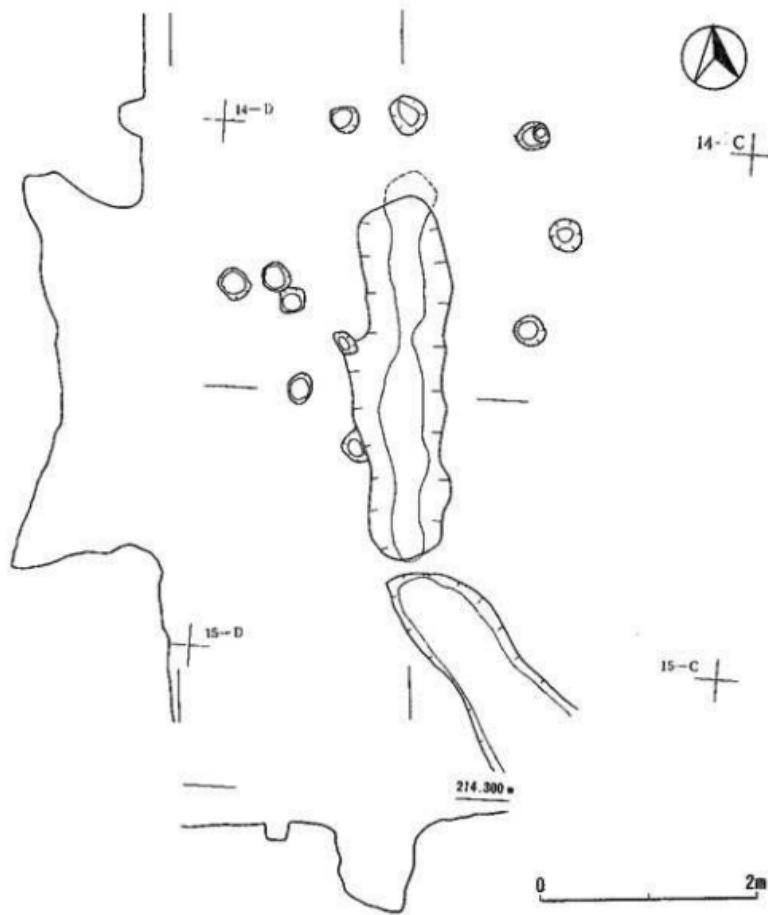


第52図 S B 003掘立柱建物跡実測図

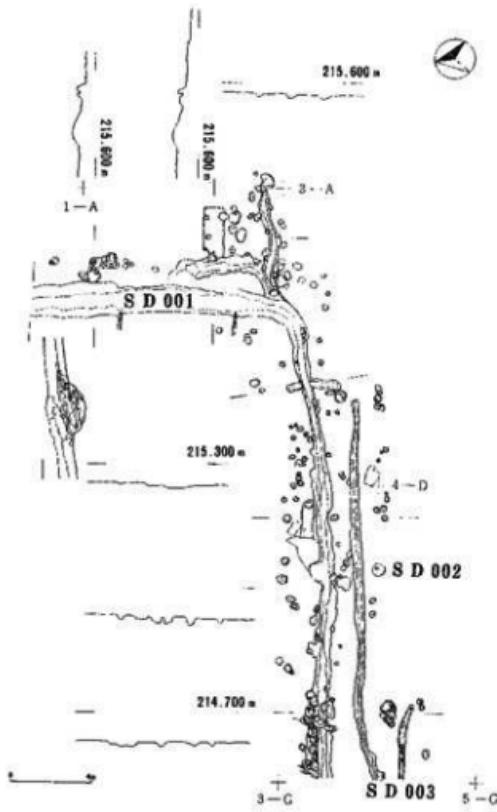
掘立柱建物跡計測説明表

遺構名	実測図 番号	主軸方位	身 高 (cm)				埋土の状況その他
			規 模	横 行	纵 行	位 置 幅(cm)	
SB 001	50	N-27°30'-E	2間×4間	東面(北→南) 181+179+180+180	北面(東→西) 236+222	な し	黄褐色浮石質火山灰粒が多量に混入する黒褐色土。柱痕不明。
			448×720	西面(北→南) 180+182+179+179	南面(東→西) 225+223		
SB 002	51	N-4°30'-E	2間×3間	東面(北→南) 251+223+232	北面(東→西) 256+269	な し	黄褐色浮石質火山灰粒が多量に混入する黒褐色土。柱痕不明。
			525×705	西面(北→南) 237+224+245	南面(東→西) 255+234		

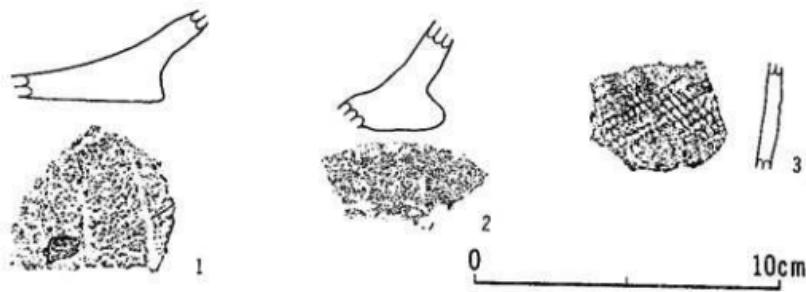
SB 003	52	N-59°30' -W	3間×4間 330×415	北面(東→西) 126+94+109+86 南面(東→西) 123+77+85+130	東面(北→南) 110+110+118 西面(北→南) 122+125+90	北面と西面 西面 110	北面 70 西面 110 S I 007より新しい。
--------	----	-------------	------------------	--	---	-----------------	----------------------------------



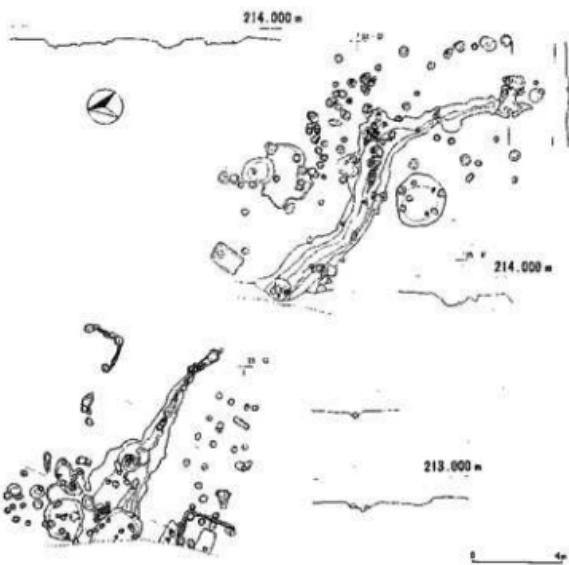
第53図 SK(T)01溝状土壤実測図



第54図 SD 001～SD 003溝状造構実測図



第55図 SD 001溝状造構出土土器拓影図



第56図 S D004溝状遺構実測図

第39表 グリッド出土土器器説明表

実測図 番号	図 番 号	出 地	土 区	詳 記 番 号	形 部	盤 位	器 面 調 察 法			粘 土 含 む	色 調	備 考
							外 面	内 面	底 面			
57-1	27-1	2-C	2-C	2-C RP-括	壁底部	ヘラケズ リ	ヘラナ デ	砂 底	粗砂を含む	10Y R % 黒灰		
57-2	27-2	3-C	3-C	3-C RP-括 環認面	环底部	ロクロ	ロクロ	回転 切		7.5Y R % にぶい黒		
57-3	27-3	3-C	3-C	3-C RP-括 確認面	壁底部			平 滑	粗砂を含む	2.5Y R % 明赤褐		
57-4	27-4	4-B	4-B	4-B RP-括 フク土中	环底部	ロクロ	ロクロ	回転 切		7.5Y R % にぶい黒		
57-5	27-5	5-B	5-B	5-B RP-括 確認面	壁底部	ヘラナ デ	ヘラナ デ	半 滑	粗砂を含む	10Y R % 浅黄褐		
57-6	27-6	5-B	5-B	5-B RP-括 確認面	厚 壁部	ロクロ	ロクロ	平 滑		5Y R % 褐		
57-7	27-7	5-B	5-B	5-B RP-括 フク土中	壁底部			平 滑		10Y R % にぶい黄褐		
57-8	27-8	5-F	5-F	5-F RP-括 確認面	壁底部	ヘラケズ リ	ヘラナ デ	砂 底	粗砂を含む	7.5Y R % 浅黄褐		
57-9	27-9	5-F	5-F	5-F RP-括 確認面	壁底部	ヘラケズ リ	ヘラナ デ	砂 底	粗砂を含む	7.5Y R % 浅黄褐		
57-10	27-10	6-A	6-A	6-A RP-括	壁底部	ヘラナ デ	ヘラナ デ	半 滑		10Y R % にぶい黄褐		
57-11	27-11	6-A	6-A	6-A RP-括	壁底部			平 滑		7.5Y R % にぶい褐		
57-12	27-12	6-B	6-B	6-B RP-括 確認面	壁底部	ヘラナ デ	ヘラナ デ	平 滑		5Y R % 褐		
57-13	27-13	6-C	6-C	6-C RP-括 フク土下	壁底部	ヘラケズ リ	ヘラケズ リ	砂+木 墨	細砂を含む にぶい黄褐	10Y R % にぶい黄褐		
57-14	27-14	7-A	S IIS	遺構外 RP-括	壁底部	ヘラケズ リ	ヘラナ デ	砂 底	粗砂を含む	7.5Y R % 褐		
57-15	27-15	7-A	S IIS	遺構外 RP-括	壁底部	ヘラケズ リ	ヘラケズ リ	半 滑		5Y R % にぶい赤褐		
57-16	27-16	7-A	S IIS	遺構外 RP-括	壁底部	ヘラケズ リ	ヘラナ デ	半 滑		7.5Y R % 褐		

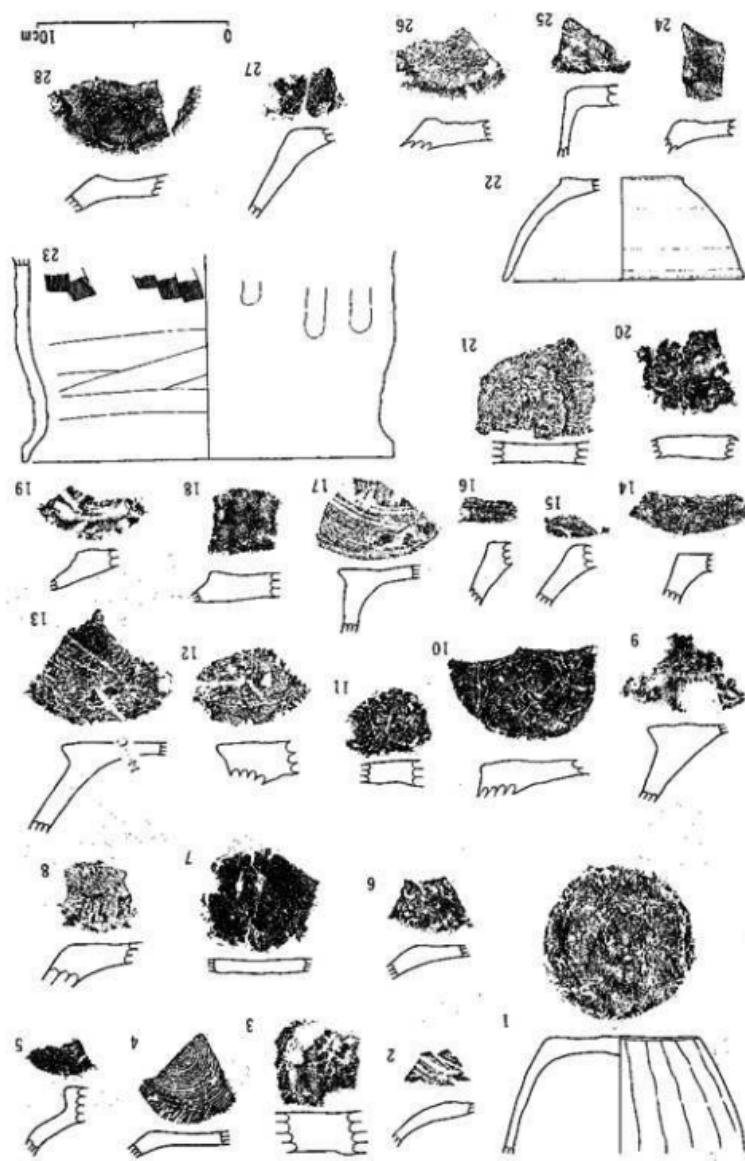
57-17	27-17	7-A	S I 15 遺構外 R P-括	底 底部	ヘラケズ リ	ヘラナ デ	ヘラケ ズリ	粗砂を含む	7.5 Y R 3/4 根	
57-18	27-18	8-F	8-F 桟穴内 フク土中 R P-括	底 底部	ヘラナ デ	ヘラナ デ	平滑	粗砂を含む	7.5 Y R 3/4 にない根	
57-19	27-19	8-F	8-F 桟穴内 フク土中 R P-括	底 底部	ヘラナ デ	ヘラナ デ	平滑		2.5 Y R 3/4 根	
57-20		8-F	8-F 桟穴内 フク土中 R P-括	底 底部	ヘラナ デ	ヘラナ デ	平滑		7.5 Y R 3/4 にない根	
57-21	27-20	9-C	9-C R P-括 確認面	底 底部	ヘラナ デ	ヘラナ デ	砂底	粗砂を含む	7.5 Y R 3/4 根	
57-22	27-21	11-E	11-E R P-括 確認面	环	ロクロ	ロクロ	回転 系切		10 Y R 3/4 にない黄褐色	
57-23	27-22	9-C	9-C R P-括 確認面	底 底部	ヘラナ デ	ヘラナ デ			7.5 Y R 3/4 浅黄根	口映部 ロクロ壁
57-24	27-23	9-C	9-C R P-括 フク土上	底 底部	ヘラナ デ	ヘラナ デ	砂底	粗砂を含む	5 Y R 3/4 にない根	
57-25		9-C	9-C	底 底部	ヘラナ デ	ヘラナ デ	平滑		7.5 Y R 3/4 明褐色	
57-26	27-24	9-E	9-E R P-括 フク土上	底 底部	ヘラナ デ	ヘラナ デ	平滑		10 Y R 3/4 黑褐	揚 表
57-27	27-25	9-E	9-E R P-括	底 底部	ヘラナ デ	ヘラナ デ	木製底		10 Y R 3/4 灰黄褐色	
57-28	27-26	9-E	9-E R P-括	底 底部	ヘラナ デ	ヘラナ デ	平滑	粗砂を含む	10 Y R 3/4 にない黄褐色	
58-29	27-27	10-C	10-C R P 2 確認面	底 底部	ロクロ	ロクロ	回転 系切		10 Y R 3/4 浅黄根	
58-30	27-28	11-E	11-E R P-括 確認面	底 底部	ロクロ	ロクロ	回転 系切		7.5 Y R 3/4 にない根	
58-31	27-29	11-E	11-E R P-括 確認面	底 底部	ヘラナ デ	ヘラナ デ			5 Y R 3/4 にない黄褐色	
58-32	27-30	11-E	11-E R P-括 確認面	底 底部	ヘラスズ リ	ヘラナ デ	木製底	粗砂を含む	7.5 Y R 3/4 根	
58-33	27-31	11-E	11-E R P-括 確認面	底 底部	ヘラナ デ	ヘラナ デ	平滑	粗砂を含む	7.5 Y R 3/4 にない根	
58-34	27-32	11-E	11-E R P-括 確認面	底 底部	ヘラナ デ	ヘラナ デ	平滑		2.5 Y R 3/4 明赤褐色	
58-35	27-33	12-I	12-I R P-括	底 底部	ロクロ	ロクロ	回転 系切		7.5 Y R 3/4 にない根	
58-36	27-34	16-F	16-F R P-括 確認面	底 底部	ヘラケズ リ	ヘラケ ズリ	粗砂を含む		10 Y R 3/4 にない黄褐色	
58-37	27-35	16-F	16-F R P-括 確認面	底 底部	ロクロ	ロクロ	回転 系切		7.5 Y R 3/4 根	
58-38	27-36	16-F	16-F R P-括 確認面	底 底部	ロクロ	ロクロ	回転 系切		5 Y R 3/4 にない根	
58-39	27-37	17-C	17-C R P-括	底 底部	ヘラケズ リ	ヘラナ デ	砂底	粗砂を含む	7.5 Y R 3/4 にない根	
58-40	27-38	17-C	17-C R P-括	底 底部	ヘラナ デ	ヘラナ デ	木製底	粗砂を含む	10 Y R 3/4 灰黄褐色	

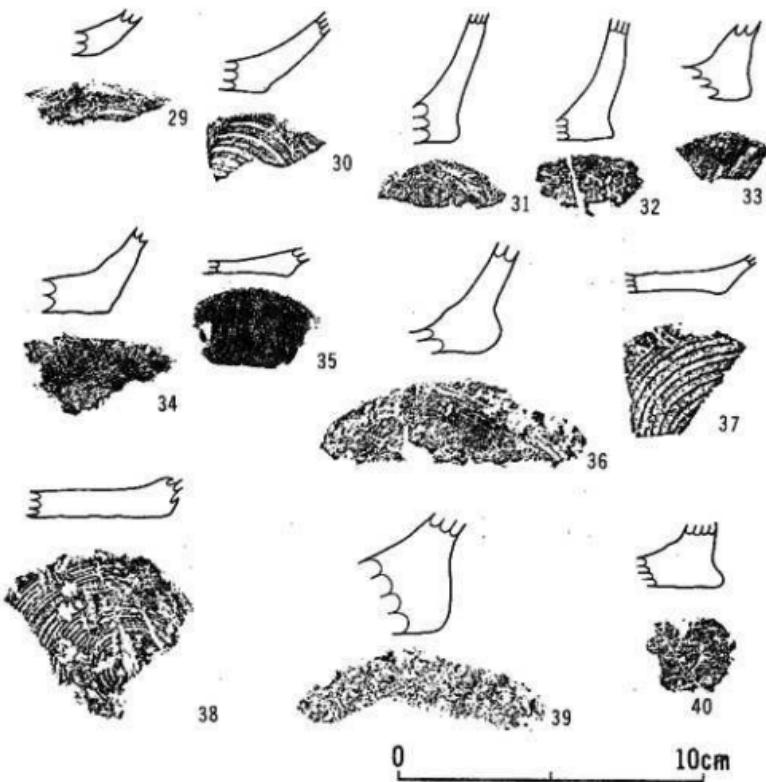
第40表 出土須恵器・陶磁器説明表

括弧番号	団版番号	註記番号	器種・部位	色調
59-1	28-1	S I 04	1括 フク土中	壺(裏)・底部 N 5灰~ 2.5 Y R 3/4 灰白
59-2	28-2	S I 06	R P-括 カモド付	壺(裏)・底部 N 5灰
59-3	28-3	S I 11	1括 フク土中	壺(裏)・脚部 7.5 Y R 3/4
59-4	28-4	S I 11	1括 フク土中	壺(裏)・脚部 N 5灰
59-5	28-5	S I 11	1括 フク土中	壺(裏)・脚部 N 5灰
59-6	28-6	S I 11	1括 フク土中	壺(裏)・脚部 10 Y R 3/4
59-7	28-7	S I 13	1括 フク土中	壺(裏)・脚部 10 B G R 3/4 暗青灰
59-8	28-8	S I 17	R P-括 I-E 等	壺(裏)・脚部 10 Y R 3/4 灰黄褐色
59-9	28-9	S I 17	R P-括	壺(裏)・脚部 N 3暗灰

括弧番号	団版番号	註記番号	器種・部位	色調
59-10	28-10	S I 31	R P-1 フク土上	壺・口縁部 10 Y R 3/4 褐灰
59-11	28-11	I-C	カクニン面	指跡・体部 2.5 Y R 3/4 黒褐色赤褐色
59-12	28-12	S I 19	R P-括 フク土中	壺(裏)・脚部 10 Y R 3/4 灰黄褐色
59-13	28-13	S I 31	R P-括 フク土下	壺(裏)・脚部 10 Y R 3/4 灰
59-14	28-14	3-B	カクニン面	壺(裏)・脚部 7.5 Y R 3/4 暗青褐色
59-15	28-15	3-B	カクニン面	指跡・体部 5 Y R 3/4 黒褐色赤褐色
59-16	28-16	4-C	R P-括 カクニン面	指跡・底近部 7.5 Y R 3/4 黒褐色
59-17	28-17	7-D	R P-括 フク土下	壺跡・体部 5 Y R 3/4 明赤褐色
59-18	28-18	8-B	R P-括 表柱	壺(裏) D縫部 5 Y R 3/4 黒褐色

图57 土器标本·实物图(1)

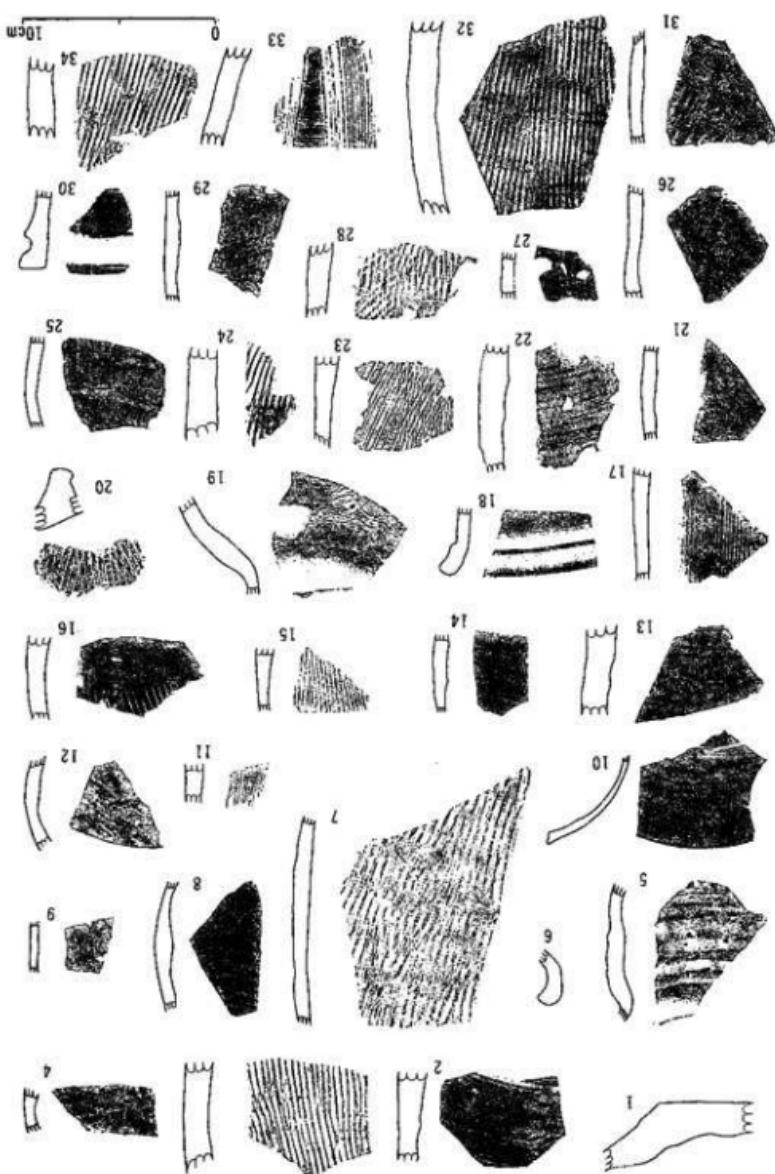


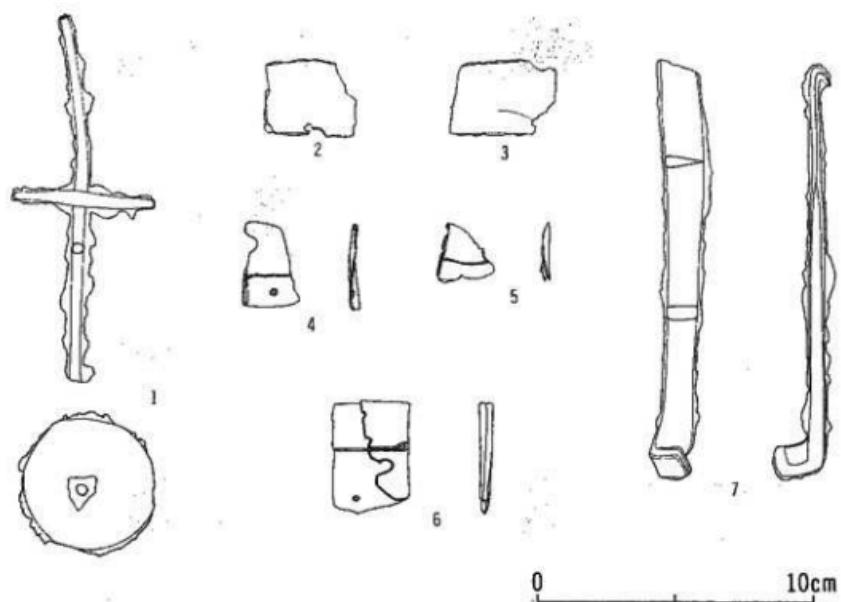


第58図 グリッド出土七器拓影・実測図(2)

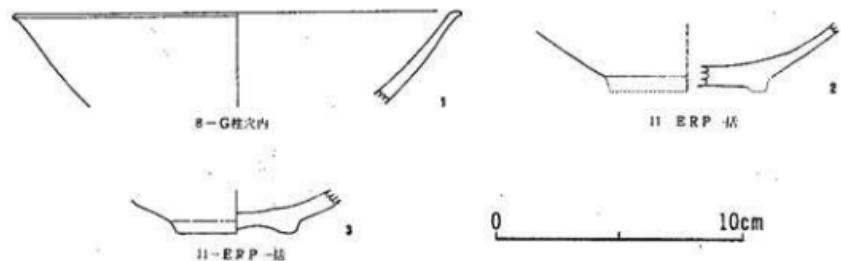
59-19	28-19	8-F 桟穴内 RP-括 フク土中	壺・肩部 N 5灰	59-27	28-27	9-C 一括	壺(裏)・胴部 5Y% 黒
59-20	28-20	8-F 桟穴内 RP-括 フク土中	壺体・底近部 7.5YR% 黑褐	59-28	28-28	9-D 一括 フク土中	壺(裏)・胴部 5Y% 灰
59-21	28-21	8-G 桟穴内 一括 フク土中	壺(裏)・胴部 2.5YR% 黑灰	59-29	28-29	10-C RP-括 カクニン面	壺(裏)・胴部 10YR% 黑灰
59-22	28-22	8-G 桟穴内 一括 フク土中	壺(裏)・胴部 N 3暗灰	59-30	28-30	10-E 一括 カクニン面	壺(裏) 口縁部 5Y% 灰
59-23	28-23	8-G 桟穴内 一括 フク土中	壺体・体部 7.5YR% 黑褐	59-31	28-31	11-F SK1 フク土中	壺(裏)・胴部 7.5YR% 黑
59-24	28-24	8-H RP-括 カクニン面	壺(裏)・胴部 2.5YR% 黑灰	59-32	28-32	13-F RP-括 フク土中	壺(裏)・胴部 10Y% 灰
59-25	28-25	9-C 一括	壺(裏)・胴部 N 3暗灰~ 2.5Y% 灰灰	59-33	28-33	13-F RP-括 フク土	壺体・体部 10YR% 黑褐~ 5Y% 灰オリーブ
59-26	28-26	9-C RP-括	壺(裏)・胴部 10YR% 黑	59-34	28-34	13-F 遷移外	壺(裏)・胴部 2.5Y% 灰白

圖59 出土陶器器形・実測図





第60図 出土鉄製品実測図



第61図 出土白磁実測図



第62圖 出土砾石実測図

第41表

出土砥石計測説明表

実測番号	団番	版番	出土地区	註記番号	種別	大きさ				石質	備考
						長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)		
62-1	29-8	S I 005	R Q 一括	砥石		69.0	46.0	40.5	189.7	凝灰岩	砥面数4
62-2	29-9	S I 005	R Q 一括	砥石		129.5	57.0	28.0	288.0	泥岩	砥面数4
62-3	29-10	S I 11	R Q フクド中	砥石		46.5	39.5	11.5	40.1	凝灰岩	砥面数4
62-4	29-11	S I 13	R Q フク土中	砥石		58.5	31.5	33.5	84.1	凝灰岩	砥面数4
62-5	29-12	S I 14	R Q フク土中	砥石		142.0	74.0	43.5	605.5	泥岩	砥面数4
62-6	29-13	S I 16	R Q フク土中	砥石		164.5	43.5	32.5	359.9	凝灰岩	砥面数4
62-7	29-14	S I 17	R Q 床底面	砥石		141.5	42.5	57.5	576.3	凝灰岩	砥面数4
62-8	29-15	14-E	R Q 一括	砥石		132.5	93.5	70.5	897.6	流紋岩	砥面数4

第42表

出土繩文土器片拓影説明表

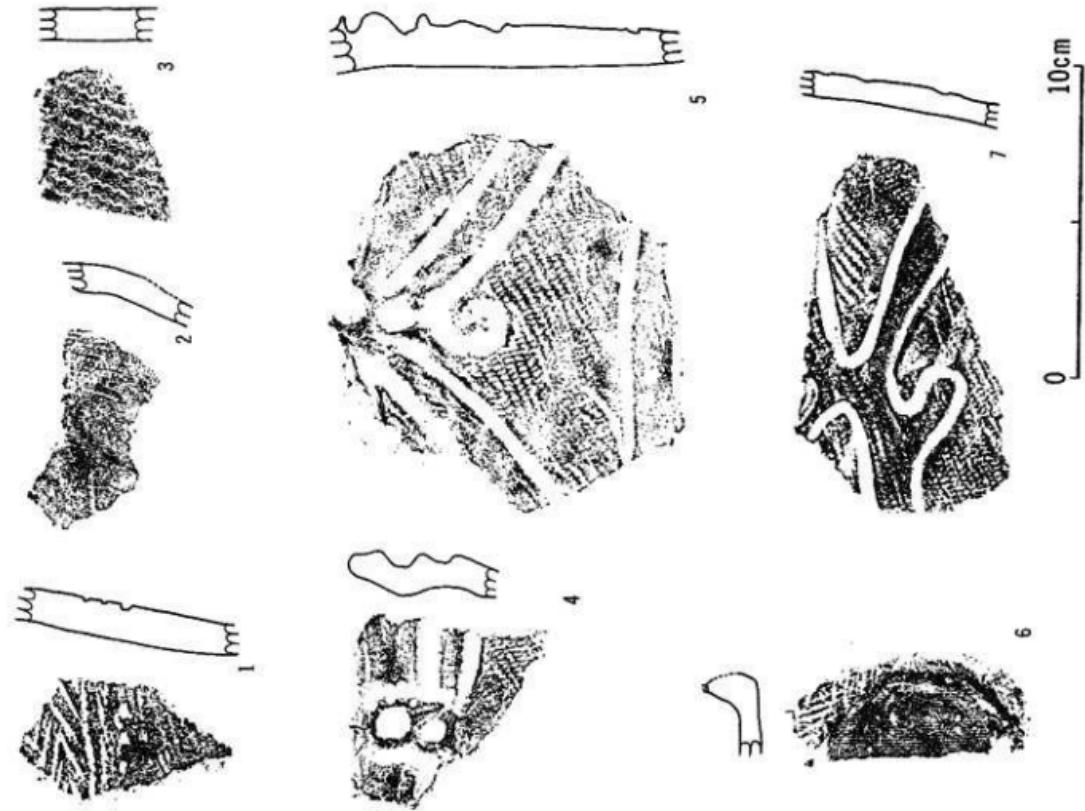
実測番号	団番	版番	出土地区	註記番号	形態部	文様構成	内調整	焼成	胎土	色調
63-1	30-1	17-D	17-D	--括	深鉢部 口縁部	貝殻複疊压痕文(洞状) +沈線+釋突	なで	良好	織紗を含む	7.5YR 4/2 黒褐色
63-2	30-2	16-C	16-C	R P--括	深鉢部	貝殻複疊压痕文	なで	良好	織紗を含む	5YR 4/2 暗赤褐色
63-3	30-3	15-F	15-F	R P--括	深鉢部	貝殻複疊压痕文	なで	良好	織紗を含む	7.5YR 4/2 に、5YR 4/2 暗赤褐色
63-4	30-4	15-E	15-E	R P--括	深鉢部 口縁部	L R 繩文+無文+沈線	みがき	良好	精選	5YR 4/2 明赤褐色
63-5	30-5	16-D	16-D	R P--括	深鉢部	L R 繩文+磨削+沈線	みがき	良好	精選	10YR 4/2 に、5YR 4/2 黄褐色
63-6	30-6	12-E	12-E	R P--括	深鉢部	R L 繩文	みがき	良好	織紗を含む	10YR 4/2 黄褐色
63-7	30-7	17-D	17-U	R P--括	深鉢部	L R 繩文+沈線	みがき	良好	織紗を含む	7.5YR 4/2 褐色

第43表

出土石器・剝片計測説明表

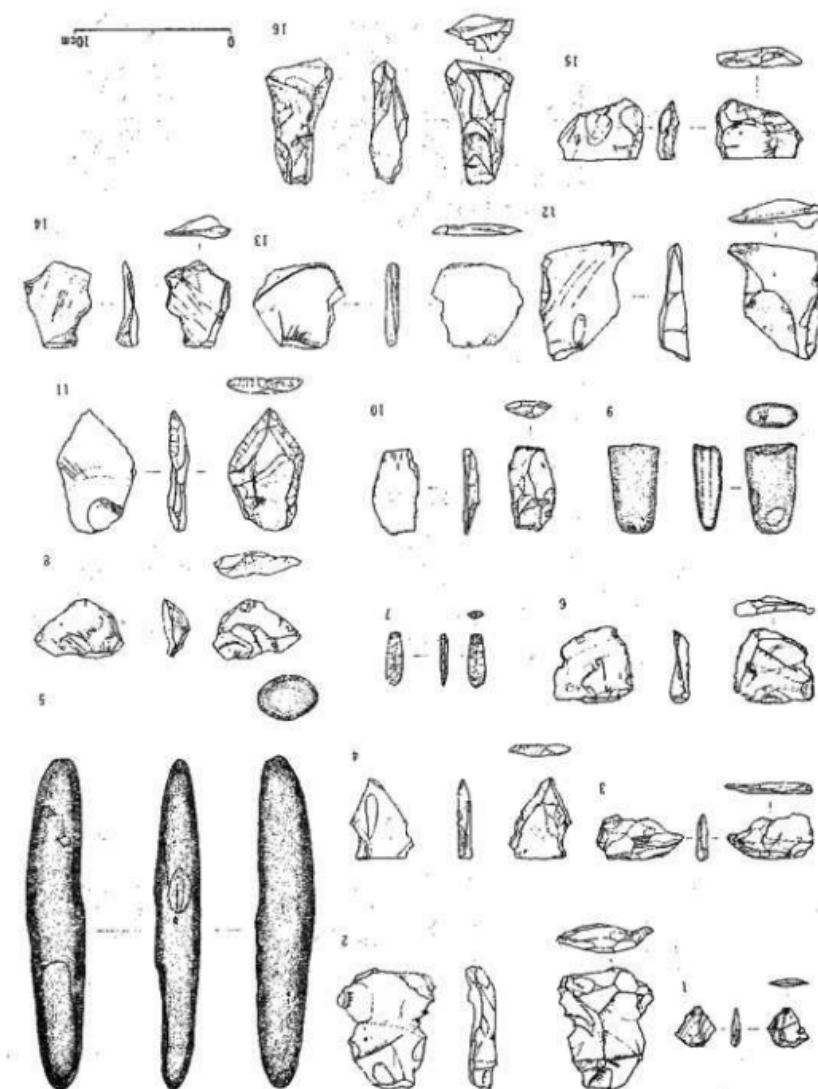
実測番号	団番	版番	出土地区	註記番号	種別	大きさ				石質	備考
						抜き(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)		
64-1	31-1	S I 12	フク土中		剥片	25.0	25.5	5.5	2.3	黒曜石	
64-2	31-2	S I 013	フクド中		剥片	79.5	63.5	19.5	80.6	頁岩	
64-3	31-3	S I 016	R Q 一括、床面		剥片	30.5	56.5	7.0	11.6	粘板岩	
64-4	31-4	4 D S D	R P--括、フクド中		剥片	52.5	40.5	7.5	14.4	頁岩	
64-5	31-5	S I 018	フクド中		石棒	218.5	37.5	29.5	320.7	頁岩	
64-6	31-6	6-A	R Q 一括、カクニン面		剥片	48.0	51.5	13.0	23.6	頁岩	
64-7	31-7	12-1	R Q 一括、カクニン面		石盤	34.0	11.5	4.0	1.8	凝灰岩	
64-8	31-8	12-I	R Q 一括、カクニン面		剥片	38.0	57.0	14.5	24.0	頁岩	
64-9	31-9	12-1	R Q 一括、カクニン面		石斧頭部	58.0	32.0	15.0	57.8	凝灰岩	
64-10	31-10	12-1	R Q 一括、カクニン面		剥片	56.0	29.0	11.5	14.9	頁岩	
64-11	31-11	14-C	カクニン面		不定形石器	79.0	49.0	10.0	44.1	頁岩	
64-12	31-12	15-C	R Q 2、カクニン面		剥片	77.0	61.5	17.5	58.2	頁岩	
64-13	31-13	15-F	R P、フクド上		剥片	53.0	57.5	8.5	24.1	泥岩	
64-14	31-14	16-D	R Q 一括		剥片	56.5	43.5	15.0	21.8	頁岩	

64-15	31-15	16-F	RQ、カクニン面	鉢	15	37.5	53.0	13.0	31.7	瓦	岩
64-16	31-16	南トレンチ	RQ-底	掻扒工具		78.5	62.0	17.5	59.6	瓦	岩



第63図 出土繩文土器片拓影図

(下) 甲壳类化石 出土石器示意图 (新石器时代)



6. まとめ

本遺跡で検出した遺構・遺物について若干のコメントを加えまとめとしたい。

かまどを付設する竪穴住居跡について

かまどを付設する竪穴住居跡8棟を観察すると、①覆土（埋土）中に浮石質火山灰粒を粗に多量に混入。②1棟を除き南側壁にかまどを付設している。竪柱穴が各壁中央部と隅部に配置され、所謂対角線上の床面中央近くに見られない。運かまどの形態が所謂関東型を呈するものが多い。などの共通する要素を抽出することができる。これらの要素について、近隣諸遺跡と比較考察すると、①の浮石質火山灰粒を粗に多量に混入される黒色上のあり方についてであるが、その素源となる浮石質火山灰粒の存在についてはこれを大湯浮石層一十和田a降下火山灰層に対比することについて今のところ異論はないが、竪穴住居跡との関連では、埋土の混入物となるには、⑦住居の構築前に降下堆積し、住居廃棄に伴い埋没時に、④居住時に降下して上屋とその周囲に堆積し、住居廃棄に伴い埋没時に、⑦住居廃棄後に降下し堆積し、雨水等により混合する。の3時期が降下時期として『常識』として考えられるであろう。この3時期のいずれかを決定するには、大局的な見方も勿論必要であるが、微視的、局部的な観察が必要となる。（例えばかまどの抽部や煙道部隔壁の粘土等構築材の下部に時々浮石粒が検出される例などは、住居の構築前に浮石粒が堆積していないなければならない事象である。）この微視的観察でも降下後の所産であることが明確な竪穴住居跡の絶対年代は $1,100 \pm 100$ y. B.P. の範囲に集中する。のことから浮石粒の降下下限はこれを下ることはないと考えられよう。③については、この地域（鹿角地方）で調査されたかまどの付設されている竪穴住居跡144例のうち、時期、地形、遺跡における住居占地位置にかかわらず、その7割までが南側壁に付設されている事実があり、単純にこの理由を考えれば、風向、広場との位置関係よりも南側壁に付設させる強い「規制」があったとも考えられる。また本遺跡の場合、各壁面がみかけの東、西、南、北の方位に一致する7棟は南側壁にかまどが付設されているが、東側壁にかまどを付設する竪穴住居跡1棟が各方位に隅部を向けており、棟方向（占地の仕方、住居の向き）が異っていることも留意すべきである。つまり鹿角地域における住居の向き、かまどを付設する壁面の方向がほぼ一定している中で、地形的にも大幅な変化も認められないまま遺跡の中で、少数棟だけがその「規制」をはずれる（はずれている）ことは、「大部分が一致する」ということからの「強い規制」を想定する理解方法から、なぜ「少数が反する」のかその理由を求める理解の方法が必要ではなかろうか。⑤については、柱穴の配設が上部構造に直接関連するものであるだけに重要な要素のひとつである。竪穴住居跡の対角線上の床面上に4本配列する一般的な柱穴配置と異なり、所謂床面上に配列せず、壁に接するように壁溝中の壁面下方の中央部と隅部に8本配設

する方法は、掘立柱建物跡の柱穴配置に類似しており注目されるものである。豊穴住居跡の柱穴配置については、三浦圭介氏が青森県浪岡町源常平遺跡^(註1)の調査報告の中でタイプ分類されており、本遺跡例は氏の言われるF-1類のパターンであるが、鹿角地域の調査例ではこのパターン例が顕著である。この柱穴配置のパターンからは、居住空間に柱間仕切り壁が存在せず「外壁」中に主柱、支柱がある有効空間の広い軒高な上部構造を推定されよう。柱穴配置の変遷についての年代観は明らかにされておらないが、伴出する土器等の相対年代及び絶対年代から少なからず見通しが立てられよう。④については、平面形状が「煙道部の長いかまど」と認められても、精査の結果使用痕、構造等から煙道部が短く、焚口から煙出孔にむかって急上昇する形態と判明したものが多い。

註1 北の林I、北の林II遺跡他数遺跡の¹⁴C年代測定結果による。なお¹⁴Cの半減期5730年にもとづいており Libby の5568年とは差を生ずる。

註2 三浦圭介 「4 豊穴住居跡について(柱穴の配置)」『源常平遺跡発掘調査報告書』
青森県埋蔵文化財調査報告書第39集 1978年

かまどを付設しない豊穴住居跡について

かまどを付設しない豊穴住居跡について観察すると柱穴配置はかまどを付設する豊穴住居跡と同じであり、床面に焼土が若干堆積しているのが認められるのが炉跡とすれば、かまどのかわりに炉を付設した豊穴住居跡と考えられる。またS I 001、S I 002、S I 032のように張り出し部をもつ豊穴住居跡もあり、これらは妻の神III遺跡^(註2)の発掘調査を明らかになったように中世の所産と考えられる。

註3 昭和56年度県文化課が調査

掘立柱建物跡について

3棟確認された掘立柱建物跡は、SB 001、SB 002の2棟がその柱穴内に黄褐色浮石質火山灰粒を多量に混入する黒褐色土を認めることができることから黄褐色浮石質火山灰粒の堆積後の構築により搅乱再堆積したものと考えられる。

土器について

本遺跡では、土師器、須恵器を主体とするが、少量ながら繩文土器、陶磁器類も出土している。繩文土器は、早期、中期、後期の3時期の小破片が出土しており、3点の貝殻文土器片は注目されよう。陶磁器類は直接遺構と関連する出土例は少ないが、摺鉢片や珠珊瑚系土器に混つて3片の白磁碗片が出土している。土師器については、环形、斐形の他に鍋形の形態がみられる。ろくろで整形、切り離し後に調整を加えない环形土師器、ろくろから切り離し後、内面を

ヘラミガキと黒色処理を加えた壺形土師器、ろくろ切り離し後、粘土紐を底縁に巡らして高台とした高台付壺形土師器があるが、器形的には口径>底径×2、高さ≈底径の値を示し、湾曲するプロポーションをもつ。このプロポーションはまた壺形・須恵器にも共通する。壺形土師器は小礫を混入する粗い粘土を胎土とし、その成形、整形にろくろを使用しないもの、胎土を精選し整形にろくろを使用するものの2種が認められるが、胴部の主要調整技法は、粗いヘラケズリであり、口径<底径×2と底径が大きめの長脚・刺張りなプロポーションをもっている。底部には木葉痕砂粒付着等が認められる。底部に木葉痕を有するのは奈良時代以来の「伝統」であるが、砂粒付着は突発的事象である。木葉痕、砂粒付着が底部に認められるのは、②その成形時に下に敷いたために痕跡が残った。④乾燥時に置いたために痕跡が残った。が考えられ更にそれらが、⑦積極的に付けられた。⑧偶然に付いた。のいずれかが考えられる。砂粒を底部に付着させている壺形土師器は近年米代川流域から津軽地方に多く出土しており、その出土（分布）範囲、共伴遺物の編年的位置も明らかにされつつある極めて特徴的な壺形土器である。鍋形土器は近年出土例が増加しているが、これは、日常什器としての土器セット内容が何らかの影響をうけて変化したものであろう。土器のセット関係では、S 1013、S 1014から出土した土器が注目され、この時期の日常生活什器（土器）の内容を示すものであろう。また、壺形土師器の中には、「寺」「八万」「企」等墨書きあるものが見られ、仏教と関連する「寺」については書体を異にするが、小平遺跡第4号竪穴住居跡でも出土しており、鹿角地方への仏教流布と「寺」建立の時期等をもあわせて今後更に検討する必要がある。

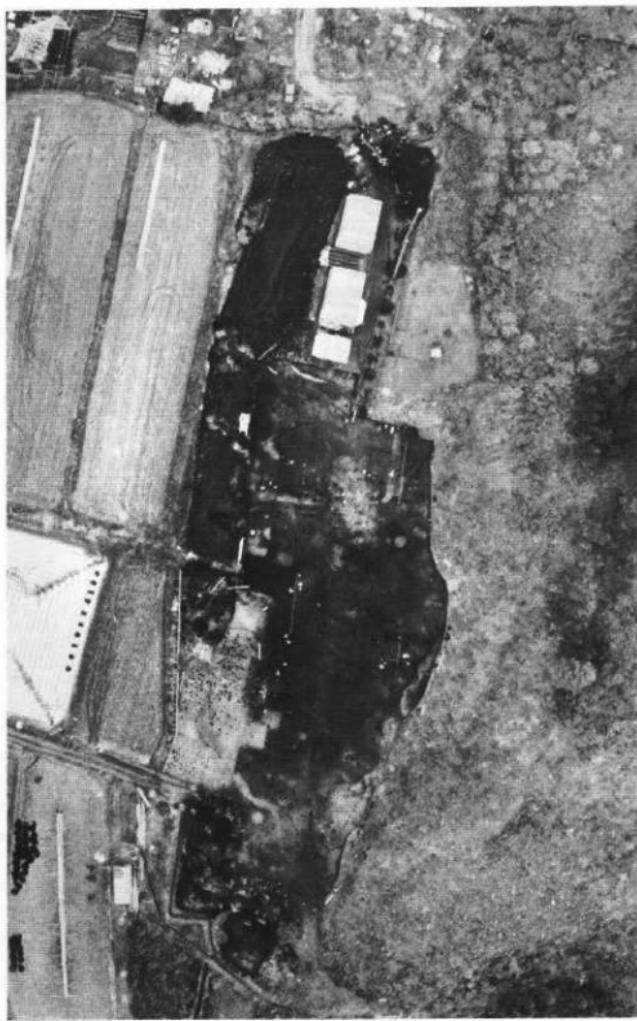
註4 珠珊瑚土器という名称については種々の解釈（定義）で使用されているが、本遺跡では、本来的な珠珊瑚とは若干ニュアンスを異にし、地方窯で焼成されたものではないか（例えば二ツ井町エヒバチ長根窯跡）と推定されるものを考慮している。

註5 桜田 隆 「底部に砂粒を付着させる壺形土師器について」『日本考古学協会 昭和57年度総会研究発表要旨』 1982年

註6 鹿角市教育委員会『小平遺跡発掘調査報告』鹿角市文化財調査資料第10号 1979年

一本杉遺跡 発掘調査参加者名簿

調査補佐員	神田 公男	児玉 昭彦	池田 洋一	安保 廣	阿部 明人
	畠山 圭	米田 哲	高橋 修		
整理作業員	阿部 香子	木村 クリ	藤井富久子		
発掘作業員	浅利善太郎	斎藤富仁郎	山口重次郎	川又惟太郎	佐藤喜之丞
	菊池 政吉	小田 幸吉	秋元 敏	安保 茂	大信田 学
	菊池 トシ	成田 リエ	安保ヨシノ	安保 リウ	浅石十三子
	浅石 キサ	工藤 ムラ	高橋 幸	阿部 キエ	成田 チギ
	柳沢 ミエ	川又 ミヨ	川又 サヨ	山本 キヌ	川又 エイ
	米村 トメ	児玉 春子	木村 ヒテ	川又 テル	小沼 テル
	木村 ミツ	金沢 リセ	阿部アヤ子	佐藤 ミノ	川又ハチヨ
	川又トキエ	閑 ハギ	川又 トシ	中村 リヨ	中村クニエ



図版1　遺跡全景航空写真

一本杉遺跡



遺跡全景（東側から撮影）

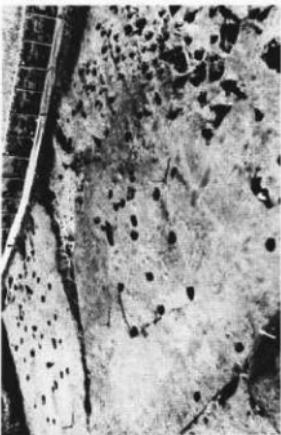
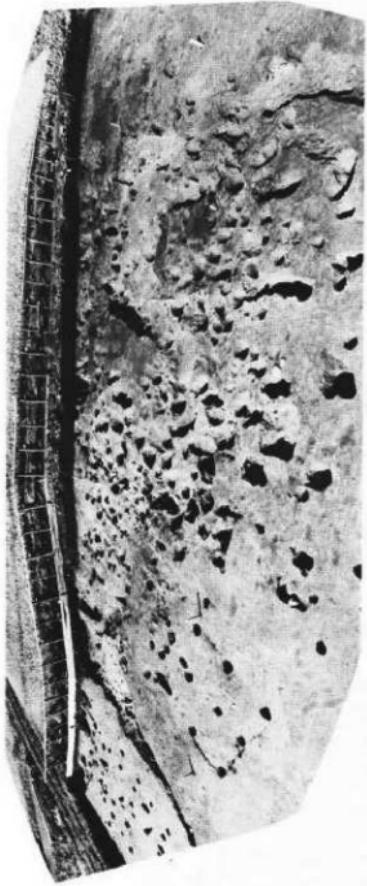


調査状況



図版2 遺跡全景

水田面這樣全黑



一本杉造跡

S I 001、S I 002



S I 009

図版3 S I 001・S I 002・S I 009

一
本
之
最



S1003

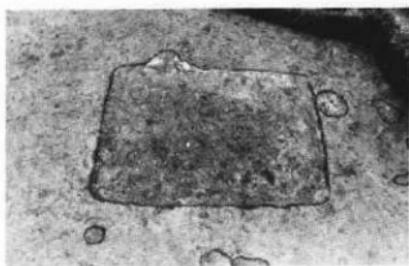


S1010

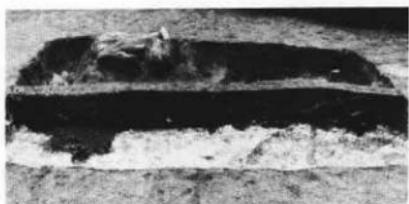


S1010

圖版 4 S1003 - S1010



S I 004 プラン確認状況



S I 004 覆土堆積状況

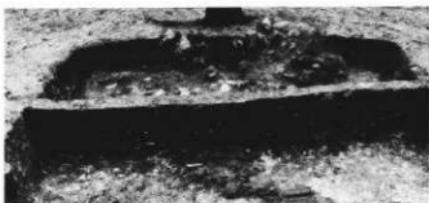


S I 004 完照全景

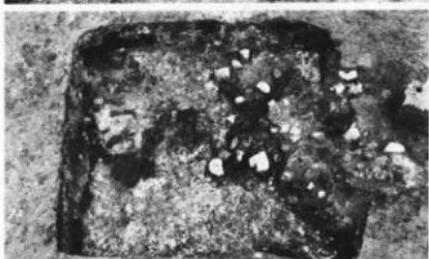


S I 004 かまど両袖芯材と
支脚（竪形土器の転用）

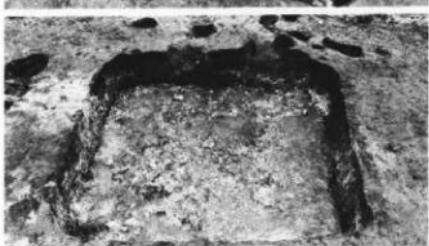
図版5 S I 004



S I 005
覆土堆積狀況



S I 005
床上炭化物・材、
自然石出土狀況



S I 005
炭化板壁材出土狀況



左：同上部分（西側壁）
下：同上部分（東側壁北東部）



図版 6 S I 005



SI 006全景



右上：SI 006かまど右袖部の
芯材としての變形土師器
左上：SI 006かまど左袖部の
芯材としての變形土師器



SI 006かまど両袖芯材と支脚



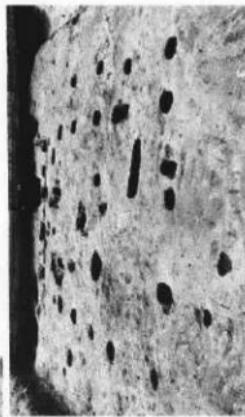
SI 006完掘状況



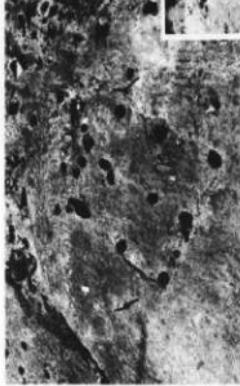
S I 007



S B 003全景 (拡大)



S I 009



S I 009全景 (拡大)

S I 007 • S B 003 • S I 009



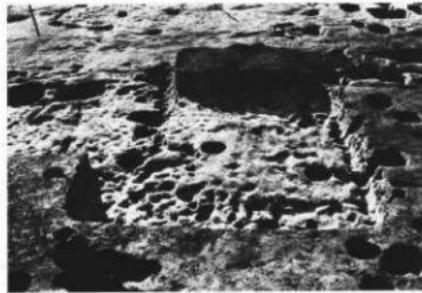
S I 011、S I 012、S I 016、
S I 017、S I 018、S I 020
S I 021



S I 011、S I 012
(手前) (中央)



S I 011全景



S I 012全景



S I 013完堤状況



S I 013床上
炭化材出土状況
(左下、右下も同じ)



S I 013かまど両袖芯材
及び支脚



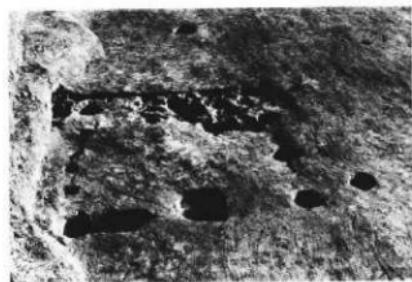
S I 014全景



S I 014 かまど検出状況



S I 014 かまど掘り方



S I 015全景

一本
杉木
根



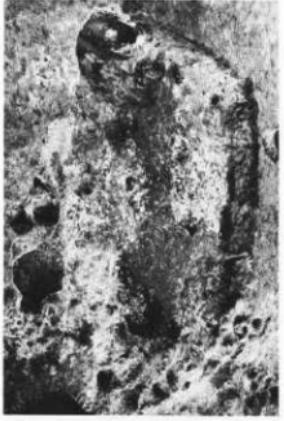
S 1 017 • S 1 018 • S 1 019



S 1 017 • S 1 018



S 1 010



S 1 031

图版 12 S 1 017 • S 1 018 • S 1 019 • S 1 030 • S 1 031



7ライン～17ライン
検出遺構群



S B 002



S B 001



12-D～12-F
14-D～14-F
検出柱穴群

図版13 S B 002・S B 001



12-D付近検出柱穴群



S I 004とその南側柱穴群

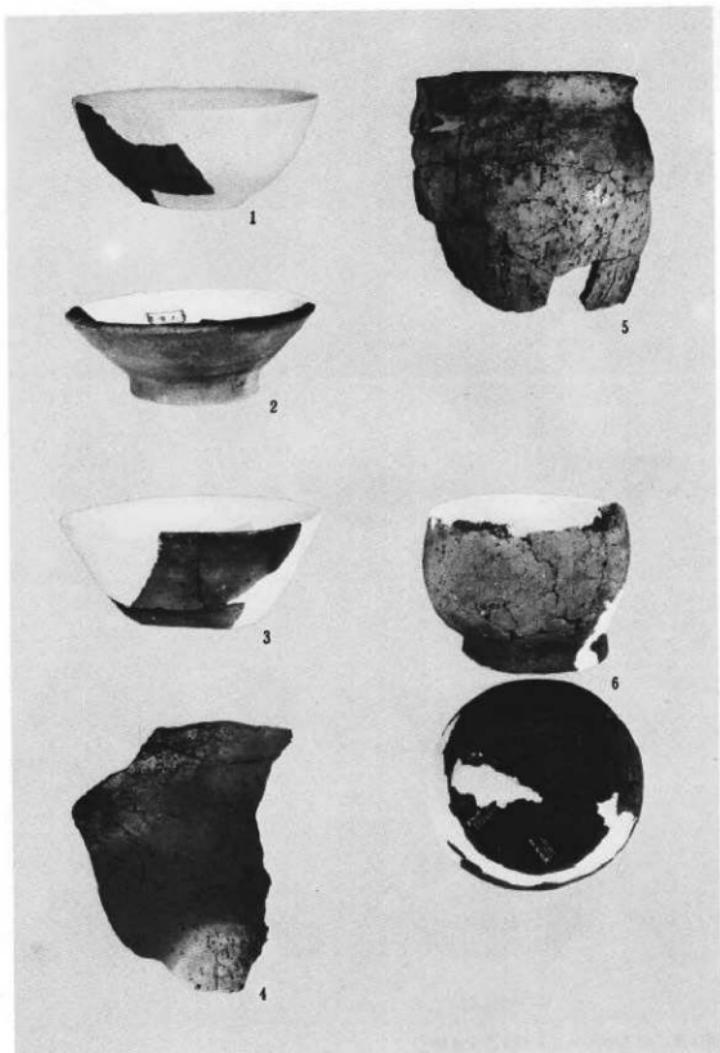


S D 002、S I 004

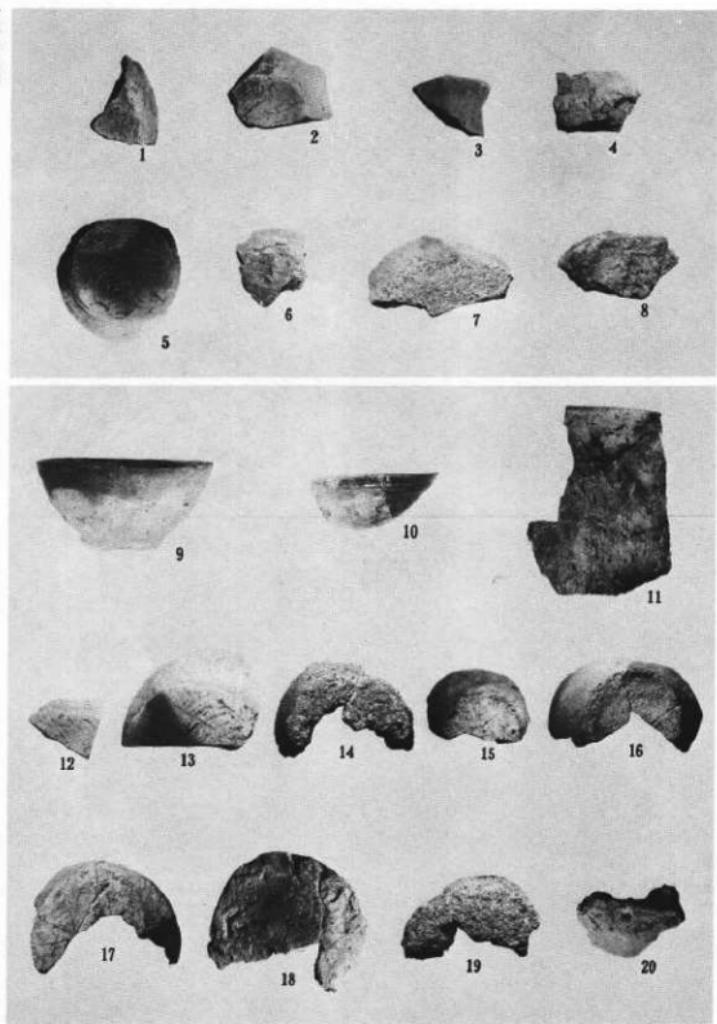


S I 005、S D 001、S D 002

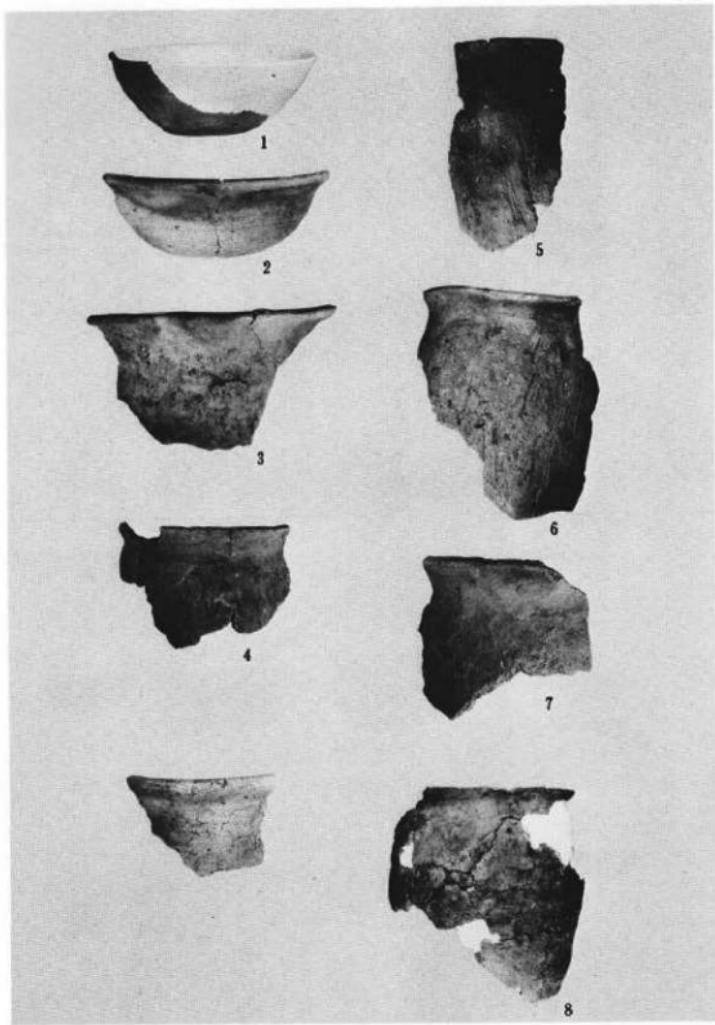
図版14 S D 002・S D 004



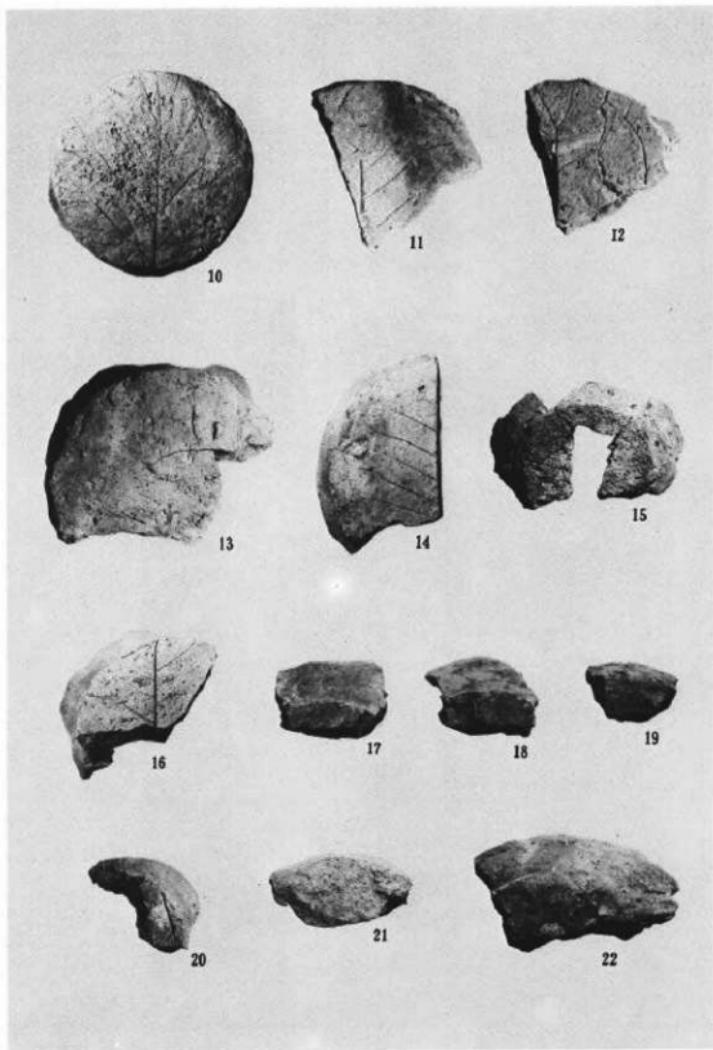
圖版15 S I 004 出土遺物



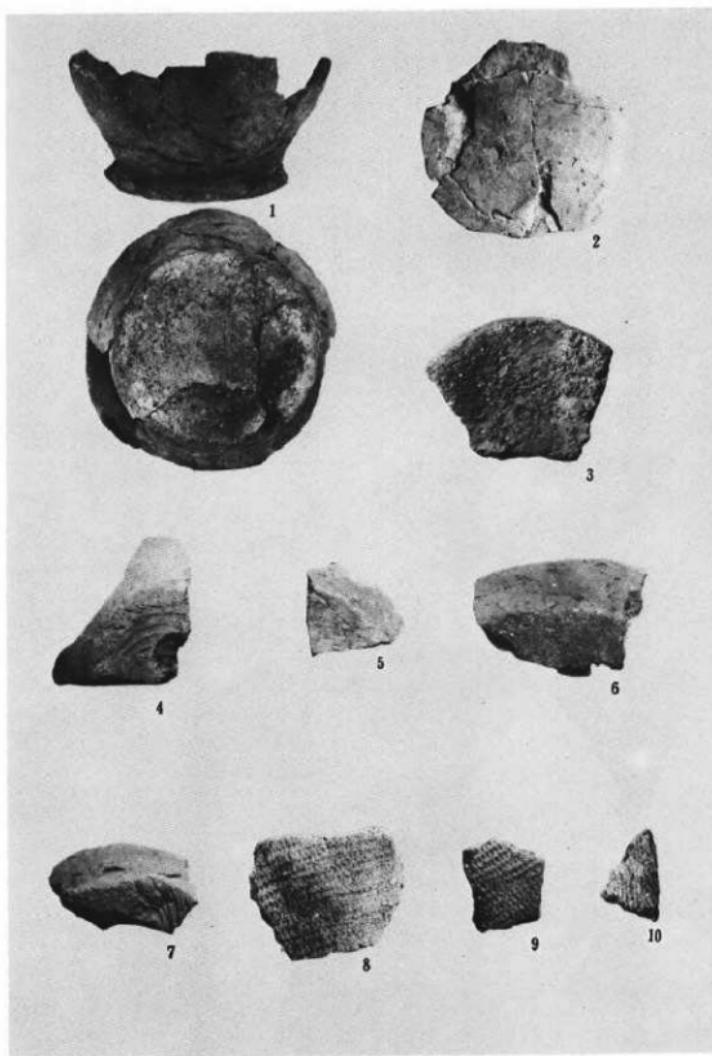
圖版16 S I 004・S I 005出土遺物



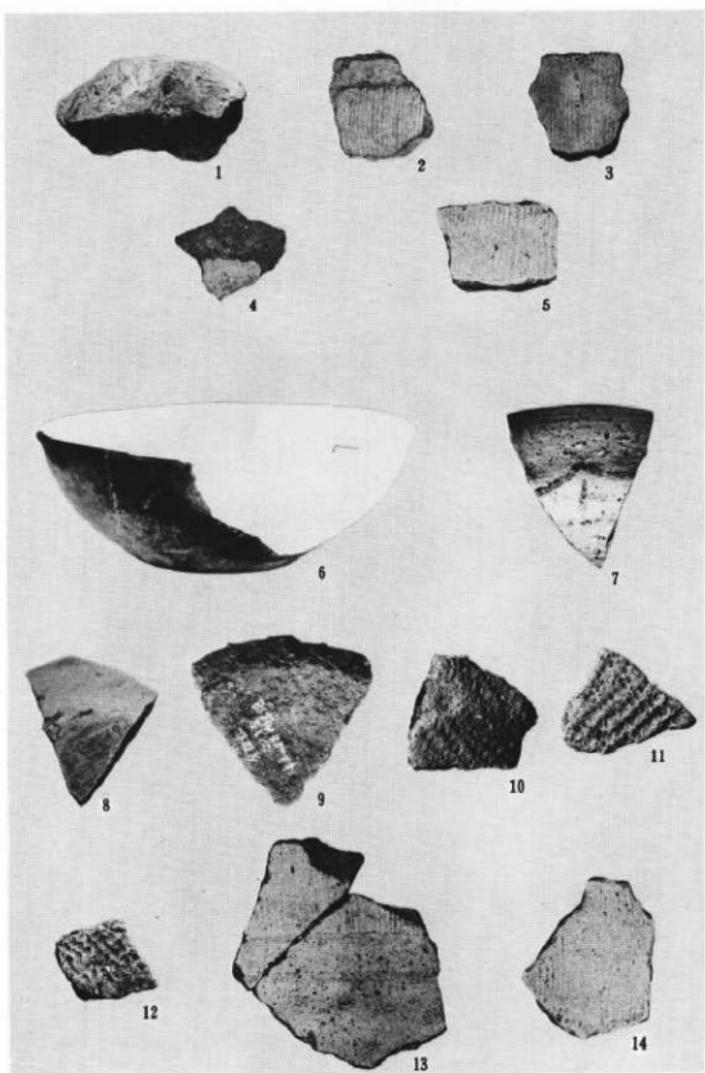
圖版17 S I 006出土遺物(1)



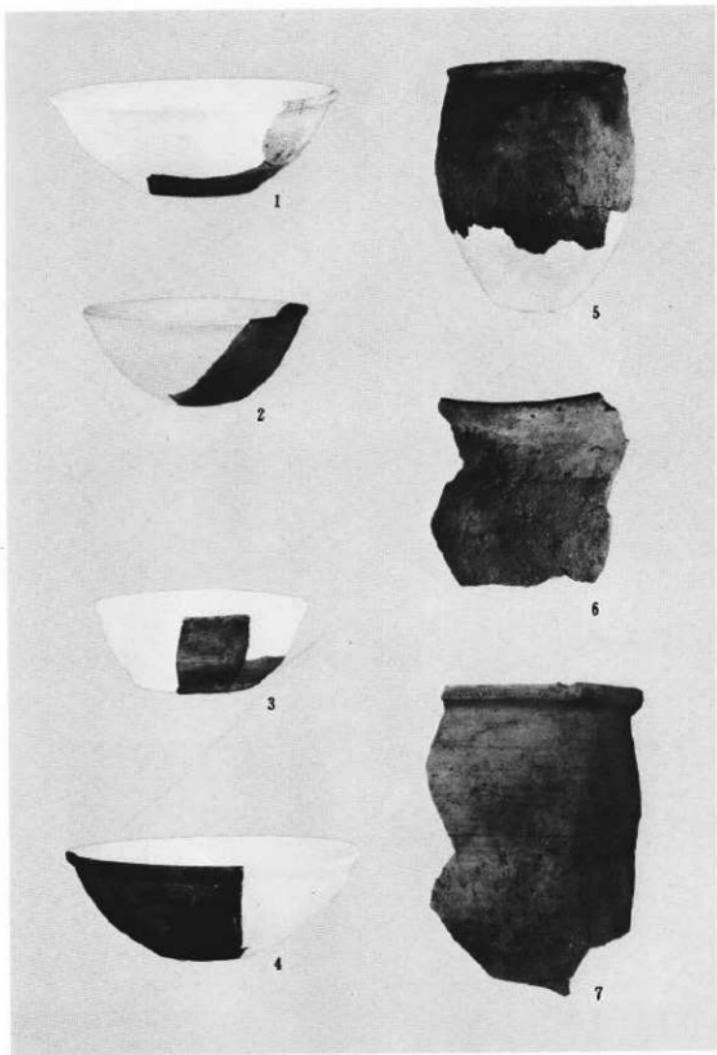
図版18 S I 006出土遺物(2)



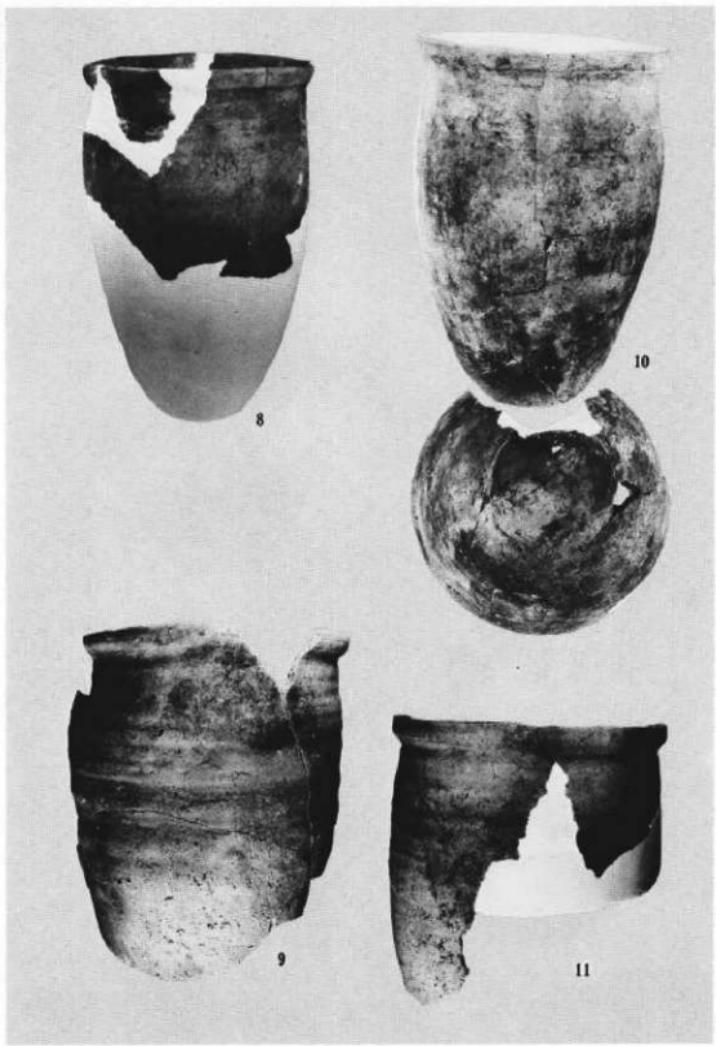
図版19 S I 011出土遺物



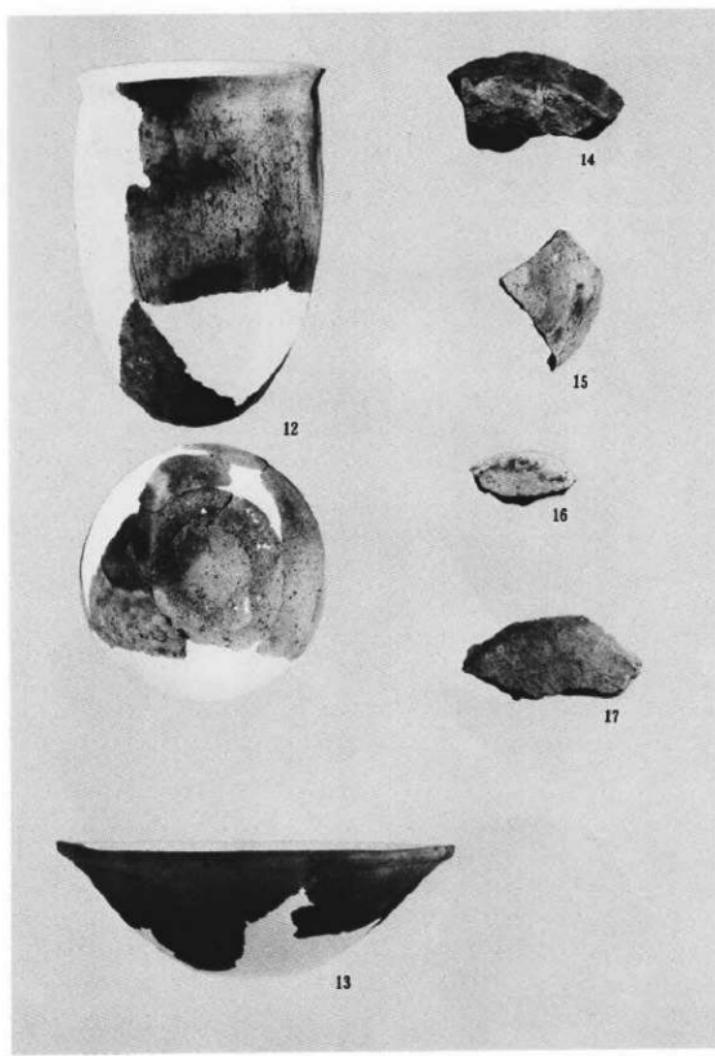
図版20 S I 010・S I 012出土遺物



図版21 S I 013出土遺物1)



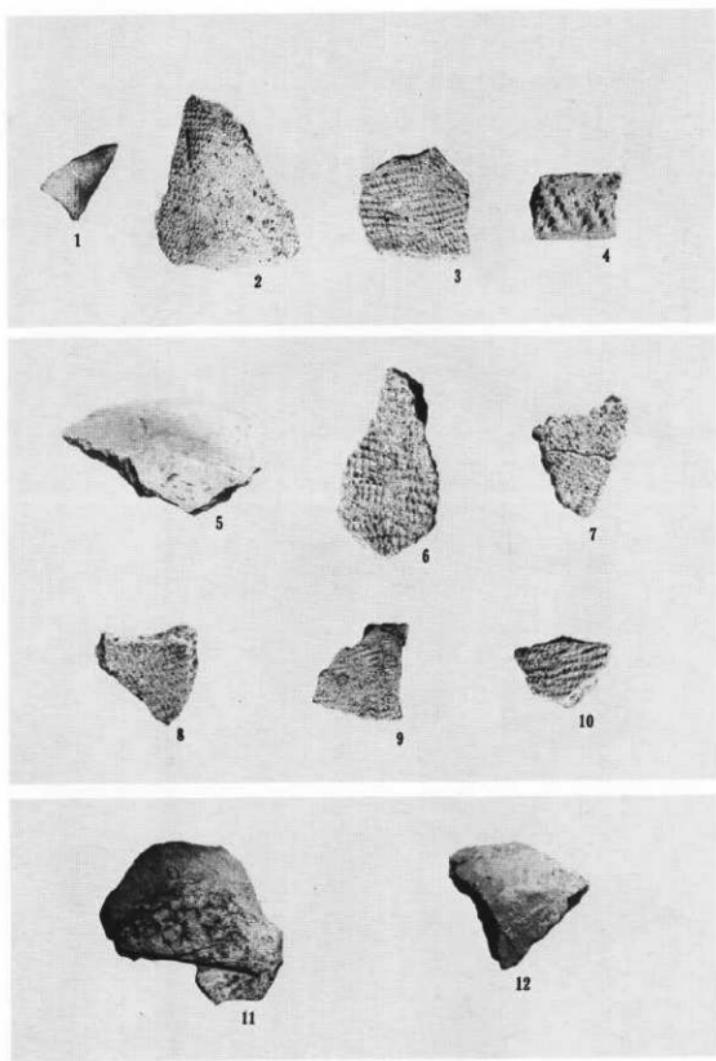
圖版22 S I 013出土遺物(2)



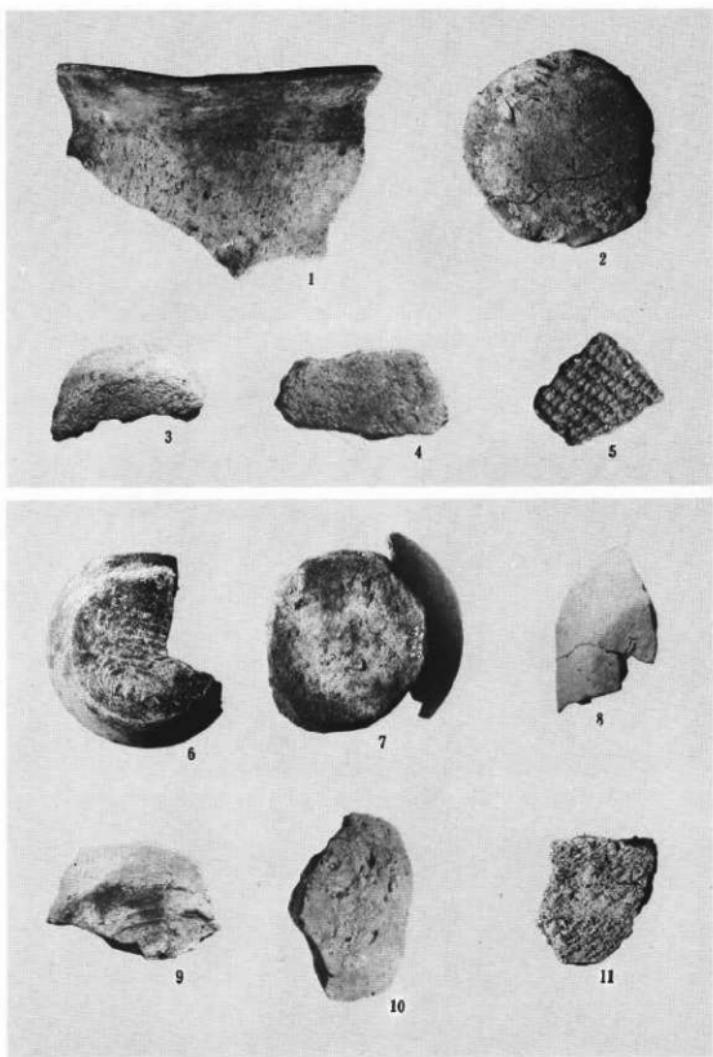
圖版23 S I 013出土遺物(3)



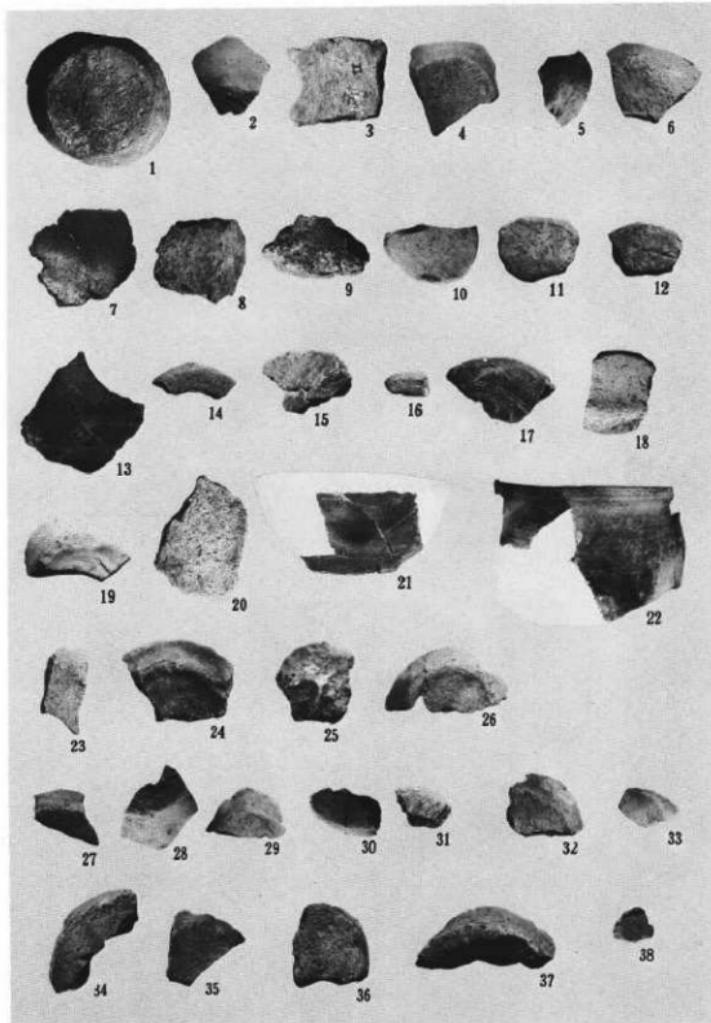
圖版24 S I 014出土遺物



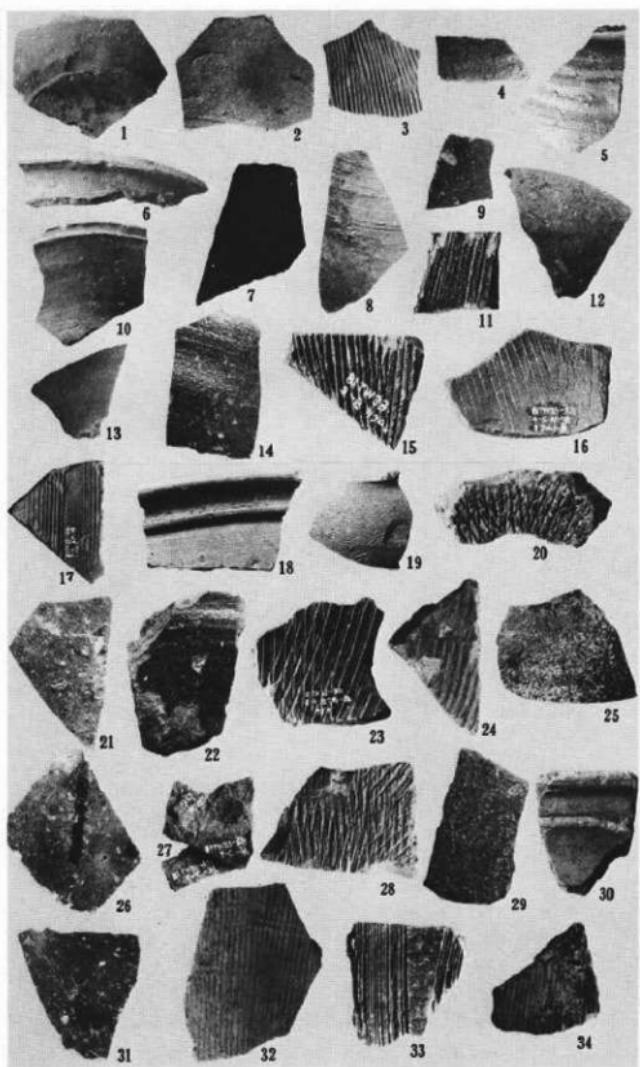
図版25 S I 016・S I 017・S I 019出土遺物



圖版26 S I 030・S I 031出土遺物



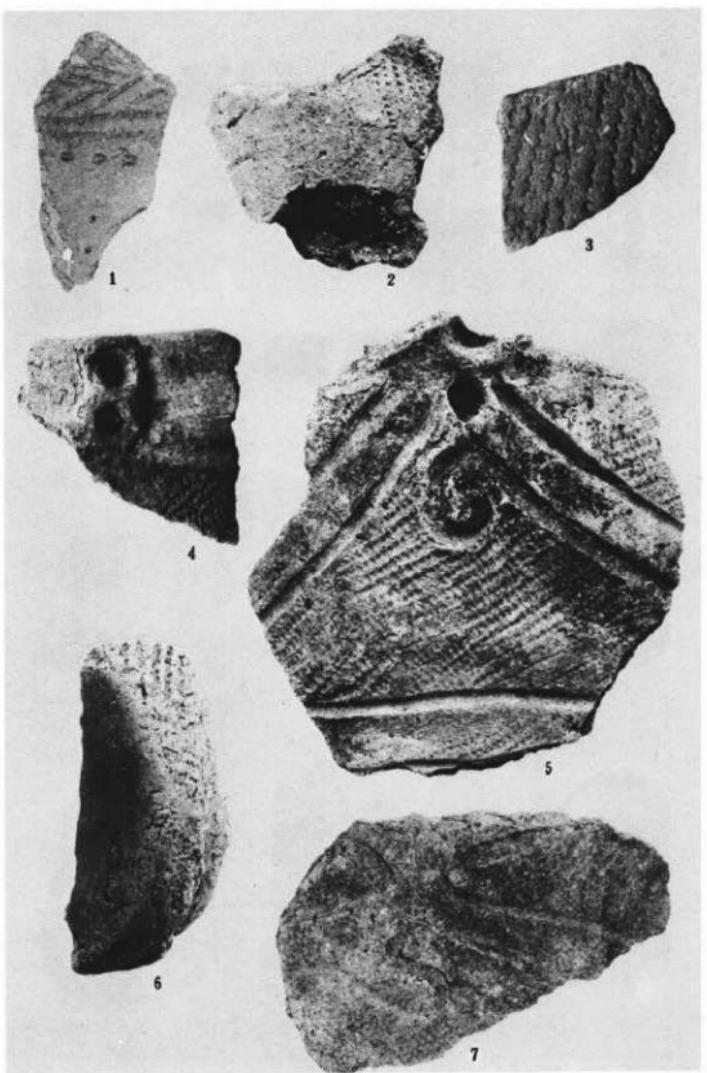
図版27 ゲリッド出土土器



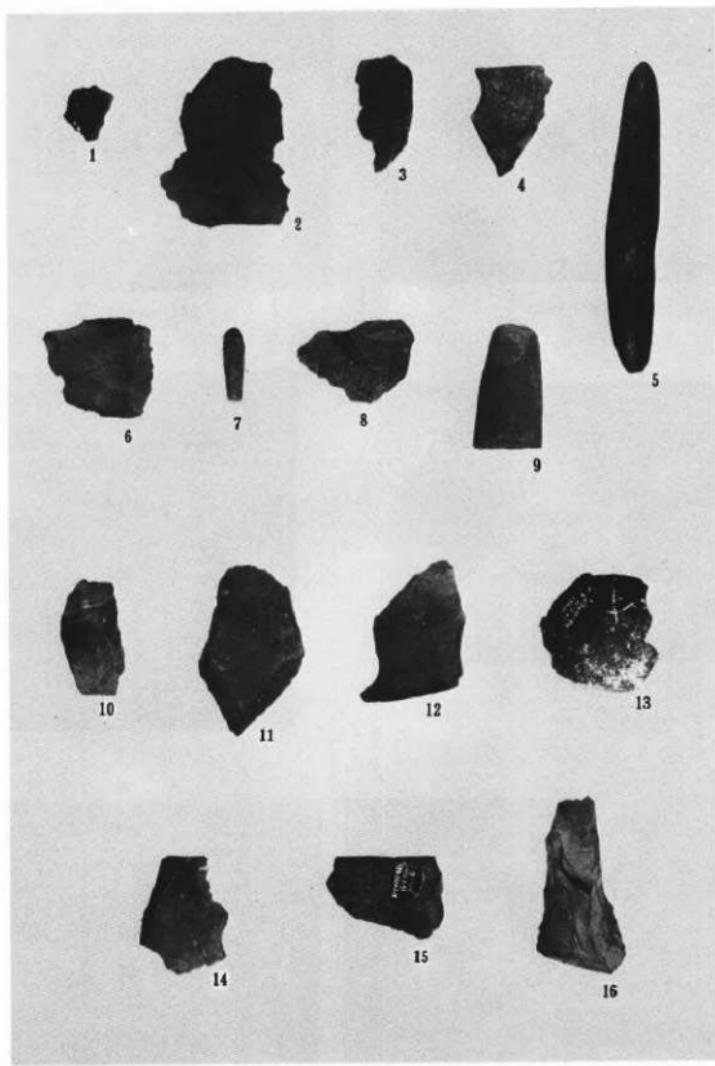
図版28 遺構・グリッド出土須恵器・陶磁器



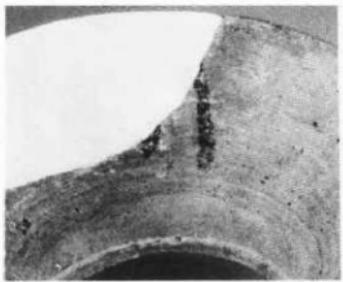
図版29 出土鐵製品・砥石



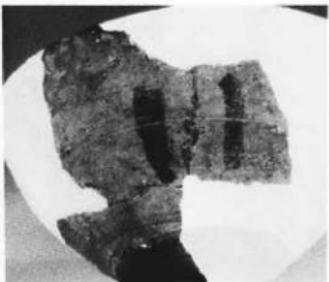
図版30 グリッド出土織文土器片



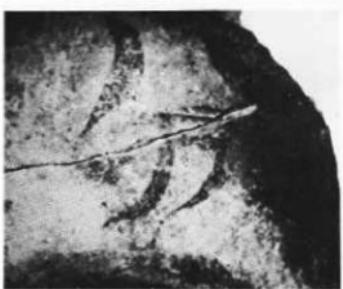
図版31 遺構・グリッド出土石器・剝片



S I 004-2



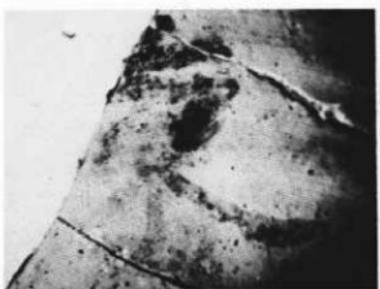
S I 004-1



S I 012-1



S I 012-2



S I 013-2



S I 013-4

図版32 墨書き土器赤外線写真

案 内 III 遺 跡

遺 跡 番 号	No.34
所 在 地	鹿角市花輪字案内21の1番地 他
調 査 期 間	昭和56年4月20日～8月22日
発掘調査予定面積	2,223m ²
発 墓 調 査 面 積	3,600m ²

1. 遺跡の概観

遺跡は国鉄花輪線陸中花輪駅東方2.1km、標高約200mの台地上に位置する。遺跡地経緯度は、日本道路公团設置の中心杭STA138+20での計測値によれば、東経140°48'45"、北緯40°11'25"である。

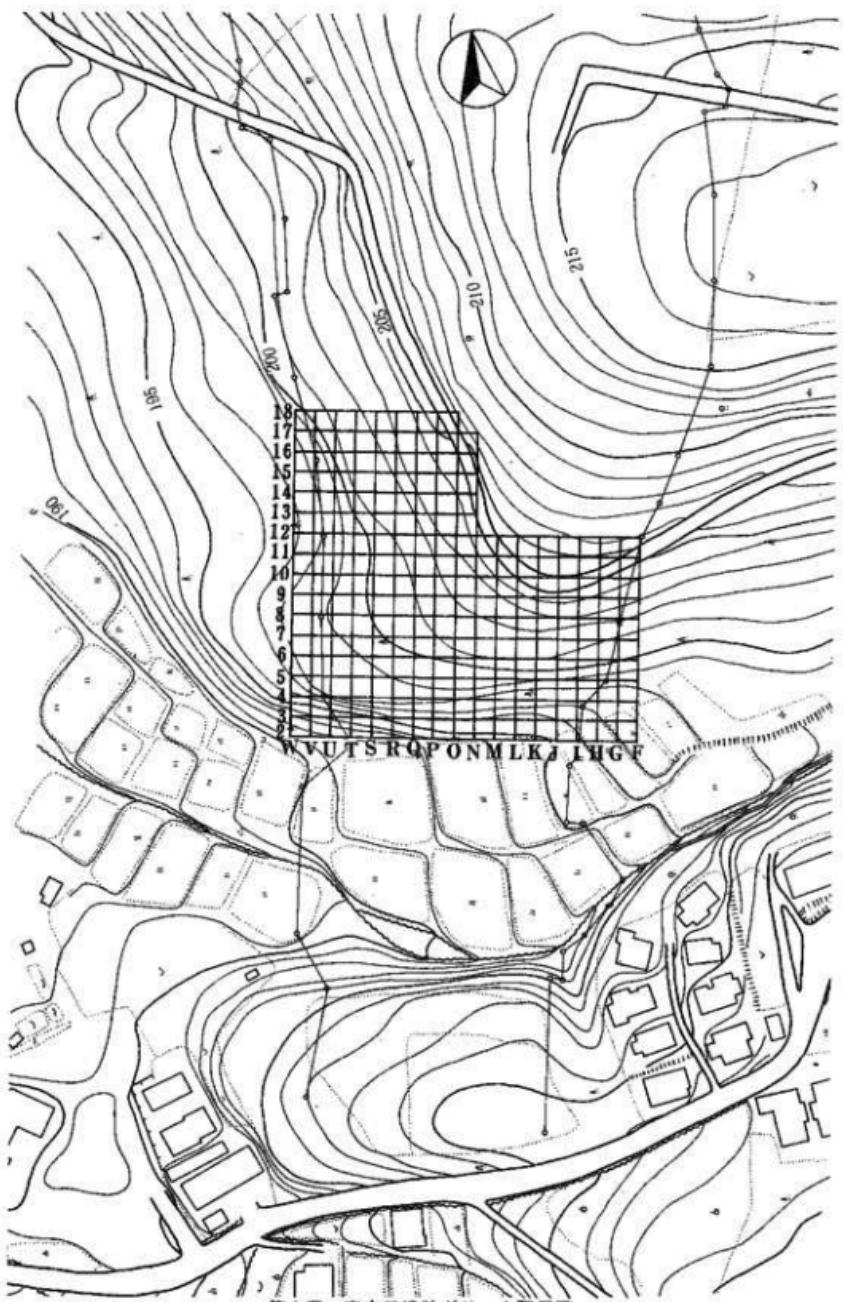
遺跡の立地する台地を含む鹿角盆地東側の丘陵は、盆地東部山地を源として米代川に注ぎ込む幾筋かの小河川によって開拓されている。遺跡の立地する台地は、これら小河川のうち南側を福士川、北を乳牛川によって画された台地群の中にある。台地全体の形状は、西へ向ってひろく扇形を呈し、福士川がつくる扇状地との比高は30m程ある。220m程の台地の最頂部は、扇の要の部分ではなくやや南側へ寄る傾向にある。したがって台地頂部から広がる斜面は北側で緩く、南側で急峻である。遺跡調査区は、南側の斜度9°を計る斜面上に設けられた。

本遺跡は、昭和48年度に行われた東北縦貫自動車道関係の分布調査の時点では確認されていなかった。昭和55年度に行われた案内II遺跡（遺跡番号No.19）調査の際、案内I遺跡（遺跡番号No.18）との間に杉を伐採した後のいくらか平坦な箇所を認め、幅2m50cmのトレンチを路線と直交させて計7本設定して調査した結果、平安時代と繩文時代の複合遺跡であることが判明した。そのため、鹿角市区域での東北縦貫自動車道線内にかかる遺跡としては最終の番号である遺跡番号No.34を付し、遺跡名を案内III遺跡と呼称し、昭和56年調査分として追加したものである。

本遺跡の周辺、福士川と乳牛川に挟まれた台地群には、本遺跡同様平安時代と繩文時代の複合遺跡である案内I遺跡（遺跡番号No.18）、繩文時代後期の竪穴住居跡と袋状土壙群を検出した案内II遺跡（遺跡番号No.19）、繩文時代後晩期の住居跡と土壙群を検出した猿ヶ平I遺跡（遺跡番号No.20）、同II遺跡（遺跡番号No.21）があり、やや西方へ行くと昭和55年度鹿角市教育委員会によって調査され、平安時代竪穴住居跡、掘立柱建物跡群を検出した御体堂遺跡がある。また東方には、東山A、東山B、赤坂A、赤坂B等の遺跡があり、繩文時代の土器が採集されている。

2. 調査の方法

日本道路公团設置の中心杭、STA138+20とSTA138+40を結ぶ直線を基線とし、STA138+40を起点として5m×5mのグリッドを組んだ。各グリッドは、各ラインに東から順にアルファベット、南から順にアラビア数字を付して、その組合せによる各グリッド東南隅の杭によって呼称した。遺構外の遺物の取り上げもこのグリッド呼称にしたがって行った。



第1図 案内用遺跡グリット配置図

遺跡は前述のように、前年度に行ったトレンチ調査によって遺構の分布が概ね知られていた。すなわち、調査区の中程から南端にかけて遺構の確認があり、北側へ行くにしたがい分布が疎であるという事実が認められた。したがって、調査は南側に重点がおかれて、北側では路線とは直交する形で、傾斜に沿った幅5mのトレンチを設け、遺構を確認した段階で調査区の拡張をはかる措置をとることとした。

また、調査区は杉林として利用され、ほぼ2~3mの間隔で径50cm程の杉の切り株があり、遺構の精査に支障をきたすものについてはそれらの抜根を必要とした。しかし、遺構確認以前の抜根は遺構を破壊することが予測されたため、抜根は粗曇、遺構精査の進み具合にしたがい人力で行った。

各遺構は、その検出順に通し番号を付していったが、精査の結果遺構と認められないものもあり、それらについては欠番としている。遺構の精査は各遺構とも遺跡基本層序第III層上面での確認から行い、一本乃至は十字にベルトを残して覆土の堆積状態の観察に務めた。

3. 調査の経過

前述したように、本遺跡は昭和55年度に行われた案内II遺跡調査の際にその存在が知られた。そして昭和56年4月20日から本調査を開始し、同年8月22日に調査を終了している。調査に費された全日数は103日間であった。調査経過の大略は以下に記す通り。

昭和55年 11月10日~27日

案内II遺跡南側の緩斜面に、幅2mの東西方向のトレンチ計7本を入れる。平安時代駁穴住居跡2棟、縄文時代駁穴住居跡1棟を検出。案内III遺跡として56年度本調査実施を決定する。

昭和56年 4月20日~28日

本調査開始。調査区内に残された杉枝の除去、堆木の刈払い。

4月30日~

表土除去作業開始。土括場として調査区南側の水田跡地を選定し、これに靠かる南斜面の除土から始める。(I~M, 2~6の各グリッド)

5月6日

第8号住居跡検出。併せて南斜面から縄文時代前期の土器を多く出土させる。

5月13日~

調査区西側の表土除去を開始する。15日には第4号住居跡、18日には第5号住居跡を検出する。併せて第7号土塼など住居跡周囲の土壌も検出。

5月21日~

調査区東側の表土除去開始。25日には第16号住居跡、第6号住居跡、26日には第14号住居跡・第9号住居跡、6月3日には第32号住居跡を検出。

5月30日

第1号住居跡検出。22日には第8号住居跡を含めて南斜面の調査を終える。

6月2日

第10号、第11号、第12号の各住居跡を検出。また6月1日から1週間調査区北側表土除去のため重機を入れる。

6月11日

第2号住居跡検出。6月20日までに12ライン以南の表土除去完了。

7月15日

12ライン以北の調査区抜茎。第15号住居跡検出。

7月28日

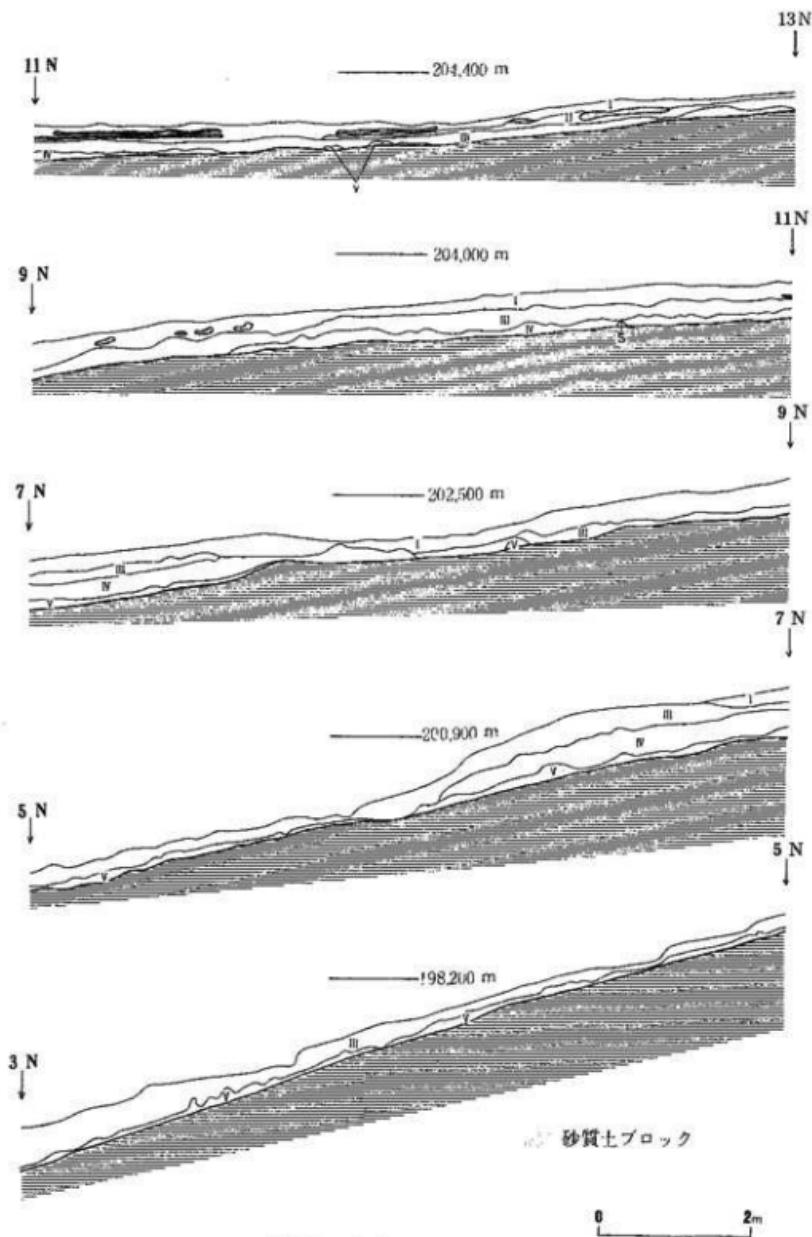
第18号住居跡、第19号住居跡検出。調査区北側トレンチの表土除去完了。

8月12日

各遺構精査完了。

8月22日

補足の実測作業終了。調査終了。



第2図 案内Ⅲ遺跡基本層位

4. 遺跡の層位

遺跡の基本層位の把握は前述のように、Nラインに残した層位観察のためのベルトにより行った。しかし実測図が示すように所謂地山面までの堆積土が全体に薄く、全体に一様な層序とはならないため、12ラインに設けたトレンチによってその観察の穴を補った。以下にその註記を記す。

- I. 色調10YR 4/2 黒褐色を呈する。粘性ややあり、しまっている。植物根が混入する。
- II. 色調7.5YR 4/2 黒褐色を呈する。粘性あり、径3~4mmの浮石を20~30%程度含む。
- III. 色調7.5YR 4/2 黒色を呈する。粘性あり、ボソーッとした感触をうける。
- IV. 色調10YR 4/2 黑褐色を呈する。粘性あり。
- V. 色調7.5YR 4/2 暗褐色を呈する。粘性が強く、孔隙は少ない。しまっている。

これらの中の基本層位のうち、I層は耕作等の擾乱の著しい表土層である。このI層のプライマリーな状態を示すのがII層と思われるが、このII層は比較的傾斜の緩い台地上部に極く部分的に残っているに過ぎない。また、II層は浮石混入量の最も多い層で火山灰の降下はこのII層形成時にあったと考えられる。平安時代の堅穴住居跡上中にはこの浮石がかなりの量混入しており、プランの確認は黒色土中であっても比較的容易に行われる。このことから平安時代堅穴住居跡の構築面を、このI層とIII層またはII層とIII層の境界面近くに想定することが可能と思われる。

III・IV層は浮石を殆ど含まず、縄文時代の遺物はおおよそこの2層中に包含されている。またこの2層は縄文時代堅穴住居跡に埋土として堆積しており、地山面との漸移層であるV層を含めて、これらの層と地山との境界面近くが縄文時代の遺構構築面と考えられる。

5. 検出遺構と遺物

(1) 縄文時代

遺構

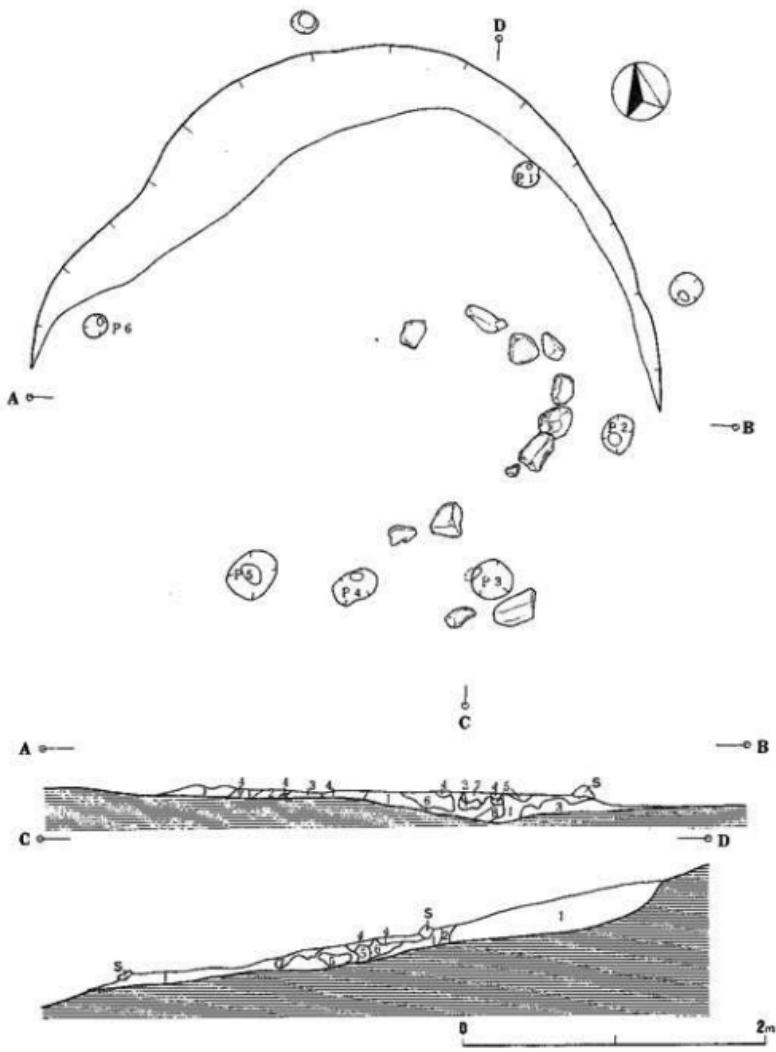
縄文時代の遺構としては、住居跡6棟、土壙17基、炉跡8基を検出している。

住居跡は台地縁辺部及び南側の斜面上から検出されている。第8号住居跡は前期に属し、他の第3号、第4号、第5号、第34号、第36号住居跡の5棟は後期に属する。これらの住居跡は概して掘り込みが浅く、確認面でのプランも非常に不鮮明な状態である。また南側の縁やかな斜面に位置するため、各住居跡とも南壁は表土除去の際に失われている。平面形態は概ね円形

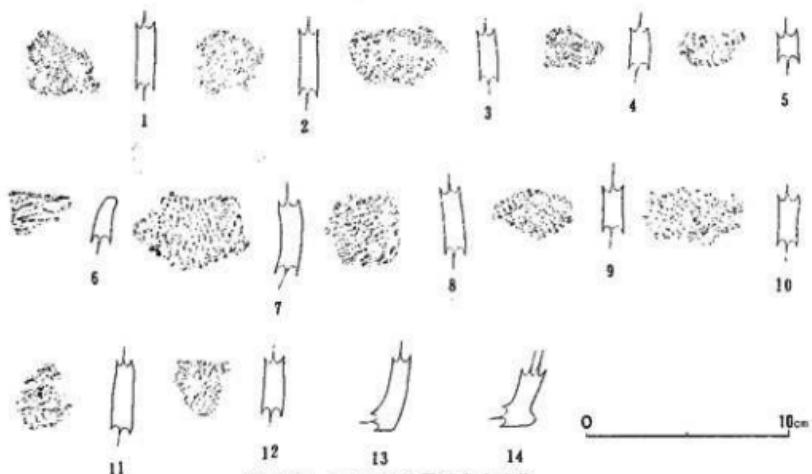
第1表 S I 008住居跡観察表

S I 008住居跡		掲 図	3, 4, 5
		図 版	3, 25
検出区	4 J, 4 K, 5 K		
様	3.99×4.08m	面 積	(12.70m ²)
主軸方位	N-117°-E ^東	形 態	円形
覆 土	1. 10YR 4/2 黒褐色 粘性ややあり、孔隙小植物根混入 2. 10YR 4/2 暗褐色 粘性強 孔隙小 3. 10YR 4/2 暗褐色 粘性強 1, 2 の混じり合ったもの 4. 10YR 4/2 黑 色 粘性強 孔隙小 植物根混入 5. 5 YR 4/2 赤褐色 粘性やや有 ポソボソした感がある(焼土) 6. 5 YR 4/2 暗赤褐色 粘性強 しまっている		
壁	北側半分しか検出されなかった 壁高は9.0~36.5cmの範囲にある		
床	凹凸して平らではない 斜面方向に比較的傾斜している		
ピット	P ₁ 17.5×17×36.8 北東 P ₂ 9×25×14 東 P ₃ 26×28×35.2 南東 P ₄ 19×30.5×19.2 南 P ₅ 28×33.5×21.2 南西 P ₆ 14.5×17×18.6 西		
位置	東側寄り		
炉	10個の河原石よりなる。整った形をしていないのは斜面のため土砂などによって流されたものと考えられる。		
遺 物	西側の壁面付近より多數土器片が出土した。石器が2点出土している。		
備 考	かなり急な斜面に作られている。そのため斜面下側に当る南壁は検出することは出来なかつた。		

※主軸方位は堅穴住居跡の中心と炉の中心を結ぶ軸線と磁北線とのつくる角度による。



第3図 S.I. 008住居跡



第4図 S I 008住居跡出土遺物

第2表 S I 008住居跡出土遺物

件号	出土地点	形態	体 長	底 面 (cm)		周 長	中 文 名	成 形	色 調	基 土	特 殊
				口幅	外縁						
1	S I 008	骨 刃	直角			横入上切刃	浅圓窓10YR 5/2	鍛入上切刃	褐色に斑紋を含む	やや赤	
2	S I 008	骨 刃	直角			横入上切刃	12.2cm×高窓10YR 5/2	鍛入上切刃	褐色に斑紋を含む	やや赤	
3	S I 008	骨 刃	直角			横入上切刃	浅圓窓10YR 5/2	鍛入上切刃	褐色に斑紋を含む	やや赤	
4	S I 008	骨 刃	直角			横入上切刃	浅圓窓10YR 5/2	鍛入上切刃	褐色に斑紋を含む	やや赤	
5	S I 008	骨 刃	直角			横入上切刃	浅圓窓10YR 5/2	鍛入上切刃	褐色を含む	やや赤	
6	S I 008	骨 刃	直角			横入上切刃	12.2cm×高窓10YR 5/2	鍛入上切刃	褐色を含む	やや赤	
7	S I 008	骨 刃	直角			横入上切刃	浅圓窓10YR 5/2	鍛入上切刃	褐色を含む	やや赤	
8	S I 008	骨 刃	直角			横入上切刃	浅圓窓10YR 5/2	鍛入上切刃	褐色を含む	やや赤	
9	S I 008	骨 刃	直角			横入上切刃	浅圓窓10YR 5/2	鍛入上切刃	褐色を含む	やや赤	
10	S I 008	骨 刃	直角			横入上切刃	浅圓窓10YR 5/2	鍛入上切刃	褐色を含む	やや赤	
11	S I 008	骨 刃	直角			横入上切刃	12.2cm×高窓10YR 5/2	鍛入上切刃	褐色を含む	やや赤	
12	S I 008	骨 刃	直角			横入上切刃	12.2cm×高窓10YR 5/2	鍛入上切刃	褐色を含む	やや赤	
13	S I 008	骨 刃	直角			横入上切刃	12.2cm×高窓10YR 5/2	鍛入上切刃	褐色を含む	やや赤	
14	S I 008	骨 刃	直角			横入上切刃	12.2cm×高窓10YR 5/2	鍛入上切刃	褐色を含む	やや赤	



第5図 S I 008住居跡出土遺物(石器)

第3表 S I 008住居跡出土遺物(石器)

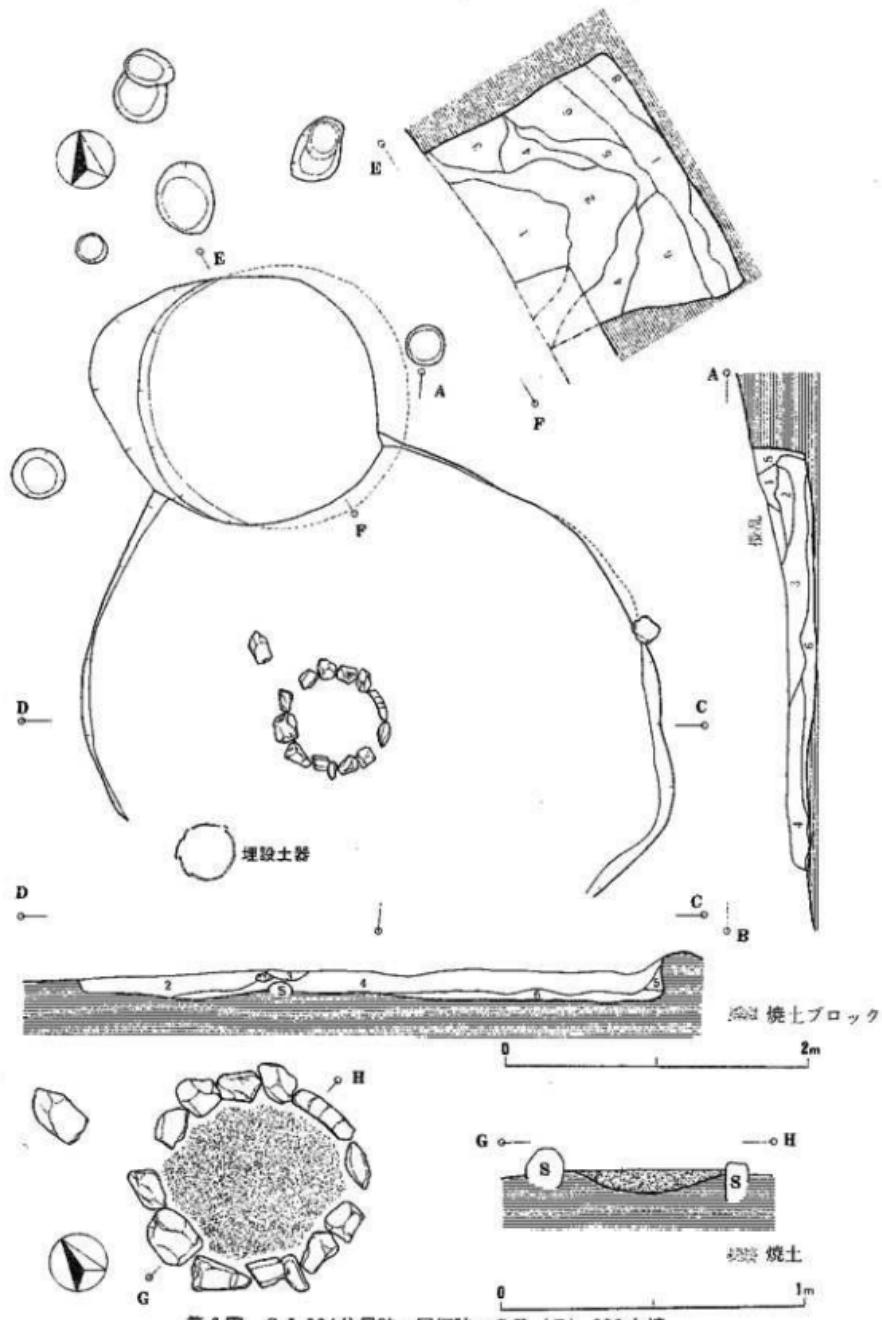
件号	出土地點	性質	石器	大きさ(cm)		厚さ	品名	被		基
				長	幅			厚	形	
1	S I 008	石器	直角	6.5	2.8	0.9	直削	つまみ部頭部に縱かに打削を残す。表面大塗りで墨を以てて油煙を止め	褐色	土
2	S I 008	石器	直角	3.4	4.5	0.7	直削	つまみ部にふた打削が刻まれる。表面を削りも二次削除を行う	褐色	土

第4表 S1004住居跡観察表

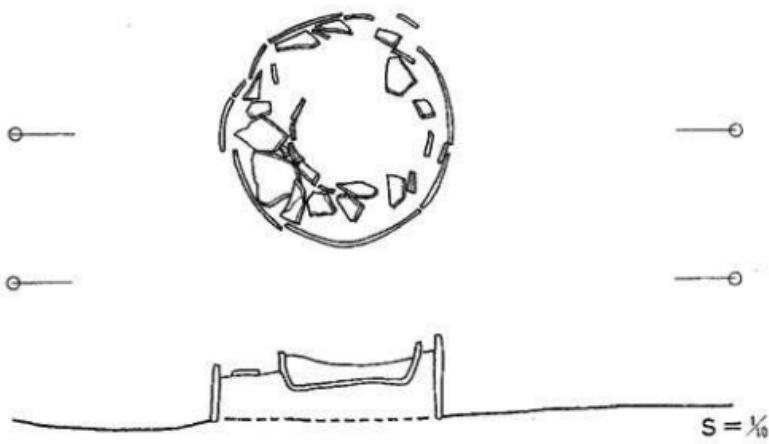
S1004住居跡	挿 國 國 版	6, 7, 8 3, 4, 26
検出区 4T, 5T, 4S, 5S		
径 3.34×3.80m	面 積	(10.82m ²)
主軸方位 N-65°-W	形 態	円形
覆 土	1. 10Y R 3% 單褐色 粘質 孔隙小 疊2~3mm程度のローム粒混入 2. 10Y R 3% 褐 色 粘性大 孔隙極めて小 僅かに炭化物の混入有 3. 10Y R 3% 單褐色 粘質 孔隙小 炭化物(径10mm~30mm程度)の混入甚しい 黄褐色 土と暗褐色土ブロック状に混じり合う 4. 10Y R 3% 單褐色 粘質 孔隙小 ローム粒 炭化物粒 焼土粒の混入有 5. 10Y R 3% 褐 色 粘性大 孔隙極めて小 6. 10Y R 3% 黄褐色 粘性大 孔隙極めて小 地山との漸移層	
壁	南壁はほとんど検出されなかった。北壁の一部は第25号土壙により切られている。 床面に対する傾斜は88°~106°の範囲にある。 壁高は4.0~46.3cmの範囲である。	
床	ほぼ平らである。	
ピット	検出されなかった。	
位置	中央やや西寄り	
炉	14個の河原石よりなる。形はほぼ円形をしている。1個だけ離れている。炉内には焼土がレンズ状に堆積していた。	
遺 物	南西壁際より埋蔵が二重になって出土している。外側は口縁~胴部上部まで、内側は胴部下部~底部までであった。	

第5表 SK(F)025土壤観察表

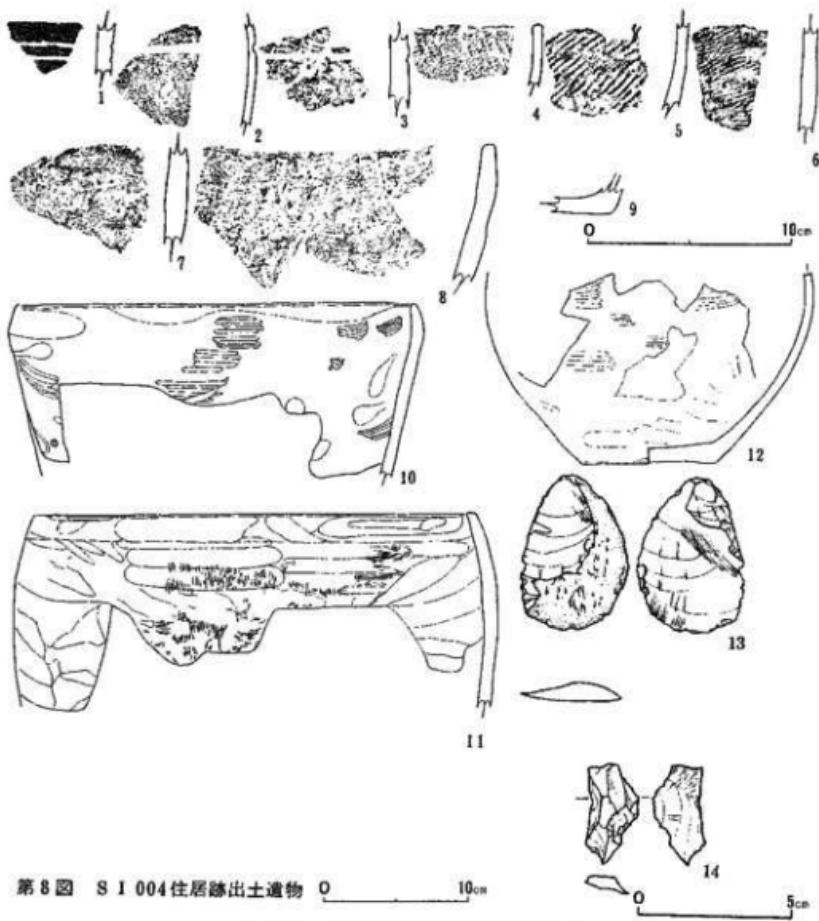
SK(F)025土壤	挿 國 國 版	6 3
検出区 5T	規模・形態	196×166cm円形、底面ではほぼ正円形
深さ 142cm	面 積	2.46m ²
確認状況	第4号住居跡北壁に確認、兩側を第4号住居跡によって切られている。 平面プランの確認時には中央に黒褐色土の堆積していることが明瞭に観察できた。	
覆 土	1. 10Y R 3% 黑褐色 粘性弱 孔隙大 全体に植物根混入する。 2. 10Y R 3% 單褐色 粘性弱 孔隙やや有 黄褐色土と黒褐色土の混じり合った土。 3. 10Y R 3% 褐 色 粘性強 孔隙比較的小 均質である。 4. 10Y R 3% 褐 色 黄褐色土と暗褐色土の混じり合った土。粘性大 孔隙少 5. 10Y R 3% 黑褐色 粘質 炭化物含み 僅かの焼土を含む。 6. 10Y R 3% 褐 色 粘性大 孔隙有 均質 7. 10Y R 3% 黑褐色 粘性弱 孔隙少 炭化物、遺物を多く含む。 8. 10Y R 3% 褐 色 粘性大 孔隙比較的大 均質	
遺 物	後期の土器片を比較的多く出土している。	



第6図 SI 004住居跡・同炉跡・SK (F) 025土壤



第7図 S I 004住居跡・埋設土器



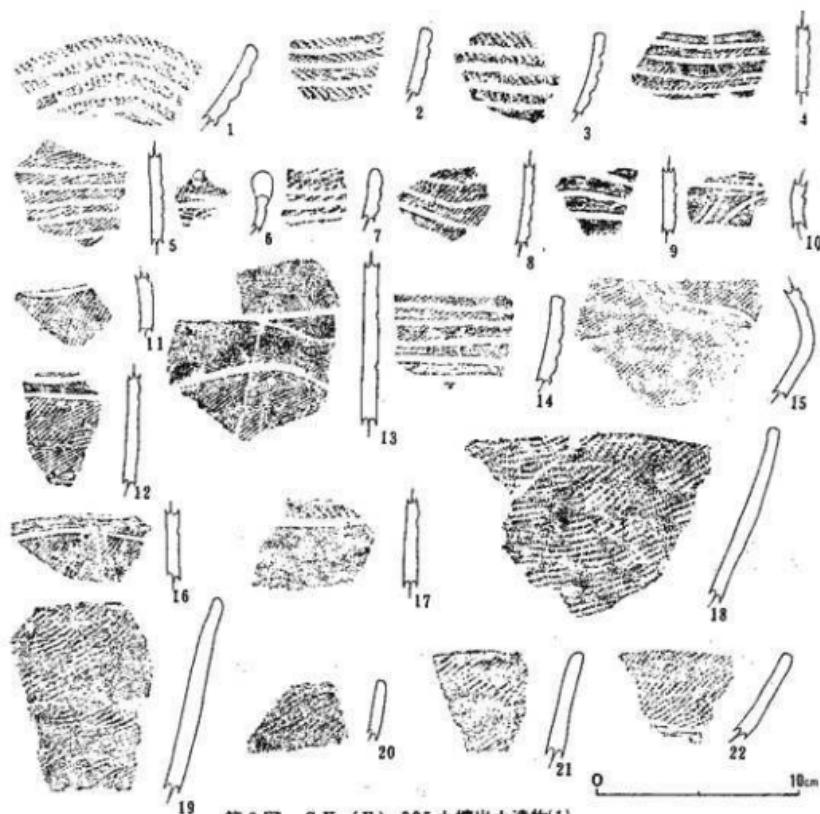
第8図 S1004住居跡出土遺物 0 10cm

第6表 S1004住居跡出土遺物(土器)

番号	出土地点	形態	施 工	寸 法 (cm)			施 工 (内面)	底 形	施 工	施 工	施工
				外	内	高					
1	S1-004	直 瓶	直				丸底	縦目上付造	セーラー型底 (S1-17)	縦目に斜め合む	直
2	S1-004	直 瓶	直				丸底	縦目上付造	セーラー型底 (S1-17)	縦目に斜め合む	直
3	S1-004	直 瓶	直				丸底	縦目上付造	セーラー型底 (S1-17)	縦目に斜め合む	直
4	S1-004	直 瓶	直				丸底	丸底 (S1-17)	丸底 (S1-17)	縦目に斜め合む	中空底
5	S1-004	直 瓶	直				丸底	縦目上付造	セーラー型底 (S1-17)	縦目に斜め合む	直
6	S1-004	直 瓶	直				丸底	縦目上付造	セーラー型底 (S1-17)	縦目に斜め合む	中空底
7	S1-004	直 瓶	直				丸底	縦目上付造	セーラー型底 (S1-17)	縦目に斜め合む	直
8	S1-004	直 瓶	直				丸底	縦目上付造	セーラー型底 (S1-17)	縦目に斜め合む	直
9	S1-004	直 瓶	直				丸底	縦目上付造	セーラー型底 (S1-17)	縦目に斜め合む	直
10	S1-004	直 瓶	直				丸底	縦目上付造	セーラー型底 (S1-17)	縦目に斜め合む	直
11	S1-004	直 瓶	直				丸底	縦目上付造	セーラー型底 (S1-17)	縦目に斜め合む	直
12	S1-004	直 瓶	直				丸底	縦目上付造	セーラー型底 (S1-17)	縦目に斜め合む	直
13	S1-004	直 瓶	直				丸底	縦目上付造	セーラー型底 (S1-17)	縦目に斜め合む	直
14	S1-004	直 瓶	直				丸底	縦目上付造	セーラー型底 (S1-17)	縦目に斜め合む	直

第7表 S1004住居跡出土遺物(石器)

番号	出土地点	形態	施 工	寸 法 (cm)	施 工	施 工	施 工
15	S1-004	直 瓶	直	9.7	3.2	0.2	22.6
16	S1-004	直 瓶	直	9.7	3.2	0.6	2.1



第9図 SK (F) 025 土壌出土遺物(1)

第8表 SK(F) 025 土壌出土遺物(1)

番号	出土地点	器種	形狀	寸法 (cm)	測定 (cm)			材質	施作	性質
					幅	高さ	厚さ			
1	SK(F)-025	白陶器	筒形、底丸、口縁に凹凸有	12.0×1.5	12.0	1.5	0.5	粘土質白色	手作	良
2	SK(F)-025	白陶器	筒形、底丸、口縁に凹凸有	12.0×1.5	12.0	1.5	0.5	粘土質白色	手作	良
3	SK(F)-025	白陶器	筒形、底丸、口縁に凹凸有	12.0×1.5	12.0	1.5	0.5	粘土質白色	手作	良
4	SK(F)-025	白陶器	筒形、底丸、口縁に凹凸有	12.0×1.5	12.0	1.5	0.5	粘土質白色	手作	良
5	SK(F)-025	白陶器	筒形、底丸、口縁に凹凸有	12.0×1.5	12.0	1.5	0.5	粘土質白色	手作	良
6	SK(F)-025	白陶器	筒形、底丸、口縁に凹凸有	12.0×1.5	12.0	1.5	0.5	粘土質白色	手作	良
7	SK(F)-025	白陶器	筒形、底丸、口縁に凹凸有	12.0×1.5	12.0	1.5	0.5	粘土質白色	手作	良
8	SK(F)-025	白陶器	筒形、底丸、口縁に凹凸有	12.0×1.5	12.0	1.5	0.5	粘土質白色	手作	良
9	SK(F)-025	白陶器	筒形、底丸、口縁に凹凸有	12.0×1.5	12.0	1.5	0.5	粘土質白色	手作	良
10	SK(F)-025	白陶器	筒形、底丸、口縁に凹凸有	12.0×1.5	12.0	1.5	0.5	粘土質白色	手作	良
11	SK(F)-025	白陶器	筒形、底丸、口縁に凹凸有	12.0×1.5	12.0	1.5	0.5	粘土質白色	手作	良
12	SK(F)-025	白陶器	筒形、底丸、口縁に凹凸有	12.0×1.5	12.0	1.5	0.5	粘土質白色	手作	良
13	SK(F)-025	白陶器	筒形、底丸、口縁に凹凸有	12.0×1.5	12.0	1.5	0.5	粘土質白色	手作	良
14	SK(F)-025	白陶器	筒形、底丸、口縁に凹凸有	12.0×1.5	12.0	1.5	0.5	粘土質白色	手作	良
15	SK(F)-025	白陶器	筒形、底丸、口縁に凹凸有	12.0×1.5	12.0	1.5	0.5	粘土質白色	手作	良
16	SK(F)-025	白陶器	筒形、底丸、口縁に凹凸有	12.0×1.5	12.0	1.5	0.5	粘土質白色	手作	良
17	SK(F)-025	白陶器	筒形、底丸、口縁に凹凸有	12.0×1.5	12.0	1.5	0.5	粘土質白色	手作	良
18	SK(F)-025	白陶器	筒形、底丸、口縁に凹凸有	12.0×1.5	12.0	1.5	0.5	粘土質白色	手作	良
19	SK(F)-025	白陶器	筒形、底丸、口縁に凹凸有	12.0×1.5	12.0	1.5	0.5	粘土質白色	手作	良
20	SK(F)-025	白陶器	筒形、底丸、口縁に凹凸有	12.0×1.5	12.0	1.5	0.5	粘土質白色	手作	良
21	SK(F)-025	白陶器	筒形、底丸、口縁に凹凸有	12.0×1.5	12.0	1.5	0.5	粘土質白色	手作	良
22	SK(F)-025	白陶器	筒形、底丸、口縁に凹凸有	12.0×1.5	12.0	1.5	0.5	粘土質白色	手作	良

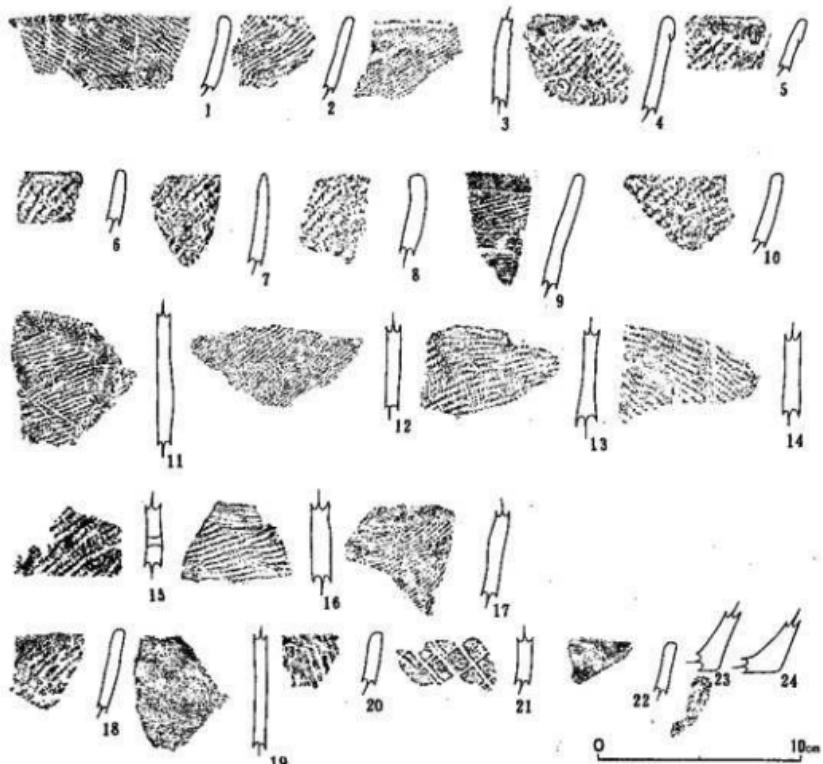
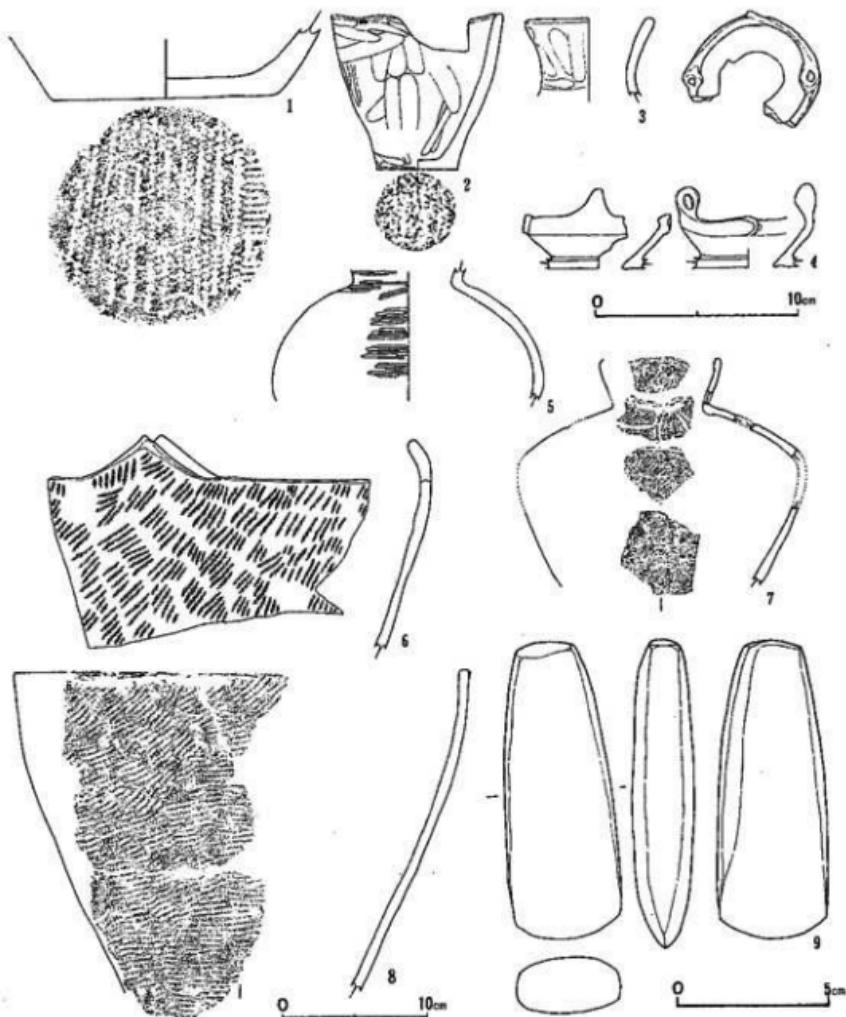


図10 S K(F)025 土壙出土遺物(2)

第9表 SK(F)025土壤出土遺物(2)

品目	上部地點	固形	液	固形率(%)	調理(加熱)		内 容	成形	色 調	味	感想
					特徴	特徴					
1	■ K-01-001	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
2	■ K-01-002	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
3	■ K-01-003	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
4	■ K-01-004	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
5	■ K-01-005	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
6	■ K-01-006	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
7	■ K-01-007	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
8	■ K-01-008	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
9	■ K-01-009	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
10	■ K-01-010	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
11	■ K-01-011	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
12	■ K-01-012	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
13	■ K-01-013	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
14	■ K-01-014	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
15	■ K-01-015	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
16	■ K-01-016	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
17	■ K-01-017	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
18	■ K-01-018	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
19	■ K-01-019	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
20	■ K-01-020	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
21	■ K-01-021	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
22	■ K-01-022	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
23	■ K-01-023	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■
24	■ K-01-024	■	■	100%	■	■	■	■	■	■	■



第11図 SK(F)025 土壤出土遺物(3)

第10表 SK(F)025 土壤出土遺物(3)

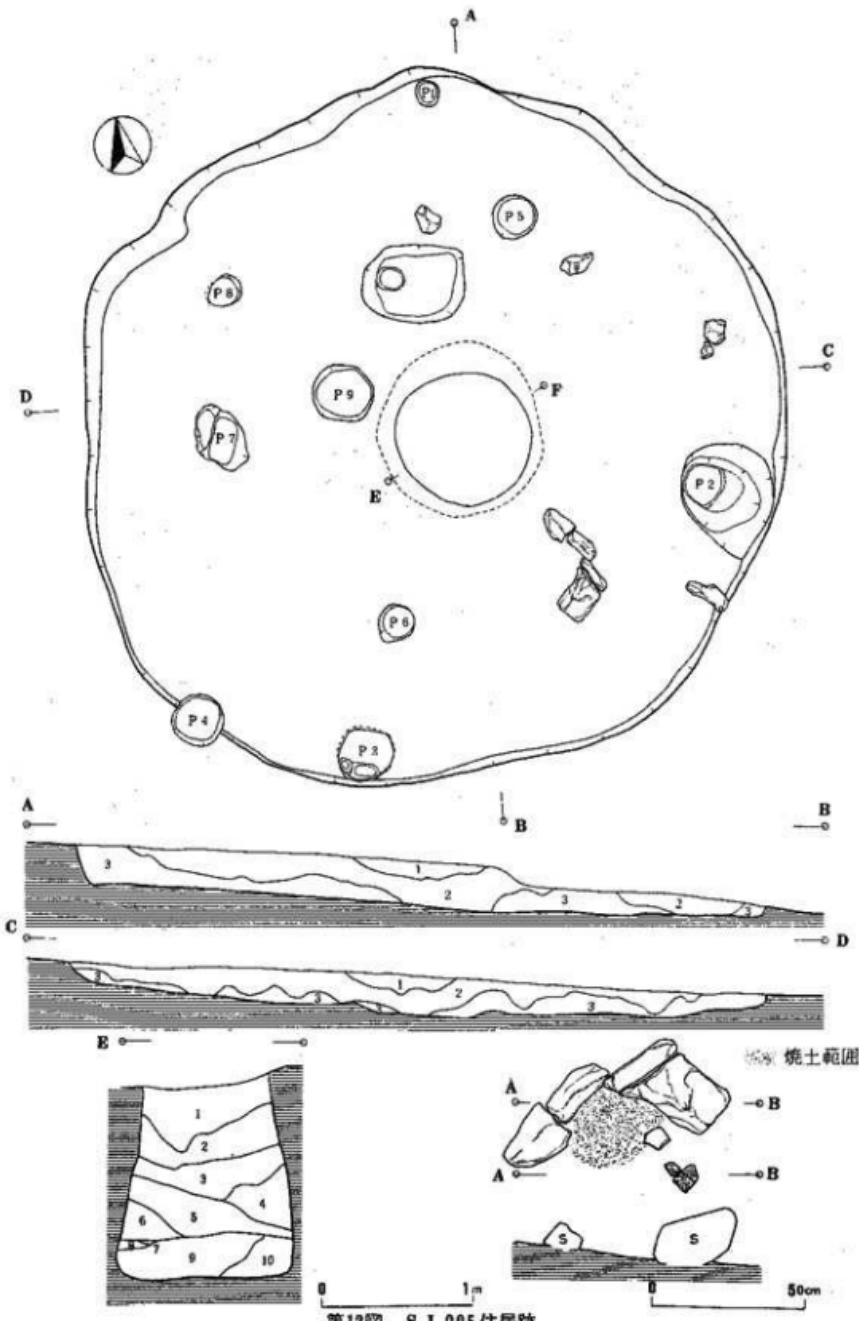
編 號	出土地点	形 状	施 工法	器 體 形 狀			材 料	色 調	性 質	期 代
				口 徑	底 径	高 度				
1 SK(F)025-1	井	筒		11.0		1.0	陶土	淡紅色	燒成	新石器時代
2 SK(F)025-2	井	筒	輪制	6.0	7.2	1.0	陶土	淡紅色	燒成	新石器時代
3 SK(F)025-3	井	筒	輪制	6.2	7.2	1.0	陶土	淡紅色	燒成	新石器時代
4 SK(F)025-4	井	筒	輪制	6.2	7.2	1.0	陶土	淡紅色	燒成	新石器時代
5 SK(F)025-5	井	筒	輪制	10.0	11.0	1.0	陶土	淡紅色	燒成	新石器時代
6 SK(F)025-6	井	筒	輪制	10.0	11.0	1.0	陶土	淡紅色	燒成	新石器時代
7 SK(F)025-7	井	筒	輪制	10.0	11.0	1.0	陶土	淡紅色	燒成	新石器時代
8 SK(F)025-8	井	筒	輪制	10.0	11.0	1.0	陶土	淡紅色	燒成	新石器時代
9 SK(F)025-9	井	筒	輪制	10.0	11.0	1.0	陶土	淡紅色	燒成	新石器時代

第11表 SK(F)025 土壤出土遺物(石器)

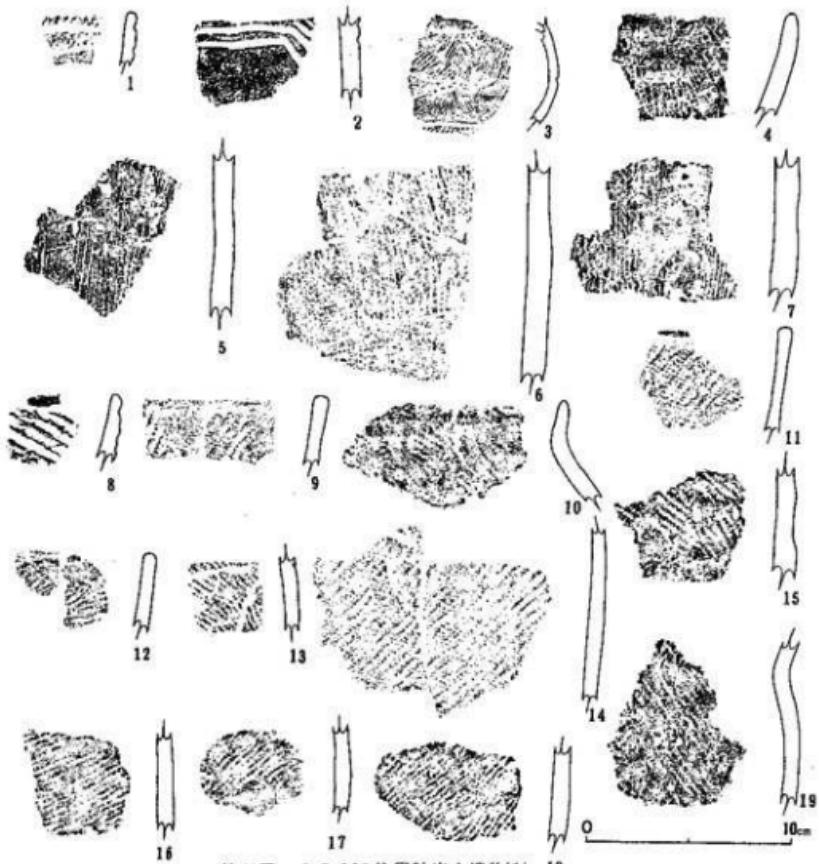
編 號	出土地点	形 狀	直 徑	厚 度	材 料	規 格		性 質
						幅 度	厚 度	
1	SK(F)025	圓盤狀	9.5	3.2	1.1	32.3		輪制による環状構造は多様化られない。

第12表 S I 005住居跡観察表

S I 005住居跡		掲 号	12, 13, 14, 15, 16
		図 版	5, 30, 31, 32
検出区			S, 6S, 5R, 6R
径	4.68×4.69m	面 検	17.18m ²
主軸方位	N-137°-E	形 狹	円形
覆 土	1. 10Y R 5/6 褐色 粘質 孔隙小 僅かに炭化物の混入有 2. 10Y R 5/6 喀褐色 粘性小 孔隙大 炭化物粒 焼土粒の混入僅かに認められる 3. 10Y R 5/6 褐色 粘性小 孔隙大 黄褐色土及び暗褐色土の混じり合ったもの		
壁	北東側の壁及び南西側の壁の一部分欠損していた。床面对する傾斜は103.5°~128°の範囲にある。壁高は1.8~30.6cmの範囲にある。		
床	床面中央付近に土壤が検出された。床面は斜面方向にやや傾斜している。		
ピット	P ₁ 16×17×16.3 北側壁際		
	P ₂ 26.5×27×50.2 東壁際		
	P ₃ 34×35×24.0 南壁際		
	P ₄ 32.5×33.5×16.2 南西壁際		
	P ₅ 28.5×31×19.6 北東側		
	P ₆ 24×27×24.9 P ₅ 北側		
	P ₇ 24×41×58.9 西側		
	P ₈ 19×23×12.5 北西側		
	P ₉ 37.5×40×32.5 中央やや北西寄り		
炉	位置 南東側 4個の河原石を用いている。が内より数点の土器片が出土した。また焼土も認められた。		
遺 物	磨製石斧が一点出土している。		
備 考	ほぼ円形を呈している住居跡である。		



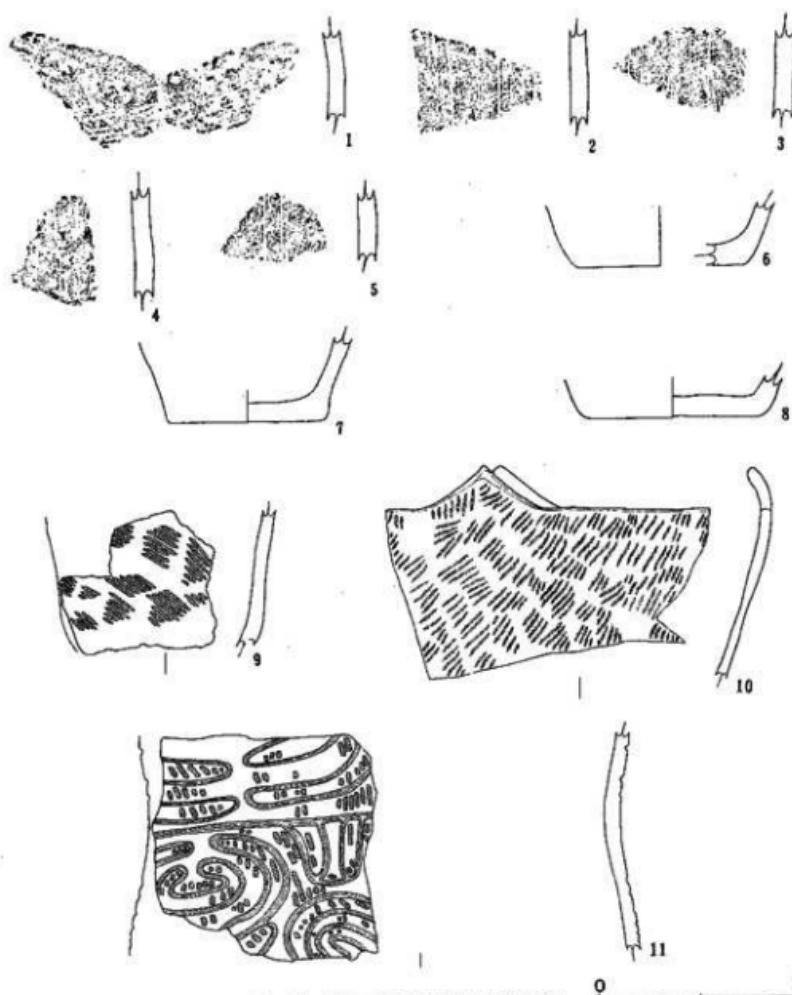
第12図 S I 005住居跡



第13図 S I 005住居跡出土遺物(1) 18

第13表 S I 005住居跡出土遺物(1)

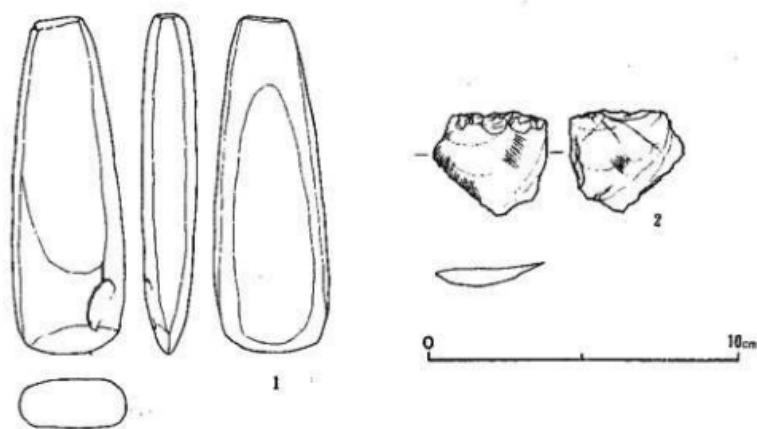
番号	出土地点	形質	部 位	寸 法 (cm)	調 定 (概 要)		成 分	色 気	動 物	地 点
					年 代	性 質				
1	S I 005	骨	口縫部		成文化。L.ミック		植木土付	にい黄褐色(7.5YR 8/6)	椎心中神経骨む	良
2	S I 005	骨	口縫部				植木土付	にい黄褐色(7.5YR 8/6)	椎心中神経骨む	良
3	S I 005	骨	口縫部		成文化。L.ミック		植木土付	褐色(10YR 8/6)	椎心中神経骨む	良
4	S I 005	骨	口縫部		成文化。燒付骨		植木土付	にい黄褐色(10Y R 5/6)-10Y R 5/6	椎心中神経骨む	良
5	S I 005	骨	口縫部		成文化。L.ミック		植木土付	にい黄褐色(10Y R 5/6)-10Y R 5/6	椎心中神経骨む	良
6	S I 005	骨	口縫部		成文化。L.ミック		植木土付	にい黄褐色(10Y R 5/6)-10Y R 5/6	椎心中神経骨む	良
7	S I 005	骨	口縫部		成文化。L.ミック		植木土付	にい黄褐色(10Y R 5/6)	椎心中神経骨む	良
8	S I 005	骨	口縫部		成文化。無骨		植木土付	褐色(10Y R 5/6)	椎心中神経骨む	良
9	S I 005	骨	口縫部		成文化。無骨		植木土付	10Y R 5/6-10Y R 5/6	椎心中神経骨む	良
10	S I 005	骨	口縫部		成文化。無骨		植木土付	10Y R 5/6-10Y R 5/6	椎心中神経骨む	良
11	S I 005	骨	口縫部		成文化。無骨		植木土付	10Y R 5/6-10Y R 5/6	椎心中神経骨む	良
12	S I 005	骨	口縫部		成文化。無骨		植木土付	10Y R 5/6-10Y R 5/6	椎心中神経骨む	良
13	S I 005	骨	口縫部		成文化。無骨		植木土付	10Y R 5/6-10Y R 5/6	椎心中神経骨む	良
14	S I 005	骨	口縫部		成文化。L.ミック		植木土付	にい黄褐色(7.5Y R 5/6)-10Y R 5/6	椎心中神経骨む	良
15	S I 005	骨	口縫部		成文化。L.ミック		植木土付	にい黄褐色(10Y R 5/6)	椎心中神経骨む	良
16	S I 005	骨	口縫部		成文化。L.ミック		植木土付	にい黄褐色(10Y R 5/6)	椎心中神経骨む	良
17	S I 005	骨	口縫部		成文化。L.ミック		植木土付	にい黄褐色(10Y R 5/6)	椎心中神経骨む	良
18	S I 005	骨	口縫部		成文化。L.ミック		植木土付	にい黄褐色(7.5Y R 5/6)-10Y R 5/6	椎心中神経骨む	良
19	S I 005	骨	口縫部		成文化。L.ミック		植木土付	にい黄褐色(10Y R 5/6)	椎心中神経骨む	中立



第14図 S I 005 住居跡出土遺物(2)

第14表 S I 005 住居跡出土遺物(2)

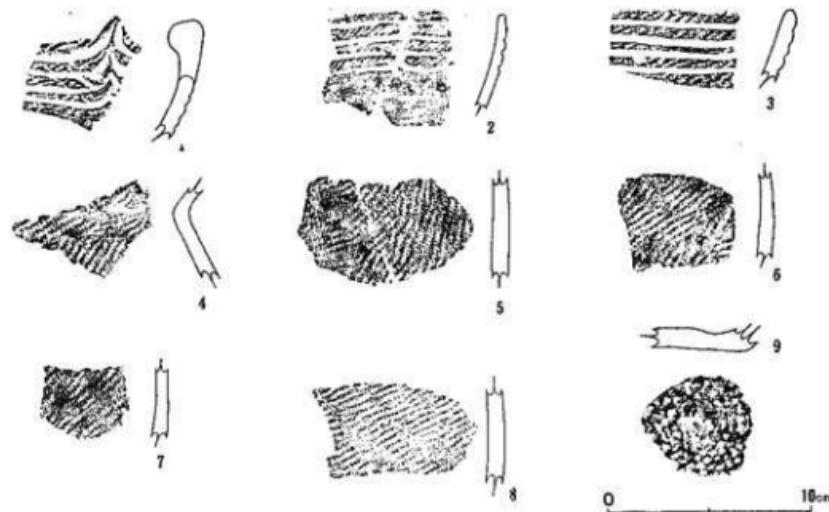
番号	出土場所	器形	部 位	寸法 (cm)			測 定 方 法	成 分	色 調	基 上	地質
				長	幅	厚					
1	S I 005-1	鉢	脚 部				刮み上り法	褐色 (7.5 Y 8/4)		褐色に砂利含む	良
2	S I 005	鉢	脚 部				刮み上り法	にごり褐色 (7.5 Y 8/2)		褐色に砂利含む	良
3	S I 005	鉢	脚 部				刮み上り法	にごり褐色 (7.5 Y 8/3)		褐色に砂利含む	良
4	S I 005-2	鉢	脚 部				刮み上り法	にごり褐色 (7.5 Y 8/2)		褐色に砂利含む	良
5	S I 005	鉢	脚 部				刮み上り法	にごり褐色 (7.5 Y 8/2)		褐色に砂利含む	良
6	S I 005	鉢	底	26.2	19.3		刮み上り法	褐色 (10 Y 8/4)		褐色に砂利含む	良
7	S I 005	鉢	脚 部	7.8	6.8	1.2	刮み上り法	褐色 (8 Y 8/4)		褐色に砂利含む	良
8	S I 005-2	鉢	脚 部	6.4	5.4	1.2	刮み上り法	褐色 (8 Y 8/4)		褐色に砂利含む	良
9	S I 005-1	鉢	脚 部				刮み上り法	褐色 (8 Y 8/4) → にごり褐色 (7.5 Y 8/2) → 7.5 Y 8/2		褐色に砂利含む	良
10	S I 005	鉢	脚 部				刮み上り法	褐色 (8 Y 8/4) → にごり褐色 (7.5 Y 8/2) → 7.5 Y 8/2		褐色に砂利含む	良
11	S I 005	鉢	脚 部				刮み上り法	褐色 (8 Y 8/4) → にごり褐色 (7.5 Y 8/2) → 7.5 Y 8/2		褐色に砂利含む	良



第15図 S I 005 住居跡出土遺物(石器)

第15表 S I 005 住居跡出土遺物(石器)

検査番号	出土地点	器種	石質	長さ(既)	幅(既)	厚さ	形	説
1	S I 005	磨製石斧	縞状岩	11.1	3.6	1.6	117.6	製作時に本体に明瞭な焼けつくつかない。刃部剥出は少なく被用度は低い。
2	S I 005	刮片	縞状岩	3.1	3.3	0.7	6.5	費因石下邊に二次剥離が強かに認められる。



第16図 S1-005 住居跡西側周辺ピット出土遺物

第16表 S1-005 住居跡西側周辺ピット出土遺物

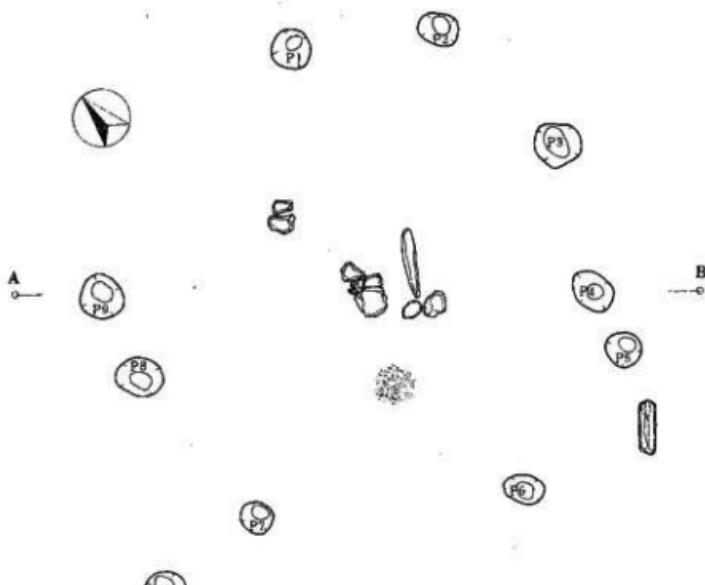
序号 番号	出土場所 出土地点	番号 番号	出 出	目 目	調 調	物 物	内 内	形 形	色 色	地 地	地
1 S.P.002	林	口縁部	口付	基盤	底盤	底高	底	筒状	黒褐色	10.0cm	縦に細かい溝
2 S.P.002	林	口縁部	口付	基盤	底盤	底高	底	筒状	黒褐色	7.5YR 8%	縦に細かい溝
3 S.P.002	林	口縁部	口付	基盤	底盤	底高	底	筒状	黒褐色	10.0cm	縦に細かい溝
4 S.P.002	林	口縁部	口付	基盤	底盤	底高	底	筒状	黒褐色	10.0cm	縦に細かい溝
5 S.P.002	林	口縁部	口付	基盤	底盤	底高	底	筒状	黒褐色	10.0cm	縦に細かい溝
6 S.P.002	林	口縁部	口付	基盤	底盤	底高	底	筒状	黒褐色	10.0cm	縦に細かい溝
7 S.P.002	林	口縁部	口付	基盤	底盤	底高	底	筒状	黒褐色	10.0cm	縦に細かい溝
8 S.P.002	林	口縁部	口付	基盤	底盤	底高	底	筒状	黒褐色	10.0cm	縦に細かい溝
9 S.P.002	林	底盤部	口付	基盤	底盤	底高	底	筒状	黒褐色	10.0cm	縦に細かい溝

P-237-*

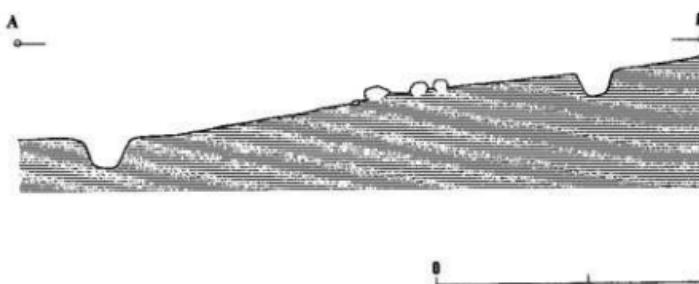
であり、規模は径およそ3~5m、面積およそ10~13m²の範囲にある。壁高は計測箇所によって異なるが、最も深いものでも40cmを越えることはない。覆土は黒褐色~暗褐色を呈し、焼土粒、炭化物等の混入が認められるものの、平安時代竪穴住居跡のようなバミスの混入は認められない。台地縁辺及び斜面上にあるため、遺構確認面から上の堆積土が薄く、覆土は植物根等による搅乱をうけていることもあるが、覆土の堆積に際しては自然堆積によったと思われ、人為的な埋め立ての痕跡などは認められない。柱穴は、第3号住居跡、第5号住居跡、第36号住居跡で比較的顕著に検出されている。第36号住居跡では、ほぼ等間隔に並ぶ5箇の柱穴を検出し、うち1箇の柱穴底面には河原石が置かれている。炉は全て石組の形態がとられるが、比較的小さな円礫を用いて円形に組むものと、やや大きめの礫を用いて方形を意図して作られるものとがある。

第17表 S1003住居跡観察表

S1003住居跡		持 団	17
		団 鮮	
検出区	8T, 9T		
径	3.8×3.3m	面 積	8.9m ² (柱穴位置からの推定面積)
主軸方位		形 態	円形
確認状況	第10号住居跡の北縁、第一層上面で住居跡性穴と見られるビットを確認。 ビット群の中央に河原石を配した歩跡を検出し、また焼土も確認した。 住居跡の確認が地山面で行われているため壁の検出、覆土の観察はできなかった。		
壁	検出できず		
床	平坦である。 周りの地山面に比較してややしまった感触をうける。		
ビット	P ₁ 27×27×21 P ₂ 27×21×20 P ₃ 30×30×14 P ₄ 30×21×16 P ₅ 24×22×33 P ₆ 27×19×30 P ₇ 22×20×25 P ₈ 32×24×15 P ₉ 30×28×17 他に住居の西側に3箇のビットを確認したが、住居跡に直接関係するかどうかは判然としない。		
位置	ビット群のはば中央		
炉	5箇の河原石からなる。 全て火熱をうけて赤変しているか、破碎されている。 また石組のやや南側から径30cm程の焼土範囲を確認した。		
遺物	縄文時代後期と思われる土器片		



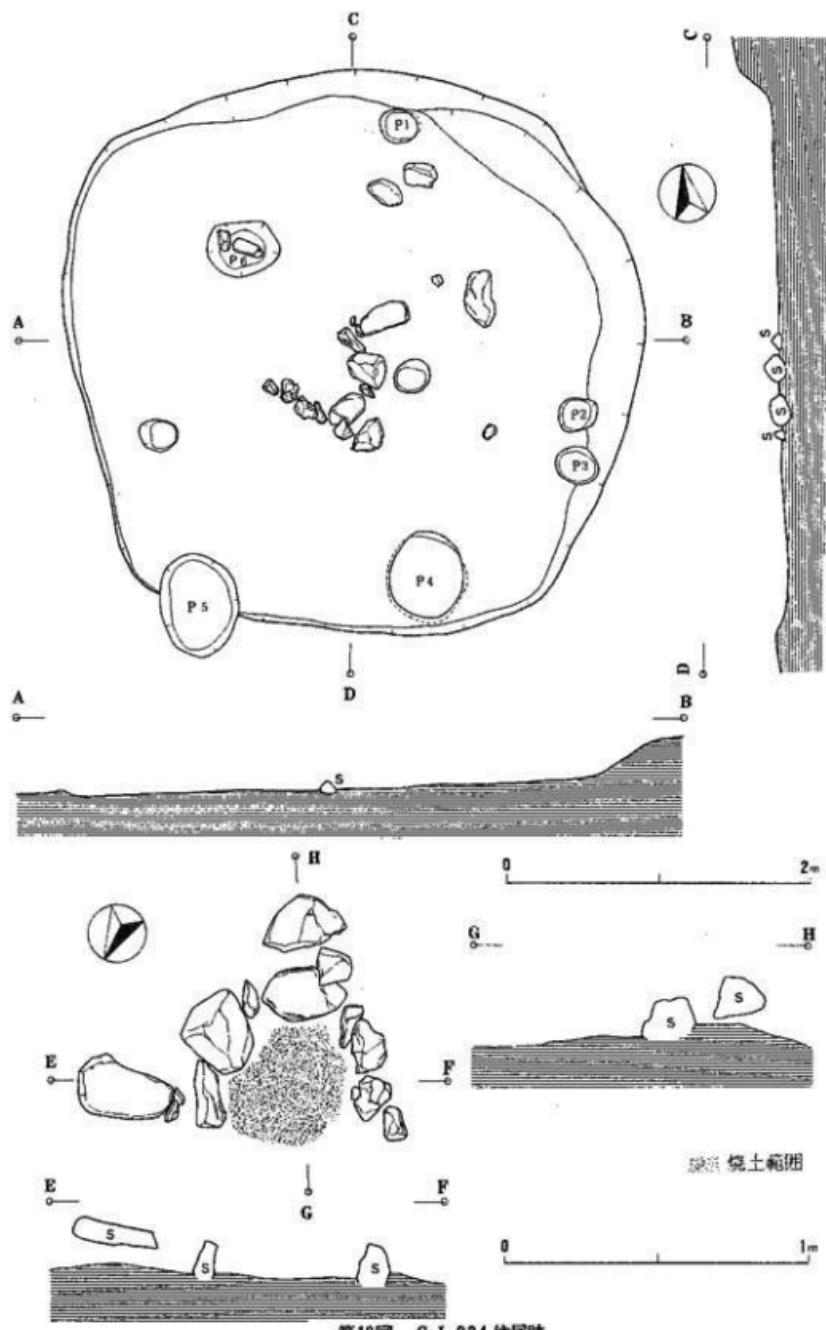
燒土範圍



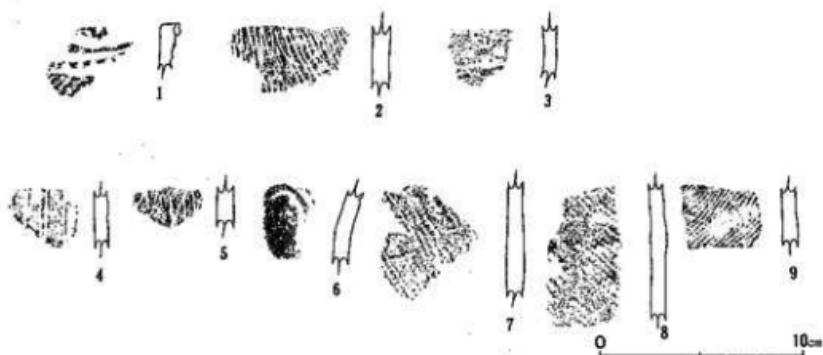
第17圖 S I 003 住居跡

第18表 S I 034住居跡観察表

S I 034住居跡		掲 図	18, 20	
		図 版		
検出 [K]	9M, 10M			
様	4.02×4.12m	面 積	11.71m ²	
主軸方位	N—168°—W	形 態	四形	
壁	西壁、南壁の保存状態は悪く、よく検出できなかった。 壁高は0.8~35.6cmの範囲にある。			
床	ほぼ平らである。 斜面方向に向ってゆるやかに少しだけ傾斜している。			
ビット	P ₁ 21.5×24.5×23.9 北側 柱穴と思われる			
	P ₂ 21×25×14.7 東側			
	P ₃ 24.5×30×12.1 P ₂ 南側			
	P ₄ 49×57×26.9 南側東寄り			
	P ₅ 51.5×69×16.8 南側西寄り 壁を切っている			
	P ₆ 36×48×17.4 北西側 河原石 2個が認められた			
炉	位置	中央付近		
	約10個の河原石よりなる。 大きさはあまりそろっていないが、これは石がわれて小さくなつたためと思われる。			
遺物	炉付近より石皿が出土した。 またそれから南東約1mの地点より磨石が出土している。			



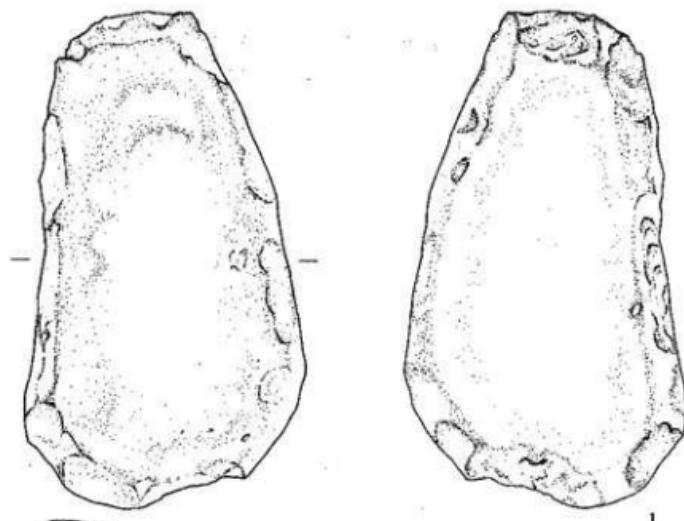
第18図 S.I. 034 住居跡



第19図 S I 003・S I 034 住居跡出土遺物

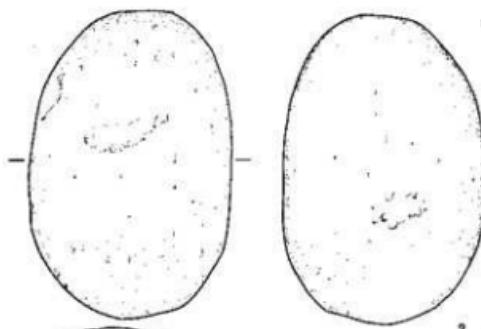
第19表 S I 003, S I 034 住居跡出土遺物

件名 番号	出土地点	器形	部 位	法 番 (cm)		測 定 (地 文)		成 形	色 调	胎 土	施成
				口幅	体厚	底径	基面				
1	S I 003	鍤	下縫部				外 壁	彫み上げ法	にじい檻 (7.5Y R 5%)	黒かに砂粒を含む	赤
2	S I 003	鍤	頭 部				内 壁	彫み上げ法	にじい檻 (10Y R 5%)	黒かに砂粒を含む	赤
3	S I 003	鍤	頭 部				外 壁	彫み上げ法	彫意 (7.5Y R 5%)	砂粒を含む	赤
4	S Q 006	頭 部					外 壁	彫み上げ法	にじい檻 (7.5Y R 5%)	砂粒を含む	赤
5	S I 035	頭 部					外 壁	彫み上げ法	にじい檻 (10Y R 5%)	黒かに砂粒を含む	赤
6	S I 035	頭 部					内 壁	彫み上げ法	にじい檻 (10Y R 5%)	黒かに砂粒を含む	赤
7	S Q 006	頭 部					外 壁	彫み上げ法	彫意 (10Y R 5%)	黒かに砂粒を含む	赤
8	S Q 006	頭 部					内 壁	彫み上げ法	彫意 (10Y R 5%)	黒かに砂粒を含む	赤
9	S I 035	頭 部					外 壁	彫み上げ法	にじい檻 (7.5Y R 5%)	黒かに砂粒を含む	赤



1

0 10cm



2

0 10cm

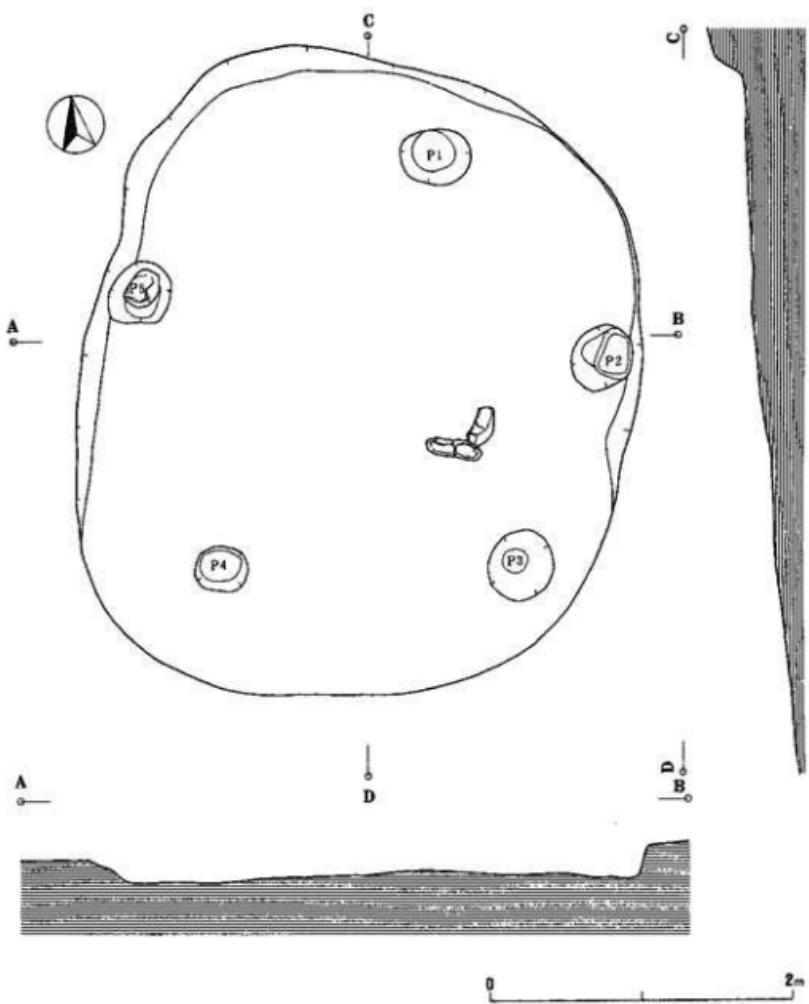
第20図 S I 034 住居跡出土遺物(石器)

第20表 S I 034 住居跡出土遺物(石器)

検出番号	出土地点	器種	石質	長さ(横)	幅(横)	厚さ	重さ	特徴
1	S I 034	石器	安山岩	32.5	16.2	11.6	8.7kg	表面研削が両面として使用されている。
2	S I 034	すり石	安山岩	16.5	9.8	5.0	5.4kg	片面に精打によると思われる凹が一箇所認められる。

第21表 S I 036住居跡観察表

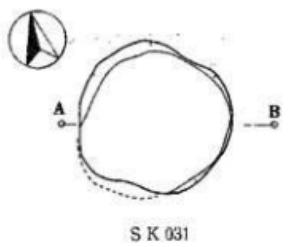
S I 036住居跡		掲 図	21
		図 版	7
検出区	6 P, 6 Q		
径	3.64×4.17m	面 積	13.20m ²
主軸方位	N-117°—E		
覆 土	10 Y R 4/6 褐色 粘性大 孔隙小 黄褐色土と暗褐色土がブロック状に混じり合っている。均質で固くしまっている。		
壁	南側の壁はほとんど検出されなかった。 床面に対する傾斜は107°～143°の範囲にある。 壁高は1.0～20.6cmの範囲にある。		
床	中央部分が壁際と比較するとややもり上がっている。 斜面方向にゆるやかに傾斜している。		
ピット	P ₁ 35.5×47×59.6 北側 柱穴 P ₂ 39×45×43.8 東側 柱穴 P ₃ 42×47×59 南東側 柱穴 P ₄ 29.5×34×67.3 南西側 柱穴 P ₅ 39×42×23.3 西側 柱穴 内部に径		
	位置 南東寄り		
	3個の河原石よりなる。 くの字形をしている。		



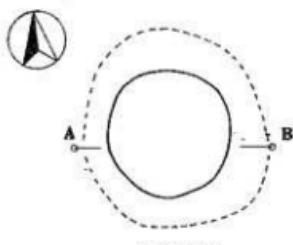
第21図 S I 036 住居跡

第22表 SK(F)031, SK(F)023, SK(F)024, SK(F)035土壤観察表

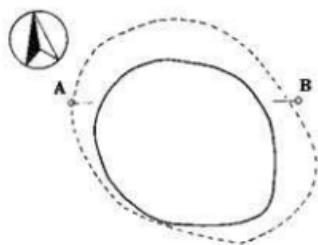
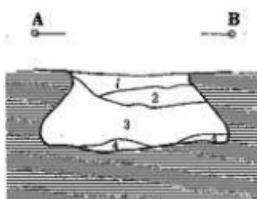
SK(F)031土壤		播 团	22, 25
		团 版	34
検出区	7 S, 8 S	規模・形態	92×101cm 不整円形
深さ	35.5cm	面 積	0.76m ²
確認状況 形は整っていない。底部は東側の方がかなり盛り上がりをもつていて（西側に傾斜） 底部に対する壁面の傾斜は86°～103°の範囲にある。			
SK(F)023土壤		播 团	22, 25
		团 版	34
検出区	4 S	規模・形態	82×85×cm 円形
深さ	53cm	面 積	0.53m ²
確認状況 プラスコ状土壤である。 底部は凹凸がはげしい。 全体の形は整っている。 底部に対する壁面の傾斜は57.5°～65°の範囲にある。			
覆 土		1. 10YR 5/4 暗褐色 粘性大 孔隙小 径2～10mm程度のローム粒の混入多い 2. 10YR 5/4 黄褐色 粘性大 孔隙極めて小 かたくしまっている 3. 10YR 5/4 褐 色 粘粘質 孔隙小 炭化物径10mm程度を含む 遺土含まれる 4. 10YR 5/4 にほい黄褐色 粘性大 孔隙極めて小 地山との漸移層	
SK(F)024土壤		播 团	22, 25
		团 版	7, 34
検出区	4 S, 4 T	規模・形態	108×129cm 楕円形
深さ	51cm	面 積	1.06m ²
確認状況 プラスコ状土壤である。 底部はほぼ平らを呈している。 全体的に形は整っている。 底部に対する壁面の傾斜は52.5°～70°の範囲にある。			
SK(F)035土壤		播 团	22
		团 版	34
検出区	4 T, 5 T	規模・形態	139×(150)cm 不整円形
深さ	55.5cm	面 積	(1.68)m ²
確認状況 土壤南側半分は木の根によって壊されており、確認することが出来なかった。 片側だけが内側に入りこんだプラスコ状をしている。 底部はほぼ平らである。 底部に対する壁面の傾斜は54～94.5°の範囲にある。			
覆 土	プロフィールだけである		



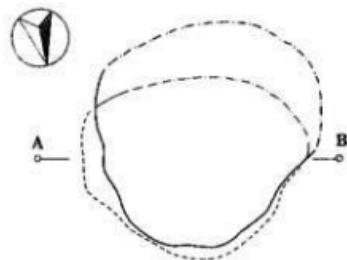
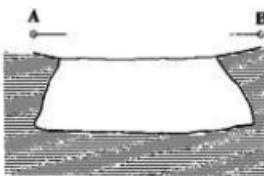
SK 031



SK(F)023



SK(F)024



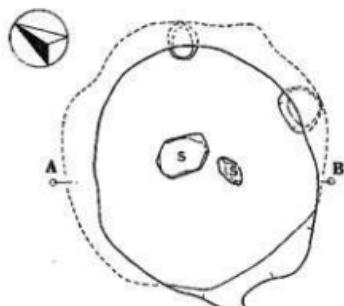
SK(F)035



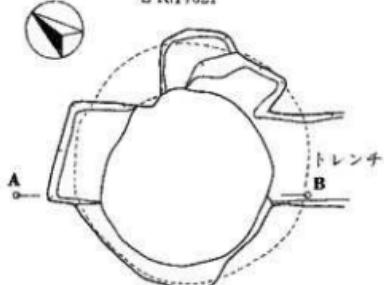
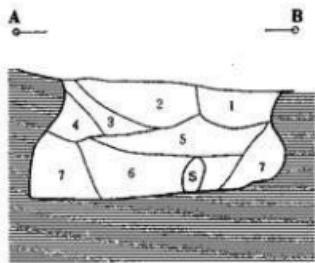
第22図 SK(F)031-SK(F)023-SK(F)024-SK(F)035 土壠

第23表 SK(F)021, SK(F)032, SK(F)022, SK(F)007 土壌観察表

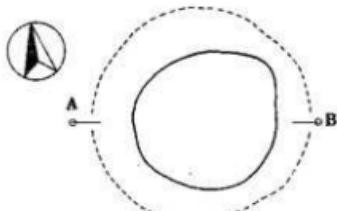
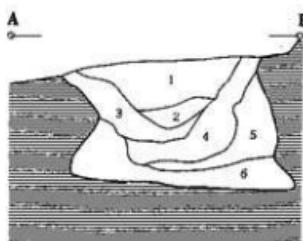
		持 国	23, 26, 30
		固 体	34, 35
検出区	4 T	規模・形態	148×167cm 不整円形
深さ	78cm	面 積	1.98m ²
確認状況			
フラスコ状土壌である。底部より(11×21cm, 24×35cm)の2箇の両端石が抜き出された。底部東側より2箇のピットが挖出されたが何であるかは不明である。形は突っておらずどちらかと云うといつてある。南側の方が浅くなっている。底部に対する正面の傾斜は70.5°~90°の範囲にある。			
覆 土			
1. 10Y R 5% 黄褐色 粘粒質 孔隙小 売化物粒混在 2. 10Y R 5% 黒 色 粘性大 孔隙小 極上段 売化物に混入 3. 10Y R 5% 黄褐色 粘性稍有 孔隙大 4. 10Y R 5% 黑 色 粘性大 孔隙大 殻崩落上 5. 10Y R 5% 黄褐色 粘粒質 孔隙大 ブロック状の黄褐色土の混入有 売化物混入甚大 6. 10Y R 5% 黄褐色 粘性大 孔隙小 7. 10Y R 5% 黑 色 粘性大 孔隙大 ブロック状の黄褐色土と暗褐色土の混じり合ったもの			
		持 国	23, 26, 30
		固 体	8, 34, 35
検出区	8 R, 8 S	規模・形態	104.5×117cm 不整円形
深さ	88cm	面 積	1.00m ²
確認状況			
北西~南東のトレンチは試掘のためのトレンチである。上から見るとはほぼ円形を呈しているが、断面を見る限りでは形は似ているとは言えない。底部に対する傾斜の傾斜は68.5°~72°の範囲にある。北張側では途中いったんくびれているが、南張側にそのあとは見られない。			
覆 土			
1. 10Y R 5% 黄褐色 粘性大 孔隙大 少量に炭化物の混入有 2. 10Y R 5% 黄褐色 粘性稍有 孔隙大1の黄褐色土と暗褐色土の混じり合ったもの 3. 10Y R 5% 黄褐色 粘性弱 孔隙大 黄褐色土粒(径5mm以下)と幾セ粒の混入有 4. 10Y R 5% 黑褐色 粘性弱 孔隙大 3に比して黄褐色土粒の混入割合が少い 5. 10Y R 5% 黄褐色 粘性大 孔隙小 ロームブロックと黒褐色土の混じり合ったもの 6. 10Y R 5% 黄褐色 粘性大 孔隙大 黄褐色土粒と黑褐色土粒の混じり合ったもの			
		持 国	23, 27, 30
		固 体	34, 35
検出区	5 R	規模・形態	90×36cm 円形
深さ	105cm	面 積	0.72m ²
確認状況			
いったんくびれている。フランクオーナーである。底部はほぼ平らであるし底部、壁面ともしっかりしている。底部に対する正面の傾斜は67°~68°の範囲にあり、ほぼ均一の筋をしめしている。			
覆 土			
1. 10Y R 5% 黄褐色 粘粒質 孔隙小 効力有る より新しい時期の根植物の付土か? 2. 10Y R 5% 黄褐色 粘性弱 孔隙大 ローム粒若干混入 売化物混入 3. 10Y R 5% 黄褐色 粘質 孔隙大 ローム粒混入 4. 10Y R 5% 黑褐色 粘質 孔隙大 炭化物混入 5. 10Y R 5% 黑 色 粘性大 孔隙大 殻の崩落土と暗褐色土のブロック状に混じったもの 6. 10Y R 5% 黄褐色 粘粒質 孔隙大 売化物混入 7. 10Y R 5%~6 黄褐色~暗褐色 粘性大 孔隙大 売化物混入			
		持 国	23, 28, 29
		固 体	K, 35
検出区	4 T	規模・形態	132×149cm 不整円形
深さ	128.5cm	面 積	1.57m ²
確認状況			
フランクオーナーである。口縁に比べて底部が北側に寄っている。底部や壁面はやや凸凹している。底部は東側の方がやや高くなっている。セクションを取った面における底部に対する正面の傾斜は75°であった。			
覆 土			
1. 10Y R 5% 黑褐色 粘粒質 孔隙小 従2~3mm程度のローム粒僅かに混入 2. 10Y R 5% 黄褐色 粘質 孔隙小 従1mm以下のローム粒 売化物混入 3. 10Y R 5% 黑 色 粘性大 孔隙稍有 級(立上り部) 碳化物混入少し 4. 10Y R 5% 黑褐色 粘 質 孔隙大 売化物混入少し 5. 10Y R 5% 黑 色 粘 質 孔隙大 ロームブロックの混入有 6. 10Y R 5% 黄褐色 粘 質 孔隙小 7. 10Y R 5% 黄褐色 粘 質 孔隙大 ブロック状にロームと暗褐色土混じり合う 8. 10Y R 5% 黄褐色 粘 質 孔隙小 ローム粒若干混入 9. 10Y R 5% 黑 色 粘性大 孔隙大 黄褐色土粒混入			



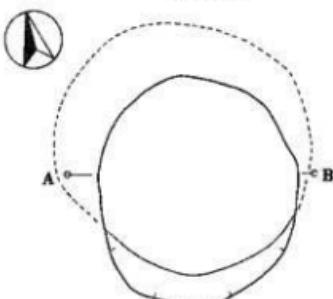
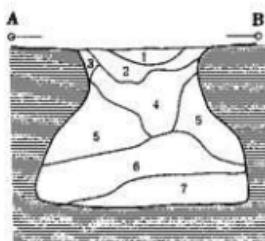
S K(F)021



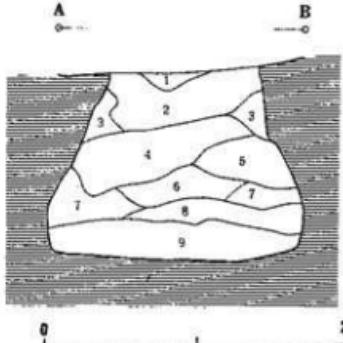
S K(F)032



S K(F)022



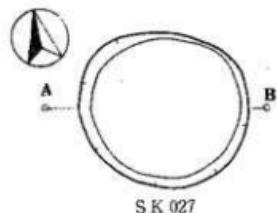
S K(F)007



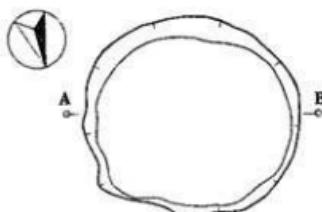
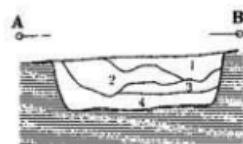
第23図 S K(F)021-S K(F)032-S K(F)022-S K(F)007 土壌

第24表 SK027, SK020, SK029, SK026, SK030土壤観察表

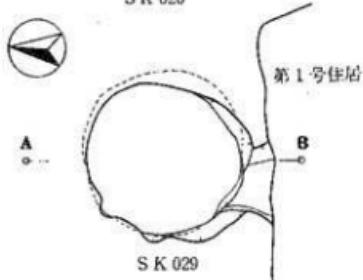
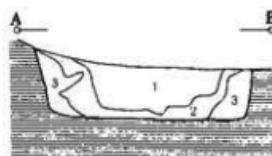
SK027土壤		持 团 24 國 版
検出区	6 S	規模・形態 101×113cm 円形
深さ	36cm	面積 0.92af
確認状況 整った円形をしている。壁の立上りもしっかりしている。底部がやや凸凹している。底部に対する壁面の傾斜は90°～101.5°の範囲にある。		
覆土	1. 10YR 5/4 黒褐色 粗粒質 孔隙小 2. 10YR 5/4 黑褐色 粗粒質 孔隙比較的大 ※全体に色調の変化に乏しく混入する物も殆どない	3. 10YR 5/4 黑褐色 粗粒質 孔隙小 4. 10YR 5/4 黄褐色 粘性大 孔隙小
SK020土壤		持 団 24 國 版
検出区	8 P, 9 P	規模・形態 132×144cm 不整円形
深さ	43cm	面積 1.49af
確認状況 底部に対する壁面の傾斜は97°～101.5°の範囲にある。底部はほぼ平らである。形は円形ではあるがややいびつである。		
覆土	1. 10YR 5/4 黑褐色 粘性中 ややしまっている 径1～2mmの粘土粒をわずかに含む 2. 10YR 5/4 黑褐色 粘性中 ややしまっている 1. 3の土が混じり合った層と思われる 3. 10YR 5/4 黄褐色 粘性中 ほそほそしている 1ないし2の混入がわずかに見られる	
SK029土壤		持 団 24 國 版
検出区	9 Q	規模・形態 95×105cm 不整円形
深さ	51cm	面積 0.83af
確認状況 第6号住居北壁東寄り壁際に位置する。北壁は直角に近い立上りを見せている。プランではっきり確認することは出来ず掘ってみて上壁であることがわかった。底部に対する壁面の傾斜は85°～103°の範囲にある。底部はそんなに平らではなく両側の方が高くなっている。		
覆土	1. 10YR 5/4 黑褐色 粘性弱 径1mm程度のローム粒多く含む 2. 10YR 5/4 黑褐色 粘性弱 バニス糊く僅かに混入 ローム粒多く含む 3. 10YR 5/4 黑褐色 粘性弱 径2mm程度のバニス糊く僅かに また径2mm程度のローム粒を多く含む 4. 10YR 5/4 黄褐色 粘性大 ローム粒多く混入 5. 10YR 5/4 黄褐色 粘性大 ローム層	
SK026土壤		持 団 24 國 版
検出区	5 Q, 6 Q	規模・形態 124×127cm 不整円形
深さ	49.5cm	面積 1.26af
確認状況 底部に対する壁面の傾斜は120°～133°の範囲にある。底部及び壁面は整っておらず形も少しづがんでいる。		
覆土	1. 10YR 5/4 黑 色 粗粒質 孔隙小 塗装物粒僅かに含む 2. 10YR 5/4 黑褐色 粘質 1に比して孔隙小 径2～3mm程度のローム粒多く含む 3. 10YR 5/4 黑 色 粘性大 孔隙小 黑褐色土混じる	
SK030土壤		持 団 24 國 版
検出区	7 R	規模・形態 104×114cm 円形
深さ	28cm	面積 0.98af
確認状況 壁面に対する壁面の傾斜は115°～133°の範囲であった。なおこの数値は底部が凸凹しておりさか無理のある値である。底部及び壁面はすべて4cm以上の粗面を多量に含んだ頑面である。バニスを覆土中に殆ど含まず。平安時代窓穴とは異なる時期の構築物であろうが、おそらくはより後世の柱を立てるため(何の柱か解らず)の柱穴か?		
覆土	1. 10YR 5/4 黑褐色 粘性弱 径2mm程度のローム粒僅かに混入 2. 10YR 5/4 黑褐色 粘性弱 ローム粒僅かに混入 3. 10YR 5/4 黄褐色 ローム粒多く含む	



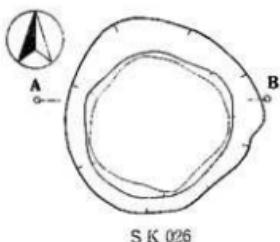
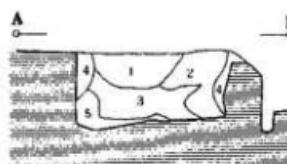
SK 027



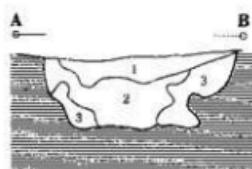
SK 020



SK 029



SK 026



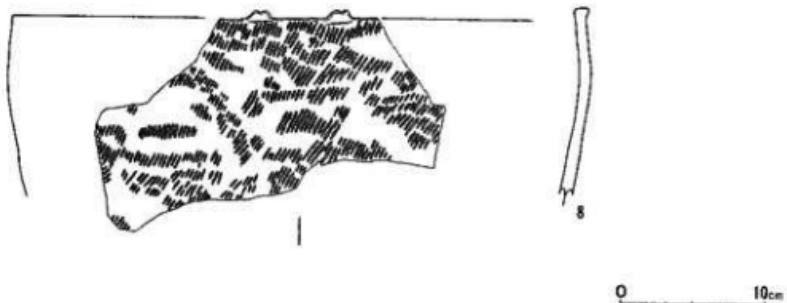
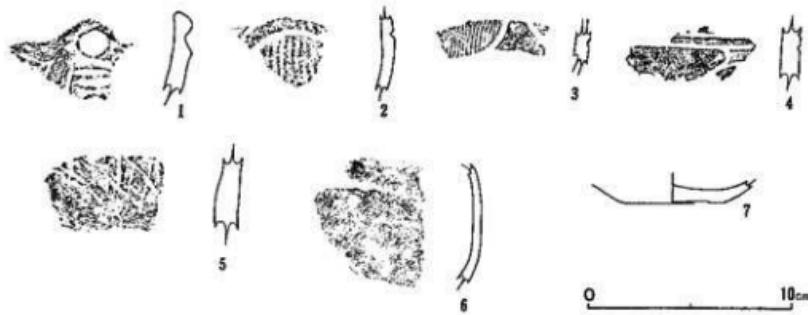
SK 030



断面

0 1 2m

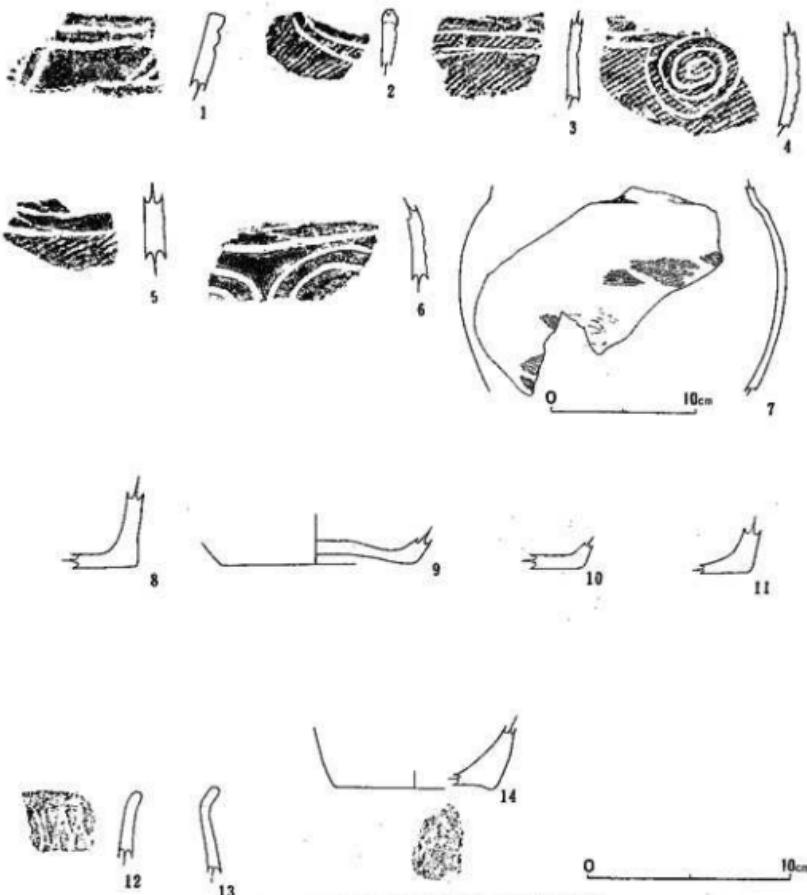
第24図 SK 027・SK 020・SK 029・SK 026・SK 030 土壌



第25図 SK(F)031-S K(F)023-S K(F)024 土壤出土遺物

第25表 SK(F)031, SK(F)023, SK(F)024 土壤出土遺物

件目 番号	出土地點	器形	施 織	成 分 (%)			測 定 値 (度)	成 分	成 分	成 分
				珪	砂	粘土				
1 SK(F)031	新 田	新	新	46.1	44.1	9.8	灰丸、灰丸、礫丸、L.H.タコ	ナメ	強み七日法	に、灰丸、灰丸、(10Y R 5/6)
2 SK(F)031	新 田	新	新	46.1	44.1	9.8	灰丸、灰丸、L.H.、灰丸、灰丸	ナメ	強み七日法	に、灰丸を含む 灰
3 SK(F)031	新 田	新	新	46.1	44.1	9.8	灰丸、灰丸、L.H.タコ	ナメ	強み七日法	に、灰丸 (10Y R 5/6)
4 SK(F)031	新 田	新	新	46.1	44.1	9.8	灰丸	ナメ	強み七日法	に、灰丸 (7.5 Y R 5/6)
5 SK(F)031	新 田	新	新	46.1	44.1	9.8	灰丸子	ナメ	強み七日法	に、灰丸 (5 Y R 5/6)
6 SK(F)031	新 田	新	新	46.1	44.1	9.8	灰丸子	ナメ	強み七日法	に、灰丸 (10 Y R 5/6)
7 SK(F)031	新 田	新	新	46.1	44.1	9.8	灰丸	ナメ	強み七日法	に、灰丸を含む 灰
8 SK(F)031	新 田	新	新	46.1	44.1	9.8	灰丸	ナメ	強み七日法	に、灰丸を含む 灰
9 SK(F)031	新 田	新	新	46.1	44.1	9.8	灰丸	ナメ	強み七日法	に、灰丸 (10Y R 5/6)
10 SK(F)031	新 田	新	新	46.1	44.1	9.8	灰丸	ナメ	強み七日法	に、灰丸 (7.5 Y R 5/6)
H : SK(F)023	新 田	新	新	46.1	44.1	9.8	灰丸、L.H.タコ	ナメタコ	強み七日法	に、灰丸 (10Y R 5/6)
V : SK(F)023	新 田	新	新	46.1	44.1	9.8	灰丸	ナメ	強み七日法	に、灰丸 (7.5 Y R 5/6)
W : SK(F)023	新 田	新	新	46.1	44.1	9.8	灰丸	ナメ	強み七日法	に、灰丸 (10Y R 5/6)
X : SK(F)023	新 田	新	新	46.1	44.1	9.8	灰丸	ナメ	強み七日法	に、灰丸 (7.5 Y R 5/6)
Y : SK(F)023	新 田	新	新	46.1	44.1	9.8	灰丸	ナメ	強み七日法	に、灰丸 (10Y R 5/6)
Z : SK(F)023	新 田	新	新	46.1	44.1	9.8	灰丸	ナメ	強み七日法	に、灰丸 (7.5 Y R 5/6)



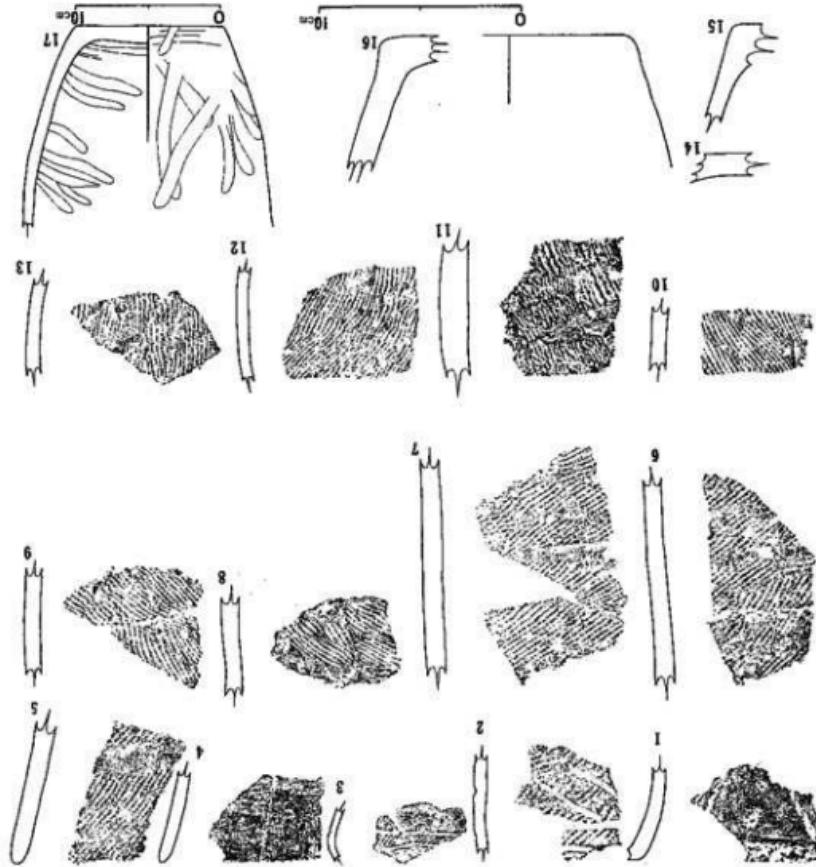
第26図 SK(F) 021・SK(F) 032 土壌出土遺物

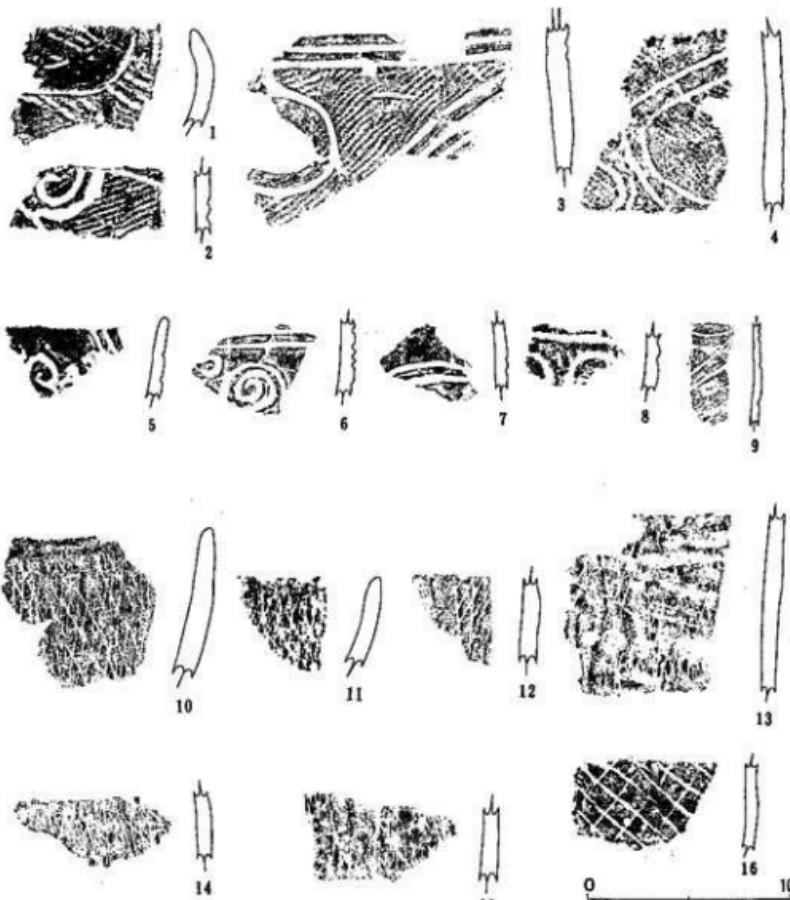
第26表 SK(F)021, SK(F)032 土壤出土遺物

项目号	出土地点	器物名	器物形制	量		特征	类别	说明
				口径	底径			
1	新石器时代	新石器时代	磨光石斧	10.5	6.5	磨光石斧	石器	新石器时代
2	新石器时代	新石器时代	石刀	11.5	6.5	石刀	石器	新石器时代
3	新石器时代	新石器时代	石刀	11.5	6.5	石刀	石器	新石器时代
4	新石器时代	新石器时代	石刀	11.5	6.5	石刀	石器	新石器时代
5	新石器时代	新石器时代	石刀	11.5	6.5	石刀	石器	新石器时代
6	新石器时代	新石器时代	石刀	11.5	6.5	石刀	石器	新石器时代
7	新石器时代	新石器时代	石刀	11.5	6.5	石刀	石器	新石器时代
8	新石器时代	新石器时代	石刀	11.5	6.5	石刀	石器	新石器时代
9	新石器时代	新石器时代	石刀	11.5	6.5	石刀	石器	新石器时代
10	新石器时代	新石器时代	石刀	11.5	6.5	石刀	石器	新石器时代
11	新石器时代	新石器时代	石刀	11.5	6.5	石刀	石器	新石器时代
12	新石器时代	新石器时代	石刀	11.5	6.5	石刀	石器	新石器时代
13	新石器时代	新石器时代	石刀	11.5	6.5	石刀	石器	新石器时代
14	新石器时代	新石器时代	石刀	11.5	6.5	石刀	石器	新石器时代

第27卷 SK(F)022王振田王道勋

圖27 S K(F) 022 土壤出土遺物

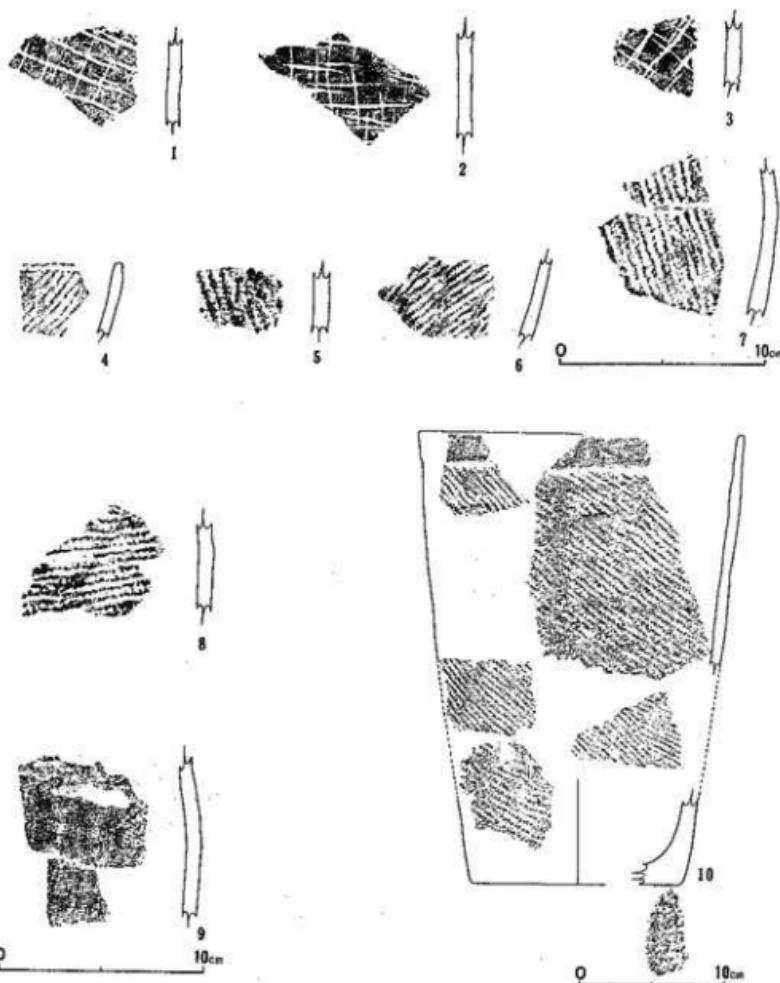




第28図 SK(F) 007 土壤出土遺物(1)

第28表 SK(F) 007 土壤出土遺物(1)

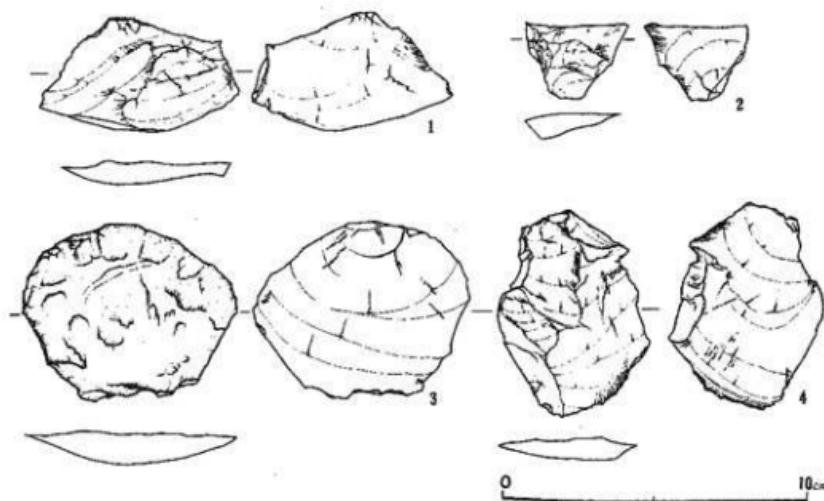
測定 番号	出土場所	形態	寸 法	重 量 (g)	材 質	性 質	地 方	成 形	名 称	地 上	地 下
1	S.K.007.007	骨	10mm		骨	丸頭, 頸部, L字型?	ナガ	縫合式	縫合部(10Y 8R)	棒状に斜めを含む	骨
2	S.K.007.007	骨	90mm 20mm		骨	丸頭, 頸部, L字型, 突起部有り	ナガ	縫合式	縫合部(12.5Y 8R)	棒状に斜めを含む	骨
3	S.K.007.007	骨	90mm 20mm		骨	丸頭, 頸部, L字型?	ナガ	縫合式	縫合部(10Y 8R)	棒状に斜めを含む	骨
4	S.K.007.007	骨	90mm 20mm		骨	丸頭, 頸部, L字型?	ナガ	縫合式	縫合部(10Y 8R) 他(7.5Y 8R)	棒状に斜めを含む	骨
5	S.K.007.007	骨	90mm 20mm		骨	丸頭, 頸部, L字型?	ナガ	縫合式	縫合部(10Y 8R) 他(7.5Y 8R)	棒状に斜めを含む	骨
6	S.K.007.007	骨	90mm 20mm		骨	丸頭, 頸部, L字型?	ナガ	縫合式	縫合部(10Y 8R) 他(7.5Y 8R)	棒状に斜めを含む	骨
7	S.K.007.007	骨	90mm 20mm		骨	丸頭, 頸部, L字型?	ナガ	縫合式	縫合部(10Y 8R) 他(7.5Y 8R)	棒状に斜めを含む	骨
8	S.K.007.007	骨	90mm 20mm		骨	丸頭, 頸部, L字型?	ナガ	縫合式	縫合部(10Y 8R) 他(7.5Y 8R)	棒状に斜めを含む	骨
9	S.K.007.007	骨	90mm 20mm		骨	丸頭, 頸部, L字型?	ナガ	縫合式	縫合部(10Y 8R) 他(7.5Y 8R)	棒状に斜めを含む	骨
10	S.K.007.007	骨	90mm 20mm		骨	丸頭, 頸部, L字型?	ナガ	縫合式	縫合部(10Y 8R) 他(7.5Y 8R)	棒状に斜めを含む	骨
11	S.K.007.007	骨	90mm 20mm		骨	丸頭, 頸部, L字型?	ナガ	縫合式	縫合部(10Y 8R) 他(7.5Y 8R)	棒状に斜めを含む	骨
12	S.K.007.007	骨	90mm 20mm		骨	丸頭, 頸部, L字型?	ナガ	縫合式	縫合部(10Y 8R) 他(7.5Y 8R)	棒状に斜めを含む	骨
13	S.K.007.007	骨	90mm 20mm		骨	丸頭, 頸部, L字型?	ナガ	縫合式	縫合部(10Y 8R) 他(7.5Y 8R)	棒状に斜めを含む	骨
14	S.K.007.007	骨	90mm 20mm		骨	丸頭, 頸部, L字型?	ナガ	縫合式	縫合部(10Y 8R) 他(7.5Y 8R)	棒状に斜めを含む	骨
15	S.K.007.007	骨	90mm 20mm		骨	丸頭, 頸部, L字型?	ナガ	縫合式	縫合部(10Y 8R) 他(7.5Y 8R)	棒状に斜めを含む	骨
16	S.K.007.007	骨	90mm 20mm		骨	丸頭, 頸部, L字型?	ナガ	縫合式	縫合部(10Y 8R) 他(7.5Y 8R)	棒状に斜めを含む	骨
17	S.K.007.007	骨	90mm 20mm		骨	丸頭, 頸部, L字型?	ナガ	縫合式	縫合部(10Y 8R) 他(7.5Y 8R)	棒状に斜めを含む	骨
18	S.K.007.007	骨	90mm 20mm		骨	丸頭, 頸部, L字型?	ナガ	縫合式	縫合部(10Y 8R) 他(7.5Y 8R)	棒状に斜めを含む	骨
19	S.K.007.007	骨	90mm 20mm		骨	丸頭, 頸部, L字型?	ナガ	縫合式	縫合部(10Y 8R) 他(7.5Y 8R)	棒状に斜めを含む	骨
20	S.K.007.007	骨	90mm 20mm		骨	丸頭, 頸部, L字型?	ナガ	縫合式	縫合部(10Y 8R) 他(7.5Y 8R)	棒状に斜めを含む	骨



第29図 SK(F) 007 土壤出土遺物(2)

第29表 SK(F) 007 土壤出土遺物(2)

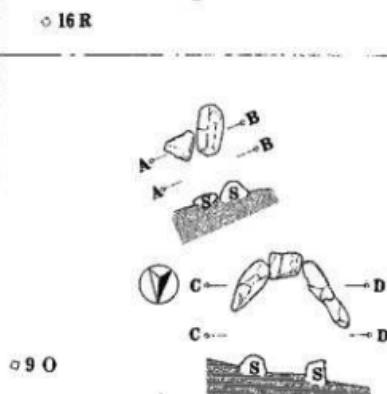
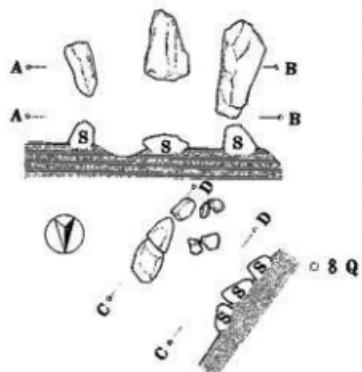
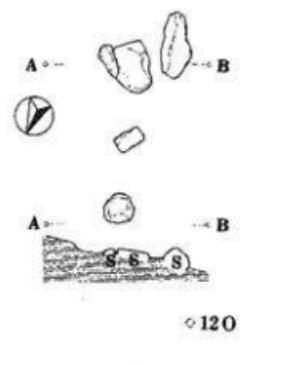
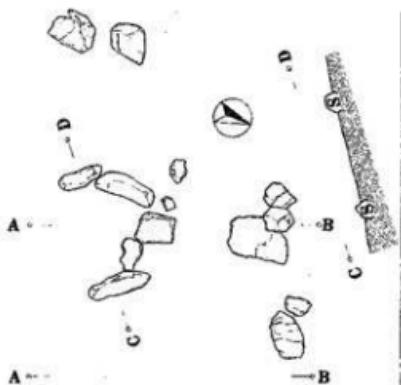
器種 番号	前毛標示	器形	寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸	材 質	寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸	寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸	寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸	寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸	寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸	寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸		
1	SK-F-007	鉢	直口、縦縫合、内面	陶土	13.0×12.0	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5
2	SK-F-007	鉢	直口、縦縫合	陶土	13.0×12.0	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5
3	SK-F-007	鉢	直口、縦縫合	陶土	13.0×12.0	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5
4	SK-F-007	鉢	直口、縦縫合	陶土	13.0×12.0	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5
5	SK-F-007	鉢	直口、縦縫合	陶土	13.0×12.0	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5
6	SK-F-007	鉢	直口、縦縫合	陶土	13.0×12.0	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5
7	SK-F-007	鉢	直口、縦縫合	陶土	13.0×12.0	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5
8	SK-F-007	鉢	直口、縦縫合	陶土	13.0×12.0	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5
9	SK-F-007	鉢	直口、縦縫合	陶土	13.0×12.0	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5
10	SK-F-007	鉢	直口、縦縫合	陶土	13.0×12.0	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5



第30図 SK(F)021・SK(F)032・SK(F)022 土壌出土遺物(石器)

第30表 SK(F)021, SK(F)032, SK(F)022 土壌出土遺物(石器)

測定番号	出土地名	器種	材質	最大幅:	幅(面)	厚さ	重量	解説
1	SK(F)021	刮削	骨質	5.5	3.7	0.9	16.2	横断の剥離。先端はヒンジ式でアーチなる。左右両刃内面部が刃面として使用したもの。
2	SK(F)032	刮削	骨質	3.4	3.7	0.8	5.3	
3	SK(F)022	刮削	骨質	6.1	6.6	1.1	47.1	表面に自然面を残す
4	SK(F)022	刮削	骨質	6.7	4.7	0.7	36.1	毛端に残存する刃工作部が認められる。



第31図 炉跡

出土遺物

土器

前期の所産のものと後期のものと時期的には2大別できるが、より細かく見た場合には前期のものを1時期、後期のものをおよそ2時期とそれに伴う1つのグループに分けることができ、各々を群としさらに文様等の特徴により類を設けて記述する。

第I群土器（第4図、第40図1）

胎土に多くの纖維を含み、撚糸文を多用する。器形は円筒形の深鉢をとる。円筒下層と式に比定し得る。

第II群土器

第1類（第32図1、第40図2）

体部上半に文様帶をもつ。文様帶内の文様は粘土紐の貼付によって隆帯をつくり、その上に縄文を回転施文したものである。

第2類（第32図2）

所謂連鎖状隆線を特徴とする。連鎖状隆線は、波状口縁の波頂下で円形の貼付文に連結する。地文としては撚糸文が選択されている。

第3類（第32図3）

磨消縄文手法を用い、三角形の構図を横位に連ねる。波状口縁波頂下には円形の刺突文が施される。

第4類（第32図9・10）

胸部の破片のみであるので、土器全体の形態を描き出すことは出来ないが、地文に縄文を用いた上に先端の尖った工具による刺突文が横位に並ぶ。

第5類（第28図1～9、第32図4～22、第33図1～21、第40図3、第41図4）

沈線によって曲線文が描かれることを特徴とする。磨消縄文の手法がとられる場合と、無文地に沈線がひかれる場合がある。また地文としては複節の縄文が回転施文されることもある。細片が多く全体の形態を推測するのがむずかしいが、壺形の土器も含まれることから器形は、他のものよりバラエティーがあるものと思われる。また、沈線の描く構図にも多くの種類があ

り、それによりさらに細かく分類することも可能である。

第Ⅲ類土器

第1類(第9図1~12・14・16・17、第11図4、第13図3、第16図1・2、第33図22・23、第41図5)

平行沈線と磨消繩文手法の組合せを特徴とする。平行沈線間はS字状の沈線で連絡される場合もある。口縁は平縁、波頂部のかなり肥厚した波状口縁、さらに大形の突起の付くものまで種々である。

第2類(第9図13・15)

沈線と磨消繩文手法によって大きな曲線的構図の描かれるもの。

第3類(第25図9)

口縁に魚尾状突起が付され、縦位の短沈線列が何段か重ねられるもの。

第Ⅳ群土器

第1類(第13図4~7、第41図1、第35図1~20)

口縁上端から底部まで縦位の撚糸文が施されるもの。原体はRの撚糸を用いることが多い。器形は深鉢形を基本とする。

第2類(第10図21、第25図5、第26図12、第28図10~16、第29図1~3、第34図1~13、第41図3)

格子目状撚糸文の施されるもの。原体はRが多い。口縁に無文帯をもつ場合もある。深鉢形が基本形態となる。

第3類(第9図18~22、第10図1~18、第11図6、8、第13図8~10、第14図9、10)
(第25図8、第27図5~13、第29図10、第36図、第37図、第41図2、6、7)

全面繩文の施されるもの。深鉢形を基調とする。口縁の形状は平縁の他、波状口縁、折り返し口縁、無文帯をもつ場合などがある。

第4類(第8図10~12、第11図5、第26図7、第27図17)

無文のもの。器形は深鉢形、鉢形、壺形と変化に富む。

第Ⅱ群~第Ⅳ群土器は後期初頭から後葉までの土器を含むが、およそ第Ⅱ群土器は後期初頭から中葉まで、第Ⅲ群土器は中葉から後葉にかけて、第Ⅳ群土器はⅡ群、Ⅲ群土器に伴うもの

と見てよい。

第II群土器のうち第1類土器は以前山田野C式として注意されたこともあるが、東北地方北部、繩文時代後期の土器としてはかなり異質の土器である。すなわち、中期から後期への移行を土器の文様上で隆線→沈線の過程とするならば、この第1類土器では依然として隆線文の手法が残り、その意味では後期の土器としての最も大きな要素を欠している。さらにもっと厳密に言えば、土器文様の隆線→沈線という変化は例えば円筒上層d式と円筒上層e式に見られるように、既に中期後葉に完了していると言えるのである。つまり、この第1類土器は、東北地方北部の繩文時代中期から後期への土器編年を大椎把に見た場合、その系統上の脈絡を抱えにくく、現在の段階では材料不足であるとしか言えない。唯、多少の飛躍が許されるなら、東北地方北部の後期前葉の土器とされる十腰内I式土器の中には、上部の文様帶中の2本の平行沈線によって描かれる文様が、なかば浮隆線化したものがある。この種の土器と、さらに若干分布する地域を異にするが、やはり後期初頭～前葉とされる門前式もその文様表出の基本的手法は隆線文の手法である。このような土器が、第1類土器と何らかの関係をもつとも言えるのではないかと思われる。

第2類～第4類土器は、門前式及びその周辺に位置づけられるものであろう。第2類土器は、連鎖状隆線によって特徴づけられる比較的純粋な形の門前式といってよい。その他波頂部から垂下する貼付文、円形の貼付文等もその特徴として数えあげられる。第3類土器は、磨消繩文手法、円形の貼付文、その変形とも思える円形の刺突等、やはり門前式の流れを汲むと思われる特徴を具備している。第4類土器は横位に並ぶ刺突列が特徴である。

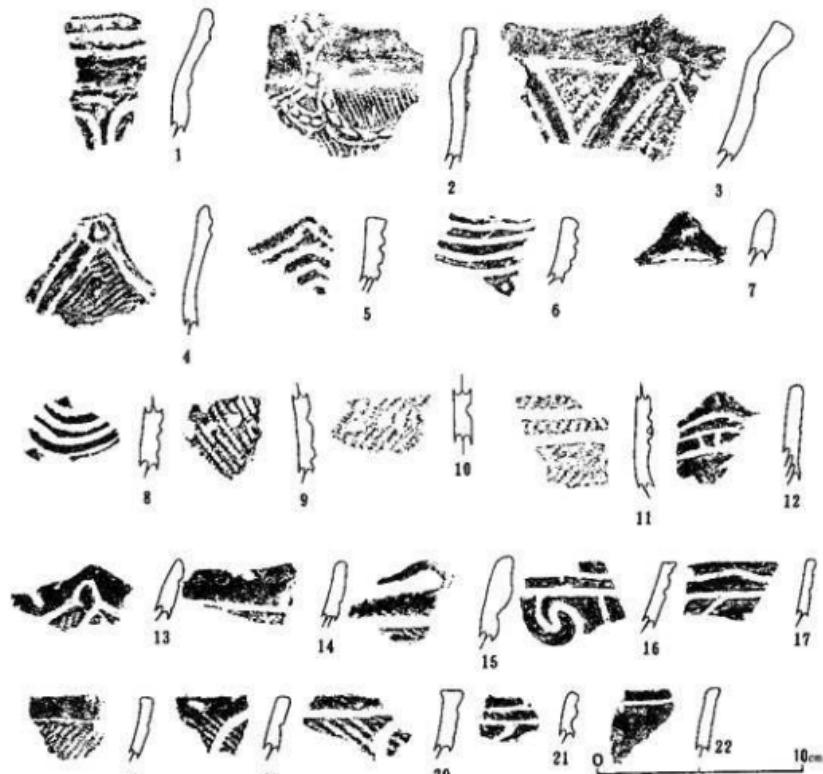
この種の土器は現在のところ未見であるが、門前式の中には、磨消手法による区画文内に刺突を充填させるものがあり、ここでは一応その類の土器との関係を考えておきたい。

第5類土器は、おおむね十腰内I式とされる土器をあげた。十腰内I式に関してはその細分の可能性が示唆され、また試行されてもいる。また大湯式等との関係の問題もあり、未だその型式内容には流動的な部分もある。第5類土器として括してあげた土器も、磨消繩文手法を含めて沈線文の手法による文様という共通する要素をもち併せてはいるが、文様の構図などから細分される可能性をもつと思われる。

第III群土器は後期中葉～後葉の時期にあたる。第1類及び第2類土器は、およそ加曾利B₁～B₂式に併行させることができるのであろう。第3類土器は、後期後葉の入組文土器である。

第IV群土器は、II群及びIII群土器に伴う粗製土器である。したがって、口縁が波状を呈するか否かという部分的なところを除いては、殆ど深鉢形という单一の器形によって成ると思われ、II群、III群に認められた器形上のバリエーションは極めて少い。

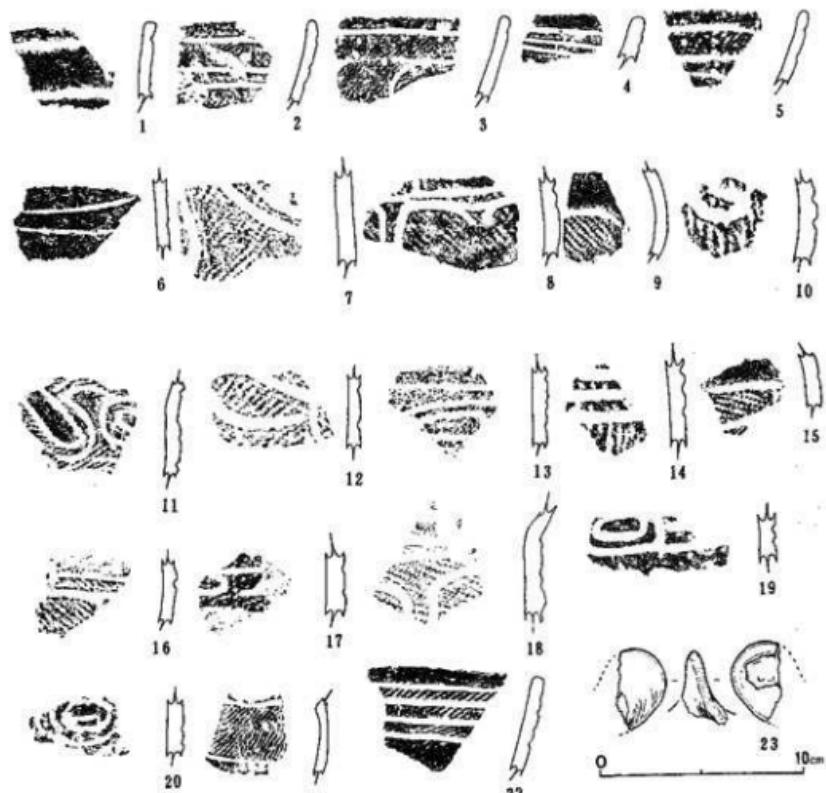
第1類、第2類土器は、ともに経条体を回転施文したものである。第1類が、単に平行な燃軸型式認定の問題に関しては研究者によって異論のあるところである。ここでは単におおよその時期を示す指標として用いる。



第32図 遺構外出土遺物(1)

第31表 遺構外出土遺物(1)

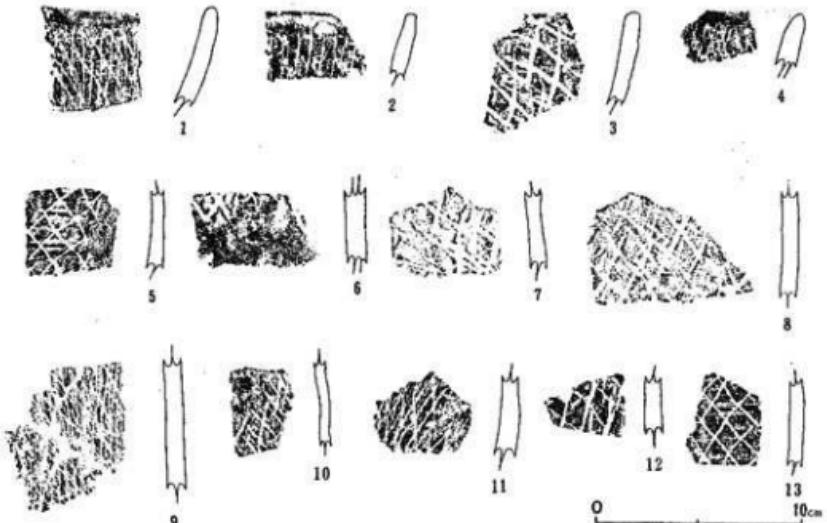
番号	出土場所	形態	材質	寸 量(cm)		圖 形(漢文)		表面	色 調	形 状	備 考
				上段	下段	外 形	内 面				
1	2-T1	鉢	土器底			丸窓文		縫合上口沿	褐色(5.5YR5/6)	微小に砂粒含む	直
2	9-1-T	鉢	土器底			丸窓、円形網状文、片灰文、西紋		縫合上口沿	赤褐色(10YR5/6)	微小に砂粒含む	直
3	17-1-G	鉢	土器底			丸窓、刺突文、或文、L.M.テテ		縫合上口沿	赤褐色(10YR5/6)	微小に砂粒含む	直
4	10-E	鉢	土器底			丸窓、円形網状文、或文、S.H.テテ		縫合上口沿	赤褐色(7.5YR5/6)	微小に砂粒含む	直
5	15-Q	鉢	土器底			丸窓		縫合上口沿	赤褐色(7.5YR5/6)	微小に砂粒含む	直
6	8-K	鉢	土器底			丸窓、刺突文		縫合上口沿	赤褐色(7.5YR5/6)	微小に砂粒含む	直
7	7-D	鉢	土器底			丸窓		縫合上口沿	赤褐色(7.5YR5/6)	微小に砂粒含む	直
8	8-L	鉢	土器底			丸窓		縫合上口沿	赤褐色(7.5YR5/6)	微小に砂粒含む	直
9	8-Q	鉢	土器底			刺突文(刃向一定せず)、或文、片シテテ		縫合上口沿	赤褐色(7.5YR5/6)	微小に砂粒含む	直
10	6-W	鉢	土器底			刺突文(刃向一定せず)、或文、片シテテ		縫合上口沿	赤褐色(10YR5/6)	微小に砂粒含む	直
11	8-S-T1	鉢	土器底			丸窓、刺突文(L.M.の方向)、或文、片シテテ		縫合上口沿	赤褐色(10YR5/6)	微小に砂粒含む	直
12	8-R	鉢	土器底			丸窓		縫合上口沿	褐色(5YR5/6)	微小に砂粒含む	直
13	40-I	鉢	土器底			丸窓		縫合上口沿	赤褐色(7.5YR5/6)	微小に砂粒含む	直
14	8-P	鉢	土器底			丸窓		縫合上口沿	赤褐色(7.5YR5/6)	微小に砂粒含む	直
15	11-D	鉢	土器底			丸窓		縫合上口沿	褐色(10YR5/6)	紗目状含む	直
16	17-P	鉢	土器底			丸窓		縫合上口沿	赤褐色(10YR5/6)	微小に砂粒含む	直
17	9-T	鉢	土器底			丸窓		縫合上口沿	赤褐色(10YR5/6)	微小に砂粒含む	直
18	1-L-中央	鉢	土器底			丸窓、或文、片シテテ		縫合上口沿	褐色(10YR5/6)	微小に砂粒含む	直
19	10-T	鉢	土器底			丸窓、或文、片シテテ		縫合上口沿	褐色(10YR5/6)	微小に砂粒含む	直
20	10-E	鉢	土器底			丸窓、或文、片シテテ		縫合上口沿	褐色(10YR5/6)	微小に砂粒含む	直
21	9-P	鉢	土器底			丸窓		縫合上口沿	褐色(5.5YR5/6)	微小に砂粒含む	直
22	7-P	鉢	土器底			丸窓		縫合上口沿	褐色(5.5YR5/6)	微小に砂粒含む	直



第33図 遺構外出土遺物(2)

第32表 遺構外出土遺物(2)

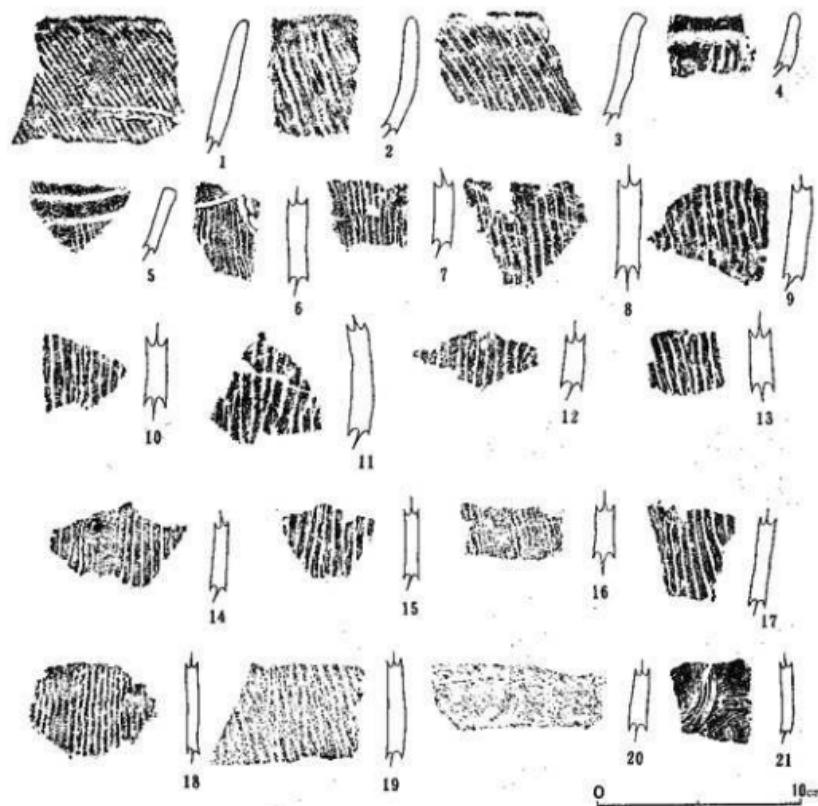
番号	出土場所	形態	基部	表面	断面	内面	外形	化 素	基 本	種 類
1	6-6-1	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦
2	6-6-2	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦
3	6-6-3	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦
4	6-6-4	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦
5	7-2-1	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦
6	7-2-2	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦
7	7-2-3	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦
8	7-2-4	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦
9	7-2-5	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦
10	7-2-6	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦
11	7-2-7	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦
12	7-2-8	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦
13	7-2-9	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦
14	7-2-10	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦
15	7-2-11	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦
16	7-2-12	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦
17	7-2-13	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦
18	7-2-14	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦
19	7-2-15	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦
20	7-2-16	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦
21	7-2-17	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦
22	7-2-18	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦
23	7-2-19	縦	U字形	直	直	直	縦	縦	縦	縦



第34図 造構外出土遺物(3)

第33表 造構外出土遺物(3)

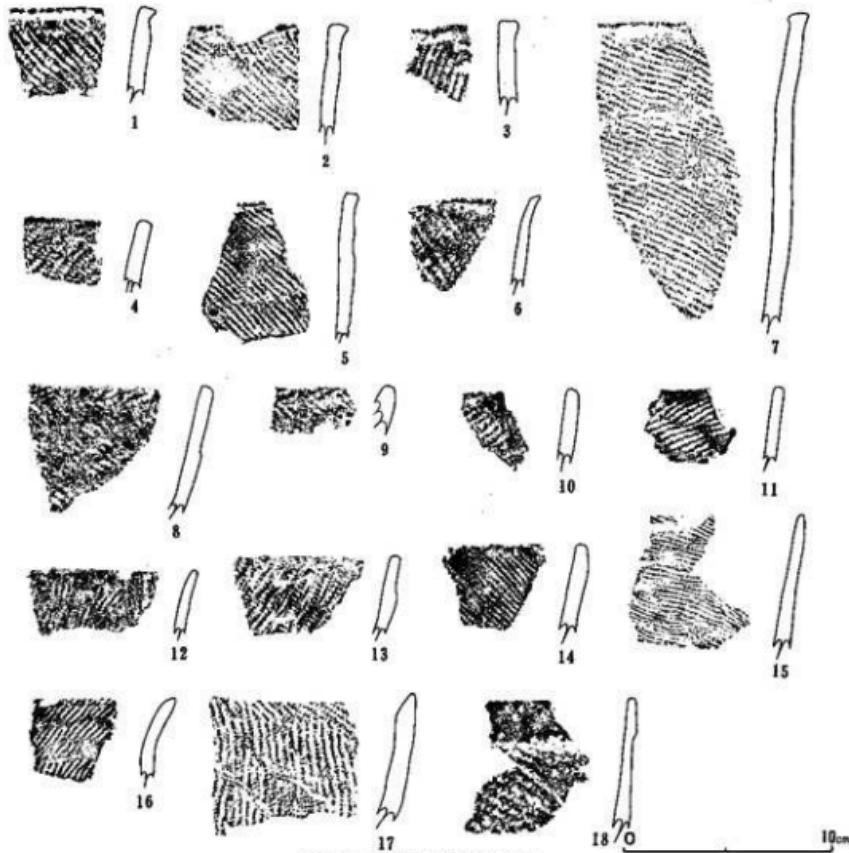
番号	出土地點	形狀	部	寸法	材質	調査(地文)	成形	色	測量	備考
1	9-T	片	山城部			Kの断子目地構造文	削み上り法	黒褐色～10YR 4/6		側面に斜面を含む 直角
2	7-P	片	山城部			Kの断子目地構造文	削み上り法	黒褐色～10YR 4/6		側面に斜面を含む 直角
3	6-K	片	山城部			Kの断子目地構造文	削み上り法	深褐色～10YR 4/6		側面に斜面を含む 直角
4	5-L	片	山城部			Kの断子目地構造文	削み上り法	黒褐色～10YR 4/6		側面に斜面を含む 直角
5	16-Q	棒	山城部			Kの断子目地構造文	削み上り法	黒褐色～10YR 4/6		側面に斜面を含む 直角
6	8-R	片	駆			Kの断子目地構造文	削み上り法	深褐色～10YR 4/6～10YR 5/2		側面に斜面を含む 直角
7	9-T	片	駆			Kの断子目地構造文	削み上り法	深褐色～10YR 4/6～10YR 5/2		側面に斜面を含む 直角
8	1-S	片	駆			Kの断子目地構造文	削み上り法	黒褐色～10YR 4/6		側面に斜面を含む 直角
9	10-H	片	駆			Kの断子目地構造文	削み上り法	黒褐色～10YR 4/6		側面に斜面を含む 直角
10	12-Q	片	駆			Kの断子目地構造文	削み上り法	黒褐色～10YR 4/6		側面に斜面を含む 直角
11	9-B	片	駆			Kの断子目地構造文	削み上り法	10YR 5/6～浅褐色～10YR 4/6		側面に斜面を含む 直角
12	8-B	片	駆			Kの断子目地構造文	削み上り法	10YR 5/6～浅褐色～10YR 4/6～10YR 5/2		側面に斜面を含む 直角
13	15-P	片	駆			Kの断子目地構造文	削み上り法	灰白色～10YR 6/6		側面に斜面を含む 直角



第35図 遺構外出土遺物(4)

第34表 遺構外出土遺物(4)

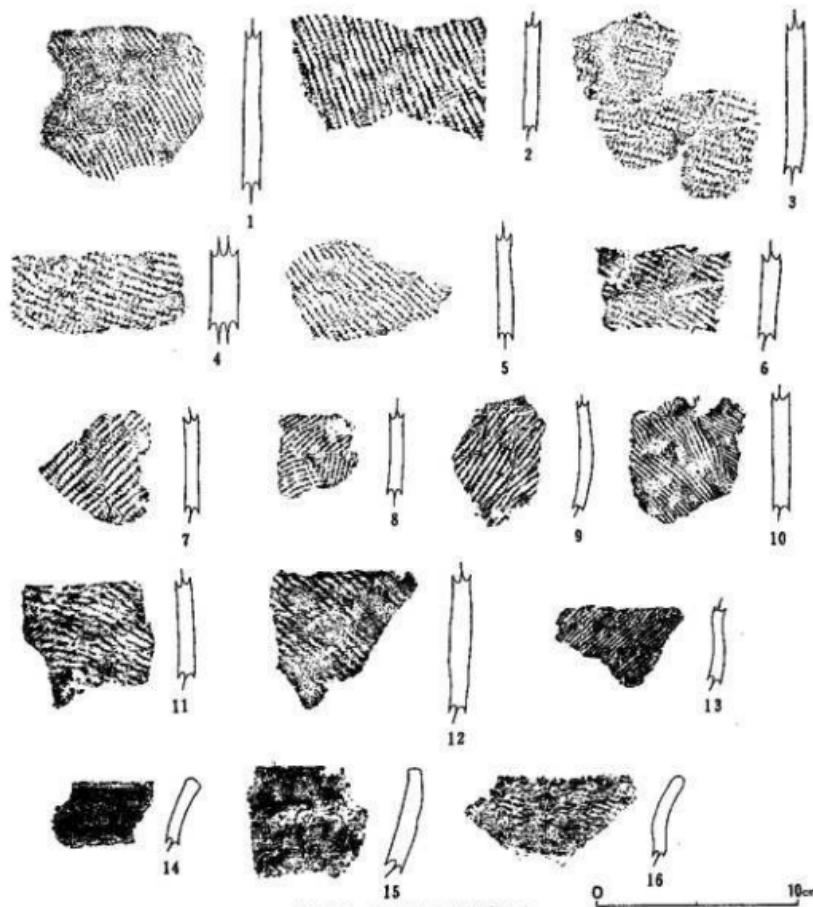
樹種番号	出土地点	形態	性状	結果(%)		調査期	年令	成木	生測	種子	葉
				固形	液体						
1	24-7	裸	白樺	褐色	黄色	スギ原	100	無上付根	生根褐色 - 7.5% (8%)	砂利を含む	直立
2	4-7	裸	白樺	褐色	褐色	黄褐色	100	無上付根	浅褐色 - 10% (8%)	砂利を含む	直立
3	9-11	裸	白樺	褐色	褐色	黄褐色	100	無上付根	浅褐色 - 30% (25%)	砂利を含む	直立
4	9-11	裸	白樺	褐色	褐色	黄褐色	100	無上付根	浅褐色 - 30% (25%)	砂利を含む	直立
5	9-11	裸	白樺	褐色	褐色	黄褐色	100	無上付根	浅褐色 - 30% (25%)	砂利を含む	直立
6	7-7	裸	白樺	褐色	褐色	黄褐色	100	無上付根	浅褐色 - 30% (25%)	砂利を含む	直立
7	2-7	裸	白樺	褐色	褐色	黄褐色	100	無上付根	浅褐色 - 30% (25%)	砂利を含む	直立
8	4-11	裸	白樺	褐色	褐色	黄褐色	100	無上付根	浅褐色 - 30% (25%)	砂利を含む	直立
9	4-1	裸	白樺	褐色	褐色	黄褐色	100	無上付根	浅褐色 - 17.5% (15%)	砂利を含む	直立
10	4-1	裸	白樺	褐色	褐色	黄褐色	100	無上付根	浅褐色 - 17.5% (15%)	砂利を含む	直立
11	4-11	裸	白樺	褐色	褐色	黄褐色	100	無上付根	浅褐色 - 17.5% (15%)	砂利を含む	直立
12	6-11	裸	白樺	褐色	褐色	黄褐色	100	無上付根	浅褐色 - 17.5% (15%)	砂利を含む	直立
13	4-11	裸	白樺	褐色	褐色	黄褐色	100	無上付根	浅褐色 - 17.5% (15%)	砂利を含む	直立
14	6-11	裸	白樺	褐色	褐色	黄褐色	100	無上付根	浅褐色 - 17.5% (15%)	砂利を含む	直立
15	6-11	裸	白樺	褐色	褐色	黄褐色	100	無上付根	浅褐色 - 17.5% (15%)	砂利を含む	直立
16	7-7	裸	白樺	褐色	褐色	黄褐色	100	無上付根	浅褐色 - 17.5% (15%)	砂利を含む	直立
17	2-1	裸	白樺	褐色	褐色	黄褐色	100	無上付根	浅褐色 - 17.5% (15%)	砂利を含む	直立
18	6-11	裸	白樺	褐色	褐色	黄褐色	100	無上付根	浅褐色 - 17.5% (15%)	砂利を含む	直立
19	10-11	裸	白樺	褐色	褐色	黄褐色	100	無上付根	浅褐色 - 17.5% (15%)	砂利を含む	直立
20	8-11	裸	白樺	褐色	褐色	黄褐色	100	無上付根	浅褐色 - 17.5% (15%)	砂利を含む	直立
21	9-11	裸	白樺	褐色	褐色	黄褐色	100	無上付根	浅褐色 - 17.5% (15%)	砂利を含む	直立



第36図 造構外出土遺物(5)

第35表 造構外出土遺物(5)

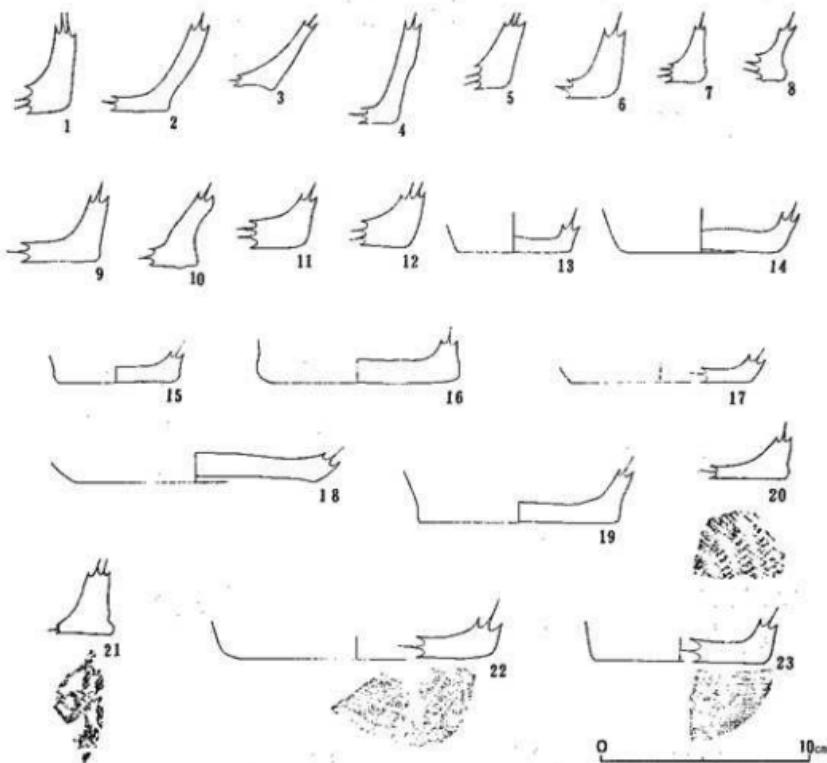
品番	出土場所	種類	基盤	経年 (cm)				測定 (cm)	内面	形状	名	出土地	備考	
				日付	高さ	幅	厚さ							
1	M-R	骨	口	骨	35				横丸、L字クリ、スラッシュ	棒状上部部	U字形側面 (10YR 8/2)	骨に鉈形を含む	直	
2	15-17	骨	口	骨	35				丸丸、L字クリ、スラッシュ	棒状上部部	U字形側面 (17.5YR 8/2)	骨に鉈形を含む	直	
3	14-15	骨	口	骨	35				丸丸、L字クリ	棒状上部部	U字形側面 (17.5YR 8/2)	骨に鉈形を含む	直	
4	16-17	骨	口	骨	35				丸丸、スラッシュ、S入付面	棒状上部部	U字形側面 (17.5YR 8/2)	骨に鉈形を含む	直	
5	16-17	骨	口	骨	35				丸丸、L字クリ	棒状上部部	U字形側面 (18YR 8/2)	骨に鉈形を含む	直	
6	4-5	骨	口	骨	35				丸丸、?	棒状上部部	U字形側面 (17.5YR 8/2)	骨に鉈形を含む	直	
7	15-17	骨	口	骨	35				丸丸、L字クリ、丸丸付面	棒状上部部	U字形側面 (16.5YR 17.5YR 8/2)	骨に鉈形を含む	直	
8	5-6	骨	口	骨	35				丸丸、?	棒状上部部	U字形側面 (17.5YR 8/2)	骨に鉈形を含む	直	
9	1-2	骨	口	骨	35				丸丸、?	棒状上部部	U字形側面 (17.5YR 8/2)	骨に鉈形を含む	直	
10	7-8	骨	口	骨	35				丸丸、?	棒状上部部	U字形側面 (17.5YR 8/2)	骨に鉈形を含む	直	
11	9-10	骨	口	骨	35				丸丸、L字クリ	棒状上部部	U字形側面 (16.5YR 8/2)	骨に鉈形を含む	直	
12	10-11	骨	口	骨	35				丸丸、?	棒状上部部	U字形側面 (17.5YR 8/2)	骨に鉈形を含む	直	
13	11-12	骨	口	骨	35				丸丸、?	棒状上部部	U字形側面 (17.5YR 8/2)	骨に鉈形を含む	直	
14	12-13	骨	口	骨	35				丸丸、?	棒状上部部	U字形側面 (17.5YR 8/2)	骨に鉈形を含む	直	
15	13-14	骨	口	骨	35				丸丸、?	棒状上部部	U字形側面 (17.5YR 8/2)	骨に鉈形を含む	直	
16	14-15	骨	口	骨	35				丸丸、?	棒状上部部	U字形側面 (17.5YR 8/2)	骨に鉈形を含む	直	
17	15-16	骨	口	骨	35				丸丸、L字クリ	棒状上部部	U字形側面 (17.5YR 8/2)	骨に鉈形を含む	直	
18	16-17	骨	口	骨	35				丸丸、?	棒状上部部	U字形側面 (17.5YR 8/2)	骨に鉈形を含む	直	
19	5-6	骨	口	骨	35				丸丸、?	棒状上部部	U字形側面 (17.5YR 8/2)	骨に鉈形を含む	直	



第37図 遺構外出土遺物(6)

第36表 遺構外出土遺物(6)

件番 番号	出土場所 出土地点	種類 種類	部 位 部位	寸 尺 (cm)		測 量 (cm)		式 形 形 状	色 調 色 調	形 狀 形 狀	備 考 備 考
				直 径 直徑	厚 度 厚度	外 周 周長	内 周 周長				
1	14-U	骨 骨	頭 頭			頭丸, L頭テア	ナナ	棒丸上付法	淡黃褐色～紅褐色(7.5YR 4/5 - 10YR 5/5)	頭丸に斜削を含む	頭丸
2	14-S	骨 骨	頭 頭			頭丸, L頭テア	ナナ	棒丸上付法	淡黃褐色(10YR 4/5)	頭丸に斜削を含む	頭丸
3	4-P	骨 骨	頭 頭			頭丸, L頭テア	ナナ	棒丸上付法	淡黃褐色(10YR 4/5)	頭丸に斜削を含む	頭丸
4	7-P	骨 骨	頭 頭			頭丸, L頭テア	ナナ	棒丸上付法	淡黃褐色(7.5YR 4/5)	頭丸に斜削を含む	頭丸
5	12-P	骨 骨	頭 頭			頭丸, L頭テア	ナナ	棒丸上付法	淡黃褐色(7.5YR 4/5)	頭丸に斜削を含む	頭丸
6	3-S	骨 骨	頭 頭			頭丸, L頭テア	ナナ	棒丸上付法	淡黃褐色(10YR 4/5)	頭丸に斜削を含む	頭丸
7	3-P	骨 骨	頭 頭			頭丸, L頭テコ	ナナ	棒丸上付法	淡黃褐色(10YR 4/5)	頭丸に斜削を含む	頭丸
8	9-T	骨 骨	頭 頭			頭丸, *	ナナ	棒丸上付法	淡黃褐色(10YR 4/5)	頭丸に斜削を含む	頭丸
9	12-R	骨 骨	頭 頭			頭丸, L頭テア	ナナ	棒丸上付法	淡黃褐色(7.5YR 4/5)	頭丸に斜削を含む	頭丸
10	7-R	骨 骨	頭 頭			頭丸, H1, H2	ナナ	棒丸上付法	淡黃褐色(7.5YR 4/5)	頭丸に斜削を含む	頭丸
11	9-R	骨 骨	頭 頭			頭丸, L頭テア	ナナ	棒丸上付法	淡黃褐色(7.5YR 4/5)	頭丸に斜削を含む	頭丸
12	7-P	骨 骨	頭 頭			頭丸, L頭テア	ナナ	棒丸上付法	淡黃褐色(10YR 4/5)	頭丸に斜削を含む	頭丸
13	9-T	骨 骨	頭 頭			頭丸, ?	ナナ	棒丸上付法	淡黃褐色(10YR 4/5)	頭丸に斜削を含む	頭丸
14	14-S	骨 骨	頭 頭			頭丸, 2分身	ナナ	棒丸上付法	淡黃褐色(10YR 4/5)	頭丸に斜削を含む	頭丸
15	6-P	骨 骨	頭 頭			頭丸, 2分身	ナナ	棒丸上付法	淡黃褐色～黑色(10YR 4/5 - 10R 5/5)	頭丸に斜削を含む	頭丸
16	9	骨 骨	頭 頭			頭丸	ナナ	棒丸上付法	淡黃褐色(10YR 4/5)	頭丸に斜削を含む	頭丸



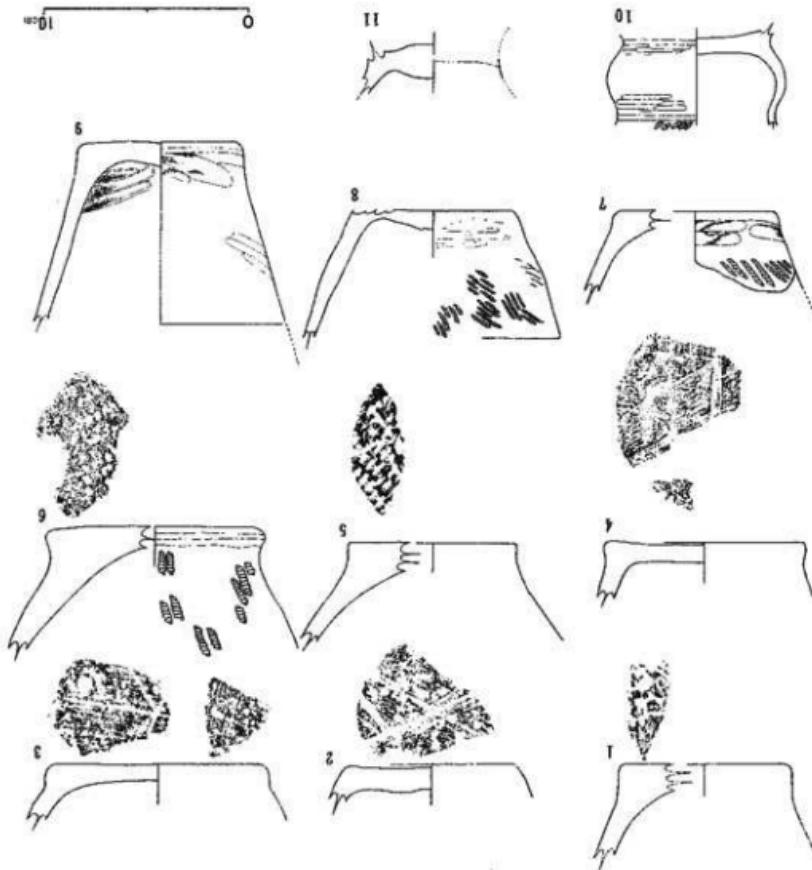
第38図 遺構外出土遺物(7)

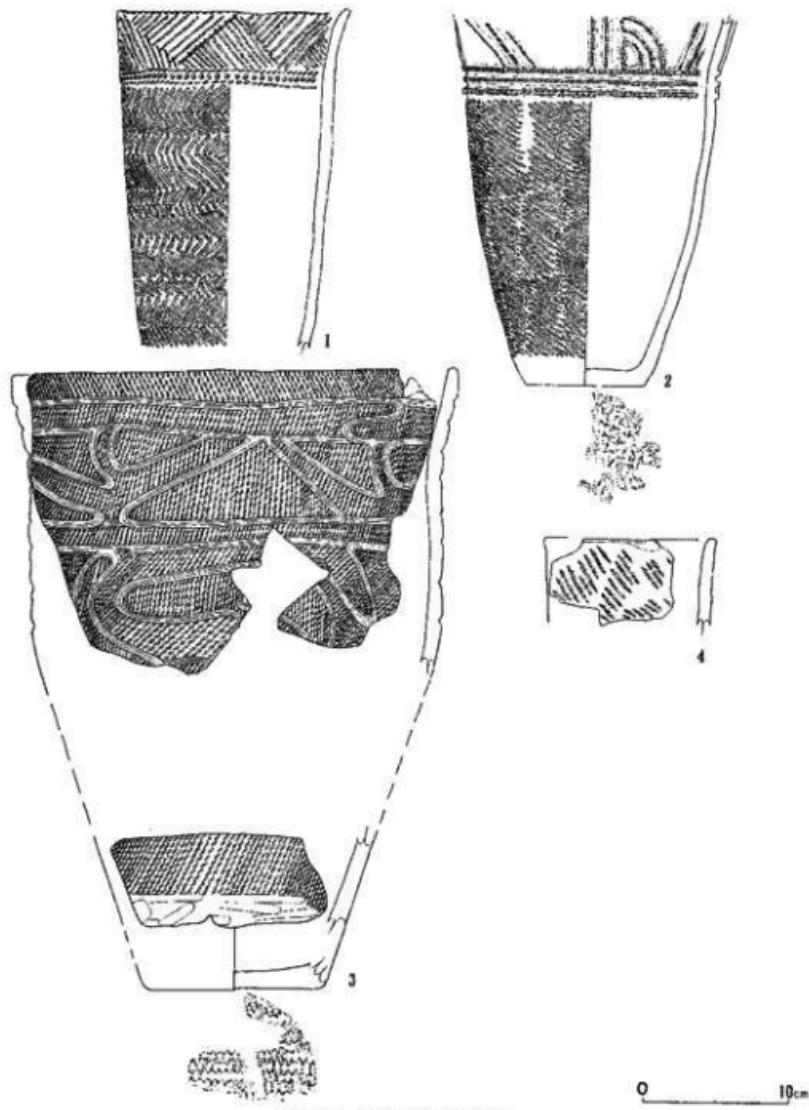
第37表 遺構外出土遺物(7)

品番	出土場所	形・質	底	縁	内面	外側									
1	3-5	器	丸底	直縁	素面	素面									
2	3-7	器	丸底	直縁	素面	素面									
3	3-8-T	器	浅底	直縁	素面	素面									
4	3-8-T	器	浅底	直縁	素面	素面									
5	20-T	器	浅底	直縁	素面	素面									
6	19-T	器	浅底	直縁	素面	素面									
7	21-T	器	浅底	直縁	素面	素面									
8	14-T	器	浅底	直縁	素面	素面									
9	4-X	器	丸底	直縁	素面	素面									
10	5-X	器	丸底	直縁	素面	素面									
11	5-X	器	丸底	直縁	素面	素面									
12	10-T	器	浅底	直縁	素面	素面									
13	5-X	小形器	浅底	直縁	素面	素面									
14	-	器	浅底	直縁	素面	素面									
15	8-X	器	丸底	直縁	素面	素面									
16	8-X	器	丸底	直縁	素面	素面									
17	6-X	器	丸底	直縁	素面	素面									
18	14-X	器	丸底	直縁	素面	素面									
19	14-X	器	丸底	直縁	素面	素面									
20	12-X	器	丸底	直縁	素面	素面									
21	12-X	器	丸底	直縁	素面	素面									
22	6-T	器	浅底	直縁	素面	素面									
23	6-T	器	浅底	直縁	素面	素面									

第38集 聖經長卷王記(8)

第37圖 磁鐵外出土遺物(8)

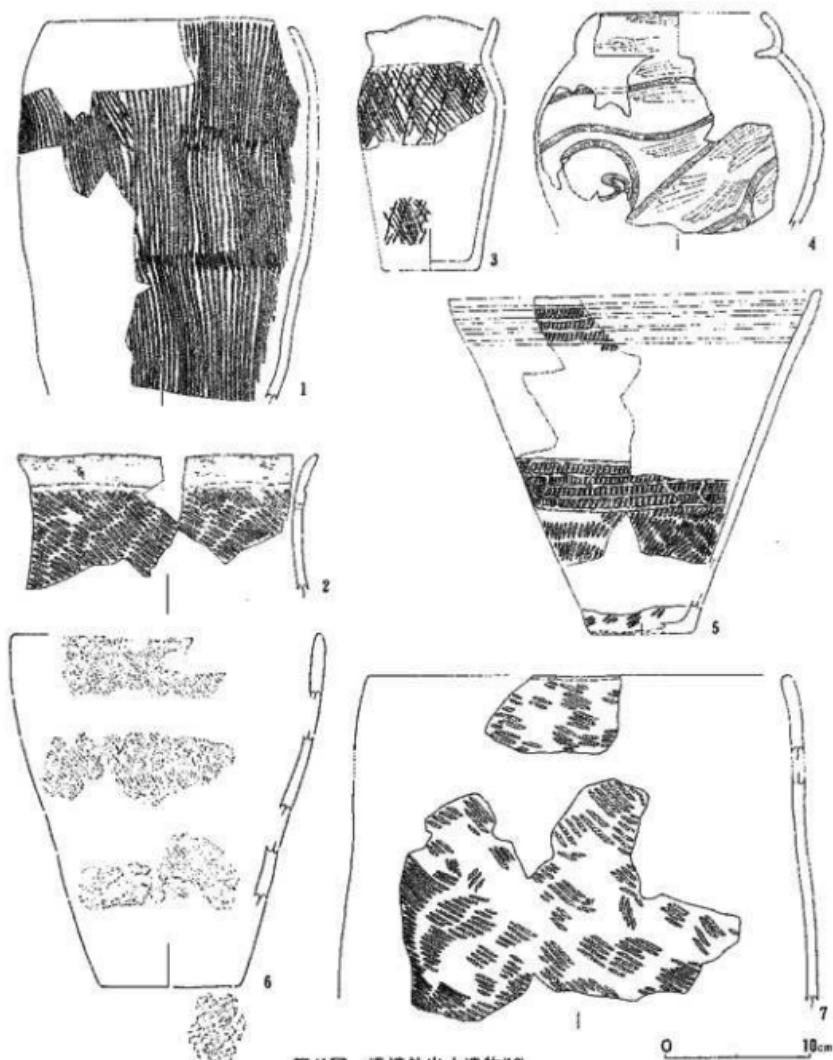




第40図 遺構外出土遺物(9)

第39表 遺構外出土遺物(9)

品目	所持者	件名	年月日	出土地点	地層	形	大きさ	材質	特徴
1	（略）	（略）	（略）	（略）	（略）	（略）	（略）	（略）	（略）
2	（略）	（略）	（略）	（略）	（略）	（略）	（略）	（略）	（略）
3	（略）	（略）	（略）	（略）	（略）	（略）	（略）	（略）	（略）
4	（略）	（略）	（略）	（略）	（略）	（略）	（略）	（略）	（略）



第41図 遺構外出土遺物(10)

第40表 遺構外出土遺物(10)

番号	出土地点	器種	形	寸	目	記	内面	底	蓋	縁
1	11-1-10	壺	直筒	17.4	1	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點
2	11-1-10	壺	直筒	16.0	2	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點
3	11-1-10	壺	直筒	16.0	3	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點
4	11-1-10	壺	直筒	17.0	4	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點
5	11-1-10	壺	直筒	17.0	5	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點
6	11-1-10	壺	直筒	17.0	6	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點
7	11-1-10	壺	直筒	17.0	7	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點	内面有毛髮及灰褐色斑點

系文であるのに対して、第2類は格子目状の撚糸文が施され、原体はどちらも日が多い。第10回21、第29回3が示すように、前者が口縁以下全面に施されるのにに対して、後者では口縁が波状を呈し無文化されている。こうした例から、第2類の格子目状撚糸文が施された土器は、単に平行な撚糸文が施された土器よりも、より装飾的な効果をもたらした土器との推察もできるであろう。

後期に出土するこの種の撚糸文を多用する土器は、後期にあっても早い時期に出現するのが通例である。この点からすれば、第3類の全面繩文を施す土器との比較でも、およそ第1類、第2類を第II群土器に伴う粗製土器、第3類を第III群のそれと対比できるだろう。

ただし、後期の早い時期にも繩文の施文により作られる粗製土器が全くない訳ではなく、第3類中折返し口縁をもつ深鉢などは第II群に伴った可能性がある。

第4類土器は、その器形上の変化の多さから本末精製土器の範疇に入れられるべきものであろうが、後期の中での時期の特定は難しい。

石器

大きく分けて打製の剥片及び剝片を素材に用いた石器、磨製の石器、自然礫から使用された結果の疊石器の3種がある。剝片を用いた石器は石材に頁岩を選んでいるが、稀には黒曜石も用いられる。

石鎌（第42図1、第52図2・4、第89図2）

4点出土している。石質は黒曜石、頁岩である。有茎のもの2点、無茎のもの2点、画面から付念な調整剝離が施されるが、一部に素材となった第1次剝片の剝離面を残す場合もある。

石匙（第5図1・2）

2点出土している。石質は頁岩。楕形、横形とも1点ずつの出土である。素材剝片の主要剝離面には、つまみ部の作出のためを除いて殆ど調整剝離は施されない。表面はほぼ全周に亘って刃部作出のための調整剝離がなされる。

搔器（第8図13、第42図2～11、第52図1）

12点出土している。石質は頁岩及び黒曜石である。おおむね3つの形態に分類できる。1つは、比較的幅の広い肉厚の剝片を素材に用い、ほぼ全周に刃部作出のための調整剝離を施したもの（第8図13、第42図2・3）、もう1つは、素材に細長の剝片を用いその側縁に調整剝離を加えたもの（第42図4～7）さらにもう1つは、素材の剝片の形状を殆ど変えずに、僅かに刃部として使用する箇所にのみ部分的な調整剝離を加えたもの（第42図8～11、第52図1）である。このうち、第1の類は最も形態が整い、ヘラ状ないしはラウンド・スクレイバーと形容し得る形状を呈すが調整剝離による加工は素材表面に限られ、打面主要剝離面はそのまま残る。この点

が両面加工の所謂通常のヘラ状石器と異なる。また第2の類では調整剝離が側縁に施されるため、上下両端または片方の端が鋸く尖るものがある。これらはその使用状態にあっては、搔器というよりもむしろ刺突を目的としていた可能性もある。第3の類は搔器とするよりは、僅かに調整剝離が加えられたリタッチド・フレイクとした方が妥当かも知れない。さらに使用痕の観察如何によっては、素材の調整部分が刃部とは限らないものも含まれている可能性もある。

剥片（第8図14、第15図2、第43図、第44図、第52図3、第74図1・2、第80図7）

石質は全て頁岩である。大きく見れば縦長の剥片と横長のものに分けられる。そのままで道具として使用したと思われる剥片もあり、それについては剥片の縁辺に刃こぼれ痕が観察できる。

磨製石斧（第11図9、第15図1、第45図1・2・3、第73図4・5、第101図）

石材としては凝灰岩、礫岩、緑泥片岩を用いている。緑泥片岩製の石斧では石材の節理による亀裂が全面に残る。刃部がかなり緩い直線的な円弧を描くもの（第11図9、第15図1、第45図2、第101図）ときつい円弧を描くもの（第73図5）とに分けられる。前者では断面形は扁平で、本体に陵線が残る。大きさは全長が10cm前後である。後者では断面形はかなり丸くなり、陵線も明瞭なものは残らない。また大きさも、欠損していく確実なところは解らないが、基部の残存するもの（第73図4）等からするとかなり大形になると思われる。その他、製作の過程を知り得る資料として擦り切り法による半製品（第45図1）がある。

砾石器として取り上げるのは磨石、凹石、石皿である。

磨石（第20図2、第89図1・3）

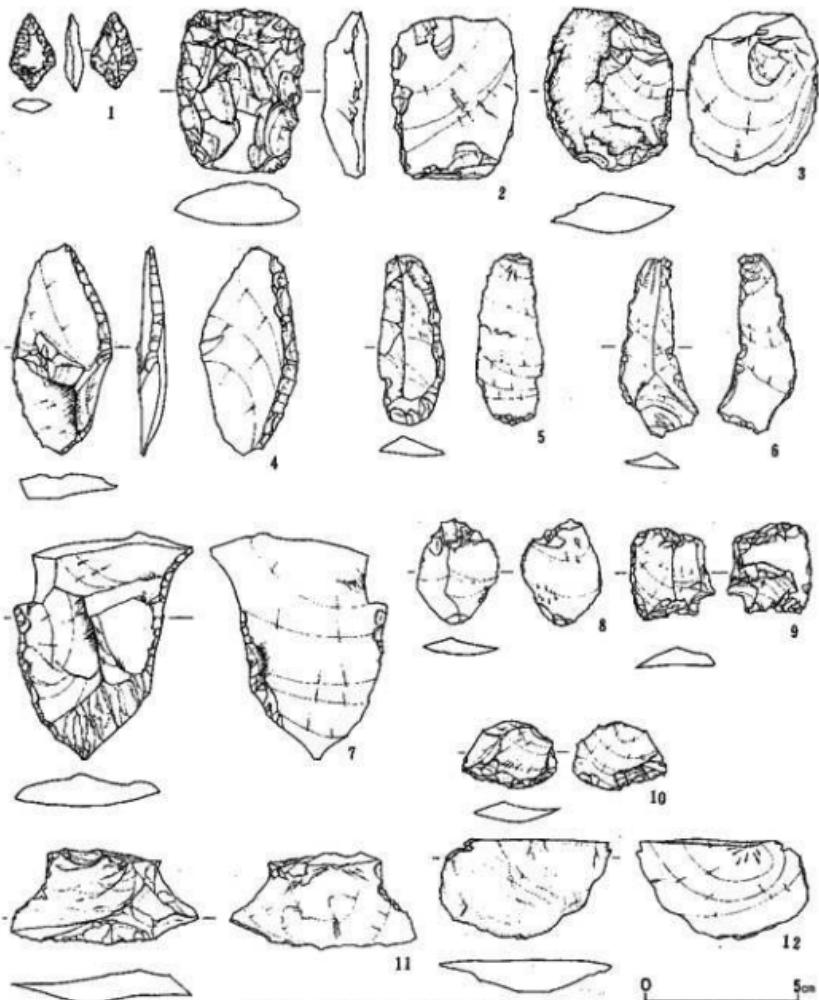
安山岩製である。円礫を用いるが、部分的に比較的平坦な面が認められ、その部分がよく磨かれているようである。また一部に敲打痕を残すものもある。

凹石（第45図4）

安山岩製。片面に2箇所、他面に1箇所敲打による凹みが認められる。凹みはさ程深いものではない。

石皿（第20図1）

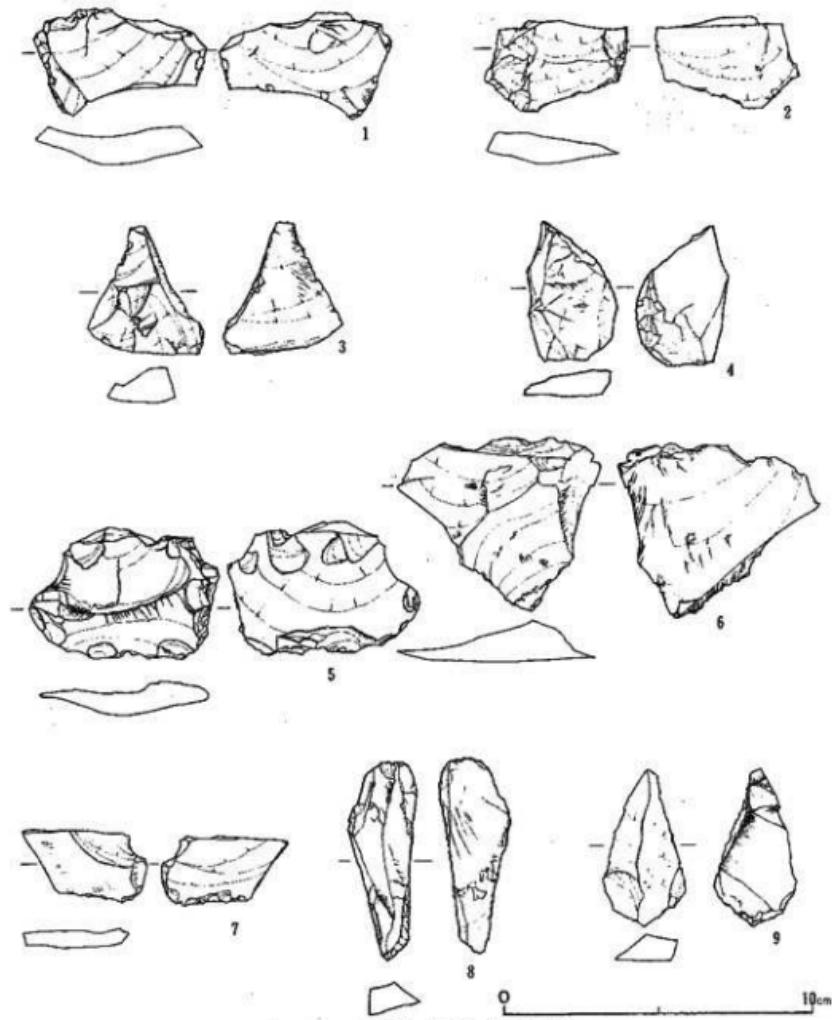
安山岩製。表裏両面が皿面として用いられ四んでいる。側面は素材の礫の自然面を残しておらず、整形された痕跡は認められない。第20図2の磨石とともに出土しており、両者がセットで使用された可能性がある。



第42図 遺構外出土遺物（石器）(1)

第41表 遺構外出土遺物（石器）(1)

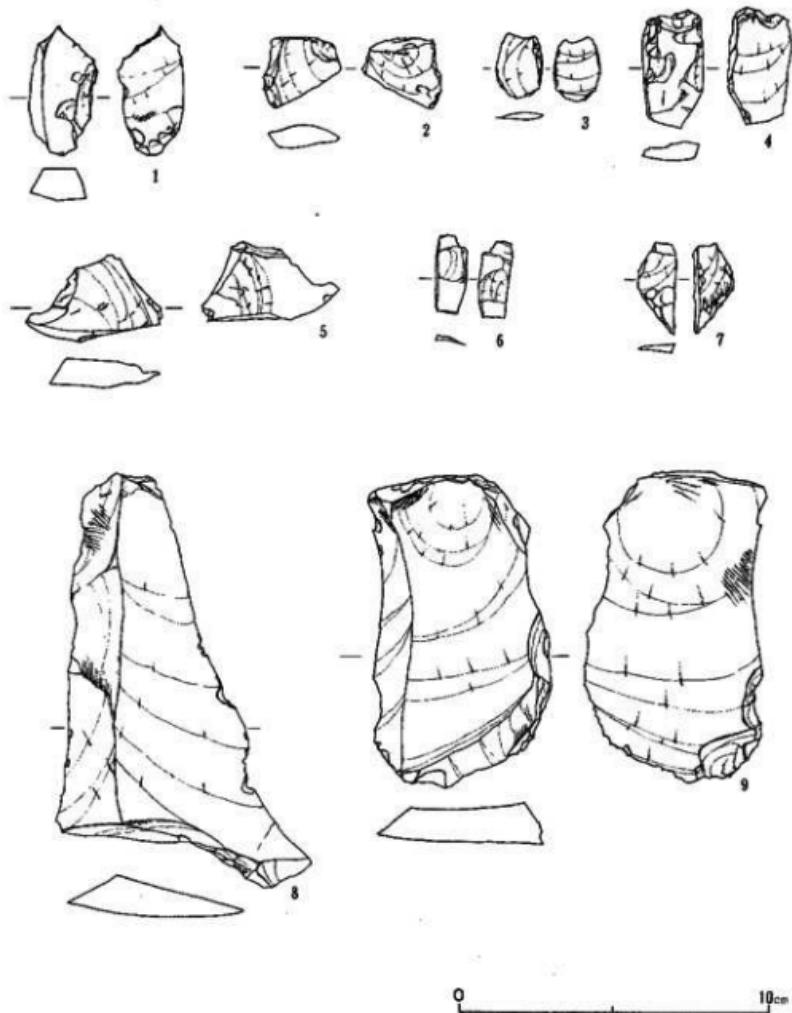
種別番号	出土地点	地	種	比率(%)				基	質
				打	削	磨	刮		
1	8 - /	白	石器	2.3	1.5	0.5	1.8	骨面に錐痕となった剣の刃の頂上天然磨耗を作す。底盤の作例はまだ見当たらない。	
2	12 - P	緑	石器	5.1	4.1	1.2	4.6	果核削器の表面を加工したへん豆の石器。斜角の表面に天然磨耗を作出している。	
3	8 - 木(鷹木)	緑	石器	4.5	4.2	1.5	33.1	今後の分析、名様付石器に天然磨耗を残す。引出物には茅村大和が心に残る。	
4	8 - 9	白	石器	6.9	3.2	0.7	37.1	表面の上を運搬する二つの斜面を残す。天然磨耗を残す。光面が欠損。運搬の可能性もあり。	
5	14 - C	緑	石器	5.6	2.2	0.7	8.5	柄状の石器表面も走りながらにこの特徴により识别を伴出。茅村行蔵は拾得される。	
6	7 - 8	緑	石器	5.6	2.0	0.4	6.2	柄状削器の表面を走る二つの斜面。	
7	8 - B	白	石器	7.2	6.2	1.8	0.8	丸形石器に自然磨耗を残す。神社の一次石器。基部「打痕」は無れ。	
8	17 - P	緑	石器	3.5	2.5	0.6	1.2	名村義重が岩面に残す二つの斜面。表面磨耗はシリフラクティアとなる。	
9	12 - B	緑	石器	2.7	3.0	0.5	8.7	高村義重が岩面に二つの斜面を残す可能作。	
10	7 - P	緑	石器	2.2	2.0	0.6	3.5	森村義重が岩面に二つの斜面を残す可能作。	
11	6 - L	緑	石器	3.2	5.2	1.3	20.3	かなり削減しているが、表面に走る二つの斜面。	
12	4 - K	樹	石器	3.3	3.5	1.0	16.3	表面に自然磨耗を残す。神社に心に残る。	



第43図 遺構外出土遺物(石器)(2)

第42表 遺構外出土遺物(石器)(2)

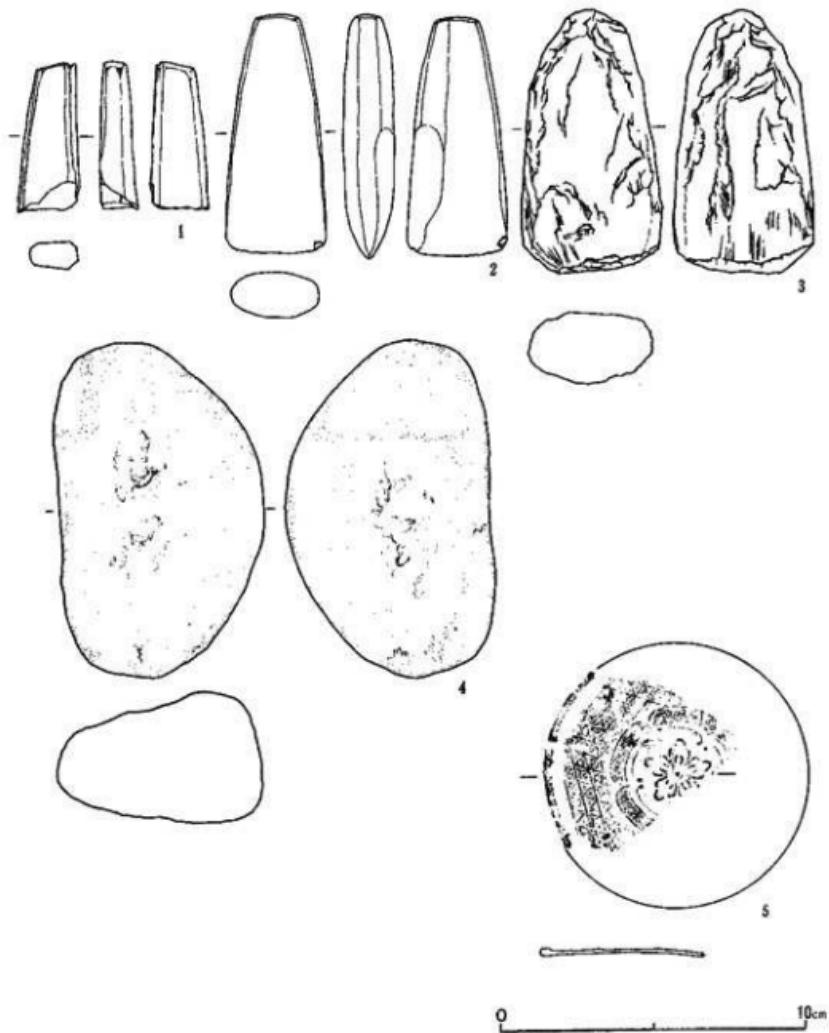
測定番号	出土場所	器種	各部	長さ(横)	幅(縦)	厚さ	重さ	目	
								1	2
1	14-8	刮削器	片面	2.2	5.6	1.8	16.3	表面は右側面にわずかに凹出する。	
2	11-5	刮削器	片面	2.9	4.2	1.2	12.4	表面がやいが、端面部はわずかに不規則に削られる。打刃部は直角。	
3	5-T	刮削器	片面	4.0	3.7	1.1	12.2	右側面に直角面が残る。左端に一点打刃部を認められる。	
4	6-R	刮削器	片面	4.7	3.5	0.8	31.7	表面は直角面を残す。	
5	6-R	刮削器	片面	4.4	6.5	0.9	26.6	表面は直角面を残る。下端が平らとして傾いた形のためか、齊張している。	
6	12-17	刮削器	片面	5.5	6.3	1.4	38.4		
7	14-R	刮削器	片面	2.1	2.5	0.9	6.3	表面は直角面を残る。底面下部前面に二次削面が起らる。	
8	6-14	刮削器	片面	6.4	2.2	0.7	31.6	表面は直角面を残る。	
9	2-10	刮削器	片面	3.2	2.4	1.1	12.1	表面は直角面を残る。	



第44図 遺構外出土遺物（石器）(3)

第43表 遺構外出土遺物（石器）(3)

標本番号	出土地点	器種	石質	長さ(縦)	幅(横)	厚さ	重量	説明
3	10-Q	刮削器	頁岩	4.2	2.1	1	9.6	表面下部に二次剥離が認められる。
2	12-H	刮削器	頁岩	2.0	2.0	0.8	5.0	表面は自然面を残している。剥離したへり状。
3	8-T	刮削器	頁岩	2.0	1.5	0.8	6.6	表面右辺に二次剥離が認められる。
4	8-T	刮削器	頁岩	2.8	1.9	0.7	6.3	
5	12-R	刮削器	頁岩	2.5	4.9	1.1	11.6	表面に自然面を残す。
6	8-T	刮削器	頁岩	1.5	1.0	0.4	0.8	表面に自然面を残す。
7	15-Q	刮削器	頁岩	3.0	1.1	0.6	1.6	表面左辺に二次剥離が認められる。
8	14-E	刮削器	頁岩	12.4	7.5	0.4	109.1	左右剥離が刀削として用いられたものか。左こぼれ端が認められる。
9	12-13-N	刮削器	頁岩	30.2	5.8	1.6	117.6	表面右下辺と表面右下辺に二次剥離が認められる。表面左辺は刀削として用いられたか。



第45図 遺構外出土遺物（石器）(4)

第44表 遺構外出土遺物（石器）(4)

番号	出土地点	形種	石質	長さ(幅)	厚さ	重さ	目		意
							厚さ	重さ	
1	6-O	磨製石斧	燧 砂岩	4.7	1.9	1.2	19.2	右刃面に握持り易勘の痕跡を認める。刃部のみ残存。	
2	12-K	磨製石斧	レキ 砂岩	7.0	3.2	1.5	66.4	刃部僅少に残存。	
3	9-N	磨製石斧	砂岩	8.8	4.5	2.3	138.3	両側縁及び基部は精良状態不存。刃部は精良で直しくかなり剥落している。	
4	8-S	四 角	石	11.1	6.8	4.1	347.0	片面に2箇所、他面に1箇所凹部が認められる。	
5	9-O	圓 刃	石	6.6cm	厚さ不明	中央部1.3mm	36.2g		

(2) 平安時代

遺構

平安時代の遺構としては、住居跡13棟を検出している。

これらの平安時代の住居跡は縄文時代の住居跡と異り、台地の縁辺部よりはむしろその内側、台地の中央に位置している。また南へ向う斜面上に位置しているため、確認面での南側の壁が北側の壁よりもかなり低いものになっているのは縄文時代の住居跡と同様である。

プランの確認はⅢ層黒色土の上面で行い得た。住居跡覆土には全体に多量の浮石が混入しており、黒色土の中であっても浮石の混入する住居跡覆土と住居外の土の識別は比較的容易であった。覆土中では土師器片、鉄器、木材とともにトチノ実、米、豆、茅、稻葉等の炭化した植物遺存体も多く検出された。また夥しい量の焼土が住居跡覆土中に堆積する例、床面が焼土化している例もあった。

住居跡の平面形態はおよそ方形であるが、第1号、第10号、第14号住居跡のように概して規模の大きな住居跡では四隅も明瞭な角をもつ。対して第6号、第9号、第2号住居跡のように規模の小さいものでは各壁ともやや湾曲し、隅丸方形に近い形態をとる。住居跡規模は最も小さな第12号住居跡で1辺がおよそ2.3m～2.5m、最も大きな第1号住居跡で5.0m～5.3mを測る。

各住居跡ともカマドを住居内にもつが、その位置は南壁が11棟と最も多く、東壁及び西壁に位置するものが各1棟づつある。カマドは袖部に芯材として河原石を用いている例が多く、その上を粘土で覆って本体部分を形作ったと思われる。また第6号住居跡のようにカマド本体中に小形の窓を倒立させて支脚として機能させた例もある。カヤド煙道部は第6号、第9号、第18号住居跡のように壁際からかなり急角度で立上る傾いものと、第1号、第10号、第11号、第17号、第19号住居跡のように比較的長いものとがある。

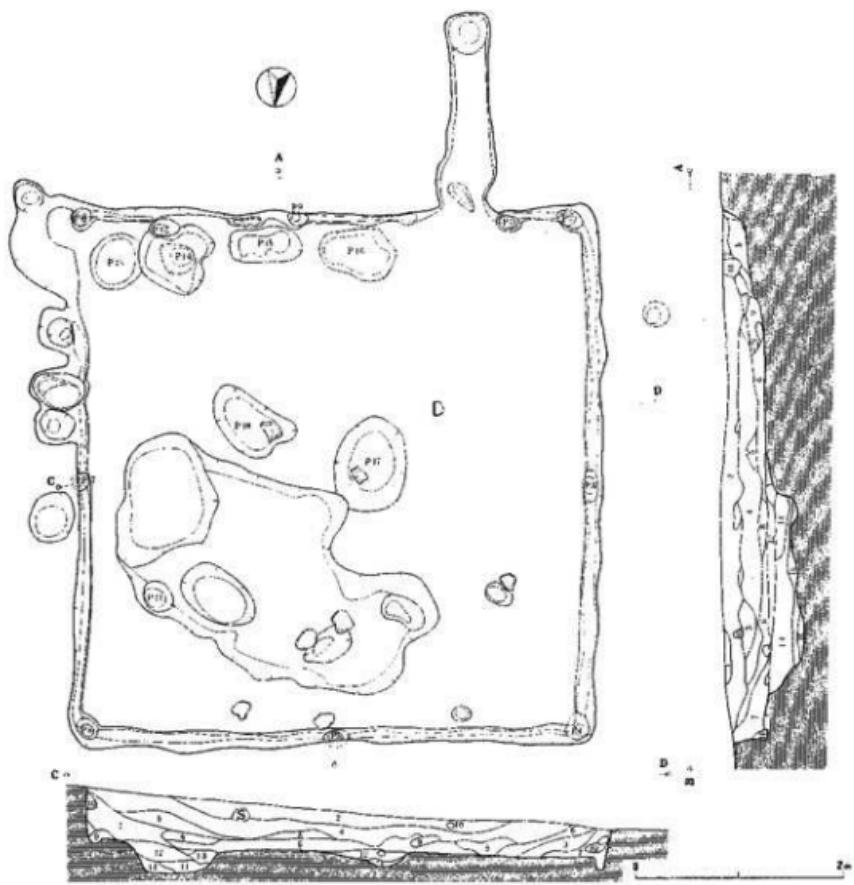
柱穴は、周溝のある住居跡では周溝内の四隅及びその中間位置に設けられる。周溝のない比較的小規模の小さな住居跡では明瞭な柱穴を住居跡内に検出することができなかった。また第11号住居跡のように、住居跡外に柱穴と思われるピットを何個所か設ける例もあり、扇部分を上屋構造にもっていた可能性もある。

床面は殆どが例外なく焼土化していることもあり、かなり良好な締った面として検出されている。住居構築時の底面がそのまま床面として使用され続けた例はなく、各住居跡とも焼土化している面と構築時の底面との間には数cmの差がある。この間には炭化物、焼土粒、土師器片等が混っており、比較的大きなピットがこの層によって覆われていることもある。

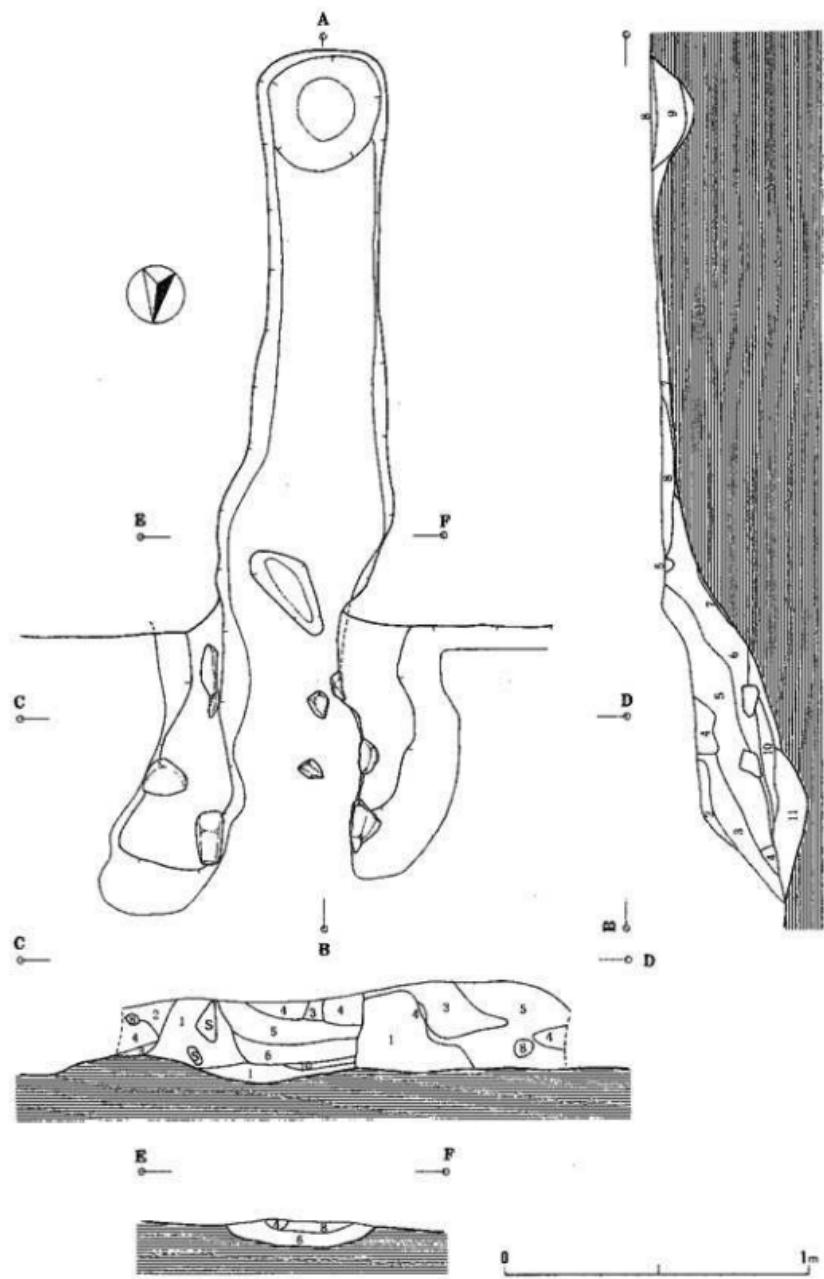
壁はほぼ垂直に掘り込まれている。第10号住居跡では壁面に沿い板材が用いられており、炭化した板材の埋め込まれた状態がよく観察された。—P300

第45表 S1001住居跡観察表

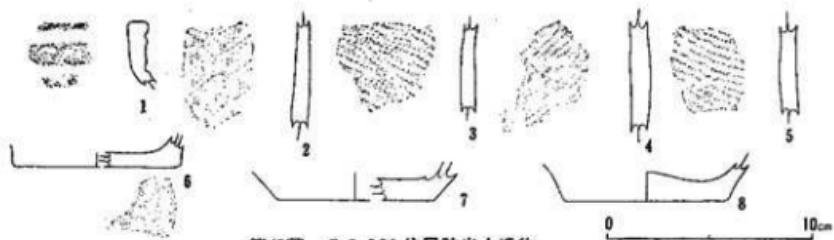
S1006住居跡		地図	57~60 図版	11, 12, 47
検出区	9-N, 10-N, 9-D, 10-D			
法	東壁	西壁	南面	北壁
壁長	3.18m	3.16m	3.19m	3.62m
壁高	44.5~66.0cm	9.0~34.0cm	11.7~38.7cm	41.2~63.7cm
量	周溝幅	5.0~12.0cm	8.0~16.0cm	
	周溝深	5.3~8.1cm	10.8~32.3cm	
	面積	10.88m ²		
主軸方位	N-102°-E	形態	方形	
四	土	1. 10Y R 3% 暗褐色 粘性弱 バミス糊く僅かに混入 炭化物僅かに混入 2. 10Y R 3% 暗褐色 粘性弱 1よりバミス量多い 炭化物僅かに混入 3. 10Y R 3% 黄褐色 粘性大 バミス殆ど混入しない ローム粒及び炭化物混入 4. 10Y R 3% 暗褐色 粘性大 バミス僅かに混入 ローム多量に混入 5. 10Y R 3% 黄褐色 粘性弱 バミス多量に含む ローム粒混入 6. 10Y R 3% 暗褐色 粘性弱 バミス混入量も多い 7. 10Y R 3% 暗褐色 粘性大 バミス殆ど混入しない 炭化物僅かに混入 8. 10Y R 3% 黄褐色 粘性大 バミス糊く僅かに混入 ローム粒多量に混入 9. 10Y R 3% 暗褐色 粘性大 バミス殆ど混入しない ローム粒多量に混入 炭化物僅かに含む 10. 10Y R 3% 黑褐色 粘性弱 バミス及び炭化物多量に混入 11. 10Y R 3% 黄褐色 粘性弱 ローム粒多量に混入 12. 7.5Y R 3% 黄褐色 粘性大 バミス及び糊上多量に混入		
壁	床	床面に対して93°~119.5°の範囲にある		
床	カマドを中心とする東側半分にかなり広く火床が広がっている			
周	溝	西壁の南側極く僅かと南壁の西側半分に見られるが、その他の面の検出はできなかった		
柱	穴	検出できなかった		
ビ	ゲ	P ₁ : 60×68×12.0 北側 P ₂ : 83×146×45.0 P ₁ の南西側 上器及び鍵器出土		
位	置	位置 東壁 南寄り		
力		1. 10Y R 3% 暗褐色 粘性中 孔隙中 径1~2mmのバミス20%混入 炭化物2%程混入 2. 10Y R 3% 黄褐色 粘性強 孔隙小 カマド形成土(上部) 3. 10Y R 3% にい黄褐色 粘性中 孔隙大 バミス含む 炭化物3%程混入 煙土粒ごく僅か混入 4. 10Y R 3% 暗褐色 粘性中 孔隙大 にい黄褐色±10%位含む バミス3%位含む 5. 7.5Y R 3% 黄褐色 粘性弱 孔隙小 バミス2%位含む 4との境に炭化物が2%位置に沿って入っている。 6. 10Y R 3% 黄褐色 粘性中 孔隙小 袖と思われる 7. 7.5Y R 3% 黄褐色 粘性中 孔隙小 繊土混入 8. 7.5Y R 3% 黄褐色 粘性中 孔隙小 硫土混入 9. 10Y R 3% 黄褐色 粘性強 孔隙小 カマド形成土		
マ		袖の部分の芯材として河原石が使用されていた。また支脚として高さ11cm程の土器が伏せておかれていた。標造部の傾斜は32°になっていた。袖の部分はあやまって掘りすぎてしまった。		
ド		遺物は住居内の北側半分に多く、とくに北東隅付近より多量に出土している。 炭化した筋の実が多数出土した。 支脚として用いられていた高さ11cm程の土器の裏が完型で出土している。		
備	考	この遺跡中の住居跡だけカマドが東向きであった		



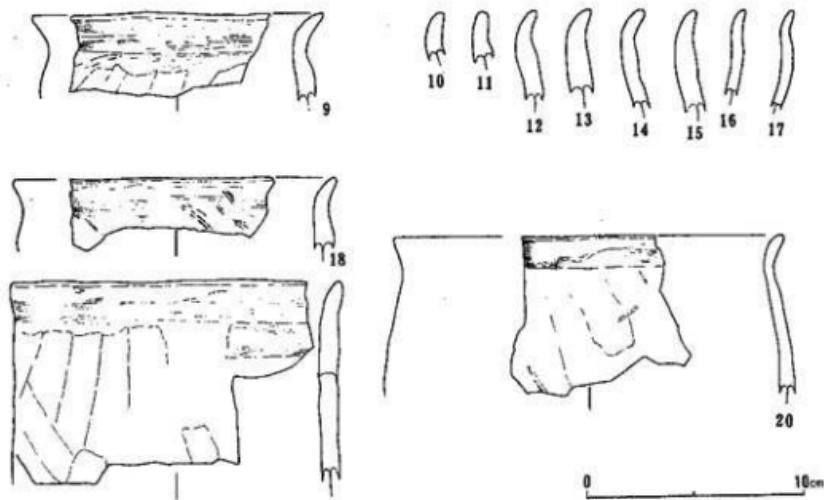
第46図 第1号住居跡



第47図 S I 001 住居跡カマド



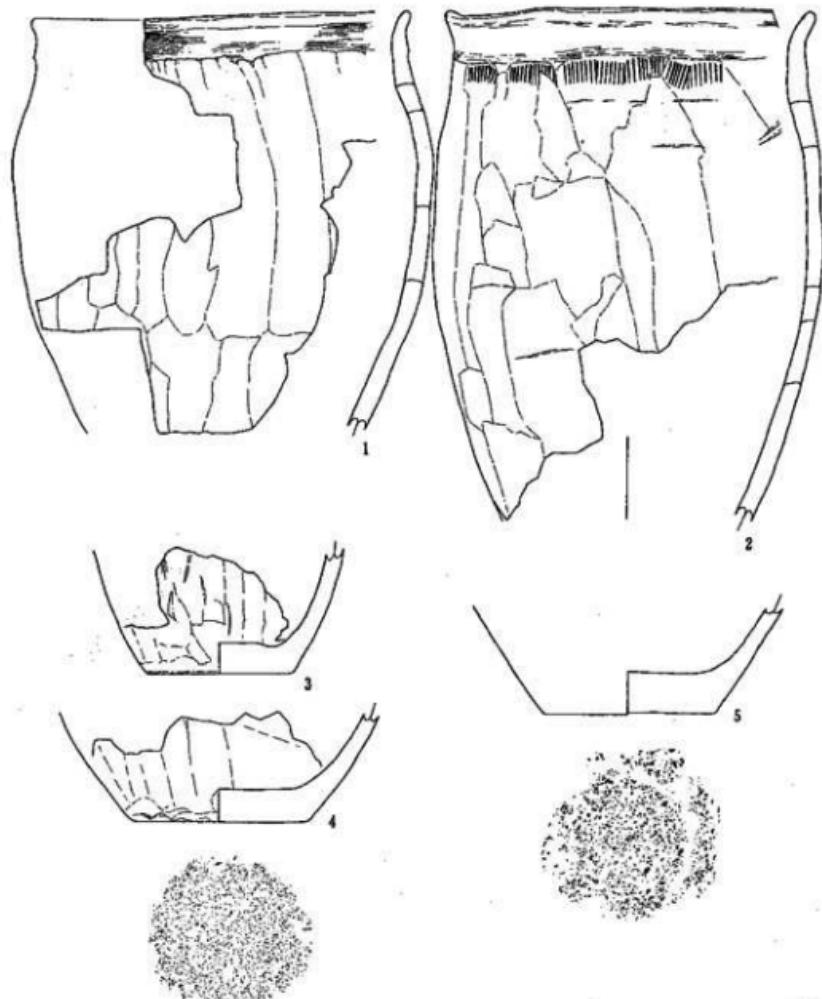
第48図 S I 001 住居跡出土遺物



第49図 S I 001 住居跡出土遺物(1)

第46表 S I 001 住居跡出土遺物(1)

件名	出土場所	器種	測量	寸法 (cm)		測量 (単位)	内 容	成 分	性 質	記 号	地 球
				長	幅						
1	S I 001	骨	筒状				丸頭	褐色	褐色 (1.5YR 8/4)	骨	骨
2	S I 001	骨	筒				丸頭	褐色	褐色 (1.5YR 8/4)	骨	骨
3	S I 001	骨	筒				丸頭	褐色	褐色 (1.5YR 8/4)	骨	骨
4	S I 001	骨	筒				丸頭	褐色	褐色 (1.5YR 8/4)	骨	骨
5	S I 001	骨	筒				丸頭	褐色	褐色 (1.5YR 8/4)	骨	骨
6	S I 001	骨	筒				丸頭	褐色	褐色 (1.5YR 8/4)	骨	骨
7	S I 001	骨	筒				丸頭	褐色	褐色 (1.5YR 8/4)	骨	骨
8	S I 001	骨	筒				丸頭	褐色	褐色 (1.5YR 8/4)	骨	骨
9	S I 001	骨	筒				丸頭	褐色	褐色 (1.5YR 8/4)	骨	骨
10	S I 001	骨	筒				丸頭	褐色	褐色 (1.5YR 8/4)	骨	骨
11	S I 001	骨	筒				丸頭	褐色	褐色 (1.5YR 8/4)	骨	骨
12	S I 001	骨	筒				丸頭	褐色	褐色 (1.5YR 8/4)	骨	骨
13	S I 001	骨	筒				丸頭	褐色	褐色 (1.5YR 8/4)	骨	骨
14	S I 001	骨	筒				丸頭	褐色	褐色 (1.5YR 8/4)	骨	骨
15	S I 001	骨	筒				丸頭	褐色	褐色 (1.5YR 8/4)	骨	骨
16	S I 001	骨	筒				丸頭	褐色	褐色 (1.5YR 8/4)	骨	骨
17	S I 001	骨	筒				丸頭	褐色	褐色 (1.5YR 8/4)	骨	骨
18	S I 001	骨	筒	13.80	1		丸頭	褐色	褐色 (1.5YR 8/4)	骨	骨
19	S I 001	骨	筒	16.32	1		丸頭	褐色	褐色 (1.5YR 8/4)	骨	骨
20	S I 001	骨	筒	18.22	1		丸頭	褐色	褐色 (1.5YR 8/4)	骨	骨

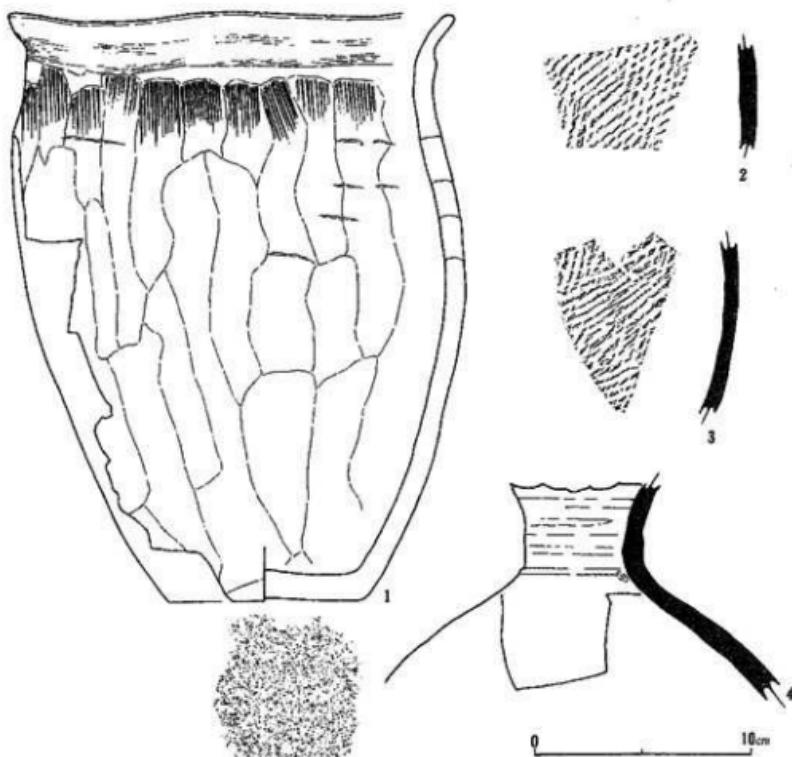


第50図 S I 001 住居跡出土土器(2)

0 10cm

第47表 S I 001 住居跡出土遺物(2)

件号 番号	出土地点 出土地点	器形 器形	基底 基底	法 量 (cm)		調 査 (地 質)		成形 成形	色 調 (色 調)	胎 土 (胎 土)	施成 施成	
				口 径	体 積	底 径	壁 高					
1	S I 001	甕	口縁～胴部	(17.5)	(19.7)			陶粒ナメ、粗粒ナメアリ	陶粒ナメ 粗粒ナメアリ	積み上げ法 (7.5Y R 5%)	にじい褐色 (10Y R 5%)	細砂を含む 良好
2	S I 001	甕	口縁～胴部	(17.0)	(18.3)			陶粒ナメ、粗粒ナメアリ、 粗粒ナメアリ	陶粒ナメ、 粗粒ナメアリ	積み上げ法 (11.0Y R 5%)	にじい褐色 (10Y R 5%)	砂粒を含む 良好
3	S I 001	甕	底 部			(6.8)		粗粒ナメアリ	粗粒ナメアリ	積み上げ法 (7.5Y R 5%)	にじい褐色 (10Y R 5%)	砂粒を含む 良
4	S I 001	甕	底 部			(8.0)		粗粒ナメアリ、砂粒	粗粒ナメアリ	積み上げ法 (10Y R 5%)	にじい褐色 (10Y R 5%)	砂粒を含む 良
5	S I 001	甕	底 部			(8.0)		粗粒ナメアリ、砂粒	粗粒ナメアリ	積み上げ法 (10Y R 5%)	にじい褐色 (10Y R 5%)	砂粒を含む 良



第51図 S I 001 住居跡出土土器(3)

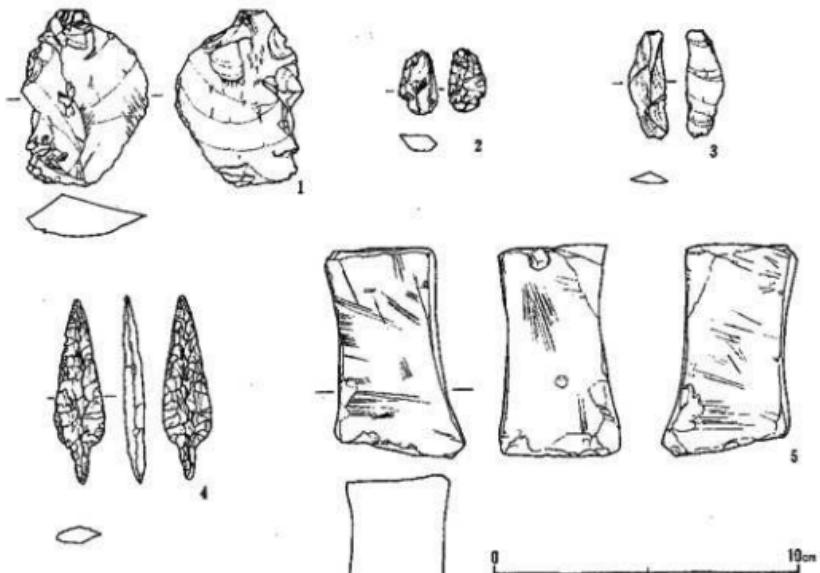
第48表 S I 001 住居跡出土遺物(3)

品名	出土場所	断片	基 本	寸 法 (mm)		内 容 (推定)	状 態	出 沟	号	記
				口徑	底径	高さ				
1	S I 001	裏	口縁部・底部	26.0	10.4	9.1	縫合ナット、底付・ハサビ、縫合ナット、縫合ナット、縫合ナット	破損	17	1~4・褐色 (10YR 5/6) 破損を含む 直行
2	S I 001	裏	裏				中空部	無	27	褐色に付着
3	S I 001	裏	裏				中空部	無	28	褐色に付着
4	S I 001	裏	裏縁・底部				縫合ナット	無	29	褐色に付着

P 241-
遺物

平安時代の住居跡からは、同時代の所産となる遺物として土器類、鐵器、砥石等の他、米、豆、トチノ実等の炭化した植物遺存体も出土している。また極めて僅かではあるが、覆土から繩文時代土器片の出土している例もある。

土器類は土師器甕及び壺、須恵器甕及び壺からなっている。このうち壺は極端に少く完形乃至は完形に近いものは1点もない。全て小破片である。また須恵器甕も全て胴部の破片であり、壺は図上で復元が可能だった第10号及び第19号住居跡出土の2点と他に部分的に復元可能なもの2点と少し。したがって、本遺跡出土の平安時代土器類は土師器甕がその主体をなす。



第52図 S I 001住居跡出土遺物（石器）

第49表 S I 001住居跡出土遺物（石器）

発掘番号	出土地點	器形	高	径	長さ	幅	厚	性	記
1	S I 001	縦 楕	切玉（鉢底）	5.8	4.1	1.5	20.9	裏面を2次に二次剥離を施し、刃部として蓄えている。	
2	S I 001	石 瓶	筒	2.0	1.2	0.5	1.2	片面には通常のための側面を剥離が認められる。右側は剥離。	
3	S I 001	斜方 瓶	筒	5.8	1.2	0.3	1.1	側面の凹凸。	
4	S I 001	石 瓶	筒	6.1	3.6	0.7	4.6	側面から完全な溝や剖離によって整形成される。本体部は便知のためか削離処理する。	
5	S I 001	横 石 瓶	筒	4.7	4.0	3.8	125.1	西側は側面として用いている。壁間に穴を打てる隙内も認められる。	

土師器表は小形のミニチュアや特殊な形のものを除いて、その大きさは器高が25~30cm、口径20cm前後、底径10cm前後である。また体部の最大径はその位置が器高の中位点よりやや上にあり、口径とはほぼ同じ程度の大きさをもつようである。

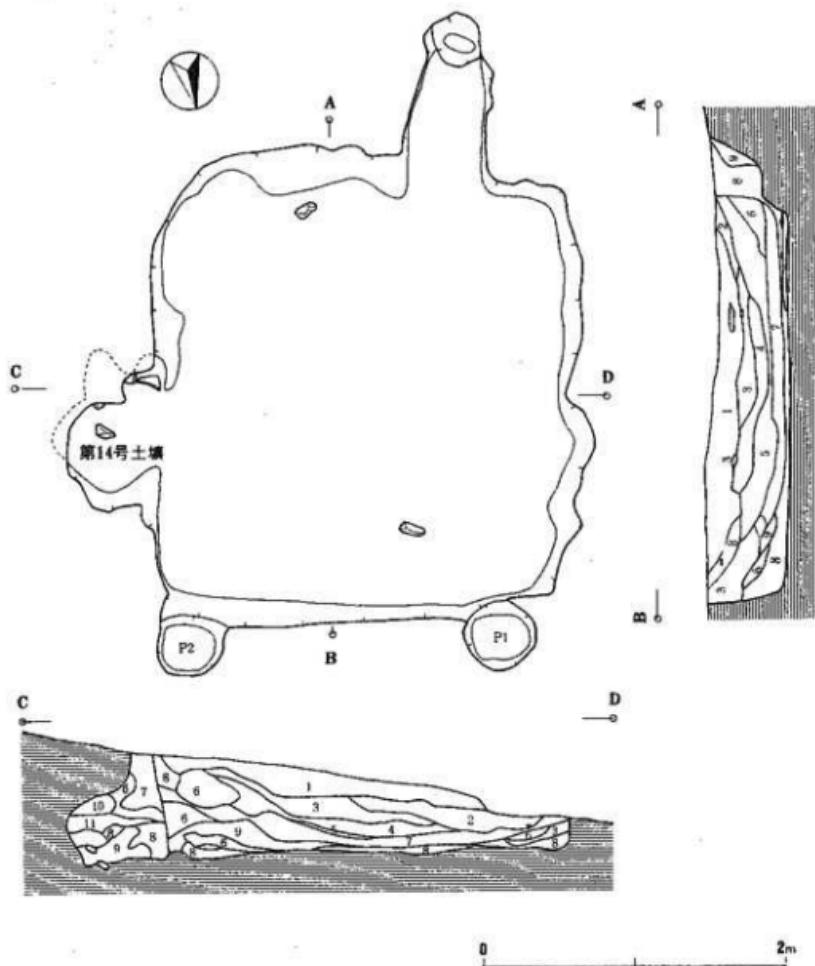
器形は口縁部が緩く外反し、頸部に僅かな屈曲部をもつ。頸部の屈曲部から体部の最大径部の点を経て底部に至るまで均なりのカーブを描いている。また底部底面は全くの平底か、極く僅かに上げ底気味になるが、意識してそう形作ったという程ではない。稀に底部周縁が外側に張り出すものもある。

器面の調査は、口縁部から頸部にかけてが横位のナデ、体部以下底部にかけてが縦位乃至は斜位のケズリによって行われている。内面もほぼ同様であるが、体部以下にハケ目状の痕跡が残る場合があり、概して調査は外面よりも丹念に行われている。底部底面はケズリによって調整される場合と、砂底のものとの2種がある。

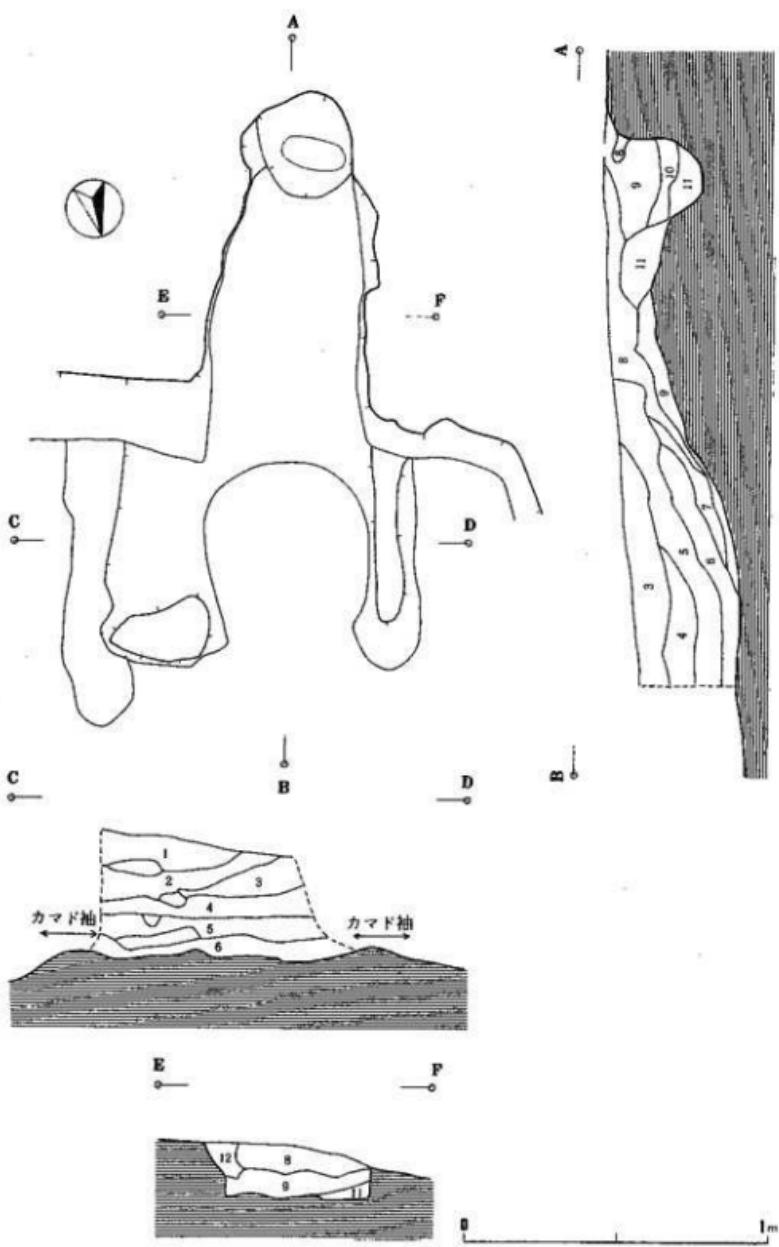
焼成は概して良好で色調は黄褐色、橙色を呈するものが多い。しかし胎土には故意にか、種

第50表 S1002住居跡観察表

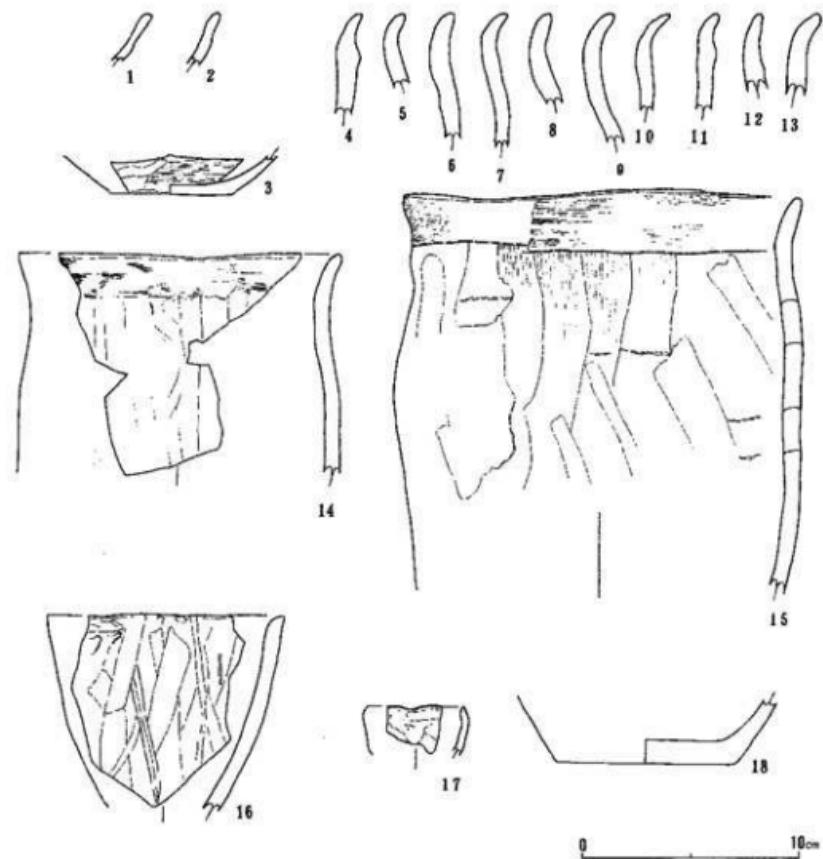
S1002住居跡		押 団	53~56		
		図 版	10, 46		
検出区	9R, 10R, 9S, 10S				
法	壁 長	東 壁	西 壁	南 壁	北 壁
	3.12m	2.85m	2.77m	2.62m	
壁 高	53.7~66.9cm	11.2~24.9cm	28.8~55.0cm	43.8~52.5cm	
周溝幅	—	—	—	—	
周溝深	—	—	—	—	
面 積	9.38m ²				
主軸方位	N~16~E	形 態	方 形		
覆 土	1. 10Y R 5 黒褐色 粘性弱 孔隙大 バミスを含む 焼土粒若干含む 2. 10Y R 5 黒褐色 粘性弱 孔隙大 バミス多い 若干の焼土粒含む 3. 7.5Y R 5 喧褐色 粘性強 孔隙大 バミス量多い 焼土層は別 4. 10Y R 5 黒褐色 粘性弱 孔隙小 バミス殆ど含まず 5. 10Y R 5 喧褐色 粘性弱 孔隙大 バミス量多く 炭化物僅かに含む 6. 10Y R 5 黒褐色 粘性弱 孔隙大 バミス量最も多く 7. 10Y R 5 喧褐色 粘性弱 孔隙大 バミス多い 8. 10Y R 5 黒 色 粘性稍有 孔隙小 バミス殆ど含まず 9. 10Y R 5 黒 色 粘性大 孔隙大 ローム粒を含む バミス含まず 10. 10Y R 5 喧褐色 粘性弱 孔隙大 バミス多量に含む 炭化物僅く僅かに含む 11. 10Y R 5 黒 色 粘性大 孔隙小 バミス僅かに含む ローム粒多量に含む				
壁	床面に対する角度は92.5°~117°の範囲にある。 西壁は、保存状態が悪くはっきりとは検出できなかった。				
周 溝	検出されなかった。				
ビ ッ ト	P1 45×48×18 北號西側 にびい黄橙色をした粘土が四レンズ状に入っていた P2 39×44×8.4 北號東側 性穴らしきものは認めることが出来なかった				
1 位 置	南壁 西寄り				
カ	1. 10Y R 5 黒褐色 粘性弱 バミスを多く含む 焼土僅かに混入 2. 10Y R 5 喧褐色 粘性弱 バミスを多く含む 焼土多量に混入 炭化物僅かに含む 3. 10Y R 5 喧褐色 粘性弱 バミス多量に混入 最も多く混入 ローム粒及び炭化物僅かに含む 4. 10Y R 5 黑褐色 粘性中 バミス多量に混入 ローム粒僅かに含む 5. 10Y R 5 喧褐色 粘性強 バミスを僅かに含む 焼土僅かに含む 6. 10Y R 5 黑褐色 粘性中 径2mm程度のバミス多く含む 炭化物僅かに混入 7. 10Y R 5 喧褐色 粘性強 バミス多く含む 焼土多量に混入 炭化物僅かに含む 8. 7.5Y R 5 喧褐色 粘性強 バミス殆ど含まない 焼土最も多く含む層 ローム粒多量に混入 9. 10Y R 5 喧褐色 粘性強 バミス多く含む 焼土多量に混入 10. 10Y R 5 黑褐色 粘性強 バミス及び焼土僅かに含む 11. 10Y R 5 にびい黄褐色 粘性強 バミス殆ど含まない ローム粒多量に混入 12. 10Y R 5 黑褐色 粘性中 バミス殆ど含まない ローム粒僅く僅かに含む				
マ					
ア					
フ					
備 考	カマドの保存状態はきわめて悪く、袖の部分はほとんど検出されなかった。また芯材なども検出されなかった。 この住居跡は第14号土壙を切っている 覆土の中程に燒土層がレンズ状に堆积していることより、この住居が陥没された後に焼失したものと考えられる。北東隅に燒土が広範囲にわたって検出された。この焼土も床面よりかなり上面で検出されたものである。				



第53図 S I 002 住居跡



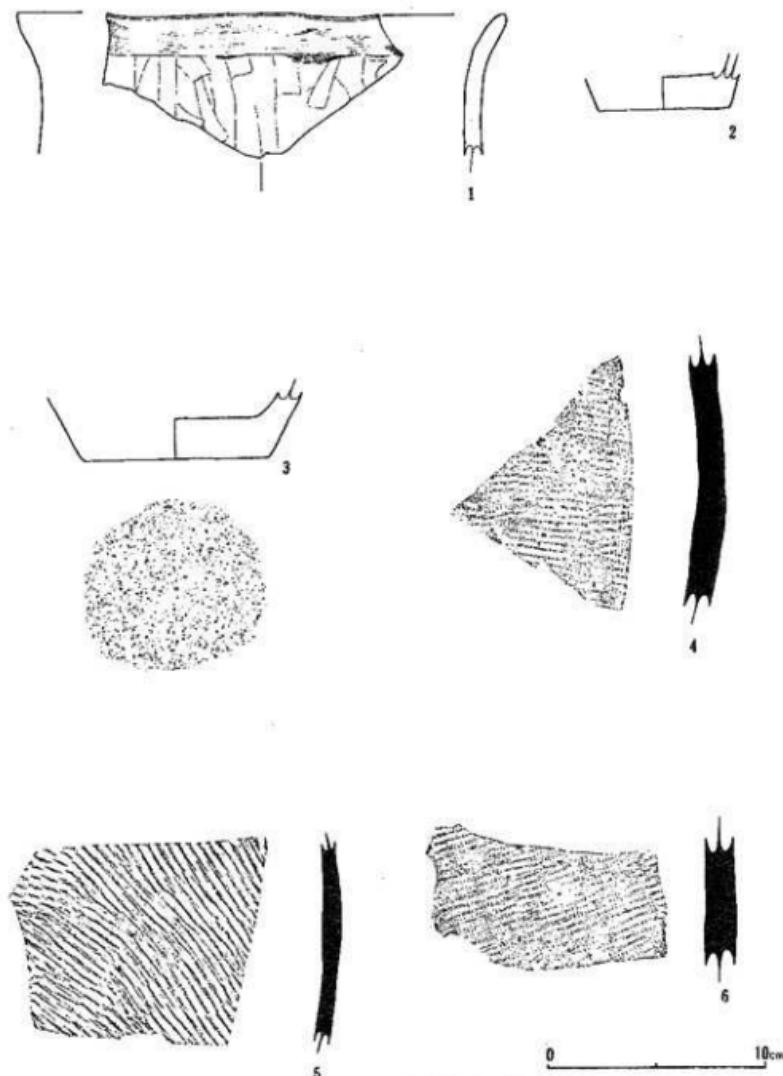
第54図 S I 002 住居跡カマド



第55図 S I 002 住居跡出土遺物(1)

第51表 S I 002 住居跡出土遺物(1)

件名 番号	出土場所	層位	性質	法 目 名	法 目 名	法 目 名	測定場所		種 子	化 算 式	年 代	地 点
							北	南				
1	S I 002	Ⅱ	骨	骨片	骨片	骨片	1	2	骨片	骨片	古	古
2	S I 002	Ⅲ	骨	骨片	骨片	骨片	3	4	骨片	骨片	古	古
3	S I 002	Ⅲ	骨	骨片	骨片	骨片	5	6	骨片	骨片	古	古
4	S I 002	Ⅲ	骨	骨片	骨片	骨片	7	8	骨片	骨片	古	古
5	S I 002	Ⅲ	骨	骨片	骨片	骨片	9	10	骨片	骨片	古	古
6	S I 002	Ⅲ	骨	骨片	骨片	骨片	11	12	骨片	骨片	古	古
7	S I 002	Ⅲ	骨	骨片	骨片	骨片	13	-	骨片	骨片	古	古
8	S I 002	Ⅲ	骨	骨片	骨片	骨片	-	-	骨片	骨片	古	古
9	S I 002	Ⅲ	骨	骨片	骨片	骨片	-	-	骨片	骨片	古	古
10	S I 002	Ⅲ	骨	骨片	骨片	骨片	-	-	骨片	骨片	古	古
11	S I 002	Ⅲ	骨	骨片	骨片	骨片	-	-	骨片	骨片	古	古
12	S I 002	Ⅲ	骨	骨片	骨片	骨片	-	-	骨片	骨片	古	古
13	S I 002	Ⅲ	骨	骨片	骨片	骨片	-	-	骨片	骨片	古	古
14	S I 002	Ⅲ	骨	(18.1)	骨片	骨片	14	15	骨片	骨片	古	古
15	S I 002	Ⅲ	骨	(18.7)	骨片	骨片	16	17	骨片	骨片	古	古
16	S I 002	Ⅲ	骨	(18.2)	骨片	骨片	18	19	骨片	骨片	古	古
17	S I 002	Ⅲ	骨	-	骨片	骨片	-	-	骨片	骨片	古	古
18	S I 002	Ⅲ	骨	-	-	-	-	-	骨片	骨片	古	古



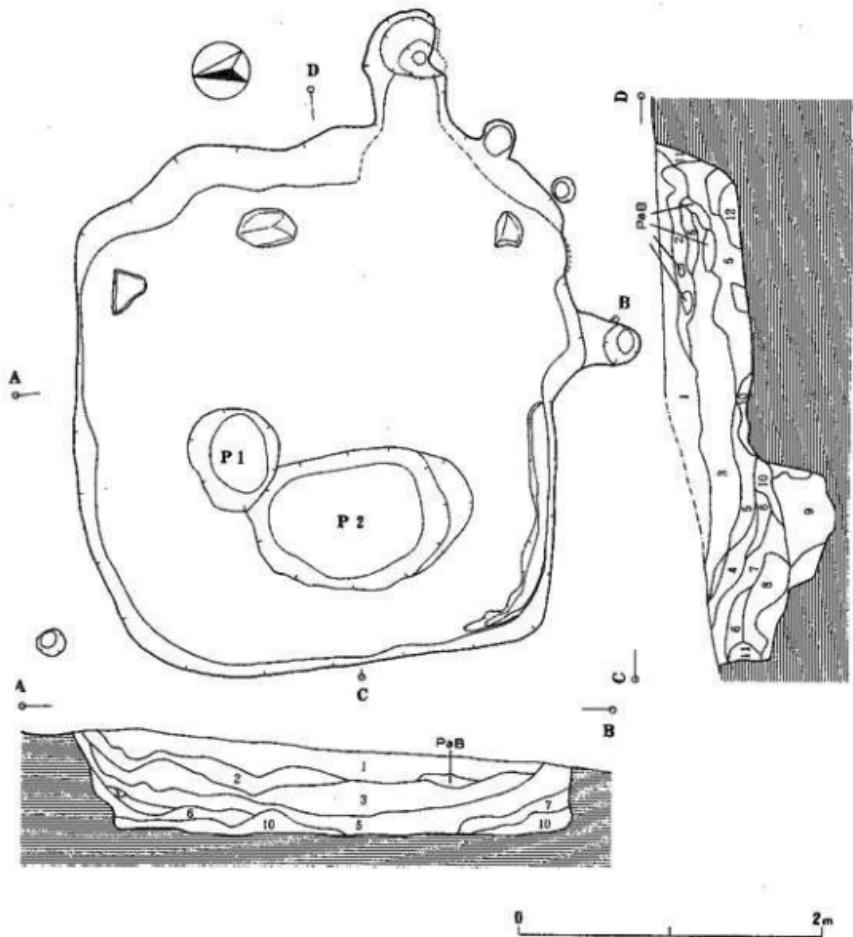
第52図 S1002住居跡出土遺物(2)

第52表 S1002住居跡出土遺物(2)

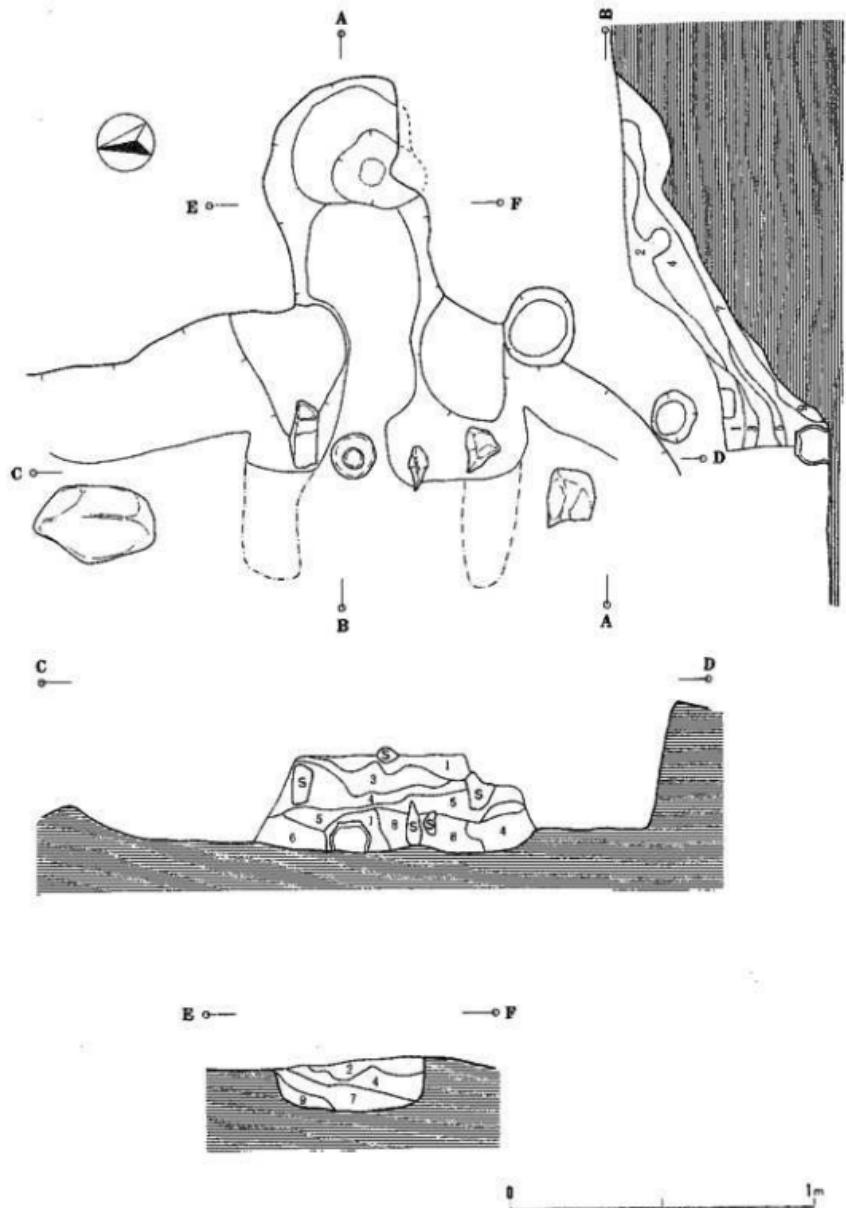
編號	出土場所	形態	器種	計量	測量		内	外	底	高	厚	重	性質
					長	幅							
1	S1-002	器	口縁	17.0cm			斜面	斜面	斜面	斜面	0.5cm	2.2kg	陶器
2	S1-002	器	底	-			斜面	斜面	斜面	斜面	0.5cm	0.6kg	陶
3	S1-002	器	底	-			斜面	斜面	斜面	斜面	0.5cm	0.6kg	陶
4	S1-002	器	底	-			斜面	斜面	斜面	斜面	0.5cm	0.6kg	陶
5	S1-002	器	底	-			斜面	斜面	斜面	斜面	0.5cm	0.6kg	陶
6	S1-002	器	底	-			斜面	斜面	斜面	斜面	0.5cm	0.6kg	陶

第53表 S1006住居跡調査表

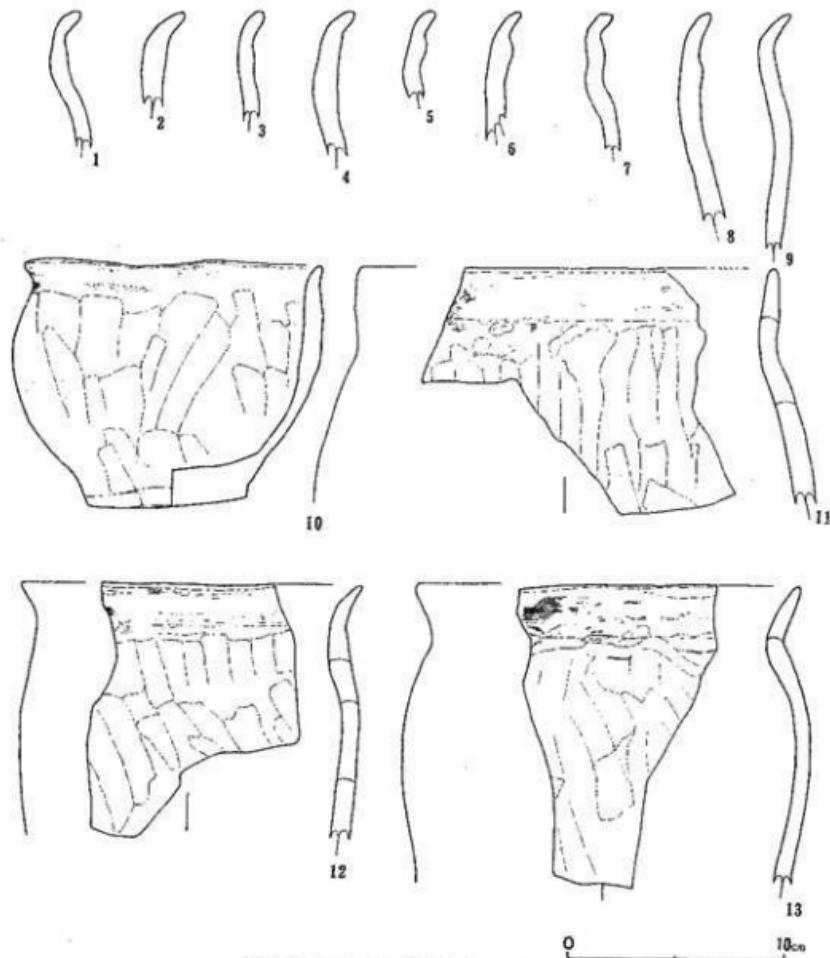
S1006住居跡		神戸 46-52	同 岐 9, 43, 44, 45		
測量	東 西 南 北	東 西 南 北	東 西 南 北		
測量点	7 P, 7 Q-8 Q, 7 R-8 R	5.25m	5.15m	5.08m	5.08m
壁高	34.5-54.8cm	21.7-35.3cm	26.8-42.2cm	21.7-48.7cm	
周縁幅	5-14cm	6-15cm	4-15cm	7-13cm	
周縁深	2.6-11.7cm	10.5-21.2cm	9.7-16.9cm	7.6-16.1cm	
面積	27.93m ²				
主方位	N-9°-W		影 韶 月 韶		
測量	1. 10 Y R 紺 黒褐色 粘性土 深1mm程度のバクスを多量に含む 2. 10 Y R 紺 黒褐色 粘性土 深2mm以下のバクスを多く含む 3. 10 Y R 紺 黒褐色 粘性土 深2mm以下のバクスを多く含む 4. 10 Y R 紺 黑褐色 粘性土 バクス僅かに混入 ロームを多く含む 5. 10 Y R 紺 黑褐色 粘性土 バクス極く僅かに混入 ローム多量に混入 6. 10 Y R 紺 黑褐色 粘性土 ローム極多く混入 7. 10 Y R 紺 黑褐色 粘性土 バクス極少量に混入 8. 10 Y R 紺 黑褐色 粘性土 バクス極く僅かに混入 9. 10 Y R 紺 黑褐色 粘性土 バクスほとんど含まない 10. 10 Y R 紺 黑褐色 粘性土 バクスを多く含む ローム極僅かに混入 11. 10 Y R 紺 黑褐色 粘性土 バクスを多く含む ロームを多く含む 12. 10 Y R 紺 黑褐色 粘性土 バクスを極く僅かに含む ロームを多く含む 13. 10 Y R 紺 黑褐色 粘性土 ローム混入 14. 10 Y R 紺 黑褐色 粘性土 バクスを僅かに含む ローム塊ところごろに含む 15. 10 Y R 紺 黑褐色 粘性土 バクスを多量に含む ローム層 16. 10 Y R 紺 黑褐色 粘性土 深1-2mm程度のバクス多量に混入 ローム極僅く僅かに含む				
測量	東壁の一部を除いては床厚状態はさかめて良好である。壁面の所に対する傾斜角は92-118.5°の範囲に見られる。				
床	床面北東隅に凸凹の穴が見られる。これは人為的なものかというよりはむしろ自然のものと考えた方が妥当であり、脚は盛り起に見えていたものと考えられる。なおこのことはセクションにより明らかである。				
測量	ほぼ壁面すべてに見られる。南東隅あたりの壁面状態は悪く剥離できなかった。 周縁内で防材などは検出されなかつた。				
測量	P1 12×18×33.5 カマド煙突 積石である P2 15×26×40.0 南西隅 積石である P3 13×31.5×40.0 炉門中央 積石である P4 23×24×36.6 北西隅 積石である P5 25×31×40.1 北當中央 積石である P6 17×22.5×40.0 北東隅 積石である P7 50.5×56×14.8 南東隅 形は整っていない 土師器片散点出土 P8 52×67×24.8 南東隅 形は整っていない 土師器片多数出土 P9 32×70×8.8 南空中央付近 形は整っていない 土師器片散点出土 P10 45×73×16.8 カマド排水管 形は整っていない 土師器片多数出土 P11 58×92×8.0 壁面中付近 土師器片散点出土 P12 50×76×14.7 P13 東側 土師器片散点出土	P1 16.5×17×38.3 重慶中央 積石である P2 16.5×18×40.0 南東隅 積石である P3 14.5×19×42.9 南東中央 積石である P4 16.5×22×46.6 北西隅 積石である P5 25×32×53.0 北東隅 積石である P6 17×29×44.4 南東隅 積石である P7 16.5×17×38.3 重慶中央 積石である			
測量	東壁 西寄り				
測量	1. 10 Y R 紺 黑褐色 粘性土 バクスをほとんど含まない カマド煙の部分 2. 10 Y R 紺 黑褐色 粘性土 バクス僅かに混入 3. 10 Y R 紺 黑褐色 粘性土 深1mm程度のバクス僅かに混入 廃化物質が僅かに混入 4. 10 Y R 紺 黑褐色 粘性土 深1-2mm程度のバクス僅かに混入 ローム極混入 5. 10 Y R 紺 黑褐色 粘性土 多量に混入 6. 10 Y R 紺 黑褐色 粘性土 バクス僅かに混入 深1mm程度のバクス多量に混入 廃化物質が混入 7. 10 Y R 紺 明褐色 粘性土 ローマ層 8. 5 Y R 紺 にじみ黒褐色 粘性土 壁主層 9. 10 Y R 紺 明褐色 粘性土 深1mm程度のバクス僅かに混入 10. 7.5 Y R 紺 明褐色 粘性土 壁主層 11. 5 Y R 紺 明褐色 粘性土 壁主層 バクスほとんど混入していない				
測量	能の部分の芯材として河原石が使用されていた。またカマド内には灰燼として焼られたと思われる石が積と物の中央附近で検出された。 積の部分の壁面状態は良好で擦出されたが、堆積部ははっきりとは検出できなかつた。 カマド内及び積の付近より多量の上漆漆器片が出土した。				
遺物	遺物は多くに土師器でありP1-P4及びカマド付近より集中して出土している。 また鐵石か一点出土している。また時代は異なる石器類が一并出土した。				
備考	この瓦片跡はクリートにそぐって0.5mの位置で観察され、また、屋外木などは認めることができなかつた。				



第57図 S I 006 住居跡



第58図 S I 006 住居跡カマド



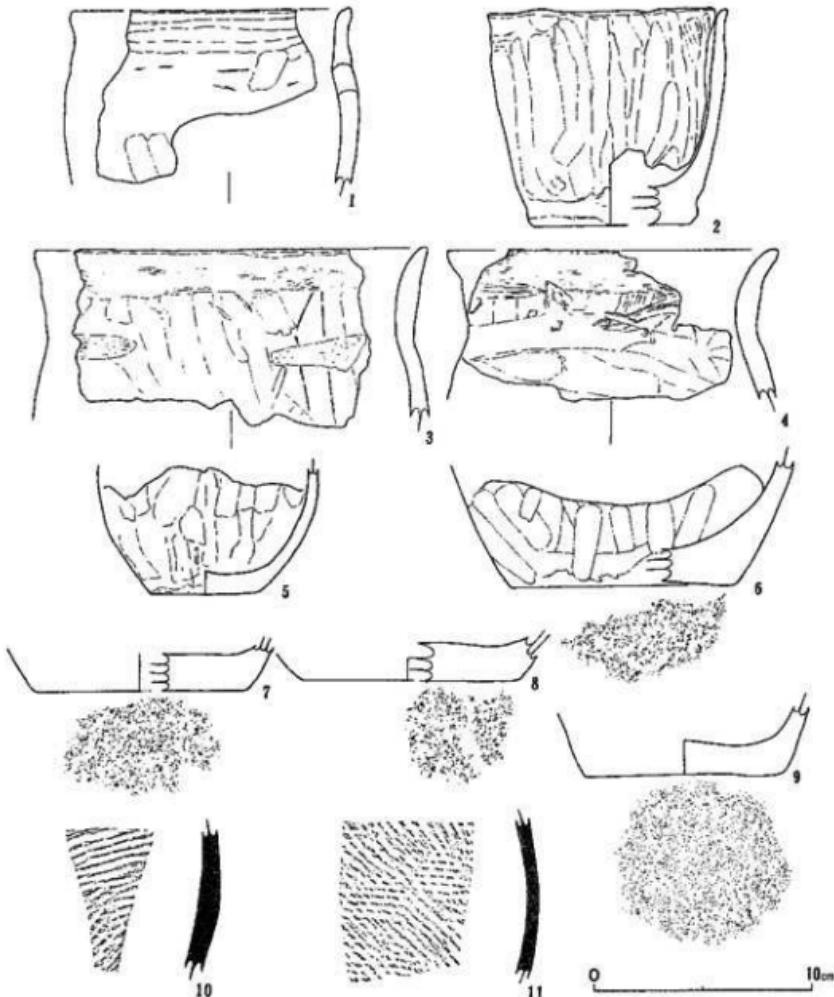
第59図 S I 006 住居跡出土遺物(1)

第54表 S1006住居跡出土遺物(1)

種類	品目名	規格	原产地	販路		販賣量	販賣額	販賣率	販賣額
				販賣地	販賣額				
1	3.1~5.5kg	無	日本	日本	1,200	1,200	1,200	100%	1,200
2	5.1~6.5kg	無	日本	日本	1,200	1,200	1,200	100%	1,200
3	6.5~8.0kg	無	日本	日本	1,200	1,200	1,200	100%	1,200
4	8.0~9.5kg	無	日本	日本	1,200	1,200	1,200	100%	1,200
5	9.5~11.0kg	無	日本	日本	1,200	1,200	1,200	100%	1,200
6	11.0~12.5kg	無	日本	日本	1,200	1,200	1,200	100%	1,200
7	12.5~14.0kg	無	日本	日本	1,200	1,200	1,200	100%	1,200
8	14.0~15.5kg	無	日本	日本	1,200	1,200	1,200	100%	1,200
9	15.5~17.0kg	無	日本	日本	1,200	1,200	1,200	100%	1,200
10	17.0~18.5kg	無	日本	日本	1,200	1,200	1,200	100%	1,200
11	18.5~20.0kg	無	日本	日本	1,200	1,200	1,200	100%	1,200
12	20.0~21.5kg	無	日本	日本	1,200	1,200	1,200	100%	1,200
13	21.5~23.0kg	無	日本	日本	1,200	1,200	1,200	100%	1,200
14	23.0~24.5kg	無	日本	日本	1,200	1,200	1,200	100%	1,200
15	24.5~26.0kg	無	日本	日本	1,200	1,200	1,200	100%	1,200

第56表 S1009住居跡観察表

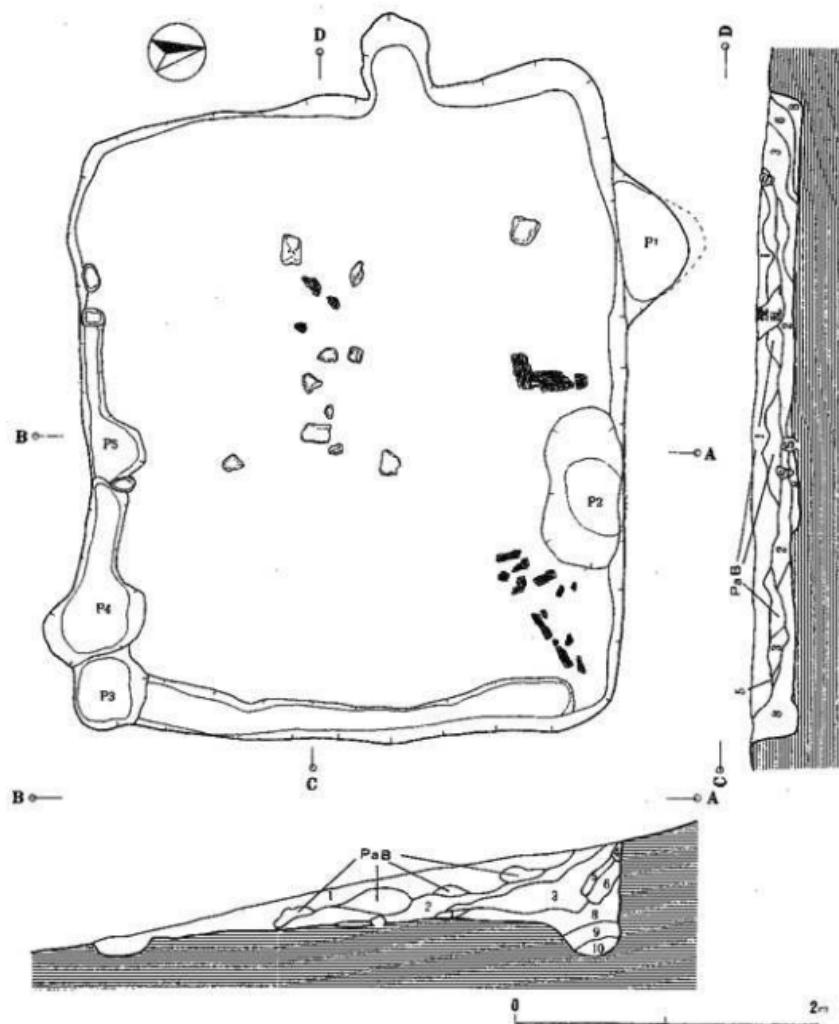
S1009住居跡		検出 61~64 国版 13, 14, 48	
検出区 10G, 11G, 10H, 11H			
	東壁	西壁	南壁
法	壁長 3.64m	3.77m	3.94m
量	壁高 9.6~25.0cm	1.7~49.8cm	5.9cm
量	周溝幅 12.5~29.0cm	—	10.0~25.0cm
量	周溝深 5.5~9.0cm	—	9.7~10.5cm
量	面積 15.48m ²	—	—
主軸方位	N-94°-W	形態	方 形
覆 土	1. 10YR 3/6 黒褐色 粘性弱 孔隙稍有 径1~5mm程度のパミス多量に含む 2. 10YR 3/6 暗褐色 粘性弱 孔隙僅かに有 パミス混入するが1程多くはない 3. 10YR 3/6 暗褐色 粘性大 孔隙有 パミス極く僅かに混入 4. 10YR 3/6 暗褐色 粘性弱 孔隙大 パミス殆ど混じえない 5. 10YR 3/6 黒褐色 粘性弱 孔隙大 パミス量最も多い 6. 10YR 3/6 黒褐色 硬質灰 孔隙少く比較的しまっている パミスは全く含まず 7. 10YR 3/6 黒褐色 硬質灰 孔隙少く比較的しまっている パミスは全く含まず 8. 10YR 3/6 黑褐色 粘性弱 孔隙大 析化物混入最多 9. 10YR 3/6 黑褐色 粘性弱 孔隙大 混入物はなく均質 10. 10YR 3/6 黑褐色 粘性大 孔隙大 混入物なし 初期の壁崩落上	—	—
壁	南壁は斜面になっているため、はっきりとは検出できなかった。 床面に対する傾斜は95°~107.5°の範囲にある。	—	—
周辺	東壁と南壁面に見られるが、施は検出できなかった。	—	—
ビート	P ₁ 44×83×4 3.1 北壁西寄り P ₂ 48×106×24.1 北壁東寄り P ₃ 47×51×11.1 南東隅 P ₄ 46.5×70×19.6 P ₂ 西側 P ₅ 35.5×37×11.3 南壁中央付近	—	—
地盤	西壁 北寄り	—	—
カ	1. 10YR 3/6 暗褐色 粘性弱 孔隙大 パミス若干量混入 穴内泥土と共に 2. 7.5YR 3/6 暗褐色 粘性稍有 孔隙1よりも少ない 燃土粒・炭化物混入 3. 7.5YR 3/6 暗褐色 粘性稍有 孔隙大 燃土ブロックが混じり難い 4. 10YR 3/6 黒褐色 粘性大 孔隙小 径5~10mm程度のブロック状の黄褐色土塊上が多く混入 壁道天井部に貼られた粘土層崩落上	—	—
マ	5. 5YR 3/6 赤褐色 粘性大 孔隙小 燃土層	—	—
マ	6. 10YR 3/6 黑褐色 粘性大 孔隙小 黄褐色土ブロック状に混入 7. 10YR 3/6 黑褐色 粘性弱 孔隙大 炭化物、パミス若干量混入 黄褐色土粒僅かに混入 8. 10YR 3/6 黑褐色 粘性大 孔隙小 カマド焼部に用いられた粘土 9. 10YR 3/6 暗褐色 粘性大 孔隙大 ボソボソしている	—	—
ト	油の部分の芯材として河原石が使用されている。 また、支撑と思われる河原石も検出された。	—	—
遺物	カマド右袖北側に半完型の土器器出土。	—	—
備考	この遺跡中この位置のカマドだけが西向きである。 壁内に検出された壁は床面から5~10mm程度上位の覆土中のものである。 炭化物は壁側から窓側中央に向って傾斜しており、3層及び4層間に検出される。	—	—



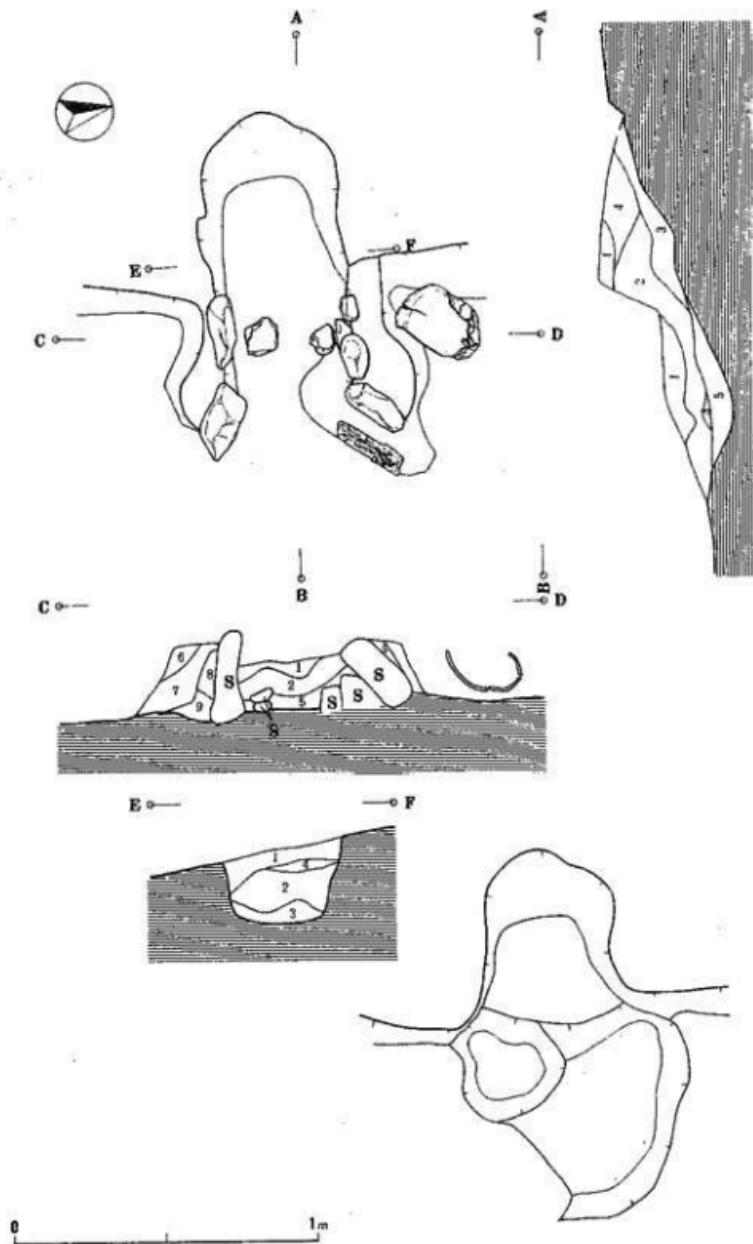
第60図 S I 006 住居跡出土遺物(2)

第55表 S I 006 住居跡出土遺物(2)

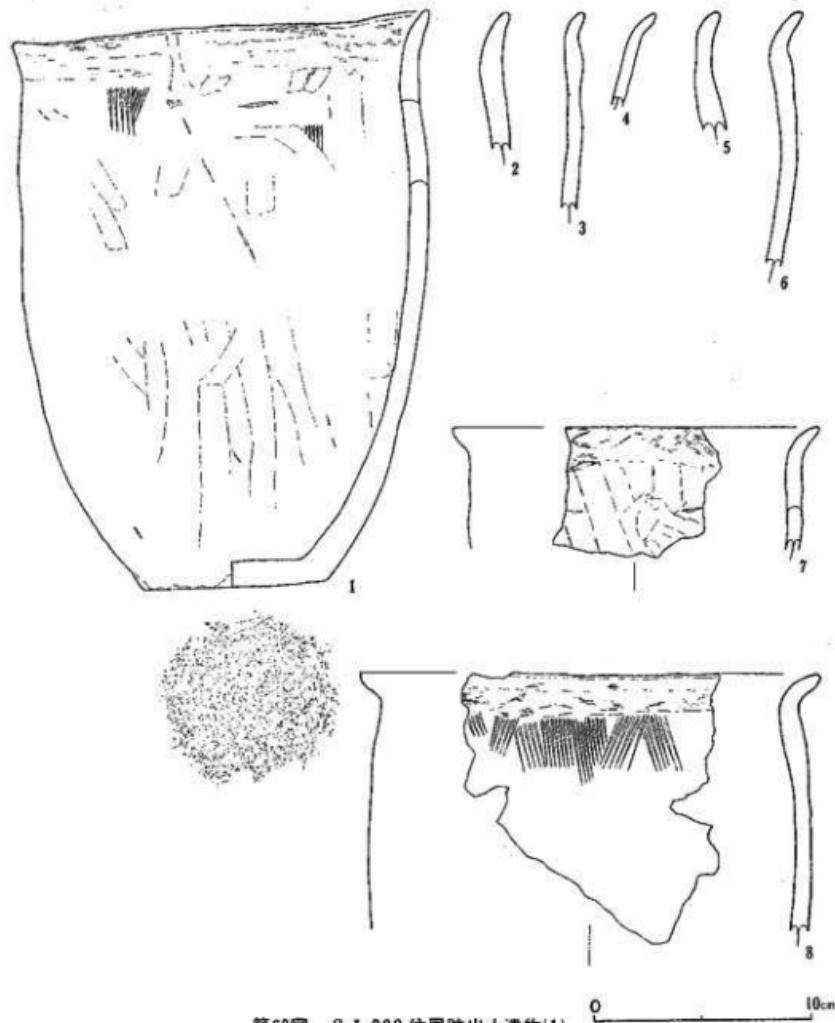
品目 番号	出土場所	形態	寸法(厘米)			材質	性質	施主	地城
			外	内	高				
1	S I 006	甌	10.5 10.2	6.5 6.2	2.5	陶土ナメ。口沿・底面・側面	陶土ナメ	塗抹上付	12.5cm(18Y 8月) 塗抹に砂粒含む
2	S I 006	甌	11.2 11.0	7.2 7.0	2.0	陶土ナメ。底面・側面ナメ	陶土ナメ	塗抹上付	灰青褐色(10Y 8月) 塗抹中に含む
3	S I 006	甌	10.2	—	—	陶土ナメ。底面・側面ナメ	陶土ナメ	塗抹上付	灰青褐色(17.5Y 8月) 塗抹に砂粒含む
4	S I 006	甌	10.5	—	—	陶土ナメ。底面・側面ナメ	陶土ナメ	塗抹上付	灰青褐色(17.5Y 8月) 塗抹に砂粒含む
5	S I 006	甌	15.4	—	—	陶土ナメ。底面・側面・側面ナメ	陶土ナメ	塗抹上付	深褐色(12.5Y 8月) 塗抹に砂粒含む
6	S I 006	甌	10.5	—	—	陶土ナメ	陶土ナメ	塗抹上付	深褐色(10Y 8月) 塗抹に含む
7	S I 006	甌	10.5	—	—	陶土ナメ。底面ナメ。側面	陶土ナメ	塗抹上付	12.5cm(18Y 8月) 塗抹に砂粒含む
8	S I 006	甌	10.5	—	—	陶土ナメ	陶土ナメ	塗抹上付	12.5cm(18Y 8月) 塗抹に含む
9	S I 006	甌	10.5	—	—	陶土ナメ	陶土ナメ	塗抹上付	12.5cm(18Y 8月) 塗抹に含む
10	S I 006	甌	10.5	—	—	陶土ナメ	陶土ナメ	塗抹上付	12.5cm(18Y 8月) 塗抹に含む
11	S I 006	甌	10.5	—	—	陶土ナメ	陶土ナメ	塗抹上付	12.5cm(18Y 8月) 塗抹に含む
12	S I 006	甌	10.5	—	—	陶土ナメ	陶土ナメ	塗抹上付	12.5cm(18Y 8月) 塗抹に含む
13	S I 006	甌	10.5	—	—	陶土ナメ	陶土ナメ	塗抹上付	12.5cm(18Y 8月) 塗抹に含む
14	S I 006	甌	10.5	—	—	陶土ナメ	陶土ナメ	塗抹上付	12.5cm(18Y 8月) 塗抹に含む
15	S I 006	甌	10.5	—	—	陶土ナメ	陶土ナメ	塗抹上付	12.5cm(18Y 8月) 塗抹に含む
16	S I 006	甌	10.5	—	—	陶土ナメ	陶土ナメ	塗抹上付	12.5cm(18Y 8月) 塗抹に含む
17	S I 006	甌	10.5	—	—	陶土ナメ	陶土ナメ	塗抹上付	12.5cm(18Y 8月) 塗抹に含む
18	S I 006	甌	10.5	—	—	陶土ナメ	陶土ナメ	塗抹上付	12.5cm(18Y 8月) 塗抹に含む
19	S I 006	甌	10.5	—	—	陶土ナメ	陶土ナメ	塗抹上付	12.5cm(18Y 8月) 塗抹に含む
20	S I 006	甌	10.5	—	—	陶土ナメ	陶土ナメ	塗抹上付	12.5cm(18Y 8月) 塗抹に含む
21	S I 006	甌	10.5	—	—	陶土ナメ	陶土ナメ	塗抹上付	12.5cm(18Y 8月) 塗抹に含む



第61図 S I 009 住居跡



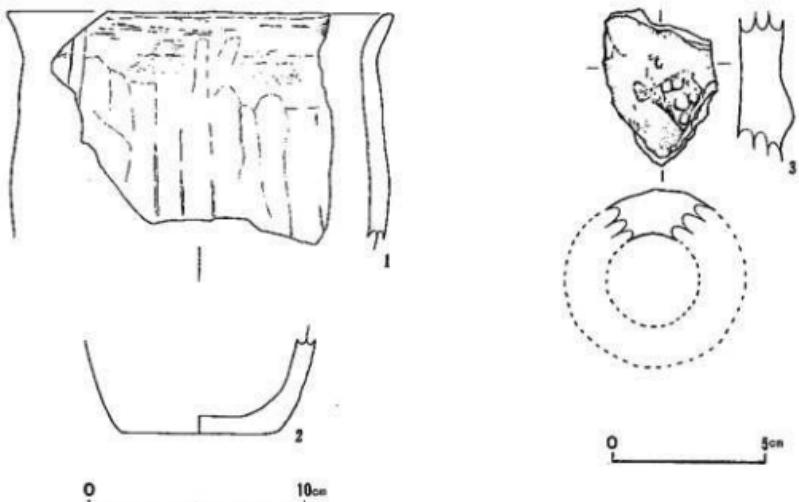
第62図 SI 009 住居跡カマド



第63図 S I 009 住居跡出土遺物(1)

第57表 S I 009 住居跡出土遺物(1)

件号	出土場所	品種	器種	材質	長さ	幅	厚さ	内面	外形	底面	目録	備考
1-2-100	東	骨	骨盤・大腿骨	骨	23.0	13.0	1.0	無	無	無	1612	無
2-2-100	東	骨	骨盤・大腿骨	骨	23.0	13.0	1.0	無	無	無	1612	無
3-2-100	東	骨	骨盤・大腿骨	骨	23.0	13.0	1.0	無	無	無	1612	無
4-2-100	東	骨	骨盤・大腿骨	骨	23.0	13.0	1.0	無	無	無	1612	無
5-2-100	東	骨	骨盤・大腿骨	骨	23.0	13.0	1.0	無	無	無	1612	無
6-2-100	東	骨	骨盤・大腿骨	骨	23.0	13.0	1.0	無	無	無	1612	無
7-2-100	東	骨	骨盤・大腿骨	骨	23.0	13.0	1.0	無	無	無	1612	無
8-2-100	東	骨	骨盤・大腿骨	骨	23.0	13.0	1.0	無	無	無	1612	無
9-2-100	東	骨	骨盤・大腿骨	骨	23.0	13.0	1.0	無	無	無	1612	無
10-2-100	東	骨	骨盤・大腿骨	骨	23.0	13.0	1.0	無	無	無	1612	無



第64図 S I 009 住居跡出土遺物(2)

第58表 S I 009 住居跡出土遺物(2)

標題 番号	出土地点	器 形	底 高 (cm)	大きさ (概 文)		成 形	色 調	地 表	地質
				口 径	体 高				
1	S I 009	器	13.6	(17.4)		横径ナナ、縦径セズリ	壁厚ナナ	積み上げ法	にじみ紫色(7.5Y R 5/2)
2	S I 009	器	9.5	(7.2)		縦径セズリ	セズリ	積み上げ法	光褐色(7.5Y R 5/2)
3	S I 009	マイヨ洞口	縦(4.8)	厚1.5~1.2		先端部近くの破片			

P301-1
1~3 mm程の砂粒が多く混入されており、調整の際、殊に器外面体部以下では夥しい砂粒移動の痕跡が認められる。また、この痕跡によれば体部の調整は上→下または下→上のように一定せず、箇所毎にその方向が違うかまたは工具の往復運動によっているようである。成形は器外面の調整が粗いため比較的よく観察できるが、幅25~35mm程度の粘土帯を重ね合せた積み上げ法によっている。

須恵器壺は口縁部が小さく、長頸のものである。体部は球形に近い形となる。第10号、第11号、第14号、第19号住居跡出土資料とも器高が20~30cm程度、体径20cm未満と思われ、比較的小形のものである。

唯一口縁部から底部まで復元し得た第10号住居跡出土の資料によれば、口縁部は直立気味に立ち上り、頸部との間に屈曲部をもつ。頸部はやや外傾しており、体部との境には細い隆起がある。体部は殆ど球形であり、体部の中位に最大径をもつ。底部はやや上部底の形態をとる。

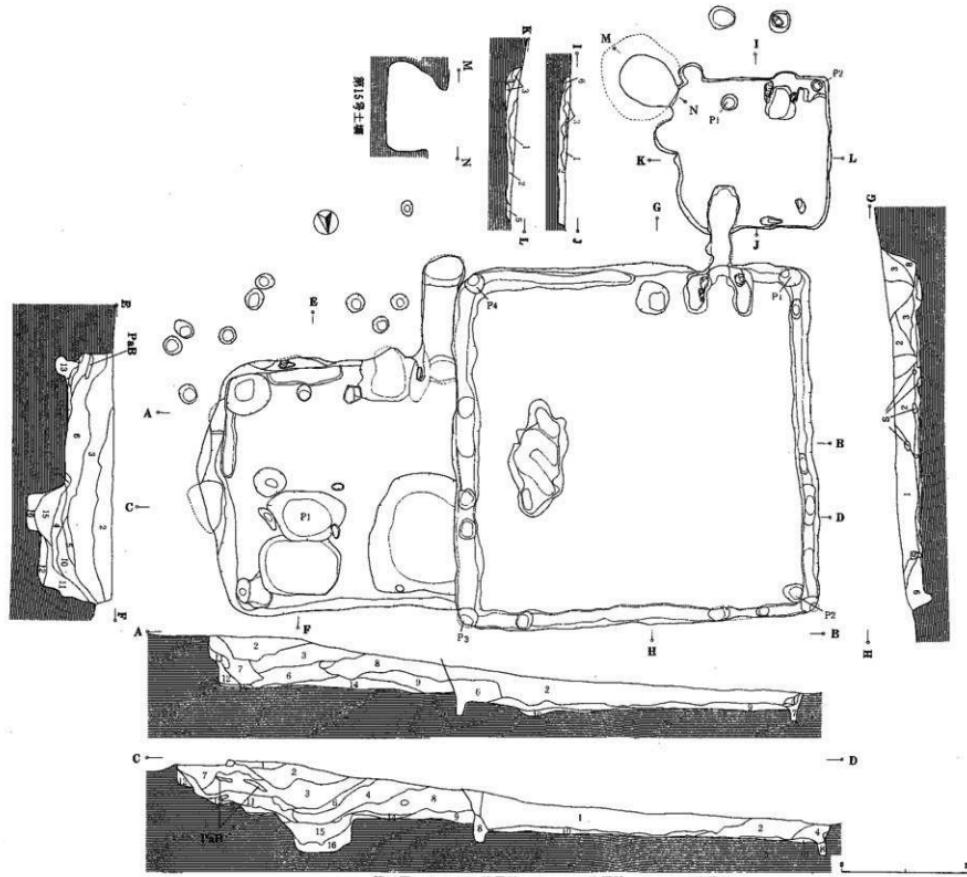
成形・調整はロクロ水挽き法によるが、体部の中程から底部にかけて縱位のケズリ調整が行われる例もある。また頸部に線刻の施された例もある。→P325

第59表 S 1010住居跡観察表

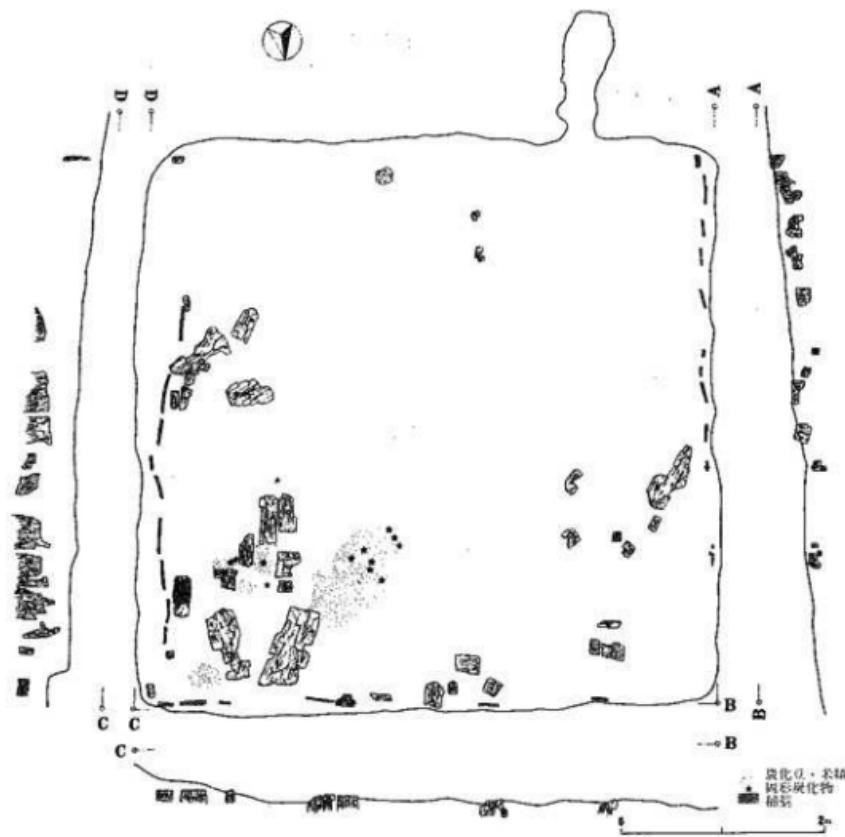
		S 1010住居跡			
		種別		65, 66, 67, 69~75	國勢
		國勢		15, 16, 17, 48~52	
性別	7T, 8T, 7U, 8U	東	西	南	北
法	壁長	5.78m	5.52m	5.58m	5.75m
壁高	45.3~77.2cm	29.7~36.8cm	41.0~77.9cm	4.5~18.7cm	
量	回溝幅	24~39cm	14.0~24.0cm	11.0~32.5cm	10.0~25.0cm
量	回溝深	3.4~31.5cm	4.9~21.7cm	5.1~12.5cm	6.0~16.1cm
面積		31.64m ²			
主軸方位	N→10.5°→E	形態	方	形	
理	上	1. 10YR 5/4 暗褐色 粘性有しまり有 10YR 5/6 黄褐色土 ブロック状に混入 炭化物 焼上若干混入 バ ミス全体に認められる。 2. 10YR 5/4 牆色 粘性有しまり有 10YR 5/6 黄褐色土 ブロック状に混入 炭化物部分的に若干混入 バ ミス全体に認められる。 3. 10YR 5/4 暗褐色 粘性有しまり有 バミス30~40%混入 炭化物混入 4. 10YR 5/4 細褐色 粘性有しまり有 バミス多量に混入 5. 10YR 5/4 に近い 黄褐色 粘性有しまり有 10YR 5/6 黄褐色土混入 6. 10YR 5/6 黄褐色 粘性有しまり有 炭化物混入 7. 10YR 5/4 細褐色 粘性有しまり有 黄褐色土混入 バミス多量に混入 8. 10YR 5/6 黄褐色 粘性有しまり有 10YR 5/6 黄褐色土10%混入 9. 10YR 5/6 暗褐色 粘性有しまり有 赤褐色燒土(緑・黒) 明赤褐色燒土(粒・塊) 炭化物等多量に混入 10. 2.5YR 5/6 赤褐色 粘性弱 しまり有 非常に硬いがモロイ			
壁		床面に対して傾斜は104.5~115°の範囲にある。 北東隅の壁は木の根の擾乱により、はっきりとは検出できなかった。			
床		焼失のためと思われる焼土及び炭化物、炭化材など床面全体に見られる。			
周溝		すべての壁面に検出された。溝溝内には堅物が炭化した状態で立てられたまま検出されている。 各隅に柱穴と思われるビットが検出された。その他の周溝内のビットは堅材を立てたものと思われる。			
ピット		P ₁ 29×32×56.4 南西隅 柱穴 P ₂ 12×31.5×57.3 北西隅 柱穴 P ₃ 26×35×51.6 北東隅 柱穴 P ₄ 28×30×54.5 南東隅 柱穴			
位	置	南壁 西寄り			
カ		1. 10YR 5/6 暗褐色 粘性弱 さらさらしている極少の小石及び細小の赤褐色燒土粒が混入 10YR 5/6 黄褐色土僅かに混入 炭化物混入 2. 10YR 5/6 暗褐色 粘性弱 5YR 5/6 晴赤褐色 燃土 5YR 5/6 明赤褐色燒土 (ともに厚2mm~30mm か たくてもよい) 等が多量に混入 3. 10YR 5/6 暗褐色 粘性有しまり有 炭化物2%混入 赤褐色燒土粒10%混入 4. 10YR 5/6 黑褐色 粘性弱 燃土粒及び炭化物を含む 5. 10YR 5/6 黑褐色 粘性弱 燃土粒及び炭化物を含む 6. 2.5YR 5/6 明赤褐色 粘性弱 非常に希かい 2.5YR 5/6 暗褐色(粘性弱柔軟かい)10%混入 10YR 5/6 暗褐 色土20%混入 全体にしまり有 炭化物混入 7. 3YR 5/6 明赤褐色 非常に希かい がもろい 8. 5YR 5/6 明赤褐色 非常に希かい がもろい 9. 5YR 5/6 赤褐色 粘性有しまり有 (粘土か熱を受けることにより変色) 10. 5YR 5/6 に近い赤褐色 粘性有しまり有 厚1mm~3mmの赤褐色燒土粒を微かに含む 11. 5YR 5/6 赤褐色 粘性有しまり有 熱を受けて粘土か変色したもの			
マ		袖部の芯材として何層石か、また天井部に用いられた同じく何層石かがそれぞれ検出された。 壁道部が第1号住居を切っている。			
透	物	この遺跡中最も遺物が多く出土した。床面から炭化した木・瓦が住居跡南側にとくに南北隅付近より多量 に出土、その一部は塊として出土している。また壁材も壁に立てかけてある状態のものや床面などより炭 化して多量検出された。漆器品も10個ほど出土している。土器碎片や須恵器片なども多数出土している。 また時代は異なるものの磨き石なども出土した。			
備	考	この住居跡は第1号住居を切っている。またカマドの塗装部が第1号住居を切っている。焼失のためと思 われる焼土や炭化物、炭化材などが床全面に見られる。また石も多数認められ、その大部分が熱を受けて もろくなっている。			

第60表 S1011住居跡観察表

S1011住居跡		伸 国	65, 66, 76~79			
		回 間	15, 17, 18, 32, 34			
出 区	7 S, 8 S, 7 T, 8 T	東 墓	西 墓	南 墓	北 墓	
法				(3.65m)	(3.59m)	
駁	4.93m					
駁	69.5~85.0m			56.0~81.0m	28.0~73.0m	
四	—					
溝	—					
渠	—					
面	16.31m					
主 横 方 位	N - 6.5° - E		形 态	方 向		
1.	10Y R 5% 黄 色 粘性強	しまり強	パミス無く僅かに混入			
2.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり強	パミス30%混入			
3.	1CY R 5% 黄褐色 粘性強	しまり強	10Y R 5% 黄褐色土 40%混入 ハミス30%から混入			
4.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり強	10Y R 5% に付い 黄褐色土 40%混入 10Y R 5% 黄褐色土がブロック状に10%混入			
5.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり有	10Y R 5% 黄褐色土10%混入			
6.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり有	黄褐色土ブロック状に混入 ハミス25%混入			
7.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり有	10Y R 5% 黄褐色土混入 ハミス40%から混入			
8.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり強	10Y R 5% 黄褐色土混入 ハミス40%混入			
9.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり有	10Y R 5% 黄褐色土30%混入 赤褐色土ブロック状に5%混入			
10.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり強	ハミス10%混入			
11.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり有	10Y R 5% 黄褐色土20%混入			
12.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり有	10Y R 5% 黄褐色土 20%混入			
13.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり有	10Y R 5% 黄褐色土 20%混入			
14.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり有	10Y R 5% 黄褐色土ブロック状に混入 ハミス10%混入			
15.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり有	10Y R 5% 黄褐色土 30%混入			
16.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり有				
範	表面に対する傾斜は93.5~107°の範囲にある。					
西	西壁は基、付近に切られているため検出できなかった。南壁・東壁の長さは認められた地点までの長さである。					
床	床面から多数掘り込みが検出されたが何であるかは不明である。 東壁中央付近よりわざわざあるが地力が検出された。					
四	周辺は認められなかった。					
ビ	1. 78×114×43.0 東床埋 何であるかは不明であるか。枕上が帶状に入っている。土器片(上脚部・須志器)も出土している。					
シ	コーナーのピット状のものではっきりピットと認められるものはなかった。 床面から多数掘り込みが検出されたが、ピットであると認められるものは検出されなかった。					
位	高	撫掌 西寄り				
カ	1.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり強	火井部の粘土 焼き灰中に混入		
カ	2.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり強	ハミス15%混入		
カ	3.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり有	ハミス10%炭化物1%混入		
カ	4.	2.5Y R 5% 本葉色 粘性弱	弱	火井部の粘土		
カ	5.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり有	10Y R 5% 黄褐色土5%混入		
カ	6.	10Y R 5% に付い 黄褐色 粘性強	しまり有	10Y R 5% 黄褐色土 1%混入		
カ	7.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり強	ハミス40%赤褐色土 1%混入		
カ	8.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり強	10Y R 5% 黄褐色土40%ハミス5%混入		
カ	9.	5.5Y R 5% 赤褐色 粘性強	しまり強	赤褐色土40%混入		
カ	10.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり強	赤褐色土40%混入		
カ	11.	5.5Y R 5% 赤褐色 粘性強	やわらかい	明赤褐色土1%混入		
カ	12.	5.5Y R 5% 明赤褐色 粘性強	やわらかい	明赤褐色土を少含む地土		
カ	13.	7.5Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり弱	やわらかい		
カ	14.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり強	0.1~0.5mの小石含む		
カ	15.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	やわらかい	赤褐色土 灰化物5%混入		
カ	16.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり有	赤褐色土灰化物5%混入		
カ	17.	10Y R 5% 黄褐色 粘性強	しまり有	明赤褐色土を含む		
カ	カマドの油垢等の西側が母、母子房によって切られている。カマドの油垢及び火井部等の粘土状況は良好であった。 カマド東側にある穴については性質等不明。					
カ	油の部分の芯性として河原石が使用されていた。カマド内及び周辺から土器片多く出土。					
造	物	カマド内及びその周囲より卓巻管・土器器など多數出土している。				
施	考	住居跡の南側のピットと性質との関係は明らかではない。				



第65図 S I 010 住居跡、S I 011 住居跡、S I 012 住居跡



第66図 S I 010 住居跡炭化物、炭化材出土状態

P316-4
植物遺存体としてはトチノ実、米、豆類、茅、稻穀等がある。このうちトチノ実は第6号住居跡で多量に採取され、茅は第19住居跡、他の米、豆類、稻穀等は第10号住居跡で大量に検出されている。いづれも炭化した状態である。

第66図は第10号住居跡における炭化米、豆類、炭化材の出土状況を示したものである。炭化米及び豆類は住居跡の北東隅に広く分布した状態で検出されているが、このうち炭化米については、曲物に入った状態、おにぎり状に固結した状態で検出されたものもある。また稻穀によると思われる縦状製品も1ヶ所から検出されている。

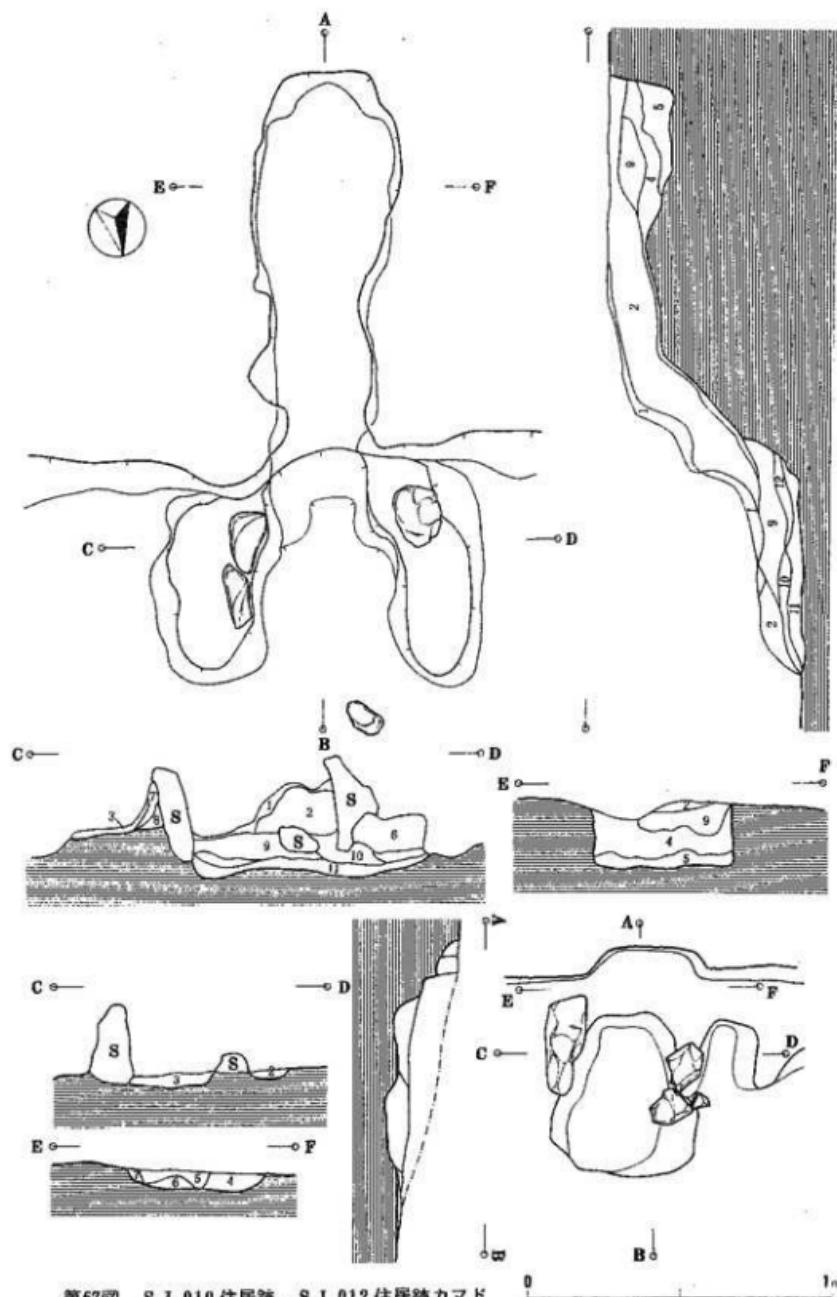
第75図1・2は曲物に入った状態の炭化米である。どちらも同一の曲物の断片と思われるが、推定すれば径30cm程になると思われ、残存高は最大で10.3cmを測る。底板は殆ど欠落している。

第61表 S 1012住居跡観察表

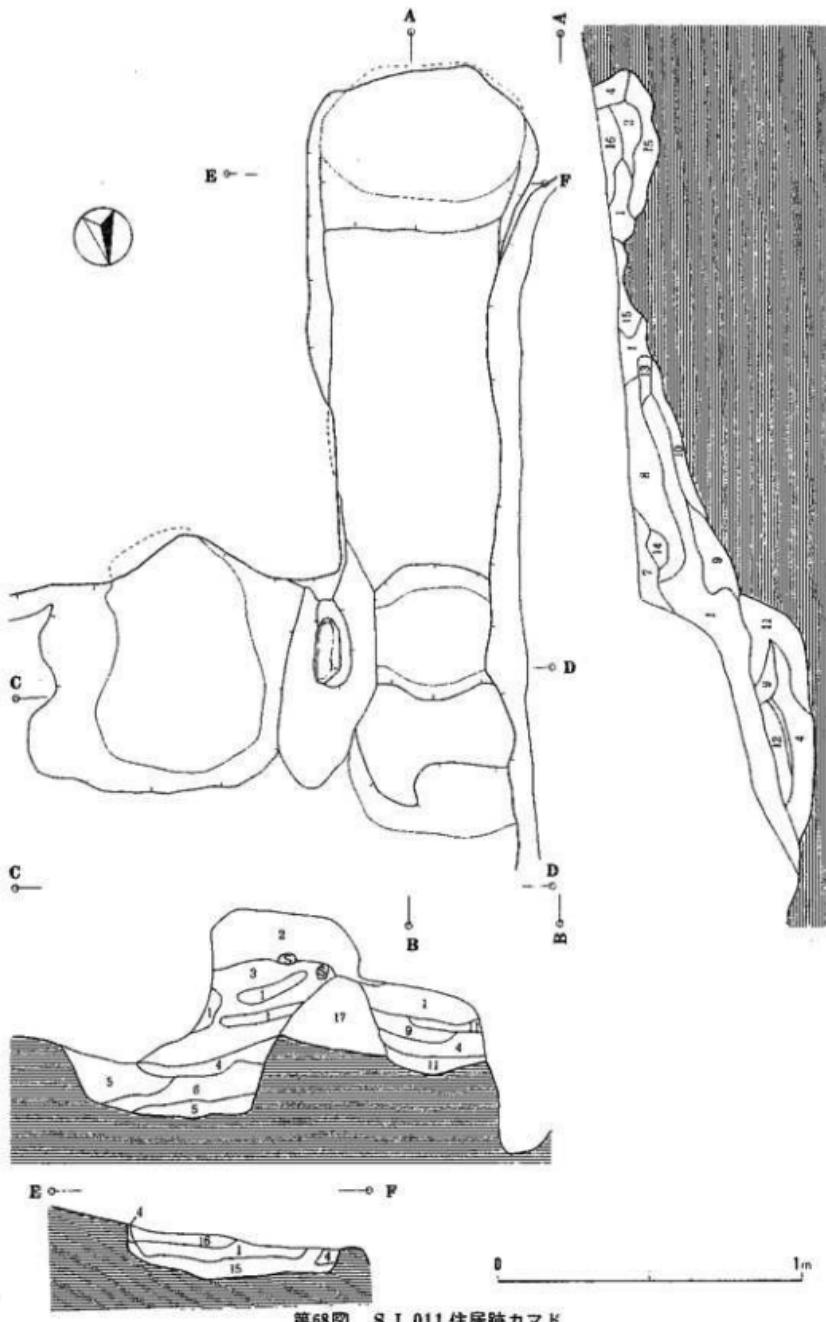
S 1012住居跡		挿 図	65, 67
		図 版	15, 18
検出区	6 T, 7 T, 6 U, 7 U		
	東 壁	西 壁	南 壁
法 距 長	2.37m	2.40m	2.53m
壁 高	15.3~23.1cm	4.0~10.7cm	8.0~20.1cm
周溝幅	—	—	—
周溝深	—	—	—
面 横	5.89m ²		
主軸方位	N-10.5°-E	形 范	方 形
覆 土	1. 10Y R 3/4 暗褐色 粘性あり 孔隙小 バミス多量に含む 2. 10Y R 3/4 暗褐色 粘性あり 孔隙小 赤褐色焼土を部分的に僅かに含む 3. バミスブロック 4. 10Y R 3/4 黒褐色 粘性あり 孔隙中 バミス僅かに混入 5. 10Y R 3/4 暗褐色 粘性あり 孔隙小 バミス多量に混入		
壁	床面に対する傾斜は94~126°の範囲にある 北壁の一部は第10号住居跡のカマド煙道部によって切られている。		
周 清	検出されなかった		
ビ ッ ト	P ₁ 25×27×16.0 カマド左側 P ₂ 17.5×19×7.3 南西隅 他には検出されなかった		
位 置	南壁 西寄り		
カ	1. 5 Y R 3/4 赤褐色焼土 粘性強 しまり有 2. 10Y R 3/4 黑褐色 粘性有 しまり有 赤褐色焼土僅かに混入 3. 10Y R 3/4 黑褐色 粘性強 しまり強 赤褐色焼土 灰化物混入		
マ	4. 10Y R 3/4 暗褐色 粘性強 しまり有 赤褐色焼土混入 5. 10Y R 3/4 暗褐色 粘性有 しまり有 赤褐色焼土塊及び炭化物混入 6. 5 Y R 3/4 赤褐色焼土 粘性有 しまり有 7. 10Y R 3/4 暗褐色 粘性有 しまり有 赤褐色焼土混入		
ド	袖部の芯材として河原石が使用されている。保存状態はあまり良好とはいえない。袖の部分の粘土などはほとんど認めることはできなかった。		
備 考	この住居跡は第15号土壇を切っている。また第10号住居跡のカマド煙道部によって北壁を切られている。		

第62表 S K(f)033土壤観察表

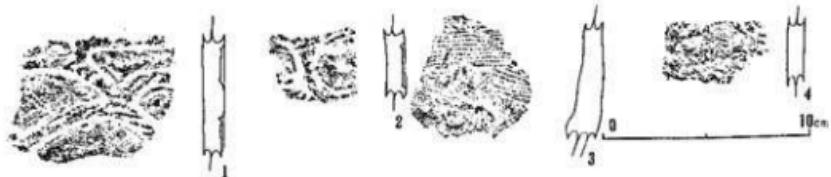
S K(f)033土壤		挿 図	65
		図 版	15
検出区	6 T	規 模・形 态	100×72cm 楕円形
深 さ	100cm	面 横	0.67m ²
種 見 状 況	第12号住居跡東南隅に接して確認された。 開口部は僅かに第12号住居跡によって切られている。		
覆 土	暗褐色土のはば1層である。炭化物が比較的多く混入している。		



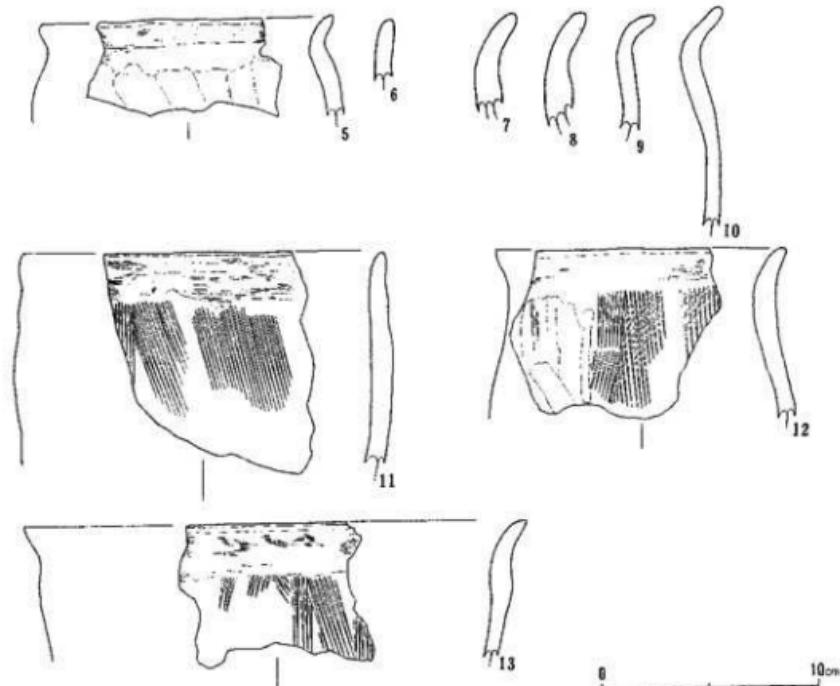
第67図 S I 010 住居跡、S I 012 住居跡カマド



第68図 S I 011 住居跡カマド



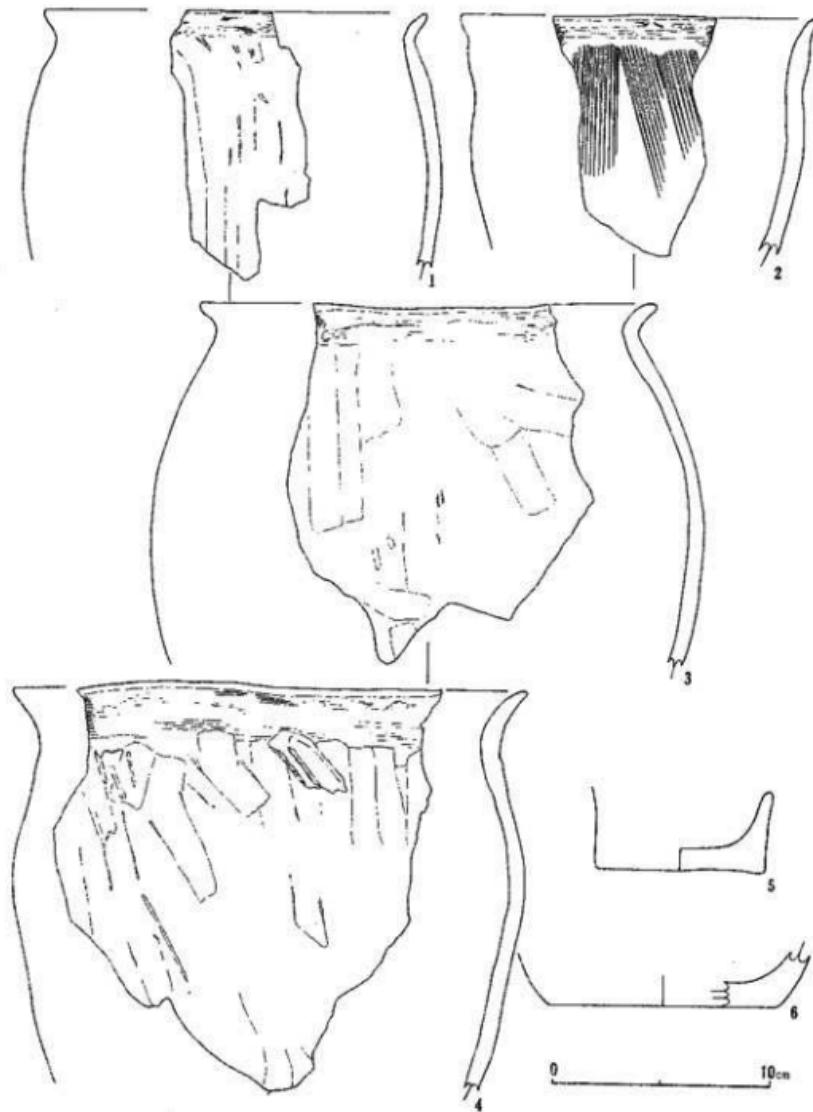
第69図 S1 010 住居跡出土遺物



第70図 S1 010 住居跡出土遺物(1)

第63表 S1 010 住居跡出土遺物(1)

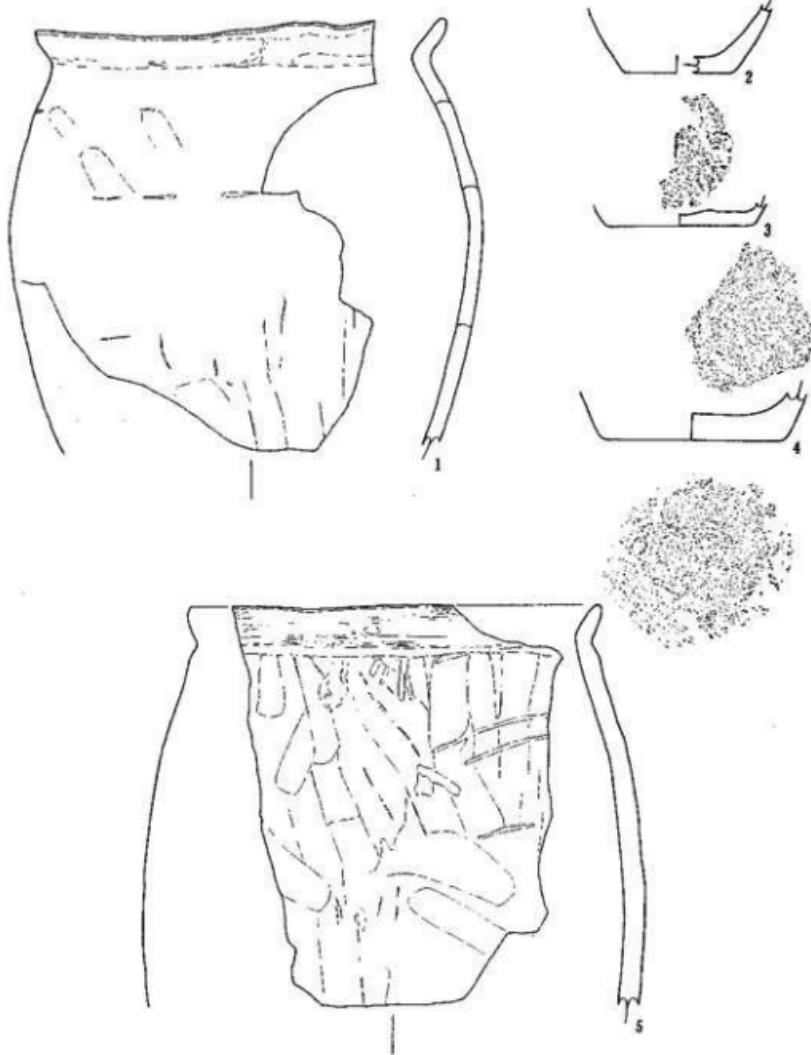
測定番号	測定部位	形状	主な特徴	測定番号	測定部位	主な特徴	地城
1	S1 010-1 骨 破片	柱状	縦溝有り	1	骨	柱状	柱状骨
2	S1 010-2 骨 破片	柱状	縦溝有り	2	骨	柱状	柱状骨
3	S1 010-3 骨 破片	柱状	縦溝有り	3	骨	柱状	柱状骨
4	S1 010-4 骨 破片	柱状	縦溝有り	4	骨	柱状	柱状骨
5	S1 010-5 骨 破片	柱状	縦溝有り	5	骨	柱状	柱状骨
6	S1 010-6 骨 破片	柱状	縦溝有り	6	骨	柱状	柱状骨
7	S1 010-7 骨 破片	柱状	縦溝有り	7	骨	柱状	柱状骨
8	S1 010-8 骨 破片	柱状	縦溝有り	8	骨	柱状	柱状骨
9	S1 010-9 骨 破片	柱状	縦溝有り	9	骨	柱状	柱状骨
10	S1 010-10 骨 破片	柱状	縦溝有り	10	骨	柱状	柱状骨
11	S1 010-11 骨 破片	柱状	縦溝有り	11	骨	柱状	柱状骨
12	S1 010-12 骨 破片	柱状	縦溝有り	12	骨	柱状	柱状骨
13	S1 010-13 骨 破片	柱状	縦溝有り	13	骨	柱状	柱状骨



第71図 S I 010 住居跡出土遺物(2)

第64表 S I 010 住居跡出土遺物(2)

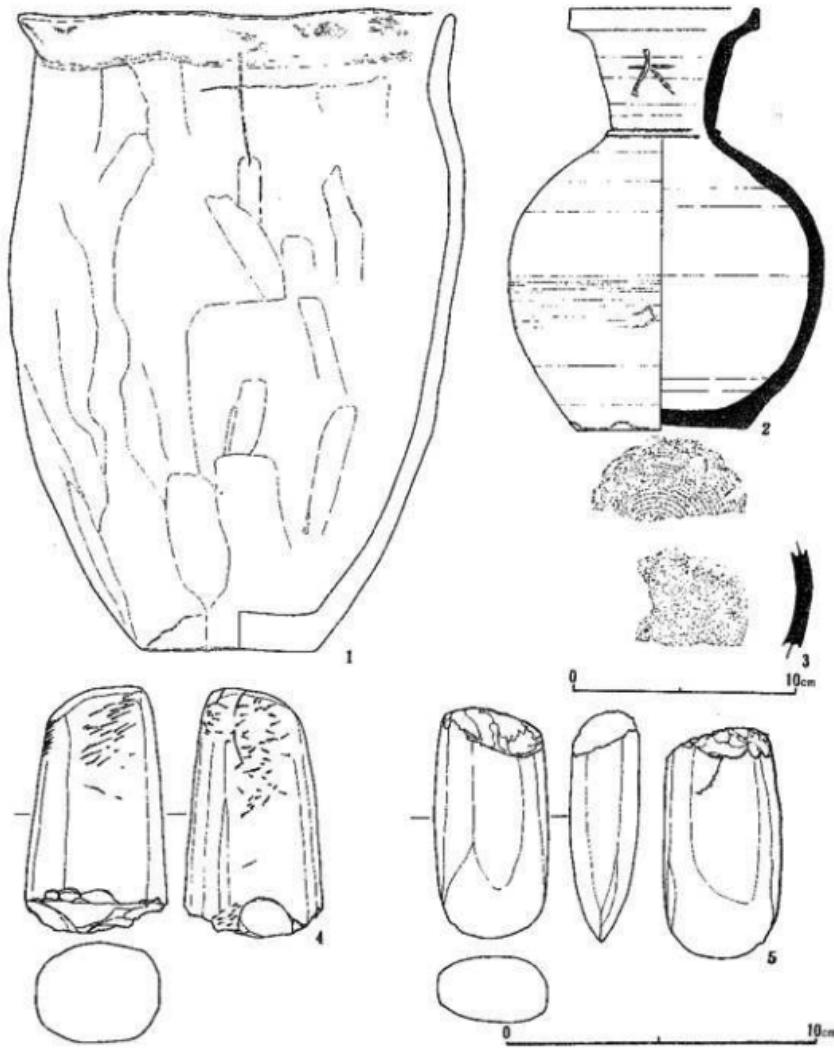
番号	出土地点	断片	高さ	幅	厚さ	材質	表面	内部	測定 (mm)		高さ	幅	厚さ	地質
									外	内				
1	S I 010	裏	口縁部	17.8	—	—	縦溝テクスチャ	縫合テクスチャ	12.0	8.0	1.5	縫合テクスチャ	1.5	縫合テクスチャ
2	S I 010	裏	口縁部	11.6	—	—	縦溝テクスチャ	縫合テクスチャ	11.6	7.5	1.5	縫合テクスチャ	1.5	縫合テクスチャ
3	S I 010	裏	口縁部	17.1	—	—	縦溝テクスチャ	縫合テクスチャ	17.1	11.5	1.5	縫合テクスチャ	1.5	縫合テクスチャ
4	S I 010	裏	底	12.4	—	—	縦溝テクスチャ	縫合テクスチャ	12.4	10.0	1.5	縫合テクスチャ	1.5	縫合テクスチャ
5	S I 010	裏	底	—	—	—	ナシ	ナシ	縫合テクスチャ	縫合テクスチャ	1.0	縫合テクスチャ	1.0	縫合テクスチャ
6	S I 010	裏	底	—	—	—	ナシ	ナシ	縫合テクスチャ	縫合テクスチャ	1.0	縫合テクスチャ	1.0	縫合テクスチャ



第72図 S1010住居跡出土遺物(3) 10cm

第65表 S1010住居跡出土遺物(3)

番号	形態種類	断面・基部	寸法 (cm)	材質	特徴	発見場所	成形	色	調子	備考
1	S.I. 009	口幅狭	19.0×11.0	陶土	直腹平底、縦縫合、内側サビ有り	縫合ナット、縫合、内側サビ有り	輪入・手造	褐色(7.23R5)	縫合に砂附有り	良
2	S.I. 010	口幅狭	19.0×11.0	陶土	直腹平底、縫合ナット、内側サビ有り	縫合ナット、縫合、内側サビ有り	輪入・手造	褐色(7.23R5)	縫合に砂附有り	良
3	S.I. 010	口幅狭	19.0×11.0	陶土	直腹平底、縫合ナット、内側サビ有り	縫合ナット、縫合、内側サビ有り	輪入・手造	褐色(7.23R5)	縫合に砂附有り	良
4	S.I. 010	口幅狭	19.0×11.0	陶土	直腹平底、縫合ナット、内側サビ有り	縫合ナット、縫合、内側サビ有り	輪入・手造	褐色(7.23R5)	縫合に砂附有り	良
5	S.I. 010	口幅狭	19.0×11.0	陶土	直腹平底、縫合ナット、内側サビ有り	縫合ナット、縫合、内側サビ有り	輪入・手造	褐色(7.23R5)	縫合に砂附有り	良



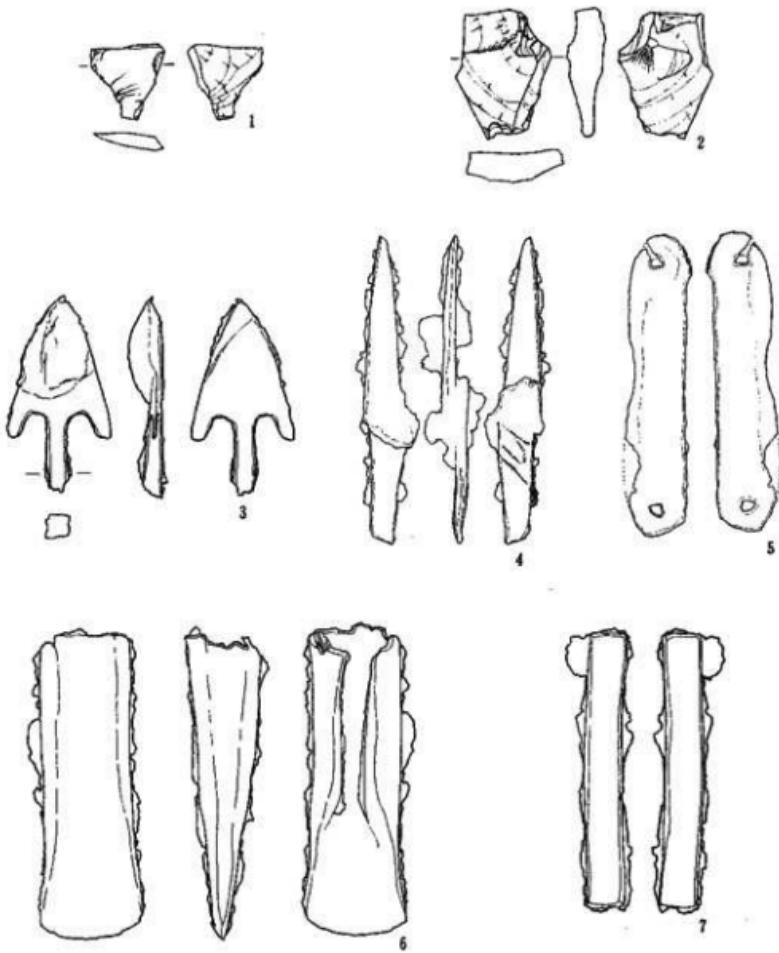
第73図 S I 010 住居跡出土遺物(4)

第66表 S I 010住居跡出土遺物(4)

種類	出土地点	形	基盤	底	高さ(cm)	幅	深さ(cm)	外 面	内 面	成形	色	質	性	地
1	S I 003	空	空	平	20.5	20.7	6.5	板状	板状	板打	褐色(7.5YR 4/6)	滑らか	直	
2	S I 003	圓	圓盤	板状	8.8	14.5	7.8	板状	板状	板打上げ打	褐色(7.5YR 4/6)	滑らか	直	
3	S I 003	空	空	板状	—	—	—	板状	板状	板打上げ打	褐色(7.5YR 4/6)	滑らか	直	

第67表 S I 010住居跡出土遺物(石器)

種類番号	出土地点	形	直 径	厚 さ	重 量	寸 法	成形	色
4	S I 010	磨製石斧	丸	8.2	3.5	223.0	木基のみ残存。表面もからだ割れものであったことが観測される。	
5	S I 010	磨製石斧	丸	7.3	3.2	22.1	木基少少残。表面特に木基に研摩を施すつくらず、刃部も円錐を施く。使用感は低い。	



第74図 S I 010 住居跡出土遺物（石器、鐵器）

0

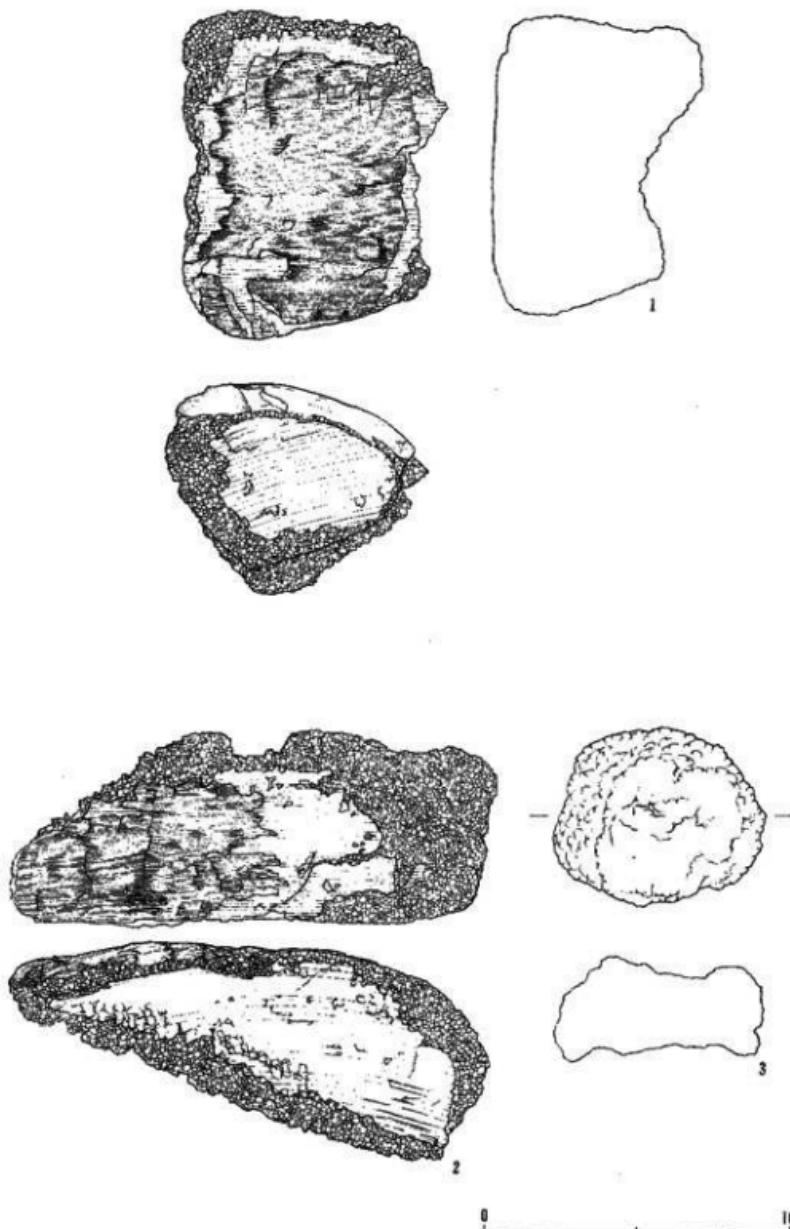
10cm

第68表 S I 010 住居跡出土遺物（石器）

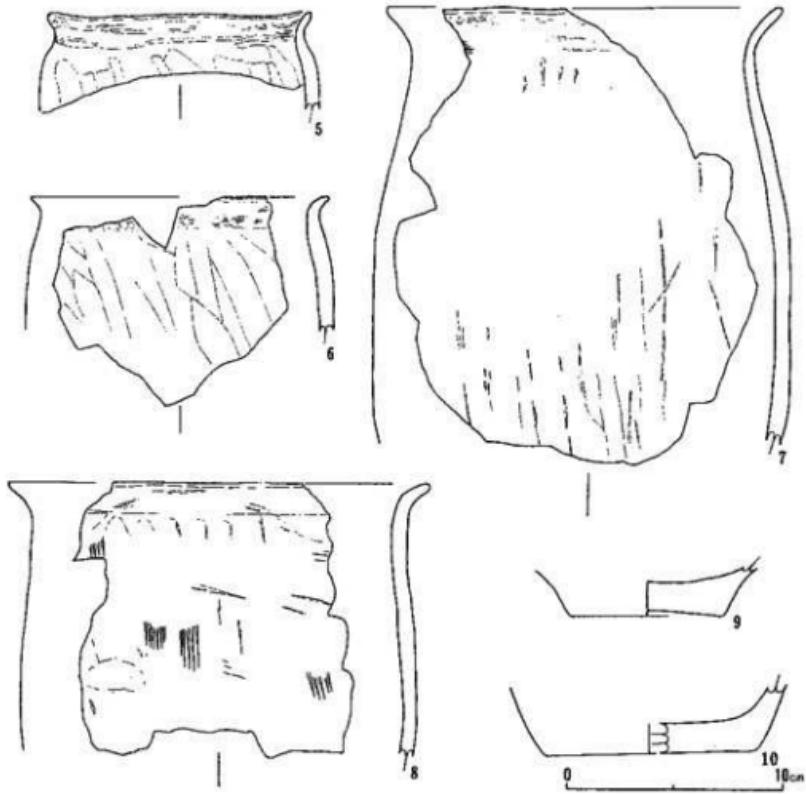
遺物番号	出土地点	器種	直徑	延長	厚さ	材質	備考
1	S I 010	石 矛	直径2.4	2.4	2.5	2.3	太頭石矛頭に刃先端を削り取る
2	S I 010	石 矛	直径2.4	2.4	2.5	2.3	太頭石矛頭に刃先端を削り取る

第69表 S I 010 住居跡出土遺物（鐵器）

遺物番号	出土地点	器種	直 徑	長 度	厚さ	材質	備考
3	S I 010	鐵 斧	最大幅2.6	長さ36.0	厚さ0.2	生鐵	斧頭部から半分は鉛錫を含んでいて、他の部分は純鐵でできている。
4	S I 010	鐵 斧	最大幅2.6	長さ36.0	厚さ0.2	生鐵	斧頭部から半分は鉛錫を含んでいて、他の部分は純鐵でできている。
5	S I 010	鐵 斧	最大幅2.6	長さ36.0	厚さ0.2	生鐵	斧頭部から半分は鉛錫を含んでいて、他の部分は純鐵でできている。
6	S I 010	鐵 斧	最大幅2.6	長さ36.0	厚さ0.2	生鐵	斧頭部から半分は鉛錫を含んでいて、他の部分は純鐵でできている。
7	S I 010	鐵 斧	最大幅2.6	長さ36.0	厚さ0.2	生鐵	斧頭部から半分は鉛錫を含んでいて、他の部分は純鐵でできている。



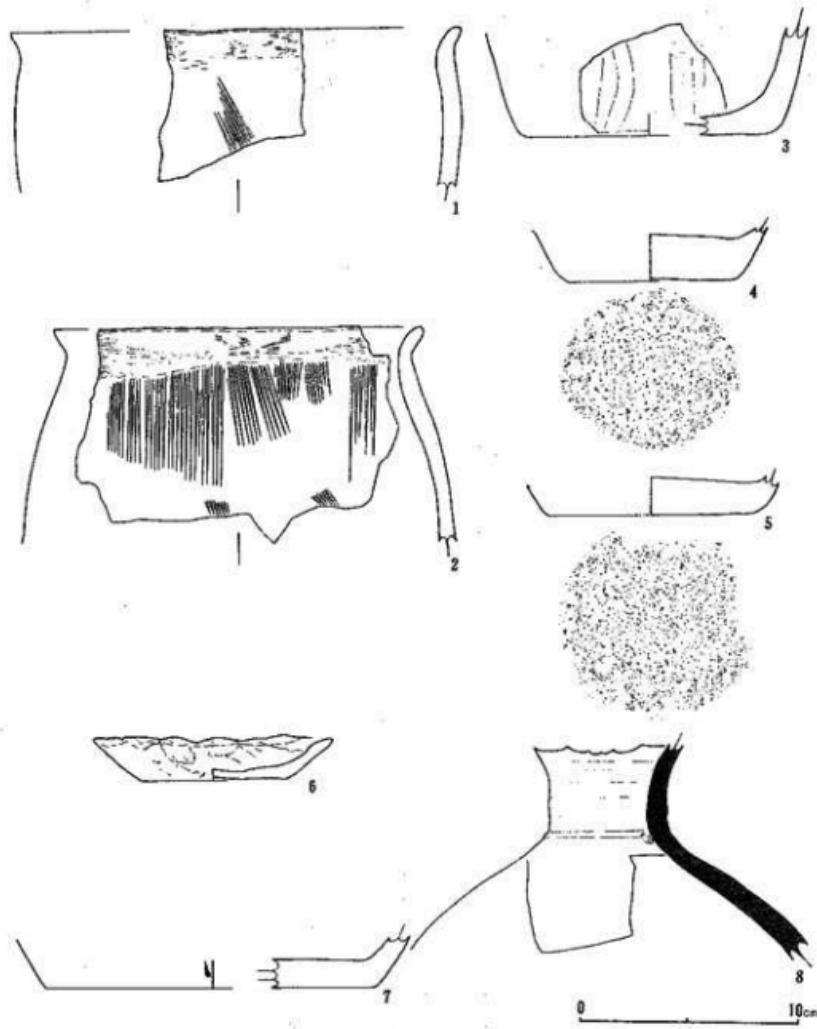
第75圖 S I 010 住居跡出土遺物（炭化物）



第77図 S I 011住居跡出土遺物(1)

第70表 S I 011住居跡出土遺物(1)

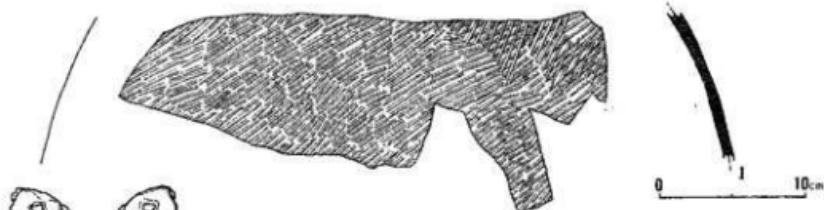
番号	出土施設名	形	基	寸	目	基	寸	目	基	寸	目	基	寸	目	基	寸	目	基	寸	目
1	S I 011	板			縦木下に上縁付木、斜面付木、				縫合上縫合		大斜面、斜面角、									
2	S I 011	板			縦木ひじに上縁付木				縫合上縫合		大斜面、斜面角、									
3	S I 011	板			縦木、上縁付木				縫合上縫合		大斜面、斜面角、									
4	S I 011	板			自然木文				縫合上縫合		大斜面、斜面角、									
5	S I 011	板	山脚部-脚部	12.25	縫合ナギ、縫合、斜面セグリ				縫合ナギ、縫合、斜面セグリ		大斜面、斜面角、									
6	S I 011	板	山脚部-脚部	12.40	縫合ナギ、斜面セグリ				縫合ナギ		大斜面、斜面角、									
7	S I 011	板	山脚部-脚部	12.27 (19.30)	縫合ナギ、斜面セグリ				縫合、斜面セグリ		大斜面、斜面角、									
8	S I 011	板	山脚部-脚部	12.27	縫合ナギ、斜面セグリ				縫合ナギ、斜面セグリ		大斜面、斜面角、									
9	S I 011	板	山		セグリ				セグリ		大斜面、斜面角、									
10	S I 011	板	板						セグリ		大斜面、斜面角、									



第78図 S I 011 住居跡出土遺物(2)

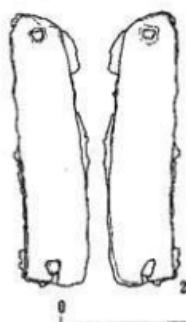
第71表 S1011住居跡出土遺物(2)

編號	出土地點	器物	地 形	施 工 (工)		施 工 (地)	施 工 (支)	施 工 (車)	色 裝	其 他	地 号
				口	世						
1	8.1.703	鐵	河 岸 - 領域	(12.5)	-	西岸中央 - 水平+1.5	傾斜+1.5	傾斜+1.5	鐵山川漆器	黑色地 (1.5T H.1.5)	神之谷村地番
2	6.2.703	鐵	河 岸 - 領域	-	-	テラス上	テラス上	傾斜+1.5	鐵山川漆器	黑色地 (1.5T H.1.5)	神之谷村地番
3	7.2.703	鐵	河 岸 - 領域	(17.0)	-	傾斜+1.5、傾斜、傾斜+1.5	傾斜+1.5	傾斜+1.5	鐵山川漆器	黑色地 (1.5T H.1.5)	神之谷村地番
4	8.1.703	鐵	河 岸 - 領域	-	-	傾斜+1.5	傾斜+1.5	傾斜+1.5	鐵山川漆器	黑色地 (1.5T H.1.5)	神之谷村地番
5	5.1.601	青 銅	河 岸 -	-	-	水底	水底	水底	鐵山川漆器	銀色地 (1.5W H.1.5)	神之谷村地番
6	5.1.601	青 銅	河 岸 - 地盤	-	-	地盤上	地盤上	地盤上	鐵山川漆器	銀色地 (1.5W H.1.5)	神之谷村地番
7	5.1.601	青 銅	河 岸 -	-	-	地盤上	地盤上	地盤上	鐵山川漆器	銀色地 (1.5W H.1.5)	神之谷村地番
8	5.1.601	青 銅	河 岸 - 地盤	-	-	地盤上	地盤上	地盤上	鐵山川漆器	銀色地 (1.5W H.1.5)	神之谷村地番



第72表 S I 011住居跡出土遺物(3)

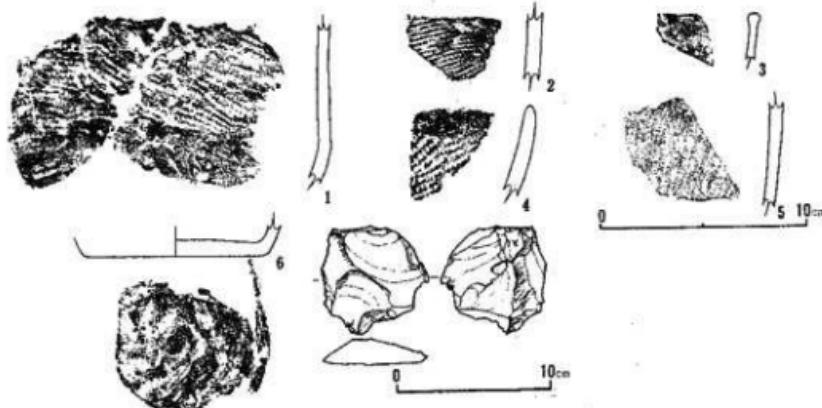
探査 番号	出土地点	器種	形状	大きさ(cm)		表面(地文)	成形	色調	性上	免成
				口径	体径					
1	S I 011	石	圓錐			外縁	切打	暗褐色	無	良好



第73表 S I 011住居跡出土遺物(鉄器)

探査番号	出土地点	器種	計測値		成形
			最大	最小	
1	S I 011	鐵製品	長軸 16.9 短軸 9.0 厚 0.4	短軸 10.2 厚 0.3	片刃刀形 精良

第79図 S I 011住居跡出土遺物(3)



第80図 S K (F) 033土壤出土遺物

第74表 S K(F) 033土壤出土遺物

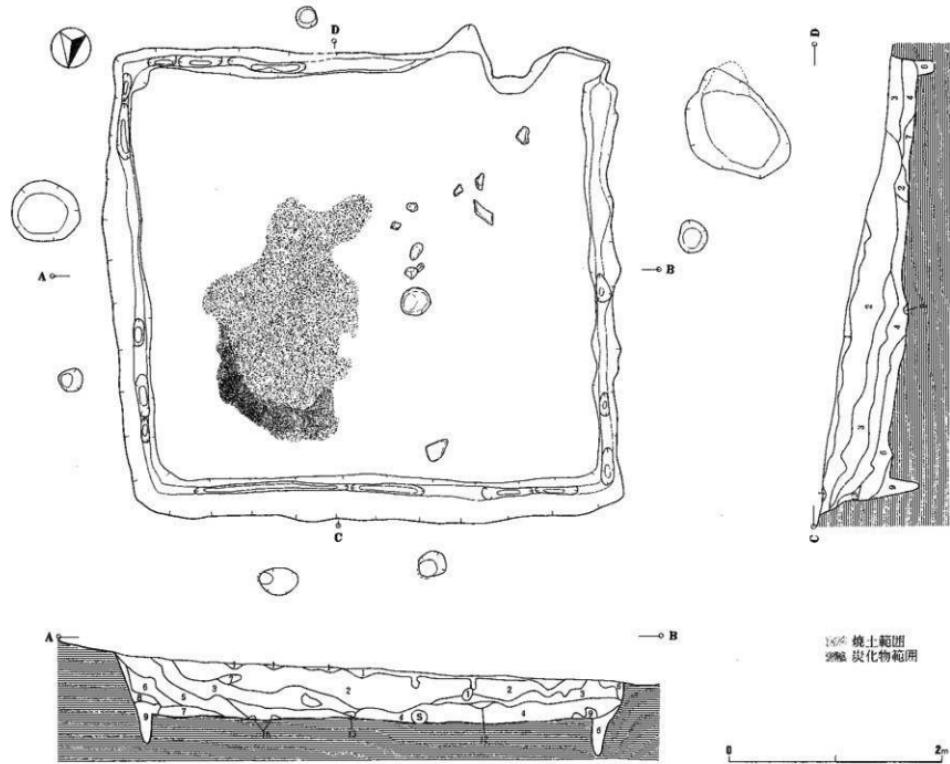
探査番号	出土場所	器種	大きさ(cm)	測定値(地文)		表面(地文)	成形	色調	性上	免成
				内径	外径					
1	S K(F) 033	石	圓錐	1.2	2.4	丸孔、1.2cm。圓錐部を有する。	精み上打	黒褐色(タマゴ色)	斜面を含む	良
2	S K(F) 033	石	圓錐	1.2	2.4	丸孔、1.2cm。	精み上打	黒褐色(タマゴ色)	斜面を含む	良
3	S K(F) 033	石	圓錐	1.2	2.4	丸孔、1.2cm。	精み上打	黒褐色(タマゴ色)	斜面を含む	良
4	S K(F) 033	石	圓錐	1.2	2.4	丸孔、1.2cm。	精み上打	黒褐色(タマゴ色)	斜面を含む	良
5	S K(F) 033	石	圓錐	1.2	2.4	丸孔、1.2cm。	精み上打	黒褐色(タマゴ色)	斜面を含む	良
6	S K(F) 033	石	圓錐	1.2	2.4	丸孔、1.2cm。	精み上打	黒褐色(タマゴ色)	斜面を含む	良

第75表 S K(F) 033土壤出土遺物(石器)

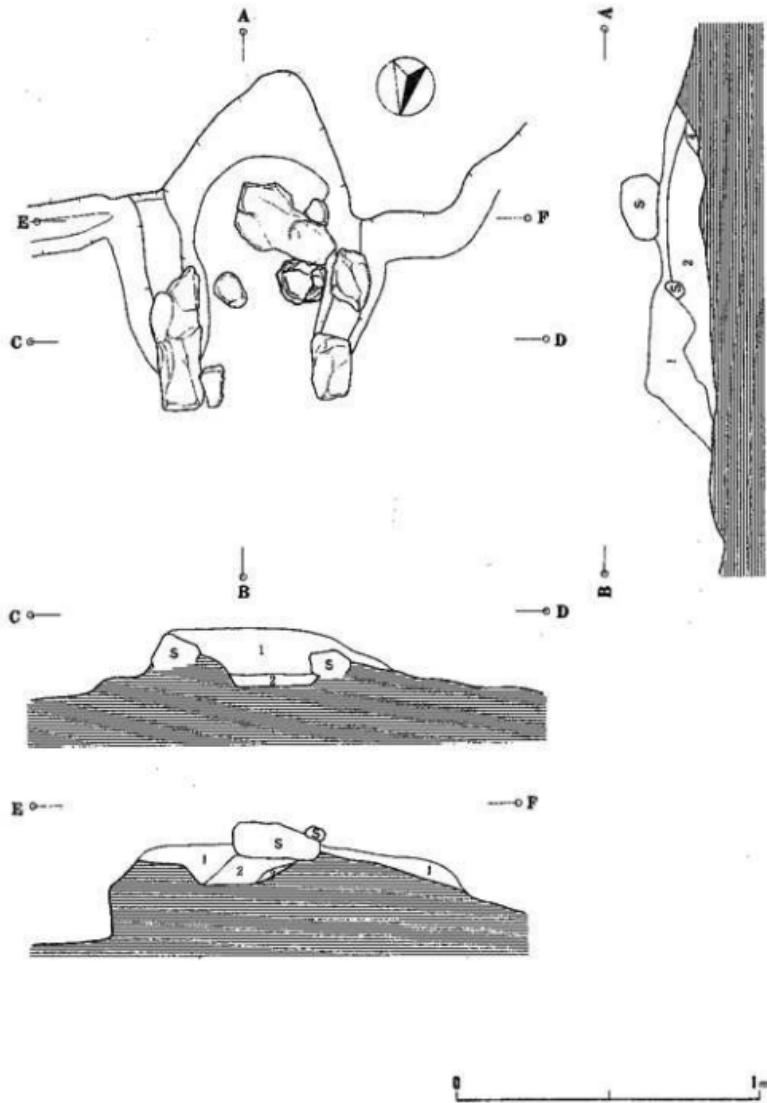
探査番号	出土場所	器種	大きさ(cm)	測定値		表面(地文)
				長	幅	
7	S K(F) 033	石	円錐	2.3	2.4	丸孔として浅く円形面を残す。

第76表 S1014住居跡観察表

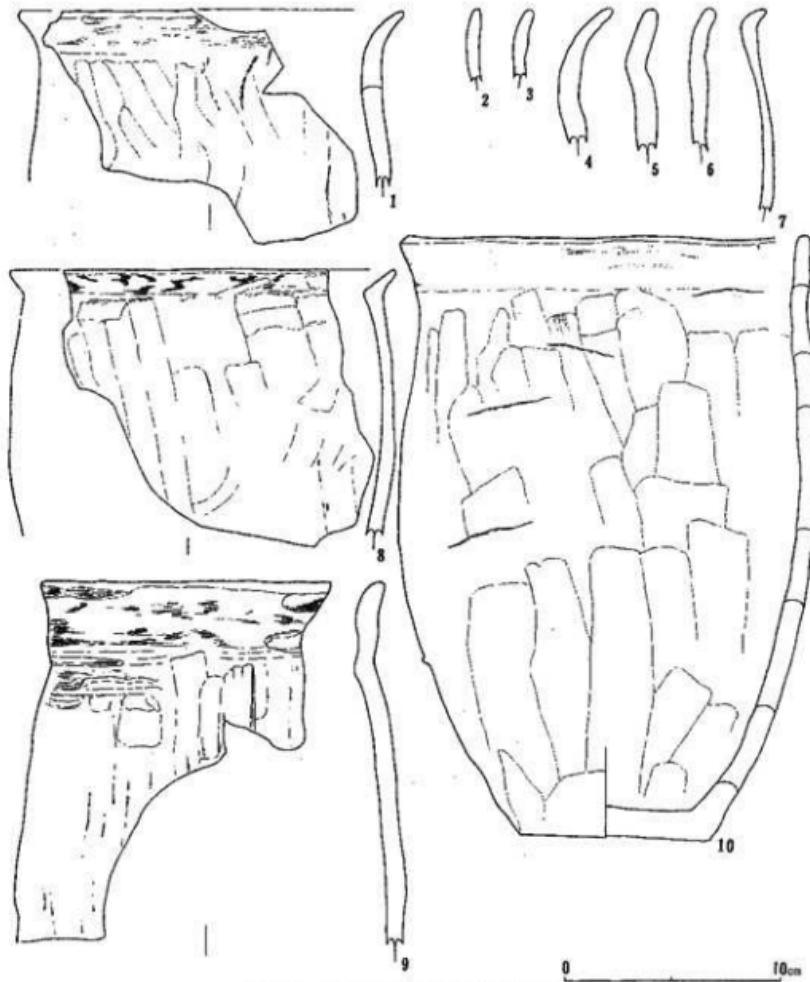
S1014住居跡		插図	81-89		
		図版	19, 55, 56, 57		
検出区	10J, 11J, 10K, 11K				
法	東壁 壁長 壁高 周溝幅 周溝深 面積	4.48m 35.8~86.2cm 8.0~17.0cm 11.3~28.0cm 21.03m ²	西壁 4.51m 7.4~51.7cm 9.5~26.0cm 12.1~26.9cm	南壁 5.02m 13.3~27.9cm 9.5~18.5cm 13.3~25.1cm	北壁 4.65m 63.5~84.7cm 11.0~17.5cm 16.4~29.7cm
主軸方位	N-6.5°-E	形態	方形		
覆土	1. 10Y R 3% 黒褐色 粘性中 孔隙小 バミス殆ど含まない 2. 10Y R 3% 喰褐色 粘性弱 孔隙大 バミスを最も多く含む 3. 10Y R 3% 喰褐色 粘性弱 孔隙大 バミスを多く含む 4. 10Y R 3% 喰褐色 粘性中 孔隙中 バミス極く僅かに含む ロームが混入している 5. 10Y R 3% 褐色 粘性中 孔隙中 バミス極く僅かに含む ロームが混入している 6. 10Y R 3% 黒褐色 粘性中 孔隙小 バミス極く僅かに含む 7. 10Y R 3% 喰褐色 粘性中 孔隙小 バミス極く僅かに含む 8. 10Y R 3% 褐色 粘性中 孔隙小 バミス殆ど含まない ロームが混入している 9. 10Y R 3% 褐色 粘性強 孔隙小 粘土層 10. 7.5Y R 3% 褐色 粘性弱 孔隙小 かたくしまっている 焼土 11. 10Y R 3% 黒褐色 粘性中 孔隙小 バミス殆ど含まない 12. 10Y R 3% 黒褐色 粘性中 孔隙中 細砂粒を含む 13. 10Y R 3% 黒褐色 粘性弱 孔隙大 バミスの混入が著しい				
壁	床面に対する傾斜は93~111°の範囲にある				
床	住居址北東側を中心として火床が広がっている				
周溝	すべての辺より検出された他の住居址と比較して深くなっている				
ピット	柱穴と思われるPitの検出はできなかった。周溝内の凹地は壁材を立てかけたあとではないかと思われる。				
カマド	位置 南壁 西寄り 1. 10Y R 3% 黒褐色 粘性中 孔隙小 焼土粒極く僅かに混入 径3~5mmのバミス混入 2. 10Y R 3% 喰褐色 粘性強 孔隙小 煙道部においては焼土粒の混入が見られる 3. 7.5Y R 3% 褐色 粘性中 孔隙小 焼土層 4. 10Y R 3% 褐色 粘性強 孔隙小 ローム層 袖部の芯材、また天井部の芯材としてそれぞれの河原石が用いられる。支脚として河原石の上に土器の裏の底部を伏せて乗せて使用していた。煙道は短く約1m程度しかない。カマド全体としては、焼土及び炭化物の確認は極く僅かにすぎないが、土器が非常に多く出土している。				
遺物	カマドの付近及び内外から多数出土している				



第81図 SI 014 住居跡



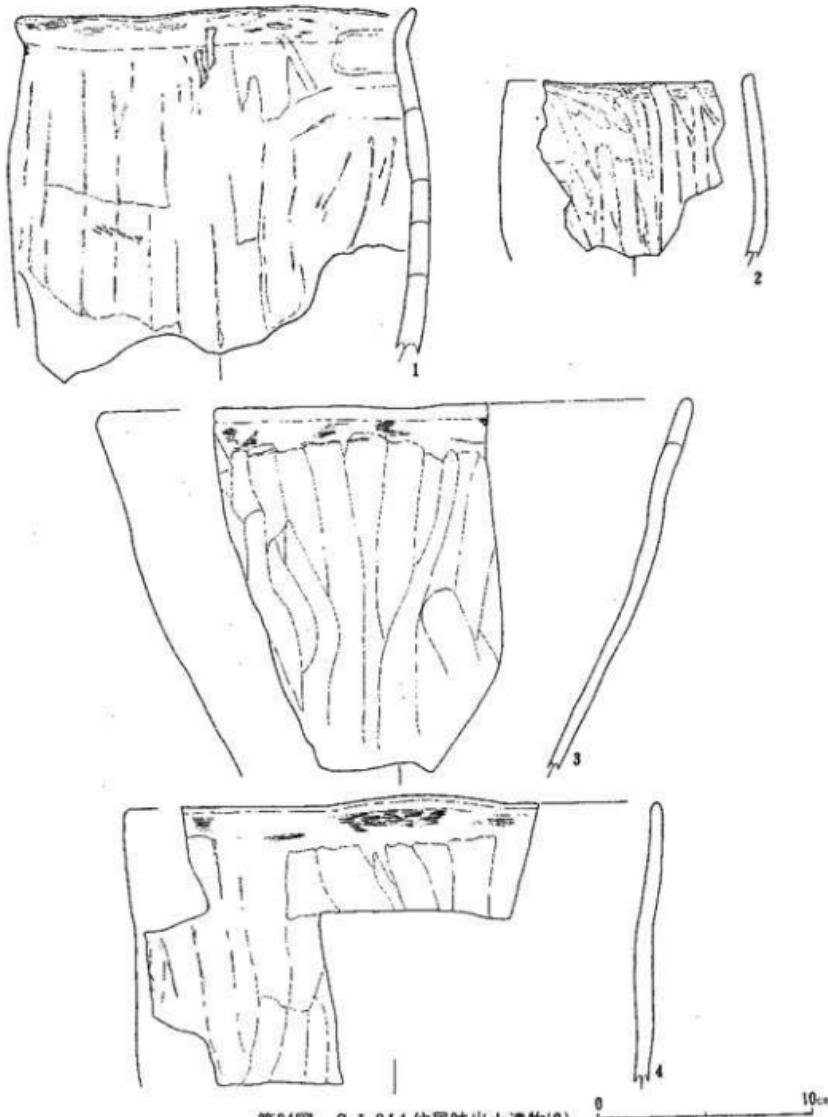
第82図 S I 014 住居跡カマド



第83図 S I 014 住居跡出土遺物(1)

第77表 S I 014住居跡出土遺物(1)

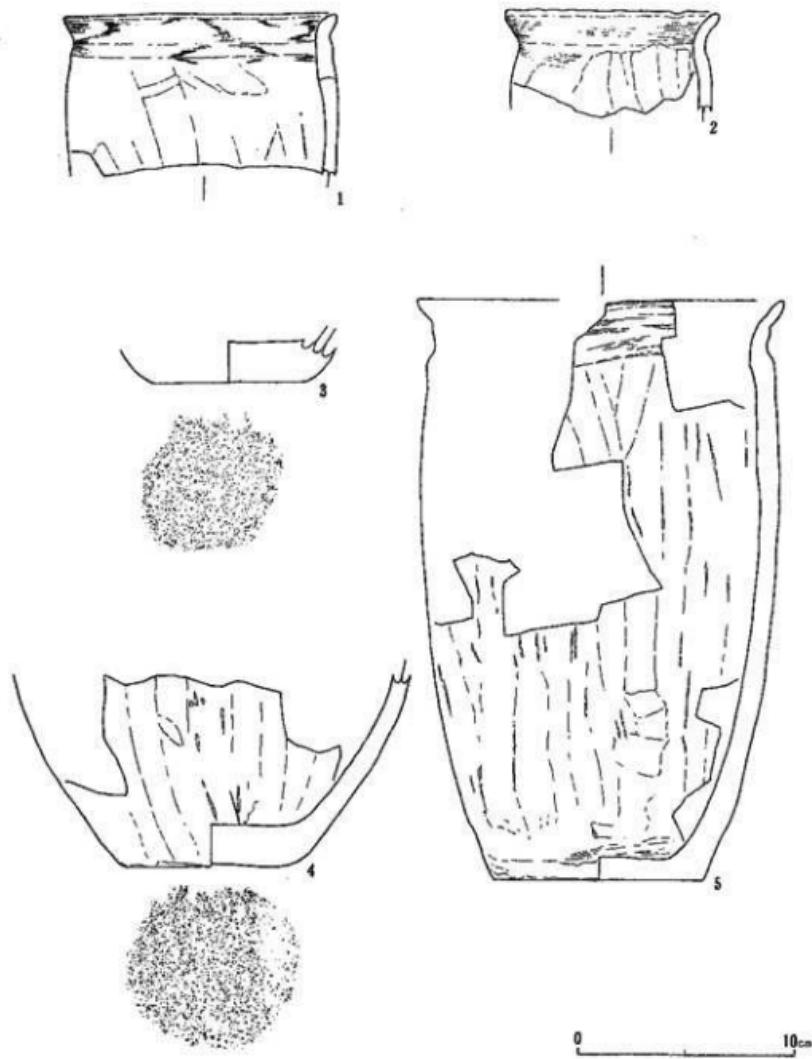
番号	出走馬名	年齢	性別	馬体重(kg)		調教回数	馬番	馬名(性別)		成績	色	調教者	所有者
				現	前			内	外				
1	S-1 004	4歳	母	420	-	17	-	アーヴィング	メス	勝利	黒	山本	日高企業
2	S-1 004	4歳	母	420	-	17	-	アーヴィング	メス	勝利	黒	山本	日高企業
3	S-1 004	4歳	母	420	-	17	-	アーヴィング	メス	勝利	黒	山本	日高企業
4	S-1 004	4歳	母	420	-	17	-	アーヴィング	メス	勝利	黒	山本	日高企業
5	S-1 004	4歳	母	420	-	17	-	アーヴィング	メス	勝利	黒	山本	日高企業
6	S-1 004	4歳	母	420	-	17	-	アーヴィング	メス	勝利	黒	山本	日高企業
7	S-1 004	4歳	母	420	-	17	-	アーヴィング	メス	勝利	黒	山本	日高企業
8	S-1 004	4歳	母	420	-	17	-	アーヴィング	メス	勝利	黒	山本	日高企業
9	S-1 004	4歳	母	420	-	17	-	アーヴィング	メス	勝利	黒	山本	日高企業
10	S-1 004	4歳	母	420	-	17	-	アーヴィング	メス	勝利	黒	山本	日高企業



第84図 S1014 住居跡出土遺物(2)

第84表 S1014 住居跡出土遺物(2)

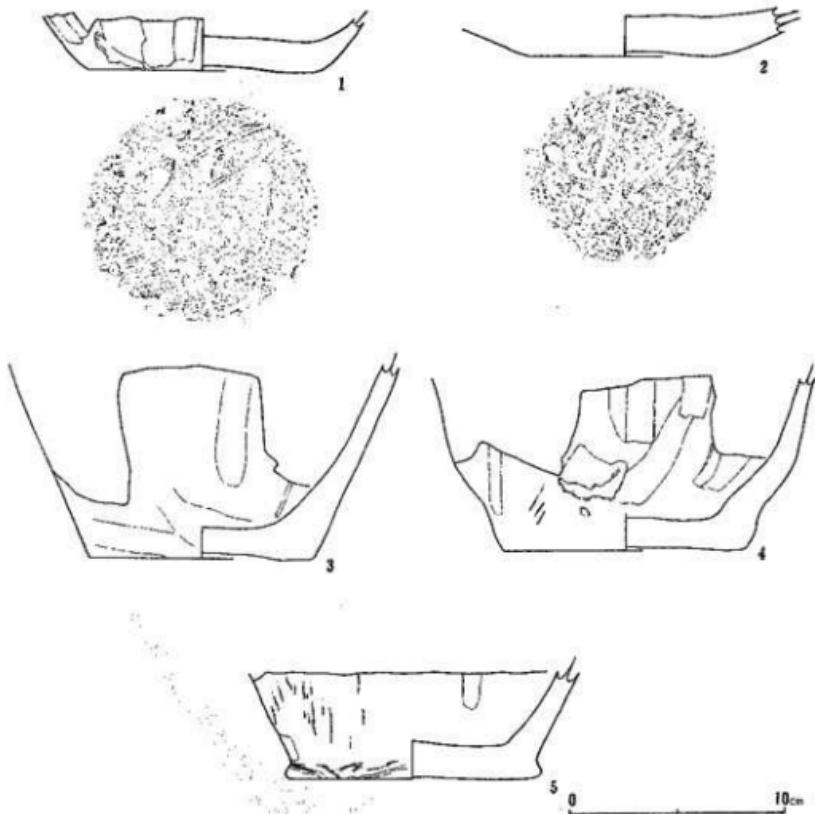
番号	出土地点	基盤	底	高さ	口径 (cm)	底	縁	内面	外	縁	内面	外	縁	内面	外	縁	内面	外	縁
1	S 1. 951	瓦	直筒一輪底	—	—	直筒二輪、内面有光	直筒二輪、内面有光	直筒二輪											
2	S 1. 951	瓦	直筒一輪底	—	—	直筒二輪、内面有光	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	
3	S 1. 951	瓦	直筒一輪底	—	—	直筒二輪、内面有光	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	
4	S 1. 951	瓦	直筒一輪底	—	—	直筒二輪、内面有光	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	直筒二輪	



第85図 S1014 住居跡出土遺物(3)

第79表 S1014 住居跡出土遺物(3)

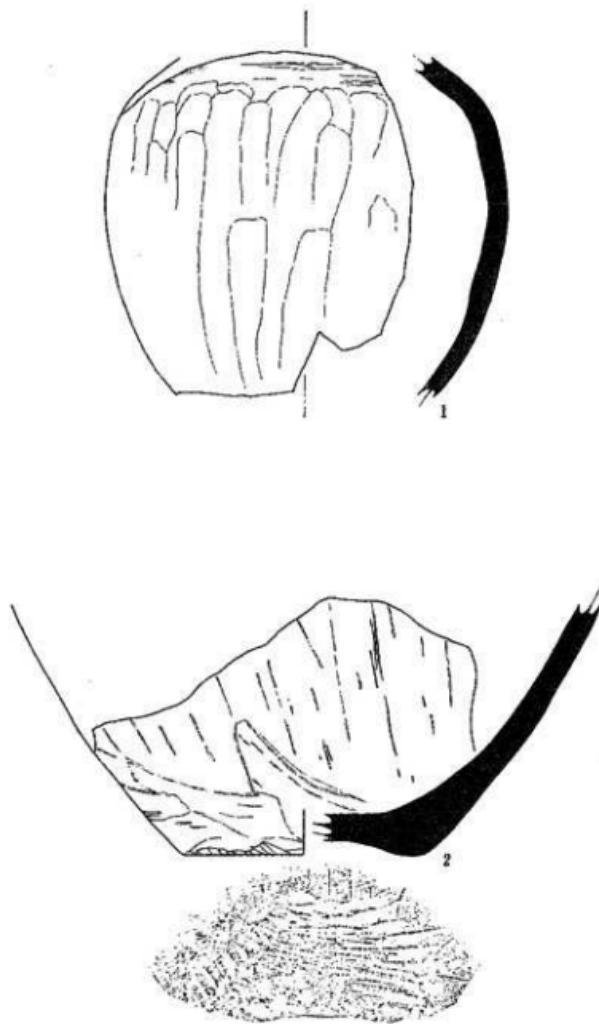
品目 番号	出土場所	器形	直 径	厚 度	材質	寸 法 (mm)		材 料	施 工	施 工	施 工
						外	内				
1	S1014-1	山根縫一鉢底	12.5	—	陶片	12.5	12.5	粘土	手打	手打	手打
2	S1014-2	山根縫一鉢底	12.0	—	陶片	12.0	12.0	粘土	手打	手打	手打
3	S1014-3	鉢	—	—	陶片	—	—	粘土	手打	手打	手打
4	S1014-4	鉢底	—	—	陶片	—	—	粘土	手打	手打	手打
5	S1014-5	山根縫一鉢底	12.2	—	陶片	12.2	12.2	粘土	手打	手打	手打
6	S1014-6	山根縫一鉢底	12.0	—	陶片	12.0	12.0	粘土	手打	手打	手打



第86図 S1 014 住居跡出土遺物(4)

第80表 S1 014 住居跡出土遺物(4)

番号 番号	出土場所	形態	体積	法 全 (cm)		測 定 (地文)		形 態	色 調	性 質	説明
				口徑	底径	高さ	表面				
1. S1 014	灰	表 部		(10.6)			褐色 茶褐色	ナナ	褐色 茶褐色	淡褐色 (10YR 8/2)	褐色に砂粒を含む 真
2. S1 014	灰	表 部		9.6			褐色底、頂に ケズリで裏無	ナナ	褐色 茶褐色	褐色 (10YR 8/2)	褐色に砂粒を含む 真
3. S1 014	灰	側面～底部		10.3			褐色ケズリ、 ケズリ	ナナ	褐色 茶褐色	褐色 (7.5YR 8/2)	褐色を含む やや真
4. S1 014	灰	側面～底部		(11.2)			褐色、ケズリ、 ケズリ	ナナ	褐色 茶褐色	褐色 (7.5YR 8/2)	褐色を含む 真
5. S1 014	灰	側面～底部		9.8			ケズリ	ナナ	褐色 茶褐色	褐色 (7.5YR 8/2)	褐色を含む 真

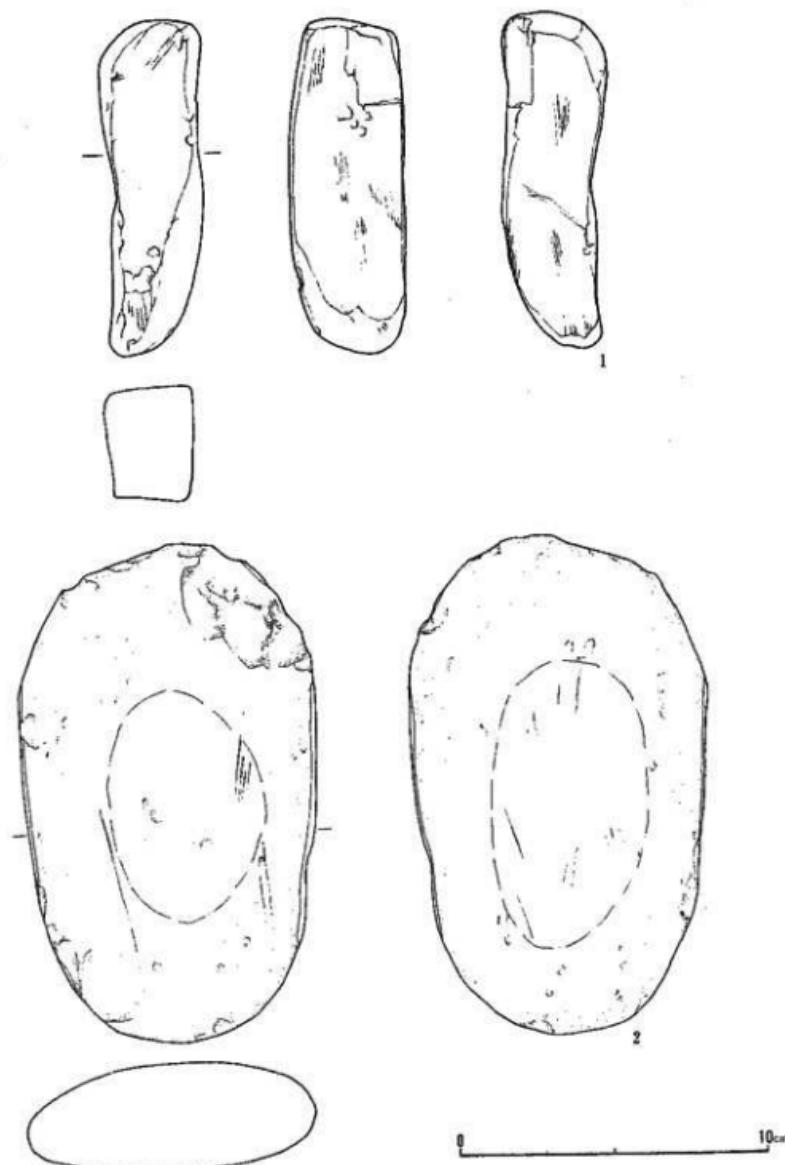


第87図 S I 014 住居跡出土遺物(5)

10cm

第81表 S I 014 住居跡出土遺物(5)

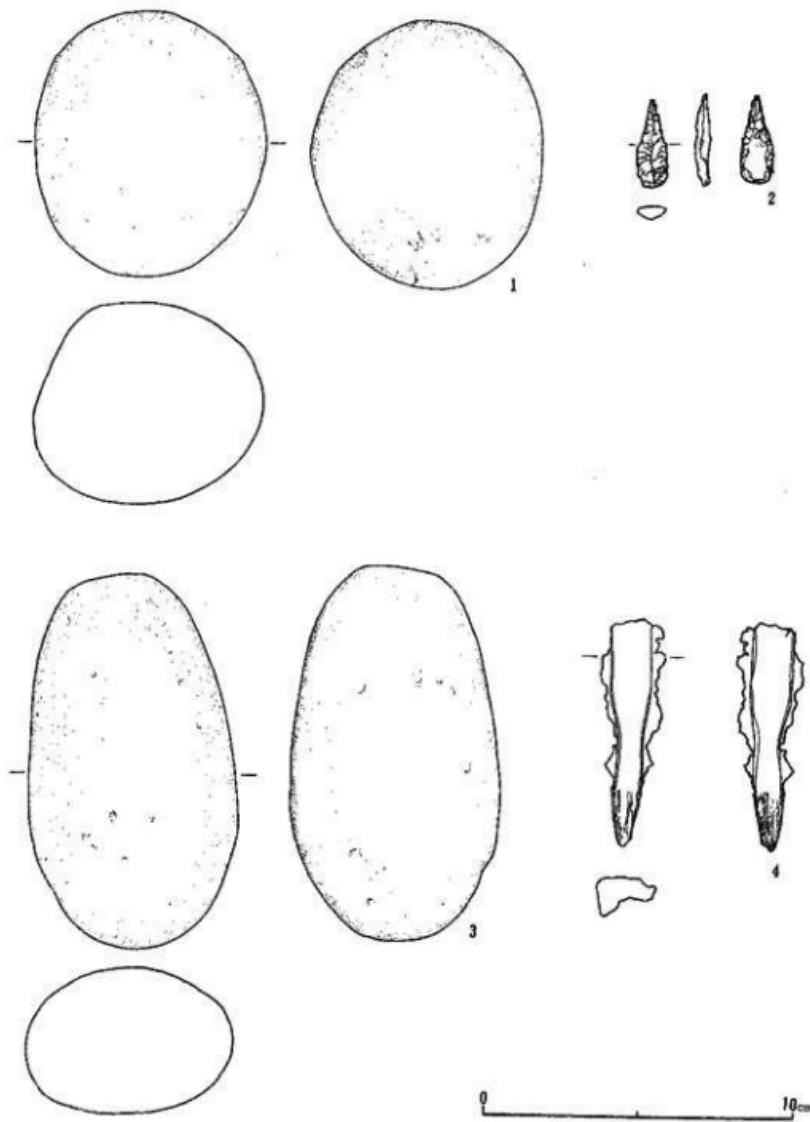
件號	出土地點	器形	高 度	直 径 (cm)	底 面	壁 厚 (mm)	底 面	成 形	色 調	有 本	地質
I - 51-014	住 居 跡	盆	19.2	35.0	17.0	2.0	1.5	模 1/2	青 紫 色 (7.5% N)	無	無
I - 51-014	住 居 跡	盆	19.2	35.0	17.0	2.0	1.5	模 1/2	青 紫 色 (2.0%)	無	無



第88図 S I 014 住居跡出土遺物（石器）(1)

第82表 S I 014住居跡出土遺物（石器）

標印番号	出土地点	形	質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ	重さ	記	備
1	S I 014	板	石	細長石	11.1	2.0	3.6	102.4	片面を鉈面として用いていながら、うち二個は使用が長い両面を鉈面を形成しない。
2	S I 014	板	石	細長石	14.5	6.7	2.6	138.0	扁平な円錐の両面及び側面を鉈面としている。薄斜削面は鋸く小凹凸。



第89図 S I 014 住居跡出土遺物（石器、鉄器）(2)

第83表 S I 014 住居跡出土遺物（石器）

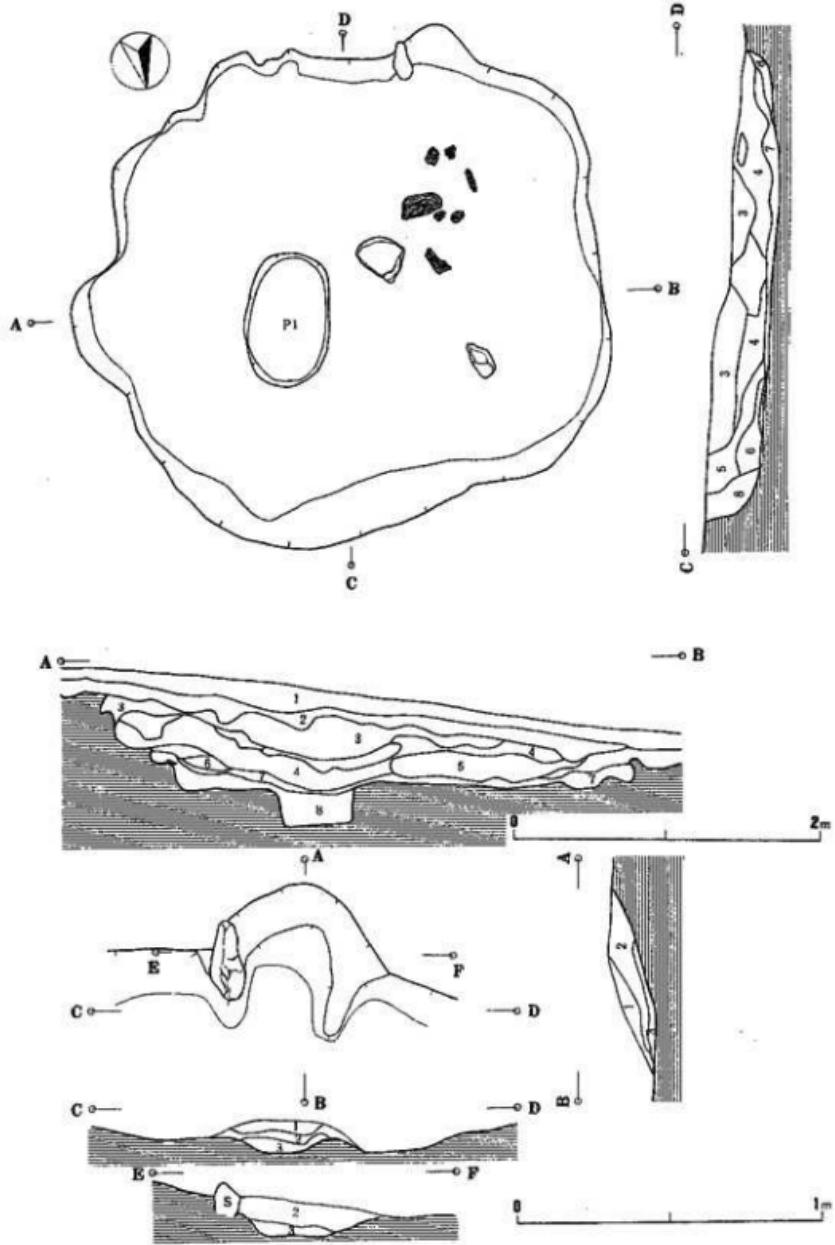
件目番号	出土場所	種類	石質	片刃(幅)	厚さ(mm)	重さ	度	度
1	S I 014	手斧		8.6	7.3	7.0	600.0	
2	S I 014	石 破	玄武岩	2.9	1.6	0.4	1.3	上端に手舟な形を有する。刃部に複数の凹面を有する。刃部は片面に磨かれていた。
3	S I 014	手斧		12.4	7.9	5.0	694.0	一端平打ち面が形成される。

第84表 S I 014 住居跡出土遺物（鉄器）

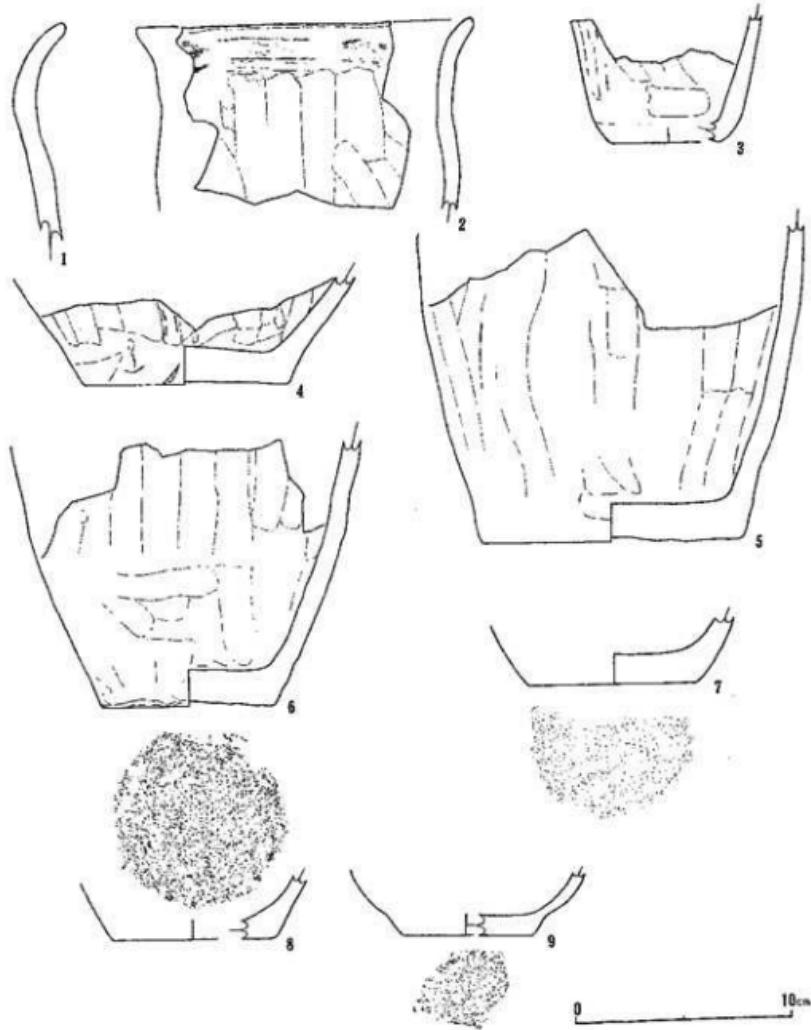
件目番号	出土場所	種類	目	度	度
4	S I 014	小 刀	柳太刀7.5	刃部厚3.4	可燃灰土文化。基部に木質柄が付いていた。

第85表 SI015住居跡観察表

SI015住居跡		地図 90, 91		
		図版 20, 58		
検出区		11M, 11N, 12M, 12N		
法	壁長	東壁 3.71m	西壁 2.53m	南北 3.16m
法	壁高	28.0~45.5cm	8.0~22.0cm	10.0~15.0cm
量	周溝幅	—	—	—
量	周溝深	—	—	—
面積	面積	9.06m ²		
覆土	1. 10YR 3/4 黒褐色 粘性弱 孔隙小 根による搅乱 バミス混入量極く僅か 2. 10YR 3/4 黒褐色 稍粘質 孔隙小 径5~10mm程度の礫が混入する バミス混入量極く僅か 3. 10YR 3/4 黒褐色 稍粘質 孔隙大 バミス多く混入 4. 10YR 3/4 暗褐色 稍粘質 孔隙大 バミス多く混入 径3mm以上の大きな粒のものが目立つ 5. 10YR 3/4 暗褐色 稍粘質 孔隙中 バミス量最も多く 径1mm以下の細かなものが主をなす 6. 10YR 3/4 黒褐色 粘性弱 孔隙小 バミス殆ど混入しない 7. 10YR 3/4 黒褐色 粘性大 孔隙大 岩化物層を含む バミス混入なし 8. 10YR 3/4 黄褐色 粘性極大 孔隙小 径10mm程のロームブロック 岩化物粒を含む			
壁	床面に対する傾斜は97~12°の範囲にある			
調査	検出されなかった			
ピット	P ₁ 56.5×89×26.0 何であるかは不明 この内より多数の土器片が出土している			
カマド	位置 南壁 西寄り 覆土 1. 10YR 3/4 暗褐色 粘性弱 孔隙有 燃土粒を僅かに含む バミス僅かに含む 2. 10YR 3/4 黄褐色 粘性弱 孔隙小 色調は3と漸移する バミス僅かに含む 3. 7.5YR 3/4 明褐色 粘性弱 孔隙小 色調は下層部赤味を増す			
ド	袖の部分の芯材として河原石が使用されていた カマド内より数点の土器片が出土した			
備考	形はいびつで整っていない			



第90図 S I 015 住居跡



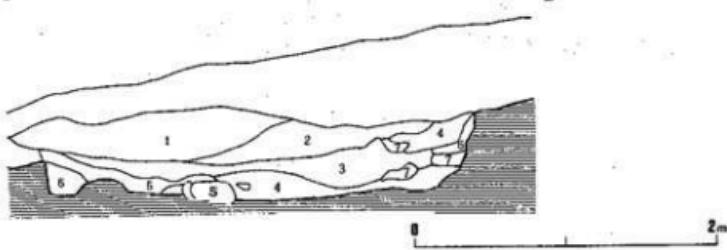
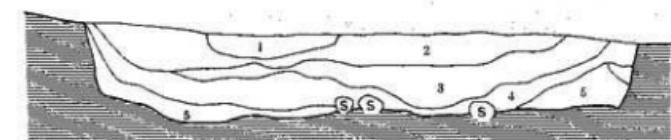
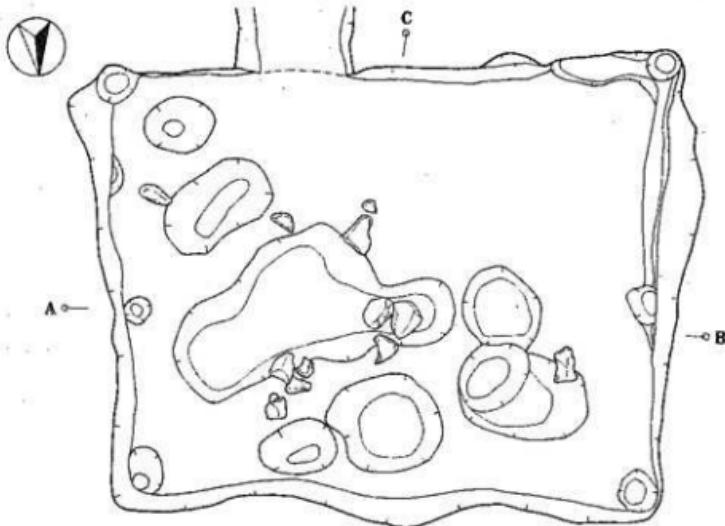
第91図 SI 015 住居跡出土遺物

第86表 SI 015 住居跡出土遺物

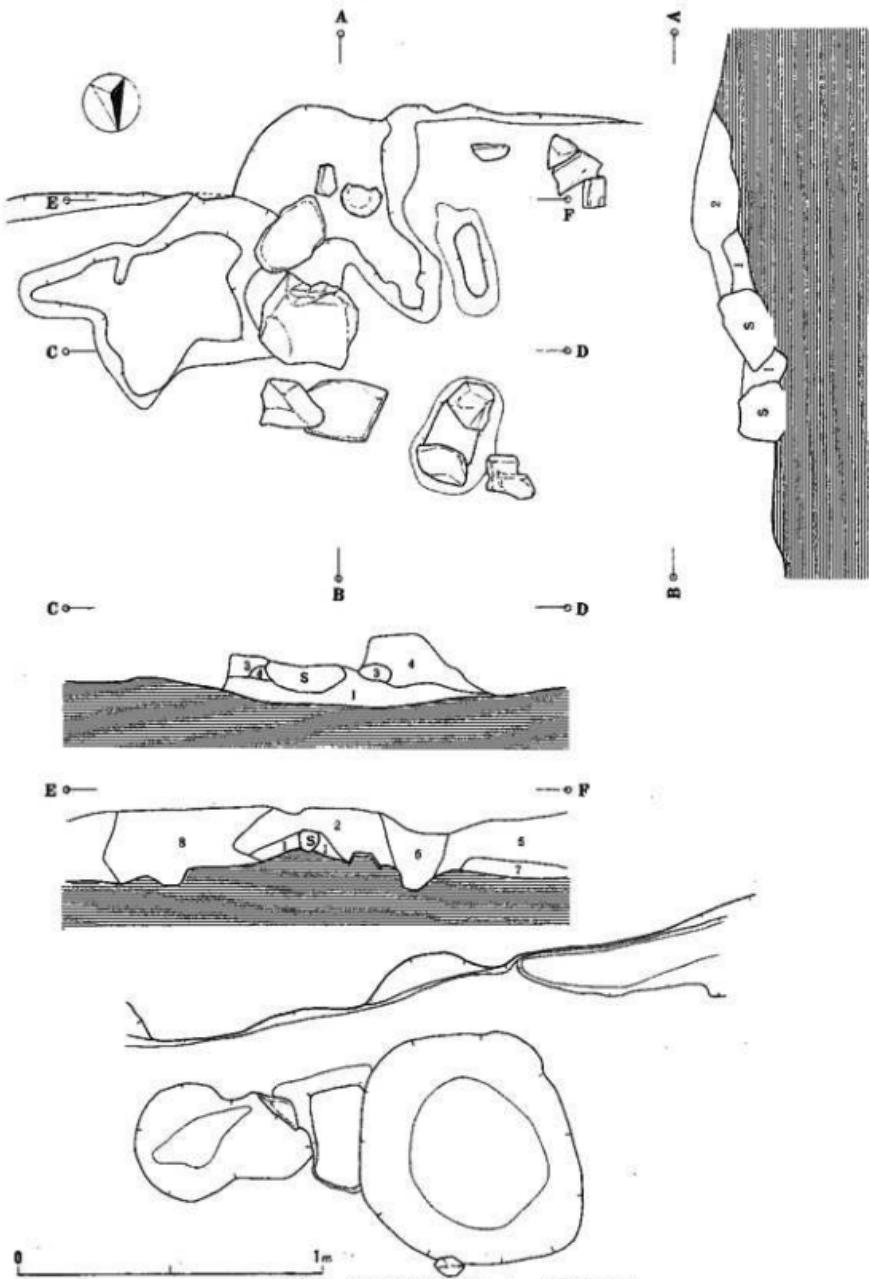
件名	出土場所	種別	形状	目次	寸法	基底	高さ	測定	測量	表面	底面	成形	色調	性状	地質
1 SI 015	壁	口縁	盤			楕円チリ、細部ツブリ		横み上口沿	に高い青紫色(10YR 5/2)、薄らかに鉛灰含む	白					
2 SI 015	壁	口縁	盤			楕円チリ、細部ツブリ		横み上口沿	に高い青紫色(10YR 5/2)、薄らかに鉛灰含む	白					
3 SI 015	壁	口縁	盤			楕円チリ、細部ツブリ		横み上口沿	に高い青紫色(10YR 5/2)、薄らかに鉛灰含む	白					
4 SI 015	壁	口縁	盤		9.4	楕円チリ		斜め上口沿	青褐色(7.5YR 5/2)	薄らかに鉛灰含む	白				
5 SI 015	壁	口縁	盤		18.2	楕円チリ		斜め上口沿	青褐色(7.5YR 5/2)	薄らかに鉛灰含む	白				
6 SI 015	壁	口縁	盤			楕円チリ、細部ツブリ、鉢底		横み上口沿	に高い青紫色(10YR 5/2)	薄らかに鉛灰含む	白				
7 SI 015	壁	口縁	盤			楕円チリ、細部ツブリ		横み上口沿	に高い青紫色(10YR 5/2)	薄らかに鉛灰含む	白				
8 SI 015	壁	口縁	盤			楕円チリ、鉢底		横み上口沿	に高い青紫色(10YR 5/2)	薄らかに鉛灰含む	白				
9 SI 015	壁	口縁	盤			楕円チリ、鉢底		横み上口沿	に高い青紫色(10YR 5/2)	薄らかに鉛灰含む	白				

第87表 S1016住居跡観察表

S1016住居跡		押 国	92, 93, 94
		國 版	20, 59
検出区	8-O, 8-N		
法	東 壁 西 壁 南 壁 北 壁		
壁 長	2.87m	3.05m	3.86m
壁 高	40.8~62.2cm	13.7~44.7cm	19.0~31.8cm
周溝幅	—	3~16cm	13~20cm
周溝深	—	6.3cm	—
面 積	11.17m ²		
主軸方位	N-3.5°-E	形 態	方 形
覆 土	1. 10Y R 5% 黒褐色 粘性弱 径1~2mm程度のバミス多量に混入 2. 10Y R 5% 喀褐色 粘性弱 径1~2mm程度のバミス1より多量に混入 ローム粒多量に混入 3. 10Y R 5% 喀褐色 粘性弱 径1mm程度のバミス多く含む ローム粒多く含む 4. 10Y R 5% 暗褐色 粘性強 バミス混入量少 ローム粒多量に混入 炭化物脈くずかに混入 5. 10Y R 5% にぶい黄褐色 粘性強 バミスを多量に含む部分が層内に点在している 6. 10Y R 5% 喀褐色 粘性弱 径1mm程度のバミスを多く含む ローム粒多く含む 7. 10Y R 5% 黒褐色 粘性中 バミスほとんど混入しない		
燃	南壁の一部は溝によって切られているため検出できなかった 床面に対する角度は96.5°~106°の範囲にある		
床	多数の掘り込みが認められたが何であるかは不明		
周 溝	西壁の南側半分と南壁の西側にわずかに見られるだけである。他の面には検出することが出来なかった。		
ビ ッ ト	P ₁ 19.5×22×41.2 南西隅 柱穴 P ₂ 17×25.5×25.5 西壁中央付近 柱穴 P ₃ 24×27×31.1 北西隅 柱穴 P ₄ 22×31×36.3 北東隅 柱穴 P ₅ 18×18×6.8 東壁中央付近 柱穴 P ₆ 25×26×34.2 南東隅 柱穴		
位 置	南壁 西寄り		
カ	1. 10Y R 5% 喀褐色 粘性弱 燃土粒多量に混入 2. 2.5Y R 5% 明赤褐色 粘性弱 径1~10mm程度の燃土粒を多く含む燃土層 3. 10Y R 5% 黄褐色 粘性弱 バミス・ローム粒多く混入 4. 10Y R 5% 暗褐色 粘性強 粘土質バミス少含む 5. 10Y R 5% 喀褐色 粘性中 燃土粒を多く含む 6. 10Y R 5% 暗褐色 粘性中 燃土粒 バミス多量に含む 7. 10Y R 5% 喀褐色 粘性強 バミス含まない 8. 10Y R 5% 暗褐色 粘性中 径0.5~1mm程度のバミス多量に含む		
マ	抽の部分の芯材として河原石が用いられている カマド内より土師器底部一片その他数点出土している		
ド			
遺 物	南東隅より出土している		
備 考	この住居跡は溝跡によって切られている。なお、この溝が何であるかは不明である。		



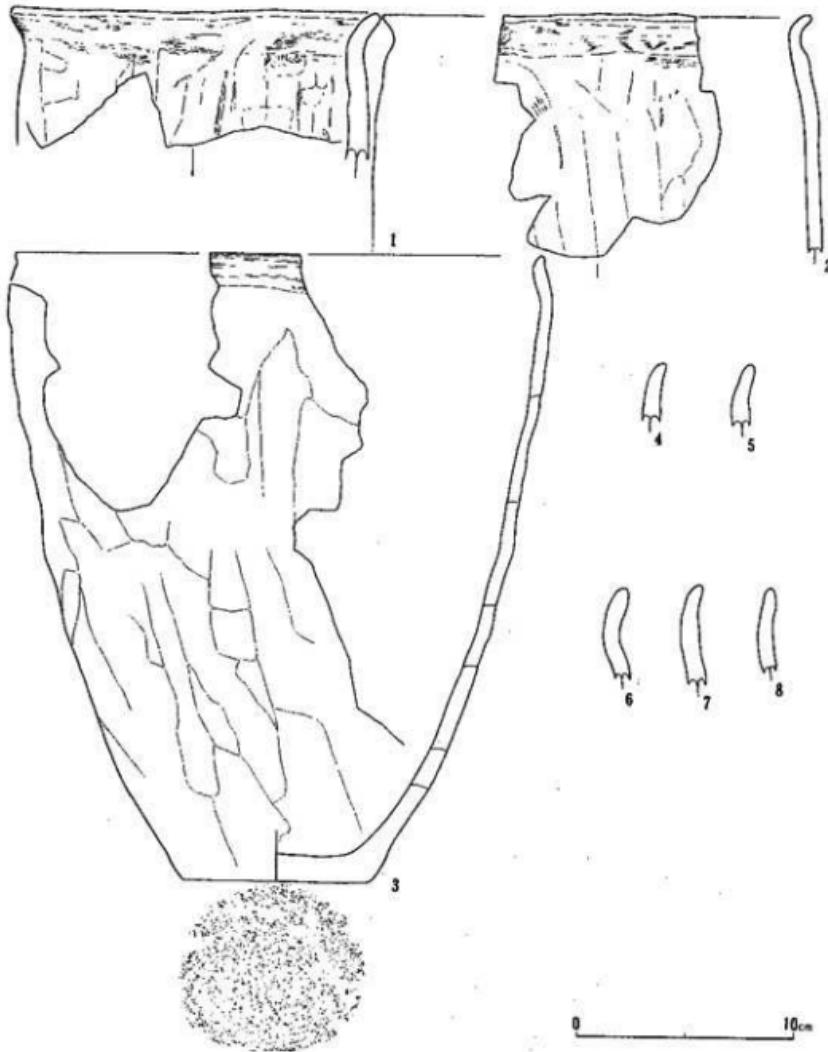
第92図 S I 016 住居跡



第93図 S I 016 住居跡、カマド完掘状態

第89表 S1017住居跡観察表

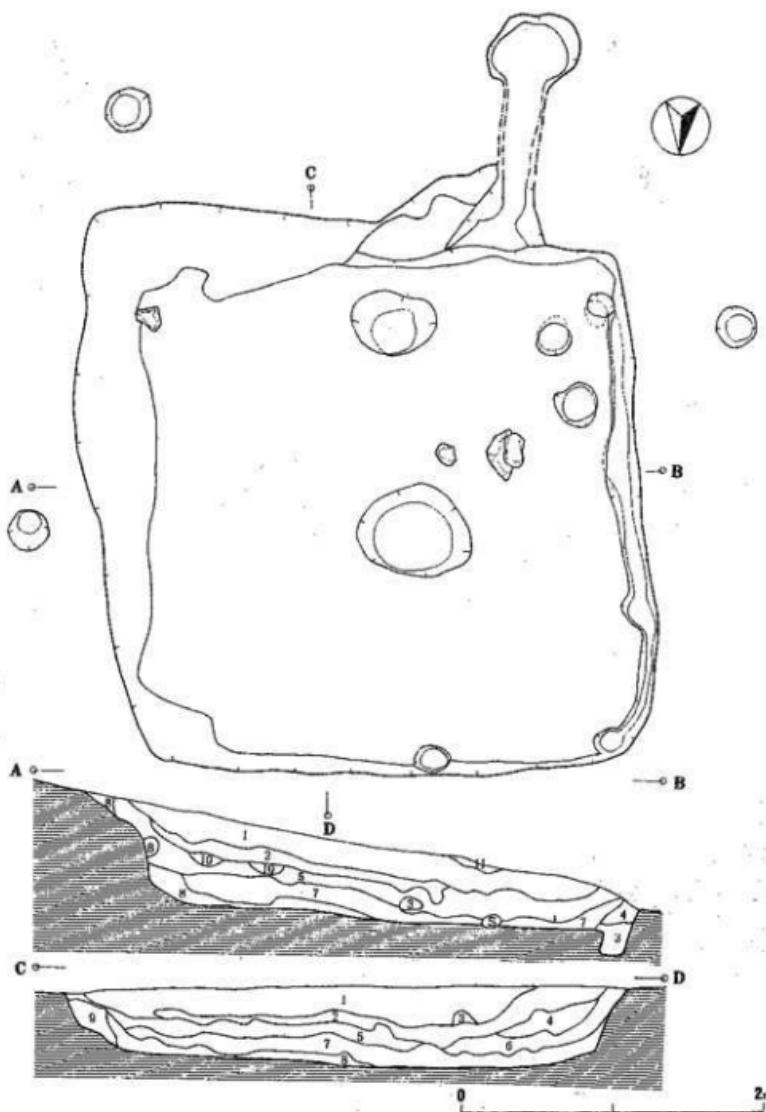
S1017住居跡		特徴	95, 96, 97
		図版	21
検出区	12-O, 13-O, 12-P, 13-P		
	東壁	西壁	南壁
法 壁長	3.85m	3.46m	3.63m
壁高	67.1~74.9cm	11.8~14.4cm	39.1~49.0cm
周溝幅	—	5.0~17.0cm	—
周溝深	—	6.9~12.3cm	—
面積	13.54m ²		
主軸方位	N-2.5°-E	形態：方形	
西 土	1. 10YR 4/2 黒褐色 粘性弱 孔隙小 大小のバミス-一面に混入 2. 10YR 4/2 暗褐色 粘性中 金体にしまっている バミスを含む 僵かに炭化物混入 3. 2.5YR 4/2 オリーブ褐色 バミス塊 4. 10YR 4/2 黒褐色 粘性強 硬くしまっている 5. 10YR 4/2 暗褐色 粘性強 ローム層 6. 10YR 4/2 暗褐色 粘性強 バミス混入量少 7. 10YR 4/2 黑褐色 粘性強 硬くしまっている バミス極く僅かに混入 8. 10YR 4/2 黑褐色 粘性強 孔隙大 9. 10YR 4/2 暗褐色 粘性強 孔隙小 腹と思われる 10. 10YR 4/2 黑褐色 粘性強 孔隙小 11. 10YR 4/2 黑褐色 粘性強 硬くしまっている		
壁	床面に対する傾斜は105~116°の範囲にある		
周溝	西壁側にのみ検出することが出来た		
ビット	P ₁ 17×24×12.7 北壁中央付近 柱穴と思われる 他の柱穴は検出することができなかった 床面中央のビットは何であるか不明である		
位置	南壁 西寄り		
カ マ ド	1. 10YR 4/2 暗褐色 粘性弱 孔隙中 バミスを含む 2. 10YR 4/2 暗褐色 粘性弱 孔隙中 バミスを含む 10YR 4/2 黄褐色土粒を10%位含む 3. 7.5YR 4/2 暗褐色 粘性中 孔隙小 燐土粒を多量に含む 4. 5YR 4/2 赤褐色 粘性弱 孔隙小 非常に硬くしまっている 燐土層 5. 10YR 4/2 暗褐色 粘性中 孔隙小 バミス極く僅かに含む 10YR 4/2 暗褐色土の混入が見られる 6. 10YR 4/2 黑褐色 粘性中 孔隙小 バミス極く僅かに含む 7. 10YR 4/2 暗褐色 粘性中 孔隙小 8. 10YR 4/2 黑褐色 粘性中 孔隙小 燐土粒多量に混入 9. 10YR 4/2 暗褐色 粘性強 孔隙小 燐土を含む 燐道部形成土と考えられる 10. 7.5YR 4/2 暗褐色 粘性中 孔隙小 燐土粒・ロームを含む 燐道部形成土と考えられる 11. 10YR 4/2 暗褐色 粘性弱 孔隙小 10YR 4/2 黄褐色土を40%位含む 12. 10YR 4/2 暗褐色 粘性弱 孔隙大 径1~2mmのバミス多量に混入 13. 10YR 4/2 黑褐色 粘性中 孔隙小 径2~3mmのバミス極く僅かに含む		
備考	袖の部分の芯材として河原石が使用されている。また支脚と思われる河原石も検出された。カマド部分全体の覆土をけずりすきて煙道部をしっかりと検出することができなかった。検出孔の部分より土師器が出土している。またカマド付近より炭化物が広範囲に検出された。		
備考	北東隅より屋根に使用したと思われる、カヤか何かの炭化したもののが検出された。 またその他にも床面より炭化材なども認められた。		



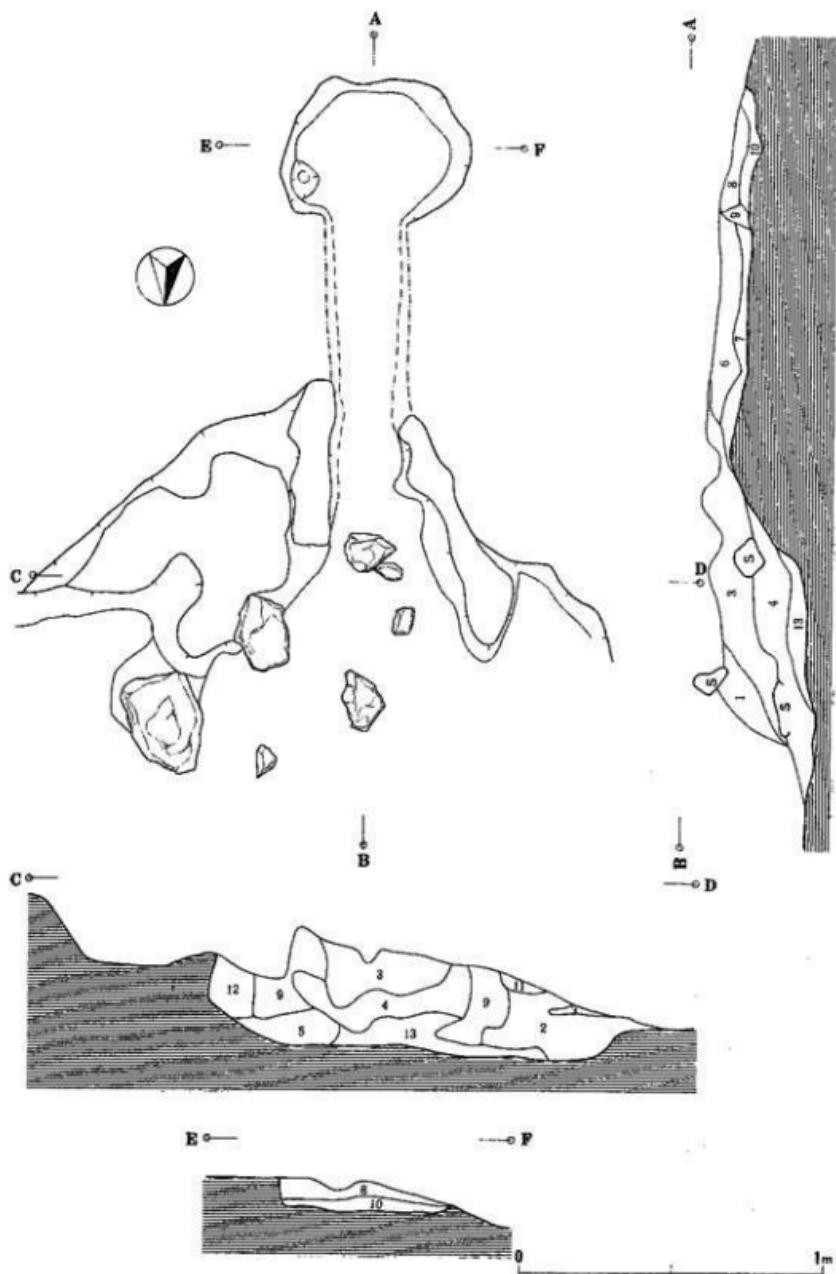
第94図 S I 016 住居跡出土遺物

第88表 S I 016 住居跡出土遺物

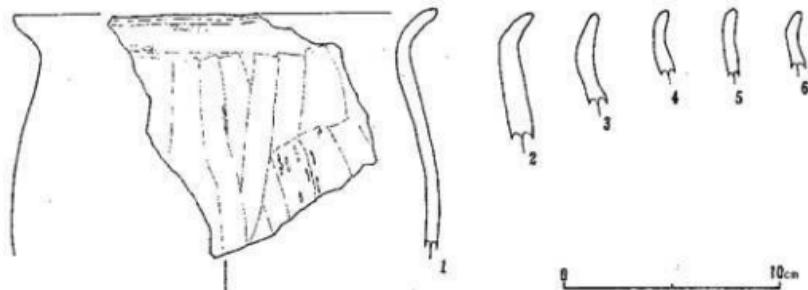
件名 番号	出土場所	器形	部 位	寸法 (cm)	測 定 (cm)		形 状 (形 式)	材 形	色 调	地 土	地 号
					外 径	内 径					
1 S I 016	壁 口縁～底面	17.2					底付子、断面、斜辺ナリ	断面子、底付、斜辺ナリ	断面上口直	17.2×底 (17.2×高)	黄褐色の砂利地
2 S I 016	壁 口縁～底面	20.0					底付ナリ、斜辺、斜辺ナリ	断面子、底付ナリ	断面上口直	20.0×底 (17.5×高)	黄褐色の砂利地
3 S I 016	壁 口縁～底面	24.0	18.5	8.7	20.2		底付ナリ、斜辺ナリ	断面子、斜辺ナリ	断面上口直	24.0×底 (10.5×高)	黄褐色の砂利地多く含む
4 S I 016	壁 口	18					底付ナリ、斜辺ナリ	断面子、底付ナリ	断面上口直	20.0×底 (10.5×高)	黄褐色の砂利地
5 S I 016	壁 口	18					底付ナリ	断面子	断面上口直	18.0×底 (17.5×高)	黄褐色の砂利地
6 S I 016	壁 口	18					底付ナリ、底付ナリ	底付ナリ	断面上口直	18.0×底 (17.5×高)	黄褐色の砂利地
7 S I 016	壁 口	18					底付ナリ、底付ナリ	底付ナリ	断面上口直	18.0×底 (17.5×高)	黄褐色の砂利地
8 S I 016	壁 口	18					底付ナリ、斜辺ナリ	底付ナリ	断面上口直	18.0×底 (17.5×高)	黄褐色の砂利地



第95圖 S I 017 住居跡



第96図 S.I.017 住居跡カマド



第97図 S I 017住居跡出土遺物

第90表 S I 017住居跡出土遺物

件目 番号	出土地点	部材	部 位	規 格 (cm)		性 種	特 徴	状 態	地 点
				長	幅				
1	S I 017	壁	口縁一側面	19.7	—	楕円形	横斜サギリ	糊込ナガ	糊込上げ法
2	S I 017	壁	口縁	—	—	楕円形	横斜サギリ	糊込ナガ	糊込上げ法
3	S I 017	壁	口縁一部	—	—	楕円形	横斜サギリ	糊込ナガ	糊込上げ法
4	S I 017	壁	口縁一部	—	—	楕円形	横斜サギリ	糊込ナガ	糊込上げ法
5	S I 017	壁	口縁一部	—	—	楕円形	横斜サギリ	糊込ナガ	糊込上げ法
6	S I 017	壁	口縁一部	—	—	楕円形	横斜サギリ	糊込ナガ	糊込上げ法

P323→
が、僅かに残っている部分の観察によれば厚さ4mm以上はあるようである。側板は最も厚い箇所で7mmを測るが、これも残存状態は悪い。ただ2の側板には桜皮によると思われる縫合穴が観察される。内部に充填している米は糊状のものによって固結されており、側板・底板と接した部分では、欠落した側板の痕跡が明瞭に残っている。

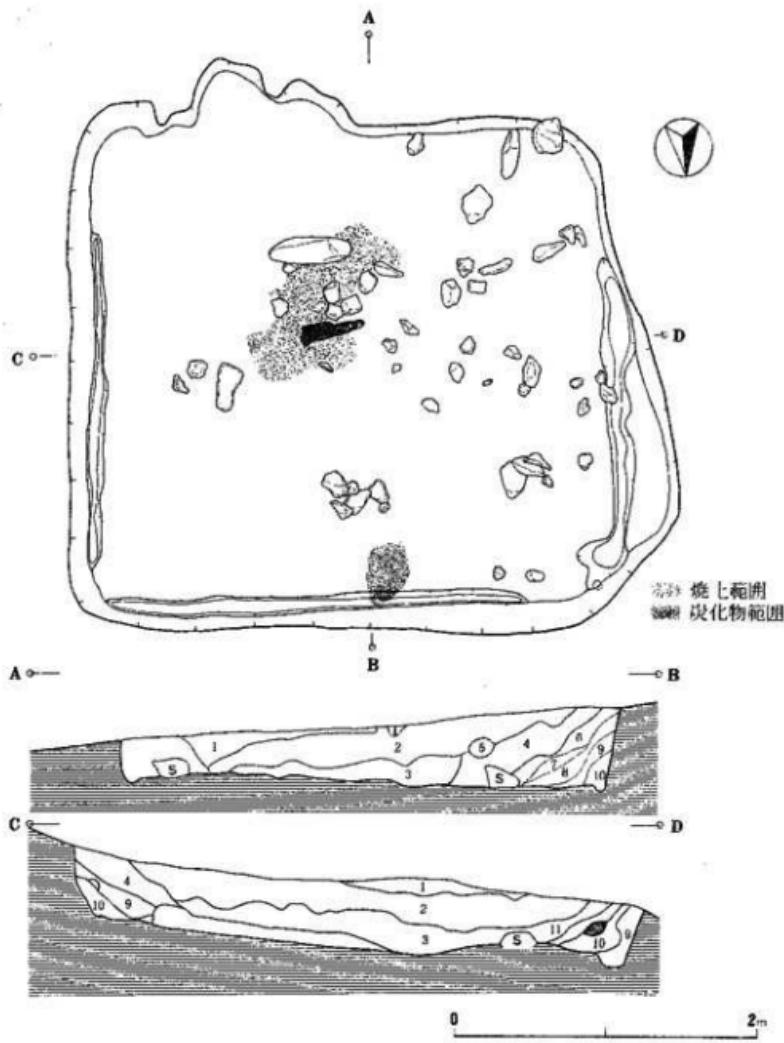
3はおにぎり状に固結した炭化米である。最大径が65mm程あり、最大厚は30mmを測る。中央部がやや薄くなる。1~3とも米は糊状のものにより固結しているのであるが、米が熱処理を受けて飯の状態になったものかとも思える。

図版52中段右は稲藁によって編まれたと思われる籠状の製品である。横に配した糸を幅23mm程度の間隔で2箇所2本の糸で撚り合わせている。この籠状製品はその出土状態が炭化した板材の上となっており、そのような板材の上に敷かれたものか、若しくは周囲の炭化米や炭化豆類の出土状況と合わせて考えて見て、本来糸のような働きをした製品であった可能性もある。

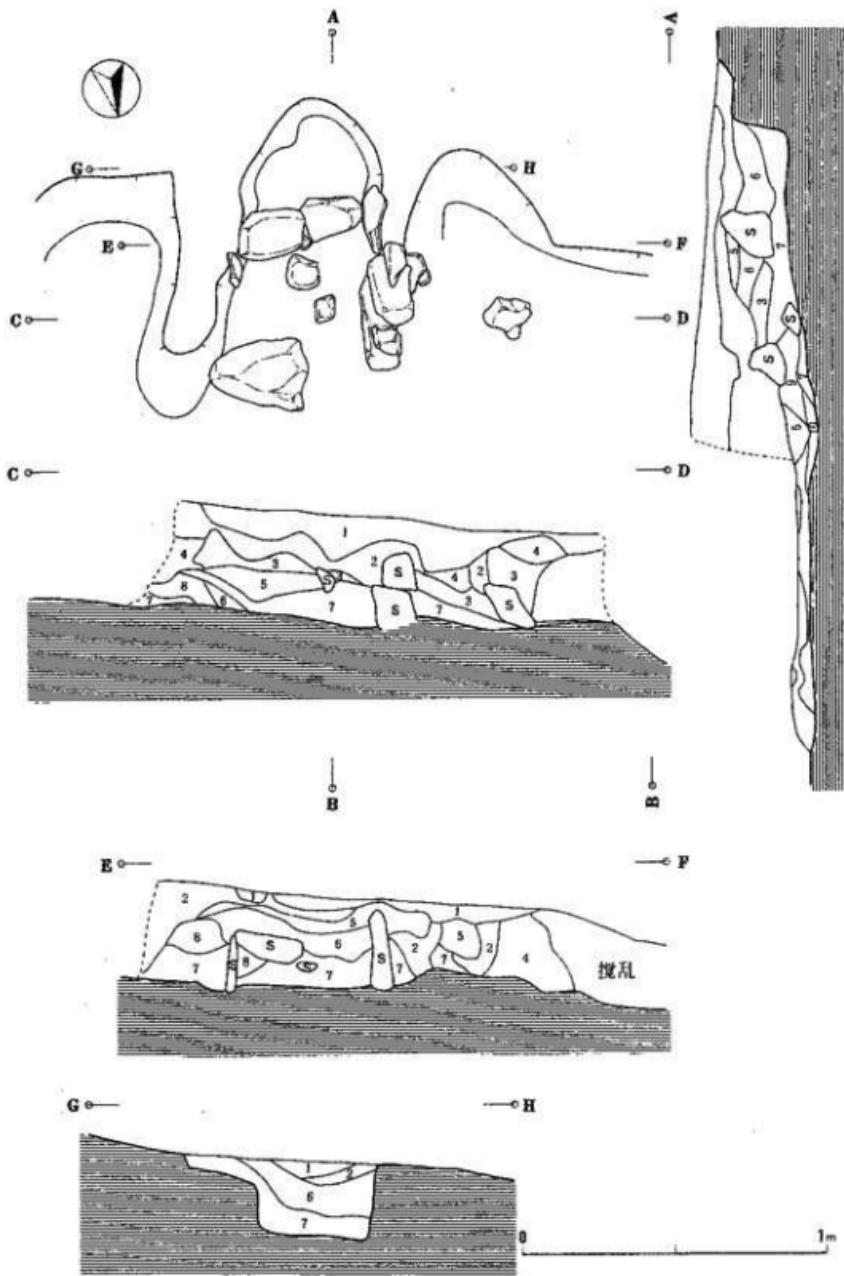
バラの状態で出土した炭化米の総量はおよそ8kg、豆類はおよそ5kg程度ある。炭化米の各粒は殆ど大きさに変りはないが、豆類では大豆程の大きさのものから小豆程のものまで変化があり、何種類か混じっているように思える。→P.364

第91表 S1018住居跡観察表

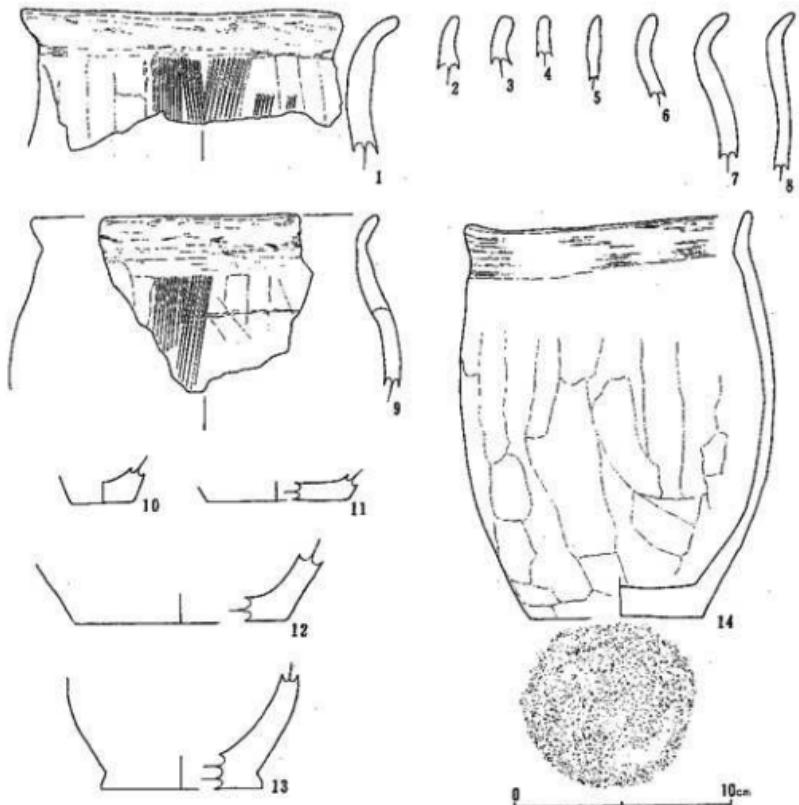
S1018住居跡		特 国	98, 99, 100		
		國 版	22, 23, 60		
検出区		13R, 13S			
法	壁 長	東 壁	西 壁	南 壁	北 壁
		3.48m	3.38m	3.73m	3.78m
壁 高		37.5~61.0cm	7.0~26.0cm	11.5~37.5cm	24.0~63.5cm
層	層高幅	5~11.5cm	10.0~32.0cm	—	6.5~12.0cm
	層高深	1.0~3.0cm	4.0~17.5cm	—	1.0~6.0cm
	面 積	12.78m ²			
主軸方位	N-8°-W	形 態 方 形			
覆 土	1. 10Y R 5% 黒 色 粘性中 孔隙小 径2~3mmのバミス僅かに混入 2. 10Y R 5% 黒褐色 粘性弱 孔隙小 径4~5mmのバミス15~20%含む 炭化物も僅かに混入 3. 10Y R 5% 黑褐色 粘性強 全体にしまっている 20~25%のバミス混入 4. 10Y R 5% 黑褐色 粘性弱 孔隙大 バミス混入量多い 5. 2.5Y R 5% 黑褐色 粘性弱 全体が硬いバミス塊である 6. 10Y R 5% に近い黄褐色 粘性強 孔隙小 焼土及び炭化物僅かに混入 7. 10Y R 5% 赤褐色 粘性中 孔隙小 焼土 8. 10Y R 5% 黑褐色 粘性弱 孔隙大 2.5Y R 5% 黄褐色土を40~45%含む 9. 10Y R 5% 黒 色 粘性強 孔隙大 バミス混入量多い 10. 10Y R 5% 喧褐色 粘性中 孔隙中 住居跡の壁のくずれたものと思う 11. 10Y R 5% 黑褐色 粘性弱 孔隙大 炭化物及び焼土を含む				
駆	西壁の保存状態は悪くはっきりとは検出できなかった。 床面に対する角度は95~112.5°の範囲にある。				
床	広範囲にわたって焼土及び炭化物が検出された。これはこの住居跡が焼失したためと思われる。				
開 景	南壁以外のすべての壁面に検出されたが深さは比較的浅かった				
ビ ッ ト	検出されなかった				
位 置	南壁 東寄り				
カ	1. 10Y R 5% 黒 色 粘性弱 孔隙大 径2mm程度のバミス僅かに混入 2. 10Y R 5% 黑褐色 粘性弱 孔隙大 径1mm以下のバミス僅かに混入 焼土極く僅かに混入 3. 10Y R 5% 黑褐色 粘性弱 孔隙大 細孔隙僅かに混入 4. 10Y R 5% 黑褐色 粘性弱 孔隙大 径1mm以下のバミス僅かに混入 ローム粒多量に混入 5. 7.5Y R 5% 明褐色 粘性弱 孔隙大 バミス僅かに混入 焼上層 燥けて硬い 6. 5Y R 5% 赤褐色 粘性弱 孔隙大 燥けて非常に硬い 焼土層 マ				
ド	7. 10Y R 5% 黑褐色 粘性弱 孔隙大 径1mm以下のバミス僅かに混入 焼土極く僅かに混入 8. 10Y R 5% 黄褐色 粘性弱 孔隙小 焼土極く僅かに混入 9. 10Y R 5% 黒 色 粘性弱 孔隙大 炭化物多量に混入する炭化物層 焼土粒極く僅かに混入 10. 10Y R 5% 黑褐色 粘性弱 孔隙小 径1mm以下のローム粒僅かに混入				
	他の部分の芯材には河原石が使われていた。また天井部の石、支柱などの河原石も検出された。右袖は何らかの搅乱によって検出できなかったが、芯材としての河原石は残っていた。 煙道部はわずか70cm程しかない。				
遺 物	主な遺物は土師器でカマド周辺に集中している。左袖より北側約80~130cmの範囲に一個体分づぶれて出土している。また時代はなるが、磨製石斧が一個出土した。				
備 考	床面から10cm程までの間に多数の河原石が検出された。この内カマド付近のものは熱を受け赤く変色したり。もうろくすれやすくなったり割れやすくなったりしていた。カマド付近及び内部から炭化物・土師器などが多く出土した。 カマド西側に何らかの搅乱のため穴が認められ、覆土中より炭化物・土器片などが検出された。				



第98圖 SI 018 住居跡



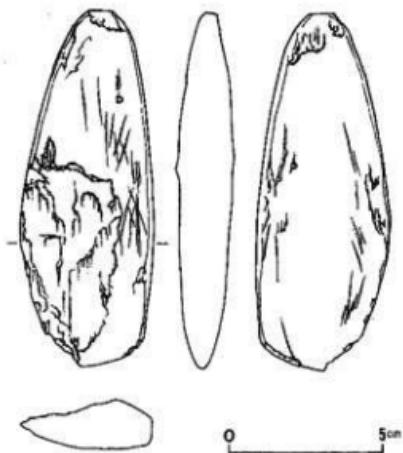
第99図 S I 018 住居跡カマド



第100図 S I 018住居跡出土遺物

第92表 S I 018住居跡出土遺物

番号	出土場所	資料	断面	寸 容 (cm)		内 容 (縦 横)		成 形	色 调	新 上	地質
				外	内	外	内				
1. S1016	東	口縁~側部	(14.6)	縫合ナナ、縫合ナギリ 縫合ナギリ		縫合ナナ、縫合ナギリ 縫合ナギリ		組み上げ法	黒(±茶色)	厚かに砂粒含む	良
2. S1017	東	縫合部	(16.3)			縫合ナナ		組み上げ法	灰褐色(±茶色)	厚かに砂粒含む	良
3. S1018	東	縫合部				縫合ナナ		組み上げ法	灰褐色(±茶色)	厚かに砂粒含む	良
4. S1019	東	口縁~側部		縫合ナナ、縫合ナギリ		縫合ナナ		組み上げ法	灰褐色(±茶色)	厚かに砂粒含む	良
5. S1020	東	縫合部		縫合ナナ、縫合ナギリ		縫合ナナ		組み上げ法	灰褐色(±茶色)	厚かに砂粒含む	良
6. S1021	東	口縁~側部		縫合ナナ、縫合ナギリ		縫合ナナ		組み上げ法	黒(±茶色)	厚かに砂粒含む	良
7. S1022	東	口縁~側部		縫合ナナ、縫合ナギリ		縫合ナナ、縫合ナギリ		組み上げ法	灰褐色(±茶色)	厚かに砂粒含む	良
8. S1023	東	縫合部		縫合ナナ、縫合ナギリ		縫合ナナ		組み上げ法	黒(±茶色)	厚かに砂粒含む	良
9. S1024	東	口縁~側部		縫合ナナ、縫合ナギリ		縫合ナナ、縫合ナギリ		組み上げ法	黒(±茶色)	厚かに砂粒含む	良
10. S1025	東	縫合部	2.8	ナギリ	ナギリ	ナギリ		組み上げ法	灰褐色(±茶色)	厚かに砂粒含む	良
11. S1026	東	縫合部	19.6	ナギリ	ナギリ	ナギリ		組み上げ法	灰褐色(±茶色)	厚かに砂粒含む	良
12. S1027	東	縫合部	19.0	ナギリ	ナギリ	ナギリ		組み上げ法	灰褐色(±茶色)	厚かに砂粒含む	良
13. S1028	東	縫合部	17.7	ナギリ	ナギリ	ナギリ		組み上げ法	灰褐色(±茶色)	厚かに砂粒含む	良
14. S1029	東	口縁~底部	13.4	14.6	6.1	18.4	細粒	縫合ナナ、縫合ナギリ	組み上げ法	灰褐色(±茶色)	良



第101図 S I 018住居跡出土遺物（石器）

P 359

鉄器は、所謂穂摘具とされている製品、鐵鎌、鐵斧、小刀等が出土している。その他使用法の判然としない鉄製品も何例か出土している。

石器としては砥石があげられる。殆どが角柱状に研磨された砥面をもつが、第14号住居跡出土例のように梢円形の扁平な自然砾の表裏面、両側面に僅かに砥面としての使用面を残すものがある。角柱状に整った砥石も本来はこのような比較的軟質の石を選び、使用以前の整形を行わずに砥石として用いられた結果出来た可能性を示唆する資料である。

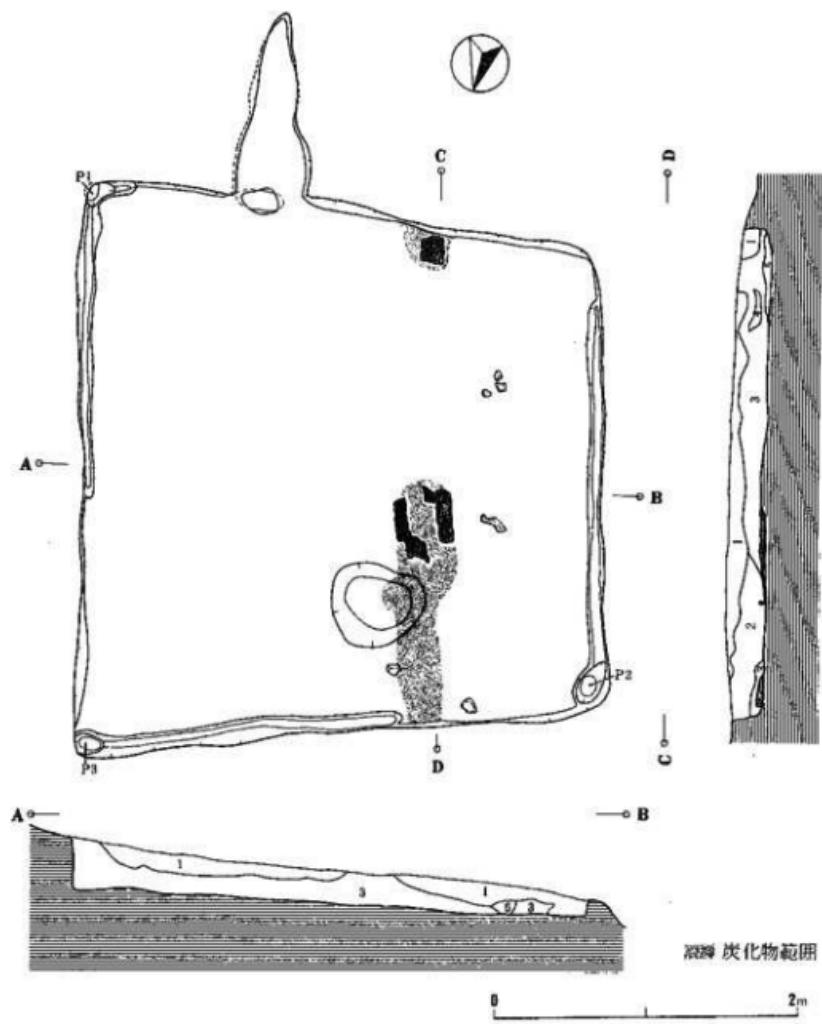
その他、平安時代の住居跡内から磨製石斧の出土例もある。どの例も床面に近い覆土中から出土しており、簡単に混入したとは言い切れない。鐵斧は第10号住居跡出土の1例のみであるため、鐵斧の代用として磨製石斧を使用した可能性もあながち否定出来ないように思える。

第93表 S I 018住居跡出土遺物（石器）

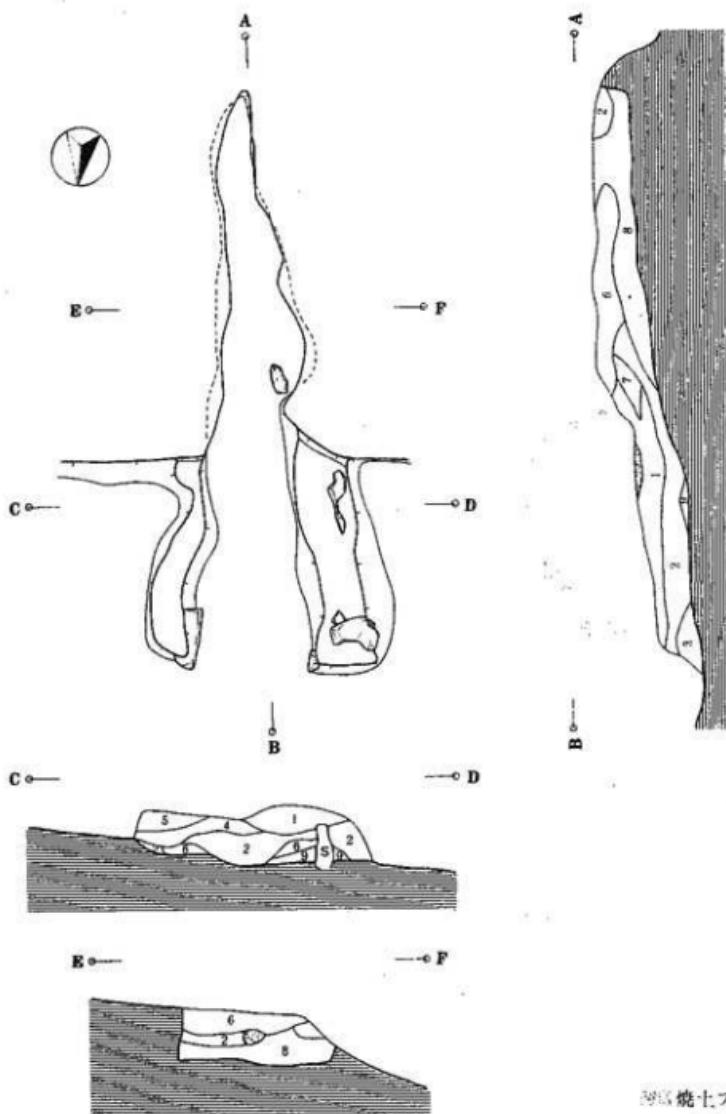
標印番号	出土地点	器種	石質	長さ(mm)
1	S I 018	磨製石斧	綠泥片岩	11.8
幅(横)	厚さ	重量	観察	
4.5	1.7	126.3	製作時の研磨は、僅かに自然面を残す。刃部の磨耗は著しく、剥落部も使用による欠損。	

第94表 S1019住居跡観察表

S1019住居跡		掲 開	101, 102, 103		
		図 版	23, 24, 61		
検出区 15S					
	東 風	西 風	南 風		
法 壁 長	3.83m	3.13m	3.50m		
壁 高	33.0~39.1cm	10.2~18.1cm	10.2~37.1cm		
周溝幅	5~9cm	6~9cm	5~7cm		
壁 厚溝深	1.5~5.0cm	3.8~9.8cm	5.9cm		
面 積	12.41m ²				
主 軸 方 位	N 5°-E	形 態	方 形		
覆 土	1. 10YR 5/2 黒褐色 粘性小 孔隙小 バミスを僅かに含む 2. 10YR 5/2 黒 色 粘性小 孔隙中 径1mm以下のハミスを含む 少量の炭化物を含む 3. 10YR 5/2 黒褐色 粘性小 孔隙大 はそぞとしている 径3~4mm以下のバミス及び炭化物多量に含む 4. 10YR 5/2 黒褐色 粘性小 孔隙大 径1~2mmのバミス塊 5. 10YR 5/2 暗褐色 粘性大 孔隙小 径1~2cmの石を含む ロームが多量に含まれている 6. 10YR 5/2 黒 色 粘性小 孔隙中 径1mm以下のバミス多量に含む				
壁	床面に対する傾斜は91.5~10.1°の範囲にある。 西側の壁の保存状態はきわめて悪く、はっきりとは認められなかった。				
床	床面はそれ程に平らではなく、砂や石を多く含んだロームでてこぼしていた				
周 清	すべての壁面に見られるが南壁面は東側に極く強か。東壁面及び北壁面は約半分ずつぐらいしか検出されなかった。				
ビ ッ ト	P ₁ 10×15×26.0 南東隅 柱穴 P ₂ 15×31×12.0 北西隅 柱穴 P ₃ 13×19×22.4 北東隅 柱穴	南西隅よりのビットの検出はできなかった。			
位 置	南壁 東寄り				
カ マ フ	1. 10YR 5/2 暗 色 粘性中 孔隙大 バミス・炭化物・ローム粒極く僅かに混入 燃土多量に混入 2. 10YR 5/2 暗褐色 粘性弱 孔隙大 バミス殆ど含まない 1より多量に燃土含む 3. 10YR 5/2 黒褐色 粘性弱 孔隙大 バミス極く僅かに混入 炭化物層 4. 10YR 5/2 黒褐色 粘性弱 孔隙大 バミス殆ど含まず 径1mm以下のローム粒多量に含む 5. 10YR 5/2 黒褐色 粘性弱 孔隙大 バミス多く含む 径1mm以下のローム粒多く含む 6. 7.5YR 5/2 暗 色 粘性大 孔隙小 バミス殆ど含まず 燃土多く含む カマド形成粘土である と思う 7. 10YR 5/2 黒褐色 粘性弱 孔隙大 径1mm以下のハミス多量に混入 燃土僅かに混入 8. 10YR 5/2 にびい黄褐色 粘性大 孔隙小 バミス殆ど含まず ローム粒多く混入 9. 10YR 5/2 暗褐色 粘性弱 バミス殆ど含まず 大粒の燃土極く僅かに混入				
遺 物	油の部分の芯材として河原石が使用されていた。 保存状態はきわめて良好で、カマド油の部分、煙道天井部の粘土も天井の形をとった。また検出された油と煙道の間に何であるか不明であるビットが認められた。このビットは楕円形でかなり中に入りこんでいた。				
備 考	遺物はカマド周辺及びその内部より集中して出土している。煙出し孔と思われる部分に同一個体の土器と思われるものが折りかさなって出土している。 鉄器一片が左袖左腰の南壁付近より出土している。				
床面には広い範囲に炭化物が見られる。その中には厚さ3~4cmで堅材として用いられたと考えられる炭化材も検出された。また少量ではあるが、燃土範囲も認められた。床面北側より性格不明のビットが認められた。					

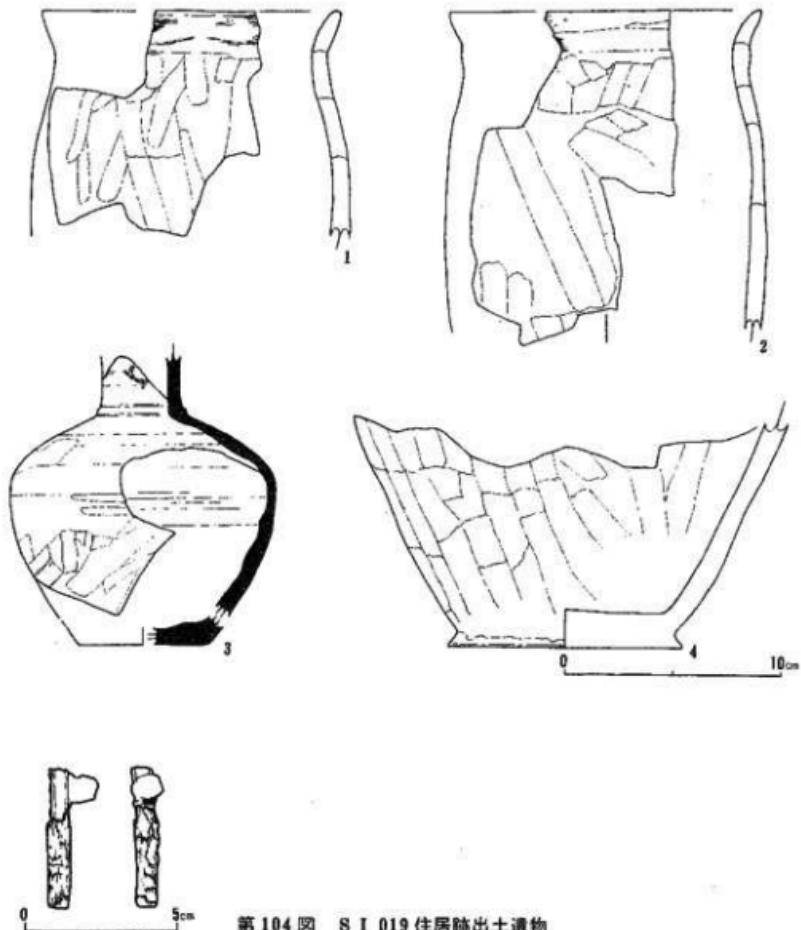


第102図 S I 019 住居跡



363 烧土ブロック

第103図 SI 019 住居跡カマド



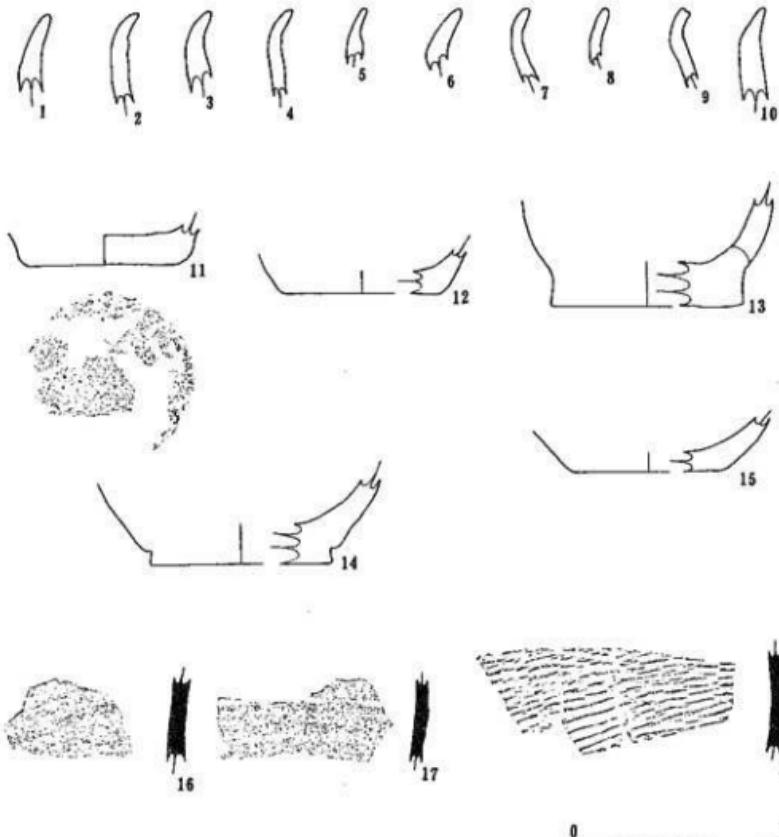
第104図 S I 019 住居跡出土遺物

第95表 S I 019住居跡出土遺物(1)

番号 器物	出土地点 器物	基部 形状	断面 形状	底 部 形 状	側 面 形 状	内 面 形 状	成 形 方 法	色 調	材 料	考 古 学 的 意 義
1 S I 019	壺	口 縁	16.0	盤口下平、瓶底、斜底、平底	盤口下平、瓶底、斜底、平底	盤口下平、瓶底、斜底、平底	旋み上げ法 (10cmHg)	淡青灰 (10cmHg)	陶 器の断片	食
2 S I 019	壺	口 縁	16.5	盤口下平、瓶底、斜底、平底	盤口下平、瓶底、斜底、平底	盤口下平、瓶底、斜底、平底	旋み上げ法 (7.5cmHg)	淡青灰 (7.5cmHg)	陶 器の断片	食
3 S I 019	壺 底部 破片	口 縁	17.0	盤口下平、瓶底、斜底、平底	盤口下平、瓶底、斜底、平底	盤口下平、瓶底、斜底、平底	旋み上げ法 (10cmHg)	淡青灰 (10cmHg)	粘土 を含む 砂利を含む 粘土	食 器の断片
4 S I 019	壺	底	11.0	瓶底、斜底、平底	斜底、平底	斜底、平底	旋み上げ法 (5.0cmHg)	淡青灰 (5.0cmHg)	粘土を含む 砂利を含む 粘土	食

第96表 S I 019住居跡出土遺物(2)

検出番号 出土地点	器種	計 丈 量	性 質	地	
3 S I 019	不明	底 部 長 度 1.5cm 底 部 幅 度 0.5cm 底 部 厚 度 0.2cm	底 部 長 度 1.5cm 底 部 幅 度 0.5cm 底 部 厚 度 0.2cm	底 部 長 度 1.5cm 底 部 幅 度 0.5cm 底 部 厚 度 0.2cm	底 部 長 度 1.5cm 底 部 幅 度 0.5cm 底 部 厚 度 0.2cm



第105図 造構外出土遺物

0 10cm

第97表 造構外出土遺物

種類 番号	出土場所	番号	基 材	高 さ (cm)			性 質	文 字	施 工	施 工	施 工
				柱	底	身					
1	7-1	房	白練瓦				陶片	縦目字、横目字、斜	施工なし	施工なし	施工なし
2	7-1-P	房	白練瓦				陶片	横目字、横目字	施工なし	施工なし	施工なし
3	7-2	房	白練瓦				陶片	横目字	施工なし	施工なし	施工なし
4	7-7	井	白練瓦				陶片	横目字、横目字	施工なし	施工なし	施工なし
5	7-4-7	花	白練瓦				陶片	横目字	施工なし	施工なし	施工なし
6	3-18	井	白練瓦				陶片	横目字	施工なし	施工なし	施工なし
7	5-2	井	白練瓦				陶片	横目字	施工なし	施工なし	施工なし
8	5-5	井	白練瓦				陶片	横目字	施工なし	施工なし	施工なし
9	11-0	井	白練瓦				陶片	横目字	施工なし	施工なし	施工なし
10	10-8	井	白練瓦				陶片	横目字	施工なし	施工なし	施工なし
11	12-8	便	瓦、板瓦	17.5			セラミック	サリ	施工なし	施工なし	施工なし
12	7-7	便	瓦、瓦	27.5			セラミック	サリ	施工なし	施工なし	施工なし
13	7-P	便	瓦	26.0			セラミック	サリ	施工なし	施工なし	施工なし
14	2-P	便	瓦	18.0			セラミック	サリ	施工なし	施工なし	施工なし
15	7-P	井	白練瓦	14.5			土器	土器	施工なし	施工なし	施工なし
16	5-7	便	瓦	16.0			土器	土器	施工なし	施工なし	施工なし
17	8-3	便	瓦	16.0			土器	土器	施工なし	施工なし	施工なし
18	10-P	便	瓦	16.0			土器	土器	施工なし	施工なし	施工なし

6. まとめ

案内III遺跡は、縄文時代の竪穴住居跡及び土壙、平安時代の竪穴住居跡からなる複合遺跡である。遺跡内の各時期毎の遺構の配置を見ると、縄文時代の住居跡は南側へ向う台地の縁辺近くに構築され、同時代の土壙はその外側に位置している。このような住居跡と土壙の配置関係は縄文時代を通じて一般的に見られるが、県内では縄文時代前期の杉沢台遺跡、中期の大畠台遺跡等に顕著である。これらの遺跡では住居跡群は立地する台地の形状に即応して円形または弧状の配置をとり、土壙群はその外側を巡っている。一方本遺跡での平安時代の竪穴住居跡の配置を見ると、縄文時代の住居跡とは異り方形である為に各々の住居跡に一定の方向性はあるが、住居跡群全体としては地形に応じての配置形態をとらずに台地のより内側の平坦面を利用して比較的雑然と構築されている感が強い。平安時代の竪穴住居跡49棟を検出した同じ鹿角市内の歌内遺跡でも台地全体の形状に照合して想定できる住居跡群の配置は地形に即応したものとはならないようである。本遺跡ではこのように縄文時代の遺構は地形に即応して台地のより縁辺部に、平安時代の遺構は地形に影響されずに台地内部に構築されるという複合の仕方をしている。同一台地内で平安時代の住居跡と縄文時代の住居跡が以上のような好対称を見せる遺跡としては北ノ林I、北ノ林II遺跡をあげることができる。

本遺跡の平安時代竪穴住居跡は焼失家屋と目されるものが多く、殊に第10号住居跡では夥しい炭化した遺材や米・豆等の植物遺存体が検出された。炭化した多くの遺材は同時代の住居の構造、構築法を知る上で大きな参考資料となるようと思われる。また、米・豆等の植物遺存体がかなりの量、一棟の住居跡内から出土したことは、この時代にこれらの植物がかなりの規模で栽培されていた事を思わせる事実である。また同じく第10号住居跡からは、鉄斧、鉄鎌、穂摘具等の鉄製品が出土しており、これなどは生産用具のセットを考える上での貴重な資料である。

その他、植物遺存体自体の分析、鹿角地方の遺跡では常に問題とされる大湯浮石層と竪穴住居跡の関係については詳細な分析がなされている。これらも本遺跡調査で得られた大きな成果であり、今後の調査・研究に役立つものと考える。

参考文献

- 杉沢台遺跡・竹生遺跡発掘調査報告書 秋田県文化財調査報告書第83集 秋田県教育委員会 1981.3
大畠台遺跡発掘調査報告書 日本鉛筆株式会社 1978
東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅱ「歌内遺跡」秋田県文化財調査報告書第88集 秋田県教育委員会 1982.3
東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ「北ノ林I遺跡」秋田県文化財調査報告書第89集 秋田県教育委員会 1982.3
東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅳ「北ノ林II遺跡」秋田県文化財調査報告書第90集 秋田県教育委員会 1982.3

調査参加者

綱木 四郎	井上 政治	奥村 一三	梅戸正次郎	川又 秀也
川又 武司	三ヶ田昌人			
豊田 よ里	浅石恵留子	相川 金子	川又 ヤエ	兎沢キヨエ
中西 リチ	相川 リヨ	賀川 政子	石鳥谷妙子	柳沢 ヤス
三ヶ田孝子	兎沢 キヌ	田中ヨシエ	木村サチ子	佐藤 ツマ
木村 敬子	木村 テル	作山 ミエ	苗代沢ノブ	津江 和子
金沢ハルエ	小田島礼子	高山 陽子	阿部 シカ	小田島キク
斎藤キヨエ	浅石 タミ	浅石 ナツ	井上トミエ	工藤 スミ
工藤 キヌ	工藤 イツ	阿部 シマ	佐藤 キエ	松岡トキヨ
高畠 サキ	阿部 シモ	三上 美子	三上 トヨ	安保 柳
柳沢 ヤス	奥村 初恵			

付1. 案内III 遺跡平安時代住居跡覆土中の大湯浮石について

花田 孝夫

1. 調査方法

各住居跡内の覆土より土層ごとに25cmづつの土を「soil sample」として鉄製の円筒により採取する。これを1mmのフルイを用い水洗いし残った火山灰の量により各々の住居の編年を求めるというものである。これは、火山灰降下時期によって住居跡の編年を決定できるよう、浮石層をこの遺跡において認めることができなかつたためである。

残念ながら、平安時代の竪穴住居跡13棟中5棟についてしか完全な資料採取が行われず、この5棟についてのみ行うこととする。

2. 大湯浮石層と遺跡

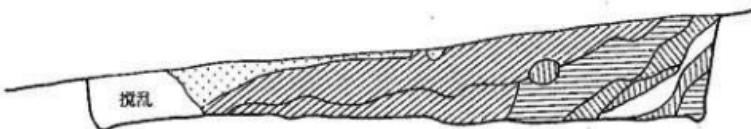
大湯浮石層は十和田火山が噴出源であるため「十和田a」とも呼ばれている火山灰である。その分布は大館盆地の東側から十和田を中心に南北に分布し、さらに岩手県福岡、軽米、青森県小川原湖の付近まで分布している。⁽¹⁾

大湯浮石層は、土師器を伴出する竪穴住居跡とのかかわりが強く、竪穴住居跡を覆うか、埋土中にブロック状に混入するように入っている。この火山灰の降下時期は、平安時代後半のことと考えられることにより大湯浮石層より新しいか否かは遺構の構築された時期の特定の鍵となる。すなわち遺構が大湯浮石層、十和田a火山灰層を切っているか、それによって覆われているかは他の火山灰降下地域である青森・岩手の例と照らし合わせて、遺構や遺物のより細かな編年が可能となるとされている。

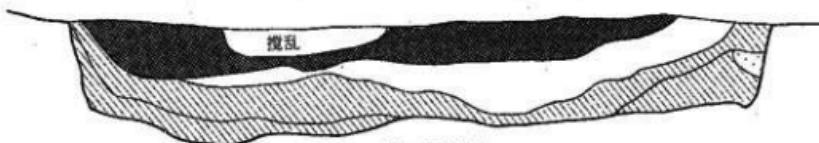
今回は住居跡覆土各層中に含まれる浮石量によってその編年が決定できるかどうか試みたものである。

3. 堆積順位

各住居跡（第2号、第9号、第16号、第17号、第18号住居跡）内の覆土を浮石の含有量によって、少ない方より1から10まで分類し、それぞれスクリントーンで区別した（第1図）。これを基に、基本堆積順位を求めたのであるが、求めるにあたっては、鍵になる層が必要であった。ところが、全住居跡に共通する層が認められず、第2号、第16号、第18号住居跡については、を基準にし、それより上部の層と下部の層に分けを中心にして上下に推定できる範囲で並べてみた。次に第9号、第17号住居跡についてもを基準に同様にし、さらにそれら2つを、を基準にして並べ最終的には第2図のように決定した。



第18号住居跡



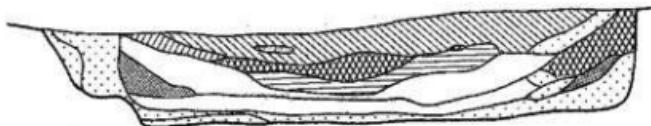
第16号住居跡



第17号住居跡

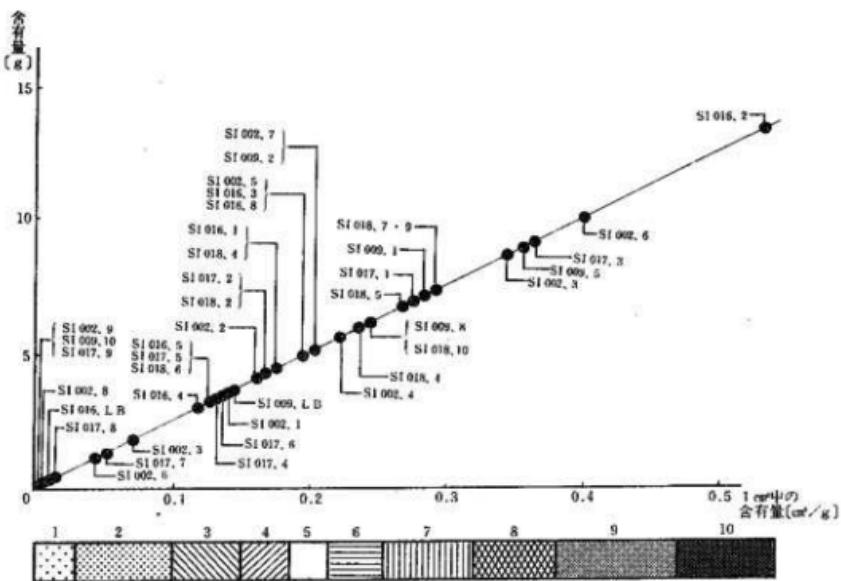


第9号住居跡

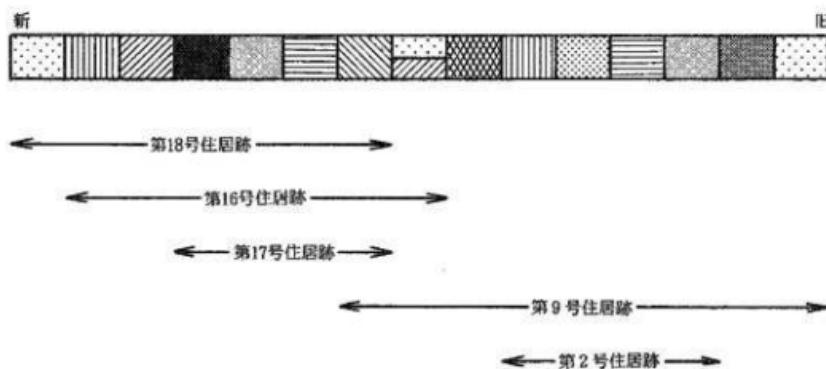


第2号住居跡

第1図 浮石の含有量分布



第2図 覆土各層の1cm中浮石含有量 (cm³/g)

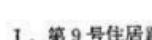
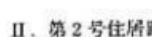
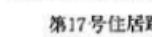
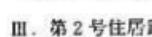
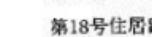
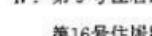
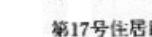
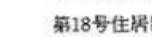
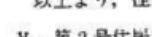
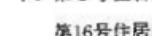


第3図 堆積順位 浮石含有量による堆積順位

これによってある程度までの編年は推理できる。

4. 大湯浮石の粒径

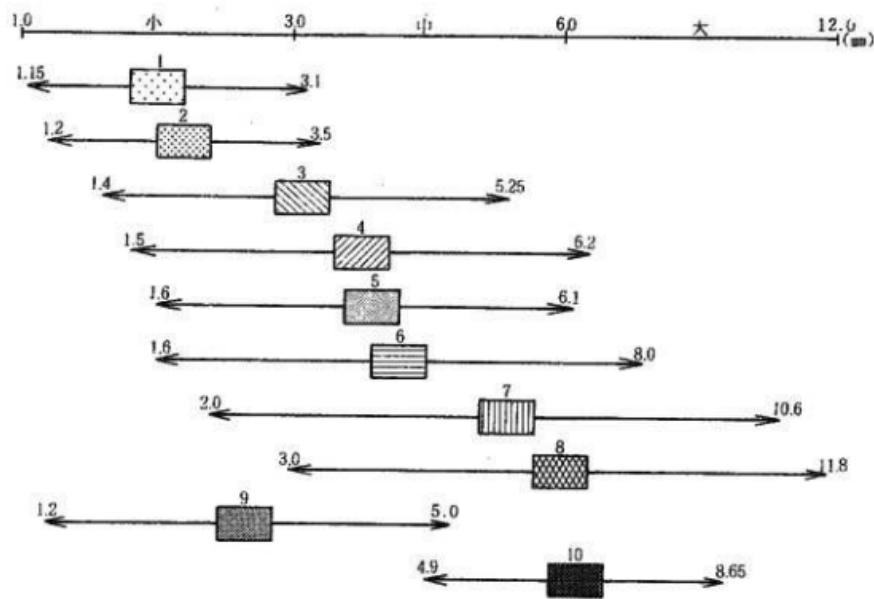
サンプリングした浮石をその直径によって5つに分類してみた。また粒径により小粒(1.0~2.9mm), 中粒(3.0~5.9mm), 大粒(6.0~12.0mm)とする。

- I. 第9号住居跡  径1.15~1.75mmの範囲にあり均一である。これは混入量が25cm³中僅かに0.1gと少なかったためと思われる。
- II. 第2号住居跡  径1.4~3.6mmの範囲、大きさほぼ均一、中粒以上の混入極く僅か。
第17号住居跡  径1.15~3.7mmの範囲、大きさほぼ均一、大粒の混入なし。
以上より、径1.15~3.7mmの範囲にあり大きさほぼ均一、中粒の混入僅か、大粒の混入なし。
- III. 第2号住居跡  径1.4~5.0mmの範囲、小粒が主体であるが中粒の割合も多い。
大粒混入なし。
第9号住居跡  径1.25~5.1mmの範囲、中粒僅かに混入、大粒混入なし。
第18号住居跡  径1.25~4.05mmの範囲、中粒僅かに混入、大粒混入なし。
以上より、径1.25~5.1mmの範囲にあり、小粒が主体である。中粒IIよりも多い。大粒の混入なし。
- IV. 第9号住居跡  径1.15~7.2mmの範囲、小粒から中粒が主体、大粒僅かに混入。
第16号住居跡  径1.5~7.15mmの範囲、中粒が主体、大粒極く僅かに混入。
第17号住居跡  径1.15~5.85mmの範囲、小粒から中粒が主体、大粒僅かに混入。
第18号住居跡  径1.4~7.45mmの範囲、小粒が主体、中粒の混入も多い。
大粒僅かに混入。
以上より、径1.15~7.45mmの範囲にあり、小粒から中粒が主体、大粒僅かに混入。
- V. 第2号住居跡  径1.4~11.8mmの範囲、中粒以上が主体、大粒比較的多い。
第16号住居跡  径1.35~8.65mmの範囲、中粒以上が主体、大粒も多い。
以上より、径1.35~11.8mmの範囲にあり、中粒以上が主体をなしており大粒の混入量も多い。

次に、粒径と含有量の関係を図示すると第4図のようになり、これより言えることは、含有量が少ないものは径が小さく、多くなるにつれ径も大きくなっていくということである。これは、火山灰降下直後の浮石は、量も多く径も大きかったが、それが長い間に雨などにより流され量が減っていく過程で径が徐々に削られ小さくなっていたのではないかと推理できる。

つまり混入量の少ない時期の浮石は、水の間流されて来る間に粒が削られ小さくなり、さらに量じたいも流され減ってしまった。逆に混入量の多い時期は、まだ浮石全体が小さく碎かれ

る程、またそんなに量が減る程火山灰降下後時がたっていなかったのではないかということである。



第4図 浮石の粒径と含有量

5. 遺構の編年

火山灰の降下時期以前に廃絶し、上屋構造の朽ちた住居跡では残存した凹みに火山灰のレンズ状堆積を認めることができる。しかしこの5棟については全くあてはまらず、これらの住居跡は、火山灰の降下する以前のごく近い時期に廃絶されたか、あるいはそれ以後の廃絶ということになる。上記の2点に注意して各々の住居跡を見てゆくこととする。

ア) 第2号住居跡

遺跡西側に位置する。面積9.38m² 壁長3.12×2.77m カマド南壁西寄りにある方形の住居跡である。この住居跡の床面上に見られる覆土には殆ど浮石混入は見られない(1cm中0.008g)これより廃棄直後の火山灰降下は考えられない。この上面の覆土より急に浮石量が増え、さらに床面に近い場所や中央部などで、浮石量の非常に多い層がブロック状に堆積している。これ

は、後世の擾乱で入り込んだものではない。このことから竪穴住居跡は大湯浮石層より古い時期のものである。⁽⁵⁾以上のことより降下する以前のごく近い時期に廃棄された住居跡と考えられる。

イ) 第9号住居跡

遺跡東北隅に位置する。面積15.48m² 壁長4.52×3.77m カマド西壁北寄りにある方形の住居跡である。この住居跡の場合前にもべたように浮石のレンズ状の堆積は見られなかった。また第2号住居跡のようなブロック状の混入もなく、編年を決定するにあたっての決め手がなかった。ひとつ言えることは、全覆土中に浮石を含むことより火山灰降下後に廃棄されたということである。なお編年の決定には堆積順位を参考にした。

ウ) 第16号住居跡

遺跡南側に位置する。面積11.17m² 壁長3.86×3.05m カマド南壁西寄りにある方形の住居跡である。覆土第一層に最も多く浮石を含んだ層(1cm中0.532g)が、レンズ状に堆積している。しかし、それ以下の覆土にも浮石が含まれていることより、第一層以前すでに火山灰降下があり、これは二次堆積したものと思われる。また、覆土上面にゆく程浮石混入量が多くなっているがこれについては不明である。

エ) 第17号住居跡

遺跡北東側に位置する。面積13.54m² 壁長3.85×3.63m カマド南壁西寄りにある方形の住居跡である。この住居跡の床面上の覆土には殆ど浮石混入がなく(1cm中0.004~0.052g)、廃棄直後の降下はなかったものと思われる。また、全覆土中に浮石を含むことより降下後に廃棄されたものと推定される。この住居も第16号同様、上層にゆく程浮石含有量が多くなっている。

オ) 第18号住居跡

遺跡北西隅に位置する。面積12.78m² 壁長3.78×3.48m カマド南壁東寄りにある方形の住居跡である。覆土上面にゆく程浮石量が少なくなっていることより、地表における浮石量が少なくなっている時期に埋没完了したのではないかと推測される。つまり火山灰降下後しばらくしてから廃棄され火山灰が雨などに流され減ってゆく過程で埋没が完了したのではないかというものである。

以上のことと、前項堆積順位、浮石の粒径より

新

旧

第18号←第16号←第17号←第9号←第2号

という編年を推理してみた。

なお、この編年の推理にあたってはあくまでも浮石量を主体に考えてみた。したがって、住居跡の面積差、家屋の崩壊の程度差、人為的埋没の有無、地理的条件など、その他考えられるあらゆる要因は、いっさい考えないものとして行った。したがって実際の編年との誤差は十分考えられる。

6. まとめ

今回は試験的に行ったもので資料採取や分析が十分できず、残念ながら期待したような成果は得られなかった。これは、資料が少なかったのも原因ではあるが、その他考えられる多数の要因によるものであろうと考えられる。よってしっかりした大湯浮石層を認めることが出来なかつた場合、ある程度までは浮石混入量で判断できるものの最終的には出土遺物など、他の事物にたよるところが大であり、浮石量のみでの判断は限界がありきわめて困難である。

参考引用文献

- (1) 大池昭二 「十和田火山は生きている」 國土と教育26 昭和49年7月
- (2) 平山次郎 市川賢一 「1000年前のシラス洪水」 地質ニュースNo.140号 昭和41年
- (3)(6) 渕川司男 「縄文期以降の火山灰と遺跡」 どるめん
- (4)(5) 富樫泰時 「大湯浮石層と鹿角盆地の遺跡」 どるめん

案内Ⅲ遺跡



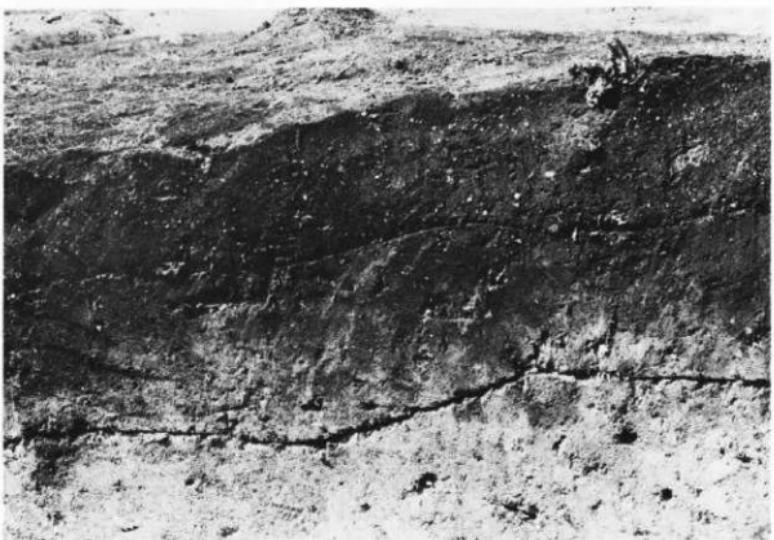
図版 1

案内Ⅲ遺跡航空写真

案内Ⅲ遺跡



遺跡遠景



遺跡層位

圖版 2

案内遺跡

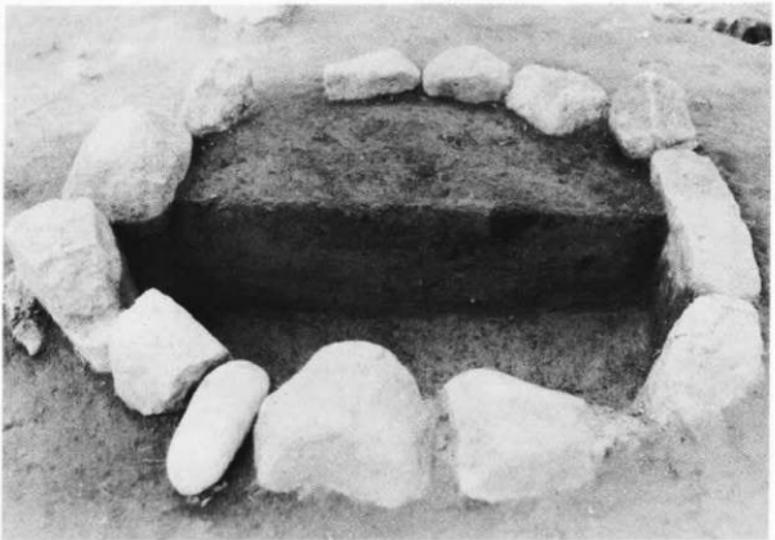


S I 008 住居跡



S I 004 住居跡 S K(F)025 土壙

圖版 3

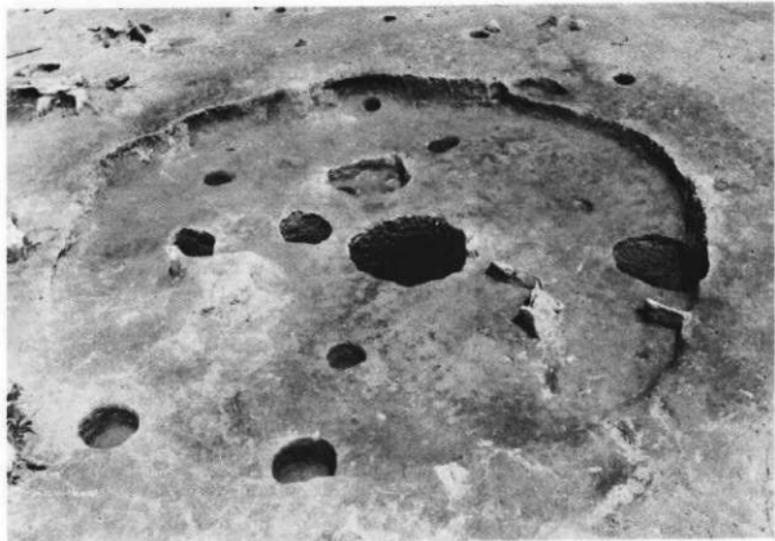


S I 004 住居跡炉



図版4

S I 004 住居跡埋設土器



S I 005 住居跡



図版 5

S I 005 住居跡磨製石斧出土状態

案内Ⅲ遺跡



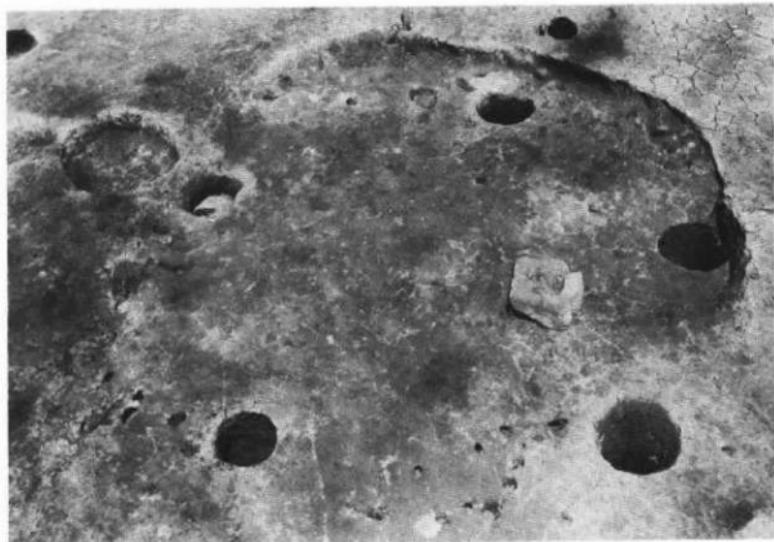
S I 003住居跡



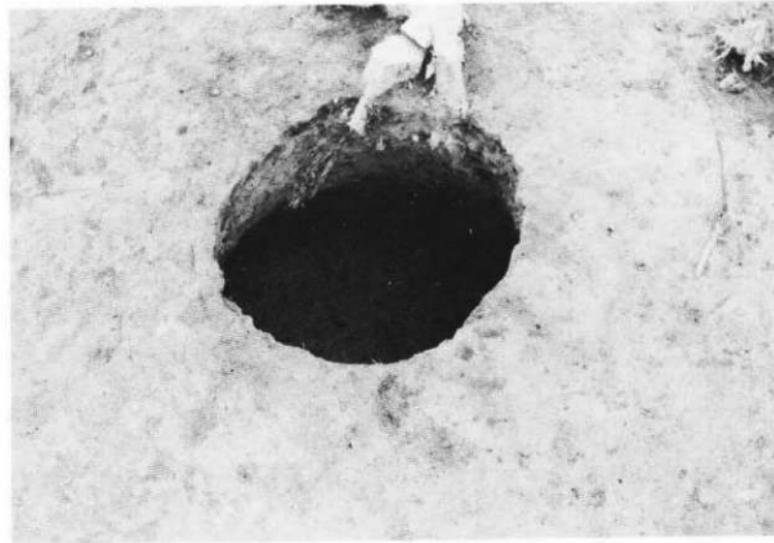
図版 6

S I 034住居跡

案内遺跡



S I 036 住居跡



図版 7

S K(F)024 土壙

案内Ⅲ遺跡



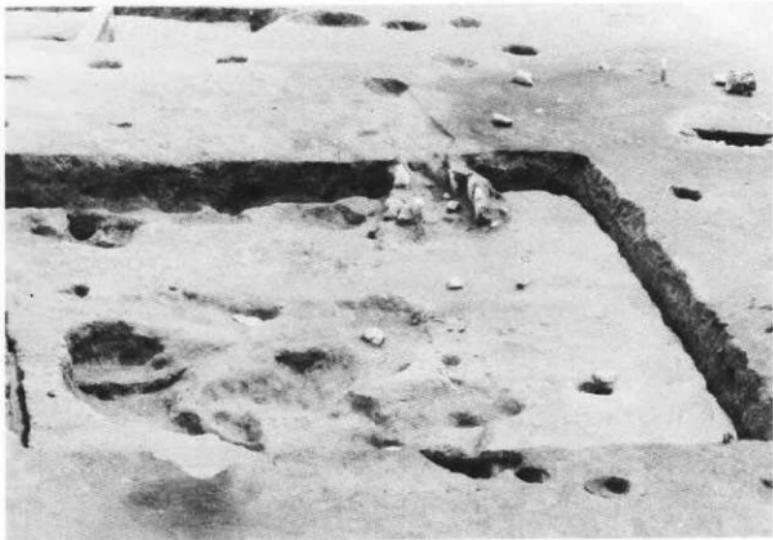
S K(F)032 土塊



図版 8

S K(F)022 土塊

案内遺跡



S I 001住居跡

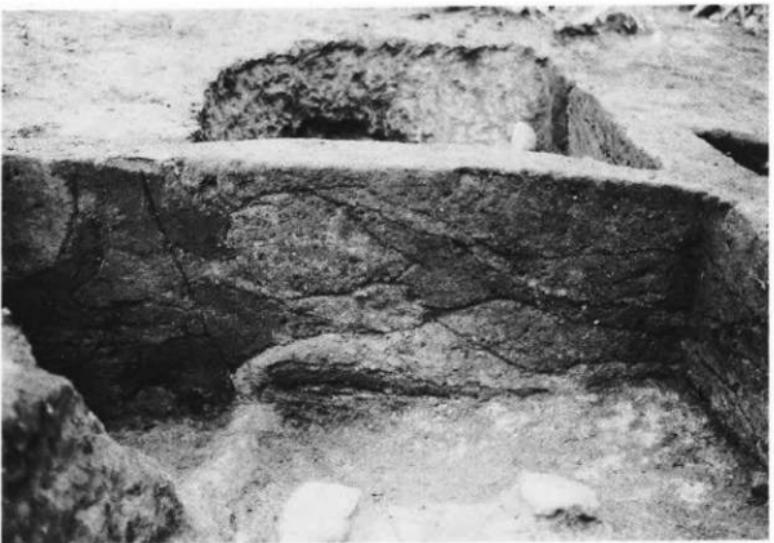


S I 001住居跡カマド

案内 III 遺跡



S I 002 住居跡



図版10

S I 002 住居跡カマド

案内Ⅲ遺跡



S I 006 住居跡



図版II

S I 006 住居跡カマド支脚出土状態



S I 006 住居跡カマド



図版12

S I 006 住居跡覆土

室内道路



S I 009 住居跡



图版13

S I 009 住居跡 瓦形土器出土状態

第三回
馬場



S I 009 住居跡カマド

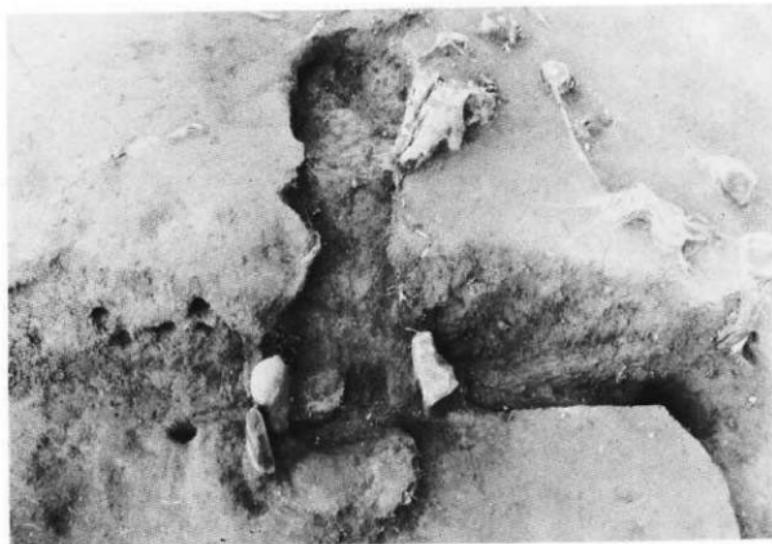


図版 14

S I 009 住居跡土



S I 010、S I 011、S I 012住居跡



S I 010住居跡カマド



S I 010 住居跡須恵器壺出土状態



図版16

S I 010 住居跡炭化物（曲物・炭化豆類）出土状態



S I 010 住居跡炭化物（籠状製品）出土状態



S I 011 住居跡カマド



S I 011 住居跡覆土



図版18

S I 012 住居跡

案内 III 遺跡

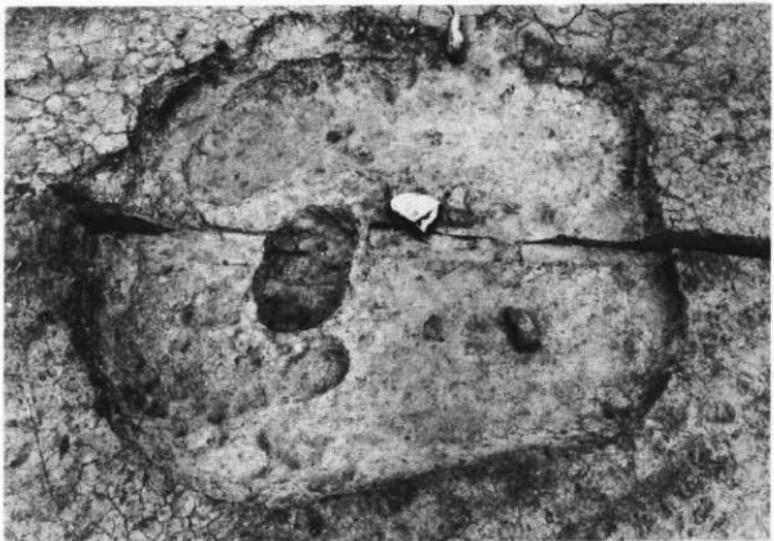


S I 014 住居跡



S I 014 住居跡カマド

案内Ⅲ遺跡



S I 015住居跡



S I 016住居跡

案内
遺跡



S I 017住居跡



S I 017住居跡カマド



室内三通路

S I 018住居跡

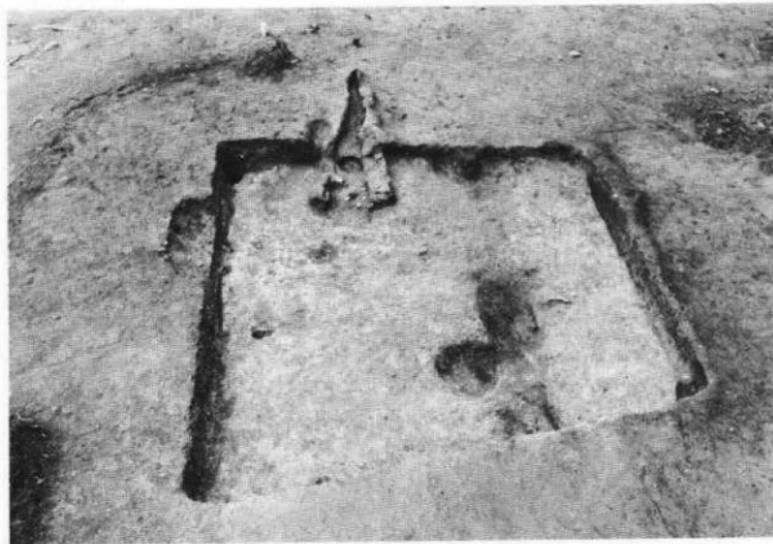


図版22

S I 018住居跡カマド



S I 018 住居跡磨製石斧出土状態

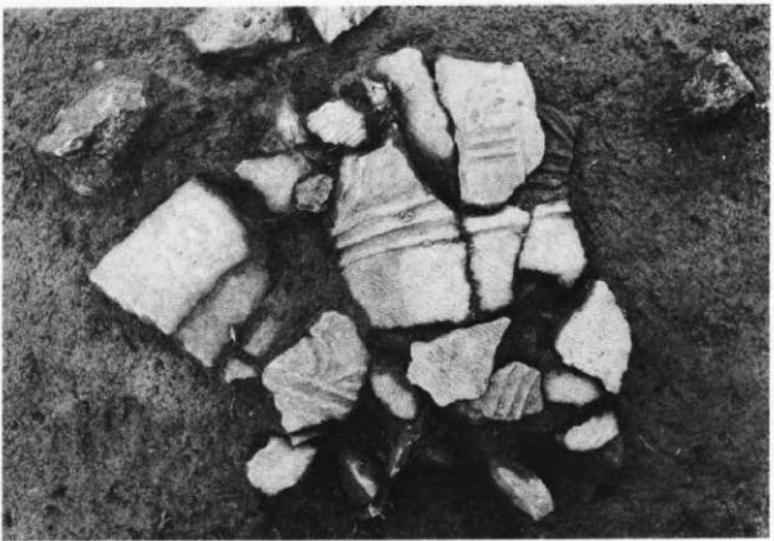


S I 019 住居跡

案内Ⅲ遺跡

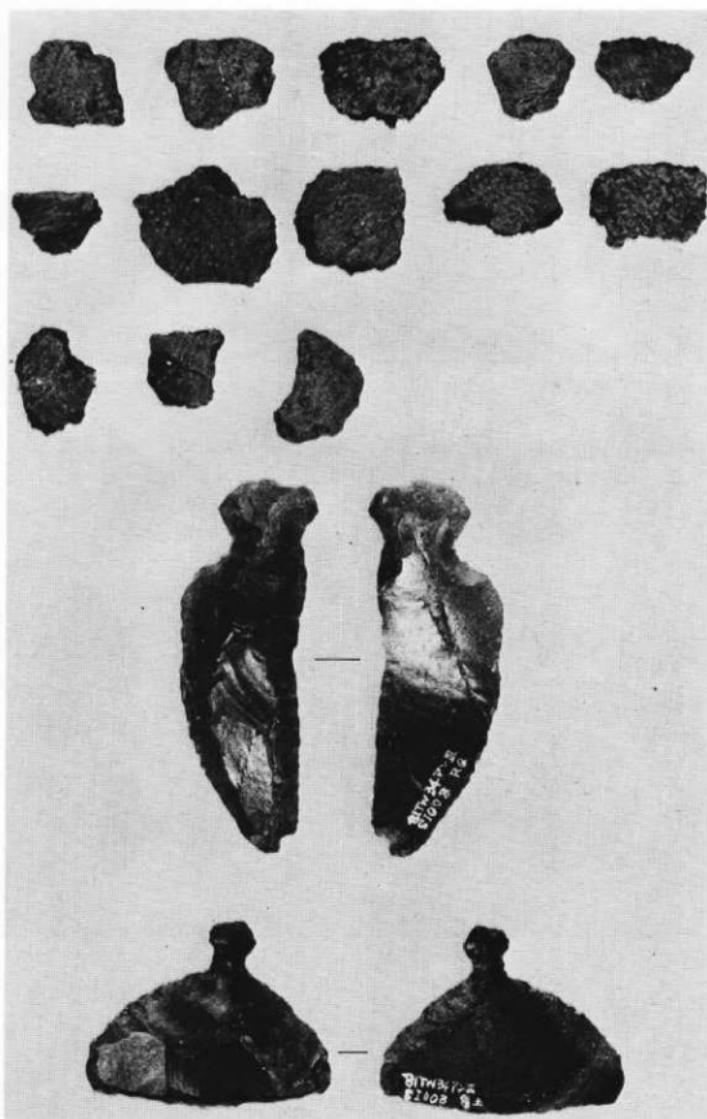


S I 019住居跡カマド



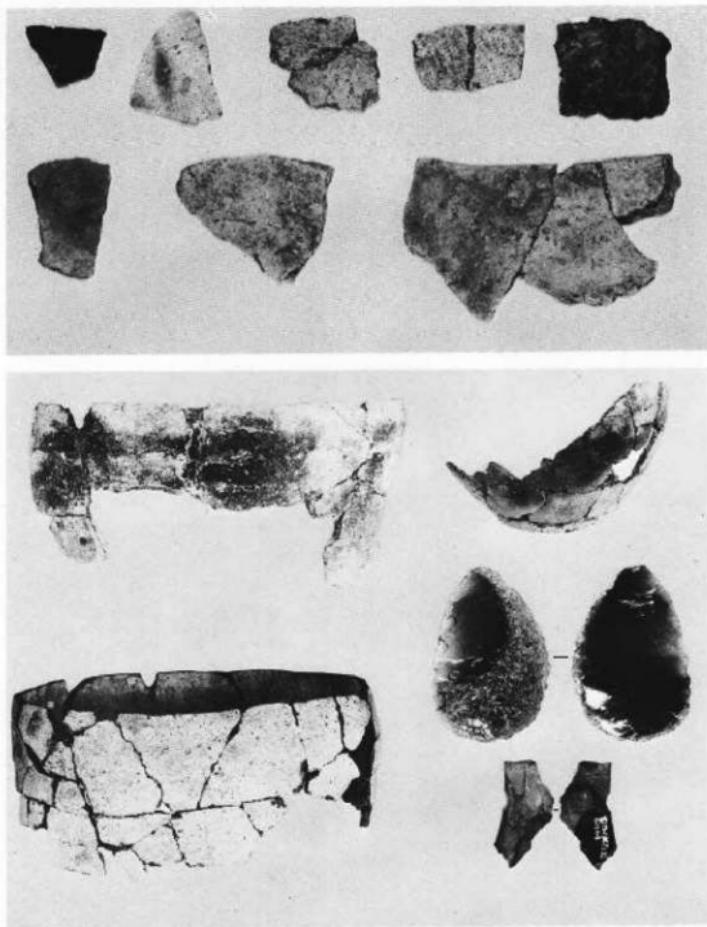
図版24

遺構外土器出土状態



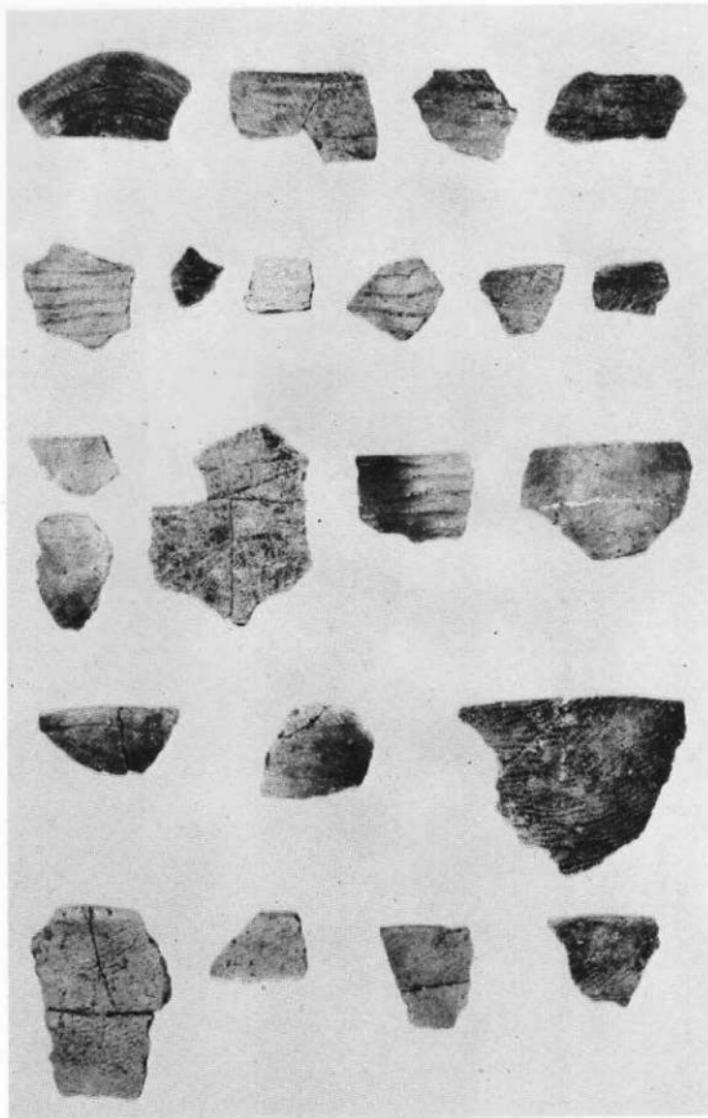
図版25

S I 008 住居跡出土遺物



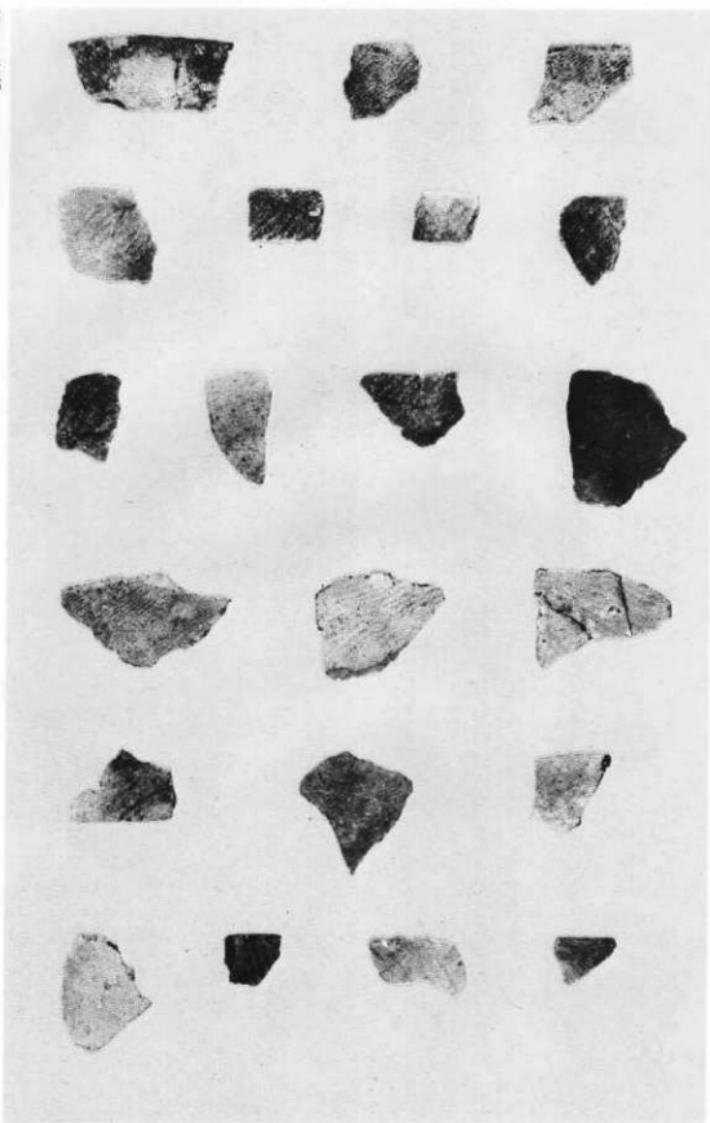
図版26

S I 004 住居跡出土遺物



図版27

S K(F)025 土壌出土遺物(1)



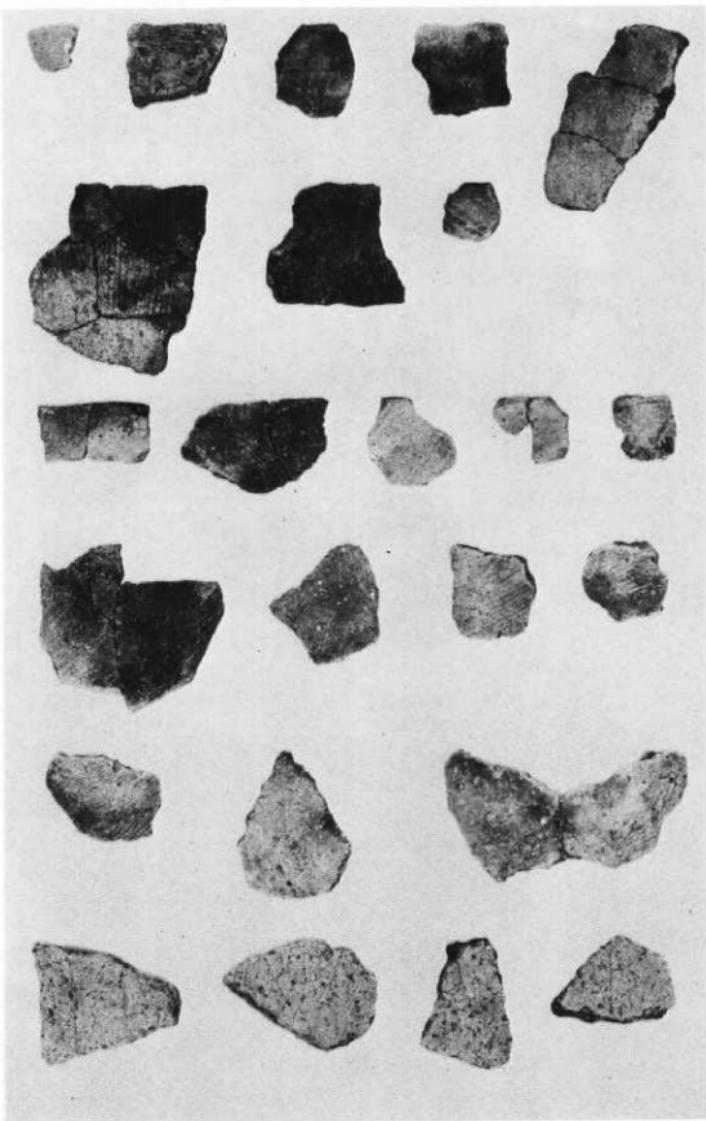
図版28

S K(F)025 土壤出土遺物(2)



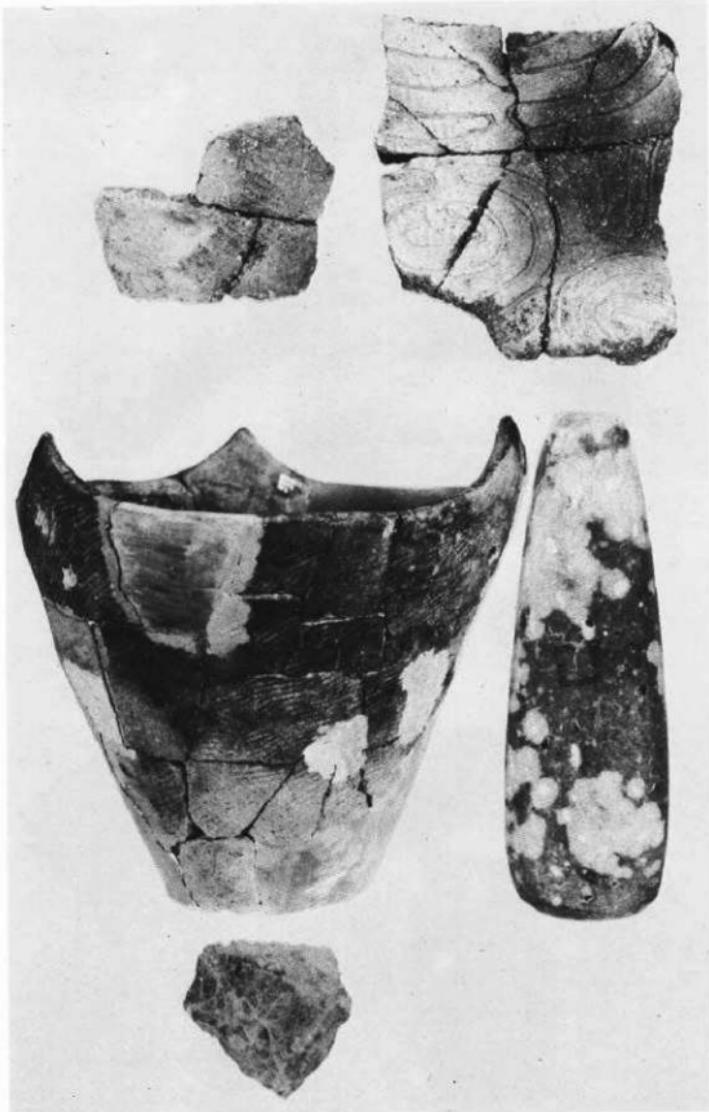
図版29

S K(F)025 土壌出土遺物(3)



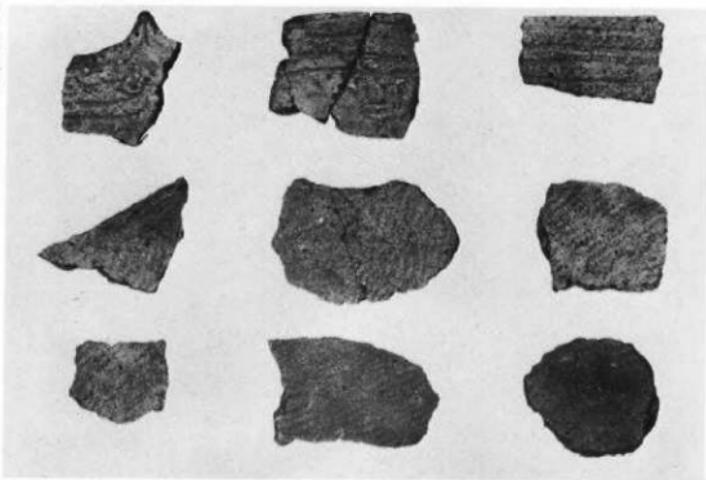
図版30

S I 005 住居跡出土遺物(1)(2)

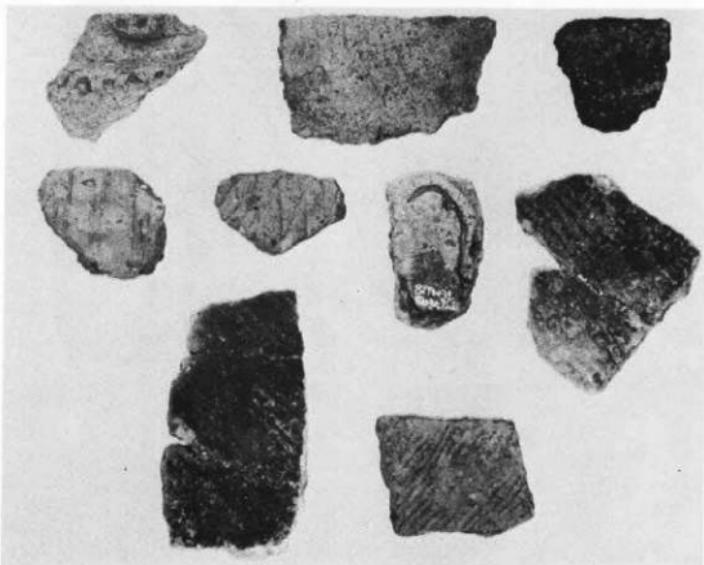


圖版31

S I 005住居跡出土遺物(2)(3)

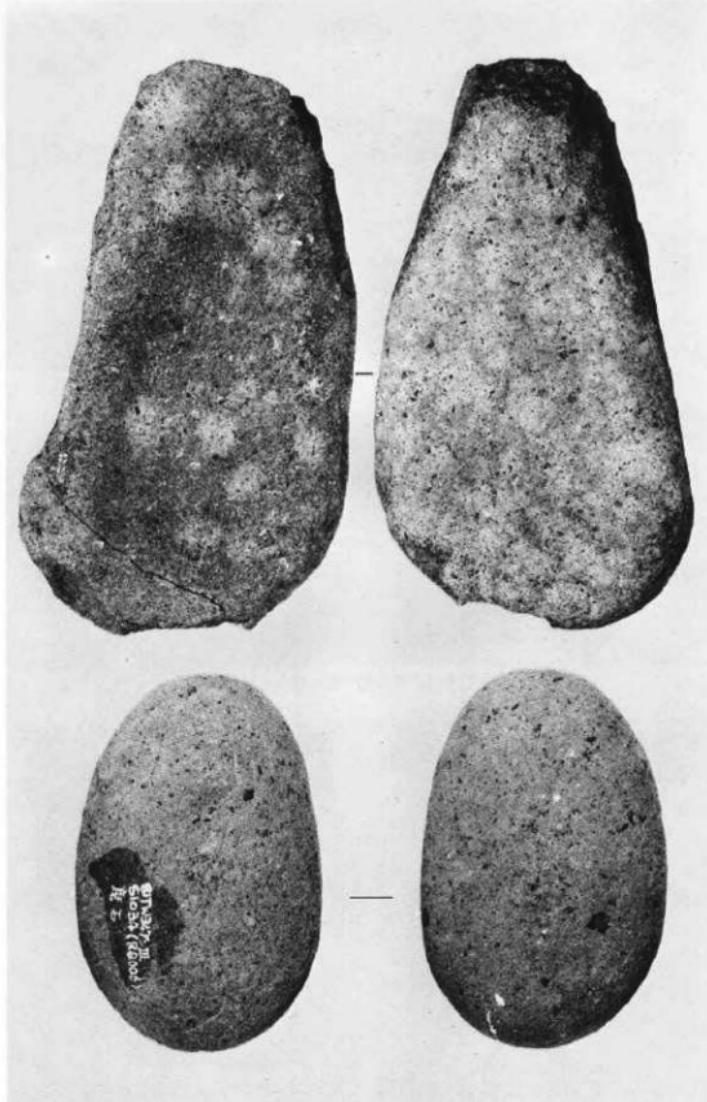


S I 005 住居跡西側周辺ピット出土遺物



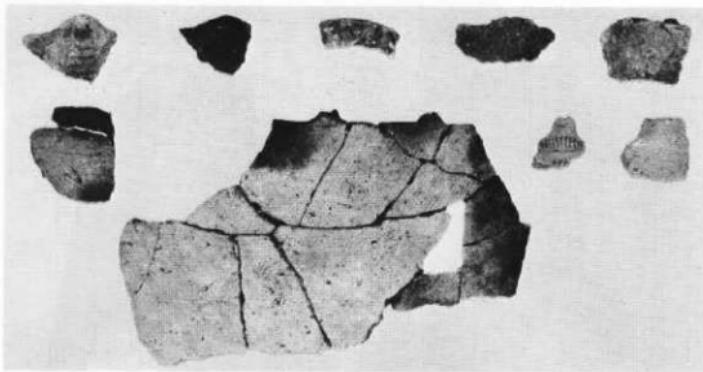
図版32

S I 003 住居跡 S I 034 住居跡出土遺物(1)

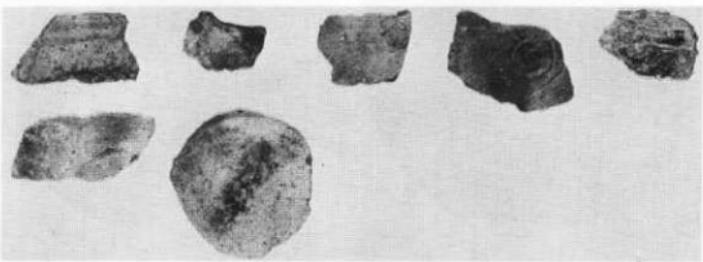


圖版33

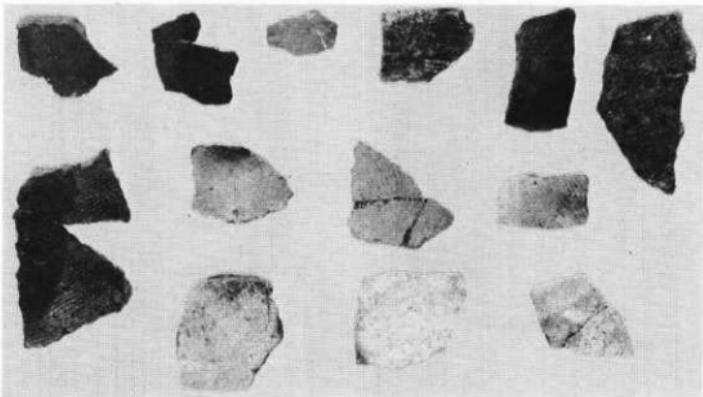
S I 034 住居跡出土遺物(2)



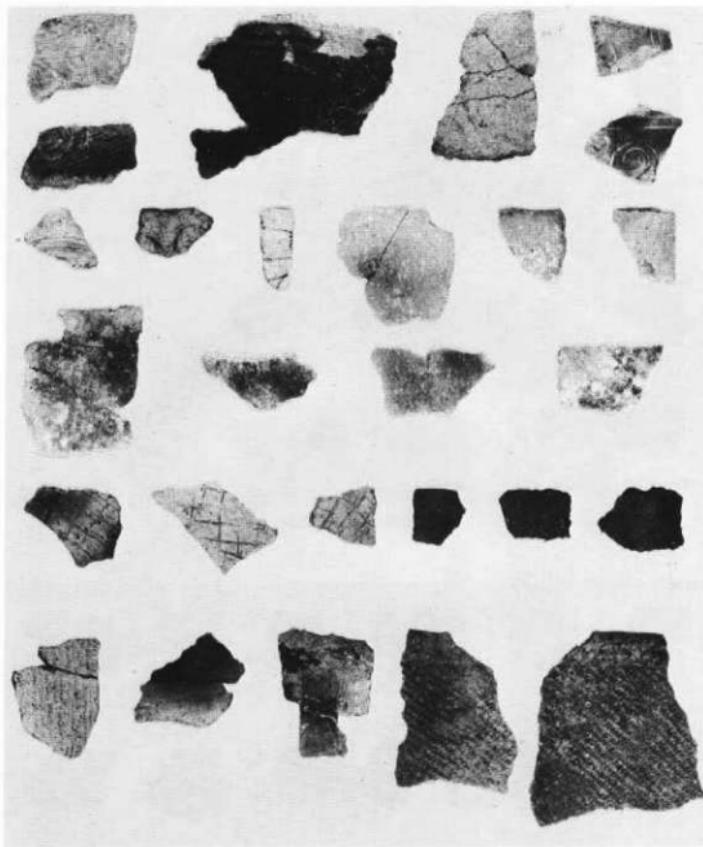
S K(F)031 S K(F)023、S K(F)024土壤出土遺物(1)



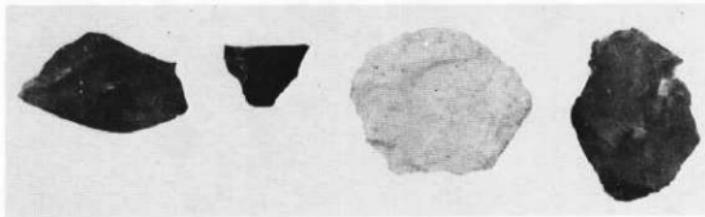
S K(F)021、S K(F)032土壤出土遺物(2)



S K(F)022土壤出土遺物(3)



S K(F)007 土壤出土遺物 1(2)

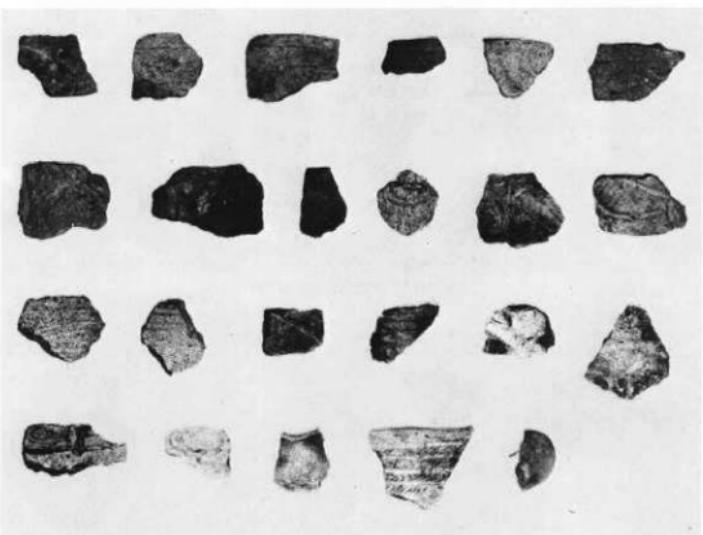


図版35

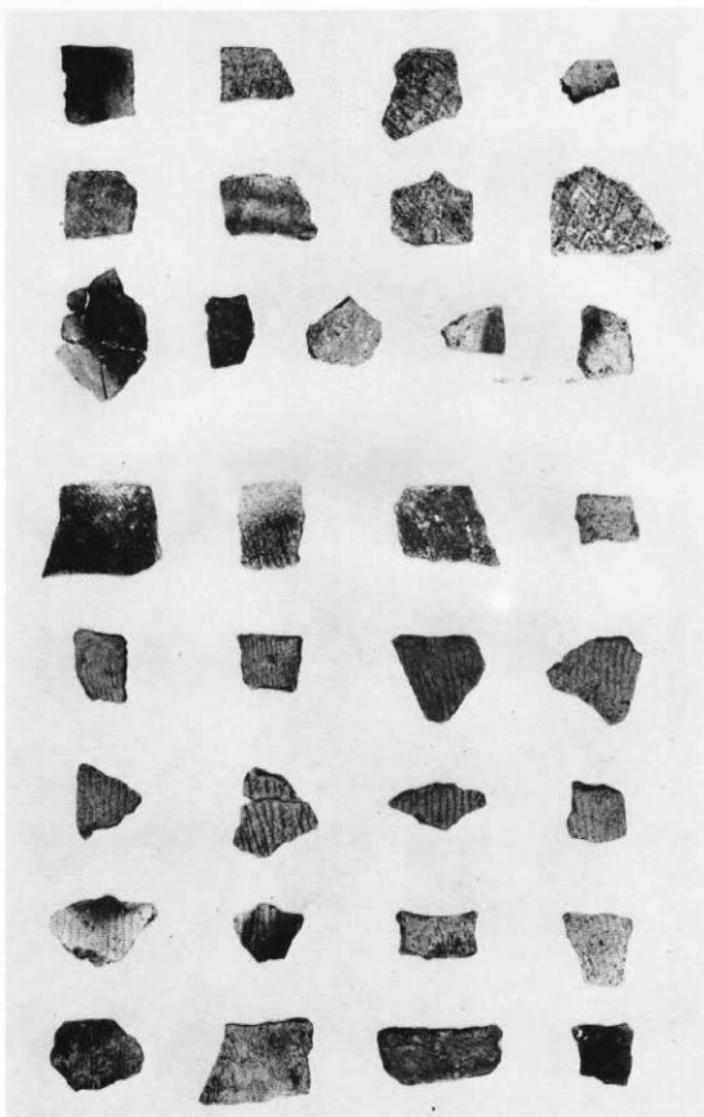
S K(P)021、S K(F)032、S K(F)022 土壤出土遺物（石器）



遺構外出土遺物(1)

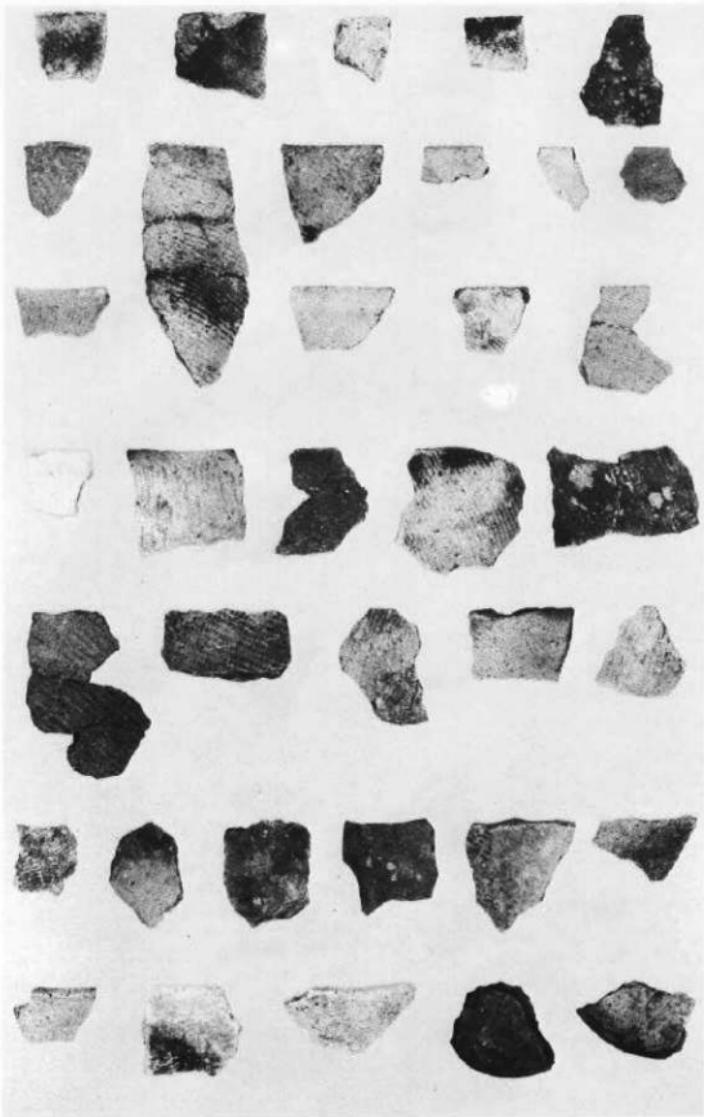


遺構外出土遺物(2)



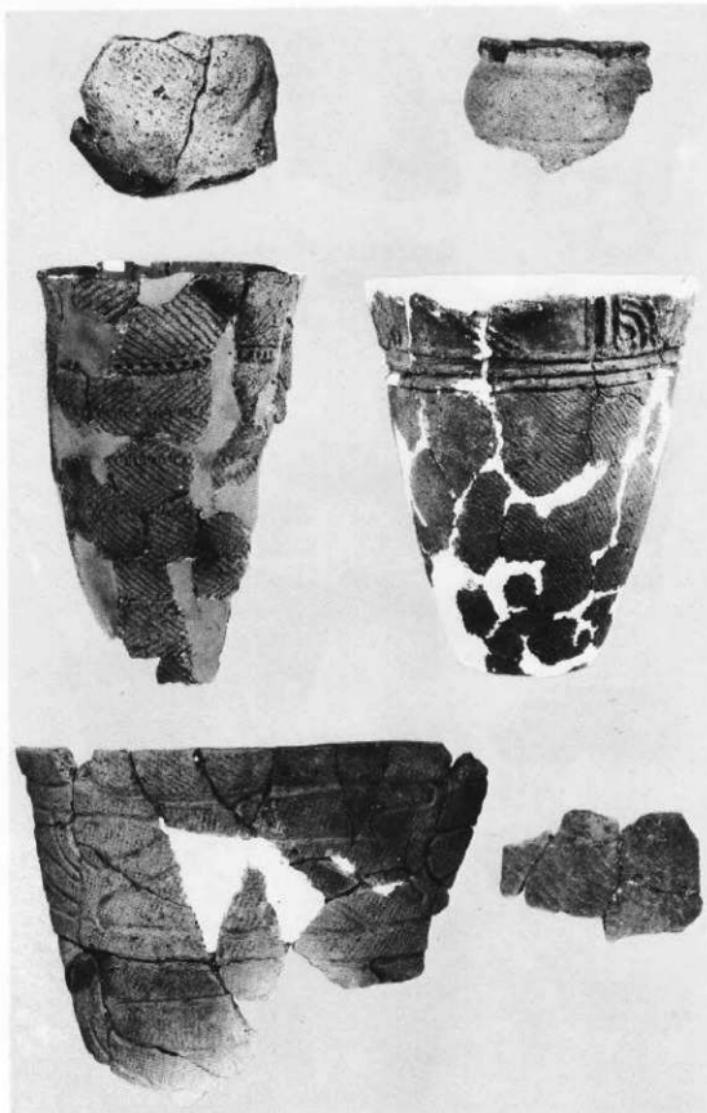
図版37

遺構外出土遺物(3)(4)



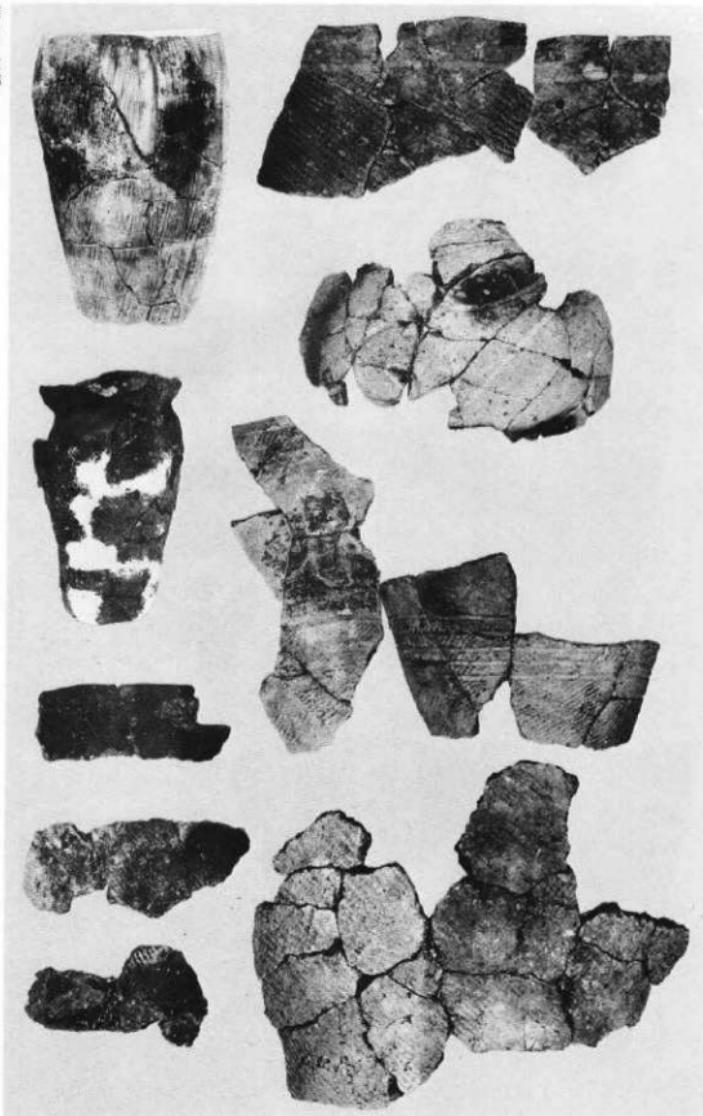
圖版38

遺構外出土遺物(516)(7)



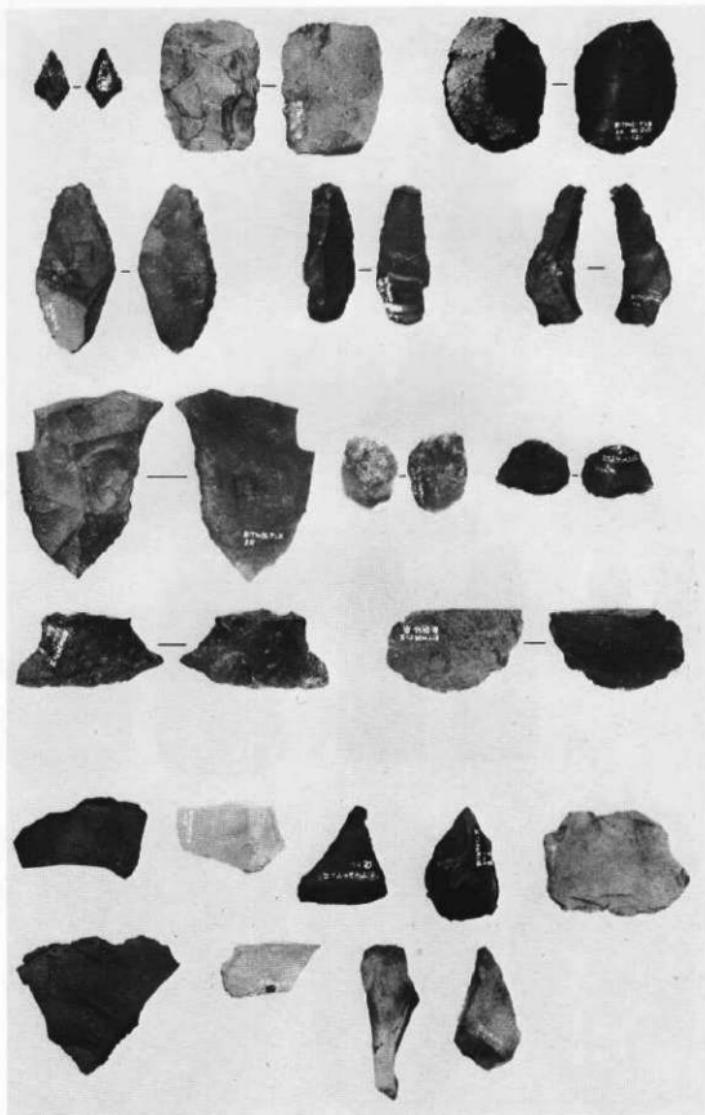
図版39

遺構外出土遺物(8)9)



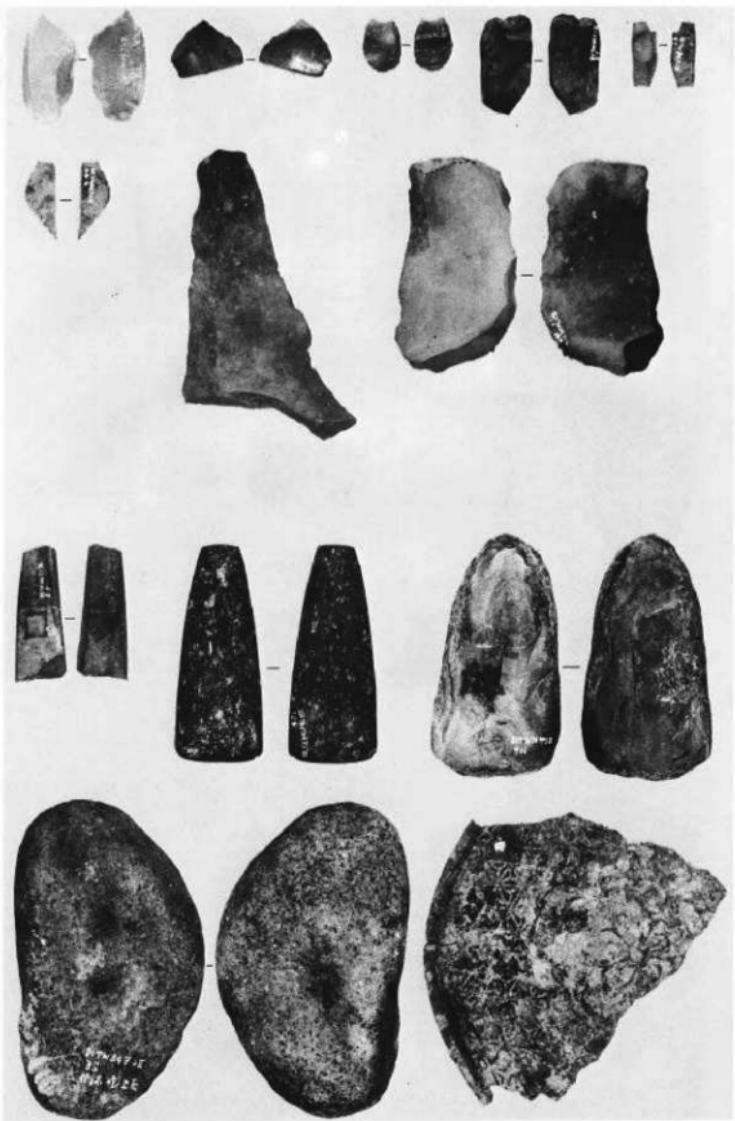
図版40

遺構外出土遺物10



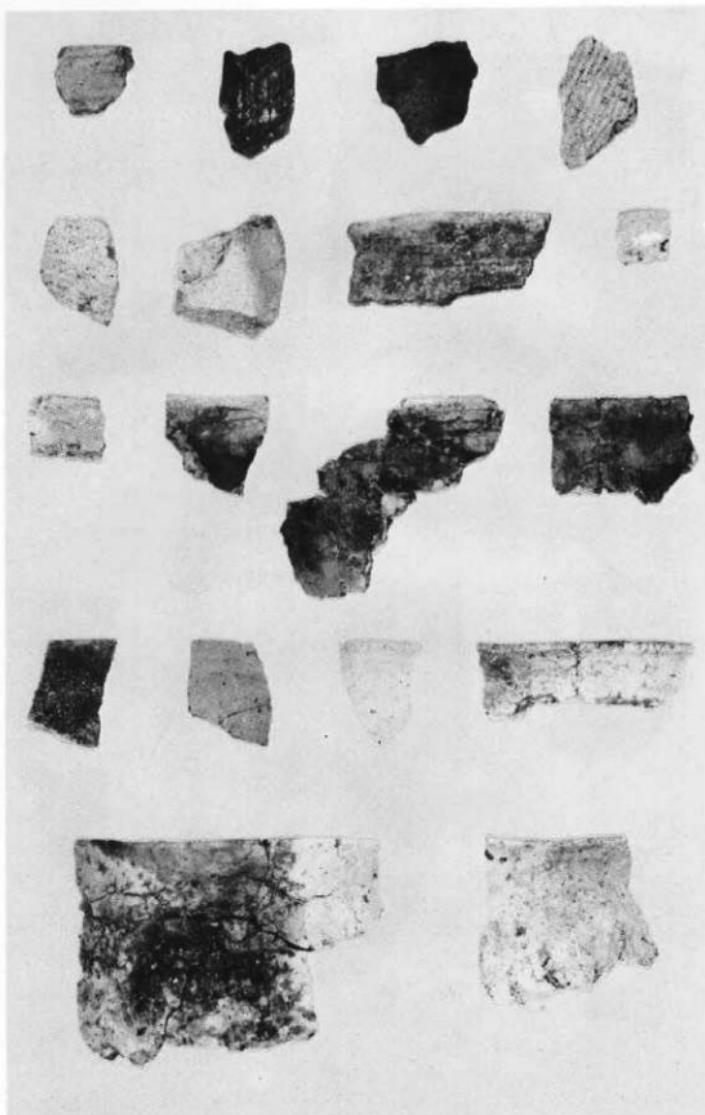
図版41

遺構外出土遺物（石器）(1)(2)



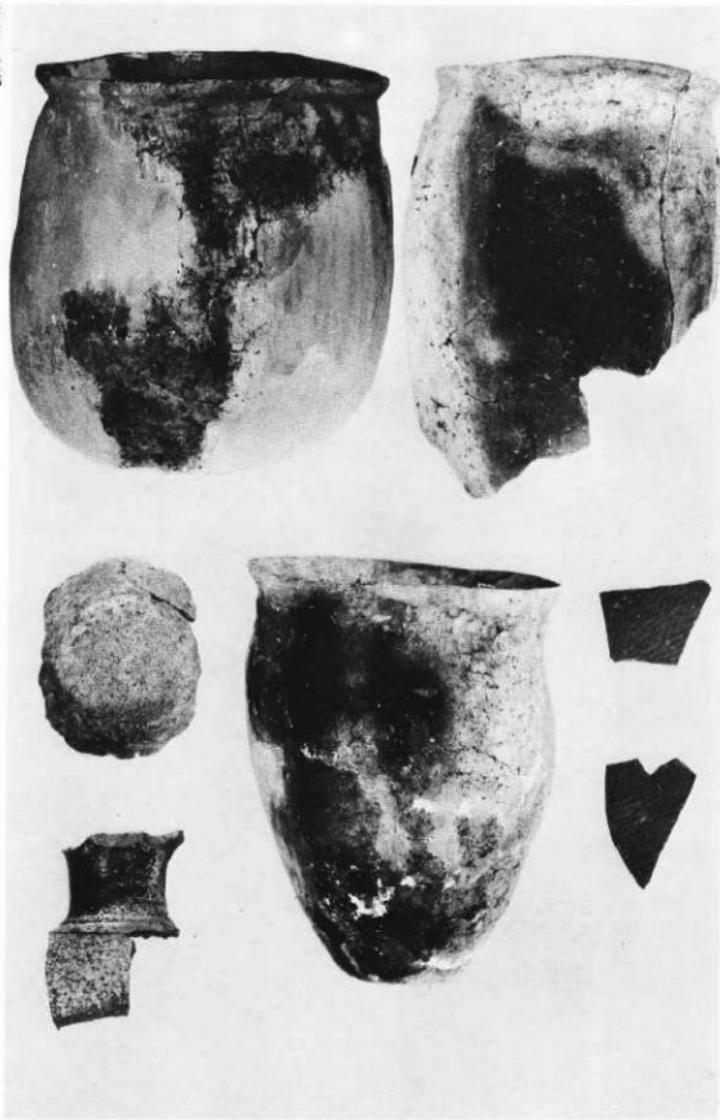
図版42

遺構外出土遺物（石器）(3)(4)



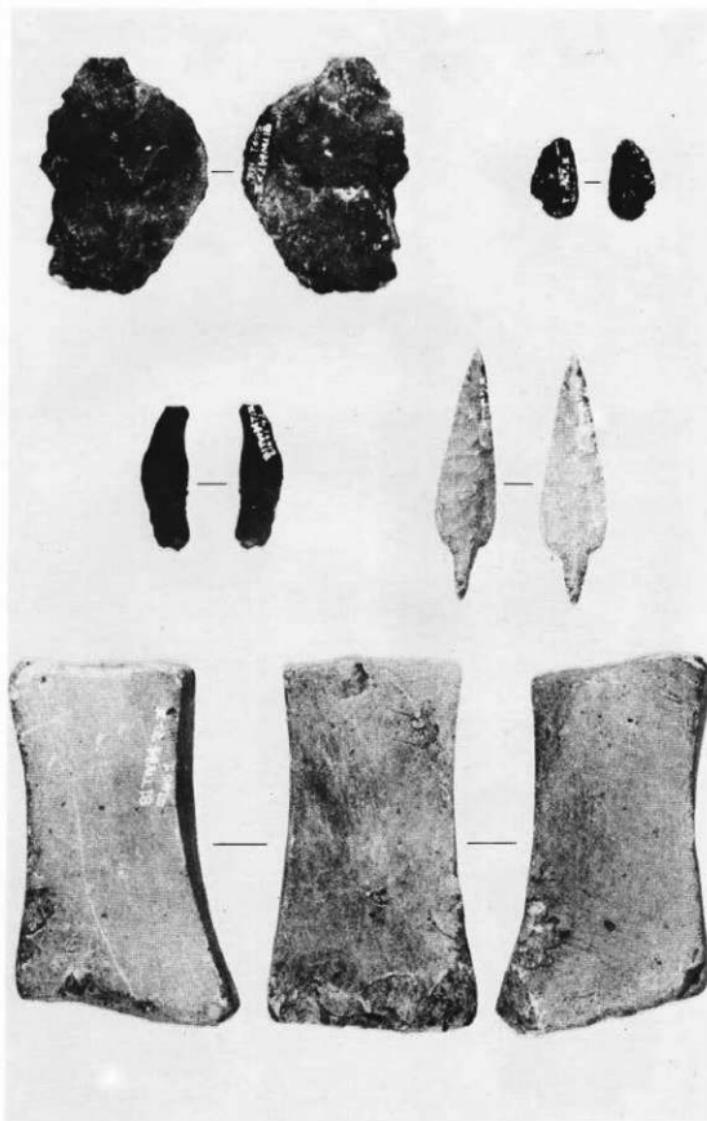
図版43

S I 001 住居跡出土遺物(1)



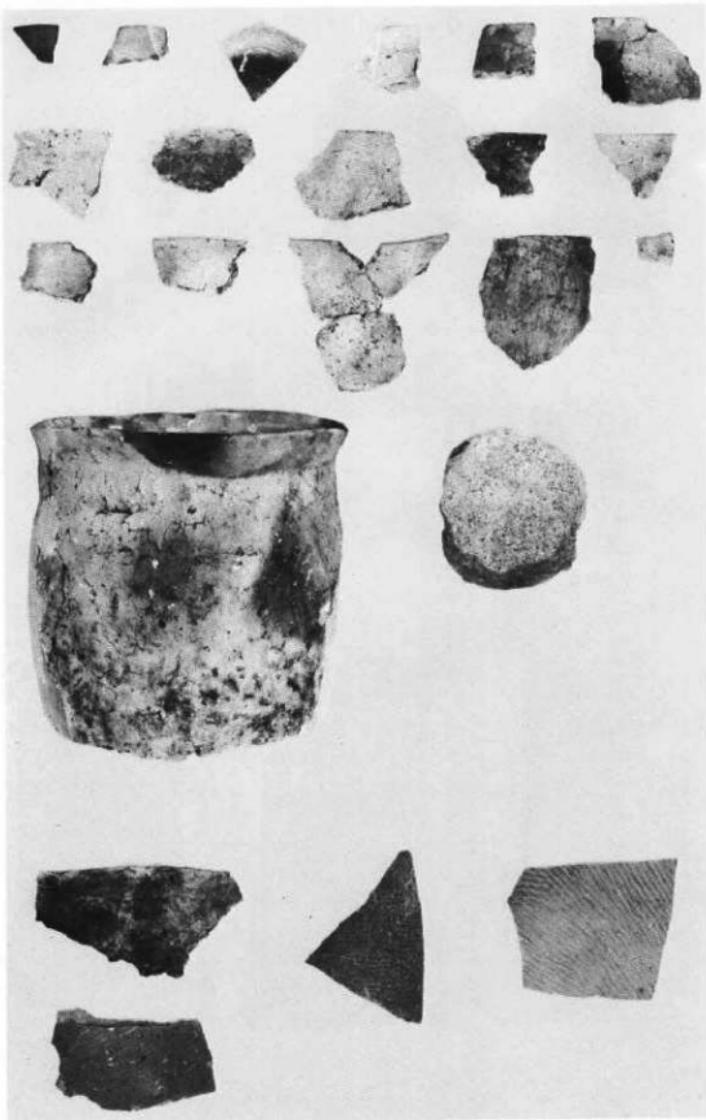
図版44

S I 001住居跡出土遺物(2)(3)



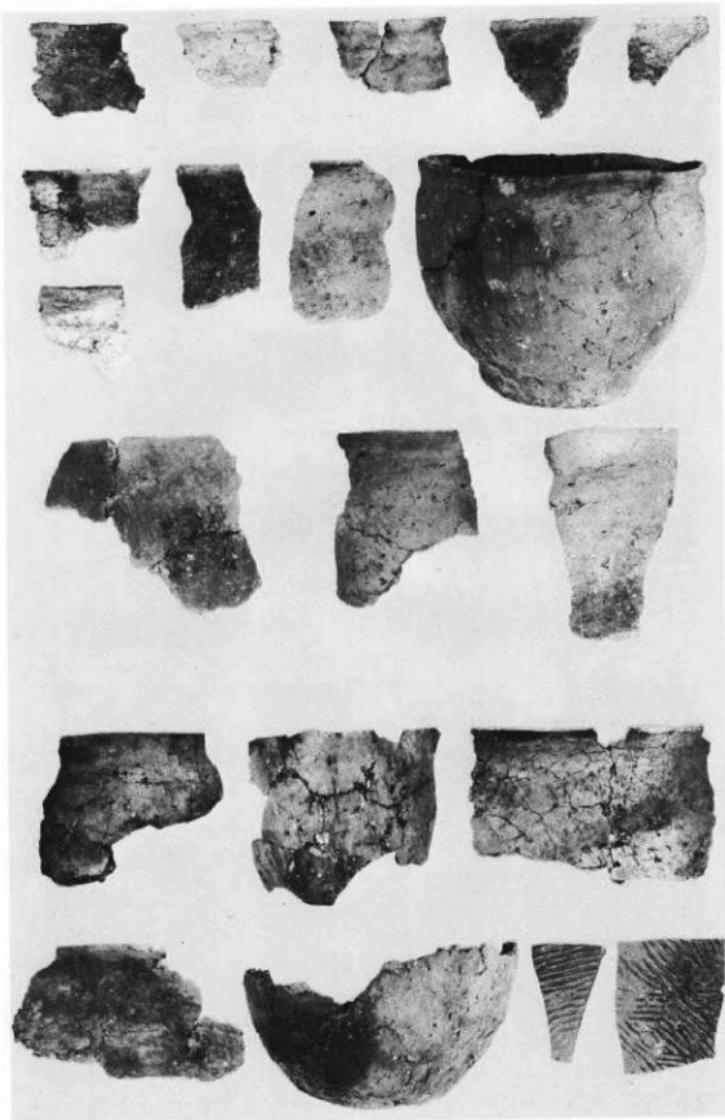
図版45

S I 002 住居跡出土遺物（石器）(4)



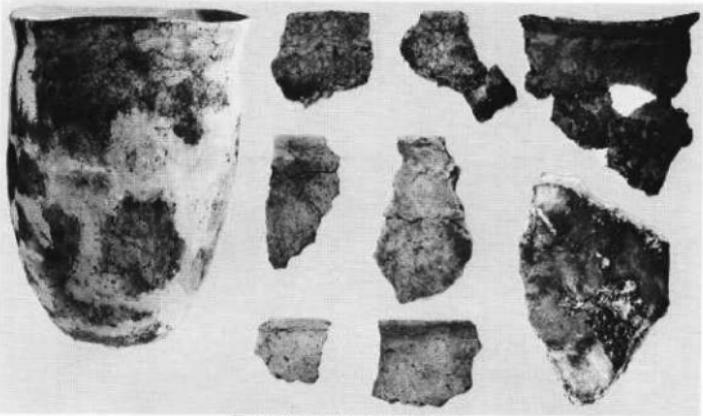
図版46

S I 002 住居跡出土遺物(1)(2)

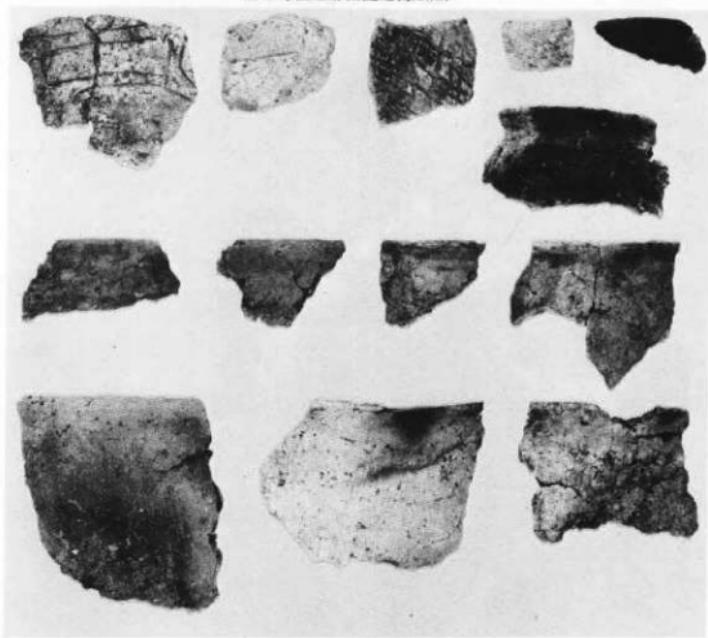


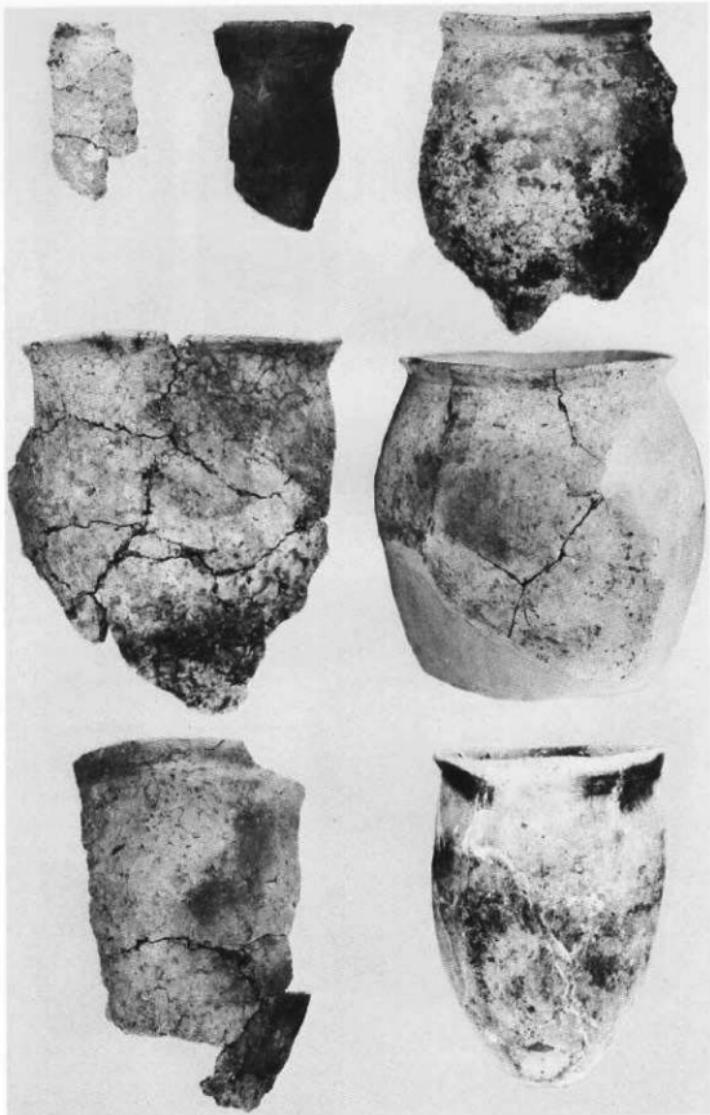
圖版47

S I 006住居跡出土遺物(1)(2)



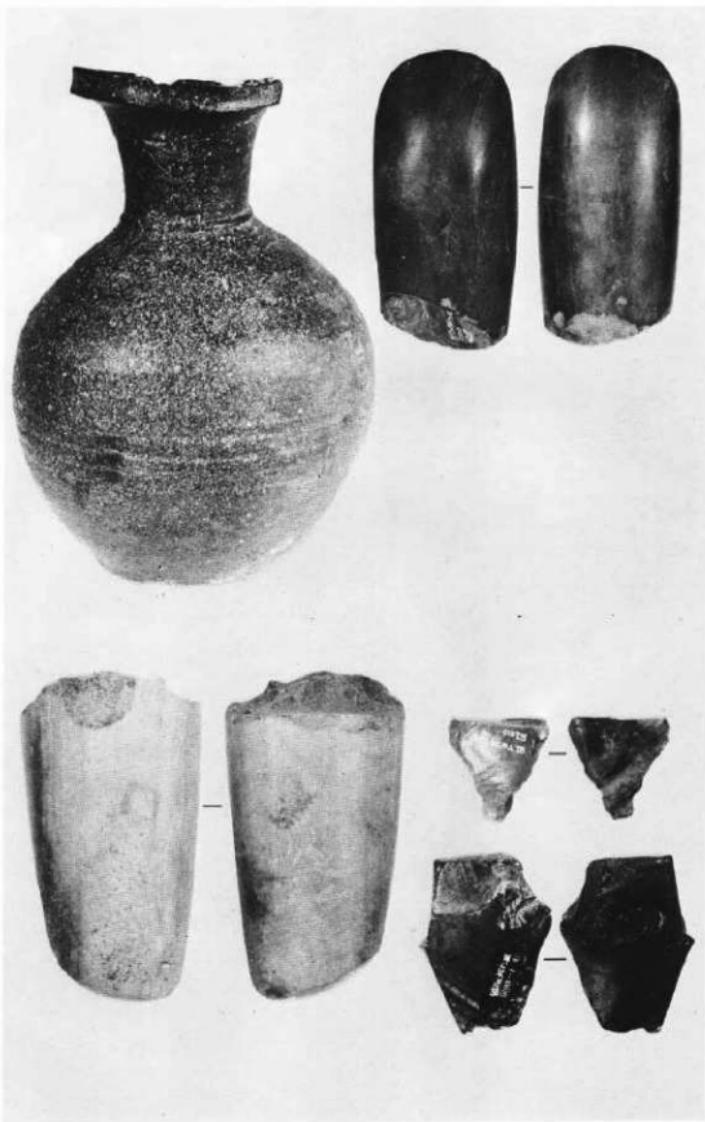
第9号住居跡出土遺物1(2)





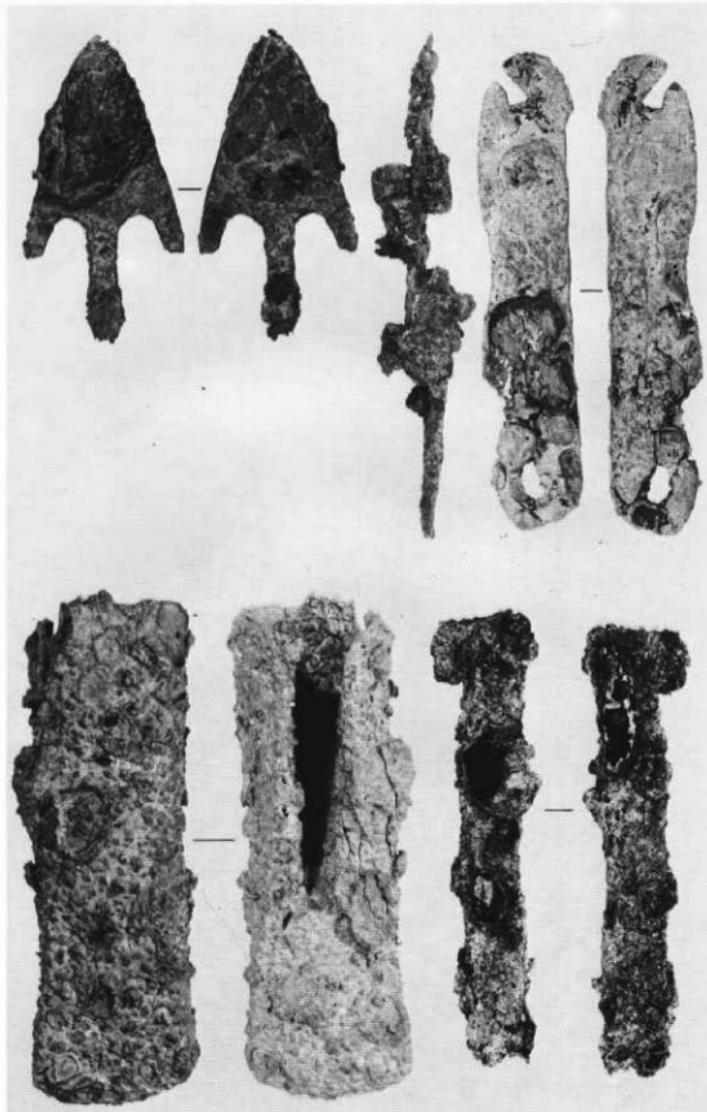
図版49

S I 010住居跡出土遺物(2)(3)



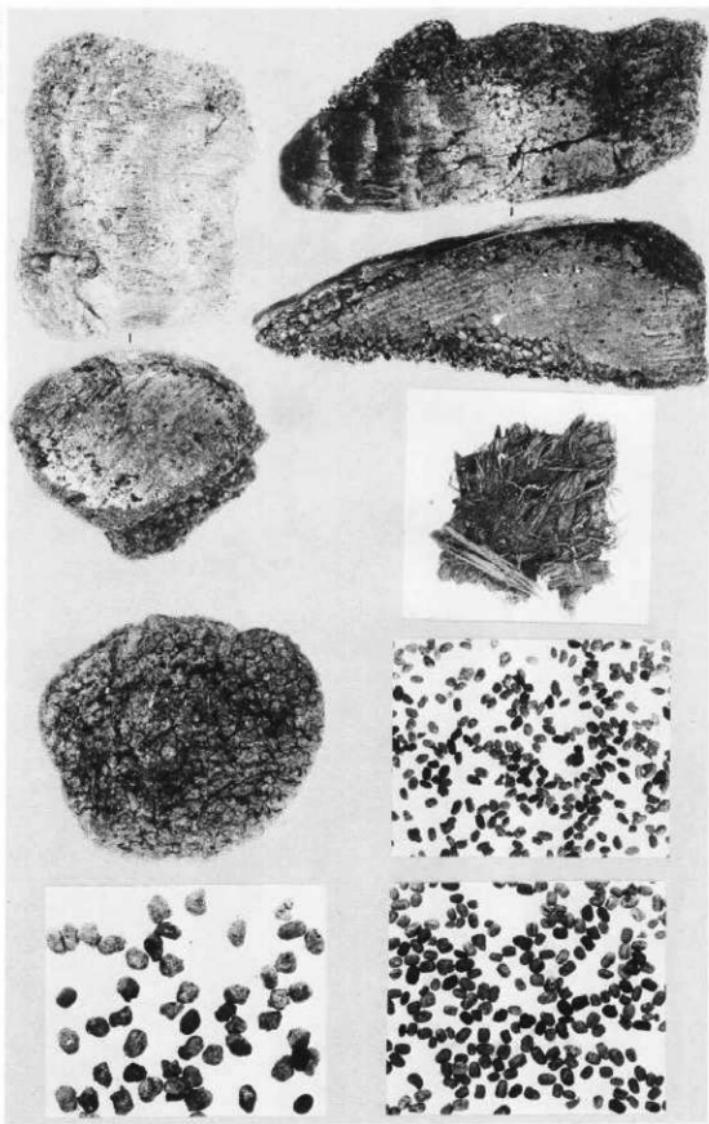
図版50

S1010住居跡出土遺物(4)



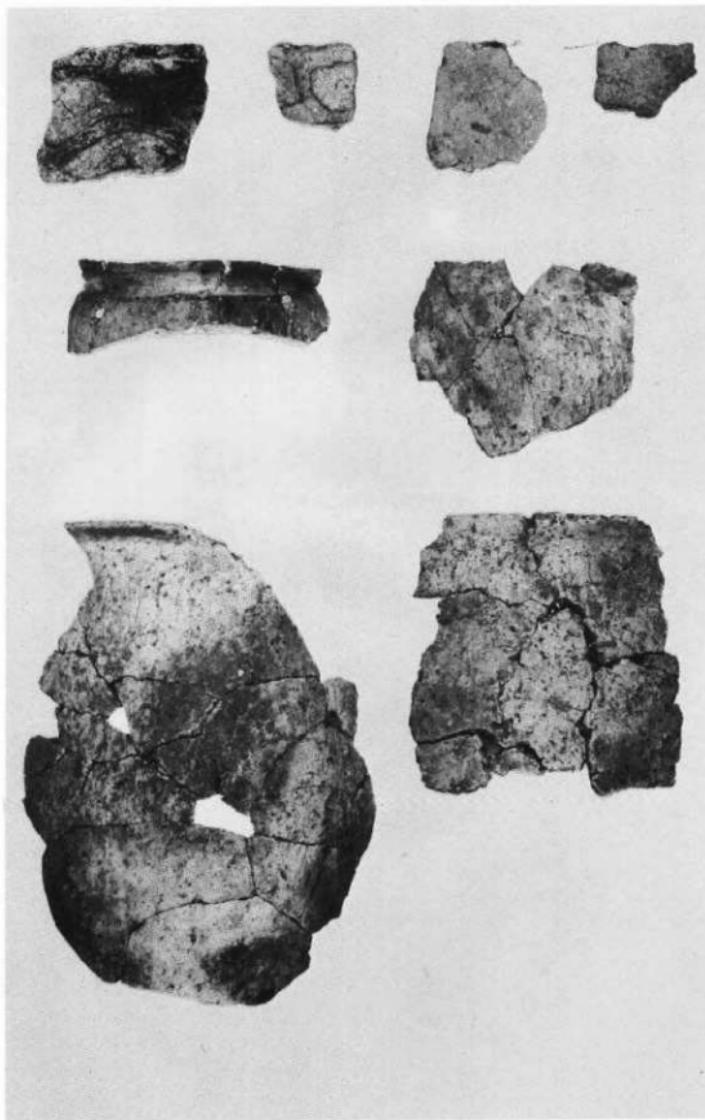
図版51

S I 010 住居跡出土遺物（鉄器）(5)



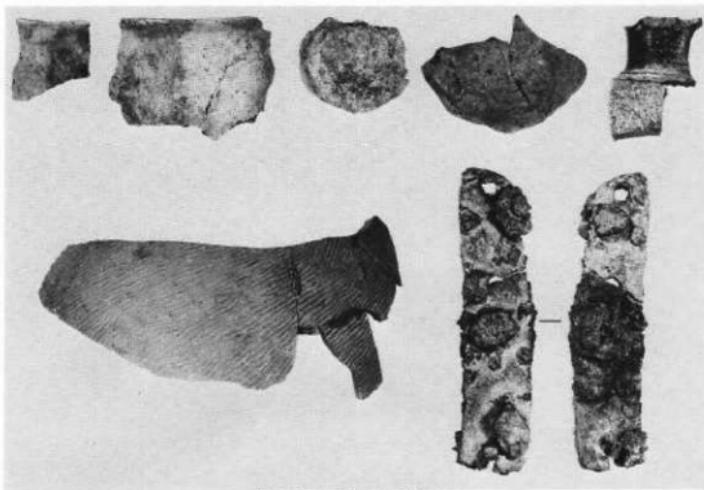
図版52

S I 010 住居跡出土遺物（炭化物）(1)

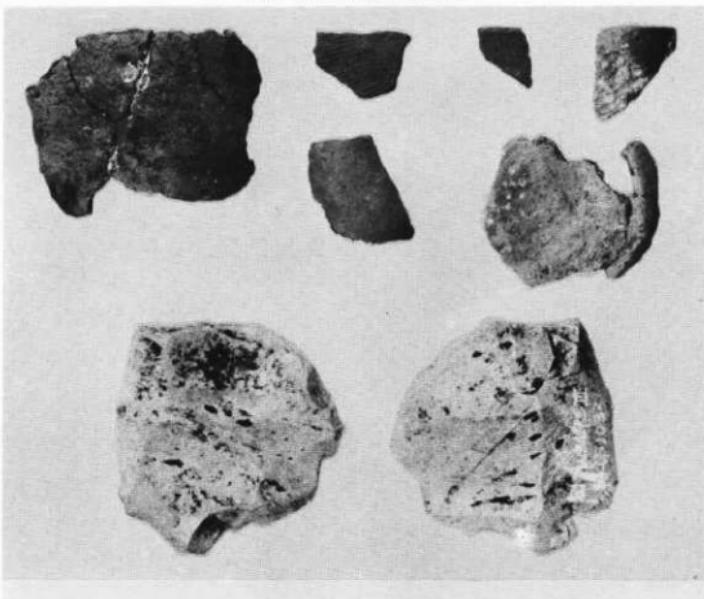


図版53

S I 011 住居跡出土遺物(1)

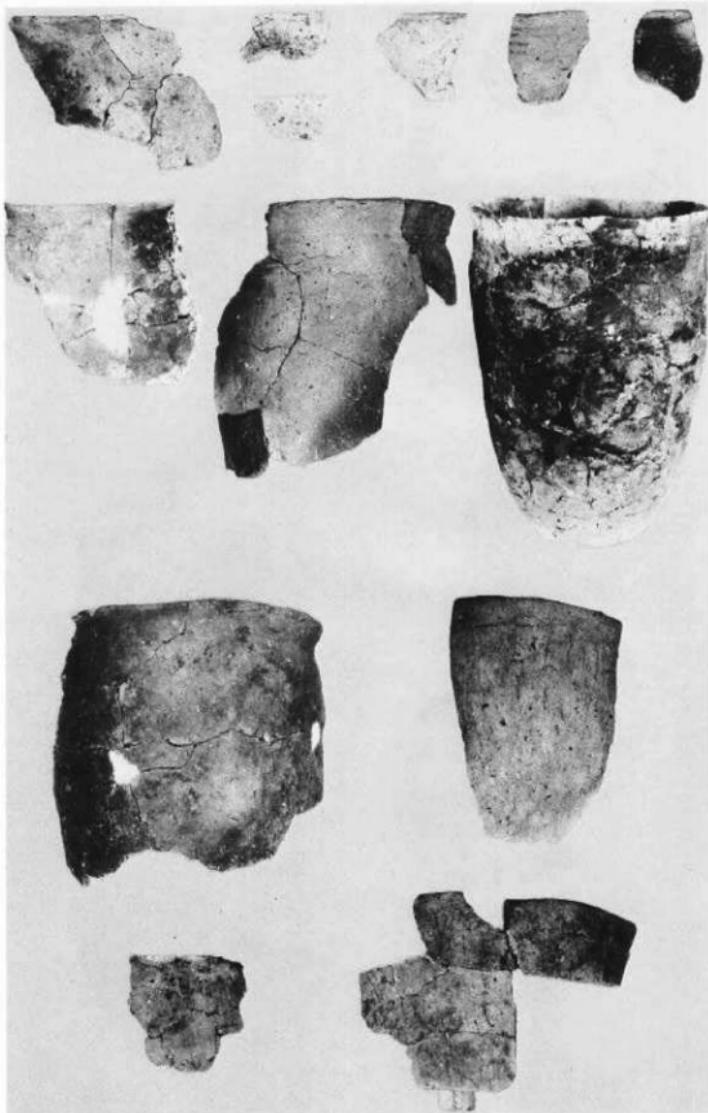


第11号住居跡出土遺物(2)(3)



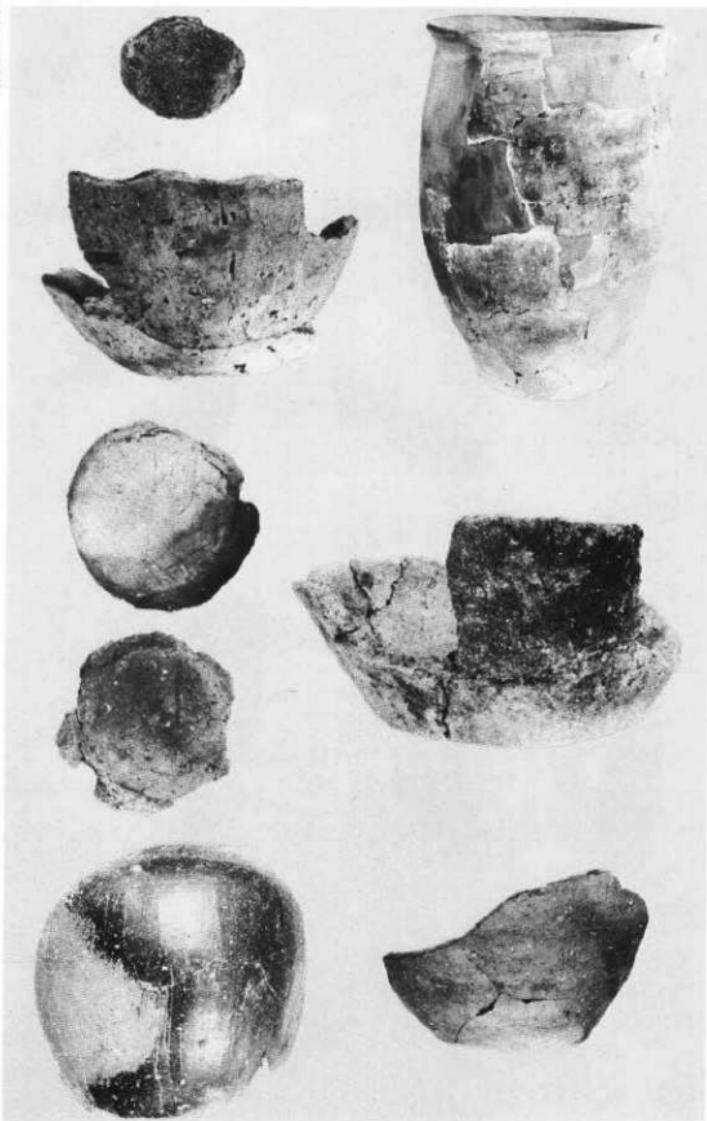
圖版64

S K(F)033 土壤出土遺物



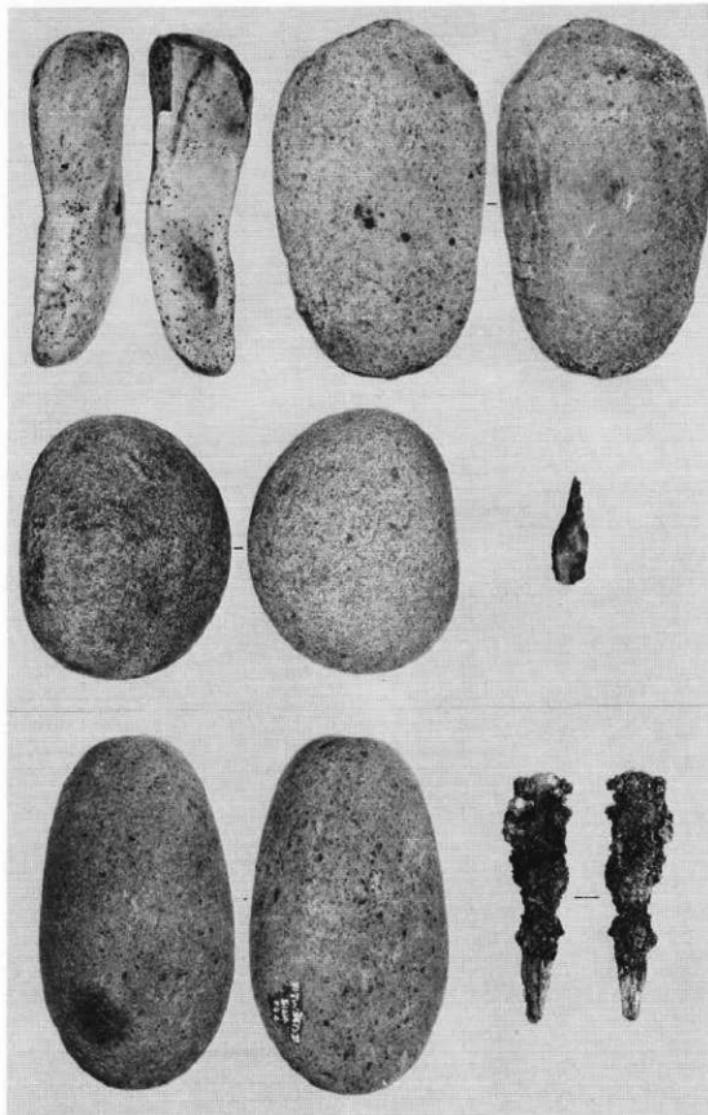
図版55

S I 014 住居跡出土遺物(1)(2)



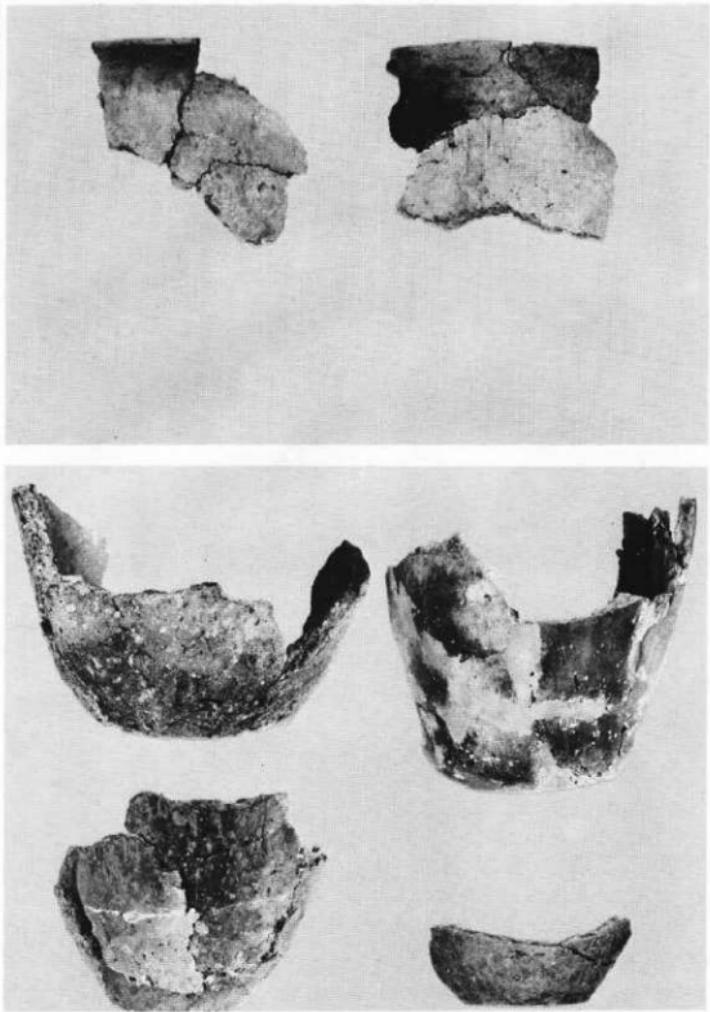
図版56

S I 014 住居跡出土遺物(3)(4)(5)



図版57

S I 014住居跡出土遺物（石器・鉄器）(1)(2)

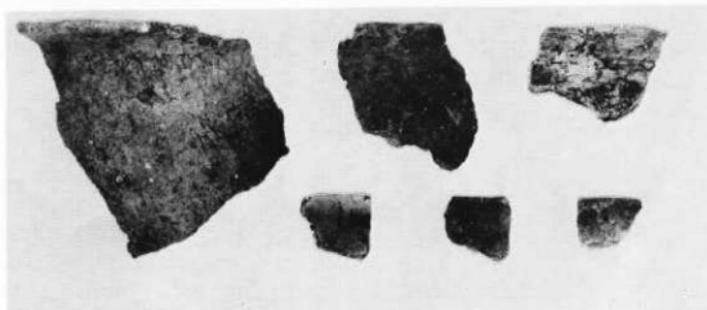


圖版58

S I 015 住居跡出土遺物

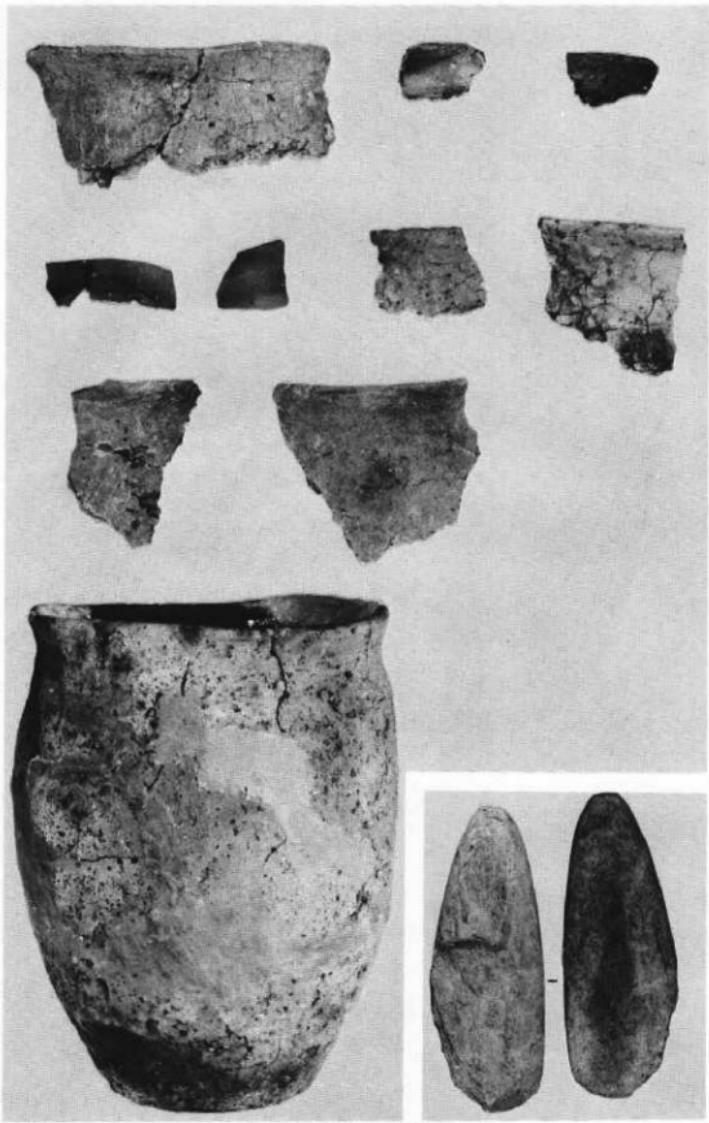


S I 016 住居跡出土遺物



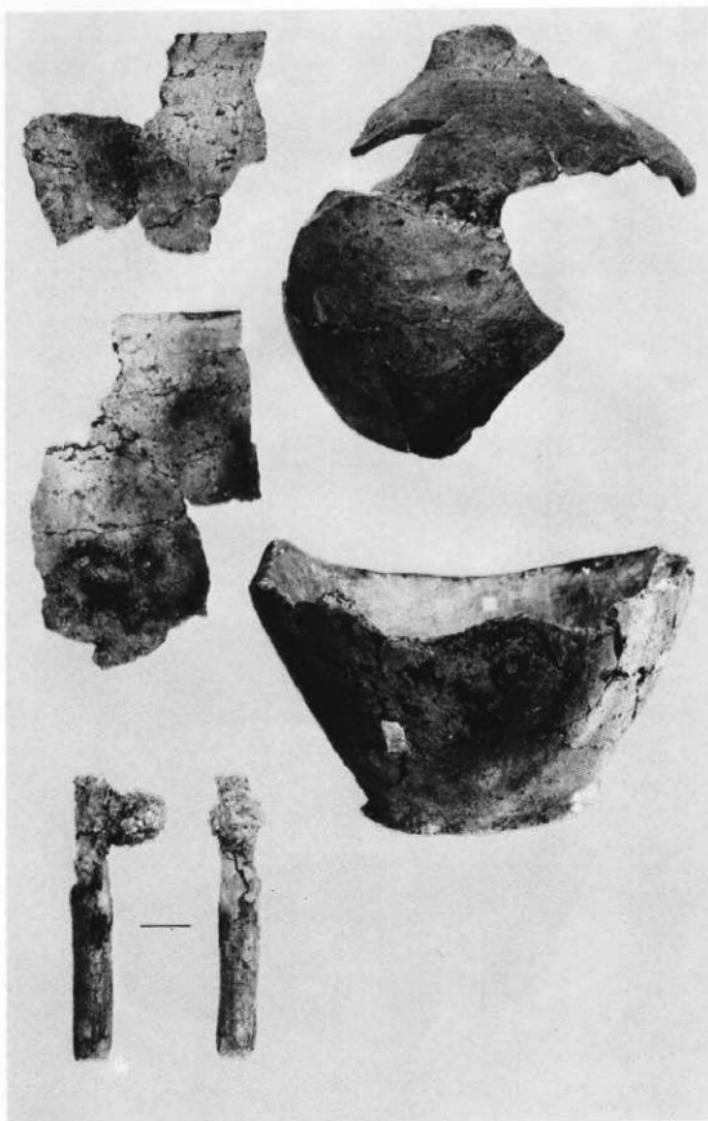
図版59

S I 016 住居跡出土遺物



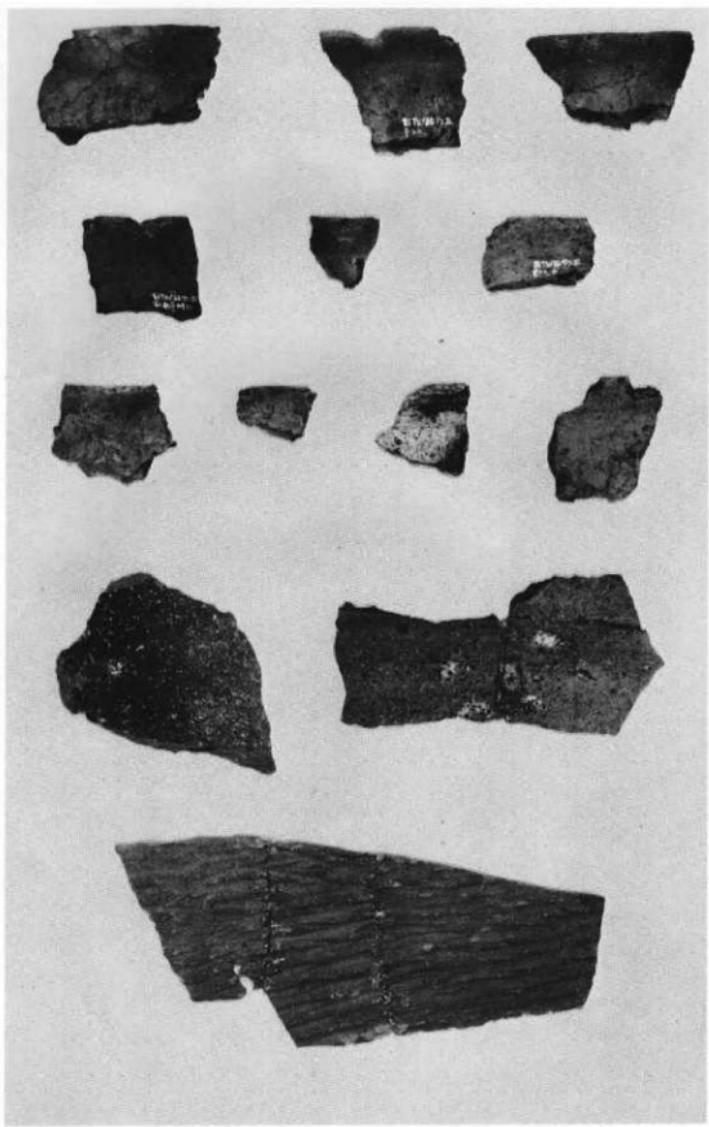
図版60

S1018住居跡出土遺物(1)(2)



図版61

S I 019住居跡出土遺物



図版62

遺構外出土遺物

案内 III 遺跡(NO.34)遺構配置図





一本杉遺跡遺構配置図（等高線は発掘終了時の状態を示す）